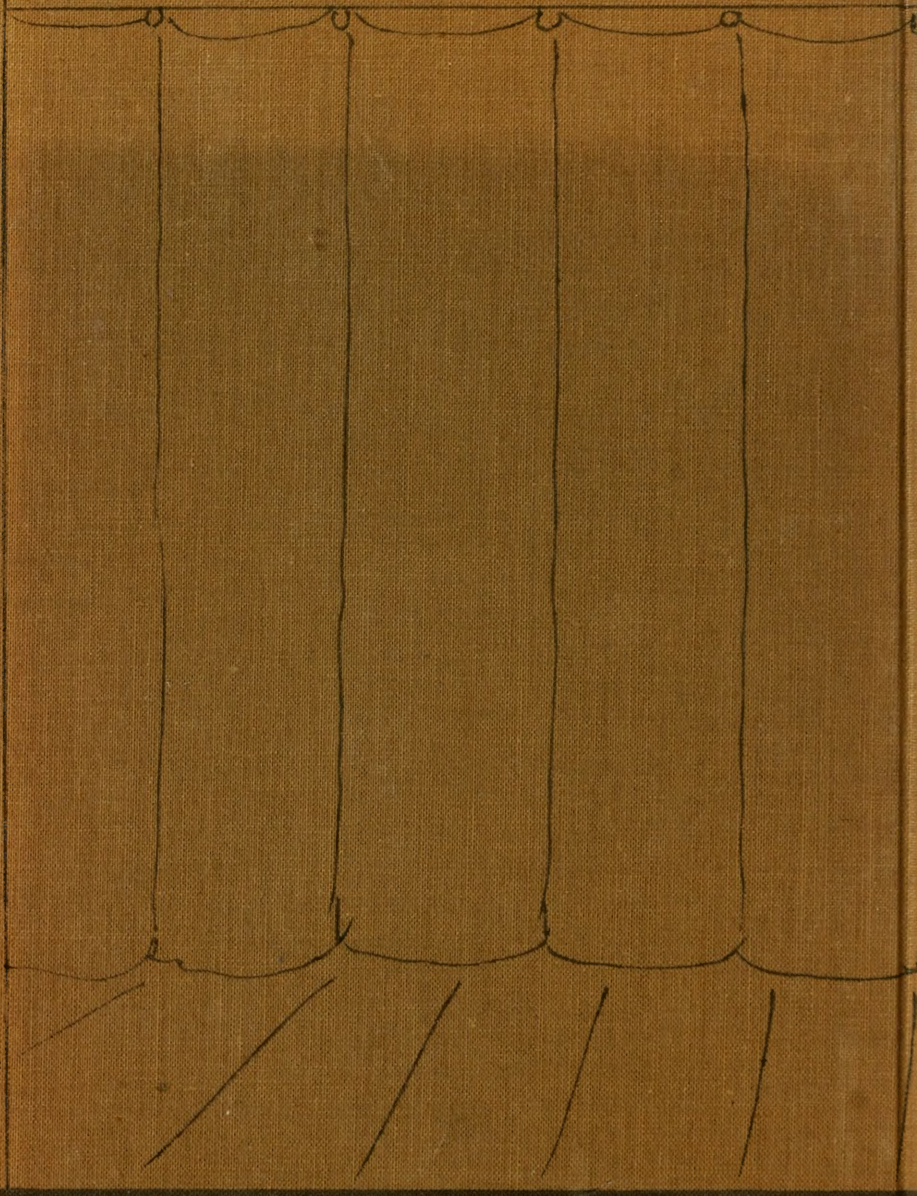


日本戲曲全集
第十八卷

化政度江戸世話狂言集

東京
春陽堂版



「臺頭霞彩幕」大詰淨瑠璃場の錦繪

日本戯曲全集 第十八卷 目次

化政度江戸世話狂言篇

小吟帽子
彦三頭巾
鬼と見合の
鍾馗半兵衛

河原噂京諺

四條通　二冊



初演の繪番附

河原噂京諺

序幕

富田屋二階の場
祇園二軒茶屋の場
四條河原の場

役名――黒木屋彦三。黒木屋番頭、半兵衛。髪結ひ、松の尾新兵衛。幇間、勘九郎。筒井手代、金六。醫者、増田宥宅。井筒屋德兵衛。坊主の小兵衛。井筒屋小吟。筒井の母、お高。千鳥濱右衛門。新兵衛女房、おせん。表具屋、太郎兵衛。

造り物、本舞臺、見附け、一面の塗り骨障子。舞臺前折り廻しに高欄、下の方に二階の上がり口の切り穴。これを出入りにて、上の方に振りよき柳の枝、見事に半ば稍を見せ、方々に雪洞附きの燭臺數多ともし、すべて縄手引込み富田屋二階の模様にて、幕の内より上の方炬燵に、黒木屋彦三寝ころび、煙草のんで居る。その櫓に腰かけて、井筒屋の小吟、派手なる女郎の拵らへにて、長い文を讀んで居る見得。正面に藪醫者増田宥宅、幇間勘九郎、両人拳をうつて居る。花車お春、仲居お藤、外に富田屋の娘、幇間伊吉、酒を飲んで居る。眞中に衣桁を直し、これに黒縮緬、紅絹裏の頭巾。鐶菊と菊蝶の比翼紋附き、この二つ同じくお高祖頭巾にも右の通りの紋附き、を見えるやうに掛け、大小入り相撲の合ひ方。宥宅、勘九郎、拳の掛け聲にて幕明く。

勘九　ドツコイ、無いぞ。ヨイヤサ。

　ト手を擴げる。

宥宅　南無三。また負けた。

はる　ほんに、宥宅さまは、餘ッぽど弱いかして、續けて三遍お負けなさるとは、御人體にも似合はぬ。ちと

ふじ　お嗜なみなされませいな。

娘　宥宅さまは口程にも無い。あの伊吉さんにも、負けてばつかり、居やしやんすわいなア。

宥宅　コリヤ、其やうにさみ致すな。おれはあの彦三どのに附添ひの、増田宥宅といふ町醫者。勘九郎は祇園町の

男藝者、同じ者でも、長袖と幇間。それで拳には負ける
のぢや。
ふじ　宥宅さま、さういふのが眞の負け惜み。
宥宅　さう云ふな。拳よりは腕づくで。
ト腕まくりして立たうとするを
伊吉　オッと、待つたり。この勝負は行司預かり。
ふじ　流石は大津屋の伊助さん。こりや出來たわいなア。
伊吉　出來た次手に、今日は彦三さまと小吟さまの、アレ、
あの比翼の頭巾開きの、御祝儀の酒宴なれば
宥宅　それで洛東引込みの、富田屋が許の立て酒を
勘伊　飲めや唄へや、一寸先は闇の夜、わい〳〵のわい
とな。
ト騒ぎ唄になり、兩人立ちあがり、踊る。彦三、酒飲むを小吟とめる。宥宅、小吟をとめる事よろしくあつて
彦三　サア〳〵、面白うなつた〳〵。これからは、何ぞ珍らしい、遊びの趣向は無いか、宥宅老。
娘　伊吉さん、何ぞ面白い思ひ附きな事をしなさんせいなア。
宥宅　今宵はどうしたものか、とんと浮かねて。
伊吉　アレ、月は河原に浮んであるに。
彦三　いつそ探題の發句合せを催ほさうか。
宥宅　但しは、阿彌陀の光りはどうであらう。
伊吉　そりや古風な遊びぢやな。
勘九　オッと、よし〳〵。この勘九郎が思ひ附き。旦那、アレ、御覽じませ、假り橋の人通りを。爰から滅多無性に名を呼んで、こちら向かせて見ようぢやござりませぬか。
彦三　こりやよからう。小吟も機嫌直して、お春も、仲居も、思ひ附きの名を呼んで見い、呼んで見い。
はる　アイ〳〵。そんならわたしらも呼びませう、小吟さま。
小吟　イエ〳〵、わたしは。
皆々　ハテ、マア、ござんせいなア。
ト皆々小吟を無理に連れて、高欄へ立ちかゝり
宥宅　何ぞ拍子が無けりや呼び憎いが。
勘九　そりや知れた事。砧の合ひ方、彈いたり〳〵。
彦三　おれはその間に。
ト丼を取上げ
ついだり〳〵。

伊吉　合點ぢや。飲んだり／＼。

ト これよりチリ／＼の砧の合ひ方になり、彦三、酒飲むな、小吟、ツカ／＼と行つてとめる。お春なだめる。この仕組み、云ひ合ひにてよろしくあるうち、土間の通ひ路へ座頭ねぶ市、杖をつき出て來て

ねぶ　按摩、けんびき。

ト 通りかゝる。本舞臺にて

勘九　アレ／＼、いま通るのは慥かに按摩。しかも座頭の

伊吉　もみ市か、但しは、鈴市かアい。

ト ねぶ市かまはず

ねぶ　按摩、けんびき、鍼の療治。

ト 探り／＼花道を切り、幕の中へ入る、跡へ新門前の權七、前髮にて出て、何なりと義太夫節一口語つて行くを、平舞臺より

ふじ　アレ／＼、慥かに義太夫節語つて通る前髮。

宥宅　表具屋の又三郎。此方向かねば、娑婆で見た彌二郎やアい。

ト 權七構はず切り幕へ入る。次の道心者坊主、鉦を叩いて念佛申して出る。

勘九　アレ、道心者なら、知れた、西念か。

娘　願哲さまではないかいなア。

道心　南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト 構はず入る。この間　砧の合ひ方。土間へ茶屋の男何ぞ持つて出る。

ふじ　あれは近所の茶屋の男衆。

勘九　茶屋なれば、オイ、平野屋々々／＼。

宥宅　コリヤ／＼、越前屋々々々。……でもないさうな。

ト 此うち通ひ路へ、てん／＼に思ひ附きの仕出し、途切れなく出て入るを、舞臺より、それ／＼の名を呼ぶ事よろしくある。彦三は此うち小吟と口舌の模樣、程よき所にて、半兵衞、着附け、羽織にて、頭巾を着て、花道の通ひ路を靜かに出て來る。花道の切り幕より、番太郎、提灯金棒引いて出る。通ひ路にて半兵衞と行合ひ、「何時ぢや」と時を聞いて居るうち、本舞臺にて

伊八　もう餘ッぽど夜が更けたさうな。假り橋もひつそりと。

勘九　イヤ／＼。アレ、一人何やら番太郎に聞いて居るは、慥かに何時といふ事であらう。

宥宅　何時なりや、もう四ツ半兵衞々々／＼。

皆々　オ、イ、半兵衞どの／＼。

ト呼び立てる。半兵衞、番太郎に別れ、本花道へ上がり、本舞臺を見て、頷づき、ツイと切り幕の内へ入る。

勘九 アレ〳〵、いま呼んだ半兵衞が當つたやら、頷づいて行きました。

宥宅 これが今夜の卷頭ぢや。

伊八 祝うて一つ、締めませう。

皆々 ヨイ〳〵〳〵、ハアヨイ。

ト手を打つ。

宥宅 サア、酒ぢや〳〵。

彥三 酒は今お春が替へに行た。早うと云へ〳〵。

ト無性に手を叩く。切り穴よりお春、銚子を持ち、上がつて來て

はる 申し、皆さん、いま假り橋を通つた男が來てぢやわいなア。

皆々 ヤア、何ぢや〳〵。

はる サア、爰の二階から半兵衞、半兵衞と、おれが名を呼んだは誰れぢや。何の用ぢやとねだり口。何と云うて歸さうぞいなア。

勘九 そんなら今の半兵衞が來たか。これは有り難い。なんと旦那、お聞きなされましたか。

宥宅 コリヤ、勘九々々〳〵。その男を是非二階へ引摺り上げ一生飲まぬ立て酒に、醉はしたらどうであらう。

彥三 そりや金づくではならぬ慰みぢや。早う〳〵。

宥宅 ソレ、お春、早う呼んで〳〵。

はる 大事ないかえ。

勘九 ハテ、大事ない。半兵衞々々〳〵。

皆々 半兵衞さん〳〵。

ト呼び立てる。切り穴より

半兵 オツと、合點。それへ參りませう。

ト上へ來て

みな御免なされませ。

ト頭巾を取る。彥三、半兵衞を見て

彥三 ヤア、そちや番頭の半兵衞。

半兵 若旦那彥三さま。

宥宅 そんならこなたが、番頭の半兵衞どのか。

勘九 アノ、お前が、半兵衞さまか。

皆々 ヤア。

ト膽をつぶす。

半兵 こなお人は、半兵衞々々〳〵と、いから半兵衞を珍らしがらつしやるは、エヽ、聞えた。こなたが勘九郎とい

ふ帮間どのおやの。
ト宥宅を見て
こちらのが若旦那と合ひ口の、お醫者増田宥宅さまであらう。いつぞやから逢ひたいと思うて居たに、こりやよい所でお目にかゝつた。キッとお禮を申さにやなりませぬ。
ト また小吟を見て
其方の女中が、これも聞き及んだ小吟どのさうな。こなさんにも、とつくりお禮を
彦三　コリヤ〳〵、半兵衛。この小吟や勘九郎に禮云ふとは何の禮。自體、おれが面白う遊んで居るこの二階へ、何用あつて來た。如何に番頭ぢやというて推參な。遊びの邪魔になる。キリ〳〵立つて、歸れ〳〵。
半兵　イヤ、歸りますまい。
彦三　なんと。
半兵　私しは用事は無けれど、この二階から、半兵衛々々〳〵と呼ばれたは、何ぞ用があらうと思うて、それで來ました。
彦三　イヤ〳〵、さう云うておれに是非歸れと、古臭い意見に來たのであらう。コリヤ、そんな事はナ、近松門左衛門時分の淨瑠璃本にある。意見なりや、よしにせい〳〵
ト始終醉つて居るこなし。半兵衛、思ひ入れあつて
半兵　シタリ。强し〳〵。惡い事でも、善い事でも、それ程に性根を据ゑねば、男とは云はれぬ。流石町人でも黒木屋大隅と呼ばるゝ人の息子どの程あつて、頼もしい。この半兵衛も、有やうはお前を尋ねに、祇園町の扇屋へ行てもござらぬゆゑ、スゴ〳〵と歸りがけ、假り橋にて呼びかけられ、もしやと思うて爰へ來て、お目にかゝつたは、願うても無い幸ひ。
彦三　コリヤ、富婁那の辯を揮うて、おれを無理やりに理窟詰めにして、内へ連れて歸らうとは、手の見えた狂言。さういふ事では、この彦三は行かぬ。オヽ、慮外ながら、ナア、皆の者。ハヽヽヽヽ、半兵衛に構はずと、酒にせう〳〵。小吟、つぎやれ。
ト また杯を取上げる。
小吟　アヽ、申し、それではあなたの手前。もう酒はよしにして、ちやつと内方へ。
半兵　イヤ〳〵、連れては歸りませぬ。矢ッ張り爰で若旦那の太鼓を持つて、色里の酒一つたべて見たい心。
彦三　ムウ。そんなら意見ではよ無うて

半兵　氣晴らしを致したい。

彥三　コリヤ、大分粹な事を云ふが、どう心が入れ替つて、番頭どのゝ

皆々　サア、その譯は。

半兵　ハテ、內に居て親旦那の述懷と、娘御の愚痴を聞いて、心がジメ〳〵。ところで、思ひがけなう今初めて、この二階へ上がつたれば、どこともなしに花やかで、氣がワツサリになつて來た。若旦那を始め皆も聞いて下んせ。何ぼう金持ちでも、町家といふものは、夜なぞは猶の事、とんと持てるものではない。成る程、思へば、お若い彥三さまが、ちよつと出ても歸らずに、居續けにござる筈。內が持てぬといふ譯は、此方の親旦那は、名は大隅でも大の野暮、あれほど發明な若旦那を、阿呆か子供のやうに思うて、お留守のうちにも、娘御のお路さまをとらへては、彥三さまの事を云うては案じ、面白う此やうに騷いでござるのを知らずに、夜もろくに御寢ならず、口へ出しては仰しやらぬ、心の中の氣扱ひは、現はれるお顏の瘦せ。朝夕も味ないと、ろく〳〵にまゐりもせず、お好きの謠の聲も聽かず、ジメ〳〵としてござるのも

ト淚ぐみて、彥三を見て思ひ入れあつて

サア、その內の陰氣さといふものが、堪へられたものではないワ。今夜も今夜とて、娘御に仰しやるには、ア、、彥三が內に居る晩には、圍ひに釜をかけて、茶ぢやの、酒ぢやの、また俳諧のと、隣りの筒井の息子どのや、友達衆を呼び集め、それは〳〵賑やかに、陽氣であらうと思ふのに、あれが內に居ぬと閑古鳥、森の小烏、夜の鶴、案じる親の事は思はずに、河東へ行て、酒に飮まれて先から先、戾り端知らぬ不孝な奴と思へども、天にも地にも、たつた一人の伜、可愛いが矢ツ張り因果と、跡は淚の雨やさめ。次の間で聞いて居るこの半兵衞までが、お心根を思ひやつて、貰ひ淚に泣くは人情。思ひ廻せば、勿體ない事ではござりませぬか。コレ、

ト彥三を見て、思ひ入れあつて、ム、、ハ、、、、とわざと笑うて

サア、斯ういふ親御の御心底ゆゑ、內には居られますまい。ナア、若旦那。この上は、半兵衞もろとも、この月中はおろか、今年中も居續けして、親御の事や娘御の事を、微塵も思はぬがようござります。どうやら夜更けの加減か、ジメ〳〵と寒い風、座敷も白けた。若旦那、わ

つさり酒にせうではござりませぬか。

彦三　イヤ〳〵、もう酒はよしにせう。酔がさつぱり醒めて、本性になつた。今の話し、親仁樣の苦になされ、夜もろくに寢られぬとは知らなんだ。父母在す時は遠く遊ばずと、論語にあるを、とんと忘れた。親の心を休めるため、小吟、おりや今夜は歸らうわいの。

小吟　さうでござんす。それでお路さまへ文の義理も立ち、大切な親御樣への御孝行。お春さん、ちやつとお駕籠を云ひつけて下さんせいなア。

はる　アイ〳〵、合點でござんす。お藤さん、お駕籠を早う。

ふぢ　直ぐに呼びにやりませう。

ト下へ下りるを見て、半兵衞わざと

半兵　イヤ〳〵、若旦那、この半兵衞は歸りませぬ。コレ、女子衆、酒はどうぢや。わつさりと吸ひ物がよからうぞや。

彦三　半兵衞、其方は居やつても、もう此やうに座が醒めては、酒は飲めるものぢやない。お春、駕籠はどうぢや。埒の明かぬ。

ト焦つうち、小吟、羽織を着せ、紙入れ、脇差を渡す。

彦三、氣を急いて衣桁に掛けてある頭巾を冠り〳〵

彦三　皆、さらば〳〵。

トこなしあつて、切り穴へ下りる。

宥宅　これはしたり、忙しない。

勘九　申し、旦那〳〵。

皆々　假り橋まで送りますわいなア。

ト伊勢音頭になり、宥宅、勘九郎はじめ皆々切り穴へ下りる。時の鐘になり、小吟、こなしあつて

小吟　わたしもちよつと

ト行かうとするを

半兵　待つた、小吟どの。

トとめる。合ひ方變り

小吟　何ぞ用がござんすかえ。

半兵　イヤ、外の事では無い。最前から見て居るが、あの衣桁に懸けてある帽子は、大方こなさんのであらうが、鐶菊は知れた若旦那、また菊蝶は、どうしてお前が附けさつしやるぞ。

小吟　ほんに、變つた事を尋ねさしやんす。ありや、わたしが母さんの定紋。この身に成り下がつても附けて居るは、お側離れぬ、せめては心の孝行。

半兵　ムウ。そんならお前は、江州高橋の御家中、本間彌太夫さまのお娘御、幼名はお菊さまと申しませうか。
小吟　エ、。それをどうしてお前が
半兵　知らいでならうか。以前の御家來、正木半兵衞めでござります。
小吟　そんなら、わたしが、少さい時に
半兵　お國を立退き、京へ來て、今では町家の奉公、黑木屋の番頭。
小吟　ほんに思ひがけない、以前の家來。
半兵　古主の娘御。誠に人の行くへと、今は流れのお身の上。
小吟　憂き河竹に身を沈めしも、人に騙され、段々樣子のある事。
半兵　ハテ、思ひがけない。
小吟　變つた所で
半兵　主從の名乘り合ひ。
ト膝を叩く。淸搔になり、花道切り幕の中より、提灯吊つた駕籠に彥三を乘せ、舁いて出て、通ひ路へかゝる。本舞臺より小吟、フトこれを見て
小吟　アレ〳〵、いま彥三さまが假り橋を
ト半兵衞も向うを見て
半兵　エ、、嬉しや。あれで親旦那のお喜び。
小吟　コレイナア、申し
ト大きなる聲にて、手を叩き、招く。彥三、駕籠の中より本舞臺を見て、手にて、イヤ〳〵と仕方しい〳〵、駕籠舁いて東へ入る。小吟、殘り惜しさうに
小吟　アレ、もう橋を向うへ。
ト伸びあがるを、半兵衞、引廻して
半兵　サア、あなたのお身の上、私しが身の上も
小吟　イエ〳〵、それよりは、彥三さんいなア。
ト伸び上がり、招くを
半兵　ハテ、とつくりと、承りませう。
ト引廻して下に置く。これにて引返し、

幕

造り物、上の方に石の大鳥居。それより正面に二軒茶屋、藤屋の體にて、前に殘らず綺麗なる葭簾を懸け、はるか下の方に髮結床、障子に「新」の字の印し、紋づくしの暖簾。すべて祇園下河原の模樣よろしく、宮神樂に、豆腐を賣る聲、七草の

音にて幕明く。

トお澤、お政、藤屋の女子にて、着附け、赤前垂れにて並び、通る仕出しを呼んで居る。向うより下座より、仕出し出て、途切れぬやう、始終出入りあり。

さは　申し、此方へおあがりな〳〵。

まさ　奥座敷が綺麗でござりますわいな。サア、おあがりな〳〵。

さは　あなた達もお寄りなされませいな。

まさ　お早う致しますわいな。

ト此うち始終宮神樂、七草にて、仕出し行き違ふ。よき程に、向う揚幕のうち、バタ〳〵にて、小兵衞、毬栗坊主、破れ僧衣にて

小兵　ソリヤ、泥坊々々。

ト云ひ〳〵逃げて出る。後より新門前の權七、幇間伊吉、井筒屋德兵衞、追ひ駈け出て

皆々　其奴が泥坊ぢや〳〵。

ト小兵衞は本舞臺へ來て、仕出しを突き倒し、「泥坊泥坊」と逃げ廻る。三人、追ひ駈け廻る。仕出しも一緒に揉み合ひ、トゞ三人、小兵衞を捕へ、押し倒して

德兵　サア〳〵、泥坊めを捕まへた〳〵。

仕出　ソリヤ、打ちのめせ〳〵。

小兵　ヤイ〳〵、うぬらは愚僧をなんで打つ。泥坊した覺えは無いぞ。

德兵　覺えが無いとは、野太いづくにふめぢやわい。

權七　そして、うぬが泥坊しながら、矢ッ張り人の中を泥坊々々といつて逃げやがる。太い奴ではある。

伊吉　コレ〳〵、新門前の權七さま、お前、祇園町からこの坊主めを、泥坊々々と云うて追ッ駈けさつしやりましたゆゑ、おれも一緒に爰へ追ッ駈けて來ましたが、此奴はマア、何を盜みましたな。

權七　伊吉、聞いてくれろ。今おれが切り通しを通つたら、藝子を若い衆が新地へ送るところを、此奴が簪を拔き居つたわいの。それでおれは追ひ駈けて來たのよ。太い奴ではないか。

德兵　昨日どんぐりの辻で、おれがはゝゝを盜つたも此奴であらう。

仕出　打ち据ゑて、盜み物を、出させろ〳〵。

小兵　ヤイ〳〵、待て〳〵。この尊い出家を、泥坊ぢやの盜人ぢやのと吐かして、打ち叩きひろいだら、罸があたるぞよ。

仕出　なんの罰が。乞食坊主めが。
小兵　アレ又、乞食坊主と吐かす。愚僧も世にある時は、宮川町へ通うたちしやく院、そこをしくじつて鷹ケ峯、それから嵯峨、御室、壇上を駈け廻つて、トヾのしまひが河原の蒲鉾。
　ト ちよんがれの合ひ方になり、小兵衛、端た錢を出し、錫杖のやうに振り
ヤレ〱、聞いてもくんない。爰は都かお花に打込み、丁半ちよぼ一、歌留多は元より、博奕が達者に、成る程薄なる、宿無し坊主の、うるさいこんだに、ボン〱ボン〱。
　ト 紛らして逃げうとするを
權七　ドツコイ。ちよんがれで紛らかし、爰を逃げうとは太い泥坊め。
伊吉　此奴が盗んだ簪があらう。皆寄つて探してもらはう。
仕出　合點ぢや〱。サア〱、出し居らう〱。
　ト 多勢かゝつて小兵衛を手籠めにする。懐より簪、紙入れ、巾着、盗み物、バラ〱と出る。
德兵　これ程持つて居て、知らぬとは泥坊め。
伊吉　イヤ〱、コレ、德兵衛さま。お前、その盗み物は斷わりなしに取返しては、却つて難儀になりますぞえ。
德兵　ほんに、さうぢや。幸ひこの祇園の下の山支配の所へ、此奴を連れて行て、取戻してもらはう。
小兵　そんなら愚僧を。
伊吉　山へ連れて行くのぢや。
小兵　これは迷惑。
德兵　大泥坊め。
小兵　山とは辛い。
皆々　うせアがれ。
　ト こんな事云ひ〱、小兵衛を權七、伊吉、德兵衛皆寄つて、鳥居の中へ連れて入る。直ぐに祇園囃子になり、向うより小吟。白人、都、お春、お藤、若い者一人附添ひ出で來り、本舞臺へ來る。
さは　これは〱、井筒屋の小吟さん。都さん。富田屋のお二人樣も、ようござんしたなア。
まさ　幸ひ座敷も明いてあり
さは　サア、お出でなさんせいなア。
はる　そんなら、お二人さん、奥へ行て
小都　待ち合さうわいなア。

ト神楽になり、小吟に附いて皆々、奥へ入る。向うより表具屋太郎兵衛、着附け、羽織、ぼつとせの心にて出て

太郎　かた〴〵の約束なれば、どうぞ間違はぬやうに逢ひたいものぢやが。

ト云ひ〳〵、本舞臺へ來る。下座より小兵衛、棒縛りになりて、ブラ〳〵と出て、太郎兵衛に行きあたり

小兵　アイタヽ。何奴だ〳〵。

ト太郎兵衛、小兵衛を見て

太郎　ヤア、てまへは坊主小兵衛ぢやないか。

小兵　こなさんは藪の下の表具屋、太郎兵衛どの。

太郎　小兵衛、その態で居るは、わりやまだ性根が、直らぬな〳〵。

小兵　イヤサ、これにはちつと譯のある事でごんす。幸ひ馴染みがひに、この繩を解いて下んせ。

ト體を突き附ける

太郎　おれが町内に居た、惡黨のわれなれど、見りや、どうやら不便な。ドレ、解いてやらう。

ト云ひ〳〵、兩手の繩を解いて、棒を離す。小兵衛、兩手を撫り〳〵

小兵　ア、、嬉しや。これで、何盗まうとまゝぢや。

太郎　小兵衛、われも心を入れ替へよ。元は藪の下で、相應に暮した者の悴でないか。少さい時から小盗みして、博奕を打ち習ひ、段々募つて、追ひ出されたは幾度か。後には町内の厄介ゆゑ、無理に坊主にして寺へ遣つたれど、そこでも爰でも、盗みをして追ひ出され、其うちに親も死ねば、一家も無く、たうとうしまひには其ざま。この上は粟田口から西の土手で、首切らるゝが定。早く惡心を改めて、親の菩提に小兵衛坊主、坊主小兵衛と歸り花を、コリヤ、咲かせ。

小兵　忝なうございます。ほんに馴染みとて、表太さま、誰れが其やうに云うてくれませう。

ト目に唾附けて

此やうに涙がこぼれて有り難い。この上は、とんと心を入れ替へて、誠の坊主になりたけれど、好きな魚が食はれぬゆゑ、いつそ剃りこぼつて野郎になつて、一奉公して稼ぐ心でござります。

太郎　そりやまだしもぢや。何奉公しても、恰幅はよし、まつたうにすりや、人も置くであらう。さうしてなりと、身をくろめたがよい。

小兵　アイ〳〵。そんならどうぞ、御無心ながら、錢を少し貸して下さりませ。

太郎　ちよつて逢うて、もういぢられる。コリヤ、爰に錢が二百ある。これを遣るほどに、月代剃つて湯へでも行つて、さつぱりとなれ。

ト錢二百文出してやる。小兵衞、取つて

小兵　エヽ、有り難い。「二百の錢を取つて禮をなし、飛ぶが如く、髮結ひ床へ失せにけり。」

ト源太節の身振りにて、髮結ひ床の暖簾の中へ飛んで入る。跡に太郎兵衞殘り

太郎　ハテ、惡黨ながらも、他愛の無い奴ではある。

ト大拍子の神樂になり、向うより黒木屋彥三、袴、羽織、一本差しにて、發端の頭巾を着て、手代松兵衞を連れ、出て來て

彥三　松兵衞、御所から祇園までは、餘ツぽどの道ぢやな。

松兵　それにお前樣は、我が內の門を除けて、二條通りをござつたゆゑ、猶廻りでござります。

彥三　さうかしらぬてや。

ト云ひ〳〵本舞臺へ來て、太郎兵衞を見て

これは〳〵、表具屋の太郎兵衞どの。

ト頭巾を取つて袂へ入れる。

太郎　黒木屋の若旦那、あなたにお目にかゝらうと存じまして、最前からこの所へ。

彥三　さうでござらう。マヽ、その床几へ。

太郎　左樣なれば。

ト太郎兵衞、彥三、床几へ腰かける。松兵衞は蹲うて居る。

松兵　若旦那がお前にお逢ひなされぬと、わしが藪の下へ參るところでござります。

太郎　イヤ〳〵、堅い約束、滅多に違へる表太ではござらぬてや。

彥三　時は、太郎兵衞どの、先達てお話し申した通り、親大隅お出入りの、梅園中將さまのお姬樣、鎌倉へ御婚禮來月早々お輿入れに、世にも稀れなる御調度を、御吟味なされ、御家老桂左市さまが、この彥三に仰せつけられしは、彼の紫式部、石山に於て、源氏の卷を綴りし時、用ひられし硯、これを若菜の硯と名け、珍らしき重寶、この硯を其方が働らきにて、求めくるゝやうにとの仰せ。幸ひお前の所に先祖より傳はつて所持の由、承つてこの間より掛け合ひ、硯の形も御殿へ差上げ、御覽に入れ

しところ、相違なき趣きにて、早く求め、差上ぐるやうにとの仰せに依つて、代金も三百兩と相極め、今日この所にて受取り渡しの契約なれば、太郎兵衛どの、いよいよ御承知で、若菜の硯、御持參下されしかな。

太郎　成る程、仰せの通り、先祖より、故あつて所持いたす若菜の硯なれど、據ろなきお賴みゆゑ、値段は三百兩に極め、賣り渡す應對に、洛中で人の知つた表具屋の太郎兵衛、なんの異變がござりませう。卽ち硯も、持參いたしました。

　ト懐中より、袱紗包みの箱を出し、開いて渡す。彦三とつくと改め

彦三　成る程、御所より御注文の通り、双鸞の模樣並べて彫りし、この硯の式部形。石の古びも自然と瑠璃の如く、如何にも稀れな器物と見えまする。

太郎　イヤモ、似せても似せられぬ古物の硯、イカサマ、堂上方の御婚禮の棚飾りには、斯ういふ器でなければ叶ひますまい。

　ト此うち彦三、右の硯を取り收め

彦三　松兵衛、持參の手形を、太郎兵衛どのへ。

松兵　畏まりました。

　ト内懐中より、首に懸けし革の證文袋を取り出し、袋とも

三百兩の振り手形、とつくりと改めて、受取らつしやりませ。

　ト太郎兵衛に渡す。太郎兵衛、取つて

太郎　振り手形なれば、念の爲、ちよつと。

　ト袋より手形を出して改める。此うち髪結ひ床より小兵衛、月代剃つて、笊緣の頭になり、僧衣を脱ぎ、着附けばかりにて出で、後に窺うて居る。

この須磨屋甚兵衛といふ兩替は、慥か三條室町ではござりませぬか。

　ト云ひ〳〵、右の手形を袋へ入れ、我が膝元に置く。小兵衛、鳥居に掛けてある座敷淨瑠璃の番附けをめくり、革袋を取つて手形を出し、右の番附けを入れ替へ、元の所へ直し、手形を戴き、こなしあつて鳥居の中へツイと入る。

松兵　左樣でござります。表太さま、お前を直ぐに兩替屋へ、お供いたしませうか。

太郎　イヤ、須磨屋甚兵衛はよく存じて居りますれば、これから直ぐに寺町に用事もあれば、ちよつと寄つて、そ

の上で室町へ參ります。

ト云ひ〳〵、革袋を首に懸け、懷中へ入れる。

松兵　そんなら、若旦那、私しはお先へ。

彥三　オヽ、歸りがけに太郞兵衞どのを、寺町まで送つて、早う內へ行て、親仁樣にこの樣子を、とつくりと申せ。

松兵　ハイ〳〵。

太郞　左樣なら、彥三さま。

彥三　太郞兵衞どの、御苦勞。

太郞　お暇申します。

ト唄になり、太郞兵衞、松兵衞を連れて向うへ入る。

彥三、跡にこなしあつて

彥三　先づ、この御用さへ片附けたりや、晩からこの河原へ來うとまゝ。時に、大切な硯を、御前へ持つて行かずばなるまいが、次手にちよつと、小吟にも逢ひたし。どうしたものであらうぞ。

トこなしあるところへ、向うより宥宅、序幕の形、勘九郞を連れ立ち、出て來て

宥宅　これは彥三先生。いつの間に爰へ。

彥三　宥宅老か。ちと御用向きで。

勘九　御用向きとは、旦那、あまり眞面目過ぎます。

彥三　勘九郞、この間は逢はぬな。時に、おりや御所へ上がらねばならぬ。又、近日〳〵。

ト硯を持つて行かうとするを

宥宅　コレ〳〵、先生。そりやどうしたものぢや。

ト勘九郞も留めて

勘九　折角お目にかゝつたに、直ぐに歸るとは、あまり沒義道。

宥宅　この二軒茶屋で、ちよびとは、ナア、勘九。

勘九　それ〳〵。藤屋は込んであれば、中村屋で、ツイちよつとお一つ。

彥三　イヤ〳〵、どうも今日はさうして居られぬ。

宥宅　そこを是非とも。否ならこれを。

ト硯を引ッたくる。

彥三　ア、コレ。そりや大切な。

宥宅　これが欲しくば、中村屋へ。

彥三　ハテ、惡洒落せまい。その硯は。

勘九　人質とは、好い思ひ附き。

宥宅　進ぜうか。

彥三　ドレ。

宥宅　爰までござれ。

ト宥宅先に、硯を見せて後退り。勘九郎、彦三を押しやる。これに釣られ、彦三、是非なく、三人揉み合ひ、鳥居の中へ入る。始終大拍子にて、引違へに小吟走り出て

小吟　いま藤屋の女子衆に聞いたら、慥かに彦三さんが見えたとやら。どこへござんしたか知らぬ。

トうろ／＼そこらを尋ねるところへ、向うより千鳥濱右衛門、着附け、羽織、大小、頭に好みの侍ひにて、出て來て

濱右　こりや忝ない。小吟、さては身共を尋ねて居たか。

ト直ぐに抱くを、小吟、振り退け

小吟　誰れぢやと思へば、エ、濱さん。尋ねるお方は見えず、アタ好かん、措いて下さんせいなア。

濱右　措いてくれとは、どうぢやぞいやい。この間其方をちよつと見染めた、この千鳥濱右衛門、甚だ執心。それゆゑ、富田が許にて今日も、身共が揚げてこの祇園へ、明日は競馬、また明後日は伏見の稲荷。コリヤ、いくら云うても盡きぬ。それよりちよつと爰で。

トまた抱くを

小吟　エ、、否ぢやわいなア。離して下さんせ。見とむないわいなア。

ト逃げ廻るを、濱右衛門、追ひ廻し、嫌らしう抱く。此うち髪結ひ床より松の尾新兵衛、上張り、元結ひの襷かけ、頭に鬢棒を差し、髪結ひの形にて出て、小吟を引分け、濱右衛門を取つて投げる。

濱右　アイタ、、、、。

ト惘り。

小吟　思ひがけない。申し、お前は。

新兵　この床の髪結ひ、松の尾新兵衛といふ者。

小吟　エ、、そんなら半兵衛どのゝ内儀の、おりくさんとやらの

新兵　サア、なんぞ由緣が無くば、滅多に爰へ出やせぬわいの。

ト此うち濱右衛門、腰を抱へて立ちあがり、新兵衛を見て

濱右　うぬ、憎い奴め。案内も無く侍ひを、今の如く取つて投げるとは。

新兵　益體もない。なんのお侍ひ様を私しが。

濱右　成る程、然らば身共が手に。ハテ、痛い投げやうをしたなア。

小吟　申し、新兵衞さま、わたしが身の上、知つて居やしやんすからは、定めて彼のお方の事も。
新兵　サア、お前のいひ印しは承知々々。
濱右　コリヤ〳〵、町人。いま小吟が云ふ事を、承知とは。
新兵　ハテ、お前はお客、あの子は女郎。それを承知といふ事サ。
濱右　イヤサ、承知ではない、不承知だ。なんぼでも身が心には從はぬゆゑ。
新兵　ハテ、そりやお前が惡いから。
濱右　惡いとは、何が。
新兵　男が。
濱右　ヤ。
新兵　先づ、第一色が黒うて、顏の道具は揃はず、西内なれば、人が上手といふ出目で、眉毛は短かく、頭やら額やら知れぬ、小鬱陶しい月代。どこに一つ取り得の無い殿御振り。それで小吟さんが靡かぬは、尤もかい。
濱右　そこをどうぞ靡くやうに、この顏の造り直しが、出來やうかな。
新兵　それを直すがおれの商賣。御覽の通り髮結ひなれば、その鬱陶しい額を、コレ、この毛拔で、

ト毛拔を出して
これで額の角を立てゝ、立派な男にしてやりませう。
濱右　忝ない。御苦勞ながら、サ、早く、早く。
小吟　申し、新兵衞さん、必らずともに。
新兵　サア〳〵、よい。默つてござれ。此奴を斯うするも。
ト濱右衞門を酷く引寄せ
彼のお方の事を。
小吟　エ、。
濱右　なんとした。
新兵　ハテ、默つて居やう。
ト毛拔にて、ピリ〳〵と毛を拔く。
濱右　アイタ、、、、。コレ、色男にならうと思へば、術ないものぢや。これも何ゆゑ、小吟どのゆゑと思へば、堪へずばなるまい。
ト泣き〳〵いふ。小吟もこなしあつて
小吟　新兵衞さん、そんなら彥三さんも、見えたかえ。
新兵　サ、慥かに最前、床の内に見て居たが、さうであらう。
濱右　ヤア、何ぢや〳〵。
ト立たうとするを、新兵衞、引きつけ

新兵　ハテ、チツとしてござりませ。
小吟　どこに居やんす。どうぞ知らせて下さんせいなア。
新兵　この毛ざい六が知ると、邪魔になる。コレ、耳持つて來た。
小吟　アイ〳〵。
ト側へ寄る。新兵衞、濱右衞門が頭を押へ、小吟に囁く。
そんなら、アノ、中村屋に。
新兵　コレ。……ちやつと。
ト額にてする。
小吟　忝なうござんす。
ト小吟、喜び、鳥居の内へ走り入る。濱右衞門、おこつくを、新兵衞、グイ〳〵と角を拔く。
濱右　アイタヽヽヽ。もう堪へられぬ〳〵。
新兵　ハテ、もちつとぢや。
ト額にてグツと拔き
ソレ、もう仕舞ひぢや。鏡で見たがよい。
ト突き放す。濱右衞門、唐犬額にをかしく角を拔き上げた額にて、額を撫でゝ見て
濱右　ア、嬉しや。助かつた。……痛めし代りに、さぞ色男になつたであらう。
新兵　なつた〳〵。業平まがひの色男。
濱右　二條の妃の、コレ、小吟。
ト そこらを尋ね廻り
ヤア〳〵、小吟はどこへ行た。
新兵　慥か清水の方へ。
濱右　南無三、彼奴をやつては。
ト鳥居の内へ追ツかけ入る。
新兵　あゝいふ呆痴者が、大小差すもをかしい。ハヽヽヽ、ハヽ。
ト笑ふ。てんつゝになり、向うより新兵衞女房おせんやつし、前垂れ、世話女房の拵らへにて、辨當を提げ、出て來て
せん　こちの人、爰に居やしやんすかいなア。
新兵　オヽ、女房ども、辨當か。
せん　アイ、遲うなつた。堪忍して下さんせ。ほんに、北野のおりくさんの方から、わざ〳〵人が來たわいなア。
新兵　妹の方から人が來たは、この間云うた、小吟どの事であらう。
せん　サア、その小吟さまは、お前の妹聟、黒木屋の半兵

衞さまのお主筋、それでどうぞ身請けの事を。

新兵　おれも妹の頼み。その事が心にかゝつてある。今も今とて小吟どのが……イヤ、詳しい事は、おせん、見世へ行て話さう。

せん　ほんに、お飯もあげうし、何かの相談を、こちの人。

新兵　おせん、おぢや。

せん　アイ。

ト唄になり、新兵衞、おせんを連れ、床の内へ入る。鳥居の内より小吟、彦三が胸倉を取つて

小吟　サア〳〵、ござんせ〳〵。

ト無理に連れて來て

お前に云はねばならぬ事がござんすわいなア。

彦三　なにを。

ト振り離す。これより三味線入り神樂になる。彦三、酒に醉うたるこなしにて

慮外者めが。女子だてらに男の胸倉を取つて、なゝ何とする。

トひよろ〳〵、こなし。

小吟　それ見やしやんせ。酒をあがると、常のお心とは引きかへて、何事も構はず、夢中になつて。

彦三　夢中も凄じいわい。なんの、酒の一升や二升たべたというて、本性を違へる彦三ではござなく候。

小吟　そんならお前は

彦三　本性の譯が聞きたいか。云うて聞かさうか。

小吟　アイ、聞きたうござんすわいなア。

彦三　聞きたくば云うて聞かさう。コリヤ、千鳥とやらいふ侍ひ客に、馴染みが出來て、この頃は揚げ詰めとやら。晝夜のおしげり、さぞ面白からうな。

小吟　なんの面白い事、わたしや悲しうござんすわいなア。いつぞや居續けの時、歸らしやんしたまゝ、やう〳〵今日逢うても、案じて居るわたしには顔も見せずに、中村屋で、宥宅や勘九郎が勸めて、ソレ其やうに醉うてござんすは、お前は面白うござんせう。わたしや明け暮れ、お前の事を案じて、遣る瀬はござんせぬわいなア。

ト泣く。

彦三　こりや泣くか。ハヽヽヽヽ。面白い。女郎の泣くは大名の鶯、千兩道具、その涙を侍ひに、泣いて見せたら喜ぶであらうが、この彦三はをかしい。ハヽヽヽ。イヤ、どうも詰まらぬワ。眠たうなつた。

トあたりを見て、こなしあつて

幸ひの髪結ひ床、こりや畜生め。

ト小吟が手を取つて

もう堪忍してやる。うせ居れやい。

小吟　どこへ行くのぢやえ。

彦三　サア、富田屋までは餘ッぽど遠し、二軒茶屋は人込み。幸ひ向うの暖簾の内。

小吟　滅相な。向うは髪結ひ床。

彦三　その髪結ひ床も床、寝るところも床。ハテ、どこへ行ても一寝入りせねば堪へられぬ。ア、、酔うた酔うた。

ト小吟が手を曳き、轉けやうとする。

小吟　ア、、申し、危ないわいなア。

彦三　ドッコイ。……井戸端の櫻あぶなし酒の酔ひ。こりや江戸の女子の發句。これは又、京の女郎のほんまの心底、さらば聞かうか。

ト唄になり、小吟を連れて彦三、千鳥足にて床の内へ入る。この前より濱右衛門、出かけ見て居て、この時

濱右　あの今の舌たるさ。さては小吟が深う云ひ交して居る彦三といふは彼奴。身共を違うて、ハテ、よい男ぢや。

トぐんなりとなる所へ、下座より小兵衛、勘九郎が着附けを着て出て

小兵　コレサ、濱右衛門さま、爰に居さつしやりましたか。一遍尋ねて居りました。

濱右　そちや坊主小兵衛。見れば、大分立派な形になつたが、そりやどういふ事で

小兵　サア、何ぞよい仕事があらうと思うて、いま中村屋の内をウソ〱窺うたら、奥座敷に脱ぎ捨てゝあつたはこの着物。ちよいと引ッかけて來たが、なんとよく似合ふでござりませうな。これからは、この形で室町の兩替屋へ仕掛けて、大金を引ッかけるのぢや。

濱右　ムツ。室町の兩替屋へ行て、大金を引ッかけるとは。

小兵　その玉をお前にも、戴かしませうか。

ト懐中より最前摺り替へた手形を出し、ちよつと小口を開き見せ

コレ。「金子三百兩也。この手形を以てキッと相渡し申すべく候。」これさへ持つて行けば、何時でも室町の兩替屋で、三百兩になつて來るのぢや。

ト云ひ〱、疊んで懐中へ入れる。

濱右　ハテ、妙な物を持つて居るな。

小兵　これも小さい時から仕込んだ藝のお庇。お前もいつそ、おれが弟子になつたがよい。

濱右　どうで名を替へたれば、其方が世話であらう。時に小兵衞。其方が以前、國表の寺に居つた時から、惡黨者ゆゑ、身共も懇意に致したれど、それより中絶。不思議にこの所で出會うて、先程とくと頼み置いたる事、承知か。
小兵　そりや小吟とやら、彦三とやらが仲を、裂く事ぢやございませぬか。
濱右　如何にも。その二人は、コリヤ。
ト囁く。
小兵　ムウ。そんなら、あの髮結ひ床に。
濱右　これへ引出して。
小兵　お前の存分に。
ト髮結ひ床へ駈け込み
サア、二人とも、うせやアがれ。
トばた〳〵にて、新兵衞、おせんの首筋を引摺り出る。
新兵　こりや思ひがけない、何するのぢや。
せん　何科あつて手籠めにさしやんす。
ト振り切るを
小兵　吐すな、賣女め。何科とは不義の科。あの濱右衞門さまの揚げ詰めの女郎を、ちよろまかして忍び合ふは、間男同然、遁がれはあるまい。コリヤ、彦三め。
新兵　なんと。
濱右　憎いこの小吟め。よくも身共を。
トおせんを捕へ、顔を見て
ヤア、こりや違うた。
せん　ナニ、違うたえ。
濱右　イヤサ、それは。
ト新兵衞を見て「これも違うた」と悄りする。
小兵　イヽヤ違はぬ。この坊主が、イヤ、還俗した男が云ひ出す事、滅多に違うて堪るものか。
新兵　うぬは最前、月代剃つてやつた、乞食坊主め。
小兵　ほんに、わりや髮結ひぢやな。
トおせん、こなしあつて
せん　申し、こちの人、思ひ廻せばこの場の仕儀、どうもわたしや濟まぬわいなア。
新兵　成る程、男のある女房を、不義者と云はれ、引出されては、おれも濟まぬ。
せん　それぢやに依つて
ト小兵衞と濱右衞門の眞中へ行つて
申し、お侍ひ樣、小兵衞さんとやら、わたしや不義した

覺えはございませぬぞえ。

小兵　そりや、今の間違ひで、小吟と思うたゆゑ。

せん　サア、思はれても、思はれいでも、不義の惡名、雪いで下さんせ。

小兵　ヤ。

新兵　現在の女房、男の側で不義間男と云ふには、なんぞおせんが身に暗い事があつてゞあらう。これを糺さにや料簡せぬ。殊に、髮結ひ床は、この新兵衞が稼業場。なんで踏ん込んだ。

小兵　サア、それも今の間違ひから。

せん　間違ひとばかりでは濟まぬわいなア。不義と名が立ちや、わたしは夫新兵衞どのに、ナ、去られるでございませう。その潔白に、お前方お二人を、代官所へ連れて行て、間違ひといふ不義の明りを、立てゝもらはにやなりませぬわいなア。

小兵　滅相な。代官所へ行て堪るものか。

濱右　さうぢや。高が斯ういふ事を代官所沙汰にしては、身共が身の上にならうも知れぬ。

新兵　そんなら、扱はつしやりませ。

小濱　扱へとは。

新兵　ハテ、おれが女房に惡名附け、不義者とあれば新兵衞は男、此まゝでは料簡せぬ。そこを、相手になつたり仲人になつたり、挨拶するのぢや。

小兵　こりや、おれに上越すいたぶりぢや。

せん　いたぶりとやら云はれては、猶の事。女房ども、こりや代官所の方が近道。

濱右　小兵衞。こりやマアどうせうぞ。

小兵　エヽ、お前も侍ひのやうにも無い。押しの利かぬ。ツイ二朱か一分出して、幕を切つてしまはつしやりませ。

新兵　イヤ、二朱や一分では幕は切れまい。ナア、女房ども。

せん　マア、此方の手附けは少なうても、大方五十兩。

濱右　ヤア、アノ、五十兩。ト悔りする。

せん　五十兩出す事が否なら、代官所へ。

濱右　いつそ其方が應うあがる、身共は出る氣ぢや。小兵衞、てまへは。

小兵　滅相な。おりや代官所どころか、山支配へも出られぬ。

濱右　ぢやというて、五十兩。

トちよつと思案して
さうぢや、小兵衛、今見せた其方が持つて居る振り手形を、身共に貸しやれ。
小兵　エ、。
ト惘とする。
濱右　ハテ、其方が持つて居る三百兩の振り手形は、慥かに元手無しの只取り、イヤサ、例へ實の手形でも、大事ない。ハテ、五十兩の抵當に三百の手形で、ナ、マア、この場を、埒明けるのサ。
小兵　情ない。子供に物は聞かされぬ。おりやそんな物持つて居る覺えはないぞ。知らぬぞ。
濱右　イヤ、知らぬとは云はさぬ。先程、室町の兩替屋へ取りに行くと云うたではないか。
小兵　サア、それでも。……エ、、けちな。斯ういふ所に居やうより
ト行かうとするを、新兵衛引廻し、留めて
新兵　待て、小兵衛とやら。女房を不義と云うた懸り合ひ。滅多にこの場を動かす事はならぬぞ。
小兵　その目當は濱右衛門どの。おりや賴まれたゆゑ、構ひは無い。
せん　構ひが無ければ、お前が持つて居やしやんす振り手形とやらを、爰へ出して行かしやんせ。
小兵　イヤ、そんな物を持つては居ぬ。
濱右　現に最前、身共が見屆けて置いた。是非どうぞ貸してくれい。
小兵　エ、、知らぬ。
新兵　知らねば、女房、
せん　代官所か。
濱右　貸してくれるか。
小兵　サア、それは。
四人　サア〳〵〳〵。
小兵　こりや又ひよんな事に懸り合はしたなア。
ト頭を押へる。向うバタ〳〵にて、太郎兵衛、太息ついて走り出で
太郎　サア〳〵、大事ぢや〳〵。彦三どのはどこに居る。黒木屋の彦三どの。彦三どの〳〵。
トうろたへて、あちこち駈け廻る。おせん、よろしく留めて
せん　コレ、申し、黒木屋の彦三さまは、わたしがゆかり。お前、いから取りのぼせてござるが、何の用でござんす

え。

太郎　何の用か。おれが大切な若菜の硯を、三百兩に賣つて、代金は振り手形、室町の兩替屋、須磨屋甚兵衛へ持つて行て、受取らうと出したところが、コレ、此やうな座敷淨瑠璃の書附けぢやわいの。それぢやに依つて、彥三どの〳〵。

ト あわてゝ立ち上がるを、新兵衛も留めて

新兵　コレ、お前、彥三さまから振り手形を受取る時に、よもや改めずに受取りはさつしやるまいがの。

太郎　サア、最前改めた時は、須磨屋甚兵衛が手形。持つて行たれば、コレ、この淨瑠璃の書附け。

ト 新兵衛、おせん顏見合せ、思ひ入れあつて

せん　こちの人。

新兵　女房ども。

せ新　これで大方。

ト 小兵衛を見ろ。小兵衛最前より、いろ〳〵こなしある。濱右衛門も心附き

濱右　ヤア、そんなら小兵衛が

小兵　コレ。

ト 濱右衛門が胸倉を取つて、下に置く。

せん　こちの人、どう廻つても彥三さまのお爲。もうこの上は、

新兵　振り手形は此奴が。

ト 小兵衛が懷へ手を突込み、手形を引出す。「それを」と立廻りにて、奪ひ合ふ。おせん、中よりちやつと手形を取つて

せん　實の手形か。ソレ、見やしやんせ。

ト 太郎兵衛へ渡す。太郎兵衛見て

太郎　成る程、これに違ひはござらぬ。さては、あの、小兵衛めが

新兵　摺り替へたのに違ひはない。

小兵　もうこの上は。

濱右　われが肩持つて

ト 拔いて切りかける。新兵衛、立廻り。小兵衛、逃げようとするを、おせんと立廻り、太郎兵衛も手傳ひ、皆々よろしくあつて、トゞ新兵衛、刀を引ッたくり、兩人をさん〴〵に背打ちにして

新兵　身動きひろぐと、打ち殺すぞ。

せん　首尾よう手形が元へ戾れば、若旦那のお名も出ず、

太郎　いかいお世話でござりました。

新兵　コレ、禮には及ばぬ。手形を持つて、ちやつと兩替屋へ。

太郎　忝なうござります。左樣なれば、また室町へ。てもあつたら膽を潰した事ぢや。

ト いひ／＼向うへ走り入る。

せん　こちの人。この二人はえ。

新兵　手形を取返した上は、助けてこます。

ト 二人を引起し、酷く突き離す。小兵衞、濱右衞門こなしあつて

小兵　アヽ、今日は如何なる惡日ぞ。折角骨を折つて、盜んでは取返され、一度ならず二度までも。

濱右　それが譬への通り、

小兵　人垢身に附かずぢやなア。

ト 唄になり、小兵衞、濱右衞門を連れ、鳥居の中へコソ／＼と逃げて入る。跡におせん、新兵衞殘り、こなしあつて

せん　こちの人。お前と相談して、小吟さまの身請けの金、拵らへようと思ひの外。

新兵　矢ツ張り彥三どののお爲なれば、身請けの金は、また思案があらう。

せん　そんなら、一緒に、もう內へ歸らうかいなア。

新兵　イカサマ、もう日も暮れ方。早う內へ行んで、こちの相談。

せん　併し、あのお二人樣が。

ト 床を敎へる。

新兵　ハテ、醉うて寢てござる彥三さま。おりや出直して店を方附けに來るまでに、丁度醉ひも醒めるであらう。サア、女房ども、おぢや。

ト 唄になり、おせん、新兵衞、しか／＼あつて、向うへ入る。鳥居の內よりお春、都、お藤、德兵衞、伊吉も一緒に出て來て

みや　小吟さんは、もう先へ歸らしやんしたかいなア。

ふじ　藤屋にも中村屋にも居やしやんせぬに依つて、大方歸らしやんしたであらうわいなア。

ト 床の中より小吟出る。

小吟　新兵衞さん／＼。おせんさんも、どこへ行かしやんしたぞいなア。

皆々　ヤア、思ひがけない、小吟さんは

伊吉　どこからぢや。

小吟　これは皆さん。もう歸るのかえ。

ふじ　小吟さん、お前を尋ねて居ましたわいなア。
皆々　サア、一緒に。
小吟　イエ〳〵、わたしや、ちよつと爰に。
徳兵　ハテ、もう日が暮れる。
みや　連れ立つて歸らうわいなア。
小吟　それでも、アノ。
ト床の内へこなしあるを
皆々　サア、マア、ござんせいなア。
ト唄になり、無理に小吟を連れて皆々向うに入る。ト合ひ方、時の鐘になり、鳥居の内より、宥宅、勘九郎紺看板を着て、供の形になり、小さな藥箱を持ち、出て來て
勘九　宥宅さま、なんとわしが形をちよつと見て下さりませ。正眞の折助と見えませうがな。
宥宅　コリヤ、大きな聲せまい。……時に、もう彼奴は出て來さうなものぢやが。
勘九　もう日暮れ前、道を違へはせぬかや。
宥宅　イヤ〳〵、かた〳〵議定して置いた。マア爰で、ちつと待合はして見ようか。
勘九　それがようござりませう。

ト此せりふのうち、宮神樂になり、向うより筒井の手代金六、着附け、羽織にて、忙がしさうに出て來て、直ぐに本舞臺へ來る。宥宅、金六を見て
宥宅　これは〳〵、筒井のお手代金六どの。丁度よい處でお目にかゝりました。
金六　宥宅老。わしも最前から、參らうと存じましたが、いろ〳〵の事で大きに遲うなりました。先づ、何は差措き、先日お頼み申した、彼のお藥の儀、定めて今日御持參でござらうな。
宥宅　その儀お頼みゆゑ、承知ではござれど、その節も申した通りに、お約束の
金六　二十兩、コレ。
ト懷中より金を出して見せ
この通りに持參いたした。
宥宅　イヤモウ、それさへ出來れば、藥は何時でも、調合いたして進ぜませう。
金六　左樣なれば、どうぞ。
宥宅　只今これにて。
ト床几の上に上がり、仔細らしう
三助。その藥箱をこれへ。

勘九　ハイ。
ト藥箱を宥宅の前へ持つて行つて直し置き、ヅツと下の方へ下がり、下に居る。金六も床几に腰かけて見て居る。宥宅、風呂敷を解き、藥紙を置き、匙を出し
宥宅　只今調合いたす。この藥方は宥宅が家の秘傳、只一服で受合ひます。それもこなたの事ゆゑ、二服合せて進ぜませう。
金六　それは有り難うござります。
宥宅　コレ、この藥種なぞが、餘人の知らぬ、世にも稀れなる高い藥種でござるて。
金六　ヘイ。そりや何といふものでござります。
宥宅　これが、かの、無可有と申し、唐から來るもの。蜀山に居るところの、毒鳥の肝ぢやて。
金六　ハヽア、無可有。ハテ、むづかしい名ぢやな。
宥宅　これに柴霜石、斑猫を加味いたすぢや。
ト宥宅いろ／＼藥を合せ、二包みにして、こなしあつて藥箱をしまひ
サア、お望みの毒藥。
ト金六に渡す。
金六　こりや忝なうござりますが、宥宅さま、これを服ませれば立ちどころに死ぬとあれども、ほんの口受合ひ。わしもしつかりとした事を見ねば、大枚二十兩といふ金子を。
宥宅　成る程、御尤も。即ち只今この處にて、毒味さして見せまう。
金六　すりや毒味を。……そりや誰れに。
宥宅　あれ。
ト勘九郎を顏にて敎へる。
金六　ムウ。尤も。
トこなしある。此うち始終合ひ方。宥宅、茶碗へ水を汲んで來て、右の藥を入れ、掻立てゝ、前に置き
宥宅　三助。これへ參れ。
勘九　ハイ。
トずつと來て
何の御用でござります。
宥宅　コリヤ。その藥を服め。
勘九　エヽ。
ト大きに愕り。
宥宅　ヤイ／＼。主のおれが云ひつけ。なぜ服まぬ。
勘九　滅相な。あの毒をば。

宥宅　喰はねば、コリヤ。

ト脇差をスラリと抜いて突き附ける。勘九郎、逃げようとするを、金六引廻し、向うへ廻つて留める。宥宅金六、勘九郎を眞中に挾み

宥宅　否でも應でも服まさにや措かぬ。

勘九　エヽ、こりや情ない。どうぞ御料簡なされて。

宥宅　こま言いはずと、早く喰へ、

勘九　こりやモウ。

ト逃げようとする。金六、立塞がつて勘九郎を宥宅が方へ突きやる。宥宅、勘九郎を捕へ、兩人して口を割り、右の一薬を無理に服まして突き離す。勘九郎、毒が廻つた心にて、さま〴〵苦しみ、血を吐いて、バツタリ倒れる。金六惘り、思ひ入れ。

宥宅　なんと、金六。手前が秘傳の毒藥。立ちどころに利き目はこの通り。

金六　イヤモウ。これを見て、とんと疑ひが晴れました。

ト懐中より金を出して

サア、約束の二十兩。

ト渡す。宥宅、受取り

宥宅　こりや忝ない。人の見ぬ間に

金六　して、この死骸は。

宥宅　最早暮れ合ひ。密かにおれが片附けて置く。

金六　そんなら、お先へ。

宥宅　早うござれ。

金六　なんでもこれで、あの息子め。

ト藥を戴き

さうぢや。

ト合ひ方になり、向うへ入る。宥宅、花道の角へ行て、金六が跡をとつくりと見送り、これにて勘九郎が死骸に知らす。起きあがり

勘九　宥宅さま。

宥宅　勘九郎、首尾よう行た。

ト金を分けて

ソリヤ、約束の十兩。

勘九　こりや忝ない。

宥宅　流石は幇間、血を吐いて死んだ今の仕打ちは、とんと本まのやうにあつた。

勘九　サア、あんな役は、他人のしたのを見て居るゆゑ、滅多にさゝぬが、なんぼ云ひ合せたとは云ひながら、嘘にも毒と聞いては、どうも氣味が惡かつた。

宥宅　イヤ〱、滅多に命に氣遣ひのある藥ではない。併し、事に依つたら藥が廻ると、狂人にならうも知れぬ。
勘九　エヽ、滅相な。狂人になつて堪るものか。途方もない物を服ましたぞや。
宥宅　ハテ、狂人になつても一時か半時、僅かな間ぢや。藥が下腑へ納まると、その通りの本性になるのぢや。
勘九　さう云ふ事なればよいが。時に、最前中村屋で、彦三を勸めて、無理に酒に醉はして置いて
宥宅　此方へ捲き揚げておいた、大金になる、コレ、この若菜の硯。
ト硯を出して見せる。此うち彦三、醉ひ醒めたるこなしにて、髮結ひ床より出て、これを聞いて悔りする。
勘九　何もかも、手番ひよう行て
兩人　うまい〱。
ト喜ぶうち、彦三、ツカ〱と出て
彦三　大切な硯。滅多には渡さぬ。
ト引ツたくるを、
宥宅　ヤア、彦三。
勘九　その硯を。
ト取りにかゝる。三人、立廻りよろしくあつて、トゞ宥宅はまた硯を引ツたくり、向うへ一散に走つて入る。彦三「それは」と行くを、勘九郎支へてかゝるを、彦三また立廻りにて、勘九郎を突きこかし、彦三も向うへ走り入る。勘九郎、起きあがり
勘九　なんでも金になる、あの硯を。
ト尻引ツからげ行かうとする。この前より小兵衞、後へ出て、窺うて居て、この時ツカ〱と出て勘九郎を引廻し
小兵　コリヤ、待て。われよりおれが先へ行くワ。
勘九　なにを、われが。
ト小兵衞を突き廻し、形を見て
ヤア〱、合點のゆかぬ。そりや慥かにおれの着物ぢやが、中村屋へ脱いで置いたが、さてはおのれが盗んだな。
小兵　見合ひ次第、何によらず、してやるのがおれが商賣ぢやわい。
勘九　さう吐かしやア、うぬは泥坊。
トかゝるを立廻つて、小兵衞、勘九郎の腕を捻ぢあげる。
アイタヽヽ。こりや、どうする〱。
小兵　まだうぬが金を持つてうしやアがる。それも此方へ。

ト懐の金を奪つて
もう用は無いワ。
ト取つて投げ、行かうとする、勘九郎また、ムク〳〵と起きあがり、これより狂人のこなしにて、小兵衛に取りつき

勘九　コレ、男、おれを振り捨て、こなたはどこへ。さては丹波の篠山、太鼓の連れは邪魔になる。胴慾な。泥坊か。盗人か。ハ、、、、。こりや面白い〳〵。
ト小兵衛を捕へ、いろ〳〵狂ふ。小兵衛もこなしあつて、

小兵　さては此奴、狂人になり居をつたな。エ、面倒な。退き居らう。
ト引退けるを

勘九　なんぢや、狂人ぢや。狂人とはほうさい坊。これに懲りよ、道斎坊。

小兵　エ、、邪魔な。
ト立廻りあつて、引ツ擔ぎ、茶屋の見世へ取つて投げ込む。障子蹴破り、勘九郎、見事に中返り。小兵衛こなしあつて
さらば硯を、せしめて來うか。

ト思ひ入れにて、向うへ入る。チョン〳〵にて、返し造り物、うしろ遠見に、四條西石垣の茶屋の體にて、懸け行燈、これに殘らず火を點し、舞臺は河原の體、よき處に蒲鉾の乞食小屋。すべて四條河原の模樣にて、踊り三味線にて道具とまる。
ト向うより宥宅、彦三、硯を引合ひながら出て、花道にて

彦三　コレ、宥宅、この硯は彦三がお出入りの、梅岡家より仰せつけられたゆゑ、方々と詮議して、やうやう今日買ひ求めた、大切な一品。それを其方に奪られては、御所への云ひ譯。親仁樣の手前も濟まぬ。どうぞ、返してたも〳〵。

宥宅　否ぢや。おれも金になる物ゆゑ、最前中村屋へ太鼓を持つて、づぶ六醉はして、奪つたこの硯。奪られたはうぬが呆痴。これをうま〳〵返さうか。馬鹿な事を。

彦三　そりやどうしたものぢや、宥宅。これまで其方の用、無心、一々に聞き屆け、茶屋附合ひの義理づくも、皆この彦三がして置いた。恩を見せたおれが、難儀になるを構はず、硯を横取りするとは、泥坊同然。

宥宅　オヽ、泥坊ぢや。これがおれの地金。今まで人柄作つて居たも、斯ういふ事をしよう爲だわやい。

ト酷く振り放し、構はずに本舞臺へ來る。彦三しどろに本舞臺へ來て、宥宅に取りつき

彦三　イヤ〳〵、硯を返さぬうちは、なんぼうでも、やらぬ〳〵。

宥宅　やらぬと云うても、引ッ奪つたらおれが物。それを今更どう返されう。こゝ放せ。

彦三　イヽヤ、例へ死んでも、硯を取返さにや、滅多には、放さぬ〳〵。

宥宅　ても執念な奴ではある。幸ひの闇の夜。死にたかいつそ。

ト脇差をスラリと拔く。彦三、ちやつと身をかはして

彦三　そんなら宥宅、この彦三を。

宥宅　オヽ、人知れず殺して、この硯を金にするワ。

彦三　エヽ、おのれはなア。

ト思ひ入れ。宥宅、脇差を振り廻し

宥宅　ソリヤ〳〵。ちやつと逃げぬか。逃げねばうぬを。

ト切つてかゝる。彦三捫り拔け、立廻りにて、手にあたる「塵芥捨つべからず」の立て札を取つて、これにて兩人、闇の模樣のタテになり、下座にて、櫻づくし山姥の鳴り物入りの唄になり、兩人タテのうち、宥宅が脇差を叩き落す。宥宅は立て札、彦三は脇差と入り違ひ、矢張りタテのうち、蒲鉾小屋より小兵衛、頬かむりにて、出刃庖丁を持ち、窺ひ出てよきところにて宥宅を出刃にて突く。宥宅は彦三が切つたと思ひ

宥宅　ヤア、彦三。わりや、切つたな〳〵。

トよろめきかゝる。彦三もハッとこなし。小兵衛また切りつける。このタテのうち、彦三、さま〴〵の思ひ入れにて、顏隱す心にて、方々を見廻しながら、袂を探り、頭巾を尋ねる。小兵衛、探り寄つて、宥宅を扶る。宥宅、立ち身にて苦しんで居る。彦三、やう〳〵頭巾を取出し、着ようとして着られぬこなしにて、それなりに取落す、此うち宥宅息絶え、バッタリこけると、彦三も悯り、ホイと下に居る。忍び三重になり、彦三、足の立たぬこなし。此うち小兵衛、死骸に探り寄つて、硯を取出し、此方へ來る。彦三もゐざりながら、死骸の方へ探り寄る。小兵衛はさし足にて花道へ行つて、硯を戴き、思ひ入れあつて、向うへツイと入る。此うち始終忍び三重、彦三、死骸の側へ行つて、

這ひ寄り、懐をいろ〳〵と探して、

彦三　ヤア〳〵。こりや大切な硯が。

トはつと思ひ入れあつて、「もしや」といふ心にて、舞臺中を探り見るうち、向うより灯影見ゆるゆゑ、立ちあがるところへ、向うより手代久三に提灯を持たせ、重三の母お高、婆にて、杖を突き、出て來る。彦三、これにて顏を隠し、花道にて摺れちがひ、お高は本舞臺へ、彦三はこなしあつて、ツイと向うへ走り入る。お高は彦三が落したる頭巾を拾ひ、透かし見る。久三は提灯の火にて、宥宅の死骸を見つけ

久三　ヤア、こりや人が。

トお高、提灯を叩き落し

たか　エヽ、何をしをるやら。

ト思ひ入れよろしく。

幕

二幕目　隣り同士の場

役名──黒木屋彦三。黒木屋大隅。黒木屋番頭、牛兵衛。黒木屋手代、惣八。筒井重三郎。筒井の手代、金六。仕事師、長兵衛。牛飼ひ、五郎吉。筒井の母お高。彦三女房、お路。桂佐市。手代、松兵衛。

造り物、上の方高塀、下の方黒の板塀、兩方高さ五尺ほど、この内に隣り同士の屋根の棟ばかりを繪にて見せ、上の方に鬼瓦の棟瓦、下の方に丸に一の字の棟瓦向ひ合ひ、見合ひにて居る。眞中は庇合にて梅の木の梢を見せ、この道具好みあつて、右の鬼瓦に凧のもつれかゝりあるを、立花屋米藏、丁稚岩松凧の糸卷を持つて、これを取らうと下より焦つて居る。通り神樂、てんつゝにて幕明く。

岩松　エヽ、いま〳〵しい。折角揚つた凧が筒井の屋根へ引ツかゝつた〳〵。

ト米藏が絲を引くを制して

待て〳〵。さう引いては絲が切れる。アレ〳〵、鬼瓦へ引ツかゝつてあるわい。

米藏　コリヤ、待て〳〵。おれが筒井の男を頼んで來て、取つてもらふ筈ぢやわい。

岩松　早う取つてくれゝばよいになア。

米藏　あの鬼瓦は怪體な鬼瓦ぢやな。

ト此うち通り神樂にて、下座より仕出し三人、出て來て

仕一　アレ〳〵、見さつしやれ。噂の鬼瓦に凧が引ッかゝつてあるわいの。

仕二　さてはあの鬼瓦が、この間からある、噂の黑木屋の息子が頼らうて、嘘言いふ鬼瓦でござるか。

仕三　サア、それで黑木屋の方から、段々と頼んでも、あの瓦を取つてやらぬとの事。

岩松　コリヤ・米よ。何ぼうでも凧を取つてくれぬぞよ。

米藏　ハテ、頼んで置いたに依つて取つてくれるわやい。

仕一　ほんに、奇妙な鬼瓦ぢや。黑木屋の方を睨め附けて居るわい。

ト此うち塀の内より、筒井の手代久三出て、上の方の屋根へ這ひ上がる。

岩松　ソリヤ・凧を取つてくれるワ〳〵。

久三　コリヤ〳〵。其やうに絲を引くな。今取つてやる。大事の鬼瓦が落ちるわい。

仕二　アレ、大事の鬼瓦ぢやといの。

仕三　何ぞ謂れのある事であらうわいの。

仕一　ハテ、變つた鬼瓦ぢやなア。

ト矢張りてんつゝにて、仕出し三人、向うへ入る。

二人　サア、どうぢや〳〵。

久三　忙しない奴等ぢや。釘へ絲がもつれ込んである。コリヤ、滅多に引くな〳〵。

ト云ひながら絲を取り

ソリヤ、抛つてやるぞ。

ト凧を抛る。

岩松　よう取つてくれたなア。

米藏　これから河原へ行て揚げう。

岩松　合點ぢや。ヨイ〳〵〳〵。

ト凧を持つて、兩人、踊りながら向うへ入る。久三、屋根より下りかゝり

久三　ハテ、この鬼瓦で氣を揉まし居るわい。

ト引込む。チヨン〳〵にて、返し

右の屋根を引き上げる。前の塀を引いて取る。うしろ二重舞臺。見附け戸棚。下手納戸口。上の方一面の障子。橋がゝり黑の板塀、見越しの松。これは隣の庭にて、この前いつもの所に門口。上の高欄、下

は小屋根の切り褄。鬼の棟瓦見えるやうに懸け、懸け板に仕掛けあつて、この前に、筒井屋の場と書きつけあり、すべて呉服屋の模樣。奥の間にて、劍術試合ひの太刀音、懸け聲。白囃子にて道具とまる。

ト右二重舞臺に金六、帳箱に向ひ、帳を附けて居る。手代七助は算盤を置いて居る。

七助　コレ、金六どの、どうしたものか、この勘定は、一向合ひませぬぞや。

金六　合はぬ筈ぢや。五六十兩足るまいがな。

七助　その通りぢやが、どうして足らぬな。

金六　知れた事。重三郎といふ道樂息子の仕業。育てる阿母が意氣地なし、それに死んだ旦那が呆痴者。少さい時から奉公して、商賣に精出すこの金六を養子にはせず、あゝいふ馬鹿者に、この筒井の跡式を遣るといふ無分別。アレ、見い。奥の間で劍術に凝つて、エイヤツトウの稽古。見世の算用の邪魔にこそなれ、あれが何になるものぞ。

七助　ほんに、呆れた息子どの。エイヤツトウに凝つて、この財産を、棒に振るゝであらうぞい。

金六　そりや違ひない。そこでおれが日頃の。

ト云はうとして

イヤ、時に七助、聞けばこの間、増田宥宅といふ醫者が、四條河原で殺されたといふ事ぢやが、いよ／＼さうか。

七助　それ／＼、こなさんが心安い醫者の宥宅。四條河原でむかう殺してあつたげな。まだその殺し手は知れぬとやら。自體、根が宿無しの惡醫者ゆゑ、誰れも構ひ手はあるまいかい。

金六　ハテ、宥宅は無慘な死にやうをしたなア。

ト奥バタ／＼にて、仕事師長兵衛、面ばう頭巾、股引にて竹刀を持ち、逃げて出る。後より重三郎、着附け袴にて追ひかけ出るを、久三、留めながら附いて出る金六、七助立騒ぎ

金六　こりや若旦那重三さま、何事でござります。

重三　何事とは、あの長兵衛めが、男に似合はぬ卑怯な奴。

長兵　ア、モシ／＼。若旦那。なんぼ男でも、劍術の相手になつて、打たれたり、叩かれたり、手ひどい目に遭うては、體が痛んで堪へられませぬ。

久三　コレ／＼、それでも若旦那の云ひつけ。其やうに面ばうや竹具足をかけて居るではないか。

長兵　何を知つて、ちよこざいな。此やうな裝束で、身が

重うて働らかれぬ。おれも洛中洛外で、人に知られた鴨の長兵衛といふ仕事師。兵法や柔術なら、滅多にさすものではない。竹刀しなひの立合ひには、少し閉口々々。

重三　おのれ、正眼の太刀筋、みんめうの備へを教へてやらうと思ふに、馬鹿者ではあるわい。

金六　イヤ、若旦那。お前も好い加減に劍術を止めて、ちつと商賣の方に

重三　コリヤ／＼、金六。云ふな。母者人さへ、おれの劍術の稽古は默つてござる。それに手代の分際で、ちよこざいな。

ト竹刀にて舞臺をトンと叩く。金六、悄りして飛び退く。

無駄を云ふと、この竹刀でぶち据ゑるぞ。

トこの時向うより、彦三女房お路、手代惣八を連れて出で來り

みち　コレ、惣八。わがみも共々とつくりと、云うてたもや。

惣八　サア、わたしもこれまで度々頼みに行ても、聞入れが無いゆゑ、それで今日は新らしう、お前を連れて行くのでござります。

みち　その聞入れの無いところへ、わしが行てお頼み申すも……つんと、どうやら

トこなしあるを

惣八　ハテ、可愛いと思うてござる彦三さまの、お爲ぢやござりませぬか。

みち　サア、それぢやによつて、行くわいの。

惣八　そんなら、ござりませ。

ト唄になり、兩人、舞臺へ來て、惣八、お路に「入れ」と思ひ入れする。お路、ウヂ／＼と入りかねるこなし惣八、無理に突きやる。それなりに内へ入り

みち　ハイ、御免なされて下さりませ。

長兵　ヤア、お前は隣の黒木屋の嫁御。

トお路、長兵衛を見て

みち　オヽ、怖。

ト門口へ出る。

惣八　モシ／＼、何でござります。

みち　アレ、化け物が居るわいの／＼。

惣八　何を益體もない。晝中に、化物が出て堪るものか。お前も若旦那と同じ事で、鬼瓦が怖い／＼と思うてござるゆゑ、何でもない事を。

ト云ひ〳〵、お路を連れて内へ入る。
長兵　ソリヤ又、手代と入れ替つて來た。
惣八　ハヽア。さてはこの形を見てお路さまが
みち　ソレ、化け物であらうがな。
惣八　こりや御尤もでござります。
ト金六、こなしあつて
金六　オヽ、隣の惣八か。おりや貴樣に、
ト立寄るを、エヘンと惣八、目顔にてお路を教へる。
オヽ、黒木屋の嫁御。手代の惣八。アヽ、聞えた。こりや又、此方の鬼瓦を、取つてくれいと、頼みにござりましたのか。
みち　アイ、左樣でござりますわいな。
重三　コレサ、隣のお二人。聞きや彦三は、此方の家根の鬼瓦を怖がつて、煩うて居やるさうなの。
惣八　ハイ〳〵。それで親旦那も、此お路さんも、それはそれはお心遣ひでござります。
みち　ほんに、どうした事やら、わたしが方の彦三さんが内方の鬼瓦を、怖い〳〵と熱の譫言。それで御無心申しまして、どうぞお取替へなされて下さりませと、たびたびお頼み申しましても、使ひの者の不調法なやら、また申しやうの悪いのか、矢ッ張り屋根に其まゝあるさうにござりますが、御懇ろに致しますお隣同士の事ゆゑ、是非お頼み申したら、まんざらお聞入れの無い事もあるまいし、おれがお頼み申しに行かうと、父樣が申しますれど、御存じの通りお年寄りの事なれば、ナウ、惣八。
惣八　ハイ。それゆゑ大隅名代に、嫁御のお路さんに、わたしが附いて參りましたは、鬼瓦ゆゑ、だん〳〵重る彦三さまの御病氣。どうぞ鬼瓦をお取替へ下さらば、替へ瓦も、其お物入りも、わたしが方から
重三　コレ〳〵、惣八。そりや何云ふのぢや。おれも京中で知られた筒井重三郎。頼むとあれば、何時でも、取替へてやるまいものでもないが、その物入りを其方からするとは、おれをさう未熟な者と見たか。
トむつとするを、金六、わざと
金六　こりや若旦那のが御尤も。マア〳〵、お腹をお立てなされまするな。
ト無理になだめて
惣八、てまへにも似合はぬ。今のやうな事云ふと、おれでも腹が立つ。ナ。
ト重三郎に指さしゝて

むかつかすはまだ早い。ナ。イヤサ、早う瓦を取つて欲しくば、兎角氣の立たぬやうに、ナア、お路さん。

みち　さうでござります。今のは惣八が不調法、お免しなされて下さりませ。兎角使ひでは、あゝいふ間違ひがござりますゆゑ。

金六　嫁御が見えてのお頼みなれば、こりや、若旦那、料簡して鬼瓦を、取つてやつたがようござります。

久三　もう京中で、此方の瓦の事が、評判になつたぞえ。

長兵　さうであらう。鬼瓦も取つてやつたがよし、おれがこの裝束も取つて置かう。

ト面ぼうを脱ぎ、竹具足を取る。重三郎もこなしあつて

重三　そんならこの樣子を、ソレ、皆の者。

長久　マア、阿母樣へ。

ト奥より

たか　イヽヤ、滅多に鬼瓦を取る事はならぬぞ。

ト合ひ方になり、お高、莨盆提げて出て來る。

重三　そんなら、母者人、最前からの樣子を

たか　殘らず聞いたわいなう。

みち　これは〳〵、阿母樣。この間はお目にかゝりませぬが、あなたにもお變りなう、御無事でおめでたうござります。

たか　隣の黒木屋の嫁御お路さん。聞きや、彦三どのの御病氣とやら、ほんに笑止な事でござんすなア。

みち　有り難うござんす。彦三さまの御病氣といふも、只怖い〳〵と、内方の鬼瓦を

たか　取つてくれいと、節々のお頼みなれば

重三　申し、母者人、どうぞ鬼瓦を

皆々　取つておやりなされまするか。

たか　イヽヤ、取られぬわいなう。

みち　エヽ。

たか　サア、なんぼ懇ろな隣同士の黒木屋でも、鬼瓦はおろか、平瓦一枚でも取られぬ譯は、過ぎ逝かれし夫重右衞門どの、若い時分から身の油を絞り、稼ぎ出して、いま京中で筒井と呼ばれる程に、組立てさしやんした、この家屋敷に土藏まで、重三が悴、孫の代まで、取繕ろはぬやうにと、心を盡して丈夫に建てた檜造り。如何に夫がこの世にござらぬとて、重三は元より女子のわしが、自由がましう、ツイ鬼瓦でも取替へられませうぞ。朝夕拜む佛壇の、お位牌の前へ、どうも云ひ譯がござらぬわ

いなう。

重三　でも、彦三が病氣とあれば

惣八　親旦那のお案じ、家内の騷動。

みち　折入つてのお頼み、どうぞ、申し。

たか　サア、水臭い事なれど、隣の息子彦三どのの病氣は、此方の悴重三が、煩らふやうには思ひませぬ。

みち　そんなら、どのやうにお頼み申しても

たか　例へ重三が承知しても、わしが不承知。この様子を大隅どのへ、よろしう申して下さんせ。

みち　惣八。こりやマア、どうしたらよからうぞいなう。

ト當惑のこなし。

惣八　とんとこれで解つた。お路さん。百萬陀羅頼んでも、埒は明きませぬ。早う歸つてこの様子を、親旦那へ。サアサア、早う歸らつしやりませ。

みち　ぢやと云うて、それでも。

惣八　ハテ、もうあみは上がつてござりますわいの。

長兵　あみがあがつたとは、病人には縁起の惡い。

金六　ハテ、餘所の事を構ひはない。

惣八　サア、ござりませと云ふに。

ト　お路を無理に引立てる。お路、思ひ入れあつて、しなしなと行かうとする。此うちお高、莨のんで居て

たか　お路さん。待たしやんせ。

みち　エ。そんなら聞き屆けて

たか　イヤ、瓦の事ぢやござんせぬ。病氣とある彦三どのへ、重三が母のこの高が、お見舞ひを進せませう。

ト合ひ方になり、お高、縁先にある鉢植を取つて來て

コレ、この鉢植はこの間、六角堂の御縁日に參詣して、求めて歸つた觀音草。尤も秋の物なれど、春珍らしう葉の茂り、名さへ大悲の御名號。鬼瓦は下ろさずとも、この鉢植を見て本腹あるやうに、祈誓を掛ける觀音草。わたしが志しと、親子の衆に、とつくり見せて下さんせ。

ト鉢植を渡す。お路、取つて

みち　何かは知らず、觀音草とやらのこの鉢植を、阿母様のお見舞ひと、父さんや彦三さんに。

たか　折角ござんして、何の風情も。

みち　有り難うござります。

たか　ようござんしたえ。

ト合ひ方になり、金六、惣八へ何か目顔でこなしある。惣八、しか〴〵あつて、お路、鉢植を取つて向うへ入る。金六、お高が手前こなしあつて

金六　隣の黒木屋も、しつから瓦の事を頼みに來る程にの。
重三　イヤ〳〵、今の母者人のお詞では、もう頼みにも來まい。
たか　コレ、重三。人の事ではない。其方も灸でも据ゑて養生して、必らず煩はぬやうにしてたもや。
重三　母者人とした事が、隣の彥三と違ひ、此方は鬼瓦。
長兵　さうぢや。睨み附けてござりませ。
たか　長兵衞が何を云ふやら。ほんに最前奧の圍ひに、釜が沸つてあつた。重三、一服點てゝたもらぬか。
重三　畏まりました。久三、水屋に水が無かつた。汲んで置け。
久三　ハイ〳〵、汲んで持つて參りませう。
七助　ドレ、おれも奧へ行かうか。
たか　年寄れば、外の物より茶が樂しみ。
　ト向うをちよつと見て
子を持つた親心。隣の大隅どのは我が子の煩ひ。茶どころでもあるまい。それを思へば。
　ト重三郎を見て、思ひ入れあつて
わしは果報。ア、、南無阿彌陀佛。
　ト唄になり、お高、七助、久三、共に奧へ入る。重三郎、金六、長兵衞殘り

長兵　モシ、若旦那。お前もちやつと圍ひへござりませ。
重三　母のお望み。面白うない茶を點てずばなるまい。おりや矢ツ張り寶藏院流の槍を稽古したいが。
長兵　ナウ、否やの〳〵。稽古ならお一人。
重三　エ、、意氣地のない奴ではあるわい。
　ト立ち上がりて、こなしあつて、腹を抱へ、「アイタ、タ、、」ト又下に居る。
長兵　モシ。なんとなされました。
重三　サア。今朝から稽古に凝つた加減か、胸先から脇腹の方へ、何やらさし込んで。アイタ、、、。
長兵　ドレ、おれが擦つてあげませう。
　ト後へ廻り擦る。此うち金六、片脇へ寄つて思案して居る。この時、フツと思ひ入れあつて
金六　オ、、さうぢや。とんと忘れて居た。蟲がかぶるとは幸ひ。
　ト仰山に手を打つ。長兵衞、恟りして
長兵　エ、、金六どの、何ぢや。仰山に手を打つて、恟りするわいの。
重三　それに、おれが蟲のかぶるを、幸ひとは。

金六　エ、。……サア、幸ひと云うたは。オ、、若旦那若旦那。あなたがお腹が痛むなら、服まさう服まさうと思うて、調へて置いた結構なお藥がござります。それをあげうと思うて、それで幸ひと申しました。

重三　そんなら、結構な藥を持つて居るか。

金六　先づ、第一は男の心痛、積、つかへ、何でも腹一通りの妙藥。即ち爰に。

ト云ひ〱、紙入れより、序幕の毒藥を出して

この藥を白湯に掻き立てゝあがりますが最後、直ぐに、サア……直ぐに驗が見えて、さつぱりとよくなります。それは受合ひ。眼前わたしが試みさせて置いた藥でござります。

重三　さういふ結構な藥なら、忝ない、早う服まうわい。

金六　あがりまするか。それを待つて居りました。

トしてやつたといふこなしにて

コリヤ〱長兵衞。お白湯を早う、酌んでおぢや〱。

長兵　合點ぢや〱。

ト茶碗へ湯を注ぎ、持つて來る

金六　さらば此お藥を。

ト茶碗へ藥を入れようとして、思ひ入れあつて、袖にて鼻を押へ、茶碗へあけ、掻き立て、こなしあつて、重三郎が側へ持つて來て

サア〱、一口にグツとあがりませ。

ト重三郎、茶碗を取上げ

重三　結構な藥とあるからは、直ぐに利くであらう。

ト云ひながらグツと服む。

金六　長兵衞々々々。お脊中を擦れ。

長兵　心得た。

トまた脊中を擦る。金六、思ひ入れあつて、重三郎が顏を眺め、もう毒が廻つて來るかと喜ぶこなしにて

金六　モシ〱、若旦那。お心持ちは、どのやうにござりまするな。

重三　サア、心持ちは。どうやら脇腹がキリ〱と。アイタ、、、、。

ト脇腹を押へてこなしある。金六喜び

金六　そりやこそ〱。

重三　ハテ、無性に痛むが。

金六　その筈ぢや。祕傳の毒藥。

長兵　ヤア、なんぢや、毒とは。

金六　イヤサ。例へ毒でも、立ちどころに解す、解毒の藥

ぢやと云ふ事でござります。

ト重三郎悧り、こなしあつて、

重三　コリヤ〳〵、長兵衞。痛んだ筈ぢや。これを見てござれ。

ト懐より針を出す。長兵衞、取つて

長兵　こりや絹針ぢやが、どうしてこれが

重三　サア、襦袢の脇の縫ひ目に入れてあつた。それをやうやう取出した。

長兵　滅相な。針を殘して置くやうな事があるものか。

ト金六、合點のゆかぬこなしあつて

金六　モシ〳〵、若旦那。お前、お心持ちは

重三　さつぱりと快くなつた。

金六　エヽ。あのキリ〳〵脇腹が痛むと仰しやつたは。

重三　サア、痛い筈ぢや。襦袢の縫ひ目に針があつたもの。

金六　アノ針で。……面妖な。その筈ではないが。

長兵　どうでも、あのお針めは、そゝつかしい奴ぢや。

ト此うち金六、いろ〳〵思ひ入れあつて

金六　この間大枚の金を出して今の……サア、薬が

重三　結構な薬ぢや。痛む胸がサツと開けた。

金六　彼奴はマア、どうせう知らぬ。

長兵　よい薬ぢやげな。嗜みに持つて居やんせ。

金六　なんのよい薬。モシ、若旦那。

重三　ヤア。

金六　お前はマア、高い薬を、よく服まつしやりましたな。

ト恨めしさうに云ふ。

重三　金六。其方の庇で氣色が快くなつた。これから母者人へ茶を點てゝ進ぜう。長兵衞、われも奥へ來い。

ト唄になり、重三郎、長兵衞を連れて奥へ入る。金六一人殘り、呆れた顔にて

金六　面妖な。この間祇園で試みさした時にはヒリ〳〵。それに今のは針。思ひ廻せば、どうでも宥宅めが、おれをいかさまに……彼奴を捕まへて、といふ宥宅めはもうてこねるし、こりやマアなんの事ぢや。

ト合ひ方にて、思ひ入れあつて

かねて、この筒井の家を丸呑みにして、ぞツこん惚れて居る半兵衞が女房おりくを、無理に引取つて、おれは旦那株。時に謀し合せた隣の惣八。何かの手段を首尾ようやりつけ、黒木屋の財産も、おれがしてやるつもり。最前目顔で知らせて置いたが、隣の惣八が、なんぞ便りをしさうなものぢやが。

ト橋がゝりの方の黒塀を見る。塀の中より石を括りつけた封じ文をバツタリと投げ込む。金六「さては」と右の状を取上げ、上紙を取つて、中の状を出して開き
「一筆申し上げまゐらせ候、今宵人目を忍び、彼の事を首尾よくなし下され候はゞ、御嬉しく存じまゐらせ候、何事も阿母様へ知れ申さず候ふやう、兎角申し合せし通り、此方の心の程御察し下され、よろしく願ひ上げまゐらせ候、何事もお目もじの上、先づはこの文ひそかに御覧、めでたくかしこ。筒井重三郎さまへ。路より。」

ト読み終り

こりや隣の嫁御の直筆。これでは何にも知れぬ。

ト云ひ〳〵、封じた白紙を取上げ

白紙のこの封じ。酒といふ字を一字書いて置いたは……エヽ、こりやおれが教へて置いた、酒で書いて干上げれば、この通りの白紙。これを又現はす時は。さうぢや。

ト火鉢を取つて来て、右の封じ文に附けし紙をあぶると、赤く文字現はれる。金六これを見て

「かねて云ひ合せし通り、其方の息子と此方の嫁と、不義して居る體に見せ、山を明けて両方に、物云ひを附け、こなたとおれと望みを叶へんと望むところ、今日幸ひ鬼瓦の事に附き、連れて参り、固意地な阿母を幸ひ、重三を頼み、鬼瓦を取らすやうにしてあれば、ちよつと頼みの文と、我れら文言を好み、騙して書かせしこの文にて、其方をよろしく、此方は先達ての重三が似せ筆の手紙を、彦三が先づ寝所へ落し候へば、氣遣ひなく萬事手番ひぬかりなく、御返事は酒にて、待ち入り候ふ。」

ト読みしまひ、思ひ入れあつて

彼奴も粋ぢや。互ひの宛名書かずに、味をやり居つた。そんならこの文で此方の息子を……ムウ。よし〳〵。此方もぬからず、隣へ返事は。

ト銚子鍋、硯箱を取つて来て

この酒で、さらば返事を、書いてやらうか。

ト二重舞臺へ上がり、紙を廣げ、銚子にて筆をしめし、酒にて返事を書く。この見得、チヨン〳〵にて、返し道具ぶん廻す。これより隣の心。懸け板に仕掛けあつて、これより黒木屋の場と返しにて出る。造り物同じく二重舞臺。見附け世話襖、上の方、折り廻し障子屋體。いつもの所に門口。幕明きに下の方にあつた黒塀、上の方へ直り、梅の樹木見事に、枝は樂

屋の方へ出てあり。この上の高欄に切り棲、屋根に丸に大の字の棟瓦よろしく。橋がゝりの下座、後へ寄せて、筒井の門口。これより出入りあり。すべて黒木屋の模様にて、てんつゝ、バタ〳〵にて、道具とまる。

ト牛飼ひ五郎吉、鉢卷き、大肌脱ぎ、鉞を振上げ、駈け出さうとするを、惣八、松兵衞、手代の形、その外二三人の手代留めて居る。二重舞臺の上に、黒木屋大隅、お路が持つて來た觀音草の鉢植を前に置き、思案して居る。

五郎　コレサ、惣八。皆の衆。留めずと放した〳〵。

松兵　コレ、待て、五郎吉。親旦那の云ひつけもないに、われが駈け出す事はない。

惣八　さうぢや。松兵衞が云ふ通り、今の先にお路さまを連れて、この惣八が行て頼んでも、隣の阿母が固意地で、取つてくれぬ鬼瓦。それを出入りの牛飼ひぐらゐのわれが行ても、隣で滅多に得心はせぬわいやい。

五郎　ハテ、得心せにやア鬼瓦どころではない。コレ、この鉞で、筒井の屋體骨を打ち毀すのだ。留めずと退かつしやい。

皆々　イヤ〳〵、待てと云ふに。

五郎　なにを。

ト皆々を振り切り、擲り退け、立廻りに行かうとするを、二重舞臺より

大隅　五郎吉、待て。ソレ、皆の者、留めい。

惣八　ソレ、親旦那の仰せぢやぞ。

皆々　五郎吉、待たぬか。

トこれにて、こなしあつて

五郎　親旦那樣、これまで代々、八瀨、大原から、黑木を附けて牛曳いて來る、お出入りの五郎吉。樣子を聞けば、隣の筒井の鬼瓦ゆゑに、若旦那の御病氣、瓦を下ろしてくれいとお頼みあつても、聞屆けねば、かけかまはぬ私しが、隣の家を打ち毀しても、瓦を取らせて見せませう。

大隅　オヽ、殊勝らしい。親の代から出入りするよしみに、悴が事を思うて、其方が志し過分なが、いま毀すのなんのと荒立てゝは、町の沙汰になるも氣の毒。隣も知れた筒井といふ呉服屋。此方は大内へ黑木を入れる、お納戸御用。殊に、梅園家へはお出入り、それでおれは大隅と受領の身の上なれば、兎角物事愼んで、穩便にせにやな

らぬ家柄ぢやわい。
五郎　ぢやと云うて、若旦那樣の御病氣が、段々重るぢやござりませぬか。
大隅　サア、それゆゑにこそ悴を思ふ、心は闇にあらねども、邪險な隣の阿母。併し、病氣見舞ひと譽のお路が、持つて戻つた、この鉢植は觀音草。これを送つた心が、まだどうも解せぬ。
　トまた鉢植を見て、思案するうち
惣八　コリヤ、五郎吉、若旦那の御病氣を、ちよこざいなわれが工面し、この黑木屋の内には、われより年嵩な、通ひ番頭の半兵衞といひ、重手代のこの惣八も居る。それに一人も智慧の無い者が寄り合うて居るやうに、意外な牛飼ひめ。似合うたやうに、キリ〱牛を曳いて歸り居らう。
五郎　イヤ、歸らぬ。番頭の半兵衞さまは知れた事、この家の白鼠。外の奴等は黑鼠。日頃から若旦那を煽てあげ共に狂ふ斑ら鼠の大鼠め。おッつけ猫に咬まれ居らうと思うて、にやんまみだぶつ。
松兵　何を馬鹿にしさらす丁稚め。おのれ、引出して
　トかゝるを、五郎吉、立廻つて見事に取つて投げ
五郎　ほてゝんがうすると、うぬを
　ト鉞を振り上げる。
松兵　コレ〱、それで打つて堪るものか。
惣八　おのれ、マア
　ト寄らうとするを
五郎　どうぞするのか。
　トまた鉞を振り上げる。惣八こなしあつて
惣八　ハテ、この京に似合はぬ、荒ッぽい若衆めぢやなア。
　ト控へる。障子屋體、バタ〱にて、彦三、搔卷にて黑の鉢卷きをして
彦三　恐ろしい〱。鬼瓦が恐ろしい。ちやつと逃げねばならぬ。退いてくれ〱。
みち　マア〱、お待ちなされませいなア。
彦三　どうも爰には居られぬ。
　ト云ひ〱狂ひ出るを、お路、岩松、兩人にて、介抱しながら出て來る。大隅も立ちあがり
大隅　ヤア又、悴が
みち　熱が出ましたわいなア。
惣八　もう死なつしやるかな。
五郎　何を緣起の惡い。

ト惣八を拂りのけろ。
岩松　モシ、若旦那。彦三さま。
みち　お心を鎮めて下さんせいな。
大隅　岩松よ。ちやつと藥を取つて來いやい。
岩松　アイ〳〵。
ト奥へ入る。皆々介抱する。彦三は大隅を見て
彦三　申し、親仁樣、お路、五郎吉か。おりやモウ隣の鬼瓦が、恐ろしうて〳〵、どうもならぬ。それでこの内に居られぬ〳〵。
大隅　ソレ、留めてくれ〳〵。
ト彦三、立ちあがるを、五郎吉留めて
五郎　しつかりと留めて居ります。
みち　モシ、彦三さん。氣を慥かに持つて下さんせいなア。
彦三　サア、氣は慥かに持つては居るが、隣の鬼瓦が睨みつけて居ると思へば、目先へちらついて、どこぞへ逃げたい逃げたい。
惣八　その逃げたい時は、祇園町の彼の處へ。
五郎　又ちよこざいな。
トきつとなるを
惣八　噓ではなし。
トこなしあつて控へろ。奥より岩松、藥を持つて出て來り
岩松　サア〳〵、お藥を溫めました。ちやつとこれを。
みち　待ちかねたわいなア。
ト茶碗を取つて
サア〳〵、申し、マア、お藥を。
彦三　イヤ〳〵、藥ならよしてたも。
大隅　ハテ、悴、おれが氣休めに。
五郎　一口でもあがりませ。
ト彦三服まぬを、皆々勸めるゆゑ是非なく
彦三　そんなら。
トぐつと服む。しか〴〵あつて
みち　彦三さん。どうでござんすえ。
彦三　オヽ。これでどうやら……人心地になつたやうな。
大隅　ア、嬉しや。
ト皆々安堵の思ひ入れ。てんつゝにて、向うより半兵衛、着附け、羽織、素燒の猿の人形を持つて出て來て、内へ入る。
松兵　これは番頭樣。
惣八　ほんに半兵衛どの、こなたは今來たか。

半兵　今日はちつと用があつて、大佛邊へ行つての歸りがけ……これは親旦那、見れば、若旦那も端近う。先づ、御容體はどのやうにござりますな。

大隅　相も變らず、隣の鬼瓦の事ばつかり、云うて居るわいの。

みち　最前もわしが頼みに行ても、聞入れて下さんせぬわいの。

半兵　ムウ。左様なら、隣は矢ツ張り不承知で。

五郎　番頭さん。こりやお前、御思案はござりませぬかえ。

半兵　サア、たゞ鬼瓦を怖がつての、若旦那の御病氣。隣を頼んでも、瓦を取替へぬとあるゆゑ。

　ト右の猿を見せ

これは若旦那へ、御病中のお慰みにもと、土細工なれど鬼瓦よりは殊勝らしい親子猿。モシ、お路さま、これを。

　トお路に渡す。お路、取って

みち　ほんに、可愛らしい、子猿を負うて居る親猿。半兵衛どのの志し。彦三さま、御覽じませ。

　ト彦三の前へ置く。彦三、取つて見て

彦三　オヽ、成る程、同じ土でも、こりや鬼瓦よりは違うた物。面白いわいの。

　ト餘念なく見て居るこなし。半兵衛、思ひ入れあつて

半兵　先づ、お氣に入つて、私しも喜びます。

　トこなしある。唄になり、向うより桂佐市、繼ぎ上下、御所侍ひにて、一僕連れて出て、「ソレ」と家來に案内させる。

家來　頼みませう。

惣八　どなたでござります。

　ト出迎ふ。

佐市　イヤ、桂佐市でござる。大隅在宿かな。

　ト内へ入る。大隅、佐市を見て

大隅　これは〳〵、佐市さま、よう入らつしやりました。先づ〳〵、これへ。

佐市　然らば、皆免しやれ。

　トずつと上へ通る。惣八、莨盆を持つて出て

惣八　思ひがけない、佐市さまのお出で。先づ、お莨を召上がりませ。

佐市　イヤ、構やるな〳〵。

　ト半兵衛を見て

番頭半兵衛。別條無いの。

半兵　これは、有り難うござります。

佐市　その外御家内にも……イヤ、承れば、子息彦三どのには、病氣とやら噂があるが、左樣か。
大隅　御覽の通り、悴が病氣。それゆゑ御殿へも上がりませぬ。その段、眞平御免下さりませう。
佐市　イヤ〳〵、當黑木屋親子は、代々御主人梅園中將家へお出入りなれば、御所にも外ならず思し召すに附き、此たび姫君鎌倉へ御婚禮あれば、世に珍らしき調度を御持參。それゆゑに、先達て、彦三に仰せつけられし、紫式部若菜の硯吟味の儀、五日以前に、當所にて買ひ求めしとあるが、それより何の沙汰も聞かず。最早近々、鎌倉へお輿入れあれば、いよ〳〵右の硯、手に入りあらば今日受取り歸らん爲、佐市、わざ〳〵參つてござる。
大隅　成る程、その硯の儀は、悴彦三が働らきにて、藪の下の道具屋にて、三百兩にて買ひ求めると申したゆゑ、此方の兩替へ、振り手形を遣はしましたゆゑ、相濟んだでござりませう。何時でもお渡し申しませう。
佐市　然らば兩替への金子三百兩、持參いたした。
ト懐中より財布入りの金を出して、大隅に渡し
金子改めて、受取り召され。
大隅　お出入りのお家。それには及びませぬ。

佐市　イヤ〳〵、別御用なれば苦しうない。是非受取り召され。
大隅　左樣なれば、三百兩は、お戴き申し上げます。
ト右の金子を受取る。惣八これを見て、思ひ入れある。
佐市　この上は一刻も早く、右の硯、受取り申さうか。
大隅　大方藏に仕舞つてあるでござりませう。いつでもお渡し申しませう。ソレ、嫁女。この樣子を、ちやつと彦三に。
みち　アイ〳〵。モシ、若菜の硯を佐市さまが、お受取りにお出でなされましたが、藏のどこにござりますえ。
ト彦三泪ぐみ、物云はずに居る。
但し、あなたの書棚へおしまひなされたかえ。申し、大切なお硯は、どこにござりまするぞいなア。
ト彦三、矢張り物云はずに、ハツと心意氣ある。惣八幸ひと側へ行て
惣八　モシ、若旦那。お前が受取らつしやりましたお硯はどこにござりまするな。……これはしたり、なぜ物を云はつしやりませぬぞ。
ト大隅も側へ寄り
大隅　悴、どうぢや。

みち　モシ、彦三さま。
五郎　又お心持ちが、悪うござりまするか。
　トこれにて彦三、ムツクと起きあがり
彦三　アレ〳〵、また隣の鬼瓦が來るわいの。こりや堪らぬ。逃してくれ〳〵。
　ト駈け出さうとするを、それはト皆々留める。彦三振り切り〳〵怖い〳〵と出ようとするを、半兵衛皆々を押退け、彦三を抱き留め
半兵　コレ、若旦那、大事ござりませぬ。マア〳〵、お待ちなされませ。
彦三　イエ〳〵、それでも鬼瓦が。
　ト振り切るを、しつかりと留めて
半兵　ハテ、硯の事は、イヤサ、硯の事をお尋ね申してもこの大熱では、なか〳〵申されますまい。若旦那、大事ござりませぬ。何もかもこの半兵衛が、イヤサ、この半兵衛がとつくりとナ。
　ト彦三と兩方へかけて
サア、御介抱申して、熱が覺めたら硯の事を申しませうほどに、あまりふわそわせず、マア〳〵、ぢつとして、落ちついてござりませ。

　ト始終彦三へかけて、ザツと下に置く。
佐市　イカサマ、見受けた様子が彦三の病氣、こりや大隅はじめ家内の心配。
大隅　お詞の通り、私しが心遣ひ、御推量下さりませ。先づ佐市さまには、暫しの間
佐市　奥へ參つて半兵衛が返答、相待ち申さう。
半兵　すりや、硯の儀を
佐市　とつくりと尋ねて、身共へ
惣八　イヤ、合點のゆかぬ若旦那。
　ト彦三へかゝるを、半兵衛引退して
半兵　ハテ、この家を取裁く番頭が居る。惣八、番頭の采配はまだ早い。
惣八　ヤ。
半兵　扣へて居やれサ。イヤ、お路さま、佐市さまを奥の間へ。
みち　左樣なれば、佐市さま。
佐市　大隅もろとも。
大隅　兎角悴が事を
半兵　お案じなくと、先づ奥へ。
五郎　モシ、半兵衛さま。

半兵　ござりませ。
ト唄になり、お路案内にて、佐市、大隅、彦三へ思ひ入れあつて、惣八、松兵衛、岩松、五郎吉よろしくこなしあつて入る。跡は半兵衛、彦三殘る。彈き流しの合ひ方にて
半兵　若旦那、お心は鎭まりましたか。
ト彦三こなしあつて
彦三　半兵衛。
ト半兵衛の顏をキッと見て
この彦三はノ。
ト樣子を云はうとして、云ひかれるこなしあつて
ひよんな病に、取りつかれたわいなう。
ト少し愁ひの心。
半兵　サア、その樣子は私しも。
ト思ひ入れあつて、奥口へ氣をつけ
イヤ、醫者でなければ病根は存じませぬが、モシ、若旦那、病は氣からと申す事もござりますれば、何も其やうに、キナ〳〵と思はつしやりますな。及ばずながら、この半兵衛が居りまする。モシ。……高うは云はれませぬが、お前が云ひ交してござる、祇園町の小吟どのは、私しが爲には、正木半兵衛と云うた以前、侍ひの時の故主の娘御、大恩あれば、粗略にはならぬお人。殊に、今のお主といふは、あなた御親子。いづれ大切にせねばならぬ私しなれば、例へ命は捨てゝも。ア、イヤ〳〵、さう云ふ事もござりますまい。若旦那、御病氣のあなたに、此やうな無駄な事を申さうよりは、ソレ、最前、私しがお目にかけた、土細工の猿を御覽じましたか。
ト彦三、以前の猿を取上げ
彦三　アノ、この猿の事か。
半兵　サア、その親子猿は、大佛から歸りに、五條坂の人形見世に出てあつたを、あなたへお目にかけうと思うて値段を聞いて、とつくりと見たところが、尤も細工はよけれど、ソレ、御覽じませ、親猿の上に子猿が肩車、何ぼう畜生ぢやというて、この猿は不孝な奴と思ふから、細工人の人形屋へ、如何にしても親の肩へ子が乘つて居るは不孝者。この子猿を離して貰つてくれまいかと申したれば、その人形屋が、成る程と、矢庭に鐵鎚を持つて來て、子猿を離しませうと、既に打ちはなさうとして、申しまするは、イヤ〳〵、なんぼ親に不孝な悴でも、こりや一緒に此やうに、作りあげた燒き物ゆゑ、いま子猿

を鐵鎚で叩き離せば、親猿も滿足にはあるまい。定めて一緒に毀れるであらう。こりや此まゝに求めてくれい、と云うたは、なんと、尤もぢやござりませぬか。

彦三　成る程、その子猿を取らうとしたら、親猿も毀れさうなもの。

半兵　それぢやに依つて若旦那、イヤサ、若旦那。あなたのお慰みに、買つて戻つたその猿を御覽じて

彦三　病氣のつれ〴〵、心の慰み、

半兵　隣りの家の鬼瓦よりは、四條河原で

彦三　ヤ。

半兵　慥かに醫者を、イヤサ、醫者の見立てよりは、素人のこの半兵衛。

彦三　おれが病の

半兵　ソレ、根本の療治から、取鎭めて癒すのが、番頭の私しが配劑。

彦三　半兵衛、其方の志しの

半兵　その猿を毀さぬやうに

彦三　もし毀せば、この猿も、彦三も元の土となる。

半兵　サア、それが否さに。マア、とつくりと、御養生をなされませ。

ト唄になり、彦三思ひ入れあつて、猿を持つて奥へ入る。半兵衛、殘り、こなしあつて、思案するところへ思ひがけなく坂塀の彼方より、石の附いた白紙の封じ文、半兵衛が前へバッタリと音して落ちる。

思ひがけない。こりや何ぢや。

ト云ひ〳〵取上げ見て

見れば、何にも書かぬ封じ文。どこから投げ込んだか知らぬ。

ト封を切り、中を見て

矢ツ張りこれも白紙。

ト上の方の塀を見て

あの板塀の彼方は、隣りの筒井。

トこの時、此方の家根の瓦を見て

アレ、此方の棟瓦に、丸に大の字の印しと向ひ合うて居る。

ト臆病口の方を見る心にて

隣りの筒井の鬼瓦、あれが若旦那の病と世間で云へど

ト障子屋體を見て

まだお若いゆゑに

ト思ひ入れあつて

イヤ、それよりはこの白紙。

トよく〳〵見て

ムウ。とつくり見れば、こりや「酒」といふ字が一字書いてある。……エヽ聞えた。酒で文字を書いて、乾かし見れば、矢ッ張り白紙。これを又火で炙れば、きつぱりと、書いた文字が現はれるといふ事は、大概人も知つたあざとい事。そんならこれも酒で書いて。何にもせよ。

ト火鉢を取つて來て、右の白紙の狀を炙る。仕掛けにて吹替へにて、白紙へ文字現はれる。

さてこそ、推量の通り、現はれしこの文字。……ナニナニ。「先程の娘のお路が、鬼瓦の文を色事の文の作意。どうも〳〵、天晴れ感心いたし候ふ。然れば此方の息子重三郎に、右の文を見せ、大山を擧げ申すべく候ふ。先達て渡し置く似せ筆の狀にて、彥三に腹を立てさせ、其方家内を騷動さすること肝要に御座候ふ。委細は兼ねて謀し合せし通り、お取計らひ下さるべく候ふ。先づは御返事までに、早々。」この筆は。

トとつくり讀んで見て

こりやコレ、互ひの宛名を書かぬは、まさかの時の用心。棟續きに二人の惡者。大方知れだ白紙の手紙。山を擧げるとあれば、その時丁度

ト右の書き物を卷き、懷へ入れ

こりや好い物が、手に入つたわいの。

トこなしある所へ、手代一人、風呂敷包みを持つて、走り出て來て

手代　黑木屋さまは內方ぢやな。お誂らへの鍾馗の瓦を、持つて參りました。

半兵　オイ、大竹屋からごんしたの。

手代　左樣でござります。番頭の半兵衞さまに渡せと、親方が申し附けました。

半兵　半兵衞はおれぢやが、早う出來た。ドレ〳〵。

ト風呂敷を開き、鍾馗の瓦を出して

思うたより恰好がよい。慥かに受取つた。

手代　お渡し申したら、もうお暇申します。

半兵　お大儀々々。

ト手代は引返して向うへ入る。此うち始終合ひ方。半兵衞こなしあるところへ、奥より大隅、佐市、連れ立ち、出て來て

大隅　半兵衞、佐市さまへ先程の御返事を。

佐市　此方も御婚禮のお支度、萬端に心急きなれば、硯の

半兵　在所、彦三にとツくと聞き
成る程、その硯の儀は、
　ト思ひ入れあつて
サア、まだ若旦那には御病氣、しかと致しませねば、こりや斯うなされて下さりませ。改めてこの半兵衞めが、佐市さまへのお願ひ。長うとも申しますまい。何卒いま三日、お待ち下されますまいか。三日のうちには、是非若旦那も御本腹あつて、右の硯を、キツと御所へ、持參いたさせませう。

佐市　ハテ、思ひがけない、三日の日延べとは。

大隅　半兵衞、合點がゆかぬ。そんなら、倅は、大切な硯を、どうぞしたか。

半兵　イヤ、左樣ではござりませぬ。まだ若旦那の口から承りませねど、硯は慥かに
　ト思ひ入れあつて
イヤサ、慥かに藪の下の道具屋が、所持して居たを買ひ求めて、持つて居ますれど、……サア、何を云ふにも……御病氣ゆゑ、とんと事が解りませぬ。それゆゑに、私しが

佐市　三日延せば

大隅　倅は本腹、硯をお渡し申すとは。

半兵　これ御覽じませ。
　ト右の鍾馗の瓦を取つて來て、前へ置く。

佐市　こりや、珍らしい鍾馗の瓦を、棟瓦にとは。

大隅　さては倅が鬼瓦を、怖がる病氣ゆゑ。

半兵　隣を頼んでも、下ろさぬとあるゆゑ、そこで私しが思ひ附いたる、この鍾馗の棟瓦を、此方の屋根へ上げれば、鬼に勝つは鍾馗。これでなんと若旦那の御病氣は、御本腹ありさうなものぢやござりませぬか。

佐市　イカサマ、世には、呪ひといふこともあれば、これも理の當然。

大隅　兎角親方思ひの半兵衞が計らひ。私しも現在倅の事なれば、佐市さまへ共々にお願ひ。

佐市　半兵衞、然らば三日のうちに

半兵　キツと硯を、差上げませう。

佐市　お出入りなれば、外ならぬ大隅親子、身が執成し致して、御所はよろしう三日の日延べ、御承引あるやうに申し上げてくれう。

半兵　エヽ、有り難うござります。

佐市　必らず日限相違なきやう。最早身共は

大隅　お歸りなされまするか。
佐市　お輿入れ前、御用も繁多なれば。
半兵　御苦勞に存じまする。
佐市　半兵衞、キッと詞を番うたぞ。大隅、さらば。

ト唄になり、佐市家來を連れ、こなしあつて向うへ入る。跡に大隅、とつおいつ、いろ〱思ひ入れあつて、半兵衞が側へ行つて

大隅　半兵衞、どうも合點がゆかぬ悴が病。殊に、大切な硯の事も。
半兵　ハテ、何もお案じなさる事はござりませぬ。皆私しが引受けて、最早若旦那の御病氣も、御本腹あるやうに思ひ附いたるこの瓦。物は例し、早く屋根へ上げるやうに。
大隅　成る程、悴が本腹とあれば、心嬉しい。皆に云ひつけて、上げさゝう。兎角悴が身の上を、半兵衞、其方に。
半兵　ハテ、これまで御恩にあづかり、いま別家して居る私し。それに如才は。

トこなしあつて

マア、何かは奧で、とつくりと。
大隅　そんなら、其方も。
半兵　マア、お出でなされませ。

ト唄になり、大隅、半兵衞を連れて奧へ入る。引違へて惣八、松兵衞を連れて出て來て

松兵　コレ、惣八どの、最前佐市さまが持つて來た金は。
惣八　コレ。

ト最前の財布を出し

まんまとせしめて來た。この上は隣の金六と、云ひ合せた通り。
松兵　何もかも手番ひよう行た上では。
惣八　松兵衞、われも番頭ぢや。喜べ〱。
松兵　そりや忝ない。盜んだその金、見附けられぬやうに。
惣八　サア、どこぞ新らしい、好い隱し所が、ありさうなものぢやが。

ト此うち奧にて

五郎　ハイ〱、畏まりました。

ト云ひ〱五郎吉出る。惣八、右の財布をちやつと隱し

惣八　五郎吉、畏まりましたとは何ぢや。
五郎　こなさん達も云ひつけられた。鍾馗の瓦を早う取替へいと仰しやつてぢや。それでおれも手傳ひに來た。

ト松兵衞、鐘馗の瓦を取つて來て

松兵　取替へる瓦は、大方これであらう。エヽ、面倒な。屋根へ上がらずばなるまい。

五郎　若旦那のお爲ぢや。早う上がつたがよい。

ト惣八、思ひ入れあつて

惣八　よし〳〵。おれが屋根へ上がつてやらう。五郎吉、梯子を持つて來い。

五郎　合點ぢや。

ト梯子を取つて來る。惣八、板塀へ掛け、屋根へ上る。松兵衞、五郎吉、瓦を持つて行く。此うち三人捨ぜりふにて、五郎吉も梯子半ばより瓦を差出す。惣八、先の瓦を取るうち、屋根にて財布を落す。

五郎　惣八どの、落したのは何ぢや。

惣八　イヤ、何でもない。

ト瓦の後へちやつと押し込み

サア、其方の瓦ぢや。

五郎　ソレ、鐘馗。

ト渡す。惣八受取り、棟瓦の處へ押し附け、こなしあつて

惣八　どうぢや、恰好は。

松兵　大分よい。下地よりは目に立つて

五惣　隣りの鬼瓦を睨み返して居る鐘馗大臣。若旦那の御本復の瑞相ぢや。

ト此うち惣八、梯子より下り來て

惣八　あゝして置けば、滅多に人の氣の附く氣遣ひがなくてよいワ。

五松　よいとは何が。

惣八　イヤ、瓦の恰好が。

松兵　そんなら旦那に

五郎　お知らせ申さうか。

惣八　ドレ、おれも一緒に行かうか。

ト合ひ方になり、惣八、五郎吉こなしあつて、松兵衞附いて奥へ入る。障子屋體より彦三、腹の立つたこなしにて出て來る。これをお路、なだめ〳〵出て來て

みち　コレイナア、彦三さん、其やうに腹立てずとも、今の文を、どうぞ見せて下さんせいな。

彦三　エヽ、見せる事はならぬといふに。アタしつこい女ぢや。

みち　サア〳〵、其やうに怖い顏して、腹立てさしやんすも、大方御病氣の業でござんせうが、ほんに、これまで

ついぞ嘘にも、小吟さんの事云うて、悋氣した事はござんせぬぞえ。

彦三　オヽ、悋氣せぬ筈。一體

　ト お路の胸ぐら取つて引寄せ、顔をキッと見て

おりや男ぢや。それで何にも云はぬぞよ。

　ト泣き、離す。

みち　オヽ怖。ついぞない、其やうにマア。

　ト逆らはぬこなしにて

もう〳〵御堪忍なされて下さりませ。わたしも何も、申しませぬ〳〵。

彦三　また云うて堪るものか。エヽ、おのれ、親仁様の聞え、世間を思はねば、云ひ捲りたいけれど、家柄といひそれでヂッと堪へて居るぞよ。

　ト身を外け、思ひ入れある。お路こなしあつて

みち　お前はマア、何を其やうに。

　ト涙ぐんで

いま寢間に落ちてあつた文を、わたしが見ようとしたら、ちやつと取つて隠しなさつたゆゑ、大方小吟さんの方から來た御病氣の、ツイ見舞ひぢやと思うて、ちよつとお見せなさんせと云うたが、其やうにお腹が立ちますかいなア。

彦三　オヽ、腹が立つて〳〵、もうどうも堪へられぬけれど、……ヂッと辛抱して居るわいやい。

みち　モウ〳〵、拜みます〳〵。わたしが悪かつた。其やうに腹立てずと、機嫌を直して下さんせいなア。

彦三　機嫌も、直る時分には、直らうぞい。

　ト彦三も涙ぐんで云ふ顔を見て、お路も思ひ入れあつて、ほろりとして

みち　ほんに、同じ女子に生れながら、色里で勤めする女中さんは、どうして殿御に可愛がられさんすものぢややら。悋氣嫉妬は知れた嗜なみと、両親の云はしやんしたを、随分守つて、ついぞこれまで河東へござんしても、怪我にも不請な顔をせず、小袖に伽羅とめ、お鼻紙、莨入れまで氣を附けて、殊に、馴染んでござんす小吟さんに、ついぞ逢はねど、文やつて訪ひおとづれ、只お頼み申す大切にと、云ふより外に怨みの「う」の字も、書いた事はござんせぬわいなア。サア、さうした此わたしが心を、常から知らしやんせぬではなし、その文が見せられぬとは、大方わたしを去つて、女房にならうと云ふやうな、胴慾な文でござんせう。それとは知らず、ツイ見

せなさんせと云うたゆゑ、それで其やうに、お腹が立つのでござんせうわいなア。

トしやくりあげて泣く。彦三これにて猶々ムツとして

彦三　おれが寢所にあつた狀を、小吟から來た文と思うて、わざと述懷を云ふ。見す〳〵知れた逆ねだり。それでその身をくるめようと、ほんに、日頃に似合はぬ、女子と云ふものは、ても、心の恐ろしいものぢやなア。

みち　モシ、何と云はしやんす。わたしが身をくるめようと思うての述懷とは、何ぞこの身に誤りでもあつて。

彦三　オヽ、誤まりも誤まり、大それた誤まりがあれど、よもやと思ひ、マア、とつくりと試した上でと、チツと堪へて居るを、それに最前から

みち　イヽエイナア、そんならわたしが

彦三　不義して居る。

みち　エヽ。

ト大きに愕りする。

彦三　おれが目を掠めて、お路、わりや、よう密夫を拵へたな。

みち　モシ、そりや何の事でござんす。不義ぢやの、密夫ぢやのと、身に取つて

彦三　覺えがないとは云はさぬ。コレ、この狀

ト懷より出して

小吟が文と見たがつたこの狀。とつくりと讀んで見をれ。

ト打ち附ける。お路、オロ〳〵して狀を取上げ、開き

みち　「この間はよき首尾にて、ゆる〳〵と御語らひ申しあげ、山々嬉しく存じ上〻。さてその節申し交せし通り道ならぬ事とは存じながら、互ひに馴染みし上は、兎角人目を憚りの、闇の下紐また打解けし事のみ申し上〻、めでたくかしこ。」

トお路、讀むうち思ひ入れあり。この前より惣八、無理に大隅を連れて出て、わざと聞かすこなし。五郎吉も附いて出る。

彦三　サア、宛名は何と。

みち　エヽ。

彦三　讀まぬか。どうも讀めぬか。

みち　なんの覺えもない事。

彦三　宛名を讀め。

みち　「お路さままゐる。重三より。」

ト彦三、お路の襟元を取つて引附け

彦三　不義者め。なんと覺えがあらうがな。

みち　サア〳〵、どのやうに云はしやんしても、露ほども
わたしや、覺えはないわいなア。

彥三　斯ういふ狀を取交しても、覺えないとは野太い奴。
いつそ。

ト取つて突き退け、箒を取上げ打たうとする。大隅、
ツカ〳〵と行つて、彥三を留め

大隅　悴、尤もぢや。尤もぢやが、マア〳〵待つてくれ。

彥三　ヤア、親仁樣。そんなら先刻からの

五郞　樣子は殘らず、お聞きなされました。

ト兩人も前へ出る。

惣八　お路さまの不義の樣子、家內は殘らず、大方世間へ
パツと知れました。

彥三　サア、その名の出るが否さに

ト又キツとなるを

大隅　名が出ても、大事ない〳〵。おりや構はぬ。悴、こ
んな事に氣を揉んで、必ず其方が病の重らぬやうにして
くれい。

ト無理になだめ、下に置き、お路を引起し、胸ぐら取
つて

コレ、嫁女、日頃は悴大事。おれに孝行な其方が、どう
いふ心が入れ替つて、マア、ひよんな事をしてたもつた
なう。

トこなし。お路、思ひ入れあつて、右の文を取上げ、
悲しさに物も云はれぬこなしにて、大隅、彥三に、「覺
えない」といふ事を、いろ〳〵して見せ、大泣きにて

みち　わたしや眞實、覺えはござんせぬわいなア。

ト身を投げ伏して泣く。

彥三　覺えない者が、その狀が、どうしておれが寢所に落
ちてあつたぞ。

惣八　左樣でござります。こりや若旦那の仰しやる通り、
お路さん、お前は恐れ入つたお方ぢやぞえ。斯ういふ大
膽な不義をしながら、よう今まで人に知らさず、隣の息
子とどうして契つたものぢや知らぬ。ア丶、聞えた。大
方あの塀を越したり、塀の庇合で猫がさかるやうに、忍
び逢はしやつたでござりませう。道理で、最前、互の事
で、隣へ行つた時、重三が物云ひ、お前が嫌らしい目附
きしたと思うたて。

トお路、これにて惣八が胸倉取つて

みち　エ丶、惣八。其方までがそんな事を。覺えはない。
こちや知らぬ〳〵。知らぬわいなう。

ト惣八を振り廻して、むごく叩く。

惣八　コレ〳〵。さう叩かれても、斯う露顕に及んだれば この惣八は、どうも執成しの仕様がござりませぬ。

ト五郎吉もこなしあつて、お路の側へ行つて

五郎　モシ、お路さま、口でばつかり仰しやつては、若旦那も御得心はござりますまい。不義でないといふ、しつかりとした、云ひ譯はござりませぬか。

惣八　なんのあらう。不義に違ひはないもの。

みち　ハア、。

ト又大泣き。向うバタ〳〵にて、重三郎、片手に狀を持ち、金六が胸倉を取り、長兵衛も附いて出て來て

重三　この重三が身に覺えのない惡名。金輪際、雪がにや置かぬ。金六め、うせあがれ。

金六　でも、間男といふ慥かな證據は、その狀ぢや。

長兵　若旦那。鬼瓦の評判の上に、間男と噂があつては、お前、一分が立ちますまい。

重三　ぢやに依つて、いま黑木屋へ、此奴を引摺つて行くのぢや。

長兵　早うござりませ。

ト三人本舞臺へ來て、重三郎、金六を内へ投込む。皆皆悄り

五郎　こりや隣の手代。

惣八　ほんに金六。そんなら、これも間男の

重三　オヽ、惡名拔かにやならぬ。

ト長兵衛も内へ入る。彥三、こなしあつて

彥三　隣同士といひ、友達の重三、此方から人やらうと思うたに、よう出て來やつたの。

重三　サア、ちつと來にやならぬ筋合ひで、手代の金六を同道。

ト此うち金六、起きあがり、お路を見て

金六　間男の本尊。覺えなきや息子どの、ソレ。

トお路を突きやり

潔白を見せた〳〵。

重三　オヽ、見せうと思うて來たのぢや。

大陽　そんなら、嫁の對手、隣の重三も

長兵　金六が間男と云ひ出して、男の一分が立たぬと、重三さまの腹立ち、阿母樣のお嘆き、家内は亂騷ぎ。

重三　覺えもない事に、證據呼はりのこの狀、長兵衛、爰の内へ讀んで聞かせ。

ト抛つてやる。長兵衛取つて

長兵　オッと、合點。

　ト開き

「一筆しめしまゐらせ候、今宵人目を忍び、彼の事を首尾よう
なし下され候はゞ御嬉しく存じまゐらせ候、阿母様へ知れ申さ
ぬやう、よろしく願ひ上げまゐらせ候、何事もおめもじの上、
先づはこの文ひそかに御覽、めでたくかしく。筒井重三さ
ままゐる。路より。」

　ト讀むうち、皆々こなし。

こりやコレ、内方の娘御の自筆。

金六　あゝいふ文を取交したれば、知れた間男。それでは
筒井の家に疵が附くゆゑ、この金六が指圖で、阿母様に
は表向き、勘當と抛り出させ、内證で少々の貢ぎを遣る
相談したれど、あの息子どのがぢや／＼ばつて、おれを
爰へ連れて來て

長兵　身の潔白を立てる若旦那。

惣八　そんなら、此方もこの狀を

　ト此方の狀をひろげ、重三郎に見せる。口の中にて讀
み

重三　「お路さままゐる。重三より。」

　ト名宛ばかりを讀む。彦三も長兵衛が讀んだ狀を引ッ
たくり、これを口の中にて讀み

彦三　「筒井重三さままゐる。路より。」

　ト名宛ばかり讀む。大隅こなしあつて

大隅　兩方合せば、いよ／＼不義と嫁女の身の上。

　トお路、キッと思ひ入れあつて

みち　オヽ、さうぢや。云ひ譯がござりますわいなア。

大彦　ナニ、云ひ譯とは。

みち　コレ、惣八。

　ト惣八を此方へ連れて來て

ソレ、最前隣へ、瓦の事を頼みに行て、戻つて來たその
後、其方が云やるには、隣の阿母様の片意地で、是非と
も瓦を下ろして下さらねば、重三さまを頼んで置いた。
阿母様に隱して、密かに鬼瓦を下ろしてもらふ筈ぢやほ
どに、お前もその頼み狀を遣れと、其方がわしへ仰せ事
に書かした、コレ、この文ぢやぞや。

　ト文を見せ

それが重三さまと、不義の證據になつたこの場の仕儀。
樣子知つたは其方なれば、この文は瓦の事と、ちやつと
云ひ譯してたも。云ひ譯してたも。

惣八　アヽ、モシ／＼、お路さま。この惣八が、お前にさ

う云ふ文を、書かした覺えはござりませぬぞえ。

みち　イ、エイナウ、それでも文言を、其方の云やつた通りに

惣八　イエ〳〵、知りませぬ。なんの、瓦の事は、最前連れ立つて行て聞入れないゆゑ、それなりでござります。

みち　でも、見す〳〵わしに書かして、今さら其やうに

彥三　お路、それでは云ひ譯になるまい。

みち　アレ、それでも惣八が。

惣八　おりや知らぬものを。

金六　此方は知たれ息子どの。

ト重三郎が胸ぐら取るを

重三　何するのぢや。

ト振り離す。

金六　イヤ、なんぼこなさんが、劍術を知らつしやると云うても、云はにやならぬ。明りを立てうと、おれを爰へ引ツ張つて來たが、明りが立たぬ。矢ツ張り暗がりの忍び逢ひ、證據は二通のこの狀。

重三　イヤ、おれが書いた覺えがなければ、似せ筆ぢや。

金六　そんなら似せ筆といふ、慥かな證據があるか。

重三　サア、それは。

惣八　お路さま。いよ〳〵お前も

金六　不義者、間男。

重路　サア、

惣金　サア〳〵〳〵。いつそ。

ト惣八はお路、金六は重三郎にかゝる。ト奥より半兵衞、ツカ〳〵と出て、兩人を引廻し、兩方へ取つて投げる。

大隅　ヤア、番頭の半兵衞。

彥三　コレ、聞きやつたか、お路が身の上。

半兵　サア〳〵、ようござります。お路さまの明りは、私しが立てます。

みち　そんなら、どうぞ、半兵衞どの。

長兵　次手に此方の若旦那の

半兵　ハテ、此方が解れば、お前の方もさつぱりと

重三　曇り無き身の、晴れるやうに。

半兵　マア、及ばずながら、やつて見ませうかい。

ト下に居る。金六、惣八、起きあがり

惣八　こりや思ひがけない半兵衞どの。

金六　コレサ、投げられた事は後へ廻して、此方の息子と爰の嫁御、不義間男と極まつてあるを、撚りを戻してこ

なさんが
半兵　サア、そこが番頭ぢや。
二人　ヤア。
半兵　この黒木屋の内を取裁く、へゝ、番頭の半兵衞。隣同士の不義間男、名さが立つては兩家の恥ぢやに依つて蛇の目を灰汁で洗つたやうに、コレ、番頭の役に、譯を立てゝ見せうと思うて。
金六　面白い。武家ならば重ねて置いて四つ。そこを町人だけ、半兵衞どのゝ取扱ひは、大方二人を抛り出す思案か。
半兵　オヽ、抛り出す。二人ながら面恥かゝせて、洛中洛外にもたゝずみの出來ぬやうに、この半兵衞がして見せう。
金六　さうありさうなものぢや。ソレ、惣八。
惣八　合點ぢや。
ト立ちかゝるを、半兵衞また兩人を支へて
半兵　こりや何するのぢや。
金六　ハテ、抛り出せとあるゆゑ、此方の息子を
惣八　相手のお蹈を
半兵　イヤ、抛り出すは、あの二人ではない。

惣金　そんなら、どの二人を。
半兵　金六、惣八ゝうぬら二人を抛り出すのぢや。
惣金　ヤ、なんと。
半兵　コリヤ。不義の證據の、二通の狀より、人はそれぞと、白紙のこの手紙。
ト最前の返事を出す。
金六　ヤア、そりや慥かに
ト取りにかゝるを蹴り倒し
半兵　ソレ、讀んで見た。
ト長兵衞へ投つてやる。長兵衞、取上げるを
金六　それ讀まれては
ト取りにかゝるを、五郎吉立廻つて留める。長兵衞、狀を見て、合點のゆかぬこなしにて
長兵　「先程、嫁のお蹈が鬼瓦の文を、色事の文の作意、どうも〳〵天晴れと感心致し候ふ、然らば此方息子重三郎に、右の文を見せ、大山を擧げ申すべく候ふ、先達て渡し置きし似せ筆の狀にて、彥三に腹を立てさせ、其方家內を騷動させる事肝要に御座候ふ、委細は兼ねて諜し合せし通り、お取計らひ下されたく、先づは御返事まで に早々。」

ト讀みしまひ
コレ、この、薄赤う書いた文字は。
半兵　酒で書いて、火であぶれば、その如く現はれる文字。
二人が企みで、塀越しに通はす魂膽。
惣八　ヤア〳〵。そんならそれは金六が、おれが所へ寄越
した返事か。
ト取りに行くな、半兵衛、兩人を引廻し
半兵　宛名は無けれど、それでガラリと樣子は知れた。うぬらが企みでお二人に、不義の惡名附け、云ひ合せて兩家を呑まうとは、太い奴等の。
金六　それ見られたら、
惣八　半兵衛われを
トまた半兵衛にかゝるを、五郎吉、長兵衛押し隔て、立廻りよき所にて、重三郎、金六を蹴倒し、二人を背中合せにグル〳〵巻きに縛る。二人この形にて起きあがり
惣金　これは。
重三　半兵衛どの、お指圖の通り、斯うして二人を拋り出せば
大隅　成る程、浪風立たず、事の納まり。

半兵　重三さまの思ひ附き、出來ました。
惣八　なにを。折角うまくやりかけた所へ
金六　半兵衛、うぬをマア
トくるりと廻つて
惣八　どうしてくれう。
ト又くるりと廻つて
金六　エヽ、忌々しい。
ト顏ばかりにてこなしあつて、兩人、足投出して下に居るところへ、向うより羽織、袴の町代一人走り出て來て
町代　モシ〳〵、彦三さま、お宿にござりますか。會所へお代官様がござつて、何やら尋ねたい事がある。火急にお前を呼んで來いとの云ひつけ。サア〳〵、只今ござりませ。
ト彦三、ハツと思ひ入れ。
大隅　そんなら、會所へ、代官どのが來て、彦三に
皆々　急に來いとは
彦三　大方そりや、河原の
ト云はうとする。半兵衛ちやつと
半兵　イヤサ、河原の、サア、瓦の事で、あなたは御病氣

と知れてあれば、こりや若旦那の名代に、私しが會所へ
參つて、何かの樣子を、聞いて參りませう。

彥三　そんなら、半兵衞、其方が

半兵　ハテ、何もお案じなさる事はござりませぬ。親旦那
お路さま。若旦那に、お氣をお附けなされませ。

町代　彥三さまの代りに、半兵衞さまなら大丈夫。サア、
ござりませ。

半兵　五郎吉。次手にこの二人を、河原へ連れて行て、追
ツ拂へ。

五郎　そりや、わしが望むところぢや。
ト薪ざつぱを持つて
サア、二人ともに、立ち居らう。
ト舞臺を叩く。兩人悔りして、立ち上がり

金六　エヽ、仰山な。悔りするわい。

町代　サア、半兵衞さま。

半兵　左樣なれば皆樣、行て參ります。
ト合ひ方になり、五郎吉、兩人を追ひ立てる。半兵衞
町代を連れ、花道へ行く。惣八、金六、一足づゝクル
クル廻り／＼、半ばまで行つて

金六　ア、思へば／＼
ト廻つて

惣八　半兵衞
ト廻つて

金六　覺えて
ト廻つて

惣八　居れよ。

五郎　うせやアがれ。

惣金　なんの事ぢや。

半兵　ハヽヽヽヽ。
ト笑ふ。唄になり、この模樣にて、金六、惣八、廻り
廻り先へ行く。後へ五郎吉、半兵衞、町代を連れ、入
る。本舞臺、皆々こなしあつて

大隅　思へば二人の奴等の仕業と知らず、可哀さうに、嫁
のお路を、すんでの事に

長兵　そりや、此方の若旦那も同じ事。なんと憎い奴等ぢ
やござりませぬか。
トお路こなしあつて

みち　モシ、わたしや矢ッ張り彥三さんに

大隅　知れた事。變らぬ夫婦。

長兵　ソレ。

ト彦三の側へ突いてやる。お路、思ひ入れあつて

みち　つんとモウ、今の間違ひで、お前にもお腹を立てさしまして、ほんに、モウ、何も申しませぬ。堪忍しておくれなされませえ。

トこなしある。彦三は始終案じて居て

彦三　惣八や金六が、拵らへ事とは知らず、それを幸ひに縁を切つて

みち　エヽ。

彦三　イヤサ、縁を切らうと思うたところが、不義と云うたも皆偽り。何かに附けて半兵衛が志し、どう思ひ廻しても

大隅　あの半兵衛は親方思ひ。

みち　ほんに、わたしが為には結ぶの神様。大抵嬉しい事ぢやござんせぬわいなア。

ト心々に思ひ入れ。この時、重三郎は最前より手を組み、俯向いて居る。この時、長兵衛、取散らしてある状を拾ひ集め

長兵　穢らはしいこの似せ筆。お路さまの文も一緒に、カウ〳〵。

トずた〳〵に引裂き、片脇へ捨て

オヽ、また残つてある、誰で書いたこの手紙。思へばこれで、サラリと事が解つた。これを思や、掛け物にせうか知らぬ。イヤ〳〵、彼奴等が書いたのを、なんの掛け物。ナア、大隅さま、大方この手紙も、あの西陣から投り込んだのであらう。

ト上の方を見て、この時棟瓦に心附き

面妖な。内方の棟瓦は、いつの間に

大隅　イヤ、最前取替へたは、作が病気本復の為に。

トこれにて彦三、お路も屋根の上を見て

彦み　ほんに、あれは鍾馗。

大隅　半兵衛が計らひに、何事も家の為。彦三が為を思うて。

長兵　ハヽア、聞えた。これで鍾馗半兵衛。どうやら男達のやうな。ハヽヽヽヽ。

ト重三郎を見て

コレ、此方の若旦那。お前は最前から何も云はずに、俯向いてばかりござりますが、どうぞさつしやりましたか。申し、内方の棟瓦が取替りまして、鍾馗になつたを、アレ、御覧じませ。

ト何心なしに勧める。この時重三郎、ザツと顔を上げ

重三　なんぢや。鍾馗ぢや。
ト上の屋根を見る。
長兵　ソレ、鍾馗の瓦。
ト指さしする。
重三　ほんに、鍾馗か。
ト立ちあがり、飛び退き、恐れ、慄へ出す。皆々悄り
大彦　ヤア、重三どのは。
長兵　若旦那。なんとさつしやりました。
ト重三郎、取りのぼせ、狂人のこなし。
重三　サア〳〵、堪らぬ〳〵。アレ〳〵。ソレ〳〵。
鍾馗の瓦が睨み附けて居る。さしづめおれは鬼であらう。
鬼は外、福は内へ行て母者人に、柊を振舞はうか。
ト駈け出すを、長兵衛留める。振り切る。立廻りあつ
て長兵衛向うへ廻り
長兵　コレ、若旦那。こりや何ぢや。お前は氣が違うたか。
どうして狂人にならしやつたぞ。
重三　氣が違うたとは、桃か、櫻か。なんでも爰には居ら
れぬ。鍾馗は怖い。そこ退けやい。
長兵　コレ、若旦那。お前、氣がのぼつたら、氣を鎭めて
とつくりと

重三　イヤ〳〵、鎭めては居られぬ。怖い〳〵。
長兵　それでも。
重三　鬼は外、福は内〳〵。
ト長兵衛を引退け、狂ひ〳〵て向うへ走り入る。
大隅　アレ、思ひがけない、重三が狂氣。
みち　長兵衛どの、重三さまの様子を、早う阿母様へ。
長兵　さうぢや。お知らせ申しませう。
ト長兵衛、こなしあつて向うへ入る。
彦三　鍾馗の瓦で隣の重三が、狂人になつたも
大隅　鬼に勝つは鍾馗。倅、其方は本服。
みち　さぞや阿母様が
大隅　ハテ、隣の事は構はずと、兎角大事は此方の彦三。
彦三　それ程までに……思へば不孝な私しを。
ト愁ひの思ひ入れ。
大隅　アレ、嫁女。悴はきつう塞いで居るさうな。奥へ連
れて行て、好きな酒でも勸めや。
みち　アイ〳〵。そんなら、申し、彦三さま。父様の仰せ、
サア、奥へ行て、仲直りの杯を、ナア。
ト手を取るを
彦三　コレ、見苦しい。

ト振り切る。大隅、思ひ入れあつて

大隅　ア、、南の加減やら、目もかすみ、耳も聞えぬ。

みち　アレ、あのやうに……親御のお氣休めに。

彦三　そんなら奥へ。

ト立ちあがる。大隅、此うち門を覗いて

大隅　ア、、降らねばよいが。

ト唄になり、彦三こなしあつて、お踏を連れ、奥へ入る。跡に大隅残り、以前の鉢植を取つて來て

大隅　こりや最前、隣から贈つた、病氣見舞ひの觀音草。此方の息子は本服する、隣りの重三は狂氣になつたが、これを又此方から、阿母へ送つて遣らうかしらぬ。

ト唄になり、鉢植を前に置き、ヂツと眺めて居る。此うち始終合ひ方にて、向うよりお高、出て來て

たか　御免なされませ。

トヅツと内へ入る。大隅見て

大隅　オ、、これは隣のお高どの。なんと思うて、サ、、これへ〳〵。

たか　イヤ、お構ひ下されますな。私しが參りましたは、大隅さま、お前にちとお頼みがあつて。

ト側にある鉢植を見て

こりや最前、病氣見舞ひに、贈つた鉢植。

大隅　サア、この觀音草の心が解けぬゆゑ、今に眺めて居ますわいの。

たか　アノ、その心が解けぬゆゑ、……それで

ト上の方の屋根を見やり、鍾馗の瓦を見て

ハテナア。

ト思ひ入れ。下に居る。

大隅　時に、お高どの、こなさんの頼みとは。

たか　外の事でもござんせぬ。見れば、あの屋根の棟瓦、お取替へなされた鍾馗を、下ろして欲しさに、それでわざ〳〵この高が、直のお頼み。

大隅　ナニ、あの瓦を。

たか　アイ、掛けがへのない、たつた一人の大事の息子、最前までも、何の事も無かつたに、取替はつた鍾馗の瓦を見て、俄に亂心。わしが惘り。家内の騒動。親の悲しさ推量して、今までさへ其まゝにあつた瓦、取替へるに仔細はござんすまい。わりない御無心なれど、どうぞ鍾馗を下ろして下さんせ。お頼み申しあげます、大隅さま、

大隅　イヤ、そりや成りませぬ。

たか　エ、。

大隅　コレ、我が身抓つて人の痛さを知れと、此方の彦三の病氣は鬼瓦ゆゑ。それでこなさんに段々頼んで、下ろして下されと、嫁まで最前やつたのに、聞入れなく、それで是非なう、番頭の半兵衛が思ひ附きで、鬼に勝つは鍾馗ぢやと、取替へて上げた棟瓦。それを下ろしてくれいと頼みに來るとは、如何に女子ぢやと云うて、お高どの、さう自由にはなりませぬぞ。
たか　サア、その辨まへの無いも子の可愛さ。是非取つて下さんせぬと、此方の重三はいつまでも、亂心であの通り。
大隅　イヤ、鍾馗を下ろせば、此方の息子彦三が、また鬼瓦を見て煩ひます。
たか　その彦三どのはお前の息子、例へ煩らはうが、死なつしやらうが、わたしや構ひはせぬわいなア。
大隅　おれもこなたの息子の重三が、煩らはうが、死なうが、なんの構ひはござらぬわいの。
たか　そりやあんまり無得心と云ふもの。
大隅　無得心でも、邪慳でも、これまで頼んだ鬼瓦を、下ろさぬこなたへの返報がへし。金輪際、鍾馗の瓦、下ろす事はなりませぬ。
たか　どうあつても、下ろしてもらはにやなりませぬ。
大隅　ハテ、下ろす事はならぬ。
たか　イヤ、是非ともわたしが頼み。
大隅　頼みは聞かぬ。
たか　そりやお前
大隅　イヤ、こなたが
ト兩人舞臺を叩き、角目立ちて立ち上がる。この前よりお路、奥より出かけ聞いて居て、兩人が仲へ入り
みち　マア〳〵、お二人ながら、お待ちなされて下さりませ。
大隅　イヤ〳〵、嫁女、構やんな。
たか　お路どの、退かしやんせ。わたしも云ひかゝりなれば。
みち　ハテマア、其やうにお腹をお立ちなされずと、お互ひにとつくりと、御相談づくで瓦の事を、ナア。
たか　ムウ、相談づくなら大隅どの、元々、取替へませう。
大隅　取替へるとは、鬼瓦と鍾馗の瓦と、入れ替へるのか。
たか　イ、エ、彦三と重三を
大隅　ヤア、なんと。
たか　此お路どのもわしが嫁。

　ト お道を引廻し、入れ替つて

彦三を此方へ、返して下さんせ。

　ト合ひ方。

みち　エヽ、そりやマア、何の事でござんすえ。

たか　成る程、お前も合點がゆくまい。もと、爰な彦三どのは、死別れた重右衛門どのと、二人が仲に出來た、わしが眞實の子ぢやわいの。

みち　アノ、彦三さんが……それに又、お前のお子の、重三さんはえ。

たか　あの大隅どのと眞實の親子。互ひに隣同士の子を取替へたは、生れた時は兩方厄年、二つ子。內で育てゝは親に祟ると云ふゆゑ、捨てる代りに互ひの相談も、懇ろな仲、得心づくで此方の息子は、この家の彦三。又、此方の跡取りの重三といふは、大隅どのの悴に、違ひはないわいの。

みち　ハテ、思ひがけもない。そんなら彦三さんと重三さんとは、取替へた子でござんしたかいなア。

　ト此うち大隅、默つて居て

大隅　例へ取替へ子でも、養ひ子でも、これまで眞實の我が子と思ひ、育てあげた彦三、今更なんの返されうぞ。エヽ、流石は女子。何でもない元の事から云ひ上がり、人も知らぬ息子の身の上、よう打明けて云やつたの。もし彦三が聞いたら、水臭う思はうかと案じて居る。嫁女必らずともにこの事を

たか　イヽヤ、云はねばなりませぬ。

大隅　アレ、矢ッ張り片意地に

たか　コレ、是非とも彦三を取返さうと思へばこそ、最前贈つた觀音草。

みち　そんなら、この鉢植の

大隅　觀音草を、ドヽ、どうして贈つたのぢや。

たか　それは。

　ト思ひ入れあつて、あたりを窺ひ、門の戸ピッシャリと閉すと、合ひ方になり、元の所へ來て、こなしある。此うち一間の障子を明け、彦三、樣子を立聞きして居る。お高、序幕の頭巾を出し

たか　これ見知つてか。

　ト眞中に立つて居る。大隅、お路、左右より、下に居て、手を掛け

大隅　こりや悴彦三が、頭巾でないか。

みち　鐶菊と菊蝶は、慥かに小吟さんとの比翼紋。

二人　これがどうして。

トお高小聲にて

たか　彦三は、人殺しぢやわいなう。

ト泪ぐんで下に居る。兩人も「エヽし」と悧り。

サア、もう先月二十五日。智恩院の御忌參り。下向には日は暮れる。供の久三に提灯持たせ、トボ〳〵歸る四條河原、擦れ違うたは慥かに彦三。ハテ、合點のゆかぬ素振りと、思ふ跡に、人が殺してあつたわいなう。殺されたは慥かに醫者、死骸の側に落ちてあつたは、この頭巾。人手に渡さぬが幸ひと、持つて戻つて今までも、隱しても隱されぬ、四條河原の人殺しの取沙汰にも、彦三が仕業と知れた上は、召捕られて牢へ入り、下手人は知れた事。彼奴が身は構はねど、その時は、コレ

ト大隅に取附き

藁の上から養育の、大恩受けた大隅どの、お前の難儀。不孝の上に不孝を重ね、せめてはそれと知れぬうち、元元に取戻せば、まさかの時の難儀をば。産みのこの母の身は、どのやうになつても構はぬ。不孝で黒木屋の家へ疵が附けともなさ。殊に、この頃病氣と云ふも、鬼瓦を怖がるは、死んだ夫が不孝な奴と、草葉の蔭から思うてござる惜しみが、自然と瓦に乘り移り、それで恐るゝ彦三が煩らひ。段々の頼みでも、わざと下ろさぬ、わたしが心も鬼瓦。いつそ重つて死んだらば、刃の錆になるまいと、朝夕の看經も、持佛に向うて、たゞ彦三が、早う死ぬるを、願うてばつかり居ますわいの。

トこなし。お路も思ひ入れあつて

みち　そんなら、申し、この鉢植の觀音草も、彦三さまのお身の上。

たか　秋は莟落ちて花咲く觀音草。早う死ねといふ心の謎々。

大隅　ムウ。そんなら、最前會所から呼びに來て、半兵衞が行たも、さては人殺しの

トふと障子屋體を見る。彦三悧り、閉す。こなしあつて

エヽ、是非に及ばぬ。

ト手を組み、思案する。

たか　サア、それぢやに依つて、重三と彦三を、どうぞ元元へ。

大隅　イヤ、猶成りませぬ。たとへ彦三が人殺し、この親に難儀がかゝらうが、さら〳〵いとはぬ。倅が獄門ならば同じ板、磔刑なれば並んで突かれる。

たか　そんなら、どうでも。

大隅　眞實の子の重三めには構はぬ。おりや矢ツ張り彦三が不便なわい。ナウ、嫁女。

みち　サア、申し、返せとある阿母様も産みの義理。返さぬといふお前様も、生さぬ仲の義理。その義理々々に挾まれて、彦三さまは人殺しの科人と、聞いて悲しさやる方なさ。わたしや何とせうぞいなア。

ト泣き落す。お高大隅もこなしある。障子屋體より彦三、しを〳〵として出て來る。

大隅　ヤア、そちや彦三。

たか　そんなら、この樣子を

彦三　あれにて殘らず、承りました。

兩人　ヤア。

彦三　まづ〳〵。

ト大隅が手を取つて上座へ直し、又お高を無理に勸めて、大隅が次へ直し、遙か下がつて

これまでは知らぬ事とて、義理ある親に、産みの母、不孝の段々、眞平お免しなされて下さりませ。

ト お路に向ひ

お路とても、これまでの淺からぬ志し。忝ない。

ト正面へ居直り

斯うなる上は、隱すに及ばぬ。成る程、五日あと、二十五日の夜、四條河原で、寺田宥宅といふ醫者を殺したのは、私しでござります。

三人　そんなら、いよ〳〵。

トこなし。

彦三　サア、これもお出入りの梅關家より、仰せつけられし、彼の若菜の硯を買ひ求め、早う御殿へと思ふところに、醫者の宥宅無理に引留め、祇園の二軒茶屋にて酒を勸め、醉ひ伏さして硯を横取り。大切なる御用なれば、段々頼めど返さぬ上に、却つてわしを殺さうと、閃かす脇差も、薄暗がりの四條河原。その脇差をやう〳〵と、引ッたくりしが、切るとも思はず、つい一かせに身をもがき、我れと我が手に宥宅が、刃にかゝつて死んだのは、この身の因果。せめて硯と死骸を探せど、どうした事やら、硯は無く、南無三方と思ふところに、提灯の灯影に顔を隱したが

ト お高を見て、こなしあつて

思ひがけない産みの母。……それより未練に立歸りしは、彼の硯を吟味と思へど、心が咎めて世間を憚り、内には

つかり居るうちに、縁先からフッと見附けたあの鬼瓦。これ幸ひと作り病をして、いつぞ名乗つて出ようかと、駈け出しては、却つて親仁様のお慈悲。お路が介抱、敷居一寸出られねば、是非なく今日まで存らへて居る、彦三が身の上。頼みに思ふ半兵衛に、事の様子を打明けて、是非名乗つて出る覚悟。お路、この様子を半兵衛に、と、親仁様の事、硯の事、頼むと傳へてくれ。お二人様、おさらば。

ト立ちあがり、駈け出さうとするを

みち　待つた。そんなら、お前は

彦三　名乗つて出れば、あの親達に御難儀が。

みち　ぢやと云うて。

彦三　放せ、お路。

大隅　待て、悴。

彦三　お退きなされ。

ト皆々立廻りにて、お高もよろしく留めて

たか　待つてくれ、コリヤ、彦三。

彦三　観音草の謎の解けた私し、なぜお留めなされまする。

たか　ハテ、覚悟極めたその心なら、母がたつた一言。

彦三　エ。

たか　コリヤ。

ト無理に引据ゑ、彦三の顔を見て

これまで其方が身の安否は、棟を隔てゝ隣同士、毎日聞いて、泣いたり、笑うたり、産み落してから、たつた二月側に居て、二十四年が今日まで、人手に掛けて他人向き。産みの母のせつない思案。口で憎めど矢ツ張り可愛い。死ねと勧める此わしに、名残りの顔をとつくりと

ト引寄せ

コレ、見せてたもいなう。

大隅　同じ思ひの嘆きは一つ。

みち　二人の親御に

彦三　死なねばどうも、云ひ譯がござりませぬわいなう。

ト四人思ひ入れ、こなしあつて大泣き。向うバタ〳〵にて、五郎吉走り出る。惣八、後より頬冠りにて、ソツと附いて出て、橋がゝりに忍ぶ。五郎吉、内へ入り

五郎　申し〳〵、先刻半兵衛どのが會所へござつたのは、彦三さまが常々懇ろに連れて歩かつしやつた、醫者の宥宅が殺されたゆゑ、もしやと疑ひのお尋ね。それを半兵衛どのがいろ〳〵と、云ひ譯の最中。

大隅　そんならまだ人殺しは、彦三とも治定せぬか。ヤレ

嬉しや。

ト此うち惣八、橋がゝりの植込みを傳ひ、屋根へ忍び込む。

みち　必らず、彦三さま、名乘つて出る事は、マア、止めにして下さりませ。

彦三　ぢやと云うて、どうで遁がれぬ天の網。

五郎　ハテ、日頃如才のない半兵衛さま、云ひ譯が濟んで歸つて見えませう。

たか　思ひ廻せば半兵衛どのが、人殺しの噂をくろめん爲彦三が病氣を世間へ知らす。さては

ト上の方の屋根を見る時、惣八、上の方へ廻り居て、鍾馗の瓦をこち離して居る。お高、五郎吉へこなしあつて

あの鍾馗の瓦。

五郎　ほんに、彼奴は

ト側にある鉢植を取つて、屋根へ打ちつける。惣八、愕り。最前の金、バラ〳〵と亂れて落ちる。

皆々　ヤア、この金は。

ト大陽取上げ

大陽　こりや佐市さまより受取つた三百兩。

惣八　それを。

ト飛び下りてかゝるを、彦三、下へ引廻し、直ぐに五郎吉と立廻り

みち　また惣八が戻つて來たは

五郎　最前の三百兩、此奴が盗んで、隱し所はあの瓦の下。これを取りに歸つたな。

惣八　何をおのれが。

ト立廻りにて、五郎吉、惣八を押へるうち、上の板塀を蹴破り、金六、長兵衛立廻りながら出て來る。

大陽　ヤア、金六も舞ひ戻つたか。

長兵　兎角重三さまを拒む、此奴等が惡事。

金六　皆捕り出して、筒井の家はおれがしてやる。

ト始終立廻りのうち、蹴破りし處より重三郎出て、よき所にて金六を取つて投げる。長兵衛押へる。

たか　ヤア、重三。其方が病氣は。

重三　思ひ廻せば、最前金六が服ませし藥、一時ほどは亂心する、無下有とやらいふ藥種の業。

彦三　そんなら、この場の樣子も

重三　殘らず聞いた。

惣金　人殺し。

ト刎ね返して立廻り

彦三　名乘つて出れば

たか　コレ。

ト留める。

重三　育てられたる恩送りに、この重三が

大隅　出かした悴……ではない、重三郎。

彦重　是非とも。

ト駈け出す兩人を、お路、お高兩人して引留め

高路　必らずともに

ト長兵衞、五郎吉は金六、惣八を取つて投げる。

大隅　親の心を

彦重　でも

トおこつくを

たか　子知らずぢやなア。

ト引据ゑる。よろしく

幕

大切　牛兵衞内の場
道行の場

淨瑠璃　比翼鳥邊山　常磐津連中

役名――黒木屋彦三。黒木屋番頭、牛兵衞。千鳥濱右衞門。髮結ひ、松の尾新兵衞。坊主の小兵衞。彦三女房、お路。井筒屋小吟。牛兵衞女房、おりく。桂佐市。井筒屋德兵衞。山伏、奇妙院。仲居、お富。小和田屋又助。牛飼ひ、五郎吉。

造り物、二重舞臺、見附け鼠壁。納戸口。上の方に建て附けの押入れ。臆病口に中二階。いつもの所に門口。橋がかり竹格子よろしく、幕の内より牛兵衞を、凛々しき捕り手五人にて取り卷いて居る。上手に濱右衞門、柿の鉢卷、黒羽引、代官にて下知して居る。門口の外におりく、女房の形にて内の樣子を窺うて居る。この見得、バタ／＼にて幕明く。

濱右　ソレ、牛兵衞を、踏み附けて、繩ぶて。

捕手　ハツ。腕廻せ。

トかゝるを、牛兵衞ちよつと立廻つて、皆々を投げのける。

濱右　こりや手向ひか。

捕手　やらぬ。

トきつと取巻くた

半兵　イヤ、手向ひは致しませぬ。事の様子も云はず、この半兵衛をやらぬ、通さぬとは、何ゆゑでござりまするな。

濱右　何ゆゑとは慮外の奴の。コリヤ、其方は黒木屋彦三が家来なれば。

半兵　成る程、黒木屋は私しが親方なれども、女房もろとも、この糺の森に別家いたして居りますが、何とぞ致しましたかな。

濱右　イヤ、黒木屋彦三が深く云ひ交した、祇園町の女郎小吟、夜前から駈落ち致したわやい。

半兵　ヘイ。女郎の小吟が駈落ち致せば、なぜ私しに縄かかれと。

濱右　さればサ、小吟が相方彦三儀も、三日以前家出して行くへ知れぬといふ事。それに又ぞろや小吟も親方の内を駈落ち。察するところ、この両人を、其方が匿まひ置くに違ひはない。それゆゑ身共が縄ぶつて詮議するのだ。

半兵　アノ私しを。

濱右　如何にも。速かに小吟を出して、身共に渡せばよし、異議に及ぶと、其方に縄打ち、火水の拷問。

捕手　但し小吟を出すか。

濱右　縄ぶたうか。

半兵　サア。

濱右　サア。

捕右　サア／＼／＼。

濱右　半兵衛、返事はなんと。

半兵　イヤ、覚えの無い小吟が駈落ち。殊に、匿まひしなぞとは露程知らぬ事。よし駈落ちした小吟を隠まはうとも、祇園町の親方や、ぜげんが吟味に来さうなところを

ト捕り手を見廻し、濱右衛門をヤツと見て

立派な捕り手と云ひ、ても仰山なお代官様。

トこの時門口より

りく　その筈でござんす。ありや小吟さんに惚れて居る、濱右衛門とやらいふ侍ひぢやわいなア。

ト云ひ／＼内へ入る。濱右衛門、ギックリ思ひ入れ。

半兵　ムウ。そんなら女房、其方がとつくりと

りく　アイ、よう知つて居るわいなア。

濱右　ヤイ／＼、女、何を云ふ。身共は所の代官。それを濱右衛門とは。

りく　知らいでかいなア。兄さんの話しに聞いた、祇園で

のモヤ〳〵。斯う〳〵いふ侍ひぢやと、よう聞いて知つて居るわいなア。

濱右　そんならわりや、その時の、髪結ひの妹か。

りく　それほど身に覺えがありながら、代官とはえ。

濱右　ヤア。

トぎよつとする。

りく　ても、あざとい、お侍ひではあるわいなア。

濱右　南無三、しくじつた。

半兵　道理で、初めから合點のゆかぬ、捕り手に代官。捕つた〳〵と込み入つたは、こりや彦三さまのお身の上と……サア、思ひの外に小吟どのゝ、駈落ちの詮議。

ト濱右衛門を見て

エヽ聞えた。今まで口說いても聞入れぬ、小吟どのゝ駈落ちを幸ひ、おれが匿まうて居るかと嚇しかけて、引上げようといふ仕事であらうが、さう巧くは、滅多に乘らぬてや。

りく　こちの人、あのマア、阿房らしい顏を見やしやんせ。

濱右　ヤイ〳〵。其やうに武士を嘲弄いたすな。身共も云ひがゝり、代官でゆかずば、元の濱右衛門で、この家を家探し。ソレ、皆の者。

捕手　合點ぢや。

ト奥へ駈け込まうとするを、半兵衛一々引戻し、濱右衛門が腕を捻ち上げる。

濱右　アイタヽヽヽヽ。こりや、どうする〳〵。

半兵　覺えもない事に家探しと、家内を荒す晝がんどう。殊に、似せ代官の化けの皮、ほんまの代官所へ連れて行て、引ッ剝がうか。

濱右　イヤサ、それは

半兵　捕り手の奴等も、大方雇ひ入れ。此奴も一緒に引ッ縛つて

ト濱右衛門を取つて投げる。この拍子に捕り手皆々、門口へ逃げて出て

捕手　モシ〳〵、濱右衛門さま、ちやつとござりませ。

ト濱右衛門、投げられながら

濱右　如何にも、一緒に行かねばならぬこの場の仕儀。云ふ程の事鵙の嘴。エヽ、悪い所へ女房が歸つて來て

りく　なんとしたえ。

濱右　ハテ、目角の強い女ぢやなア。

半兵　コリヤ〳〵。キリ〳〵行かぬと、代官所へ

濱右　イヤ、それには及ばぬ。

捕手　ト門口へ逃げて出る。
　　　折角小吟を
濱右　ハテ、構はずと、雇ひ人、参れ。
　　　ト合ひ方になり、濱右衛門皆々、向うへ逃げて入る。
　　　おりく、半兵衛と顔見合せ
半兵　ハヽヽヽヽ。なんと馬鹿な奴等ではないか。
りく　サア、彼奴と知らず、わたしも歸りかゝつて、内の
　　　様子を聞いて、愕りしたわいなア。
半兵　さうしておりく、そちや最前からどこへ行た。
りく　アイ、河東へ兄様を、呼びにやる人頼みに。
半兵　新兵衛どのに、何ぞ用があるか。
りく　アイ、大事の
　　　ト思ひ入れあつて
　　　イヤ、大事の母さんの年忌が來るに依つて、それで兄さ
　　　んを
半兵　呼びにやるとは。……ハテナア。
　　　トこなしあつて
　　　時に、女房ども。いま馬鹿者が云うた、昨夜から小吟ど
　　　のが、祇園町を驅落ちしたとあるが、もしやおれが留守
　　　の間にでも、其方が

りく　アイ、彦三さまに云ひ交してござる小吟さまは、お
　　　前が以前のお主の娘御と、いつぞや名乗り合うてから、
　　　大事にさしやんすお方ゆゑ、あの二階に
半兵　そんなら幸ひ。彦三さまと一緒に
りく　サア、それもお前に尋ねてからと、わざと別に忍ば
　　　して置きましたわいなア。
半兵　思ひ合うてござる仲、遠慮には及ばぬ。
りく　そんなら、その様子を
半兵　奥でとつくりと
りく　こちの人。
半兵　女房ども。おぢや。
　　　ト唄になり、半兵衛、おりくを連れ、奥へ入る。向う
　　　より濱右衛門引返し、小兵衛と連れ立ち出て來て、花
　　　道にて
濱右　コレサ、小兵衛。折角小吟を引上げようと、代官に
　　　なつて強請りかけたが、たうとうしくじつた。
小兵　どうでこなさんではゆかぬ。これからは、おれが直
　　　に此方の仕事を
濱右　すりや彼の若菜の硯を
小兵　コレ。

ト袋入りの硯を出し
四條河原で骨を折つて、せしめて置いたこの硯、いつでも金になる大事の代物なれど、こなさんに預けて置く。滅多に人に感づかれぬやうに、合點か。
ト右の硯を濱右衛門に渡す。濱右衛門取つて
濱右　成る程、大金になるこの硯。身共が慥かに預かつて居やうが、又、其方が今日の仕事は。
小兵　矢ッ張り若葉の硯ぢや。
ト同じやうな硯を出して見せ
それを型にして、嵯峨の硯屋で彫らせた似せ物。
濱右　そんなら、それで
小兵　細工は流々、仕上げてから逢ふほどに、こなさんはいつもの所に
濱右　待つて居やうか。小兵衛。
小兵　濱右衛門さま、マア、ござれ。
濱右　合點だ。
ト合ひ方になり、濱右衛門、硯を持つて向うへ入る。小兵衛こなしあつて、本舞臺へ來て
小兵　黒木屋の番頭半兵衛とは爰ぢやの。
ト奥より

りく　アイ〳〵、どなたでござんす。
トおりく出て、小兵衛を見て
お前はついぞ
小兵　逢はぬ筈ぢや。おりや坊主小兵衛といふ者。
りく　エ。そんなら兄さんの話し、いつぞや祇園で
小兵　ヤ。
りく　マア、それは格別、その小兵衛さんがわたしの所へ
小兵　尋ねて來たは半兵衛に、ちつと逢はねばならぬ用があつて
ト奥より半兵衛出かけ居て
半兵　坊主小兵衛とやらが、この半兵衛に用があるとは。
ト前へ出る。
小兵　ムウ。すりや、貴樣が黒木屋の番頭。
半兵　ムウ。ついに逢はぬこなた。
りく　コレ。こちの人、あの人は、ソレ、わたしが云うた
半兵　ハテマア、樣子を聞いた上の事。
トこなしある。
小兵　その樣子、とつくりと云うて聞かさう。マア、お内儀、莨盆貸してもらはう。
ト下に居る。半兵衛、おりく心意氣ある。向うより佐

佐市　市、扨、羽織にて、家來連れて出て
　大方この家であらう。
家來　左樣でござります。辻番でとくと承りました。
佐市　相違はあるまい。
　トツゝと内へ入り、半兵衛を見て
　半兵衛、在宿か。
半兵　これは／＼、佐市さまには、見苦しい私しが宅へ、
　ようお入り下されました。まづ／＼。
　ト佐市は上へ、半兵衛、おりくは下手に居る。
りく　申し、こちの人、佐市さまと仰しやるは、その梅園
　家の
半兵　成る程、若菜の硯をお取りに、お越しなされたので
　ござりませうな。
佐市　如何にも。黒木屋に於て其方が願ひの日延べも、早
　今日の日限りなれば、受合ひし半兵衛、いよ／＼若菜の
　硯を
半兵　サア、差上げねば、親方彦三の身の上、其お咎めは
　親大隅へも、かゝりや繫がる命づく。一旦請合つた上は、
　是非とも今日中に、差上げねばなりませぬ。
りく　こちの人。その硯が今に在所が知れぬと、夜もろく
　に寐ずに、屈托して居やしやんすお前、それを今日中に
　差上げませうとは。
佐市　ムウ。すりやまだ、硯の在所が知れぬか。
半兵　イヤ、例へ知れても知れいでも、今日中に吟味いた
　して、私しが甲が舎利になつても差上げます。
りく　それでもお前
半兵　ハテ、女さかしい。控へて居い。
　トこなし。おりく思ひ入れある。此うち小兵衛窺ひゐ
　て居て、この時
小兵　半兵衛、氣遣ひせまい。貴樣の尋ねて居る若菜の硯
　の、在所は、知れてある。
りく　思ひがけない小兵衛。
半兵　硯の在所が知れてあるとはえ。
小兵　即ちおれが持つて居るのぢや。
半兵　アノ、硯を
小兵　半兵衛が身の上に無ければならぬ、欲しがつて居る
　代物。外へ賣るも合點なれど、それでは難儀であらうと
　わざ／＼爰へ持つて來た。
半兵　ムウ、すりや、この間から、おれがさま／＼尋ねて
　居る

小兵　若菜の硯を。
　ト序幕の袋入りの硯を出して見せる。
りく　それを。
　トちよつと寄るを
小兵　イヤ、それから御覽じろ。
　ト硯を持ちかへ
なんと半兵衞、買はずばなるまい代物であらうがな。
半兵　して、その硯は、どうしてお身が手に入つた。
小兵　拾つた。
半兵　ヤ。
小兵　しかも四五日前、四條河原で拾つたこの硯。おれが持つて居ても囘向場の戒名、附ける間に合はぬ式部形の若菜の硯、望みでなくば、この北野に出して居る、干し店へでも賣らうか。
半兵　イヤ、半兵衞が望みの硯、キッと買はう。必らず外へは
小兵　ハテ、目ざして賣りに來た代物、爰でよければおれも勝手。値段は卽ち
半兵　そりや後で、とつくりと應對せう。
りく　そんなら、こちの人、あの佐市さまへ

半兵　サア、それで申し譯が。
　ト佐市に向ひ
申し、佐市さま、斯うなる上は何を隱しませう。主人彥三、一旦買ひ求めし硯なれど、ちつと仔細あつて大切な硯を失ひ、それゆゑ今まで延引、お聞きの通り硯の在所も知れたる上は、金子調達仕り、買ひ求めてキッと差上げませう。とてもの儀に、いま暫らく御容赦を。
佐市　成る程、彥三が噂、身共もさうと推量いたせしゆゑ今日までも日延べ、聞屆け遣はしたれば、この上は半時一時の遲速は申さぬ。後程までに、キッと差上げたがよい。
半兵　エヽ、有り難い。左樣なれば、ナウ、女房ども。
りく　サア、見苦しうとも、奥へござつて
佐市　イヤ／＼、この家に待つては、夫婦の心遣ひも氣の毒。館へ歸り、相待ち申さう。
半兵　左樣なれば、キッと後程。
佐市　最早相違もあるまい。
半兵　なんの違ひが……御苦勞にござります。
佐市　然らば半兵衞、後刻
半兵　お目にかゝりませう。

ト合ひ方になり、佐市、家來を連れ、向うへ入る。おりくこなしあつて
りく　こちの人、この上は、ちやつとあの硯を
ト額にて小兵衞を敎へる。
半兵　そりや合點ぢや。
ト こちらへ來て
小兵衞とやら、いよ〳〵その硯を買はうが、して、代金は。
小兵　サア、千兩とも云はれまい。若菜の硯、相場は知れた三百兩。
半兵　ヤ。
小兵　高けりや餘所へ持つて行かうか。
半兵　イヤ、三百兩が五百兩でも、買はねばならぬその硯。滅多に外へは、賣らす事はならぬてや。
小兵　今の侍ひとの議定では、こりやさうありさうなものぢやし
ト小兵衞もこなしある。向うより德兵衞、男二三人連れ出て
德兵　サア爰ぢや。
ト皆々を連れて入り
サア、出してもらはう〳〵。
ト皆してやかましういふ。
りく　お前方は大勢ザワ〳〵と、出してもらはうとは、何の事ぢやぞいなア。
德兵　何の事とは、おりや祇園町の井筒屋德兵衞といふ者、小吟が親方。昨夜小吟が駈落ちした。今朝から尋ね歩いて、やう〳〵紐が附いた。聞きや、深間の彦三は、爰な親方筋ぢやさうな。それで爰に匿まうてあらう。小吟を早う出してもらはうと云ふのぢや。
りく　サア、小吟さんは
德兵　知らぬとあれば、家探しゝても、連れて行かにやならぬぞ。
りく　モシ、こちの人。聞かしやんしたか。
半兵　ハテ、知れてある。女郎屋のお定まりぜりふ。身請けさへすりや事は濟む。打ツちやつて置きや。
りく　サア〳〵、その身を……エヽ、コレ、兄さんはどうして遲い。これぢやに依つて……つんと辛氣な事ではある。
ト思ひ入れ。
德兵　コレ〳〵。滅多に打ツちやつてもらうまいぞや。此方は大勢の奉公人、連れて歸つて勤めさせにや、親方の

半兵 口が干あがるワ。女郎は賣り物。金出して身請けすりや、云ひ分はあるまいがな。

德兵 サア、身請けしてもらへば云ひ分はないが、小吟が身の代三百兩、受取らうかい。

半兵 今は無い。後に渡さう。

德兵 イヤ、後と云うても程が知れぬ。しつかりとした事を。

半兵 そりや聞き入れた。そんなら、暮れ六ツまべに金拵らへて、キッと渡さう。

ト此うち小兵衞、莨のんで居る。

小兵 イヤ、半兵衞。おれが商ひ、硯の代金三百兩は。

半兵 それも一緒に、暮れ六ツまでに。

小兵 兩方合せて六百兩。

りく 暮れ六ツまでに、こちの人。

半兵 ハテ、金は湧き物。案じる事はない。

りく それでも、どうやら。

半兵 サア、苦勞に、イヤ、黑木屋の番頭、千兩萬兩も振り廻すこの半兵衞。

德兵 成る程、さう云ふ事なら暮れ六ツまで、ちつとの間待つてやらう。

小兵 おれも其うち。

ト立ちかけるを

半兵 滅多に歸さぬ。此方の內で待つてもらはう。

小兵 宿無しのおれ。そりや勝手ぢや。

德兵 おれも幸ひ、近所に居て、この向ひの、觀通寺といふ禪寺の、鐘が鳴つたら取りに來るが、合點かえ。

りく 春の日足は長けれど屈託あれば、短かう覺える。

半兵 退屈ながら、奧で待たうか。

小兵 初めてなれば、案內せう。

半兵 そんならいよ〳〵、暮れ六ツまでに

德兵 エヽ、しつこい。小兵衞、ござれ。

半兵 ト唄になり、半兵衞、小兵衞を連れて奧へ入る。德兵衞も男を連れて、しか〴〵あつて向うへ入る。跡におりく殘り、思ひ入れあつて

りく こちの人が滅多無性に、請合はしやんした兩方の金と云うても六百兩。なんぼう母屋は黑木屋でも、これまでさへ云はれぬ小吟さんの身請け。有りあまるお身の上でも、彥三さまのお骨柔の女郎さんを請出すとは、どう

も、親御大閤さまは元より、嫁御お路さまの手前、遠慮して云はれはせず。せめてわたしが身請けしてと、内證で兄さんとの相談。これもこちの人の苦勞を、少しでも休めたさ。……それにマア、この兄さんは、なぜ來て下さんせぬ爰ぞやしらぬ。

ト こなしある。てんつゝになり、向うより新兵衛、着附け、羽織にて、駕籠を一挺吊らせて出て、門口へ來て

新兵　コレ、駕籠の衆。どうでもちよつと暇どるであらう。この切り戸から入つて、臺所の方に、待つて居てもらはう。

駕舁　ハイ〱。そんなら、この切り戸から

新兵　好い時分に知らせます。

ト 駕籠舁きは切り戸の中へ入る。新兵衛は内へ入り

妹、さぞ待ちかねたであらう。

りく　兄さん、よう來て下さんしたなア。

新兵　其方の方から來た状を、見ると直ぐに此方へ行て、無理やりに頼んで、マア、何がなしにこの松の尾新兵衛が顔づくで、今の物も拵らへた。

りく　そんなら、わたしが、云うた通りに

新兵　ソレ、三百兩。

ト 財布入りの金を出して渡す。おりく取つて

りく　兄さん、段々のお世話、忝なうござんす。

ト 戴く。新兵衛こなしあつて

新兵　妹、何が忝ない。おりや口惜しいわいの。

りく　エヽ。

ト 合ひ方になり、新兵衛、おりく顔見合せて

新兵　サア、其方もおれも生れた時は、松の尾で、一と云うて、二と下がらぬ造り酒屋。親仁様が死なしやつてから、米のとたんに手代の引負ひ、身上もしもつれて、所を立退き、今ではおれは髪結ひ、其方は寶町の筒井へ奉公。縁でがな、親方の仕つけにて、半兵衛と夫婦になり、この北野の住居。ところに、夫のお主の娘御、どうも勤めはさして置かれぬと、祇園の見世へ來ての詳しい話し。身請けの金は三百兩、その代りにはわが身を苦界に

ト おりくを引寄せ、愁ひの心にて

かいしよの無い兄を持つて、たつた一人の妹に、勤め奉公さすと思へば……エヽ、けたいな。商賣が髪結ひゆゑ、額へ手拭はあつれども、おりや男ではないわい。

ト 顔を外けて思ひ入れ。おりくもこなしあつて

りく　眞實の兄さんなりやこそ、わたしが事を其やうに……兩親は死なしやんす。賴りに思ふはお前と、こちの人半兵衞どの。その半兵衞どのゝお主の娘御のお爲に、身を沈めるはわたしが本望。必らず案じて下さんすな。こちや悲しいとも、辛いとも、何とも思やせぬわいなア。

新兵　サア、其やうに立派に云ふ、心の中が……イヤ、これも無駄な繰り言。何事も時世と云へば、世界に無い習ひでもなし。

りく　山川の、底に流るゝとちがらも、身を捨てゝこそ浮む瀨もあれ、と云ふ歌もござんすれば。

新兵　役にも立たぬ述懷は取措いて、妹、其方の賴みなれば、懇ろにする島原の桔梗屋へ、突出しの相談で、三百兩、年のところは其方が入込んだ上、直に相談と、マア金が急ぎゆゑ、詳しい事は後と、迎ひの駕籠を連れて、持つて戻つたその金、早う役に立てゝ、其方も桔梗屋へ行かずばなるまい。

りく　そりや覺悟の前。爰に一つの難儀は、小吟さまの身請けは、お前の世話で、この金で方附けど、また彥三さまの、命にかゝつた若菜の硯。今日幸ひ賣りに來たが、これも三百兩。

新兵　ムウ。そんなら、外に又三百兩。

りく　暮れ六ツまでに調はねば、こちの人の矢ツ張り身の上。

新兵　暮れ六ツまでとは、何を云うても急な事。

りく　どうぞ仕樣はござんすまいか。

新兵　力業にも、腕づくにも、ゆかぬやつは金。

りく　母屋にはたんとあつても、一昨日のモヤ〱から、藏の金に封印が附いて、親旦那もお預かり同然。

新兵　引受けて戻つた半兵衞が、心當ても違ひ、こりや今になつて當惑であらう。

りく　兄さん。

新兵　妹、マア、思案をして見ようか。

りく　その間にわたしは髮結ひ直して

新兵　賣り物に飾る花。

りく　盡きぬ名殘りはこちの人。

新兵　行きともなからうと思へば

ト顏見合せ、ホロリとするを

りく　なんの、人の行かぬ所ではなし、桔梗屋へ行たら隨分派手に、揚屋入りの道中とやらも

新兵　ヤ。

りく　オヽ恥かし。

ト思ひ入れあつて、顏に袖をあて、涙を隱す。唄になり、二人奥へ入る。中二階の障子を明けて、小吟、女郎の形にて、ソロ〳〵下りて來て、こなしあつて、

小吟　いま奥で半兵衛が云やつた、彦三さまは押入れにござるとやら。爰へ來て内の勝手は知らぬが、押入れはどこやら。

トあたりを見廻し、正面の押入れを見付け

嬉しや、大方あの中。さうぢや。

トつか〳〵と行つて、押入れの下の方、開平戸を明ける。中に彦三、忍び居る體にて

彦三　ヤア、思ひがけない、其方は小吟。

小吟　彦三さん。わたしやお前に逢ひたさに

ト中へ入らうとするを

彦三　イヤ、滅多には逢はれぬ。

ト小吟を突き出し、開平戸をピッシャリと中より閉す。外にて

小吟　エヽ、何の事ぢやいなア。折角お前に逢ひたさに……コレ、申し、云はねばならぬ事がござんす。どうぞ爰を

ト無理に開平戸を引明け、押入れの中へ入り、跡をたてる。彦三、上の方の開平戸を明け、獨り出て

彦三　ちよつと樣子を聞けば、既に落ちして來たといふ小吟。わざと逢はぬも、未練を起さすまい爲、この身の

ト此うち上の方の開平戸を明け、小吟出て

小吟　彦三さん。それではお前

ト取りつくを

彦三　ハテ、一つに居ては、半兵衛夫婦が難儀。

ト振り切り、下の開平戸を明け、押入れへ入る。

小吟　エヽ、それでも

トまた小吟も追ひかけ、下の開平戸を明けて入る。彦三、また上の開平戸を明け出る。引續いて小吟も出て取りつくを、彦三また振り切り、下の開平戸を明け、押入れへ逃げて入る。また小吟も追ひかけ、下の開平戸を明け、押入れへ入る。又、彦三上の開平戸を明け出る。小吟追ひかけ出て、やう〳〵彦三に縋り附き、留める。此うち向うよりお蕗出て來て、内へ入らうとしてこの體を見て、門口に樣子を聞いて居る。小吟こなしあつて

小吟　エヽ、聞えませぬ彦三さま、お前に別れたその晩に、

河原に醫者の宥宅が、殺されて居たを、誰が云ふともなく、お前が切つたと、人の噂を聞く度々に、さしこむ癪。それから何の便りもして下さんせず、どうかかうかと案じてばつかり。あんまり逢ひたさに、恐ろしい親方さんの内を忍び出て、昨夜やう〳〵、爰まで尋ね迷うて、お前に逢ひに來たわいなア。

彦三　小吟、これまで互ひに云ひ交した、義理を思うて駈落ちした、其方の志しは嬉しいが、人の噂も天の網。宥宅を殺したはこの彦三。

小吟　エヽ。

ト愕り。彦三もこなしあつて

彦三　サア、これも段々と譯のある事。人殺しの科人と、疾より覺悟は極めて居れど、養父實母のお嘆きを思ひ、殊には半兵衛が深切に引かされ、暫らくこの家に忍んで居れど、どうせこの世に亡き身の上。

小吟　サア、其お前のお心を聞く上は、わたしも共に、コレ、これを見て下さんせ。

ト剃刀を二挺出す。彦三取つて

彦三　こりやコレ剃刀、そんなら其方も

小吟　わたしが磨く心の刃。まさかの時はお前と一緒に、死ぬる覺悟でござんすわいなア。

ト思ひ入れあつて泣くところへ、お路、ツカ〳〵と入り、彦三が持つて居る剃刀を引き取る。

彦三　ヤア、其方はお路。いつの間に

小吟　エヽ、そんならあなたが

みち　アイ、彦三の女房、路でござんす。お前が小吟さんぢやなア。

ト下に居て小吟の胸ぐらを取つて、

胴慾なお心でござんすなア。この剃刀で彦三さまと、御一緒に死なうとは、聞えませぬ〳〵。どうぞあなたを殺すまいと、父樣や實の母樣を始め、半兵衛どの、わたしまで、並大抵な心遣ひぢやござんせぬわいなア。今日も今日とて彦三さまの、御無事を祈りに、この北野の天神樣へ、お千度打つての歸りがけ、思はず見附けたこの剃刀。思へば有り難い、天神樣の御利生。大事の〳〵彦三さまを、一緒に殺す事はなりませぬ。死にたくば、お前一人死なしやんせ。なんぼ構はぬ、阿房なわたしぢやとて、人の殿御をしたいがいに、エヽ、あんまりでござんすわいなア、小吟さん。

ト思ひ入れあつて泣く。

小吟　お路さん、堪忍して下さんせ。なんと云ひ譯もない其お怨み、御尤もでござんすが、憂河竹の身の上さへ、悋氣嫉妬は女子の常。それに引きかへ彦三さまを、大切に思うてござんすお心から、これまでわたしへ訪ひおとづれのお文まで、下さんしたお前ぢやもの。なんの仇に思ひませうぞ。さりながら、人を殺せば下手人と、それが悲しさ。もし死なしやんすなら、わたしも共にと、用意したその剃刀は、これまでお情の御恩送りに、命を捨てるわたしが覺悟。お前の御緣は妨げませぬ。今お顏を見れば、わたしが本望。モシ、コレ、お路さま、彦三さま。お禮は未來から。おさらば。

ト　お路が持つて居る剃刀を取つて、死なうとするを留めて

みち　コレ、待つて下さんせ。小吟さん。義理にも命捨てうとは、嘘にはならぬ。その心底を聞く上は、わたしもさら〳〵、お前に怨みはござんせぬわいなア。

小吟　イエ〳〵、其お詞を聞く上は、どうでも死なねばならぬお前への義理。留めずと殺して下さんせ。

みち　ハテ、好き合うてござんすお二人さんは、矢ッ張り無事で添うて下さんせ。彦三さまの代りに、死ぬるはわたしが

ト　剃刀を取つて死なうとするを、彦三留めて

彦三　イヤ、待て、お路。其方も死ぬるに及ばぬぞ。

小吟　さうでござんす。死ぬるはわたし。

ト　お路、小吟、死なうとするを、兩方をしつかりと留めて

彦三　コリヤ、小吟も、お路も、なんで死ぬるぞ。

小吟　お前の代り、宥宅が下手人。

みち　その下手人は此お路。

彦三　イヤ、二人ともそりや無駄死。四條河原の人殺しは、この彦三と洛中に、噂のある知れた科人。その代りに女子の其方達が、例へ死んでも天下の政道。さてはさうかとおれが身が、遁がれさうなものか、助かりさうなものかと、コリヤ、思うて居るかいやい。

兩人　エヽ。

彦三　男のおれが爲せし罪、それさへ今にえヽ死なぬ。浮世の義理に搦まれて、屠所の羊の行き惱み、死ぬるよりは生きて居る、心の中の苦しみは、マア、どのやうにあらうぞ。

小吟　サア、それも親御のお嘆き。

みち　半兵衛どの夫婦の志し。
彦三　義理といふ、その義理こそは義理なくに
兩人　義理に上越す
彦三　義理はあるまじ。
　　ト三人思ひ入れにて泣く。ゴンと七ツの鐘鳴る。
三人　ヤア、あの鐘は。
　　ト半兵衛兩手を組み、思案しい／＼、うつとりと奥より出て
半兵　日足もだん／＼傾き、もう七ツ。
彦三　ヤア、半兵衛。
みち　そんなら、わたしらが今の
　　トこれにて半兵衛心附き、三人を見て、ちやつと思ひ入れあつて
半兵　ア、、醉うた／＼。怪しからず食べ醉うたぢや。
　　トわざと生醉ひのこなしにて、ひよろ／＼と前へ出て
　　こりや若旦那。小吟さま。イヤ、此方にござるはお路さま、よく入らつしやりましたな。わざともお前を呼びにあげる所、幸ひ／＼。
彦三　コレ／＼、半兵衛。幸ひとは。
兩人　何が幸ひでござんすえ。

半兵　さてはお三人とも、様子を御存じござりませぬか。
彦三　そりや何の様子を。
半兵　そんなら女房おりくめが、まだ何にも申しませぬか。
　　エ、、彼奴め醉うて、どぶさつて居るかしらぬ。
彦三　おりくには、まだ何にも聞かぬが、常と違うて機嫌の體。
みち　殊に、酒に醉うて居る半兵衛どの。
小吟　どう云ふ様子ぢや。ちやつと
兩人　わたしらにも。
半兵　聞かしませう。聞かさにやならぬめでたい様子。其おめでた酒を食べ過ぎて、甚だ酩酊。醉うたに依つて申しあげるぢや。
彦三　して、その様子は。
半兵　先づ、お喜びなされませ。彼の若菜の硯が、手に入りまして
彦三　ヤア、思ひがけない。行き方知れぬ若菜の硯が、ド、ド、どうして手に入つたぞ。
半兵　サア、天の與へと、最前さる者が賣りに參りましたゆゑ、直ぐに求める堅い約束を、桂佐市さまも最前催促にござつて、とくとお聞きなされて、今日差上げる事承

知して、即ち御所へお歸り、暮れ六ツまでに三百兩。

ト また生醉ひになつて

サ、さらりと埒が明きました。

みち　そんなら彦三さまの、お身の上に

半兵　構ひは無し。元の黑木屋の若旦那。

彦三　エ、嬉しや。硯が手に入つたとに、それで安堵。

小吟　さぞ親御さん達も、お喜びでござんせうなア。

半兵　左やう／＼。まだお喜びを申す事は、我れら故主の娘御、この小吟さまを、最前親方が渡りに來て、イヤ、わざ／＼呼びにやつて、段々の詰め開きで、これも身請けして誰れ憚らずに、お路さまは御本妻、此お子は妾。なんと、若旦那。何もかも納まつて、めでたいぢやござりませぬか。サア、めでたい／＼。祝うて一つ〆めませう。お前方も一緒に、サア。

ト 手を打たうとして、三人を見て

これはしたり、どうでござります。お三人とも矢ツ張り其やうにジメ／＼と。エヽ、こりや又寄り合うて、役にも立たぬ悔み云うて、泣いてござつたな。

彦三　なんの、さうではない。ナウ、お路。小吟。

ト 目顔で知らす。

兩人　アイ、さうではござんせぬわいなア。

半兵　イヤ／＼、泣いてござつたぢや。ソレ、目が腫れてある。モシ、お前方も必らず死ぬる事はなりませぬぞ。

兩人　エヽ。

半兵　イヤサ、若旦那と同じやうに、又しても／＼、死ぬるの、覺悟のと、お前方を殺すまい爲に、この半兵衞が五臟を絞る、切ない……サア、醉うて切ない酒の科。この上は暫らく爰で風に吹かれて、醉ひを醒まさねばならぬ。お三人とも御遠慮はない。お路さまは元より、小吟さまも久し振り、奥へ行てしつぽりと、サア、斯う手に手を取つて

ト 彦三に兩人が手を無理に引かせ

わつさりとお前方も、酒々。

彦三　イヤ、それでもどうやら、今の詞の端々

兩人　わたしらにまで嘆きをかけまいと

半兵　ハテ、酒の醉ひ本性たがへず。滅多に違ひはござりませぬ。

三人　それでも

半兵　エヽ、ござりませな。

ト 腰にてわざとをかしう三人を突きやる。唄になり、

彦三思ひ入れ。小吟、お路もこなしあつて、心の濟まぬ體にて、せう事なしに奧へ入る。合ひ方になり、半兵衞、跡に殘り、思ひ入れあつて

半兵　若旦那を始めお二人にも、案じさせまいと、わざと飲まぬ酒に醉うた振り。面白をかしういふ心のうちは早鐘。今のは七ツ。もう一時に六百兩。……常なれば、六百兩が千兩でも、彦三さまのお爲、親旦那に申し上ぐれば、直ぐに金は調へど、この節疑ひかゝりし彦三さまの人殺し。これも三日とお願ひ申したこの半兵衞。云ひ譯立つまでは、黑木屋の家內は勿論、金藏にも代官所の封印が附いてあれば、粒三文の才覺も……エ、、何もかも。

ト思ひ入れあつて

ぢやと云うて、六百兩を急に

トまた兩手を組み、ヂツと下に居て思案する所へ、奧より小兵衞、欠伸しい／＼出て

小兵　ア、、ぐつすりと一寐入りやつた。

ト半兵衞を見て

オ、、半兵衞。今の先鳴つた鐘は

半兵　ムウ。ありや禪通寺の七ツ。

小兵　おりや暮れ六ツだと思うて起きたが、約束までにはもう一時はあるまいが、大方、金は出來たであらうの。

半兵　サア、その金は……マア／＼、大概は出來た。

小兵　そんなら受取つて、硯を渡さうか。

半兵　ヤア。

小兵　サア、尤も議定は暮れ六ツなれども、間も無い事。早う受取り渡しする方が、其方の爲にも勝手がよからうが。

半兵　そりや勝手はよいが、何を云うても肝心の三百兩。

小兵　ヤア。

半兵　イヤサ、金は出來る。暮れ六ツまでには、キツと三百兩揃へて、若菜の硯、受取らにやならぬ。

小兵　イ、ヤ、合點がゆかぬわえ。てまへが今の五音では、暮れ六ツはおろか、明六ツまでかゝつても、出來さうもない。こりや無駄な事に手間どらうより、歸る方がよからうわい。

ト表へ出ようとするを、半兵衞、引廻して

半兵　待て、小兵衞。暮れ六ツまでとは男づくの議定。その刻限も來ぬうちに變替へとは。町人なれど黑木屋半兵衞、滅多にさうはえさせまい。

小兵　成る程、こりや尤も。男の一旦議定した事。オ、、

さうだ。茲で待つは退屈な。それで内へ歸つて待つて居る。金が出來たら、暮れ六ッには限らぬ、いつでも硯を取りに來い。

半兵　ムウ。して又、其方が住所はどこぢや。

小兵　ハテ、知れた河原の蒲鉾、イヤ、河原町か、河東か烏丸通り、どこでも行きつきばつたりに、氣の向いた所が居所ぢや。

半兵　さう云ふ身の上なれば、猶歸されぬ。退屈ながら今暫らく、矢ッ張り奥で待つてもらはう。

小兵　そりや否ぢや。

半兵　ヤ、なんと。

小兵　生れついてこの小兵衛は、片時もヂッと尻を据ゑて居る事が大嫌ひ。達磨同然。そこで坊主小兵衛。いま金渡さにや、居所の知れぬおれが内へ取りに來い。どこぞで待つて居ようわい。

ト又行かうとするを、半兵衛、引戻して、入れ替つて門口の戸をピッシャリさして

半兵　否であらうが、嫌ひであらうが、是非おれが内で待つてもらはう。

小兵　すりや、どうあつても、おれを歸さぬのか。

半兵　ハテ、暮れ六ッまでと約定して、今更變改への仕様が無さに、歸つて待たうとはどこへ。宿無しの坊主小兵衛。例へ此方に金が出來ても、居所知れぬ雲を摑んで、尋ねるうちをまごつかせ、外へ値賣りをせうと思ふ、こりや慾心がきざしたな。

小兵　オヽ、推量の通り、何時でも五百兩や三百兩にはなる代物。暮れ六ッというても、どうやら心元ない。それでいつそ脇外よりは、梅園家へ持つて行て、直に賣りかけたらば、よもや買はぬと云ふ事はあるまい。それで一走り梅園家へ。

半兵　イヤ、そりや猶やられぬ。直に梅園家へ賣られては、この半兵衛が云ひ譯が無い。

小兵　そんなら、てまへが買ふか。

半兵　ハテ、暮れ六ッまでに。

小兵　イヽヤ、もう一寸も延されぬ。いま、金を渡さにや此方へ賣らう。

半兵　そりや又あんまり

小兵　無理合點。早いが賞翫。

半兵　ぢやと云うても、

小兵　金は出來ぬか。

半兵　サア、それは。
小兵　サア。
半兵　サア。
兩人　サア〳〵〳〵。
小兵　所詮、金は出來まいがな。
半兵　エヽ。
トこなしあつて思ひ入れある。中二階よりおりく出て
りく　こちの人。一口の三百兩。ソレ。
ト投げる。半兵衛惘り、取上げて
半兵　ヤア、この金は。どうして女房。
りく　樣子は後で
ト障子をピツシャリ。半兵衛「ムウ」とこなしあつて
半兵　サア、約束の三百兩。小兵衛、硯を受取らう。
小兵　成る程、渡さう。これを待つて居たのぢや。
半兵　なんと、これでも梅園家へ、直賣りに行くか。
小兵　イヽヤ、行かぬ。今のやうに仕掛けぬと、この金が出來ぬ。それで、あゝせぐりかけて、早く埒を明けうといふおれが算段。また商賣々々で、よく書いたであらうがな。
半兵　エヽ、男のやうにもない。流石は……イヤ、何を云うても蛙の面へ水であらう。サア、金渡すから、硯を早う。
小兵　オツと、急くまい。得てこんな時には銅脈を摑むものだ。マア、とつくりと改めてから、硯を渡さう。
ト云ひ〳〵、財布より三包みを出し、一包みを解き
云うても三百兩。數が多い。暫らく〳〵。
トこれより三味線入り、靜かなる禪のツトメになり、小兵衛、金を一兩々々靜かに改める。半兵衛禪のツトメを聞いて
半兵　ありやもう觀通寺の夕刻の勤め、もう暮れ六ツに間が無いが、小吟さまの……それよりは今女房が、思ひがけないあの金を、どうして拵らへた事か。これも氣がゝり。
ト思ひ入れある。此うち小兵衛改め、元の通りに包み下に置き、また百兩取上げ、段々手早く改める。此うち始終禪のツトメ。新兵衛、奥よりツツと出かけ、小兵衛が改めた金を一包みづゝ摺り換へる。半兵衛は思案して居る。小兵衛、三百兩ながら手早に改め、元の通りに包んで下に置く。新兵衛、殘らず摺り換へ、戴いて奥へソツと入る。小兵衛、これを知らず、財布に

入れ、紐なしい〳〵

小兵　少々切れはあれど、正金に違ひはない。

半兵　サア、硯を受取らう。

小兵　ハテ、忙しない。

ト財布を懐へしつかりと入れ、硯を出し

ソレ、約束の、若菜の硯。

ト渡す。半兵衛開き見て

半兵　聞き傳へし双龍の彫り物に、二つ並びし式部形。これに違ひはないであらう。

小兵　なんの違ひがあらう。

半兵　先づ、硯は手に入つた。

ト懐へしつかり入れ

これからは此方の、これも三百兩。

ト小兵衛を見てキツと思ひ入れあつて

お主の爲。ハテ、どうせうなア。

ト始終小兵衛に目を附けながら、ヂツと下に居る。小兵衛もこなしあつて

小兵　半兵衛。硯は渡す。金は受取る。もう用はあるまい。さらばお暇申さうか。

トこれより長吉殺しの合ひ方になり、小兵衛、懐手にて、ソロ〳〵と花道へかゝる。半兵衛、さうはやとキツとなつて立ちあがり、脇差を取つて来て手早に差し花道へツカ〳〵と行て、小兵衛を後抱きに抱き留め

半兵　待て、小兵衛。ちよつと待つてたも。

ト小兵衛、構はず手を出し、半兵衛が両手を捕へ、振り返り、矢張り花道にて

小兵　半兵衛。おれを後ろ抱きに抱き留めたは、何の用ぢや。

半兵　サア、その用といふは、爰は道中、どうも云はれぬ。マア、内へ立歸つてたも。

小兵　イヤ、おりや聞く用は無い。

ト振り切り、行かうとするを、半兵衛、立廻つて向うより留め

半兵　サ、其方に用は無うても、此方に用がある。手間は取らせぬ。マア、平に〳〵。

ト舞臺へ来て、内へ突き据ゑ、門の戸ピツシヤリ閉す。このうち始終土弓入りの合ひ方、最前の駕籠におりく乗つて、新兵衛附いて納戸口より出て、花道にて駕籠立ちどまり

新兵　コレ。ちよつと暇乞ひを

りく　イヤ、未練が起れば……それよりは小吟さんの
新兵　身請けは承知。
りく　さは云へ、半兵衛どのに
新兵　ヤ。
　ト思ひ入れあつて、おりくが顔を見る。
りく　駕籠やつて下さんせ。
　ト垂れを下ろす。新兵衛もこなしあつて向うへ入る。
　内ではこれを知らず
小兵　半兵衛、おれを内へ連れて戻つたは、何の用ぢや。キリ〳〵云はぬか。
半兵　サア。その用といふは、悪黨の貴様に、半兵衛が一生の無心。最前貴様も聞いた通り、小吟どのゝ身請け、これも暮れ六ツの手詰めなれば、もう追ッつけ取りに來る。何を隱さうぞ、小吟どのと云ふは、おれが以前の故主の娘御。今の主人の彦三どのと、深う云ひ交はして外の客を嫌ひ、親方を駈落ちして、此方の内に取り込んで置いたも、この半兵衛が爲には、外ならぬお二人の身の上、添はれねば死ぬるはこりや知れた筋、最前親方が來た時分、身請けする、暮れ六ツまでに金取りに來いと立派に云うたが、有やうは金が無い。尤も母家は黒木屋、名におふ洛中で知れた身の上。藏には有れど、この節ちつと譯があつて、家内に封印。それで手づかへた金の工面。いま貴様に渡したその金も、どうして拵らへたか女房が働き。硯は首尾よう手に入つたが、また身請けの金が手づかへゆゑ、近頃わりない無心なれど
小兵　この三百兩を、貸してくれいと云ふのか。
半兵　サア、長うとは云はぬ。僅か二三日の間。
小兵　若菜の硯は其方へ捲き上げて
半兵　サア、一旦貰うたこの硯を返して置いて、金を此方へと云ふが道なれど、この硯も無ければならぬ命づく。假名で云へば、硯も借り、金も借りる半兵衛が無心。
小兵　そんなら硯も返さずに
半兵　金を貸せとは、無理と云はうか、非道と云はうか。そこが救けた小兵衛、てまへだけ、無理と知つて頼んで見るも、おれは素人、黒木屋の番頭。貴様は玄人、坊主小兵衛。サア、萬一間違うても、取る事に如才の無いと、これも見くびつて云ふのではないが、おれが心を打割つて、云うて見づくのこの無心。
小兵　イヤモウ、呆れてとんと物が云はれぬ。おれも名うての悪黨、さま〳〵の働らきを、商賣にして居れど、其

また上を行く半兵衛ってまへはたくましいものぢやなア。よう云うた。出かした。買つた代物は其方へ取り込み、その代金は只貸してくれいとは、出かした。男ぢや。面白い。こりや一番この金を貸してやらう、と云ひたいがマアならぬ。否だ。

半兵 ヤア。

小兵 云うても、坊主小兵衛。さう云ふ鈍い者と思うて居るか。

半兵 なんの、さうではないが、今の入り譯をとつくりと

小兵 イヤ、われがたんくわにかゝつては、この後働らき仲間へ、おれが面が出されぬ。べら坊つくすな。

半兵 すりや、これ程に云うても

小兵 貸す事はならぬ。

ト立ち蹴に蹴る。この時ゴンと暮れ六ツの頭を打つ。半兵衛、起きあがり

半兵 ヤア／＼、ありやもう暮れ六ツ。

小兵 硯の金を早く取り得。これから跪く、うぬが態わい。

ト引退け、行かうとするを、半兵衛こなしあつて

半兵 非道と知つて非道をするも、お主の爲。

ト後より一かせ切る。小兵衛「ワツ」と倒れる。直ぐに乗りかゝり、口へ手を當て、咽喉へ突ッ込み、抉る。小兵衛落入る。半兵衛、止めを刺し、死骸の懐より財布を取出し、死骸を片脇へ寄せ、蒲團を取つて來てかむせ、刀の血を拭ひ、鞘へ納め、身拵らへして

半兵 もう佐市さまへお約束の刻限なれば、ちつとも早く。

ト財布を懐へ入れ、硯を取出し、花道へ行かうとする。向うより佐市、家來に箱提灯を持たせ走り出て、花道にて行合ひ

佐市 其方は半兵衛でないか。

半兵 佐市さま、只今御所へ上がりますところ。

佐市 すりや、硯はいよ／＼手に入つたか。

半兵 お喜び下さりませ。やう／＼手に入りし若菜の硯。

ト袋入りの硯を渡す。佐市取つて

佐市 途中ながら大切な御用の品。ソレ、提灯。

家來 ハツ。

ト提灯を差出す。佐市、とくと改め見て

佐市 ヤア、こりや、尤も形は式部形なれども、常の瓦にて拵らへし、真赤な似せ物。

半兵 エヽ。

ト大きに愕りして

すりや、その硯は似せ物とな。

佐市　一度ならず、二度ならず、武士を欺むく半兵衛、奇ッ怪至極。この趣き御主人へ申し上げ、黒木屋親子の出入りは止め、祟りは追つて、待つて居れ。

ト硯を打附け、行かうとするを

半兵　イヤ〳〵、申し、佐市さま。

ト裾を取つて留める。

佐市　エヽ、面倒な。御用の妨げ。

ト振り切り、家來を連れて走り入る。半兵衛、さまざまこなしあつて、硯を取上げ

半兵　この硯が似せ物とは、さては小兵衛めが。

ト本舞臺へ立戻り、蒲團を取つて死骸を起し、懐中をいろ〳〵改め見て

ヤア〳〵。こりや外にも硯は……ホイ。

ト捏と下に居るところへ、向うより徳兵衛、提灯持つて走り出て

徳兵　サア、約束の暮れ六ツは鳴つてしまうた。身請けの金を受取りませうか。

ト半兵衛、下に居ながら

半兵　せめて身請けは、ソレ、三百兩。

ト財布を抛つてやる。徳兵衛取り上げ

徳兵　ドレ〳〵。三百兩なら、ちよつと改めて

ト財布を解き、手早く金を改めて、惘りして

ヤア〳〵、こりや三百兩ながら、百足小判の似せ金ぢや。

半兵　ヤア、それも似せ金とは。

ト取り上げ見て、惘り

ほんにこれも似せ金。最前小兵衛が改めたに、こりやどうぢや。

徳兵　似せ金を掴ます半兵衛。所詮奉公人も返すまい。この通りを代官所へ。さうぢや。

ト向うへ走り入る。

半兵　コレ、待つた、親方、それでは

ト門口へ追ひかけ出るところへ、五郎吉、走り出て來て

五郎　モシ〳〵、半兵衛さま。親旦那大閤さまを、代官所から呼びに來て、河原の人殺しは、いよ〳〵彦三さまと知れ、行く〳〵知れねば人質と、親旦那は直ぐに揚り屋へ、お入りなされたわいの。

半兵　ヤア〳〵、そんなら親旦那は揚り屋へ。

五郎　この樣子を筒井の御親子へも知らさにやならぬ。ソ

レ。

ト引返して走り入る。半兵衛、向うをキッと見詰めて

半兵　もうどうあせつても跪いても、叶はぬ時節。この上は町人ながら武士の果。ムウ。さうぢや。

トこれより獨吟になり、半兵衛、しな〳〵と内へ入り、納戸より角行燈を出して來て、硯を引寄せ、右の行燈へ書置を書く。此うち始終獨吟にてよろしく、書きしまひ、脇差を鞘ながら取上げ見て

この一腰はその以前、小吟さまの父御、本間彌太夫さまより拜領。いま町人と成り下がつても、大切に所持したが、思へば故主と今の主人へ、心盡しも水の泡。あはれ最期は、昔忘れぬ正木半兵衛。

ト諸肌脱ぎ、脇差を拔き、手拭に卷き、グツと腹へ突ッ込み、引き廻すと、向うバタ〳〵にて、新兵衛、提灯を持つて走り出て來て、直ぐに本舞臺へ來て内へ入る。

新兵　サア〳〵、小吟どのゝ身請けは首尾よう濟んだぞ。

ト半兵衛を見て、恟りして

ヤヽ、こりや何ゆゑに半兵衛。

ト駈け寄り、後より抱き起し、介抱して

コレ、半兵衛。何ゆゑ腹切つたのぢや。樣子は〳〵。

ト半兵衛こなしあつて

半兵　オヽ、新兵衛どのか。

新兵　新兵衛ぢや〳〵。

半兵　コレ、いま死ぬるのは彦三さまの人殺しの下手人。又、小吟さまの身の上も、思ふに任せず、それに梅園家の硯の申し譯。事の樣子は、行燈の書置。

新兵　オヽ、それで樣子が解つたが、殘念な事しられたなア。小吟どのゝ身請けは、氣遣ひせまい。坊主小兵衛に渡さつしやつた硯の金を、百足小判と掏替へて、代官所へ行くといふ親方に出會うて、身請けは此方へしたわいの。

半兵　ヤヽ。そんなら小吟さまは首尾よく身請けは濟んでしまつた。

新兵　首尾よく身請けは濟んでしまつた。

半兵　エヽ、忝ない。まだその上に合點のゆかぬは、女房が最前の三百兩。

新兵　コレ、それも半兵衛が爲を思ひ、ちつとのうち、妹おりくが、島原へ。

半兵　ヤヽヽ。

ト恟りする。新兵衛介抱して居る。奥よりバタ〳〵に

て、お路走り出て
みち　コレイナア。彥三さんは半兵衞さんの死なしやんすを聞いて、どうも生きては居られぬと、書置して、裏から拔けて死に丶行かしやんす。小吟さんも留めながら、附いて行かしやんしたわいなア。
新兵　ヤア、そんなら彥三さまも、死ぬる覺悟か。
トこれにて半兵衞、キツトなつて
半兵　イヤ、お二人は殺さぬ〳〵。
ト身を構はず駈け出すを、兩人介抱して
新兵　尤もぢや〳〵が、身を踠くと、コリヤ疵が
半兵　イヤ、二人は殺さぬ〳〵。
新兵　コレ、手負ひだてら身を踠いては、ならぬぞ〳〵。
ト押へて居る。お路、ウロ〳〵して居るを
コレコレ。お路さまは、爰構はずと、ちつとも早くお二人の後を。早く〳〵。
みち　サア、どこを當途に尋ねて行かうぞいなア。
新兵　マア、委細かまはず、東山〳〵。
みち　そんなら直ぐに、東山へ。
新兵　ちつとも早う。
みち　さうぢや。

トこなしあつて、向うへ走り入る。半兵衞、段々弱りながら、すつくと立ちあがり
半兵　どうでもお二人は、殺さぬ〳〵。
ト次第に聲も微かになり、新兵衞はハラ〳〵して介抱する。半兵衞こなしあつて、バツタリと俯向けに轉ける。新兵衞思ひ入れ。
新兵　ホイ。
トちよん〳〵。返し。
本舞臺、三間の間、眞中に高土手の太夫座。これに常磐津連中並び居る。うしろ打拔き、鳥邊山の模樣清水堂の塔を遠見にして、舞臺先き花道、一面に菜種を引出し、爰に彥三、小吟、お路、兩方より留めて居る。ゴン〳〵にて、道具とまる。
彥三　エヽ、そこ離せ〳〵。
兩人　申し、彥三さん、マア〳〵待つて、下さんせいなア。
〽ゆうべまで、水の出花をひきかへて、今日の彥三が身の知死期、妻の願ひもかのへさる。八阪を過ぎて爰までも、慕ふ菜種の亂れ咲き、〽花には雨もふり袖の、濡れてこがる丶殿御は仇に、なびく枝振り常磐の松と、契り

しかも叢雲に、月々毎の紋日をも、小吟さまへの心意氣、どうぞわたしも百分一、あやかりたさにいろ〳〵と、云うたとて口說いたとて、聞入れて下さんせにや、いつそ覺悟の娘氣の、死なぬ先から回向の、かねて憂き思ひ、〽かこつ寐覺めの色三味線に、合はぬ調子の其つらさ、〽逢うて寐た夜の報いか罪か、法のえにしも花ごゝろ、〽佛樣にも凡夫から、粹な手管の方便は、深い〳〵の妹と脊に、勤めする身に誠は無いと、譯知らぬ、常の女中へ追從に〽結ぶの神の仲人口、大事の殿御寐取られて、さぞ腹が立たう、無理ぢやない、ふッつり思ひ切つたぞやと、云うては見たがこの胸が、やつぱり思ひ、えゝ切られぬ、堪忍してと口說き泣き、〽おかしやんせ、口車、かけぬかけるのその譯も、よう汲み分けて居るわいな、〽さう出やしやんすりや此方も意地、せんから馴染のこの小吟、〽いやいや、此方は女夫仲、〽いゝやわたしが、いや、わしがと、よれつもつれつさるおかせ、まとひついたる袖たもと、春に飛びかふ蝶つがひ。

ト三人よろしく振りあつて、小吟、お路、彦三を追へあるく。此うち向うより小和田屋又助、やつし、尻からげ、風呂敷包みを脊負ひ、飛脚提灯を提げ、東の揚げ幕よりお富、赤前垂れ仲居の形にて、駒下駄を穿き扇九と書いた提灯を持つて出て來る。

〽いや狀使ひのよたんぼう、文の便りや京中で、男まさりの扇九の仲居、顏の赤いは前垂れの、うつりやすいが色の癖、その僞りを運びゆく、歸る鴈金來る燕、どこを當途か急ぎ來る。

ト又助、お富、本舞臺へ來る。此うちに小吟、お路、彦三を引き合ふ中へ兩人入る。小吟、又助を彦三と思ひ、引き合ふ。彦三はお富を小吟と心得、手を取つて行く。皆々一時に顏見合せ、悄りして

又富　エ、何をさつしやる。

吟路　ツイ人違ひで

彦三　免して下され。

とみ　ヤア、お前は彦三さん。

又助　ほんに、小吟さんでござりましたか。

小吟　わたしやどうせうぞいなア。

トこなし。

とみ　向うにござんすは、誰れさんぢやと思うたら、小和田屋の又助さん。

又助　この提灯が見えぬか。此方は一目見ても、扇九のお

富どのと見てとつた。さうして今時分、どこへ行くのだ。
とみ　清水の浮無瀬にござんす、お客の所へ迎ひに行て、先は大の捻ぢ上戶。それを呑み伏せて來たわいなア。
又助　ほんに、今での座敷持ち。時に、お前方は今時分に……ア、、どうやら心中といふやうな
彥三　ア、、コレ〳〵、そんな事ぢやない。鳥邊山の日親樣から、妙見樣やら、觀音樣やら
ト愚圖々々云ふ。
又助　それでは淨土、法華のごたまぜだ。
とみ　コレ、又助さん。なんの三人で心中がなるものかいなア。
トお路を見て
シタガ、お前はついに見ぬ
みち　アイ、わたしや、この彥三さんの妻
ト云はうとするを
彥三　ア、、コレ〳〵。詰まらぬ身ぢやに依つて、其方は仲居奉公の新參者。
とみ　その仲居奉公も、勝手が知れねば勤まらぬもの。
又助　そりや便り屋の又助も、日々の狀便、客の方から、首尾よう返事を取つて來ねば、色達の機嫌が惡し
とみ　サア、お客も機嫌をとり鐘の
又助　朝の歸りが肝心勘文。
へ赤前垂れの明けがらす、可愛い旦と憎い朝、眠い顏にも笑ひ、翌日の文の便り屋が
又助　うまい返事を
とみ　仲居は機嫌を
へ取るものに取りては、紋日を受取り、物前掛取り、お髭の塵取る、粹と見て取る、手を取る、床取る、德を取る、酌取り、口取り、下戶、上戶、數取る客にも勝を取る、色取りなんぞは、あそこの隅ではこそ〳〵、こゝの隅ではちゝつくわん、ゑりくりくぜるを取持ちで、ぜんぞろ〳〵、してていぜんぞろ、とんからり、どゞんどんつく太鼓に振る鈴、ひうやひやろ吹くは竹笛、合ひの手は中ちつくり、三味の手、てゝてん、つるてんを彈かせて下方に、ちりからちりから、たつぽうを打たせて、さつても心が浮いたえ、浮いた浮世のわざくれは、おじやれ女の一節にへ吉田通れば二階から招く、しかも鹿の子のナア振り袖が、ちよいと招く、泊りかえ、泊らんせ、旅籠が否なら木賃でも、ア、とまろぞえ、その上、お寐間のお伽が負けぢやぞえ、やすいもの、振りも吉田の小

手招き、〽雨に天目でサアあふるべいていなやれ、さてさて尤もぢや。さまづ抑へべいか。肴がない、おやゝれ醉うたでおんぢやる、サ、いけぬくぜつなりやくすぐるべいとの、づで〳〵つで〳〵〳〵このほんかえ。

ト兩人よろしく振りあつて

とみ　仲居の秘密は、此やうなもの。

又助　ヤレ〳〵。とつけもない事にかゝつて隙どつた。

とみ　ほんにわたしも、急な用。

〽皆さんこれにと口輕も、機嫌上戸の後や先、しどろもどろに走り行く。

ト三重にて、又助お富、下座へ入る。

彦三　けはしい中へ、いろ〳〵な者が來て

吟路　そんならどうでも

彦三　とても長らへ居られぬ身の上。

吟路　アノ、二人ともに

彦三　仲よう連れ立つ、死出三途。

吟路　嬉しうござんす。

〽急きたつ心急きとめられ、又も向うへ代參り。

ト山伏の合ひ方になり、向うより奇妙院、頭巾着た山伏の形、錫杖を振つて出て來る。

〽さんげ〳〵、六根淸淨、大峰、八代、金剛童子、大日大事の〽鼻の下、守らせたもふ一代の、本尊とかけの山道も、虛空むてんと歩み來る。

トこの文句にて、奇妙院、本舞臺へ來て、二人を見て

奇妙　ハ、ア、聞えた。よる夜中、美しい女中さん二人に息子さん一人は、なんぞ悋氣の云ひあがりで、ひよいとつまらぬ心になつて、花の盛りを、散らさうとは〽なまぐさばんだ、ばさらな浮氣、大聖不動明王は、外には怒りの茨の枝、內には慈悲の花かづら、ざツくの纐の白旗や、利劍に拂ふ鬼薊、實相無漏の早咲きは、南枝始めて華嚴經、藥師は瑠璃のつぼ菫、おんころ、ころ、との小手毬も、一イ二ウ三イ四オ十ウとよんでは、ちよさんさんばい、ちよこんこんぎやう、ちよろく六字の彌陀の梵字とぞ〽敬まつて曰す。

サア〳〵、お初穗、心持ち次第。これからは諸人愛嬌、息災延命の、守をあげませう。

小吟　イエ〳〵、もうそこどころではござんせぬ。

ト簪を拔いて

これを進せうほどに、早う行て下さんせ。

ト奇妙院取つて

奇妙　こりやお初穂の代りに、簪とは、女中を守りの辨財天。

ト祭文になる。

へさるほどに、これは又、勿體なくも竹生島、辨財天の御由來。くはしくこれを尋ぬるに、津の國浪花の天王寺、佛法最初の御寺なり、本尊何かと尋ぬるに、青面童子で庚申、聖徳太子の御建立、三水四石で七不思議へ龜井の水の底清し、千代に八千代にさゞれ石、巖となれや八幡山、八幡に矢橋の渡し守、沖ゆく船から眺むれば、女浪男浪の絶え間より、サア、ゆるぎ出でたる島とかや。

彦三　ア、コレ。もうよい〳〵。

奇妙　エ、コレ。もちつと聞かしやれ。その辨財天の利益の底を、聞かぬはまだ野暮々々。

へ辨天さんにしつぽりと、抱かれて顔を巳待ちとは、豆腐もぐツつりくづにの口舌、嘘の鐵砲放さうと、しやんとかまへし錫杖を、振り立て〳〵急ぎ行く。

トこれにて奇妙院下座へ入る。

彦三　サア〳〵、また邪魔の來ぬうちに

吟路　彦三さん。

彦三　お路、小吟。

へはや東雲と三重の帶、三つに搦みしこま結び、鳥邊の煙と消えぬらん。

トこの文句にて、三人覺悟のところへ、向うバタ〳〵新兵衞、濱右衞門を追ひかけ出て、立廻りあつて

新兵　硯の盜賊濱右衞門。

濱右　何をちよこざいな。

ト立廻りにて、新兵衞、濱右衞門を押へ、硯を取る。

彦三　ヤア、そちや新兵衞。

新兵　若菜の硯、手に入りました。

ト彦三に渡す。濱右衞門、刎ね起きて立廻りのところへ、又助、下座よりとつて返して、濱右衞門を捕へ

又助　若菜の硯出る上は

新兵　人殺しの科は、半兵衞が切腹。

吟路　すりや、彦三さまは

新兵　死なつしやるには及びませぬ。

彦三　エ、忝ない。

又助　先づ、今日はこれぎり。

トめでたく打出し。

河原噂京諺（終り）

色則是空

是業追善

則二十七回忌を

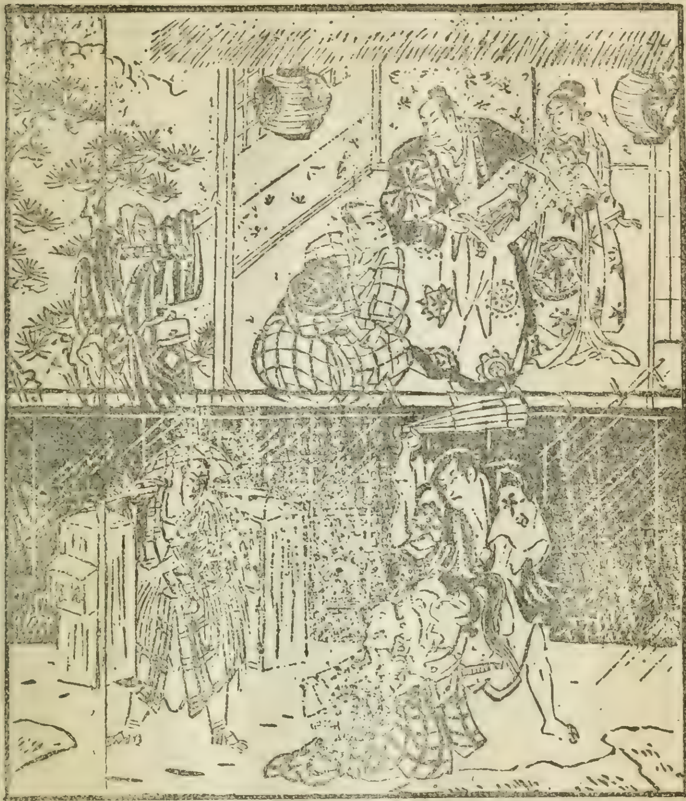
御ひいきに

すがりて

垣衣草手向發心

三

幕



初演の櫓下番附

垣衣草手向發心

向島弘福寺の場
中田屋座敷の場

序　幕

役名――本田次郎近經、刀屋石見。同娘、お花實ハ敦經息女錦の前。同手代、半七實ハ冠者太郎義基。忠基息女、野分姫　下部、關田平。夜鷹蕎麥賣り久六實ハ井場十藏勝重、高慢寺の小兵衞。石濱眼八。竹門のおとら婆ア。料理人、中田屋太郎兵衞實ハ鈴木三郎重家　同下女、お松實ハ景淸娘人丸。修行者、聖天町の大日坊。

本舞臺、三間の間、正面に寺の練り塀、この前に松の大樹、吊り枝、上の方に葭簀張りの水茶屋、掛け行燈の荷足、猪牙船、一方にお煎じ茶と書きつけあり、長床几直し、すべて向島弘福寺前の體。幕の間より、石濱眼八、着付け、馬乘り袴にて、遠乘りの見得にて立ちかゝるを、田植の百姓留めて居る。高慢寺小兵衞、着付け羽織、一本差し、粹な拵らへにて立ちかゝる。これを水茶屋の亭主留めて居る。この見得、神樂にて、幕明く。

皆々　二人ながら、マア／＼、待たつしやい／＼。

眼八　イヤ、退け／＼。

小兵　留めさつしやるな。放さつしやい／＼。

亭主　ハテマア、待たつしやい。こりや一體、どう云ふ喧嘩でござる。

眼八　身共、今日この向島へ遠乘りの折柄、あの町人めが慮外ゆゑ、料簡罷りならぬ。

小兵　アレ／＼、あゝ云ふ野暮を云ふ。暮れの待乳山、庵崎隅田堤と、此方は洒落ても、刀をひねくり、洗ひ鯉の三枚と、騷ぐゆゑのこの喧嘩。

眼八　ヤイ／＼、素町人め、身共が馬上にてかけるを、なんと吐かした。

小兵　知れた事、この向島の土手を遠乘りとは、裃を蹴上げの三圍に、髮もだいなし、これではあやま針の料簡ならぬ所なれど、人は武士なぜ傾城に嫌がられと云ふ句も

あるゆゑ、流して堀へ越さうと云ふを、あの腹立ち。

眼八　おのれがその雜言ゆゑ、身共も免さぬのだ。して、其方は何者だ。

小兵　高慢寺小兵衞と云ふ、小鬢な小洒落の小機轉の利いた通人の町人サ。

ト衣紋をいぢつて居る。

眼八　身は岩永が家來、石濱眼八と云ふ者。斯く遠乘りに出しも、平家の殘黨、殊に彼れらが信心なす、淸水寺の髻の觀音諸とも、詮議の爲サ。

小兵　そんな事の相談なら、拔け目のないが高慢寺。

ト眼八、思ひ入れあつて

眼八　左樣ならば、汝も詮議の一通り。この上は慮外免して、以後は別して

小兵　お目をかけられ下さるとは、こいつは有り難いわえ。

皆々　そんならお前方は仲を直して。

眼八　却つて身共が家來も同然。百姓ども、その通り、平家の殘黨、義經が忘れ形見、冠者太郎義基、彼れらを詮議仕出せば、これとても鎌倉どのよりの御褒美。

皆々　そりやアわしらも耳寄りだ。

小兵　何かの事は、お近付きの爲。

眼八　然らば小兵衞とやら、あの茶屋にて。

小兵　サア、ござりませ。

ト神樂になり、眼八、先に立ち、小兵衞、皆々下座へ入る。亭主は茶の拵らへして居る。摺り鉦入りの出の唄になり、向うより、刀屋石見、親仁のやつし、羽織の形に杖を突き、後より、お花、振り袖娘の形。半七着流し、手代の形にて、風呂敷包みを持ち出て來り

石見　娘も半七も、何をして居るぞいやい。

はな　父さんの忙しない。このマア長い日に、靜かに行かしやんせ。

半七　私しどもは追ひつかれませぬ。お早いお足でござりまする。

石見　その筈ぢや、杖ともには三本で歩くに依つて、早い筈だ。若い時には四本の足で歩いたて。

半七　ほんにマア、旦那樣のお氣の輕い。

石見　サア／＼、足の輕いうち、秋葉樣へ詣つて來うか。

はな　父さん、先へ行かしやんせ。わたしや後から半七と。

ト半七の側へ寄らうとするを

半七　モシ／＼、道々も云ふ通り、ソレ、人目もあれば、とんと私しとは、知らぬ振りにて。

はな　ほんにさうであつた。サア父さん。
石見　娘、來やれ。
ト本舞臺へ來て
サ、爰で茶を呑んで行かうか。
はな　父さん、あんまり爰はバツとして。
半七　モシ、今の知らぬ振りをな。
ト思ひ入れ。
石見　知らぬ振りとは。
半七　ハテ、白旗へは、まだ餘程あると申す事でござりまする。
石見　ハ、、、、。
ト床几へ腰をかけ、莨をのむ。水茶屋の亭主、茶を運ぶ。
大日　鎌倉の新清水釣り鐘建立。
ト流行り唄になり、向うより、大日坊、毬栗、黒衣の形にて鉦を叩き、おとら婆ア、講中の婆ア二人、やつしの形にて鉦を叩き、講中大勢、釣り鐘を地車に載せ、古鏡、煙管の潰しを笊へ入れ、奉加帳などを付けて、これを引いて出る。
皆々　南無阿彌陀佛々々々々々。

ト飾を付けて云ひ〱、本舞臺へ來る。
とら　コレ〱、大日坊どの、歩き草臥れた。茶を一つ呑んで行かうかいなア。
講中　イヤモウ、茶なりと水なりと呑まにやア、聲が嗄れて、御詠歌も念佛も續かぬわいの。
大日　これはしたり、また茶を呑むのかいな。聖天町から爰まで、大川橋一つ越したばかりで、二度茶を呑むのか。修行はやう〱米が三合に、錢が二十四文に、雁首二つに古鏡。これでは釣り鐘の建立がならぬ。もうちつと、やらかさつしやい〱。
とら　何を口強情な。この鐘も久しいものだ。
大日　さればサ。鎌倉新清水の清玄阿闍梨さまが、建立しかけて、二十七年後に死なれた。そこでその追善に、わしが建立。
講一　奇特な事と思ふから、わしらが寄つて此やうに
講二　建立に歩けど、溜つた錢金は、何所へやるのぢや。
大日　ハテサテ流石は凡夫心。コレ、よく物を思つて見さつしやれ。今の一朱は八百三十二文。米が上がつて百に一升、修行の金も溜らぬが、釣り鐘は出來上がり、もう供養前なれば、鍛冶町の西村へやる金と、鼻の下の食殿建

立、鰹の皮の箔代に、阿彌陀も光る鰯のぬた。入佛供養の堂前を、一切りひやかし數の子まで、茶漬の菜にやらかせば、金も溜らぬ筈の事よ。

とら　イヤハヤ、呆れ果てたお坊だわい。

講一　それ〱、もうわしらは構はん程に

講二　釣鐘も爰に置いて。

　ト行かうとする。

大日　ア、、コレ〱、婆さん達〱。こなた衆に見放されては、天道大日坊も、天の岩戸へ引込まにやアならない。あやまつた〱。

　ト留めるを、おとら、振り拂ひ

とら　エ、、知らぬわいの。サア〱。講中の衆、行きませう。

　トこれより三味線入りの禪のツトメになり、おとら、先に皆々下座へ入る。大日坊、見送り

大日　エ、、忌々しい。罪の深い生れながら、三途川で洗濯しさうな婆アめらぢやなア。

石見　なんと、一服のんだら、秋葉樣へ詣らうか。

はな　ハイ、それがようございます。

　ト此うち、大日坊、フツと、お花を見て、舌舐づりをして、思ひ入れあつて

大日　鎌倉新淸水釣り鐘建立。

　トお花と半七のかけて居る床几の眞中へ腰をかけ

お志しはござりませぬか。

　トお花へ摺り寄る。おはな、半七、悧りして

半七　これは滅相な修行者。

はな　穢ならしいわいなア。半七、おぢや。

　ト云ひ〱、上の床几の石見のかけて居る所へ行く。大日坊、お花に見惚れ付いて行き、又おはなの側へ腰をかける。

石見　ハテ、うそ氣味の惡い坊樣。

　ト云ひ〱、おはなを連れて又、半七のかけて居る床几へ三人腰をかける。大日坊、矢張り付いて居て

大日　釣り鐘建立、お志しはござりませぬか。

　ト云ひ〱、石見を引退けて、お花の側へ腰をかける。半七、お花、嫌がつて、ヒヨイと立つ。大日坊、床几が跳ねて尻餅をつき

アイタヽヽヽ。こりやアうぬらア、この貴い名僧智識を、珍事もうよう、中の字な目に違はして、腰骨手足も痺れ、京へ登つて、すてんぺんまでピリ〱と痛い。ア

イタ、、、、。

ト御山に云ふ。石見、半七、お花を圍ひ

石見 コレ／＼、汚ない穢いお坊……ではない、貴い有り難い御出家様。娘がかけて居る床几へ、無理に腰をかけさつしやるに依つて、痛がつてこちらへ來りやア、付いてござる。氣味惡さに退いたれば、床几が傾いて、獨りでにこけられたのぢや。

半七 さうでござりまするとも。云はゞ怪我の張合ひ。其方の粗相ぢや／＼。

大日 喧ましいわえ。此奴等は、この有り難い名僧を、酷い目に遭はして、怪我だと云つて事が濟むか。親仁と云ひ、生白けた二才野郎、相手と云ふはその美しい姐さんだ。おれが腰をぶつただけ、お娘が腰の拔ける程な目に遭はせにやア、おれが腰の番ひの工合が惡いわえ。

半七 これは又滅相な。料簡すれば方圖もない。

大日 この野郎め、退きやアがれ。相手のお娘を。

ト お花に抱きつかうとするを半七、石見支へるを又、引退ける。この立廻り。石見、大日坊が手を捉へ引ツ張る。これにて兩人、グル／＼と廻る。此うち、半七お花の手を引き、下座へ入る。大日坊、石見、グルグルと廻り、目の陸ふこなしにて、石見、大日坊を突き放し、下座へ入る。大日坊、矢張りグル／＼と廻つて居る。引違へて眼八出て來る。大日坊、眼八の手を取つて顔を見合せる。合ひ方。

眼八 大日坊ではないか。

大日 石濱眼八さま。

眼八 兼て其方に頼み置きし、平家の落人の儀は。

大日 お氣遣ひなされまするな。わしが客は上總七兵衛景清、その娘の人丸も、わしが世話をして、この中田屋へ預けて置く位の事。落人詮議の手蔓をして置きました。

眼八 それは重疊。して又、平家の一類が信心をなす、尊の觀世音は。

大日 その儀は未だ手に入りませねども、心を付けて詮議仕出し、お手渡し致しまする。

眼八 出かした／＼。殊に重忠の家來、本田の次郎も落人詮議。彼れに手柄をさせぬやう、隨分ぬかるな大日坊。

大日 ハテ、仕負ふせたら金儲け。如才があつてよいものか。

眼八 でも、小氣味のよい大日坊。何かの事は秋葉の地内で。

大日　三尺坊の小隅にて、密かに委細を。

眼八　申し合さう。もうこの上は、平家の奴等は。

大日　ハテ、知れた事。かんまみ陀佛サ。

ト唄になり、眼八、先に大日坊、鉦を叩き、思ひ入れあつて、下座へ入る。あと合ひ方にて、下座より石見お花を連れ、小兵衛、出て來て

小兵　さて〳〵舅どの、好い所で逢ひました。殊にお花を同道とは、馬士ぢやアないが、仕合せよしと有り難いわえ。

ト床几へ腰をかける。お花、合點のゆかぬ思ひ入れにて

はな　父さん、お前を舅どのと云はしやんすわえ。

石見　成る程、わしを舅とは、合點がいきませぬ。

小兵　ソレ、兼て刀職の同商賣、金の入用の時には、これまで二十兩三十兩かしの木。催促も猿すべりにしないのは、お花坊を北の方にせう心意氣。それを知らぬ顏の半七と云ふ、手代が第一氣に喰はないが、ハテ、それもお花を女房にさへくれゝば、今までの貸し金に利息も付けず、たゞ鎗屋町はわしが町内。細長くとも聟どのゝ、眞實な心意氣。まだそればかりぢやアない、コレ爰に。

ト懷中より袱紗包みの短刀を出し

有り難彌八の玉に疵とは、コレ、性が知れぬが痣丸の短刀。無銘なれども業物に違ひない。目利きの舅御石見どのに、見てもらひたい。

ト差出すをお花、思ひ入れあつて

はな　ナニ、痣丸の短刀とや。

ト思ひ入れ。石見、短刀を取つて見て

石見　成る程、こりや痣丸と云ふべき短刀の金味。

ト思ひ入れあり

コレ、小兵衛どの、痣丸の短刀と云ふは、平家方の重代にて、鎌倉どのゝお手に入つたれば、源家にあつては不吉とあつて、この秋葉權現へ奉納のところ、何者とも知れず盗み取りしゆゑ、この間田原町邊の仲間へも、お觸れがあつた。

小兵　ヤア。

ト恟りする。

石見　もしや、この刀を引出物などと云うて、娘を貰ふ分別。マア、盗み物の引出で聟には取るまい。

ト短刀を返す。小兵衛、取つて

小兵　ハテ、これを聟引出に遣らうと思つたが、それでは

止しの木さいから兼すべりと洒落て置からが、暮に貸した三十両で、娘を貰はうかい。

石見　サア、それは。

　トつかへる。

はな　父さん、わたしや其やうな事は嫌でござんす。

小兵　嫌とあれば、三十両、たつた今、耳を揃へて。

両人　サア、それは。

小兵　ハテ、合點のゆかぬ。これ程に心意氣の通つた、おれを嫌ふと云ふは、なんでもこりやア手代の半七。

はな　エヽ。

　ト思ひ入れ。この時、下座より半七、ツカ〳〵と出る。小兵衛、お花ちやつと見て、來ては悪いと仕方する。小兵衛、見て

小兵　コレ〳〵、お花坊。そりやアなんだ。

はな　こりやアノ、わたしや癇癪持ちでござんすわえ。

　ト三味線入りの大拍子になり、いろ〳〵癇癪持ちの眞似をし、半七へ思ひ入れ。半七、呑み込み、おれが事を必らず怨られな、兎角知らぬ振りにてと仕方にてする。

小兵　石見どの、お花坊は、困つた癇癪持ちだなア。

石見　貰ひ娘ではござれど、氣隨に育つたから、癇癪持ちには困り果てますする。

小兵　所を通な聟様なれば、癇癪持ちオツと承知。朝寐は知れたお定まり。宵ッ張りに酒で呑み明かし合點。錢金は湯水の如く、芝居は見次第、旨い物は喰ひ次第。聟さんは通り者の通り三丁目、越中仕入れの、ちよつと莨入れが、こんなものサ。

　ト云ひ〳〵莨をのむ。

石見　成る程、さう云はつしやれば、通人とやら唐人とやらのこなたであらうが、縁と云ふものは、親の儘にもならぬもの。

　ト小兵衛、身形を繕ろひ、思ひ入れにて

小兵　ハテ、野暮を云ふものだ。粋の男はこの通り、痩さすで小作り、ちよんと極つて粋な事は云ふに及ばず、おれが口から云ふはをかしなものだが、男が丁度中位、髪は毎日水髪のちよび束ね。氣に入るは知れた事。ナア、お花坊。

　トお花を捉へる。お花、振り切つて腹立てるを、半七それでは悪いと思ひ入れ。お花、でも嫌ぢやと仕方する。小兵衛、石見、これを見て

　コレサ、お花坊〳〵。
石見　アレ〳〵、あの通りの癇癪持ち。あれでは折角嫁に遣つても。
小兵　ハテ、大事ないわえ。とんと構はず、随分癇癪持ち合點。ハテ、癇癪のかの字は、卽ち金持ちのかの字。嬶アのかの字が可愛いのかの字。こいつはどうも堪らないわえ。
　ト　お花へ抱きつくを、石見、隔てる。お花、思ひ入れあつて
はな　アイタ、、、、。
石見　娘、どうした〳〵。
はな　アイ、わたしや癪が發つて。
　ト　腹を抱へて思ひ入れ。石見、悧りして
石見　ソリヤ、癇癪ぢや〳〵。
小兵　ドレ、癪ならおれが押してやらう。
　ト　お花の側へ寄るを、突き退けて
はな　アレ、止して下さんせ。わたしが癪は。
小兵　合ひ藥があると云ふのか。
はな　イヽエ。
　ト　此うち、半七、お花が側へ行きたい思ひ入れにて、小隠れして居る。
石見　ソレ〳〵、何時でもわが身が癪は、半七が押すと癒る。半七々々。
　ト　呼ぶ。半七、ツヽと出る。
はな　半七、おぢやつたか。
石見　ソレ、娘の癪ぢや。押してやりや〳〵。
半七　ハイ〳〵。
　ト　お花の床几へ腰をかけ、癪を押すこなしにて、ヂツと抱きしめる。小兵衛、これを見て
小兵　ヤイ〳〵半七、それはあんまりな癪の押しやう。
石見　ハテ、あれでなければ、娘が癪は癒りませぬて。半七、ソレ〳〵、しつかりと押してやりや。
半七　ハイ〳〵。
はな　もつとグツときつう押してたも。
　ト　お花の手を取つてヂツと抱きしめる。小兵衛、見て
小兵　これサ〳〵、それでは癪が猶發るであらう。家來の身で、此方へ退いて居ろ。
半七　ハイ〳〵。
　ト　小兵衛へ思ひ入れあつて退かうとする。
はな　コレ、手を緩めると又、發るわいなう。

石見　さうぢや〳〵。しつかりと押せ〳〵。
牛七　でも、小兵衞さまが腹を立つて。
石見　ハテ、主命ぢや。しつかりと押さぬか。
牛七　ハイ〳〵。
ト また抱きしめる。小兵衞、いろ〳〵氣を揉み
小兵　こりやモウどうにも。
ト 思はず石見の後へ抱きつく。
石見　これは〳〵小兵衞どの、疝氣を押して下さるか。忝ない。
小兵　おきやアがれ。
ト 呆れて
石見どの、これでは貸した三十兩。
石見　ハテ、娘を嫁の相談があれば、マア、あちらの茶屋へ。
小兵　それでも二人を、斯うして置いては。
石見　さればサ、癪の療治をするうちなれば。
小兵　でも、あんまりな。
石見　ハテサテ、娘が頼みと云ひ、病氣の事なら。
小兵　聞えた。そんなら。
石見　主と病に
小兵　勝たれぬかいやい。
ト 唄になり、小兵衞、石見を押へて下座へ入る。お花牛七、殘る。
牛七　モシ、お花さん、もう癪は。
はな　疾に過ぎて、こちやいつそ。
ト 兩人、向ひ合うて
牛七　お定まりの通り、抱きつくのでござりまするかえ。
はな　知れた事いなう。
ト 抱きつきさにしうて、思ひ出したるこなしあつて
それ〳〵、其方とちよつと抱きつかうと云うても。
牛七　久しいものぢや。また觀音樣かえ。
ト お花の懷中より守り袋を出す。此うち、大日坊、出かゝり、これを見て、いろ〳〵腹を立つ思ひ入れ。
はな　この中にある、一寸八分の觀音樣は、人丸が方よりおこしたる、都清水の本尊の尊像とて、平家の者の信心する、大切な觀音樣、其方に遣つた起證にて、血汐の穢れあるゆゑに、人目忍んで抱きつかうにも儘ならず。
牛七　また私しは此やうに。
ト 守り袋より起證を出して
神佛より大切に、お前の起證を、コレこの如く。して、

私しが方から、上げて置いた起證わえ。
はな　そりや觀音樣があるゆゑに、この袖口に縫ひ込んで大切にかけて居るわいの。
半七　それで疑ひ晴れました。
ト　お花、あたりを見る。大日坊、ちやつと釣り鐘の影へ隱れる。
はな　幸ひ人目もない事ゆゑ、ちよつと爰で。
半七　それでもお前、その觀音樣を。
ト　お花、釣り鐘の龍頭へ守り袋を引ッかけて側へ寄り添ふ。大日坊、忍び入れあつて、ソッと守り袋を引ッたくり、中より觀音を出し、釣り鐘の側にある古煙管の雁首を中へ入れて、元の通りにして置く。
はな　此やうな嬉しい首尾と云ふは、大抵ではないから、此やうに。
ト　文を出して
文まで書いて、詳しい事は、中にとつくり。くれ〴〵も二世までと誓ひの事を。
ト　半七、文を取つて
半七　モシ、書いた物は大切でござりまする。モウ〳〵、此やうな首尾では、文にも及びませぬ。

はな　そんなら、こちの人と云うてもよいかや。
半七　よいからの上でござりまする。
はな　そんなら、こちの人。
半七　女房ども。
はな　オヽ、嬉し。
ト　抱きつく。この時、大日坊、釣り鐘を前に取り、隱れて居て、石にてヂヤン〳〵と叩く。これにて兩人、愕りして立別れ、半七、文と起證を落す。
はな　アレエヽ。釣り鐘が鳴つたわいの。
半七　こりや、どうしても、お前の思ひが龍頭へ屆いて、鳴つたものと見えますわいの。
ト　此うち、大日坊、後より、ソッと落ちてある文と起證を取る。
はな　ほんに辛氣な。いろ〳〵な邪魔な事が。
ト　半七、向うを見て
半七　アレ〳〵、向うへ人影が。矢ッ張り人目に知らぬ振りにて。
はな　又この上は好い首尾を。
半七　あの茶屋の小蔭で。
ト　お花、守り袋を取つて懷中へ入れて

はな　そんな必らず。
半七　ハテサテ、御念の入つた。
はな　待つて居るぞや。
ト合ひ方になり、お花、嬉しさうに思ひ入れあつて下座へ入る。大日坊、うまいと云ふ思ひ入れにて、觀音と起證を頂き、下座へソツと入る。直ぐに順禮唄になり、向うより、野分姫、やつし順禮の形。隅田平、同じく順禮、手甲脚絆、菅笠と柄杓を持ち出て來て
隅田　モシ、野分さま、これが武藏下總の國境ひの隅田川、古歌にも詠みます所でござりまする。
野分　誠に坂東の札所、淺草寺の觀音樣、實にも賑ふ繁華の地。それにつけても、どうぞマア、お尋ね申すその方に、早うお目にかゝりたいわいなう。
隅田　ちつと心當りもござりますれば、先づ賑やかなこの隅田のほとり。又お尋ね申して見ませう。サア、お出でなされませ。
ト合ひ方になり、本舞臺へ來て
モシ、お若いの。秋葉の社へは、まだ遠うござるかな。
半七　イヤ、この先に見えます森が、秋葉樣でござりまする。
トこれにて、隅田平、半七をよく〳〵見て
隅田　下賤のお身とは見受けますれど、物腰と云ひ形恰好、慥かに尋ぬる
野分　ヤ。
ト思ひ入れ。
隅田　ハテ、あなたは、それにござりませ。拙者めが好いやうに致しまする。
ト半七の側へ來て
もしやあなたは、冠者太郎義基さま。
ト云はうとするを
半七　ア、コレ、滅多な事を。私しは、そんな者ぢやござらぬぞ。
隅田　イヤ〳〵、お包みなさるゝは御尤もなれども、拙者めは中納言忠宗卿の下部、隅田平と申す者。
半七　すりや、其方が。
野分　さてはあなたが、冠者太郎義基さま。
半七　ハテ、思ひも依らぬ順禮の女中。
隅田　イヤ、お見知りないは御尤も。これなるは拙者が主人、野分姫さま。
半七　さては某と云ひ號けありし、野分どのであつたか。

とは云へども、合點がゆかぬ。

野分　誠に、木にも萱にもお心置かれ給ふゆゑ、お疑ひは御尤も。その證據は、コレ爰に。

ト懷中より袱紗を出す。隅田平、取つて

隅田　兼ねてお云ひ號けの證據にと、取交し給ふ袱紗の一首は。

半七　如何にも。顏は知らねど取交せし、證據の袱紗のその一首。

ト同じく袱紗を出し

隅田　又とだに思はぬ仲の別れ路は

隅田　詞殘りて名をや恨みん。

野分　なんと、お疑ひは晴れましたか。

半七　すりや、野分姫であつたよな。

隅田　義基さまには、先づは御機嫌よき體。如何ばかりか大悦に存じまする。

半七　某とても、陸奧を忍び出で、この鎌倉へ入込みしも、せめては親義經が敵たる、梶原親子を一太刀恨みんと、町人に姿を替へて、刀屋に手代奉公。

野分　ほんに浮世と云ひながら、思はぬ御難儀、憂き御苦勞、おいとしう存じまする。

隅田　何か詳しき密談は、爰は往來、この行く先に。

半七　秋葉の裏門にて折を見合せ

野分　積る話しを。

隅田　義基さま。

半七　サア、おぢや。

トまた流行り唄になり、半七、思ひ入れ。野分姫、隅田平付いて下座へ入る。下の方より、お花、逃げて出るを、大日坊追ひかけ出て來り、お花を引ッ捉へ

大日　サア、しめたぞ／＼。

はな　アレエ……。

ト逃げうとするを、しなだれ、いろ／＼嫌らしき思ひ入れある。

エヽ、汚ない坊さんだてら。嫌らしい。なんの事ぢやぞいなう。

大日　ナニ汚ない。エヽ、汚ないとは、胴慾ぢやぞえ／＼ア、いつやらであつた。しかもお坊がはつち開らき。托鉢米のあるやうに、お藏前から旅籠町、藏へ積み込む黑船町、米の數々田原町、お前の門へ立つたらば、苔みのお花と露知らず、お前は表の格子を覗いて、アレ御出家ぢや、釣鐘の托鉢入れてあぎやいのと、ツイと内へ入

つたところは、美しいとも可愛いとも、迦陵頻迦か天人かと、思へばこの身がぞく／＼と、この戀風はハアくつしやみ……じやぶ／＼／＼と錫杖の、音ものぼせてギリギリまで、惚れたが最後これからは、阿彌陀も釋迦も觀音も、みんなお前の顏に見え、天上天下唯我獨尊、お前一人に迷つて居る。どうぞ情ぢや一丁二丁のお志し、多少に限りませぬ。お坊が書いた心のたけ、法華經大般若はらみつた程、思ひを書いたこの文を、ちよつとマア見ておくれ。

ト文を出して無理に持たせる。

はな　エヽ、穢らはしい。こんなものは知らぬわいなア。

ト抛り出す。

大日　ナニ、知らぬとはさりとは胴慾。知らぬ合邦外ヶ濱。鬼棲む里はまだ愚か、例へ山中三軒屋。

ト云ひ／＼じなついて又抱きつく。

はな　アレエ、。惡い事をしやると、父さんや半七に告げて、酷い目に遭はすぞや。

大日　ナニ告げる。告げるとは胴慾ぢや。告げる合邦外ヶ濱。鬼棲む里はまだ愚か。

トいろ／＼付け廻して抱きつく。お花、突き退けて貢盆の灰を大日坊へ打ちつける。大日坊、灰だらけになつて追ひ廻す。此うち神樂になり、お花、逃げて入る。引違へておとら出てくる。大日坊、おとらを捕へ

大日　にやアフウ……。

ト猫の見得になり、おとらもムウと息使ひをして逃げうとして、ト、大日坊を突き退ける。大日坊、又おとらを引ッ提へる。此うち向うより、本田次郎近經、羽織袴大小にて出で、本舞臺へ來て、眞中へ來る。兩人これを知らずに眞中にて近經に突き當り

兩人　ヤア、お侍ひ樣。

近經　何を慮外な。

とら　大日坊、こなたの顏は。

大日　にやアがどうした。……お花かと思つたら、おとら婆アか。

ト思ひ入れ。近經、此うち文を拾ひ

近經　すりや、大日坊と云ふは其方か。

大日　アイ、愚僧が事でござりまする。

近經　アノ大日坊。出家に似合はぬ不屆き者。

大日　エ。

ト思ひ入れ。近經、文を懷中へ入れて

近經　武士に慮外の其方なれど、三衣の身なれば。
　ト思ひ入れあつて
　この文の。
　ト云はうとする。
大日　なんと。
　ト思ひ入れ。
近經　免して遣はす。
　ト唄になり、近經、下座へツイと入る。
大日　侍ひと云ふ者は、ちつとばかり突き當つたとて、慮外だの緩怠だのと、なんの役にも立たない事を。りやんこの癖に、にやんの事だ……時におとらさん、わしやアちつと無心がある。
とら　無心があるとは、今の口から〳〵。
大日　ハテサテ、そんな嫌らしい無心ぢやアないわの。
とら　さうして、なんぢや。
大日　金儲けの筋サ。
　トおとら、喜び
とら　そいつは聞捨てにはならぬわいの。
大日　外の事でもないが、あのお花が
　ト云はうとして

ちつと此方に金の入用があるが、岩永さまから頼まれて平氣の落人と、髻の觀音の詮議。それさへすりやア、ずつしりとした金儲け。その心當りもある。殊にアノ、わしが内に置いたお松。彼奴を中田屋へ雇ひにやつて置いたが、取返して藝者奉公。なんとお松を書入れに、五十兩貸しちやア下さるまいか。
とら　そんなら、あのお松を書入れて。
大日　五十兩借りるのサ。
とら　あの玉なれば、五十兩が七十兩でも、よし〳〵。其所が女衒商賣の、千里も走るおとら婆アだ。居ながらの相談とは、これも釣り鐘供養のお庇。幸ひ爰に中の口へ玉を見に行く金が五十兩。こいつを貸してやりませう。
大日　そいつは早速有り難い。時に親判の證文しませうか。
とら　そんなら爰で。
大日　幸ひ爰に奉加帳の矢立。
　ト釣り鐘の側にある矢立を取つて來て、奉加帳の白い所を引裂き、證文を書いて
　サア、お松が藝者證文。
　トおとら、取つて見て
とら　これでよし〳〵。

ト財布より五十兩出して

斯う五十兩貸すからは、直ぐにお松はわしが代物。

ト渡し

シタガ、お松を受取るまでのその質には、この釣り鐘を預からうわい。

大日　成る程、お松を渡すまでに、釣り鐘を質とて、この釣鐘が證文も同然。これがほんの、證人に釣り鐘だワ。

トおとら、下座へ向ひ

とら　コレ、講中の衆やく。

ト呼ぶ。

皆々　オイく、おとらさん、なんだく。

ト講中皆々出て來る。

とら　この釣り鐘は、わしが預かつて、大日坊どのに金を貸してやつたから、當分の質物。

講中　ハテ、なんでも慾張りのおとらさん。

とら　サア、講中の衆、大儀ながら引いて行つて下さい。

皆々　合點だく。

ト釣り鐘の綱を引ッ張る。大日坊、思ひ入れあつて

大日　ア丶、この釣り鐘も金の代りに、質にやるとは、可愛やく。

講中　また建立に歩くには、おとらさんから損料で、借りざアなるまい。

とら　ほんのこれが

皆々　質金損料。

ト淸ぶり唄になり、時の鐘にて、皆々向うへ引いて入る。おとらは下座へ入る。この時、水茶屋の亭主、掛け行燈へ明りを灯して入る。大日坊、思ひ入れあつて

大日　先づお松を書入れて五十兩、お花坊を引ッ拂つて、鰻玉子の食ひ詰めで、思ひのたけを晴らし給へ。淸め給へ。

ト以前の觀音を出し

煙管の雁首と入れ替へに、この觀音で一仕事、この金もお花が事に、巧いワく。まだその上に岩永さまから、頼まれた平家の落人、義經が餘類詮議すれば、こいつも金儲け。これもお花が事に使つて、巧いワく。ハテ、大日坊は、天道人を殺すぢやなア。

ト喜んで居る。下座より小兵衞出て來て

小兵　大日坊か。

大日　小兵衞さん。

小兵　エ丶、忌々しい。なんだか腹が立つてく、ならな

いわい。
ト いろ／＼氣を揉む。
大日　モシ／＼、何を其やうに腹を立ちなさる。
小兵　腹を立たないでどうするものだ。おれが惚れて居て
聟にもならうと云ふあのお花と、二才野郎の半七めと、
慥かにあそこの茶屋の小隅て、やつて居るわい／＼。
ト下座の方を見て、氣を揉み騒ぐ。
コレお坊、われが其やうに氣を揉む事はないワ。
大日　ハテサテ、それぢやア、大事だ／＼。
小兵　おれこそ氣が揉めるが、何もわれが。
大日　氣が揉めないでどうするものか。あのお花には。
小兵　ヤ。
ト大日坊、思案をして
大日　好い事があります。先刻ちよつと引上げて置いたこ
の文。
ト文を出して見せる。小兵衛、取つて
小兵　思ひ忘ぬれ君樣參る、焦るゝ身より。こりやなんだ。
大日　お花が所から、半七へやる濡れ文を、ちよろまかし
て置いたのサ。
小兵　そんならこれが、お花が所から半七へ……腹が立つ

ぜい腹が立つぜい。
大日　なんと、この文で、彼奴等を片付ける仕樣は、どう
でござりますえ。
小兵　成る程、こいつは智慧だ。この文は、おれが貰ふ。
ト懷中へ入れようとする。
大日　ドツコイ。
ト文を取つて
それから御覧じろ。
小兵　なぜ／＼。
大日　ハテ、この文を只遣つて濟むものかな。大事の代物
サ。
小兵　成る程、品玉になる文、只も貰はれまい。いゝワ、
高い物だが、小判で一兩に買はう。
大日　飛んだ事を云はつしやりませ。一兩や二兩で賣れる
ものか。
小兵　そんなら三兩か。
大日　どうして／＼、
小兵　四兩々々。
ト道具市のやうに付け上げる。
大日　サア、四兩々々。

小兵　いゝワ。ポンと五兩に買へ。

大日　さらりつと五兩に負けろ。

ト兩人、手を打つて小兵衞、紙入れより五兩出して

小兵　ソレ、即金に五兩。

ト大日坊、五兩取つて

大日　先づこいつもお花か。

ト云はうとして

有り難い〳〵。

ト此うち、下座より、輕子、鯉の入りたる魚籠を擔ぎ走り出て來て、花道の方へ行かうとして

輕子　南無三、千住から中道通りを急いで、白髭の下の茶屋へ、駄賃の錢を忘れて來た。

ト大日坊を見て

コレ坊さん、ちよつと駈けて行つて來るから、この鯉を見て居て下さいまし。

大日　馬鹿な事を云ふ人だ。どうして鯉の番をして居られるものか。

輕子　ハテサテ、そんな事を云はずと頼みますよ。

大日　イヽヤ、知らぬと云ふに。

輕子　頼みますよ。

ト云ひ〳〵下座へ入る。

大日　コレサ、鯉の番はしないと云ふに。

小兵　折角話しの胴中へ、おひない番狂はせだ。

大日　時に小兵衞さん、今云はつしやつた

小兵　二人の奴等は茶屋の小蔭で、ナ。

大日　呑み込みました。

ト下座へ走り入る。

石見　娘よ、半七よ、何所へ行たぞいやい。

ト云ひ〳〵出て來る。小兵衞、矢庭に石見を引ッ捉へる。

石見　コレ〳〵小兵衞どの、どうするのぢや〳〵。

小兵　どうと云つたら、濟まないぞ〳〵。

石見　濟まぬとは何が濟まぬぞ。

小兵　濟まない譯と云ふは、小短かく云やア斯うだワ。こなたの娘のお花におれが惚れて居て、去年の暮から三十兩と云ふ金を貸したも、娘を貰ふ支度金と思ひの外、お花は疾から半七とやつて居るは、ありやア不義間男。先刻にも癇積持ちだの癪が痛いのと、親仁共々この小兵衞を、慰み物にしたぞえ。サア、おれを聟に取るか。但し金三十兩返すか。サア、どうだえ。

石見　成る程、さう聞けば尤もぢやが、あの娘はどうも。
　ト思ひ入れあつて
　サア、たつた一人ゆゑ、こなたへは遣られぬ。
小兵　そんなら金を返すのか。
石見　サア、それも尤もぢやが、あの娘が半七と不義間男
　と云ふ
小兵　證據のない事云はうか。
石見　オ、、證據見ようか。
　トこの時、下座より
大日　オ、、その證據は爰にある。サア、うしやアがれ。
　ト半七、お花、兩人を引立て出て來て
何か知らぬが茶屋の小蔭で、泣く聲が聞えた。その筈そ
の筈。お花半七が、ちぎりきなひつちやん〳〵。所を大
日坊が目にかゝつたから、願以此功德かんまみ陀佛サ。
小兵　サア、石見。なんと間男の證據、小兵衛が顔の立つ
やうにしてくれろエ、。
　ト此うち、眼八、出かけて
眼八　殊に冠者太郎、錦の前の詮議の爲、この程よりの入
込み。
小兵　間男と云ひ

眼八　お尋ね者。
はな　でも、わたしや不義した覺えはない。
石見　それ〳〵、娘に科はござらぬぞ。
半七　お尋ね者の冠者太郎と云ふ覺え
三人　ござりませぬぞ。
大日　エ、、手ぬるい〳〵。
眼八　お尋ね者の冠者太郎も
小兵　間男したもこの二才。
大日　いつそぶち放してなりと
三人　詮議して。
　ト三人、半七を打擲する。此うち、本田近經、出かけ
て、この中へ入り、小兵衛、眼八、兩人を引退け、大
日坊を見事に取つて投ける。
大日　アイタ、、、。
半七　ヤア、あなた樣は。
眼八　本田の次郎近經どの。
近經　この程より當所へ遊興も、殘黨餘類を詮議の爲。
　ト大日坊、起き上がつて、近經の側へ來て、ドンと大
胡坐をかき、キツとなつて
大日　ヤイ〳〵、なまり武士め。コレ、尊い名僧智識の大

日坊がやぞよ。いつもはわれが投げられるを、其方からすつてんころり、よいやまかせと、おれを投げたは、こいつは新らしいわえ。サア、どう云ふ譯で投げた。譯を云へ。

近經　譯は云はずと覺えがあらう。間男でない者に、科を拵らへる不屆き者ゆゑ。

大日　イヽヤ、間男も間男、しかも二人がフンスン〱スンフン〱。泣いて居たのを見付けたが、愚僧が證文。

近經　その間男の詮議も、致して遣はさうが、先づ扣へい。

大日　ヘイ……。

近經　して、石濱眼八どのには。

眼八　平家の落人、義經が餘黨の詮議、先づ差當り怪しきは刀屋半七。うぬは慥かに冠者太郎。

ト行かうとするを近經留てる。

近經　イヽヤ、彼れこそ刀屋の手代半七。太郎と云ふ名を詮議なさらば、あれなる茶屋の中田屋は、萬両太郎と申すが異名。これらを詮議なさるゝか。

眼八　サア、それは。

近經　然らば彼れは只の町人。

眼八　まだ〱平家の落人こそ、正に清水の「普」の觀音を所持なすが慥かな證據。石見が娘のお花が詮議を。

ト お花の懷中より右の守り袋を引出す。お花、取りつき

はな　ア、申し、その守り袋は。

眼八　なにを。

ト引摺ゑるを支へる。立廻り。此うち大日坊、ピクビクして、右の觀音を出し、隱し所に困り、引出した觀音を鯉の口へ押込み、知らぬ振りにて居る。眼八、守り袋を取つて明けて、中より煙管の雁首を出し

眼八　ヤア、こりやア煙管の雁首。

はな　そんなら、この守の内には。

半七　アノ尊像は。

ト云はうとして三人顏を見合せ、思ひ入れ。下座より輕子、スタ〱と出て來て

輕子　ヤレ〱、好い所へ置いて、一本[illegible]が御馳走であつたわえ。

ト云ひ〱、生けたこを搔き上げる。大日坊、慴りして

大日　コレ〱、その鯉をどうするのだ。

輕子　知れた事。おれが擔いで來たのだから、持つて行く

のよ。
大日　コレ滅相な。その鯉にはの。
輕子　ハテ、子持ち鯉は利根川の名物だよ。
大日　イヽヤ、子持ちぢやない。
　ト捉まへろを突き倒して
輕子　飛んだ坊主めだ。
　ト輕子、鯉を擔いで向うへ走り入る。大日坊、慌てる。
近經　コレサ〱、お坊、間男の詮議は如何いたす。
大日　イヽヤサ、間男どころか、あの鯉を。
　トまた行かうとする。
小兵　コレ、肝心の間男の詮議もしねえで、何所へ行くのだ。
大日　ハテサテ今の。
　ト思ひ入れ。
近經　ヤイ待て。何ゆゑ間男の詮議いたさぬ。
　ト大日坊、思ひ入れあつて
大日　成る程、詮議しませう。二人の奴等、もう叶はぬと覺悟しろ。
近經　して、その間男と云ふには、何ぞ慥かな
大日　その證據はコレ。
　ト懐中を尋ね、いろ〱あつて
ハテ、合點のゆかぬ。おれが持つて居た筈ぢやが……エエコレ、どうしたしらぬ。
　ト矢張り尋ねる。小兵衛も思ひ入れあつて
小兵　その間男の證據と云ふは、この文だ。
　ト以前の文を出す。
大日　それ程其所に持つて居ながら、早く出してくれゝばいゝ事を。
小兵　ソレお坊。
　ト文を投げやる。大日坊、取つて
大日　思ひ忘れぬ君さま參る、焦るゝ身より……とは忌々しいなア。
半花　ナニ、その文を。
　ト恟りした思ひ入れ。
大日　なんと動きは取れまいが、思ひ忘れぬ君さま參る、焦るゝ身より。
　トいろ〱文を持ち歩き
こりやお花から半七へ遣る濡れ文。これでも間男でないか。嘘ぢやあるまい。本田さまとやら。高らかに其所で讀んで下さりませ。

ト近經へ差出すを取つて

近經　すりや、これが間男の證據の艶書。

ト云ひ〳〵思ひ入れあつて、以前大日坊の落せし文とソッと取替へ開き見る。お花、牛七、始終思ひ入れ。

ナニ〳〵、「餘り思ひに堪へ兼ね、ちよびと文して參らせ候ふ。

小兵　ちよびと文してとは洒落た奴だな。

近經　雲に梯、霞に千鳥、及びないとて惚れたが因果にて御座候ふ。

大日　霞に千鳥とは、憎いな〳〵。

小兵　惚れたが因果とやらかしたが忌々しい。

近經　お前のお姿を見る度毎に、いつそ思ひの種にて候ふ、寢ては寢釋迦、起きては立ち釋迦。

小兵　ハテ、飛んだ所へお釋迦樣が顯はれたな。

近經　うつら〳〵と宗玄が、庵室もどきで焦れ暮らし、呆れ果て參らせ候ふ。

大日　ヤア。

ト大きに悄りして

南無阿彌陀佛々々々々々々。

小兵　その後はな〳〵。

近經　あはれ不便と思し召し、抹香臭い夜着蒲團で抱かれてねんごろころねんなら、わしが幼ない時はこんな毬栗坊主ぢやない、可愛い坊さんと云うたがの。

小兵　なんだ。ねんころ節でやりかけたな。

近經　どうぞこの縁叶へて暮れのかね〴〵、しめし參らせ候ふ。

ト此うち、大日坊、いろ〳〵切なきこなしにて

大日　ア、違つた〳〵。それではない〳〵。

ト氣を揉む。

小兵　ハテサテお坊、默つて居やれ〳〵。

大日　何をお先眞闇で。

小兵　ハテ、お先が眞闇だから讀んで見るのだ。どうぞその後を私しに。

近經　ソレ、讀んで見やれ。

ト文を出す。小兵衞、取つて

小兵　ヘイ〳〵……「たつた一度のお情が、廣大無邊の御慈悲と、觀音樣を誓ひにかけて、祈り參らせ候、めでたくかしく。お花の君樣參る。

大日　もういゝわな〳〵。

トいろ〳〵切ながる。

小兵　焦るゝ大日坊より。

皆々　ヤアヽ。

ト悄りする。大日坊、ソロ〳〵と向うへ逃げる。

近經　コリヤ〳〵、お坊、どれへ參る。

大日　イヽエ、ちよつと手水に。

近經　たわけ者め。其所動くな。

トきつと云ふ。これにて大日坊、悄りして

大日　ハイヽ。

ト近經の前へ來て困り、もぢ〳〵する。

近經　今のあの文に、この戀叶へて暮れのかね〴〵とは。

大日　もう御免なされませ。幽靈になつて消えたうござりまする。

近經　その名宛の焦るゝ大日坊とは、アヽ、誰れやらが事ぢや。

大日　されば、聞いたやうにもあり。

小兵　大日坊とは。

近經　オヽ、お坊が事ぢや。

大日　ハイ……。

近經　この名僧智識樣の事であつたか。

大日　左樣かいな。

小兵　そんなら、おれが肩持ち顔で、文まで賣りつけて、矢ッ張りわれがお花に惚れて居たのか。

大日　ハイ〳〵、少々ばかり。

小兵　おきやアがれ。

ト大日坊を突き倒す。大日坊、起き上がつてキッとなり

大日　まだ〳〵そればかりぢやアない。間男の證據は、この起證。

ト以前の起證を出す。お花、半七、また悄りして

兩人　その起證を、どうしてマア。

大日　先刻愚僧が聞くとも知らず、必らず變るまい二世三世も、どうさんせ斯うさんせと、云つた事まで知つて居る。

ト此うち、隅田平、出て居て、樣子を聞きかけ、行燈の蠟燭を取つて、この起證を燃す。大日坊、これを知らずに

なんと、起證が不義の證據であらうが。アッ〳〵。

ト火傷して悄りする。小兵衛もヤアヽと驚ろく。隅田平、下座へソッと入る。

こりやア起證が灰に。起證が……きせう馬鹿にした事だ。

近經　サア、お坊、起證があるか。
大日　ハイ、。
近經　ウム、僞はり者めが。
大日　ハイ、。
　ト悄氣て思ひ入れあり
エ、、忌々しい。いつその事に。侍ひ、うぬを。
ト縫ひぐるみにて、近經へ打つてかゝるを、近經、引ツ捉へて
近經　何を小癪な。
ト立廻りにて付け廻す。大日坊、ツカ〳〵と花道へ行き、小石を拾ひキツとなる。
コリヤ、なんと致す。
大日　サ、こりやア。
　ト思ひ入れ。
賽の河原へ石積みに、一重積んでは父の爲、二重積んでは母の爲……爲に沈みし戀の……と
ト唄ひながら思ひ入れあり。
鯉の口。ソレ。
　ト一散に向うへ駈けて入る。
半七　おのれ、大日坊め。

　トきつとなる。
近經　ハテサテ、彼れに構ふは、實に癩病に棒打ちとやら。して眼八どの、平家の落人の御詮議は。
眼八　相知れませぬ。
近經　その落人の手がゝりは、彼の平家重代の痣丸の短刀。源家にては不吉とあつて、當秋葉權現へ御奉納。然るに紛失なせしは、正に平家の餘類が盜みしとの取沙汰。その痣丸を所持なす者こそ平家の落人。
小兵　ヤア、。
　ト恟りする。
石見　その痣丸は小兵衛どの、こなたが持つて居さつしやるではないか。
半七　すりや、この小兵衛が。
近經　尋常にこれへ出せ。
小兵　成る程、出しませう〳〵。
　ト右の短刀を其所へ出して
この短刀は脇から買ひました。なか〳〵私しは平家の落人ではござりませぬ。短刀を出します程に、どうぞお助けなされて下さりませ。
近經　イカサマ、素町人に相違もあるまい。助けてくれう。

眼八　して、本田どのには、この場の裁きの片付けに。
近經　身共が即ち。三人の者、それへ出い。
三人　アノ、私しどもに。
ト　お花、半七、石見、思ひ入れあつて前へ出る。近經提げ緒を取つて捕り繩裁きして
近經　捕つた。
ト　短刀へ繩かける。
皆々　これは。
ト　合ひ方。
近經　この惡丸の短刀が、平家の落人詮議の種。この短刀を拷問いたして、落人の詮議。
半七　すりや、私しどもにお構ひは。
近經　お花半七、町家の者サ。
小兵　して、私しには。
近經　其方とても係り合ひなれど、情を以て見遁がし遣はす。
小兵　エヽ、有り難う存じまする。
眼八　この眼八は當所に止まり、又もや詮議。
近經　身共とても旅宿へ歸り、又も當所へ落人詮議。
ト　思ひ入れあつて
サ、その落人餘類の者どもは、武藏相模に徘徊いたせば、源家の飛鳥、鵜の目鷹の目。
ト　半七、お花、兩人へ思ひ入れ。
はな　すりや、その落人は。
半七　餘類の者が武藏相模に。
近經　武名盛んの賴朝公、敵對立ては、なか〳〵以て。石を抱へて淵に入る、譬へに等しき今の御代。
石見　すりや、時節を待ちて。
半七　兼ねての本望。
近經　宮柱太しく立てる萬代に
半七　今ぞ榮えん
近經　鎌倉の里。
三人　エヽ。
近經　重ねて逢はう。
ト　唄になり、近經、短刀を持ち向うへ入る。眼八、小兵衞、兩人は下座へ入る。三人、後を見送り
半七　何から何まで、心の付きし過分なる芳志は、矢張り重忠の仁心。
はな　平家の落人詮議とあれど、觀音樣の取違へたも、不思議の一つ。

石見　これが末代の御利益かとは、紛失なしたが心得ぬ……
……殊に最前、自然と起證の燃え失せしは。
　ト隅田平、出て來り
隅田　そりや、この隅田平めが、隱れて居ての今の働らき。
半七　すりや、其方が。
隅田　義基さまの御難儀を、お救ひ申すも野分さまの、御
貞節のその爲に拙者が忠義。
はな　そんならこなたは。
隅田　義基さまのお云ひ號けの野分さまの乳人の隅田平。
石見　斯うなるからは、打明けて何かお話しを。
半七　あの、中田屋の放れ座敷で。
はな　申し、義基さま。
半七　錦の前どの。
隅石　イザ、
　ト大拍子になり、四人、下座へ入る。道具替る。
　本舞臺、三間の間、後ろ黑幕、一面の藪疊、時の鐘
にて、道具とまる。
　ト向うより、十藏、やつし夜蕎麥賣りの形にて、荷を
擔ぎ出て來る。

十藏　饂飩蕎麥きり。
　ト本舞臺へ來る。矢張り時の鐘にて、向うより、大日
坊、バタ／＼にて、走り出て來て、花道にて
大日　あの野郎め、何所へ鯉を持つて行きやアがつたか。
なんでも、あの鯉が無けりやア。
　トせい／＼云ひながら、本舞臺へ駈けて來て、十藏に
行き當り、兩人、仰りして
十藏　エヽ、何をするのだえ。
大日　イヽヤ、ちつと氣が急いて行き當つたのだ。料簡さ
つしやい。
　ト荷を見て
蕎麥屋さんか。丁度いゝ。一杯くんねえ。
十藏　蕎麥さへ食はつしやりやア、云ひ分はないのサ。
　ト十藏、荷を下ろして笊を出し、蕎麥の拵らへをする。
大日坊、せい／＼云ひながら
大日　剛氣に腹が減つた。
十藏　サア、食ひなさい。
　ト大日坊、本のぶつかけを、さら／＼と食ひながら兩
人、顏見合せ
ヤア、お前は大日さん。

大日　十藏か。

ト兩人、思ひ入れ、大日坊、バラ／＼と小判を落す。十藏、この音を聞いて

十藏　それはえ。

ト小判を見ようとする。大日坊、金の上へベツタリ坐り

大日　もう一杯下さい。

ト蕎麥皿を差出す。十藏、これをちやつと取り、兩人、思ひ入れよろしく。

幕の間、佃騒ぎにてツナギ。引返し。　拍子幕

本舞臺、三間の間、中田屋の座敷の體。軒に太郎と書きし鯉の丸の提灯を吊し、正面床の間、違ひ棚。暖簾口、朝顏附きの燭臺、所々に立て、萩垣、石燈籠、手水鉢、枝折り門、植込み。上の方に生簀。しがらみ、杜若の盛り。軒口に伊豫簾を掛け、流行り唄にて幕明く。

ト料理人段吉、生けたこの鯉を上の生簀に放して居る。石見、お花を圍うて居る。小兵衛、眼八、立ちかゝりて居る見得。

段吉　アレ／＼、見なさい、鯉めが嬉しさうに、跳ね込むワ／＼。シタガ、此奴等も今のうちに洗ひ鯉か、筒切りになるでありやせうね。

石見　コレサ、小兵衛どの、こなさんは無理ばかり云ふ人ぢや。どうして、マア、滅相な、あの娘を。

はな　申し父さん、小兵衛さんがどのやうに云はんせうが、わたしや、あなたと祝言する事は。

小兵　嫌だ／＼も久しいせりふだぞよ。そこでこの座敷で、嫌でも應でも、おつ轉ばしの無理祝言と出かけるのサ。

眼八　さうぢや／＼。この眼八が差詰め仲人。太郎が座敷で、ちよんの間の内祝言。夫婦こつそりと、こくせうがよからう。

小兵　左様々々。戀とは鯉の假名遣ひ。お花と我れらが戀のこくせう。こいつはどうも云へませぬ。コレ／＼、その生簀の一番と云ふ、大きな鯉を、掬ひ上げろ／＼。

段吉　畏まりました。ドリヤ、掬ふべいか。

ト叉手を持つて立ちかゝる。

石見　これはしたり／＼、わしはこの通り歯がござらぬから、鯉は歯に合ひませぬ。そこで豆腐を誂へました。

鯉は御無用になされませ〱。

眼八　ハテ、サテ、お主にばかり喰はせるのではない。アレ〱、あのお花に喰はせるのぢや。身共も相伴いたすのぢや。

小兵　左樣〱、内祝言に鯉のこくせうとは、こつてり物で起緣がいゝ。

段吉　合點でござります。

はな　ア、コレイナア。わたしや大願があるに依つて、生物の命を取る事は、止して下さんせいなア。

小兵　ナニ、生物は止してくれろ。コレサ、今にこの小兵衛が、生物を喰はせるワ。サア〱、早く大きな生物を掬へ〱。

石見　これは又迷惑な。

ト段吉、叉手にて掬ふ。流行り唄になり、向うよりお松、前垂れやつしにて、引摺り下駄を穿き、太郎のぶらを灯し、岡持に豆腐を入れて提げて出て來り、直ぐに舞臺に來る。

はな　ヤア、お松どん、ござんしたかいな。

まつ　これはお花さん、石見さんも、よう緩りとお出で遊ばしました。お前がお齒が惡いとあつて、旦那さんが岡部を取寄せて、お前のお好きな山かけ豆腐に拵らへて上げようと、わたしやわざ〱竹町まで、岡部を買ひに參じましたわいな。

石見　それは心附かれて忝ない。併し、向島へ來て鯉は喰べずに、豆腐の馳走にあづかるとは、わしがやうな客ばかりあつては、御商賣の大きな妨げぢやて。ハ、、、、。

まつ　ナンノイナ、お年寄りのお好み、何も商賣でござりますわいなア。

はな　コレイナア、お松どの、わたしやこなさんに、云はねばならぬ事があるわいな。アノ最前、牛の御前の門先で、こなさんも知つて居さんす、あの大日坊が、わたしが大事の守を取りくさつて、あの守の中には、其方が大事にせいと渡しやつた、清水寺の觀世音の

ト云はうとする。

まつ　ア、モシ、何事も爰ではナ。コレ……マア〱、わたしに任せて、ナ、御合點かえ。

ト目顏にて知らせる。お花、思ひ入れ。

小兵　コレ〱、どうだ。鯉はかゝらないか。

段吉　お待ちなされませ。奇妙に逃げ廻りますよ。

眼八　エ、、埒の明かない。ドレ〱、身共が掬ひ揚げて

見せう。
ト叉手を取つて大肌脱ぎになり、小兵衛、段吉も手傳ひ、捨ぜりふよろしくあつて
小兵 こいつはどうだ。おいらがかゝつては、鯉めらが思はせ振りばかりするワ。
まつ そりやその筈でござんす。魚の鯉でさへその通りぢやもの。どうしてマア、女中の戀は、思ひ遣らるゝわいな。
小兵 成る程、戀と云ふ物は、滅多には出來ぬものだわえ。
石見 それ見さつしやれ。魚の鯉さへこなさんにはかゝらぬワ。誠に戀は様々、逢ふ戀、待つ戀、忍ぶ戀ぢや。ハヽヽ。
眼八 イカサマ、鯉も筒切りを恐れて、我れらが叉手にはかゝらぬ。コレ〳〵、差詰めお松の君〳〵。そもじ、あの鯉を掬うたり〳〵。
ト叉手を渡す。
まつ そりやモウ、常から手馴れた生簀の魚、ツイ掬うて上げませうわいなア。
小兵 サア〳〵、早く賴むワ〳〵。
まつ なんのマア、これしきな事を。ツイ、わたしが叉手を入れて。
ト生簀の際へ行き、叉手を入れると、直に大きなる鯉のかゝるを見て
小眼 アレ〳〵、もう叉手へ飛び込んだ。こいつは奇妙だ奇妙だ。
まつ ソレ、かゝつたわいな〳〵。
ト舞臺へ投げる。段吉、立寄つて
段吉 こいつは、跳ねるワ〳〵。
ト追つかけて押へ歩く。鯉は元の生簀へ跳れ込み、鯉の口より錦に包みし觀音ばかり殘る。
眼小 それ〳〵、逃がしたか〳〵。エヽ、惜しい事をしたぞ。
ト生簀の際へ寄つて、捨ぜりふにて池の内を見て居る。お松、落ちたる觀世音の尊像を取上げ、思ひ入れあつて、
まつ 今お花さんが失つたと云はしやんした、觀世音の尊像、叉手にかゝりし鯉の口より出現ありしか。そんなら伯父の大日どのが、もしやは鯉の。
ト思ひ入れ。眼八、小兵衛、聞き咎め
眼小 なんと。

ト思ひ入れ。お松、手早く懐中して
まつ　サ、その觀世音の出現は、流れも同じ宮戸川、漁師の網に尊像のかゝり給ふは、アレ／＼、あの淺草の觀音薩埵。
ト思ひ入れあり
眼小　ヤア。思ひがけない御佛の、勿體ない、何者が。
まつ　サア、嬉しさうな今の鯉は、アレ／＼、あの生簀の内を。ハテ、仕合せな魚ぢやわいなア。
石見　ほんに、命全う仕合せな魚ぢやわいの。
はな　それでわたしが大願も、どうか屆いて嬉しいわいの。
小兵　其方はそれで喜んでも、此方はお花が色よい返事を
眼八　聞かずば小兵衞も男が立つまい。親の石見と掛合つて。
まつ　今を盛りのお花さん、枯れたる木にも花咲かす
はな　それは大悲の御誓ひ。
石見　花咲爺はこの石見。
まつ　舟の來るまで、あの二階で。
小兵　竹屋を呼んで。
トお花へ寄るを、お松隔てゝ
まつ　お待ちなさんせいな。
ト流行り唄になり、眼八、小兵衞、石見はお花が手を引き、段吉附いて奥へ入る。お松殘つて思ひ入れ。直ぐにてんつゝになり、向うより十藏、以前の素裝束にて、大日坊を引ッ張つて出て來る。
大日　コレ、エヽ、十藏、どこまで連れて行くのだ／＼。
十藏　どこも爰もいりませぬ。こなたには尋ねる事がある。サア、ござりませ。
大日　おれも中田屋へ行かにやアならない用がある。あの、マア輕子めに、鯉を生簀へ放しやアがつたかしらぬ。
ト兩人、本舞臺へ來る。お松見て
まつ　ヤ、其方は十藏……ほんにお前は、伯父御の大日さんぢやござんせぬか。
大日　オヽ、お松か。いま爰の内へ、鯉を擔いだ輕子めが來たか。
まつ　アイ、今方見えて、あの生簀へ鯉を放したわいの。
大日　サア／＼、そいつは大事だ／＼。エヽ、遲かつたわえ遲かつたわえ。
ト生簀の中を恨めしさうに見て居る。お松さてはと思ひ入れあつて

まつ　コレ、伯父さん、お前、あの生簀がどうしやんしたえ。

大日　サア、あの生簀が、なによ。ソレ、オヽ、それ〳〵、危ない所に生簀があると思つてサ。

まつ　エヽ、お前はそんなら、お花さんが云はしやんしたに違ひなう、あの子の守。

大日　ヤ。

ト思ひ入れ。お松、外事に紛らし

まつ　ほんに危ない所に、生簀が掘つてある事ぢやわいな。

ト思ひ入れ。十藏、差寄つて

十藏　お松さまえ。モシ、この伯父樣には、ちつと尋ねる事があつて、同道して參りました。サア、大日さま、今わしがちらりと見た金は、ありやどこから取つてござりました。それを云はつしやりませ〳〵。

大日　コレ、エヽ、十藏、貴い御出家樣に向つて、何を其やうに根問ひするのだ。アヽ、われが何か、この大日さまがお落し遊ばした、この金か〳〵。

ト懷中より紙包みの金を出して見せる。

十藏　サア、その大枚の金は、こなさん、マア、どこから持つてごんした。これサ、高の知れた講觸れの坊主の身分で、耳を揃へた小判金。出所に依つて、わしらに難儀がかゝるまいものでもねえから。

大日　コレ、エヽ。ナニ、出所も絲瓜も要るものか。釣り鐘建立の講中から、溜め金の五十兩。ナニてまへ達に難儀のかゝるやうな金ぢやアない。案じやるな〳〵。

十藏　イエ〳〵、その建立が、猶合點がゆかねえ。一錢二錢の合力で、溜つた金を講頭が、こなさんのやうな不埒な坊樣に、渡して置かう筈がない。お松さん、さうぢやアござりませぬか。

まつ　成る程、こなさんの云はしやんす通り、どうやら胡亂な大日さんのあの金。もしや末々こちらが難儀に。

大日　これはしたり、お松や、てまへは、マア、情ない事を云ふものだ。お主が連合ひは、ソレ、誰れあらうとサ……今ぢやア云ふに云はれぬ日蔭者。おれが爲には一人の甥。おれは現在の伯父樣。そんならお主だと云つて遁がれぬ血筋。なんでてまへに難儀をかけるものだ。コレ、決してその疑りは、止してくれやれ〳〵。

ト此せりふのうち、おとら、出かゝり居る。

まつ　そんなら、この上わたしらが、難儀にかゝらぬ金でござんすか。

大日　ハテ、それに違ひがあるものかな。

ト思ひ入れ。この時、おとら、ツカ〳〵と出て、お松が手を取り

とら　サア、お松、わしと一緒に來や。

ト引立てる。大日坊見て

大日　ア、、阿母か。ちつと爰ではあやまるの。

まつ　モシ、お前はどこの婆さんか知らぬが、なんで、マア、わたしが手を取つて、馴れ〳〵しい。どこへ連れてござんのおやえ。

十藏　左樣サ。コレ、婆さん、そのお松どのは、この中田屋へ月雇ひに頼んで置くはこの久六。そのわしにも挨拶なしに、こりやア、どこへ連れて行くのだよ。

とら　エ、、この手合ひは、貴樣達の知つた事ぢやアねえよ。このお松は、今日からわつちが抱への女、藝者にしようが女郎に賣らうが、勝手次第に追ひ使へと、伯父御のコレ〳〵、爰にござる坊さんの前から、證文を取つて五十兩と云ふ大枚なお金を渡したわいな。

十藏　ナニ、あのお松どのを、こなさんが買つたと云ふのか。

とら　ソレ、慥かな證文があるよ。

ト懷中より以前の書き物を出す。お松、十藏、駈け寄つて、披き見て

まつ　成る程、こりや、伯父さんの手蹟。

十藏　金高は五十兩、請け判は大日坊。奉公人のお松が爪印。請け人の伯父まで、爪判濟んでありながら

まつ　いま聞いたのが、初めておやわいの。

十藏　そんならお前の爪印も、みんな謀判、拵らへ事だな。

ト大日坊が側へ行き

コレ、大日さま、こりやア、お前、大それた事をさつしやるの。こなさまは

トきつと云ふ。大日坊、空嘯いて

大日　コレ、エ、、大それたとは、なんのたわ言を吐くのだ。今もうぬらが見繕つて、おれが金を持つて居るのを胡亂に思ひ、なんの彼のと吐かすが、コレ、エ、、さう見繕る程、しがないはつち坊主の內へ、うぬらはなぜ居候ふにうしやアがつた。イヤ、人の報謝で今日を暮らすはつち坊主の世渡りへ、うぬらは居候ふ。やう〳〵にこの間、一人づゝも巢立ちをしたと思つて、たわ言を吐くのか。コレ、エ、、うぬらに喰ひ潰されたおどもりが、今に附き纏つて借錢になつて居る。苦しむ者はおれ一人

だ。そこでわいらにも沙汰なしに、あの阿母の所へ、お松を五十兩に賣りこかし、藝者奉公させるのだ。コレ、エ、、それも元の起りは、わいらが居候ふに居たばつかりで、伯父樣は、ツイにない、まだ今年は蚊帳も吊らずに居るわえ。それになんだ、太々しいたわ言聞く耳は持たぬぞ。サア、お松、あの婆さんの所へ、てまへ不承ながら行つてくりやれよ。

まつ エ、、そんならわたしにも沙汰なしに、わたしを藝者の奉公に賣り渡し、あの五十兩の身の代を。

十藏 氣遣ひさつしやりまするな。わしが居ちやア、伯父樣任せにもしめえ。證文が出やうが何があらうが、此方に覺えのない金ごと。決してあの婆さんの所へ、行くにやア及びませぬよ。

とら コレ／＼、若い人、五十兩と云ふ命と、吊替への金渡して置いた上、なぜ行かいでも大事ござらぬ。コリヤ聽き事ぢやわいの／＼。

ト思ひ入れ。

十藏 ハテ、伯父だと云つても退けば他人、當人にも渡らないで、金を渡したのが其方の不念。コレ、大日さま、イヤサ、大日どの、不承であらうが、わしらが身分にかかつた金は、此方から立てる程に、その金は、マア、婆樣の所へ返して下さい／＼。

ト金へ手をかける。大日坊、その手を捉へ

大日 この二才野郎めは、とつけもない事を吐かすな。ナニ、五十兩を、あの阿母へ返してしまへ。イヤ、イケ厚かましい野郎めだ。返す事は嫌だワ。

十藏 イヽヤ、どうあつても返して下さい。それだけの金は、わしが拵らへて進ぜう程に。

ト包み金を手をかける。大日坊、十藏を引きつけ、下箱の内の伏せ鉦を出して、十藏をくらはす。この時、太郎兵衞、俎板と薄刃を持ち、出かゝツて立ち聞き居る。

コリヤ、伯父御、こなたはわしを。

大日 オヽ、ぶつた。叩いた。くらはした。折角拵らへた五十兩を、澤山さうに返せと云ふから、御出家が首にかけたる叩き鉦、うぬをお坊が叩き鉦。土性骨に。

ト鉦にてくらはせさうにする。

十藏 マア、その五十兩の金を、あの阿母に。

ト取らうとする。大日坊、鉦にてくらはさうとする立廻り。鉦は飛んで後に居る太郎兵衞が肩を越して落ち

る。五十兩の包みも、太郎兵衛が前に落ちる。太郎兵衛、手早に五十兩を拾ひ、鉦を取つて、我が手で目尻に疵を附ける。兩人、これを知らず、お松も取りさへる事あつて

まつ　これはしたり、お前も、マア、靜まつて下さんせいな。

大日　うぬ、二才野郎め、叩き挫いてやるべいと思つたに、こりやアどうだ。五十兩の金がないワ。ア、、コリヤ、うぬが物したな〳〵。

十藏　コレ〳〵、滅多な事を云はつしやるな。なんでその金を、おれが知るものか。

大日　イ、ヤ、うぬがちよろまかしたに違ひあるまい。うぬ、イケ盜人め。

　ト十藏へ武者振りつくを、太郎兵衛、後より大日坊を引ッ捕へ、見事に投げる。お松見て

まつ　ヤ、お前は旦那さん。

十藏　太郎兵衛さん。

　トこの時、大日坊、やう〳〵起き上がり

大日　痛いぞ〳〵……。ヤ、われは中田屋の太郎兵衛だな。なぜ御出家を投げたのだ〳〵。

太郎　コレサ、大日どの、また爰へ出たかとは、そりやアどう云ふせりふだ。爰はおれが内だワ。貴様は朝晩、門へ立つて、合力受ける物貰ひの身分で、なぜお客方で渡世をする、茶屋の座敷へ踏み込んで、聲高に騷ぐのだ。その上に聞いて居れば、金が見えないの、なんのと、をかしらしい事を云ふが、その金と云ふは、これか。

　ト見せる。大日坊見て

大日　成る程それだ。ドレ。

　ト取りにかゝるを、その手をくらはし

太郎　成る程それだも凄まじい。この金ばかりぢやアない。この又、叩き鉦も貴様のか。

　ト鉦を見せる。

大日　オ、、その鉦も愚僧がのだワ。

太郎　すりや、この伏せ鉦も坊様の鉦だとありやア、わしが面のこの疵はどうする。

大日　ヤ。

太郎　イヤサ、この太郎兵衛がしやッ面へ、ぶッつけた叩き鉦、例へ怪我でも疵が附いたぞ。これぢやア濟まねえ。譯道をつけて行きやれな。

　ト云はれ、大日坊、思ひ入れあつて

大日　イヽヤ、知らねえ。その小判の金は、おれがのだが、叩き鉦は大日が鉦ぢやアない。

太郎　おきやアがれ。空恍けた事を云ふな。われが鉦でないと云はせるものか。それ見ろ。淺草聖天町大日坊と、コレ、彫りつけてあるワ。これがわれが目にはかゝらぬか。イヤサ、これでも大日坊が鉦ではないか。

大日　サア、それは。

太郎　サア、坊主。

大日　エヽ、せう事がない。そんならその鉦はおれがのだ。

太郎　それ見やアがれ。この叩き鉦に、コレ、血が滲んで居るワ。おれが面を見ろ。男の面へこの鉦で、疵を附けても大事ないか。この譯を附けて行け。

大日　ナニ、その叩き鉦で、こなたの顏へ。

太郎　疵を附けた挨拶をしやれ。

大日　サア、そりやア成る程、此方が悪いが、コレ、太郎兵衞どん、この譯は、マア、どう扱つたら、こなさんの心に叶ふ。それを云はつしやい。

太郎　おれが心に叶ふ濟ませ方は、コレ、斯うしよう。膏藥代を寄越しやれ。修行者を捉まへて、金と轉ぶも異なものだが、これが當世、名を取らうより德用向き。外科にかゝつて癒る疵。僅かに見えても、一生面に極印の据つた男と異名こそすれ、人交りのならぬ太郎兵衞。金と轉んで濟ましてやらう。扱ふ氣なら金を出しやれ。

大日　隨分出すの。出合ひ頭の悪かつた、其方も災難、此方も災難。して、扱ひの金高は、幾らだの。二分か三分か一兩か。大方そこらであらうがえ。

とら　成る程、こりや、見た所が、さのみの疵でもござんせぬ。大方三百疋も出したなら、ナウ大日どの、濟みさうなもんぢやなう。

十藏　おかつしやいな。主も中田屋の太郎兵衞さん、三分や一兩の目腐れ金で、濟み濟ましをさつしやりもしまい。マア、お前の方から金高を聞いて出しなさいな。

太郎　一兩取るも百兩取るも、金を取つたと云はれる味は同じ事だが、さのみな事も云はれまい。ザツとした所が、カウツト、五十兩出しやれ。五十兩で、濟ましてやらう。

大日　エヽ、ナニ、五十兩。イヤア……。

　ト氣を失ふ。おとら、駈け寄り

とら　コレ、大日どの〳〵。

　ト介抱して

大日　コレ〳〵、氣が附いたか〳〵。
　阿母か。見さつしやい。猫に引ツ掻かれたやうな、
あの疵が五十兩とは、あんまり高い物だから。
太郎　コレ、エ、、男の面へ疵を附けて、高いの安いのと
この太郎兵衞は面の疵で、妻子は過さぬ。シタガ、おれ
が座敷で拾つて置いた、この五十兩の金。こりやア拾ひ
物だ。殊に、はつち坊主の主が出やうがまゝ。天道へ出
して面の疵の勘定、差引き濟まない、其うちは、一文も
遣る事はならねえぞ。相手が出家でも坊主でも、おれが
坊主でもおれが面に疵が附いちやア、向うの奴もしやつ
額を切り割つて、命があれば此方の仕合せ。もし向うが
くたばれば、その時は天道樣次第だ。サア、しやつ額を。
　ト庖丁を持つて立ちかゝる。十藏、これを留める。大
　日坊、思ひ入れして
大日　ア、、コレ〳〵、濟ます〳〵。五十兩でこなたの疵
を扱ふ。その勢ひで、坊主頭を切り割られて堪るものか。
命に替へる寳はない。惜しいものだがその五十兩で。
太郎　この面の疵の譯を附けるか。
大日　ア、、惜しい金だが、思ひ切つて。
太郎　濟ましてしまふか。ハア、いゝ思ひ切りだ。そんな
らこの五十兩は、こりやアおれが扱ひ金だよ。
　ト懷中へ入れる。
大日　ア、、惜しい事だ。夢になれ〳〵。
とら　サア、其方の譯が附いたなら、わしが方はこのお松。
サア、連れて行く。一緒に來や。
まつ　エ、。又しても婆さんは聞分けの悪い。わたしや爰
のお内へ雇ひに來て
十藏　給金借りた月雇ひ。こなさんの儘にはなるまい。婆
さん、マア、さう思つて居さつしやいよ。
とら　イヽヤ〳〵、五十兩と云ふ金を出して、證文まで取
つた奉公人。おれがお松は連れて行く。
　トお松へかゝるを、太郎兵衞、取つて投げ、おとらを
　鉦にて腰のあたりを二つ三つくらはす。
アイタヽヽ。コレ、太郎兵衞どの、なんでこなたは、
年寄りをぶつたのぢや。
太郎　ぶつたがどうした。おれが内へ雇ひのお松、主人の
おれにも沙汰なしに、連れて行かうと云ふは、なんぼ女
でも、無法な事を吐かすから、くらはしたがなんとした。
とら　イヽヤ、其方は月雇ひのこのお松。此方は五十兩に
買つたわやい。

大日　さうだ〳〵。その請け判はこの御出家。親判をついたからは、阿母の所へ遣らにやアならねえぞ。
太郎　面白い。其方が金で抱へたら、此方も金で抱へようわえ。
とら　オヽ、そりや相談ものぢや。五十兩の金さへ戻る事ならば、よぢくれた奉公人、變替へてやらうわいの。
太郎　五十兩なら猿が餅。證文をおれに寄越しやれ。
とら　成る程。ソリヤ證文。
太郎　ソレ、五十兩。
ト互ひに引替へにして、太郎兵衞、證文を破る。おとら、金を懷中へ捩ぢ込み、思ひ入れして
とら　サア、大日どの、わしやこの奉公人は變替へして、五十兩取戻した程に、さう思はつしやれや。
大日　イヤ、モウ、なんだか五十兩の金が、あつちへ行たり此方へ行たり、ちつとの間好い思ひをさせて、なんだか今日は、する事なす事、だりむく山へちむく寺、本堂建立、夢で富を取つたやうな心持ちだ。
とら　イヤ、モウ、そりやわしも同じ事。五十兩出して百兩にもしようと思ひの外、直ぐにその金が、また元へ廻つて來て、曲つた腰を二つ三つ。アイタヽヽ。ほんに、ぶたれたのが儲けぢやわいの。
大日　左樣々々。愚僧なぞは、足元の明るいうち歸りませう。アヽ、コレ、それにつけても先刻の鯉は、爰の生簀に居るであらうに。
ト生簀の方へ行かうとする。
太郎　ナニ、あの生簀の鯉がどうした。
ト目を附ける。大日坊、コソ〳〵と門口へ出て
大日　なにサ、お前。
ト悄げて居る。
とら　アヽ、コレ、和尚々々、わしやいつそ腰を叩かれた所爲か、腰が痛いわいの。これでは一足も歩かれぬ。どうぞ脊負つて行てたもいなう。
大日　おきやアがれ。飛んだ目に遭ふものだ。腰のえらが起つたら、またゝびでも呑まつしやいな。
とら　エヽ、泥棒猫ではあるまいし。
大日　エヽ。シタガ、釣り鐘の講中ぢや。此まゝ捨てゝも行かれまい。サア、負さつしやい〳〵。
トおとらを重さうに脊負ひ
コレ、婆樣や。
とら　なんぢやぞいの。

大日　斯うしたところは、お半、長右衞門と見えるかの。

とら　成る程、長右衞門は請合ひ難いが、お半はどうやら本役ぢやわいの。

大日　阿母、斯うもあらうか。

とら　どうぢやえ〳〵。

大日　ついぞない飛んだこじつけやり出して、婆アを云うて入る大和屋。

とら　婆樣のお江戸入り。婆樣ぢや〳〵。

ト三重になり、大日坊、おとら荷を負つて向うへ入る。後に、太郎兵衞、お松、十藏殘る。

十藏　ヤレ〳〵、いつに變らぬ大日どのゝ惡根性。お松どのを濟んでの事に、金にせうと目論んだを、太郎兵衞さまのお庇で、金の出所諸事萬事、お世話樣にあづかりました。

まつ　これと申すも旦那さんのお庇。エヽ、有り難う存じまするわいな。

太郎　これはしたり、なんの禮に及ぶ事。あの婆アめが出した金が、元へ戻つて、お松が身拔けさへすれば、此やうなめでたい事はない……ナア。

トこの時、奥にて手を打つ。

アレ〳〵、お座敷でお手が鳴るぞよ。エヽ、また彼奴等は、どこへうせて居る事やら。ア、コレ、おれが行かずばなるまい。

ト立たうとする。

まつ　アヽ、モシ、お前がお出でなさんすには及びませぬ。ツイわたしがお座敷へ。

太郎　ほんにお松、行てくりやれ。アレ、あの二階座敷だよ。

まつ　心得ました。コレ、十藏どの。

十藏　お松どん。

まつ　話して行かしやんせ。

ト唄になり、足早に奥へ入る。太郎兵衞、岡持を見附けて

太郎　これはしたり、お松とした事が、折角買ひにやつた豆腐を、爰へ忘れて行き居つたが、おれもはつたりと忘れたわえ。石見どのに進ぜうと、山かけ豆腐の注文が、ほんに大きに遲なはつた。さぞ待ち兼ねて居られう。コレ、十藏どん、こなさん、モウ、商ひしまつたのか。

十藏　ハイ、雨は降つて來さうなり、今夜は大概に仕込んで出ましたゆゑ、殘らず賣り切つてしまひましたて。

太郎　そりや幸ひ。山かけ豆腐の切り刻み、なんと手傳つてはくれまいか。

十藏　そりやアお易い事でござります。常からお世話になるお內の事。お手傳ひ申さいでなんと致しませう。幸ひ爰に俎板庖丁。

ト俎板を取寄せ、庖丁を取る。この時、庖丁の柄、割れて落ちる。

ア、コレ、庖丁の柄が割れたわえ。

太郎　ア、そりや今、大日坊をきめる時、握り詰めた所爲かして、そこで碎けたもの。ドレ、庖丁を取つて來てやらうか。

ト行かうとする。奥にて

近經　アイヤ、その庖丁、身が持參いたさう。

ト合ひ方になり、近經、短刀を持ち出て來る。

太郎　これはあなた樣は、本田次郎近經さま

十藏　すりや、あなた樣が、秩父さまのお屋敷にて、本田次郎近經さまとは、ヘイ、あなた樣でござりまするか。

近經　如何にも。身は秩父の郎黨、本田の近經。主人が役目の名代に、罷り越したは殘黨の詮議。

兩人　エ、。

ト思ひ入れ。

近經　御連枝なれども義經の公達、冠者太郎義基公、忠義の武士の鈴木の三郎、冠者を守り奉らんと、姿を替へて窺ふ由、巷の取沙汰。その上に、搗てゝ加へて平家の身より、錦の前も町家に忍び、景清親子、非場の十藏、永らへ居るとの訴へあれば、油斷ならざるこの時節。それゆゑ役目を蒙むる近經。なんと、マア、世の中と云ふものは、油斷のならぬものではないか。

太郎　すりや、なんと仰しやりまする。冠者太郎を守り立てんと、鈴木とやらもこの東に。

近經　徘徊いたすと聞いたゆゑ、彼れらを詮議の次郎近經。爰は所も東路に、隅田川近き、五百崎は、風雅を好む諸人の遊覽。春は櫻木、冬は雪、目を喜ばすこの絶景。殊には多くの酒店を催ほし、山海の珍味のうち、取分けて當所の鯉魚は、名產と承つたが、聞きしに勝る事ども。殊には主人太郎兵衛が庖丁、手際よき洗ひ鯉。洗ひ鱸も賞翫と、持參いたした短刀は、無銘なれども、天晴れ業物。されども當世に不吉の刃表。魚切る時は鱸庖丁。鈍菜刀の代りにも、使はせん爲持參いたした。役に立つなら若い者、この短刀で料つて見やれ。

　ト十藏が方へ投げてやる。
十藏　無銘とあれば短刀の、その出所は知らねども、近經さまのお心あっての、只今の御一言。よし鈍刀か鎌倉の、お歴々から御持參の、この短刀にて切り刻み。
　ト鞘を拔き放つ。薄ドロ〳〵にて、十藏が左の目尻へ一つの痣現はるゝ。近經、太郎兵衞、これを見て思ひ入れあり
近經　ヤ、こなたの顏に一つの痣。
　ト十藏、心附き、前の流れをキッと見て
十藏　誠や俄かに面體に、見違ふ如きこの痣は。
近經　無銘なれどもその短刀、平家の侍ひは景清が、家に傳はる痣丸の短刀。故なき者の拔き放せば、面體其まゝ替らねど、上總の家に由緣の者の、拔き放すその時は、痣を生ずるその奇特。さては彼れこそ景清に、由緣の者にてあるやらん。
　トきつと見る。十藏、ちやつと鞘へ納める。ドロ〳〵打ち上げ、痣消える。皆々見て
太郎　今まで目尻に一つの痣、刃の鞘へ納まると、其まゝ痣の痕もなく
近經　さては尋ぬる非場の十藏。

　ト立ちかゝる。此うちお松、上の方へ煙管煙草盆を持ち出かゝり居て、この時、ツカ〳〵と寄つて、持つたる燒煙管を十藏の目尻へ差しつける。これにて痣出來る。
　又も男子が面體に。
まつ　いま仰しやつたはお目違ひ。この人さんには生れつき、常から見える目尻の痣。
近經　ヤア、なんと。
十藏　悲しい事には生れつき、わしが面には常から痣。白刃は鞘に納まつても、生れつきゆゑ消えない痣。お侍ひ樣、お武家樣、こりや、私しが生れつきの、ハイ、痣でござりまする。
近經　ハテ、サテ、頓智なお松とやら。あの者は太郎兵衞か。
太郎　ヘイ、召使ひの下女奉公。
近經　ハテ、水仕にはさそくな女。召使ひなら親判か、但しは請け判證人は。
太郎　ヘイ、即ちあれなる夜蕎麥賣り、女が請け判。
近經　その手形は。
太郎　サア、それは。

卜思ひ入れ。

近經　よもや請け狀、手形はあるまい。女に稀れな下女の松、よも請け判に立ち手はあるまい。見込んで身共が請け判に立ち申さうが、なんと太郎兵衞、おてまへ抱へて置くまいか。

太郎　そりや私しが望むところ。仰せならうでも下女の松、この太郎兵衞が召抱へ

近經　その請け狀も認めて、文言とてもお定まり。本田次郎近經が請け判すべし、この手形、太郎兵衞、それにて

卜懷中より書き物を投げやる。太郎兵衞、披き見る。

太郎　人丸が人相書ゆゑ思ひ入れあつて

平家の侍ひ景清が、娘の人丸が人相書。

まつ　さてはこの身の、素性を詳しく。

卜十藏が持つたる短刀を持つて、つか〳〵と二重舞臺へ上がり、近經に詰め寄る。太郎兵衞これを隔てる。お松、短刀を拔きかける。また薄ドロ〳〵にて、お松が顏へ痣顯はるゝ。皆々思ひ入れ。この時、上の障子家體より、半七窺ふ。

太郎　又もお松が面體に

近經　痣の不思議は、さては人丸。

十藏　コレ。

卜思ひ入れ。お松、短刀を鞘へ納める。痣消える。皆皆思ひ入れあり

近經　ほの〴〵と、まこと明石の浦ならば

まつ　我れにも見せよ

太郎　人丸の塚。

卜四人、顏見合せて思ひ入れあり。十藏、立ち上がり、二重舞臺へ、近經の方へ詰め寄る。この立廻りに太郎兵衞は平舞臺に殘る。お松、思はず懷中より以前の觀音を落す。近經、目を附け

近經　下女のお松が懷中より、落ちたる品は尊き御佛。

まつ　アヽ、これは。

卜手早に懷中する。近經思はず、半七と顏見合せる。

太郎　アヽ、モシ。

卜思ひ入れ。これにて半七、障子を閉す。

近經　ハテナア。

卜この見得にて唄になり、二重舞臺へ一面に簾下りる。あと捨て鐘。太郎兵衞殘る。奧より野分姬に隅田平附いて出て來る。障子の内より半七出て來る。

半七　三郎重家。

太郎　アヽコレ、その名を迂濶に。モシ。
　ト奥の方へ思ひ入れあり
思ひがけなき次郎近經、あなた方を詮議の爲、このあたりを徘徊なせば、油斷大敵、義恭公には、矢張り刀屋石見が方へ。
半七　サア、さは思へども折角に、尋ね來りし野分どの。
野分　都の空をはる〴〵と、尋ね參りし甲斐ありて、嬉しい逢瀨を願へども、いま世を忍ぶ義恭さま。
半七　草木に心置かるれば、一つに居ては人目に立ち、其方の爲にも
隅田　却つて他聞の聞えも如何。拙者が一先づ旅宿へ參つて。
太郎　野分さまには私しが、隱れ家にお殘りなされ、半七さまは矢張り石見が、お供なされて。さは去りながら、娘お花は平家に由縁。互ひに仇ある
　ト思ひ入れあり
サア、仇な戀路も若木の花。須磨の昔を思し召し、必らずともに、御合點か。
　ト思ひ入れ。この時、眼八、出かゝり、衝立の蔭にて窺ふ。

半七　アノ某は、この家を離れて
太郎　住み馴れし石見が方へ。
野分　すりや、どうあつても自らは。
太郎　お側にあつてはお爲にならぬ。
隅田　拙者は旅宿へ。
半七　太郎兵衛どの。
太郎　マア、奥へ。
　ト思ひ入れ。この時、若い者一人、窺ひ居て
若者　さてこそ落人。
　ト半七にかゝらうとする。隅田平、引ッ捕へ、見事に當てる。ウンと倒れる。
半七　これは。
隅田　行て參りませう。
太郎　サア、ござりませ。
　ト唄になり、半七、野分姫、太郎兵衛、奥へ入る。隅田平、向うへ入る。時の鐘にて、眼八、窺ひ出て
眼八　サア〳〵、よい事を聞き出したわえ。半七めは冠者太郎、お花と云ふは平家に由縁。この事を訴へて、今のうちに召捕つて、近經めに鼻明かせん。さうだ。
　ト行かうとする。十藏、出かゝり居て、眼八を引きと

め
十藏　イヽヤ、お侍ひ樣、こなさんをやる事はならねえ。待たつしやい。
眼八　此奴なんだ。ついに見た事もない二才め。うぬ、やられぬとは、何ゆゑ身共をやらぬのぢや。
十藏　ハテ、知れた事だ。お花さんや半七どのゝ、身元を嗅いだこなさんゆゑ、口走られては、ちつと此方の、勘定が違ふゆゑ、そこでこなたはやられぬよ。
眼八　アヽ、それゆゑ身共を、やられぬと吐かす町人め。コリヤ、うぬも平家、義經に出緣の奴。正しく當時御詮議の、うぬは非場の十藏だな。
十藏　アヽ、コレ、滅多な事を。
眼八　違ひあるまい。十藏ならば身が召捕る。マア、繩打つて。
ト十藏へかゝる。立廻り、眼八、拔打ちに切りつける。かい潜つてこの刀を捥ぎ取り、眼八へ切りつける。眼八、肩先を切られ、敵はじと簾の內へ逃げ入らんとする。この時、簾の內より白刃出て、眼八を切る。眼八、苦しみ倒るゝ。
十藏　これは。
ト思ひ入れ。簾卷き上げる、內に近經、拔き身にて立ち身。十藏、近經を見て白刃を捨て
あなたは先刻の近經さま。
近經　そちや最前の痣ある町人。今の手の內立振舞ひ。いよいよ非場の。
ト思ひ入れ。合ひ方になり、近經、血刀を、十藏が目先へ突きつける。十藏心得、手水鉢の柄杓を取つて、刀へかける。此うち太郎兵衞、出かゝり居る。十藏、腰の手拭にて白刃を拭ふ。近經、十藏へ始終目を附け、思ひ入れありて
俄かに面に疵ある男子。この場を遁がるゝ、正しく非場の
ト立ちかゝる。太郎兵衞、つか〳〵と寄つて、十藏をかき退け
太郎　アイヤ、面の疵なら私しも。
十藏　アノこなさんの目尻の疵。
太郎　わしもこなたも出來立ての、目尻の疵は一對に。
近經　云ひ合さねど面の疵……疵持つ足の。
ト三人顏見合せ、思ひ入れありて
太郎兵衞とやら、今日は心遣ひ。重ねて緩りと。

ト切り戸の方へ行く。

太郎　イヤモウ、なんの風情もござりませぬ。これを御縁と又この上。

ト履物を直す。

近經　折り〲參つて世話にならう。こりや、太郎兵衞へ當座の祝儀。

ト懐中より紙に包みし燒印の据りし關切手を投げやる。太郎兵衞、取つて

太郎　奥州へ行く道筋の、關所を容易く

十藏　越え行く先は陸奥の

太郎　道の果まで通路の燒印。ア、、何から何まで。

近經　コレ。

ト思ひ入れ。眼八、よろぼひ寄つて

眼八　おのれ近經。

ト立ち上がるを、十藏、持つたる刀にて裾を掻き、乘つかゝつて、眼八に止めを刺す。近經、その間に切り戸の外へ出る。太郎兵衞、切り戸をしやんと閉し

近經　其うち參らう。

太郎　よう入らつしやりました。

トよろしく　　拍子幕

二幕目　　三國堤の場

役名――刀屋石見。同娘、お花實ハ敎經息女錦の前。同手代、半七實ハ冠者太郎義基。高慢寺小兵衞。料理人、段吉。中川屋下女、お松實ハ景淸娘人丸。修行者、聖天町の大日坊。

本舞臺、三間の間、正面、誂らへの土手。これに石段、石の大鳥居の後を見せ、下の方に榎の大樹。上の方に松の立ち木。舞臺前、波板、柵。向う打拔き待乳山を見せたる三圍の夜の道具。所々に稻村。時の鐘、禪のツトメにて幕明く。

ト雨車の音激しく、簑笠或ひは赤合羽の中間など箱提灯を持ち、雨降りの仕出し、左右より出て、捨ぜりふにて別れ入る。向うより大日坊、頰被りにて安下駄を履き、破れ傘をさして出て來り、花道にて

大日　ア、コレ、小兵衞めに逢ひたいものだが。おれが所へ人を寄越して、今夜お花が歸り道に、待ち伏せして引ツ拂ふから、手傳つてくれろとの頼み。こいつはまんざ

らな話しではない。あの小兵衞めを先に使つて、お花を此方へ取上げ遣ア。イヤ、こいつはおつりきな仕事がかかつて來たわえ。

ト此うち矢張り時の鐘。時鳥の聲。下座より小兵衞、傘をさし、段吉、中田屋のぶらを灯して出て來り、小兵衞、思ひ入れあつて

小兵　そこへ來たは大日坊ぢやアないか。

大日　小兵衞さんかえ。御用があると人を寄越しなさつたに依つて、一日散に來やしたが、このお使ひに云はしつた仕事わえ。

小兵　サア、委細はこの男に云つてやつたが、なんとおれが手先で、働らいてくれまいか。おらアこんな事はたべつけないから、一向不馴れだヮ。所詮おれを嫌がつて居るあのお花、一筋縄では行くまい。そこで彼奴等が歸りを待つて、お花ばかりふんだくる工面にしてくりやれ。

段吉　それでもお前、外に親仁や半七と云ふ、野郎が附いて居ませうぞえ。

大日　ハテ、そりや斯うしたがよい。今にも爰へ彼奴等が來るヮ……マア〳〵、お前方がお花や、あの親仁になつて、向うから來る眞似をしなさい。

兩人　合點だ〳〵。斯うか〳〵。

ト小兵衞、段吉、手を引き合つて下座の方より、お花の氣取りにて來る。

大日　さうだ〳〵。さう來る所を、此方からズッと出て、いきなりにこの棒で、向う臑を擲つて、叩き轉ばすヮ。

ト縫ひぐるみの割木を取つて、二人が足を掻いて轉ばす。

兩人　オヽ、痛い〳〵。

小兵　コレサ、仕方話しに、さう本當にせずともいゝぢやアねえか。

大日　サア、斯う稽古から身を入れにやアなりやせぬ。

小兵　イカサマ、そこもあるわえ。

大日　時に、雇ひ賃を貰ひたいね。

小兵　ハテ、忙しないお坊だ。それ〳〵。

ト懐より紙包みにて二三分の金を遣る。大日坊、捻つて見て

大日　こいつは梅川忠兵衞だな。

小兵　なぜ〳〵。

大日　使ひ果しの二分であらう。

小兵　ハテ、洒落た坊主だ。



初演當時の錦繪

大日　コレ、こいつは手附けだによ。
小兵　ハテ、慾張つた坊主だ。
　ト大日坊、下座を見て
大日　アレ〳〵、提灯が來る。あれだ〳〵。灯を消しねえ消しねえ。
兩人　合點だ〳〵。
　ト灯を消し、手ぐすね引いて窺ふ。捨て鐘、蛙の聲にて、下座より石見、お花、中田屋の番傘を相合傘にさし、半七、これも番傘をさし、中田屋のぶらを灯し、出て來り
石見　それ〳〵娘、道がぬかるぞ。靜かに歩め。ア、ソレもそつと傘の中へ入りやいの。濡れるわいの。
はな　それぢやと云うて、お前を濡らすまいと思ふから、一倍わたしが濡れるわいな。この傘はお前お一人おさしなさんせ。わたしやアノ半七さんの傘へ入らうわいなア。
石見　エヽ、また半七の傘で濡れる氣ぢやな。イヤ、又、この親仁と濡れられもせまいて。
半七　モシ〳〵、お花さま、私しが傘でも濡れまする程に、矢張り親仁樣のお手を引いて、そろ〳〵とお出でなされませいの。

はな　コレ半さま、又お前、其やうな事云はしやんすが、わたしと相合傘はお否で、お前はアノ野分さんと、しつぽりと濡れなさんすお心であらう。エヽ、腹が立つわいな。
半七　これはしたり、あの野分どのは後へ殘して、あの三郎に……アイヤ、太郎兵衞どのに預けて來たぢやないかいの。
はな　サア、後にござんせうが、何ぢややら、わたしや氣が揉めるわいなア。
石見　これはしたり、娘、其方もマア、其やうに、なぜに悋氣らしい事を云ふぞ。先刻も云うて聞かす通り、あの野分さまは幼ない時より、義基さまと……アイヤ、この半七と云ひ號け。わが身も娘とは云ふものゝ、この石見が爲には大恩ある平家の大將……アイヤ、あの義經さまにも御恩を受けたこの親仁。さすればどちらをどうとも云へぬゆゑ、太郎兵衞どのとも、あの十藏とも相談して、お前方お二人を引請けて居るこの石見。野分さまの事は、マア〳〵、わしに任して置きやいの。
はな　それぢやと云うて、わたしや野分さまで、氣が揉めるわいな。

半七　ハテ、其やうな事氣にかけずと、小降りならうちに、サア〳〵舟場まで參りませう。サ、親仁様もおひろひなされませ。

ト行かうとする。窺ひ居たる三人、ツカ〳〵と寄つて、大日坊、いきなり棒にて提灯を打ち落し、三人が足を掻いてのめらし、棒にてしたゝか打ちのめす。小兵衞駈け寄つて半七を縛り、手拭にて口を押へて稻村の方へ突きやる。此うち段吉、お花を押へ居て、引立て行かうとする。大日坊、棒にてしたたかくらはす。段吉うろたへ、下座へ逃げて入る。

小兵　お花、爰か〳〵〳〵。コレ大日、引ッ擔いで歩びやれ。

ト お花を引きつける。大日坊、窺ひ寄つて、小兵衞を棒にてしたゝかくらはし、トヾ打ち殺す。小兵衞、苦しみ倒るゝ。大日坊、死骸を側へ蹴込み、お花を引ッ捕へ

大日　どつこい〳〵。逃がしはしねえ〳〵。

ト逃げんとするを引ッ捕へ、横に寢かし、探り廻つて力持ちの大石を引ッ抱へ、お花が上へ置く。この時石見、心附き、よろぼひ寄つて

石見　エヽ、何奴なれば待ち伏せて、娘はどうした。お花やアい。半七どの。

ト大日坊を見附け

ヤ、おのれは盜人めぢやな。コリヤ、娘は何處へやり居つた……ヤヽ、そりやお花ぢやないか。エヽ、おのれが仕業か。エヽ、盜人め。

ト拔いて大日坊に切りつけるを、この手を捕へ、もぎ取つて石見が左の腕へ切りつける。石見、よろぼひ寄つて大日坊に取りつき、よく〳〵顏を透かし見て

石見　ヤ、おのれは大日めぢやな。エヽ、おのれ、片腕は叶はずとも、せめて石見が。

ト足へ縋つて片手にて捩ぢ倒し、取つて押へ、大日坊が上へ乘りかゝつて、片手にて胸先をキッと押へて、聲慄はせ

エヽ、天命知らずの惡人め。ヤイ、あのお花を何者と思ふぞ。勿體なくも教經公の息女、錦の前さまぢやわい。

大日　アヽ、そんなら何と云ふ。あのお花は教經の娘、錦の前か。こいつはいゝ事を聞いたわえ。

ト跳ね返さうとするを、石見、キッと押へて

石見　エヽ、動かさうか。おのれも景清が伯父。さすれば

平家に大恩ある奴。生かしては置かれぬ。せめて片手で
締め殺して。
ト右の手にて大日坊が咽喉を押へんとする。下より大日坊、脇差を取つて石見が右の腕へ切りつける。石見、苦しみ
石見　エヽ口惜しい。例へ兩腕叶はずとも、食ひついてもこの恨みとは思へども、食ひつかうにも歯がたいわえ。
ト苦しむ。
大日　喧ましいワ。おとぼねを立てぬやうに、口を切り裂いてやらう。
ト下より白刃にて口へ切りつける。これにて倒れる。大日坊、起き上がつて
エヽ、思ひの外馬鹿力ある親仁めだ。ドレ、お花の君はいづくに渡り給ふぞ。
トお花を引き起し
コレ〳〵、お花ぼう、今お父さんが往生際だ、ちよつと來て死水を取つてやりな〳〵。
ト泣き叫ぶお花を引立て、石見を足にて蹴返す。石見呻くを聞きつけ、
はな　ヤア、父さんか。その深手は。エヽ、其方はなう。
ト大日坊へ詰め寄る。
大日　コレナ、何も死にかゝつた親はいらねえわな。こんな親仁が欲しくば、おらが長家の掃溜を掘ると、ヒヨイヒヨイといくらも出るよ。サ、この脇差を斯う持ちな〳〵
トお花へ無理に持たせ
サ、お父さんの往生際だ。お前、引導渡してやりな。
ト捨ぜりふにてお花に刀を持たせ
南無阿彌陀佛々々々々々。
ト切り伏せる。石見、落入る。お花、ウンと悶絶する。
オヤ〳〵、お花ぼうは癪を發したか。ハテ、氣の小さい子だなう。コレ、氣を附けろ。お花やアい〳〵。
ト呼び付けて居る。矢張り捨て鐘、蛙の聲。下座より野分姫、足早に出て來り
野分　ほんに、あの半七さまの云やしやんす、お花どのの所は何所ぢややら。あの太郎兵衛どのが情にて、匿まうてはもらうたれど、お側を離れてどう居られう。これから直にお花どのゝ所へ。ア、コレ、どうぞ誰れぞに、詳しう問ひたいものぢやが。
トこの聲を大日坊、後にてよく〳〵聞いて、しすまし顔にて

大日　コレ〳〵姐さん、待ちなさい〳〵。
　ト これにて野分姫、わな〳〵慄へて、
野分　ア、コレ、この暗いのに、其方はマア、なんで自ら
を呼びとめやつたのぢや。
大日　コレ〳〵、そんなに怖がる事はない。お前をわしが
呼びかけたは、なんだ、いま聞けばお前、半七に逢ひた
いから、お花が所へ訪ねて行きたいと云ひなさつたの。
野分　ほんに、さうぢやわいの〳〵。
大日　サ、そのお花が内へ、お前を連れて行つて上げよう
か。
野分　そりや嬉しいわいの。どうぞさうしてたもいの。
大日　サア、その氣なら、わしがつい連れて行つて上げう。
サア〳〵、斯う來なさい〳〵。
　ト 足にて探り、白刃をソツと取つて
あのお花が内はの、あの淺草と云ふ所サ。そこの内の半
七は、居候で居ながら、あのお花とは、ちん〳〵鴨々、
家鴨とも、云ふに云はれぬ旨い仲よ。彼奴等は大色事だ
よ。
野分　そりや、ほんまの事かいなう。
大日　ほんま〳〵。ほんまけんぴき鍼の療治だ。マア〳〵
彼奴等が内へ行つて逢つた上で、しつかりと恨みを云ひ
なさい。その恨みの云ひやうは、コレ、斯うだワ。
　ト 切り下げる。野分姫苦しみ、縋るを引ツ捕へて、脇
　腹へ突き立てる。
野分　ア、こりや何ゆゑに自らを。
大日　オ、殺してくれろと頼まれた。
野分　ヤ、なんと。
大日　イヤサ、われはな、殺してくれろと半七に頼まれた
ワ。あの半七はお花と云ふ、美しい色があるゆゑ、われ
に愛想が盡きてな、殺してくれろと頼まれたから、さう
事なしにてまへを殺すぞ。コレ、おれに恨みは決して御
無用。恨みがあらば半七に云へ。半七に頼まれたワ。
　ト 抉る。野分姫、その手に縋つて
野分　すりや自らを殺せよと、アノ其方を頼んで、半七さ
まが。
大日　殺してくれろと頼まれた。恨みがあらば半七に取り
つけ。われを殺したばかりぢやアねえ。あの親仁めをあ
の通り。まだ〳〵われが恨めしいと云ふ、半七さまもお
殺し申し、お花さまお一人は、お助け申して、和尚が閨
の花とお詠めなさるワ。コレ、必らずとも、恨みがある

なら半七に云へ。おらは彼奴に頼まれたのだ。

野分　エヽ、口惜しい。科もない自らを、あのお花ゆゑ見返られ、あまつさへ人手にかけて殺すとは、人に恨みがあるものかないものか。例へ此まゝ死ぬるとも、恨みを云はいで置かうか。エヽ、恨めしい半七さま。

大日　さうだぞ〳〵。必らずともに忘るるな。取りつけ取りつけ。半七をとッ殺せ〳〵。如是畜生發菩提心。

トしたゝかに抉る。この時、薄ドロ〳〵になり、野分姫、無念の顔色にて落入る。この死骸を稲村の蔭へ切り倒し

南無阿彌陀佛。……サこれからお花。ちよつと起きな起きな。

トお花を引き起して

サアお花、この御出家様の大黒に、なつておくれ〳〵。

はな　エヽ、穢らはしい。なんの其方に。コレイナア、半七さま〳〵。

ト尋ねるを引ッ捕へ

大日　コレサ、半七に逢ひたくば逢はしてやるワ。逢つた上ではおれが又、逢はねばならぬ。コレ〳〵

ト半七を縛りし縄の先を取つて、お花に持たせ

サ、この縄が、われが戀人の半七を縛つて置いた縛り縄。これでもそもじは坊主は嫌ひか。

はな　エヽ、なんの其方の心に隨はう。コレ、半七さんいなう。

ト駈け寄るを、縄を持たせ、この手を取つて

大日　否と云へば、ソリヤ、半七も命がないよ。

はな　ア、コレ、滅相な、半七さまを。

大日　サア、それが嫌なら、御出家に抱かれて寐るか。

はな　サア、それはな。

大日　但し、半七めを苛なまうか。

はな　サア、それは。

大日　抱かれて寐るか。

はな　サア。

大日　苛なまうか。

はな　サア。

大日　サア。

兩人　サア〳〵〳〵〳〵。

大日　姫さん、返事は、どうしておくれだ。

はな　エヽ、嫌ぢや〳〵。嫌ぢやわいなう。

大日　嫌ぢや〳〵と仰しやいましても、おつ轉ばしておち

ぎりだ。サア、爰へねたんし、かきや九年坊と洒落やせう。

ト嫌がるお花を押しこかす。

はな　アレイ〳〵〳〵。

ト下より大日坊が額を押へる。大日坊、捨ぜりふにて乘りかける。禪のツトメになり、向うよりお松、下駄傘、これも中田屋のぶらを灯し、短刀を帶に挾み、出て來り花道にてこの泣き聲を聞き、ツカ〳〵と行き、灯を上げ

まつ　ヤ、そのお聲は、お花さんぢやござりませぬか。

はな　お松どのかいなう。アレ、半七さまをむごたらしうわしまでも此やうに。

まつ　エ、そりやマア何者。なんであなたを……

ト差寄つて大日坊が額を見ようとする。大日坊、差出す提灯を打ち落す。お松、縋りつくを大日坊、有りあふ傘にて打つてかゝる。お松この傘を取らうと引き合ふはずみに、大日坊、脾腹をしたゝか突き、ウンと苦しみ、氣絕する。お松、その間に探り寄つて

まつ　モシ、お花さま〳〵。して、半七さまは〳〵。

はな　半七さまは、あの松の元に縊しめられてござんすわいなア。

まつ　ドレ、爰でござりまするか。

ト稻村の方へ尋ね寄つて、半七を探り見て、縛め猿轡を取つて、介抱して

モシ〳〵、半七さま、お怪我はござりませぬか〳〵。

半七　お松どのか。この狼藉は其方の伯父、大日坊が道に待ち受け、騙し寄つて打ち打擲。只悲しきは石見どのの最期と云ひ、巡り逢うたる野分の前も、慥かに手にかけ

ト稻村の方を見て、野分姫が死骸を見付け

ヤ、、、こりや野分どのゝ敢へない死骸。我れを尋ねて遙々と、この東路へ下向なし、巡り逢うたが却つて其方の、身の仇となつたかいやい。エ、、不便な最期を遂げたなア。

まつ　御尤ものお悔みなれど、邪智深き伯父大日、心附きなばあなた方の、お身の御難儀。モシ〳〵、お花さま、こりやコレ、あなたがお失ひ遊ばせし清水寺の觀世音、不思議にわたしが手に入りました。大事に御所持遊ばして、わたしが少しの知るべある、關屋の里へお立退き遊ばし、道にて人の咎めなば、幸ひ睦月半は、淺草寺の御

祭禮、汐入村から踊が出まするゆゑ、その稽古の葱寳りと姿を變へ、太郎が方にてお支度あり、落ち行く先は關屋の里。必らず御油斷なされまするなえ。

ト觀世音の厨子へ入れしをお花へ渡す。

はな　再び手に入るこの御佛。それと云ふも其方のお庇。忘れは置かぬ人丸どの。

まつ　アモシ、必らずともに、その本名を。ナ、コレ、御合點かえ。

ト思ひ入れ。

半七　我れも義經の由縁とは、包み隠して世を忍ぶ、葱寳りと態を變へ、關屋の里に身を隱さん。お松どの。

トこの時、雨の音頻りにする。

まつ　折惡いこの五月雨。雨の小止みも待たれぬ仕儀。急いでこの場を、お二人樣。

ト傘を渡す。

兩人　お松どの、

三人　おさらば。

ト三重になり、兩人、相合傘にて花道へかゝる。薄ドロドロにて、野分姫の魂ひ立ち上る。兩人、向うへ入る。この上を魂ひ附いて向うへ行く。お松見送り、思ひ入れ。この時、大日坊心附き、起き上がり

大日　お花やアい〳〵。コレイヤイ、お花は何所へ行つた。ヤイ、われは人丸だな。お花が行くへは、われが知つて居やう。サア、それを云へ。何所へやりやアがつた〳〵。

ト立ちかゝるをお松、大日坊が胸づくしを取つて

まつ　コレ、何所へどころか、こなさんはなう〳〵。ようもようも大それた。コレ、世を忍べばこそお花さま、素性を云へば平家の御息女、お前の爲にもお主筋。そのお方に戀慕して、養ひ親の石見さままで手にかけるのみか、コレ、おいとしいは野分さま。ようマアむごたらしう切らしやんしたの〳〵。コレ、それが出家の身持ちかいな。エヽ、こなさんはなう。

ト胸づくしを取つて引き廻す。

大日　オヽ、痛い〳〵。コレ、エヽ、わりやアこの伯父樣をどうしやアがるのだ。おれがお花に惚れたがどうした。坊主は娘に惚れないものか。コレ、邪魔だに依つて親仁も女めも、おつ殺したのだワ。コレ、よく聞きやアがれよ。人を殺すは出家の役だワ。さう大さうに吐かす事はない。そんな事を云はずとも、お花や半七は何所へやりやアがつた。それを云へ〳〵。

まつ　アイ、斯う云ふ所に置き申すは、お身の大事と、お二人ながら、わたしが知るべの方へ、落し申したわいなア。

大日　ヤヽヽ、なんだ、知るべだ。知るべとは、何所だ何所だ。

　トあちこちウロ〳〵して、無念の思ひ入れにて、お松を引き廻し、キツと引きつけ

エヽ、腹の立つ。うぬわえ〳〵。折角手に入るあのお花、よくうぬア逃がしたな。殊に戀の仇なる半七まで、いらざるうぬが庇ひ立て、伯父樣の氣の揉める、種を蒔いたる恩知らずめ。コレ、よく聞きやアがれ。なんぼしつけぬ役廻り、初めて今度でも坊主。坊さん山道すた〳〵走りと違ひ、砂村の源白茄子のへた坊主。いづれも樣に憎まれて、何所でこの身が立つものだ。否でも應でもこじつけたら、そこがお江戸の有り難さ。坊主が憎けりや袈裟までも、衣の奉加の敵役、勝手の違つたづく入が、うぬを詰なむ。サア人丸、キリ〳〵在所を吐かしやアがれ。

まつ　成る程、尤もでござんす。わたしを打つとも叩くとも、お前の存分にさしやんして、その事ばかりは思ひ止つて下さんせ。モシ、拜みます〳〵〳〵わいなア。

大日　いゝワ。それ程われが吐かさにやア、お花と云ふは平家の落人、錦の前でござりますと、訴人をして、詮議をしてもらふワ。

　ト行かうとする。お松、縋つて

まつ　アヽコレ滅相な。それを云つてよいものかいなア。

大日　そんなら二人が在所を吐かすか。

まつ　サア、それは。

大日　訴人をしようか。

まつ　サア。

大日　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

大日　エヽモウ、早く在所を云つてくろえ。

まつ　斯う云ううちもお二人のお身の上。

　ト立ち上がり行かうとするを、大日坊引きつけ

大日　コレ、待ちやアがれ。うぬはマア、伯父樣に、よく氣を揉ませやアがるな。うぬがやうな奴は、いつその事に。

　ト以前の白刃を取つて切つてかゝる。お松、身をかはし、この手を捕へ。

まつ　エヽ、此やうな物を持つて、こりやお前、どうしよ

うと思はしやんす。
大日　知れた事だ。邪魔になるうぬだから、ぶツた切つてしまふのだワ。
まつ　エ、危ない、放しなさんせ。
ト兩人爭ひ、お松、白刃をもぎ取る。途端に、思はず大日坊が額を切る。これにて上の方へ行き、額へ手をあて見て思ひ入れあり
大日　ヤ、コレ、血が出るワ……ア、、痛い〳〵。わりやアおれを切つたな〳〵。
トこれにてお松、恟りして、持つたる白刃を捨て
まつ　ア、コレ滅相な。どうしてわたしが切らうぞいな。
大日　ア、、人殺しだ〳〵。
ト聲を立つる。お松、思ひ入れあり
まつ　モシ、怪我ぢやわいな〳〵。
大日　人丸が人を切つたわやい。人殺しだ〳〵。
まつ　エ、聞分けの惡い。怪我ぢやと云ふに。
ト大日坊が口を押へる。大日坊、お松が胸づくしを取つて捩ぢ倒し、上へ乘つかゝる。お松、この手を捕へキツとなつて
怪我のはずみとは云ひながら、云うて返らぬこの手疵。勿體ない事ながら、お主の大事にや替へられませぬ。
ト大日坊を跳ね返して、捨てたる白刃の上へ大日坊を押しこかし、片手にて下なる白刃を引き拔く、この拍子に又、大日坊手を負ふ。お松、思ひ入れ。
大日　うぬ、また切りやアがつたな。
トよろぼひ起き上がる。
まつ　もう是非に及ばぬ。
ト切りかける。兩人立廻り。よき見得にて、誂らへの鳴り物になり、大日坊、有りあふ傘を取つて、兩人タテさま〴〵あつて、大日坊を泥舟へ切り込み、お松、續いて切つて行くを、大日坊、かい潜つて飛び上がり逃げ廻る。トゞ石段の上にてお松、大日坊を抉る。
大日　殺さば殺せ。一度思ひ立つたるお花が戀路、生き變り死に變り、思ひを晴らさで置かうか。
まつ　淺ましきその一言。未來は成佛して下さんせ。
ト抉つて刀を拔く、大日坊、藪の蔭へバツタリ倒れるお松思ひ入れあり
お主の爲とは云ひながら、現在血筋のこの人丸。因果づくぢやと諦らめて、お免しなされて下さりませ……斯う云ふうちもお二方のお身の上、ちつとも早く、お後を慕

うて。

ト行きかゝる、この時、本雨。お松、花道の角にて以前の傘に爪づき、これを探り取つて

さうぢや。

ト右の傘をさし、花道へかゝる。上の方へ煙硝火燃えドロ〳〵連理引きにて、お松、舞臺へ來り、キツとなる。この時、段吉、窺ひ寄つて

段吉　人丸、うぬを。

ト切つてかゝる。お松、立廻り刀をもぎ取り、直ぐに段吉が脇腹へ突き込む。ドロ〳〵煙硝火立つて、上の方へ大日坊、幽靈の拵らへにて振り出す。これにてお松、ツカ〳〵と寄りて、これを見上げ、思ひ入れあり

まつ　ハテ恐ろしい

トたぢ〳〵と後ずさりに段吉に行き當り、貫きし刀を引き拔く。これにて段吉、見事に返る。爰にてチヨンチヨン。

執念ぢやなア。

ト大ドロ〳〵にてよろしく

拍子幕

大切

隅田川の場

淨瑠璃「垣衣草手向發心」　常磐津連中

役名 ━ 野分姫の亡魂。刀屋娘、お花　實ハ教經息女錦の前。同手代、半七　實ハ冠者太郎義基。女渡し守、おとり。北條五郎時國

本舞臺、三間の間、正面淺黃幕、左右の柱、櫻の大樹、これに誂らへの釣り鐘上げてあり、舞臺先に波板。上の方見付けよき所に誂らへの苫船を取りつけ幕の內より町人、百姓の仕出し五六人立ちかゝり、今この釣り鐘を引き上げたる體にて、時の鐘にて幕明く。

仕出　なんと皆の衆、よい恰好の釣り鐘ではござらぬか。

同　ドレ〳〵、斯う見た所が、餘ツぽど心を附けたと見えますわえ。

同　イヤ、心を附けたと云へば、それで思ひ出したが、いよ〳〵この鐘は、清水寺の淸玄と云ふ人が建立しましたのかな。

同　ハテ、悪い合點な人達だ。淸水寺に淸玄と云ふ人があつたところが、多年の本願で、この釣り鐘を建立したいものだ〳〵と、何か足を擂粉木にして歩いたところが、どうやらかうやら釣り鐘が成就しさうになつた。ところで惜しい事には、今年で二十七年を後に、その淸玄どのは死にましたワ。

同　ハヽア、それで讀めた。その淸玄どのが、今年で二十七年の追善に

同　あの聖天町の大日坊が、たうとう建立しましたのサ。

同　そして、どう云ふ因縁か、その身もこの中殺されたと云ふやうな事を聞きましたが、こんな功德をしても、人と云ふものは、知れぬものでござるてな。

同　それ〳〵、どうぞこの鐘の由來を、板行にでも起して置きたいものだ。

同　サア、わしもさう思つて居ります。時に、追ツつけ木母寺で、供養が始まるであらう。サア、行きませうか。

同　サア〳〵、さうしませう。

同　サア〳〵、行かつしやい〳〵。

ト皆々捨ぜりふにて向うへ入る。これより座附き口上あつて、その爲口上左やうにて納まる。正面の浅黄幕切つて落す。これに常磐津連中居並び、直ぐに前彈きにかゝる。

〽名にしおふ、月の武藏に影淸く、霞を流す隅田川岸を分くれば下總と、昔は云うて今も猶、ありのまに〳〵在原の、まめな心を都鳥、群れつゝ寄する白浪は、ぜゞにせかれてぱつとして、伊達な浮世を渡し守。

ト合ひ方になり、よき程に正面の苫落ちると、おとり竿を持ち、頭へ手拭を置き、よき見得にて立ち身。

〽川淀に寫す姿も自ら、色ある露の水馴れ棹、さす手も遠き唐土の五湖の景色はいざ知らず、船を氣儘の喜見城、一樹の蔭も我が宿り、緣は他生の船宿や。爰にもやひの摺火打ち、煙草に憂さをぞ晴らしける。

とり　待乳山、夕越え聞けば五百崎の、隅田川原に一人かも寐ん、とは、よう云うた歌の心。見ぬ唐土の八景はいざ知らず、四季に和らぐ隅田川、ハテ面白き、景色ぢやなア。

〽戀には身をもやつせと云うた、云うた〳〵よう云うた、その言の葉を忍ぶにまかせ、徒歩やはだし

で人目の關を、忍々と賣り歩く、忍賣る身はかうもあらうかと、小褄をしやんと川千鳥、千鳥鷗の名所なる、隅田川原に着きにけり。

トこの文句のうち、向うより半七、お花、鶴の形、手甲脚絆にて、忍の籠を提げ、出て來て

はな　ヤレ〳〵嬉しや、どうやら渡し場へ來たやうぢやわいなア。

半七　それ〳〵、此やうに忍賣りと姿を變ゆれど、來る道來る道も心遣ひ。どうぞあの船へ便つて、渡しを頼んで見ようか……モシ〳〵、なんとその船へ乘せて

はな　どうぞ渡して下さんせいなア。

トおとり、兩人を見て

とり　成る程、渡し守でござんすに依つて、隨分渡して上げないものでもないが、マア、斯う見た所が、待ちなさんせ。

ト船より上がつて來て

どうやらお前方の形恰好、譯ある事のやうに思はれて、どうも迂濶には渡されぬわいなア。

半七　成る程、さう疑ひを受けては、却つてこの身の妨げ、如何にも我れ〳〵二人は、ちと樣子あつて立退く者。

とり　それ御覽じませ。ちよつと見ても、やるものぢやござりませぬ。併し、誰れ〳〵も身に覺えある事。ほんに見るから、いとほしげなお二人さん。ようござんす、袖の振り合せも他生の緣とやら。わたしがお力になつて上げる程に、隨分心を丈夫に持つて、モシ、必らず短氣な心を持たぬがようござりますぞえ。

半七　忝ない。深切なその詞に甘え、我れ〳〵が身の上の事も打明けて……サア、云ふに云はれぬこの身の始末。

はな　サア、何を云うても、皆わたしが徒らから今の御難儀。これにつけてもおいとしいは、お云ひ號けの野分さま。

半七　コレ。

はな　折角お前に逢ひたい〳〵と、思ひ焦れてお出でなされたものを、剩へ人手にかゝつて、お果てなされたがおいとしい。定めてわたしをお恨みなされて、なんの成佛なされうぞいなア。

とり　そんならお前の外に。あなたに云ひ號けの方があつたところが、人手にかゝつてお果てなされしとお物語り。ほんに果敢ない御緣でござりましたなア。

半七　語るにつけても涙の種。

ト懐中より誂らへの袱紗を取り出し
これを見てたも。又とだに思はぬ仲の別れ路を、詞殘りて名をや恨みん。幼なき時の別れさへ、云ひ號けの某へ、筺に送りしこの一首も、今は未來の、置き土産となつたかいの。

はな　この世の御縁は薄くとも、御本妻と定まるからは、未來は添うて下さりませ。假のこの世の殿御をば、わたしがお預かり申してござんすぞえ。

半七　筺こそ今は仇なるこの袱紗、せめては妄執も晴るゝやうに、煙となさば未來の門火。

はな　それ〳〵、どうぞ未來は成佛なされて下さりませ。

三人　南無阿彌陀佛々々々々々。

ト蘆の火へ袱紗をくべる。煙硝火パッと立ち。大ドロドロになり、三人悶絶する。ドロ〳〵打ち切る。

へ白浪の、雲があらぬか妄執の、姿を爰にあり〳〵と、同じ荵の染め模様。

トどろ〳〵になる。花道の眞中へ煙硝火パッと立つ。野分姫の亡魂、誂らへの形にて、荵籠を提げ、見得にてセリ上がる。直ぐに淨瑠璃。

へ浮いた姿の娘振り、華奢な風俗かいしよげに、小褄ほら〳〵とりなりも、振りの袂に風含む、笑顔床しき花菖蒲、云はで荵を手向草、陽炎もゆるつらき身を、胸に數々限りなき、恨みの刃に情なや、浮かみもやらでその人の、連れ添ふ事の怨めしくうつら〳〵と迷ひ來て、小舟間近く立ち寄れば。

ト薄ドロ〳〵になり、半七心附き、お花おとりを呼びかけ、あたりを見て、野分の亡魂を見附け恟りして

半七　ヤア、其方はお花ぢやないか。

ト野分姫、附け聲にて

野分　アイ、お花ぢやわいな。

半七　オヽ、其方はお花、心が附いたか。

はな　ほんに恐ろしい事でござんしたわいなア。

トまた恟りして、おとりを連れて來て

半七　コレ〳〵女中、わしが連れて來たお花が、二人になつたわいなう〳〵。

とり　お前も怪しからぬ事を云うてぢや。どうしてマア其のやうな事があつて、よいものでござりませうか。ドレドレ。

ト兩方を見て恟りして

オヽ、ほんに同じ形恰好。こりやマア、どうしたもので

こざんせう。
半七　なんぞ好い智慧はあるまいかいの。
とり　マア／＼、わたしにお任せなされませ。
　トお花が側へ來て
〽モシ、お前のお名は何と仰しやるえ。
はな　アイ、わたしやお花と云ふわいな。
　トまた野分傍へ來て
とり　そんならお前のお名はえ。
野分　アイ、わたしやお花と云ふわいな。
　ト野分の附け聲。
とり　ほんにマア、こちらにもお花さん、こちらにもお花さん、こりやマア、どうしたものであらうぞいなう。
はな　エヽ、なんのこつちやぞいなア。わたしをのけて、外にお花があつてよいものかいな。
野分　エヽ、なんのこつちやぞいなア。わたしをのけて、外にお花があつてよいものかいな。
とり　イヤ、モウ、どちらがほんのお花さんやら、とんと合點がゆかぬわいな。こりやどうしたら。
　トこなしあつて
オヽ、それ／＼、先刻に爰へござんした時、人目をしのぶのその古事。お前の方は覺えて居たが、こちらのお花さん、お前も覺えておいでなさんすかえ。
野分　それを忘れてよいものかいなア。
とら　サア、その古事は。
野分　その古事は。
とら　そんなら爰で見ようかいなア。
野分　恥かしながら、ちよつと小褄を、斯う取つて。
〽わしが在所は、京の田舍の片ほとり、八瀨や小原や芹生の里、世の忍ぶゆゑ姫御前の身で後からげ、忍いらんせんかいなア、買はんせんかいなア、世を忍ぶ、尾花招けばうなづく小萩、何をくねるぞ女郎花、わしや可愛うてならぬのに、さても緣が朝顏ならばえ、廓の女郎衆は見やせまい、開くを開くを、蕾が開いたを見やせまい、さいなさいなさうぢやといなア、人目しのぶの草がくれ。
とり　イヤモウ、不思議と云はうか。とんと合點がゆかぬわいなア。どうも斯うなつては、仕樣がござんせぬ。どうぞ好い事がありさうなものぢやがなア。
　ト思ひ入れ。半七ソツとおとりが袖を引き、囁く。おとり、呑み込み

ほんに成る程。こりや好い思ひつきでござんす。それそれ。

ト野分姫が側へ又來て

この上は、半七さんと云ふお方が、お花さんと馴れ染めの睦言は、お前知つてであらう程に、その話しが聞きたいわいな。

野分　サア、その睦言の話しはなア。

はな　恥かしながら、よう覺えて居るわいな。

とり　ハテマア、こちのお花さんから聞かうわいなア。

半七　それ〳〵、それが聞きたい。

とり　どうぢやえ。

野分　サアそれは。

〽過ぎにし梅の花見月、目見得初めと手を突いて、ふつと見合す顏と顏、いとしらしうて優形で、ほんに思へば徒らな、人の殿御をなんのその、嗜なんで見ても忘られず、心で惚れて譽めて居て、ついした譯になつたのが、積り積つていつしかに、桃と櫻の色比べ、幼な遊びの酒事に、恥かしながら杯を、さしたわたしが心意氣、紅が附いたと云うたれば、そこから呑んで下さんした、その嬉しさに杯を、二世の固めと抱きしめて、つい手枕のそゝけ髮、直してあぎよと簪に、お前の紋のさし込みは、癪と云うもの初めて知つた、外の殿御の肌知らず、思ひ焦るゝわたしぢやもの、なんの心が變らうと、あなたへ引けばこなたへも、縺れ縺るゝ糸柳、風に揉まるゝ風情なり、おとりはそれと見るよりも、中を隔てて結柴の、こちらもこちらも莟の花、若氣の薫り床しさに、見惚れて居さんすその中へ、幼な遊びにかこつけて、めんない千鳥へ誰れとても、思ひは同じ飛鳥川、瀨と變り行く昨日今日、修羅の苦患の晴れやらず、名乘らで知れぬ我が思ひ、ぢつと見る目の物凄く。

野分　義基さま、お花どの、

〽恨めしの心や、人の恨みの深くして、刃にかゝりし身の因果、生きてこの世にあるならば、いとし殿御と添ひもせう、あゝ可愛い女と寐んものを、なまなか出家を遂げし身は、苦患にさへられ發心の、中立ちを忘れしも、皆誰れゆゑぞお花ゆゑへわたしが迷ひは義基さま、幼な馴染の云ひ號け、末を頼みの甲斐もなく、思はぬ憂き目三津瀨川、

胸に漲る思ひの淵、淺いは縁、深いは恨み、恨みは人も、世をも思ひ、思ひ思はず唯その人こそ憎くし辛し、情ないぞとかこち泣き、がつぱと伏して泣き居たる。

とり　ハア、成る程、聞けば聞く程、合點のゆかぬ二人のお花さん。この上の思案と云うては。

はな　オヽ、それ〳〵、去年の秋、神田祭に稽古した踊の振り、わたしやよう覺えて居るわいな。

半七　こりやよからう。わしもとも〴〵相手になつて。

と：　サア、その踊が見たいわいなア。

野分　サアその踊は。

はな　それ。

半七　それ。

とり　それ〳〵。

四人　そつこでせい。

へ花形の渡しに色の綾瀨川、姿箕輪と浮名は請地、人が庵崎心の關屋、天神さんのお世話なら、片葉の蘆ぢやないかいな、それ〳〵誓文さうかいな、花川戸戀を待乳に三圍や、逢はにや牛嶋鷲の森、縁の橋場も嬉しの森よ、白鬚さんのお世話なら、吾妻橋ぢやないかいな、それ〳〵誓文さうかいな、離れぬ仲の縁ぢやもの。

とり　サア、これでも解らぬわいな。

半七　この上は、兼ねて所持なす尊像こそ。

ト懷中より厨子入りの尊像を出して

これこそ淸水寺の觀世音。これを其許へ預ける間、何卒この場の不思議の一つ。

トおとり、取つて

とり　それ〳〵、この尊像の功力を以て、化性の姿を顯はし給へ。歸命頂禮々々々々。

ト突きつける。薄ドロ〳〵になり、野分姫こなしあつて

へあゝら恐ろしや、苦しやなア、娑婆の業因深きゆゑ、思はぬこの身に苦患の受け、共に奈落の底までも引立て行かんとせしかども、觀音薩埵の誓ひに恐れ、我れと我が身を責めに責め來る冥途の使ひ、影もよしなや恥かしの、もりて餘所にや白露の、見えつ隱れつ俤の、ありとは見えて春風に姿は消えて失せにける。

ト大ドロ〳〵になり、野分姫、上の釣り鐘の内へ消え

る。直ぐに向うにてアリヤ〳〵の聲。どんちやんになる。

半花　ヤア、あの人聲は。

とり　先刻にから試して見れば、あなたは義基さまとあるからは、冠者太郎さまに相違はござりますまい。わたしも由縁かゝりはなけれども、爰にお出でなされては、お爲にもなりますまい。あの人聲は慥かに岩永が討手の者。ちつとも早う。

ト兩人に囁く。半七、お花、呑み込んで

半七　何から何までの志し。

はな　忘れは置きませぬ。嬉しうござんす。

とり　ハテ、その禮は後の事。ちつとも早う。

はな　合點でござんす。

半七　サア、おぢや。

ト時の鐘になり、半七、お花を連れて下座へ入る。おとり、身繕ろひし居る。此うちにドン〳〵になる。向うより捕り手八人、何れも四天、誂らへの鱗の形にて銘々提灯十手を持ち出で來り、花道に並ぶ

捕一　刀屋石見方に半七と、變名なせしは冠者太郎義基。

捕二　まつたその後を慕ひ、家出なせし娘お花こそ、聞ふに及ばず錦の前。

捕三　兩人ともこの所へ來りしを、匿まひ置く事明白たり。

捕四　智慧自慢する重忠が、見遁がし置くのが心得ずと

捕五　搦めに向ひし我れ〳〵こそ、岩永どのゝ指圖に依つて

捕六　密々來りしこの人數は、手柄は仕勝ちと目を配り

捕七　取つて押へてぐる〳〵卷き、逃がしはやらぬ籠の鳥。

捕一　もし陳ずれば踏み込んで、出家沙門の人の山、捕り手は名に負ふ八人一座。その名も爰に寺嶋銀藏。

捕二　世續の船藏。

捕三　花畑浪藏。

捕四　小梅の隆藏。

捕五　綾瀬の増藏。

捕六　關屋の辨藏。

捕七　牛嶋毛藏。

捕八　小菅の鍋藏。

七人　手筈を定めて

捕一　必らずぬかるな。

七人　合點だ。

ト舞臺へ來り、皆々並び

捕一　あの釣り鐘の下りてあること不審の一つ。
捕二　隠し置いちやア爲になるまい。
捕三　サア、尋常に
皆々　渡すまいか。
とり　これは又、無體と云ふものでござんす。たつた今爰へ來かゝつた渡し守。どうしてわたしが知らうぞいなア
捕四　それぢやア濟まない。とても疑ひのかゝつた身の上なれば
捕五　覺えがなけりやア、誓言を立つて見せろ。
とり　なんとえ。
捕六　神や佛を誓ひにかけて
捕七　僞はりならぬ
捕八　誓言を見ようワ。
とり　サア、それは。
八人　どうだエ、。
とり　その誓言は。
　へ秡ひ淸め奉る、神は梵天帝釋のたね、下は四大の身上がりに、獨り寢千手の手管者、あへば丑寅虚空藏、ドッコイやらぬと攻ゆる手元、右と左へ胸盡し、死ね死なうとはまさなる事、憂いも辛いも苦界の身の、自烈たいとて喰いついて、腹を辰巳の不機嫌は、普賢菩薩も仕方なし、所をやらぬと取りつくを、大慈大日如來男、未申とはしつこい、情なし者と見て酉の日、不動さまぐし盡して、内には戌亥の劍先に、當るも愚痴な色思案、僞はりなしの神かけて、生臭はんだばさらにも、詞蓮藥に誓ひける。
捕一　間に合ひの咨誓文。
捕二　どうでも様子が
　トかゝる立廻り。
捕一　有體の、
　ト立廻り。
とり　突き鐘こそは。
　ト投げ退けると「すわくく動く」の謠になり、皆々鐘の綱に取りつきて、アリヤくく聲。トゞ、あれ見よ蛇體は顯はれたりと、大ドロくにて、釣り鐘を引き上げる。内より、野分姫の亡魂、誂らへの形にて、白綸をかつぎ、鐵杖を持つて立ち身。おとり、厨子をさしつける。
皆々　どつこい。

へ凡そ輪廻は小車の、六趣四常を出でやらず、人間不定芭蕉葉の、哀れ果敢なき身の果を、問ふ人さへも情なや、修羅の巷に迷ふらん。

トこれより地へ取り、三段返し太鼓地になり、花道にて、柱卷き、いろ／＼あつて、舞臺まで押し來りて

皆々　どつこい。

へ謹請東方青龍淸浄、謹請西方白體白龍、一大三千世界の恒沙の龍王哀愍納受、哀愍りきんのみきんなれば、何國に大蛇のあるべきぞと、祈り祈られ又立向ふその勢ひ。

トこの淨瑠璃切れに、野分姫の亡魂、花道へかゝる太鼓流しになり、向うより、北條時國、大半切れ、竹のばつてう笠、高足駄にて、葉付きの大竹を突いて出て來り、花道にて、キッと見得、これよりサラシになり、野分姫を押し戻し、舞臺にてキッと見得。

皆々　どつこい。

時國　ハテ、怪しや。いま北條五郎時國が、義基公の御迎ひ、出合ひ頭に來て見れば、天地に渦卷く黑雲雷電。心得ずとよく／＼見りやア、稀有なる女の立ち姿、例へ如何なる魑魅魍魎たりとも、この時國が降魔の利劍、速やかに立去るまいか。

野分　愚かや。共に冥途へ連れ行かん。來れ。

皆々　どつこい。

へ觀音薩埵の妙智力、怨靈忽ち遠ざかり、波間へ飛んでぞ入りにけり、彼の惡念の舊跡も、日高にあらぬ隅田川、鐘が淵とて今の世に、傳へてその名を殘しける。

ト大ドロ／＼、段切れ打ち上げる。これまでに舞臺の眞中へ釣り鐘。この上に野分姫。下に時國、上の方におとりは觀音の厨子を差上げ、キッと見得。八人、鱗の見得にて柝に並び、この模樣よろしく。

先づ今日はこれぎり

めでたく打出し

垣衣草手向發心（終り）

出村玉屋が仲の町
群れつゝ人のと
よみたるは
三國をうつす
越前屋の全盛

艷色競廓操

上中下三冊



初演の繪番附

艶色競廓操

序幕

王子海老屋の場

日暮里の場

役名――玉屋新兵衛。越前屋の三婦。同抱へ、小女郎。澤田軍兵衛　醫者、文庵。茨の藤兵衛。船頭、小勇みの定。今浮世與之助。新兵衛女房、おゑん。同弟、新七。砂利場の岩。山谷の吉。仲居おりせ。同、おつね。同、おくら。同、お八重。同、おきみ。道具屋善八。月行司、庄八。竹垣半次郎。出村新兵衛。

本舞臺、三間の間、眞中に木戸口、海老屋といふ行燈掛けあり。上手、黒板塀、下手、建仁寺垣、爰に軍兵衛、侍ひ客の拵らへ、小勇みの定、立ちかゝりそれをおりせ、おつれ仲居の形にて留めて居る。下手におくら、仲居にて、今浮世與之助を留めて居るこの見得、跳らへの流行り唄にて幕明く。

小勇　エヽ、二才め、頭巾をかぶつて來た、今の女を、爰へ出せ。濟まないぞ〳〵。

女三　マア〳〵、料簡なさんせ〳〵。

小勇　濟まない〳〵。

與之　成る程、さう云はつしやるも、尤もではござりますれど、ほんの今のは出合ひ頭、まして女の事、御料簡なされて下さりませ。

軍兵　コレ、女とさへ云へば、行き違ひに、人の足を踏んで、挨拶をせずに居ても大事ないか。

與之　イヤ、左樣ではござりませぬが、そこがお詫び。

女三　御料簡なされて遣はされませ。

軍兵　イヤ、料簡する事罷りならぬ。

小勇　海老屋へ入つた女、爰へ引摺り出して。

　ト立ちかゝるを止めて

りせ　定さん、どうしたものぢやぞいなア。軍兵衛さまがお腹をお立ち遊ばすとも、日頃心安くするこなさんなれば

くら　とも〳〵に御挨拶をして、下さんせにやならぬ所。

此方の門口で、物云ひがあつては、内の難儀。

つれ　よい加減に料簡して、この場を濟まして

三人　あげなさんせいなア。

小勇　おりせ坊におつね、おくらと打ち揃つての挨拶だが、今日は軍兵衞さまが、王子の海老屋へ行かうとの御託宣こいつは有り難いと、勇んで出かけた向うから、突きかかつたこの出入り。直ぐ素直に濟ましては、勇み仲間の凹みになるわえ。

くら　いつも〳〵、お前方の氣の强いには

三人　困るわいなア。

與之　モシ〳〵、海老屋の女中衆、折角のお世話でござりますが、主達の凹みになるといふ事なら、せう事がござりませぬ。あやまつて濟む事ならと思うて、これ程に詫び事しても、聞き入れなければ、わしも男ぢや。捨てゝ置いて下さりませ〳〵。

軍兵　イヤ、此奴、なか〳〵見かけに依らぬ膽の太い野郎だ。以後の見せしめに、締めてやれ〳〵。

小勇　これが、ほんの、盲蛇に怖ぢずといふのだ。

與之　オヽ、盲蛇に怖ぢずぢや。お先眞暗、行き當りばつたりと來て居るわい。これからは又、其方で料簡せうと云うても、此方で料簡せぬわい。

小勇　この野郎め、云はせて置きや。

ト捕へるを振り放すとて、ヒヨロ〳〵となり

與之　コレヤイ、手荒くするな。危ないぞ〳〵。すんでの事にのめる所を留まつたは、日頃習ひ込んだ兵法のお庇。なんと、心掛けの程を、とくと見たか。

軍兵　成る程、怪しからぬ事ばかり吐かすべら坊め。

小勇　うぬはマア、どこの奴だ。

與之　おれが名が聞きたくば、マア、其方の名から聞かうか。

小勇　オヽ、聞きたくば云つて聞かせう。これにお出でなさるゝは、澤田軍兵衞さまといふ、吉原での駄々羅大盡その附き馬にくツついて歩く、おらア小勇みの定さんといふ、角の八本生えた男だよ。

與之　ハテ、それは恐しい名の男な。

小勇　して、うぬが名は。

ト與之助、思ひ入れあつて

與之　エヘン〳〵、先づおれが名といつは、法性寺入道前關白太政大臣が又從弟、赤染右衞門はおれが姉樣、浮世與之助といふ色男。なんと、膽が潰れたか。

軍兵　定や、聞けば聞く程、こんなべら坊の相手になつちや居られぬ。海老屋へ行て、呑み直さう。サア、來い。

ト行かうとする。

與之　用がある、待ちやがれ〳〵。

つれ　モシ、もうようござんすわいなア。

與之　イヤ、よくない。待ちやがれ〳〵。

小勇　なんだ。おいらに用があるとは。

與之　オヽサ、人に喧嘩を仕掛けて置いて、逃げようとするは、卑怯な奴の。おれが怖いか、恐ろしいか、茲な貧乏神めが。

小勇　ナニ、貧乏神と吐かしやがつたな。うぬ、その頤をふんざばいて、

與之　ふんざばくも凄まじいわえ。

小勇　見事、おいらと楯を突くか。

與之　何が怖うて尻込みせうぞ。可愛や、わいら、コリヤ、命が惜くさつたな。

ト鉢巻をして、羽織を疊む。おりせ、預かる。小勇みの定、思ひ入れあつて

小勇　べら坊め、どういふ出入りをするのだ。

與之　エヽ、忙しない……サア、上方流で、ちよつと向うへ出てもらひませうかい。

ト前へ出てつくばふ。小勇みの定も前へ出て

小勇　サア、出たが何の用だ。

與之　ハテ、野方途もない奴等だ。マア、下に居てもらはう。

小勇　下に居たがなんだ。

ト與之助、思ひ入れあつて

與之　知れた事だ。アレ見よ、空の鹽梅、もう今に雨が降つて來る。傘はなし、下駄はなし。そこで、斯う凛々しく身拵らへして

小勇　おいらと出入りするのか。

與之　イヤ、逃げるのぢや。

ト小勇みの定を蹴飛ばし、一散に向うへ逃げて入る。皆々思ひ入れ。

軍兵　定坊、どうした〳〵。

ト定、起き上がり

小勇　角力の勝負は知らねども

軍兵　それなる木の根にけしとんだか。

小勇　ハテ、この筈ぢやアなかつたが。

軍兵　あんな野郎に出し抜かれ、捨てゝ置いちやア後日の

小勇　恥。後追ひかけて

ト花道へかゝる。誂らへの流行り唄になり、花道より若い者二人、駕籠を舁き、これに越前屋小女郎、餘所行きの形にて乘り、後より女郎屋亭主三婦、これに與之助、附き添ひ出て來り、花道にて

お前は、越前屋の小女郎さんだね。

小女　定さん、濟まぬ顏で、どこへ行かしやんす。

小勇　ちつと、あの野郎に。

ト駕籠の側を行きぬける。小女郎、小勇みの定が袖を捉へ

小女　どのやうな事か知らぬけれど、お前を連れて行かにやならぬ事があるゆゑ、わしと一緒に來て下さんせいなア。

小勇　折角、花魁の云ひなさる事だが。

小女　ハテ、よいわいなア。

小勇　それぢやア。

ト思ひ入れ。三婦、こなしあつて

三婦　定坊、捨て難い所をさらりと捨て、後へ戻つてもらはねば、あれが詞が立たぬぞや。

小勇　そんなら、どうでも。

小女　マア、ござんせいなア。

トこの人數、皆々本舞臺へ來る。

仲三　花魁、お早うござりました。

小女　また今日も來やんした。

仲三　サア／＼。

ト草履を直す。小女郎、駕籠より出る。

三婦　出村屋の新兵衞さんは、もうお出でなさつたかの。

仲三　イヤ、まだでござります。

ト小女郎、軍兵衞を見て、ツイと奥へ行かうとするを引きとめ

軍兵　コレ小女郎、何も其やうに、知らぬ顏をしてくれる事はない。今でこそ傾城、以前は同家中竹垣半左衞門の娘おゆりどの。御親父が浪人召されてから、吉原で勤め奉公さつしやると聞いたゆゑ、年來の本望遂げようと思つて、度々通へど、さしを突いて逢うてくれぬは、情ない心だぞよ。

小女　それぢやと云うて、お前に出られる義理かいなア。

與之　そんなら、小女郎どのと云ふは。

ト思ひ入れ。

三婦　コレ、おれが恥になる事ぢや。聞き流しにしてやらつしやれ。

小勇　成る程、この野郎は、すつぴこつぴと、知りもせぬ女郎衆の事にまで、口出しをしやがる。どうでも打ツちやつて置かれないわえ。

ト思ひ入れ。

小女　親方さん、挨拶して、主をお歸し申して下さんせ。

三婦　オヽ、承知ぢや〳〵……コレ定坊、小女郎もあのやうに云うての事。おれが挨拶ぢや、手にも足らぬ者を捕へて、いつまでもそんな事を云うて居ずと、料簡しやれ料簡しやれ。軍兵衛さま、なんとマア、そんなものではござりませぬか。

軍兵　おらア、もう、小女郎が顏を見ると、腹の立つ事もなんにも忘れてしまふのよ。

三婦　ソレ見やれ、軍兵衛さまは、あゝ云つてお出でなさるワ。

小勇　成る程、そんなら親方の詞に附いて、ざつと温泉場の湯に流してしまひやせう。

三婦　さうさばけてくれにや、有り難くない。

與之　これは、段々お世話さまでござりました。

三婦　なんの、その禮に及びませう。爰に長居をさつしやらずと、早くお歸りなされませ。

與之　左樣なら、重ねてお禮を申しませう。

ト流行り唄になり、おりせより羽織を受取り、思ひ入れあつて、木戸の内へ入る。

三婦　定坊、お主の喧嘩買ひにも、久しいしのだ。嗜なめ嗜なめ。

小勇　わしも後ではさう思ふが、虫の居所の悪い出合ひ頭サ。そりやさうと、小女郎さん、今日爰へ來なさつたのは、出村屋の新兵衛さんとやらのお仕舞ひかえ。

三婦　サア、この頃二三度ござつて、急に身請けの相談だやて。

仲三　花魁、おめでたうござりまする。

小女　めでたいやら、悲しいやら、解らぬわいなア。

軍兵　そりや、門跡前の眼鏡屋、玉屋の新兵衛に、情を立てゝか。

小女　玉屋の新兵衛とわえ。

軍兵　知るまいと思ふか。替玉を拵らへて引摺り出したり、揚屋町や伏見町の裏茶屋で、逢ふ事まで知れて居るワ。

小女　お前も不粋な。親方さんの前で、ナア皆さん。

女三　ほんに笑止なお方ぢやわいなア。

小勇　ほんに、それ〳〵、これから玉屋の玉といふ字も、云ひつこなしだよ。

三婦　出村屋の新兵衛どのゝござるに、もう間もあるまい。サア、小女郎、海老屋へ待ちかけやうか。

軍兵　この軍兵衛も、座敷を隔てゝ

小勇　やけ呑み、やけ騒ぎサ。

小女　そんなら皆さん。

女皆　サア、お出でなされませ。

ト流行り唄にて、三婦、小女郎を連れ、皆々奥へ入る。矢張りこの唄にて、花道より、玉屋新兵衛、やつし羽織、着流し、下駄がけにて、文を見ながら出て來る。後よりお八重附き添ひ、後より善八、羽織、町人の形にて風呂敷包みを脊負ひ、出て來り

新兵　何やら、話したい事があるゆゑ、其方の門まで來てくれと昨日から度々云うて寄越すが、小女郎は、もう其方の内へ來て居るか。

八重　今日は、出村屋の新兵衛さんのお仕舞ひで、お出でなされまするお約束なれば、もう大方。

新兵　アノ、出村屋の新兵衛。

ト思ひ入れあつて、舞臺へ來る。

善八　モシ〳〵、新兵衛さま、今日は是非、お前のお目にかゝつてと存じまして、お宿へ參りましたところ、爰へお出でなされたと聞きましたゆゑ、花見がてら、出かけて參りましたて。

新兵　そりや、印子の飡像の事か。

善八　サア、この間から、明日の明後日のと、段々延引になりますが、もうお待ち申されませぬ。今にも買ひ手が出來れば、直ぐに賣つてしまひますから、さう思つて居て下さりませ。

新兵　その金の事に付いて、ちと心當りあれば、相談がてら、マア、ちよつと海老屋へ來て下され。

善八　イエ〳〵、瀧野川の辨天まで、ちよつと行て來ねばならぬ用事もござりますれば。

新兵　そんなら、待つて居る程に、必らず戻りに寄つて下され。

善八　どうか、をかしな天氣になつて參りましたから、早う行て參りませう。

八重　お早うお歸りなされませ。

ト矢張り流行り唄にて、善八、引返して、向うへ入る。

新兵　コレ、お八重坊、小女郎が來て居るか、ちよつと見て。

　　新兵衞、こなしあつて

八重　アイ、待つてお出でなさんせや。

　　ト始終合ひ方、生け殺しにて、お八重、奥へ入る。向うより、砂利場の岩、勇みの拵らへ、血みどろになつて居る吉を肩へ引ツかけ、庄八、月行事にて附き添ひ出て來る。

砂利　玉屋の新兵衞、爰に居たな。

新兵　さう云ふは、砂利場の岩、どうしたのだ。

砂利　どうしたどころか、眼を明いて見やがれ。昨夜谷中での喧嘩、この吉が頭を、よくもむごたらしくぶち毀しやがつたな。此奴が死にや、うぬア、下手人だぞ〳〵。

新兵　すりや、昨夜の疵が、それ程であらうとは。ホイ。

　　ト思ひ入れ。

庄八　今こなたの內へ行つたところ、二三日歸らつしやらぬと云ふ事ゆゑ、方々尋ねて爰へ來ました。御檢死を願ふから、さう思つて居さつしやれ。

吉　ア、、痛い〳〵。おれが敵の新兵衞を、逃がしてくれるな〳〵。

砂利　骨はおれが拾つてやるから、迷はずと往生しろよ。

吉　ア、、痛い〳〵。

庄八　サア、代官所へ。

　　ト行かうとする。新兵衞、留めて

新兵　コレ岩、いま御檢死を願はれて、ひよつと其奴が死んだ時には、云はずと知れたおれは下手人。死ぬる命は惜しまねど、この新兵衞が身の上には、いろ〳〵かゝり合うた事もあれば、どうも今死んではならぬ體。どのやうな事してなりと、金は出さう程に、お主、呑み込んで內濟にしてはくれまいか。

砂利　さう云はつしやりや、世話にもなつたこなたの事、內濟にせまいものでもないが、此方から云ふ程、金を出さつしやるか。

新兵　して、そつちや、なんぼ程取らうと云ふのだや。

砂利　先づ、このいゝ男の面に疵が附いて、醜男になつたが一つ。體が役に立たない所で二つ。阿母を一生乾干しにする所で三つの扱ひなれば、ザッとした所が、マア五拾兩サ。

新兵　エ、。

砂利　不承知なれば、代官所だ。

　ト立ちかゝるを留めて
新兵　不承知ではなけれど、五十兩といふ大枚の金。
砂利　店の代物を、質に入れてなりとも、出さつしやい。
新兵　ハテ、十日二十日の事ならば
庄八　出來ずば、直ぐに代官所だ。
新兵　それでは、どうも。
砂利　出來るか、出來ぬか。
新兵　サア。
皆々　サア／＼／＼。
　トこなしあつて
砂利　エヽ面倒な、代官所へ。
　ト振り切つて行きにかゝる。この時、後へ世話女房の
　おゑん、弟新七、出かゝり居て、この時
ゑん　岩さんとやら、その金、わしが扱ひませう。
砂利　さう云ひなさる女中さんは。
新兵　わりや、女房のおゑん、弟の新七。
砂利　そんなら、玉屋の。
ゑん　誰れぢやあらうと、金さへ取らしやんしたら、内濟
　にならうがな。
砂利　そりや知れた事サ。

　トおゑん、財布より金を五十兩出して
ゑん　こちの人、もしかと思うて拵らへて來た金、寶は身
　の差合せとやら、遣うて下さんせ。
新兵　すりや、この五十兩を、どうして其方が
ゑん　マア、そこを濟ましてしまはしやんせ。
新兵　成る程……サア岩、望み通り五十兩の扱ひ金、よい
　やうに頼んだぞよ。
　ト金を渡す。砂利場の岩、取つて思ひ入れあつて
砂利　耳をすれずにすつぱりと五十兩。大家樣、ちよつと
　一札を。
庄八　オヽ、合點だ。
　ト腰より矢立を出し、さら／＼と一札を認め
　ソレ、一札。
　ト新兵衛、取つて
新兵　一札の事、扱ひ金五十兩受取り申し候ふ上は、吉が
　身の上、例へ命に係はり候ふとも、中分無御座候。爲後
　日、一札如斯。玉屋新兵衛どの、砂利場の岩、家主庄
　八。オヽ、これでよい／＼。
庄八　サア、そんなら行きませう。
砂利　こりやお女中さん、お庇で事が解りました。

ト流行り唄にて、三人向うへ入る。後見送り

ゑん　新兵衞どの、その一礼、大事に取つて置かしやんせえ。

新七　成る程、怪しからぬ災難もあるものぢやて。

新兵　して、わいら二人連れで、今日はどこへ行たのぢや。

ゑん　ちつと、お前に云はにやならぬ事がござんす。

ト思ひ入れ。

新七　マア、下に居さつしやれ。

ト合ひ方になり、よろしくあつて

新兵　けたゝましい。そりやなんぢや。

ゑん　なんぢやとは、この間、お屋敷の姉さんの所へ上げなさんした文。なんぼ氣に入らぬ女房ぢやと云うて、これ程までに、隔てゝ下さんすは、そりや聞えぬ。胴慾でござんすわいなア。

新七　兄貴、ちと嗜なんだがようござる。おゑんどのが涙をこぼしての恨み。聞けば聞く程、わしや氣の毒でなりませぬわいの。

新兵　屋敷の姉御へ遣つた文とは。

ゑん　まだそんな事云うて居やしやんすか。昨日、長助が、お前に頼まれて持つて行くと云うたゆゑ、さもしい事ぢやが、わたしに隱して遣りなさんす文、なんであらうと開いて見れば、五十兩の無心。側へ小女郎さへの身の上に遣はしやんす金にもせよ、姉さんの所まで云うて遣りなさんせずとも、わたしに打明けて相談して下さんしたら、仕様もやうは、なんぼもありさうな事。それを隔てゝ下さんすからは、よく／＼氣に入らぬわたし。お前の側に居れば居る程、氣の揉める種。こりやいつそ里へ戻つてしまはうと、支度したりや、新七さんの云はしやんすには、おれも、新兵衞どのに逢はにやならぬ用もあれば、一緒に行つて逢うた上と、云はしやんすに依つて、未練らしいが、今日爰へござんすと聞いて、逢ひに來ました。こちの人、わたしや、口惜しうござんすわいなア。

新兵　成る程、段々の其方の恨み。氣に入らぬと云ふではなけれど、云ふに云はれぬ譯あつて、フト小女郎に馴染み重なり、退引きならず要る金なれば、どうも其方の所へは、義理にも云うて遣り憎く、外に才覺の仕様はなし據なく姉御へ云うて遣つたのは、おれが誤まり。必らずともに腹立てずと、思ひ止つてくりやれ。

新七　云ふに云はれぬ、小女郎どのゝ身の上は、小耳に挾

んだ事もあれば、それについて金も要らうけれど、おゑんさんの所へ云うて遣り憎いと、云はしやるも尤も。おゑんさんの恨みを云ふは當り前。こりや、尤もと尤もの鉢合せしたやうな理窟。碎けて見れば水入らずの夫婦いさかひ。弟のわしが中へ入つて、貰うてしまひますから二人ともに、マア〳〵、さう思つて居さつしやりませ。

新兵　夫婦喧嘩は、犬も喰はぬと云へば、そりやマア、どうでもよけれど、合點のゆかぬは今の五十兩。ありやマア、どうした金ぢや。

ゑん　サア、姉御さんの所へ云うて遣らしやんしたとて、大枚の五十兩、急では出來まいと思うて、アノ、わたしが。

ト思ひ入れあつて

サア、その譯は、いま爰で云はいでも濟む事。なんぢやあらうと、手詰めの難儀、間に合うて嬉しいわいなア。

新兵　成る程、遣つてしまつた金の事、いま聞かずとも濟んだものぢや。それはさうと、新七が、又おれに逢ひたいと云ふは。

新七　サア、昨日、氏原勇藏さまがお出でなされまして、仰しやるには、新兵衞が古主、竹垣半左衞門が、暇の出た越度と云ふは、殿千葉どのより預かりの、魔利支天の印子の尊像紛失ゆゑ。然るところ、この度お國へ御發足につき、急に探せ出せとある仰せにて、所々へ手分けしての詮議。萬一、餘人の手より差上ぐる時は、半左衞門が悴、半次郎が歸參の妨げゆゑ、必死になつて尋ね出せと申しつけ置いたが、今に何の沙汰も致さず、明後日は殿樣お立ちなれば、是非今明日中に差上げよとの、御口上でござりました。

新兵　オヽ、その事ならば氣遣ひ致すな。最早在所も知れたれば、明日中には手に入れ、持參する程に、大儀ながら、其方、これより勇藏さまの所へ行て、その譯を申し上げてくりやれ。

新七　そんなら、在所は知れてござりますか。

新兵　もう、金渡すばかりぢや。

ゑん　そんなら新七さん、一緒に戻らうかいなア。

新七　兄貴、互ひに心がほどけたら、ちつと內へも廻らつしやりませ。

ゑん　氣恥かしい。矢ツ張り留主がよいわいなア。

新兵　ア、コレ、をかしな天氣になつて來た。傘を借りてやらうか。

新七　イエ、降りもしますまい。
　ト花道の方へ行きかけ
そんなら兄貴、機嫌よく
ふん　遊んでござんせ。
　ト唄になり、兩人、向うへ入る。新兵衛、後見送り、思ひ入れあつて
新兵　祝言をして二年越し、一つ寝もせぬ女房を、一杯くはせた五十兩、せまじき事とは思へども、これも矢ッ張り古主の爲。
　ト思ひ入れ。奥よりお八重、出て來り
八重　モシ、新兵衛さん、小女郎さんの云はしやんすには、今は、親方の三婦さんが、側に附いてござんすに依つて、後方キッと來て下さんせと、云うてくれと云はしやんしたわいなア。
新兵　そんなら、橋詰めの床へ行て、善八が事を頼んで來ようか。
八重　必らず待つてゞござんすぞえ。
　ト入る。直ぐに砂利場の岩、庄八、吉、出て來り
三人　新兵衛さん。
新兵　吉、岩。
三人　まんまと首尾よく。
　ト「コレ」と思ひ入れあつて
新兵　女房を罠にかけ、弟ぐるめ、巧く來た五十兩。
砂利　サア、受取らつしやい。
　ト新兵衛へ渡す。新兵衛、財布を受取り、紙入れより別の金を三分出して
新兵　御苦勞々々。骨折り賃は一分づゝ。月行事にも遣つて下さい。
　ト砂利場の岩、受取り
砂利　アイ、吉が手負ひの仕打ちは、きついものだね。
庄八　素人には見えますまい。
新兵　あの血は、なんでつけた。
吉　手もない。紅屋の絞り粕サ。
新兵　みんな海老屋で、一杯飲んで行かつしやい。
三人　ドレ、そんなら、御馳走になりませう。
　ト始終、流行り唄、生け殺しにて、三人、内へ入る。向うより半次郎、傘を持ち、岡持を提げて出て來り
半次　新兵衛さま、この間はお目にかゝりませぬ。
新兵　オヽ、半次郎さま。變つた形で、爰へはどうしてござりました。

半次　わしは、この海老屋へ奉公せいとて、文庵が連れて来て、二三日爰に居りますわいなア。
新兵　すりや、アノ文庵が、爰な内へ奉公せいとて。
半次　アイ、それで、いま豆腐を買ひに。
　ト俯向く。新兵衛、思ひ入れあつて
新兵　なんぼ子供ぢやと云うて、お前も竹垣半次郎といふ侍ひぢやもの。此やうな態をして、買ひ物に歩くは、恥かしうたうて何としませう。文庵も文庵ぢや。お前に奉公させます位なら、おれにも話しさうなもの。昨日逢うた時も、何とも云はなんだが、おりや、お前の奉公さつしやる事、いま初めて聞きましたわいの。
半次　サア、文庵は、いつもお前に逢うた時は、わしを可愛がるやうに云ふけれど、後では喰ひ潰ぶしぢやの、役に立たずぢやのと、むごう辛う折檻して。
　ト泣く。
新兵　すりや、アノ、お前を喰ひ潰しぢやの、役に立たずのと云うて。
半次　サア、わしや悲しうて／＼ならぬわいの。
新兵　ムウ、そんなら、おれが前では、美しう云うて居て
　ト思ひ入れあつて

例へ、以前は主でも家来でも、落目になれば、聞き悪い事も聞かねばならぬ。モシ、半次郎さま、これ御覧なされませ。
　ト今の金を財布ごと見せて
尊像を請け戻す金も、五十両出来ましたれば、御帰参なさるも、もうちつとのうちぢやと思うて、御辛抱なされて下さりませ。
　ト思ひ入れ。この時、内にて
女中　文吉はまだ帰らぬか。文吉々々。
新兵　アレ、お前を呼んでぢや。泣き顔隠して、ちやつとござりませ。
半次　アイ／＼。
　ト思ひ入れあつて
それなら、お前は、どこぞへござりますかえ。
新兵　サア、尊像の事で、髪結ひ床まで、ちよつと行て来ねばなりませぬて。
半次　だん／＼雨が強うなるさうな。この傘をそんなら、こなた。
　ト傘を渡す。
新兵　ちよつと借りませう。

半次　サア、さしてお出でなされませ。
　ト流行り唄にて、半次郎、内へ入る。雨の音。
新兵　情ない。だん／＼ぼろつきが強くなりさうな。ドレ、橋臺へ行つて來ようか。
　ト誂らへの唄になり、新兵衞、傘をさして花道へかゝり、向うより出村屋の新兵衞、半合羽、高足駄、蛇の目の傘をさし、出て來り、花道にて行き合ひ、兩人よろしくあつて、玉屋の新兵衞、ツイと向うへ入る。出村屋の新兵衞、本舞臺へ來り、後を見送つて
出村　今のが慥か玉屋の新兵衞。此方は知つても、彼方は知らぬ、それを幸ひ。
　ト思ひ入れあつて
成る程、小商人とは見えぬ人柄。ハテ、いゝ恰幅な男だ。
　ト思ひ入れ。内よりおきみ、お八重出て來り
きみ　これは／＼、出村屋の新兵衞さま、只今お出でなされましたか。
八重　最前から、お前の噂を云うて、お待ち申して居りましたわいなア。
出村　そりや誰れが。
きみ　越前屋の三婦さん、小女郎さんも來てゞござんす。

出村　そんなら、もう來て居るか。
八重　出村屋の新兵衞さん、
出村　また醉はさうと思うて。
きみ　サア、お出でなされませ。
　ト誂らへの唄にて三人、奥へ入る。道具廻る。
　本舞臺、三間の間、湯治場の座敷。中庭を見たる道具。上手、風呂場の飾りつけよろしく、爰に澤田軍兵衞、小勇みの定、おりせ、おつね、酒盛りの見得。
　道具とまる。
　ト矢張り、流行り唄にて、内より文庵、醫者の拵らへ。藤兵衞、女衒の拵らへ。兩人出て來り
藤兵　成る程、瀧野川は、よい景色な所ぢやて。
文庵　さればいの。
軍兵　これは文庵、藤兵衞、先刻から來て居たか。
小勇　ねつから知らなんだ。サア、一つ呑まつしやい。
文庵　今日は、小女郎さんの身請けの相談。二人ともに判がゝりゆゑ、最前から
藤兵　呼びつけられて來て居るのサ。
軍兵　出村と云ふは、マア、どこの者だ。

文庵　下谷三枚橋の太物屋、相應な身代だといふ噂でござる。

小勇　おらア心安いが、頼もしい人よ。二人ながら、金儲けだの。

藤兵　定公、西河岸へ附合はつせい。

小勇　そいつは有り難いな。

　ト　おりせ、おつれ、吸ひ物を出して

りせ　料理番が、あなた方へ上げてくれいと、申しましたお吸ひ物。

つれ　これで、一つお上がりなされませ。

軍兵　おれに喰せるといふ吸ひ物は、なんであらうな。

小勇　勝負。

　ト　吸ひ物椀の蓋を取る。

　さゝがし牛房に青鷺。

文藤　奇妙々々。サア、一つついでもらはう。

　ト　兩人、吸ひ物の椀の蓋を、てんでに出す。おつれ、つぐ。軍兵衞、紙入れより金を一分出して、紙に包み

軍兵　料理番に遣つてくれい。

りせ　これは有り難うござりまする。

　ト　奧へ持つて入る。奧より砂利場の岩、吉、庄八出て

三人　來り文庵さん、爰にかえ。

文庵　最前から、人には云はれず、二人の事を案じ切つて居たて。

砂利　氣遣ひさつしやるな。お前の云はしつた通り。

　ト　文庵、こなしある。兩人、頷づく。藤兵衞、思ひ入れあつて

藤兵　コレ、この三人にも、今の吸ひ物を持つて來てくりやれ。

つれ　ハイ、畏まりました。

　ト　おつれ、奧へ入る。

藤兵　サア、邪魔は拂つた。

軍兵　成る程、機轉のきいたものだ。それでなけりや、人の目は拔かれない。

文庵　首尾よく行つたら、久し振りで、顔が見たい〳〵。

砂利　ソレ、五十兩。

　ト　包み金を出す。文庵、取つて戴き

文庵　誠に、二人はおれが爲には福の神。蛭子大黒ぢや。

軍兵　文庵、そりやどうした金ぢや。

文庵　サア、あの玉屋の新兵衞や、あの軍兵衞さんも、藤

兵衛に頼んで、探してござる摩利支天の印子の尊像。五十兩の質に入つて居ると云ふ事を聞き出し、その金の才覺に、女房を手管にかけうと云ふ相談を、おれを此やうな悪師とは夢にも知らず、頼んだを幸ひ

吉　わしら三人を玉に遣つて

庄八　巻き上げさせた五十兩。

砂利　その五十兩を、銅脈と吹替へたこの仕事。

文庵　なんと、智慧もあれば、あるものではないか。

藤兵　すりや、その尊像の在所が知れたか。

軍兵　そりや、どこに〳〵。

文庵　イヤ、滅多にや云はれぬ。聞きたくば、お金〳〵。

小勇　成る程、しみしつかう、慾張つた奴だな。

文庵　でも、軍兵衛さまの方へ巻上げうと思へばこそ、新兵衛が請け戻さうと云うた五十兩を、吹替へさせましたワ。

軍兵　すりや、おれが方に金さへ出來れば。

藤兵　今でも、尊像は、此方のものであらうな。

文庵　知れし御事〳〵。

軍兵　さすれば身共は出世。

藤兵　半次郎は、上がつたり大明神。

小男　さうなる時は、新兵衛めは。

ト砂利場の岩、吉、庄八の三人

三人　云はずと知れた、てん〳〵舞ひ。

皆々　うまいぞ〳〵。

軍兵　この上に、小女郎が手に入らうものならば、いま死んでも迷ひはせぬ。

小勇　そりや、出村が身請けすれば、及ばぬ望み。それよりは

藤兵　尊像の金を拵らへる一相談。

砂利　おいらは、どこぞへつッ走らう。

吉　文庵さん、骨折り賃は、まだ濟まないぞえ。

文庵　五十兩あるからは、大船に乗つたと思つて、落ちついて居なされ。

ト砂利場の岩、吉、庄八の三人

三人　キッと預けましたよ。

ト文庵、藤兵衛、小勇みの定の三人

三人　そんなら、奥で呑み直さう。

軍兵　みんな一緒に、來い〳〵〳〵。

ト流行り唄になり、この人数皆々、奥へ入る。直ぐに花道より、玉屋の新兵衛、以前の形にて、金を提げ、

出て來り、舞臺へ來て

新兵　善八が、間違ひなく戻りに寄つてくれゝばよい。早うこの金を渡してしまひたいものぢやが。

トそこらを見て

新兵　常々小女郎が、お前より外に帶紐解いた事はないと、云つた詞に引替へて、二三度來たばかりに、出村の新兵衛身請けするとの災難の文。そんなら、今まで云うた事はみな僞はりか。併し、弟の半次郎が事まで引請けて、歸參の種の、印子の尊像の詮議を、して居る事を知りつゝ今さら心の變らう筈もなし。こりや、なんでも逢うて、とつくりと聞かねば、心が落ちつかぬ。

ト莨盆を取つて來て、莨をのみ、思案して居る。誂らへの合ひ方になり、奥より小女郎、出て來り、新兵衛を見て

小女　新兵衛さん、逢ひたかつたわいなア。

ト後から、寄りかゝる。

新兵　恟りしたワ。

ト肩にて拂ふ。小女郎、ベツタリとなつて

小女　ても、素氣ないものゝ云ひやうサ。

新兵　ちつと、思案せにやならぬ事があるサ。

小女　いつそ、請けが惡いなう。

新兵　イヤ、請けは好すぎて居るよ。三枚橋の太物屋とやらが、今日爰で、身請けの相談だげな。

小女　アイ、どうとも云ひなんし。そんな事を聞かうとて爰へは來ぬわいなア。思ひがけない身請けの相談、苦界ぢやと諦らめて居れど、しみ〴〵嫌でござんすわいなア。

新兵　また嘘を吐いてかきかけるな。お主は、大分情があると云ふ評判ぢや。

小女　情があつても、鍵が無しサ。

新兵　どうも濟まぬて。

小女　何が濟まぬぞいなア。

新兵　てまへの心意氣が。

小女　どうしたえ。

新兵　イヤ小女郎……と、サア、澤山さうに云ふものゝ、去年の十月、文庵に樣子を聞いたお前の身の上。吉原で勤めをして居さつしやるとの事。アヽ、おいとしや、古主の娘御が女郎になつてござるを、知らぬ顏はしても居られぬ、少しはお力にもならうと、客の顏して樣子を聞いても、馴染みがなければ、それとも明かさず、どうぞお身の上を聞き出したいと、つい時の張合ひで、互ひの

心も附け合ひ、身の上は解つたが、今となつては取返し
が附かず、色ぢやの文ぢやのと云うては居れど、元はお
主の姉御、竹垣半左衛門さまの御息女、半次郎さまの姉
御なれば。

小女　ア、コレ、又かいなア。わたしや、そんな事は聞か
ぬ〳〵。

　ト耳を押へ、身を反ける。新兵衛、こなしあつて

新兵　ハテ、聞きともなくとも、たつた一言。

小女　嫌でござんす。主ぢやの、家來ぢやのと、わたしや、
身請けの相談があれど、どうぞして、相談を變替へ、お
前の女房にならうと、樂しんで居るものを。

新兵　そこが浮世の義理、よしにせう。

小女　そんなら、わたしが不承して。

新兵　切れてしまはう。

小女　エ、。

新兵　いつがいつまでも、お主の娘御と、サア。

　トこなしあつて

色になつても居られまい。また、弟御の半次郎さまも、
文庵が世話になつての御艱難。それについて、先達ても
話しておいた、氏原勇藏さまのお詞。半次郎さまの歸參
の種の印子の尊像、やう〳〵在所が知れたに依つて、請
け戻さうと思うて、五十兩の才覺して、コレ、爰に持つ
て來た。

　ト財布を見せる。

小女　すりや、五十兩のその金を、アノ、お前が。

新兵　サア、尊像さへ差上げれば、昔に歸る竹垣のお家。
御苦勞の助かる時節到來。その半次郎さまの姉御を、ど
うして女房に持つて居られやう。出村が身請けの相談こ
そ、願うてもない幸ひなれば、おれが事は思ひ切り、身を
片付けるが上分別。ナ、申し、ゆりさま……イヤ、小女
郎、さうではないか。

小女　エ、馬鹿らしい。嫌ぢやわいなア。

新兵　ヤ。

小女　さう云はしやんすは、主從の事ではあるまい。おゑ
んさんと、仲よう添ふ心でござんすかえ。

新兵　久しいものサ。

小女　イエ〳〵、さうであらうがな。

新兵　ハテ、この間の文の返事に、云うてやつた通りぢや
わいの。

小女　サア、お前の文には、嫌ぢやの、女夫にならぬと、

書いて寄越さしやんしても、お前の側に附いては居まいし、可愛がらしやんすが、どうしてそれが知れうぞいなア。わたしも以前の身の上で、斯うした譯になつたなら、そりや濟むまいけれど、勤めをして居て逢うたお前、起證まで取交した二人が仲。思ふ男に添ひ遂げるが、徒らでも、悪性でもござんせぬ。ほんに四角な玉子より、女郎の誠と人さんに、譽められこそすれ、それにマア胴慾な、逢ふ度毎に、切れるの退くのと愛想づかし。一旦斯うと思ひ詰めた上からは、死んでも離れやせぬ程に、新兵衛さん、必らず見捨てゝ下さんすないなア。

新兵　さう云はれては、この新兵衛も

小女　そんなら、主從の事は取措いて

新兵　馴染みの女郎。

小女　いつまでも、變つて下さんすなえ。

新兵　アヽ、悪縁契り深しぢやなア。

ト奥にて

軍兵　うしやアがれ〳〵。

ト軍兵衛、半次郎を引立て、おりせ、おつれ、文庵、附いて來る。

りつ　モシ〳〵、軍兵衛さま、何か存じませぬが、御料簡なされませ〳〵。

軍兵　イヤ〳〵、存分にせにやならぬ。留めるな〳〵。

小女　モシイナア、この子がどうしたのぢやえ。

軍兵　どうと云つたら、この丁稚は、爰の内の奉公人ぢやないか。

りせ　ハイ、左樣でござりまする。

軍兵　その又、奉公人が、客の云ひつける事を、なんで否だと吐かしやがつた。

新兵　モシ、軍兵衛さま、そんなら、これが、あなたのお詞を。

軍兵　オヽサ、足を撫れと云や、知らぬ顔をして居る。下駄を直せと云や、否だと吐かして、揚句の果には、目に角を立つて、人の面を睨みやがる。爰の内ぢや、客に無禮をしろと云ひ付けて置くのか。

つれ　ほんに、そりや不調法な事を致しました。

りせ　サア、御免遊ばしませと、あやまらしやんせ〳〵。

半次　否ぢや〳〵。

軍兵　アレ、あんな事を吐かしやがる。

ト立ちかゝるを、文庵、留めて

文庵　何もかも、樣子は聞いて來た。おれが内から寄越し

たる奉公人ぢやに依つて、マア、この文庵に任せて置かつしやれ。

ト半次郎を引据ゑ

なぜ、わりやア、あのお侍ひ樣を睨んで置いて、あやまる事は否ぢやと吐かす。おれが來るからは、甘口な事を云はせては置かぬ。サア、爰へ來て、段々只今のは、私しの不調法でござりますと、あやまれあやまれ。

半次　イヤ〳〵、どのやうに云うても、おりやあやまる事は、否ぢや〳〵。

文庵　そりや又、なぜ〳〵。

ト半次郎をこづき廻す。

半次　コレ、文庵さま、ではない、文內。父樣の御浪人なされたは、あの軍兵衞ゆゑではないか。すりや、この身に取つては仇ある侍ひ。その軍兵衞が足を採んだり、履物を直す事は、おりや否ぢや〳〵。否ぢやわいやい。

小女　オヽ、道理ぢや、そりや尤もぢやわいの。

軍兵　ハヽア、それで譯が判つた。その詞について面を見れば、竹垣半左衞門が悴、アノ、小女郎が弟の半次郎だな。親半左衞門の浪人したを、某が業ぢやと吐かしたからは、猶以て捨てゝ置かれぬ。文庵、われが判をしたと云ふからは、其方が子も同然なれば、おれが貰うて存分にせにやならぬ。

文庵　如何にも。お望みなら、上げませう。御存分になされませ。

トそこへ突き出すゆゑ、直ぐに半次郎を取つて引き廻す。新兵衞、留めて

新兵　イヤ、文庵、さうはならぬ。

文庵　ならぬとは。

新兵　ハテ、なんぼ今落ちぶれて、お主が判で、此やうな奉公してござればとて、元は御主人の半次郎さま。お主は、若黨の安達文內。その主人を、我が子かなんぞのやうに、御存分になされませと、突き出す事があるものか。今までお主を、そんな者とは思はなんだ。罰當りめが。

文庵　ナニ、罰當りだ。

新兵　罰當りも罰當り。竹鋸がものはあるわえ。

文庵　コレ新兵衞。

ト胸倉を取つて

人が心ようして居れば、云ひたいがいな事吐かすな。おれが竹鋸なら、わりや、逆磔刑だ。

新兵　ヤ。

文庵　この文庵には、罰が當つて、新兵衛、われには罰は當らぬか。
新兵　ナ、、なんと云ふ。
文庵　イヤサ、主の娘の腹の上へ乘つても、われには罰は當らぬか。玆な盗人めが。
　ト新兵衛をくらはせる。
小女　コレ、文庵どの、大勢の人さんもござんす中で、そりや又、あんまり。
文庵　あんまりとは、何があんまり。
小女　今のやうな悪雜言。エ、、こなさんは。
　ト藤兵衛、出かゝり居て、この時
藤兵　コレ花魁、こなさんの身分には、この藤兵衛も判がかり。ウロ／＼とうろたへて、賣り物に疵が付いちや、後の難儀。ヂッとして居さつしやい。
　ト留める。
軍兵　この軍兵衛を、下直にした罰が當つて、あの態わえ。ハ、、、、。
文庵　コレ小女郎、われが爲にも親判を据ゑたれば、この文庵は、お父さんだよ。
小新　エ、。
　ト小女郎、新兵衛、顔見合せ、思ひ入れ。
文庵　新兵衛、印形の抜けぬうちは、二人ともに親ぢやぞよ。
小女　その親と云ふ事を、聞く程口惜しいわしが身の上。父さんの御艱難ゆゑ、この身を沈めたは覺悟なれど、わしが身の代の百五十兩も、聞けば其方が中取りをしやつたげな。それを聞いて、わしや、腹が立つて／＼ならぬわいやい。
文庵　例へ腹が立たうが、脊が立たうが、印形の抜けぬうちは、手段はならぬ。親ぢやぞよ／＼。
新兵　その親と云ふ字も、印形さへ抜けたら。
文庵　赤の他人。
新兵　オ、、その印形は、おれが抜く。この新兵衛が抜いて見せう。
文庵　そりや、どうして。
新兵　藤兵衛、小女郎を越前屋へ遣つたのは、お主の手だと聞くからは、大儀ながら、おれが頼みだ。すつぱりと文庵が手を切つてもらひたい。
藤兵　そりや、隨分心安い事でごんすが、手切れ金の要るのは合點かえ。

新兵　そりや、云はずと合點サ。
藤兵　そんなら、金を。
新兵　オヽ、その金は。
　ト財布より出さうとするを、小女郎、留めて
小女　新兵衛さん、待たしやんせ。その金は今聞いた、無ければならぬ手詰めの五十兩なれば。
　ト簪を抜き
藤兵衛どの、これをよいやうにして、手を切つてもらひませう。
　ト藤兵衛へ渡す。藤兵衛、取つて
藤兵　前簪が六本、三兩づゝとしたところが、三六の十八兩。
文庵　ざつと積つたところが、二人の割、十五兩づゝにして見ても三十兩の所へ、たつた十八兩で手は切られぬ。切れねばいつまでも、親ぢやぞや〳〵。
新兵　藤兵衛、そこが日頃の馴染みだけ、この新兵衛が頼み。足りない所は、後でどうともする程に、この場の顔を立てゝくりやれ。
藤兵　成る程、小女郎さん、こなさんなり、それ程に云はつしやる事なれば、この俠の藤兵衛が呑み込んで

文庵　この文庵が親判は
藤兵　すつぱりと拔いてしまふワ。
小女　すりや、これからは赤の他人。
新兵　キツと詞を番うたぞ。
文庵　他人になつても十八兩、轉んでも只は起きぬて。
新兵　その起きぬ所を、カウ〳〵。
　ト杯臺でぶちのめす。
文庵　コリヤ、新兵衛、何をする。
新兵　半次郎さまをぶちのめした意趣返し。
文庵　そりや又、あんまり御きんとうな。
軍兵　親判の出入りは附いても、この軍兵衛へ無禮をした譯が付かねば、この丁稚めは。
　ト半次郎にかゝるを、藤兵衛、圍つて
藤兵　イヤ、いま改めて二人に頼まれ、鍵に入つたからはこの子は、おれが内へ預かり。
小女　それでは、折角
藤兵　ハテ、氣遣ひさつしやりますな。魚の飯で養ひます。
軍兵　この軍兵衛は、これより直ぐに、屋敷へ歸り、直ぐさま金の才覺して、印子の尊像、取戻して
新兵　軍兵衛どのが尊像を。

文庵 そんなら、この文庵も御一緒に。
りつ ドレ、橋までお送り申しませう。
軍兵 新兵衛、待つて居ろよ。
ト清掻になり、この人數皆々、向うへ入る。小女郎、新兵衛殘り、思ひ入れある。奥バタ〳〵にて、出村屋新兵衛、三婦が胸倉を取り、出て來て
出村 こなさんも、吉原では人の知つた三婦どん、よくこの出村新兵衛を、なんで騙したのだ。
三婦 どうして、私しが僞はりを申しませうぞ。
小女 出村さん、お前、親方さんを捉へて、そりやマア、なんでござんすぞいなア。
出村 オヽ、云ひ分がある。三度目から身請けの相談、短い年季を幸ひに、三百兩との應對で、今日迄で、手付けを渡さうと思つて、コレ見ろ、半金百五十兩、耳を揃へて持つて來たぞよ。
ト百五十兩の金を出して見せる。
小女 そんなら、どうでもわたしが身請けを。
新兵 三百兩とは、モシ三婦さん、それでは、お前。
三婦 ハテ、親方の心次第。望み手があれば、いくらでも心任せ。

出村 その大枚の三百兩、出さうと云ふこの新兵衛を、親方までぐるになつて、虫の附いた女を、かぶせうとは、オヽ、恐ろしや〳〵。
三婦 成る程、さう云はれて見れば、お前の仰しやるのが、隨分御尤もでござりまする。
出村 一旦の約束、譯さへ立てば、今でも渡す手附け金。サア、この出村が立つやうに、片を附けてもらはう。
三婦 サア、片を附けてお目にかけませう。コレ小女郎、あの新兵衛どのと、さつぱりと切れてしまへ。退いたと云ふ事を、お目にかけにや、こちらの新兵衛さまの方へ、其方を遣られぬて。
小女 否でござんす。アイ、否ぢやわいなア。出村さんは、やう〳〵この間からの客人。疾から云ひ交した可愛い男、末は女房と思うて居れば、なんぼ親方さんの高下でも、滅多に切れてよいものかいなア。
三婦 イヤ、此奴が〳〵、親方のおれに口を明かせぬな。
出村 コレ、三婦どん、小女郎は、いよ〳〵おれに身請けさすのか、どうぢや。
三婦 ハテ、ようござります。お前のお顔は立てまする。
出村 そんな事ぢやア立たぬぞよ。すべて女郎は金づく。

この出村より好い客があつて、三百兩が五百兩で身請け
せうと云やア、一文でも高い方へ遣る心であらうが。

三婦　左樣でござりまする。

出村　イヤ、さうは云はさぬ。動きの取れぬは、この證文。

ト出して

一つ、私し抱への奉公人小女郎儀、貴殿へ相對の上、金三百兩御渡し下され候はゞ、早速小女郎を遣はし申すべき旨、御請合ひ申すところ實正なり。

小女　エヽ、アノ、證文は。

出村　相談にかゝる後で、いしぶし云はせぬやうに、念の爲取つて置いたこの證文。この出村新兵衞は、金で相談する。オヽ、小判で氣に入つた女郎を買ふ。それになんだ。金も無い態をして、隱れ忍んで盜み喰ひ。親方が金を出した代物を、只せしめうとは、アタ野太い生掏摸め。盜人め。巾着切り同然なれば、ぶちのめさうが、叩き殺さうが、云ひ分はあるまいな。親方、出村の新兵衞は、金で小女郎を女房にするぞ。

ト此うち新兵衞、さまざま思ひ入れあつて

新兵　小女郎、最前も云うた通り、思ひ切つてたも。

小女　エヽ、又かいなア。

新兵　どうあつても、この新兵衞は、退いたぞや。

小女　なんと云はしやんす。

新兵　サア、門跡前で眼鏡屋位の小商人、どうして立派な客の眞似がなるものか。三百兩と云ふ身請けの金、それに張合うて、物も云ひたい男の顏も立てたいが、この身に替へて尋ね出さねばならぬ一品。尤も云ひ交した義理は濟まねど、勤めの習ひ。例へ去年で明く年を、二年三年とさへ思うて居れば、請け出されても心は濟みさうなものぢやぞや……腑甲斐ない男の口から、斯うした事を云ふ胸の内は、マア、どのやうあらうぞ。日頃の氣質、おれが心を推察して、さつぱりと退いてくれ。

小女　フウ、そんなら、お前を切れて、出村さんの方へ行けかえ。

出村　金と云ふ色男にや、例へ業平でも叶ふまい。

新兵　ぢやに依つて、小女郎。

ト思ひ入れ。

小女　成る程、尤もでござんす。得心しました。云ひ憎い事を、よう云うて下さんした。頼もしい志し、ふッつりと思ひ切りました……申し親方さん、新兵衞さんと切れて、出村さんの方へ行かうわいなア。

三婦　イヤ、その手は喰はぬ。おれでさへ合點がいてあるもの、出村さまは通り者。今その三百兩といふ金が無いに依つて、去年の年を二年三年ぢやと思うて、退いてくれ……アイ、合點でござんすなどとは、太い事を。二人が馴れ合うて、この場を濟まし、後での思案と、云はいでも知れた仕組み、コリヤ、大勢女郎を遣ふ越前屋の三婦ぢや。そんな甘い狂言は取措け／＼。出村さまの面晴れに、誠新兵衛を退くか、退かぬか、親方の強意見は、この莨盆。

ト莨盆を振り上げる。出村屋新兵衛、これをしつかり留め

出村　コリヤ、待て。

三婦　イヤ、彼奴を。

出村　ハテ、疵が付けば、矢ツ張りこなたの損ぢやが。

三婦　それでもお前。

出村　大事ない、出村が心はコレ。

ト合ひ方になり、傘と下駄を取つて來て

この傘と下駄ぢや。

三婦　エ。

ト出村屋新兵衛、傘をひろげ

出村　ハテ、どのやうな大雨でも、この傘をさせば、一滴も身にはかゝらず、小女郎と云ふ大車軸が、身に降りかかつても、この傘で防ぐ。又、斯うすぼめると、その雨が下へ落ちて。泥と馴れ合ふ。その泥めが、身にかゝつて、よごさう／＼と刎ね上げても、そこでこの下駄ぢや これを穿けば、泥を凌ぎ、傘をさせば、身にかゝる雨を防ぐ。なんと、よくしたものか。又、あの泥めが、どうこね返しても、この下駄で踏みにじるワ。あの泥めを。

ト新兵衛、こなしあつて

新兵　いま初めて逢つた出村新兵衛とやら。お主が下駄で踏みにじる泥とは、誰れが事だ。

出村　オヽ、玉屋新兵衛、われが事だ。

ト新兵衛、下駄を持つて飛びかゝり、出村新兵衛が額をぶちこはす。皆々留める。立廻り、奥より小勇みの定、おきみ、お重、出て來り

三人　こりやア、何事だ／＼。

小勇　ヤ、出村さんの眉間が割れた、コリヤ旦那、ひよんな事を。

ト皆々うろ／＼立ち騒ぐ。

出村　コリヤ、騒ぐな／＼。新兵衛、おれが頭を割つたぞ

よ。

新兵　泥に譬へられた上は、下駄のはねが上がると思へ。

三婦　とんだ事を仕出した。玉屋新兵衛、濟まぬぞ〳〵。

出村　ハテ、やかましい。そこにおれが莨入れがあらう。

小勇　オヽ、さうだ〳〵。マア、莨でもつけて、虫を留めたがいゝ。大方、これであらう。

ト莨入れを探してやる。出村、莨をつけ、鉢卷をする向うバタ〳〵にて、新七、走り出て

新七　兄貴、そこに居さつしやつたか。最前こなさんに頼まれ、勇藏さまの所へ行て、印子の尊像、明日中に差上げませうと云うたら、オヽ、好い所へ來た、殿樣の明後日の御發足が、お國よりの御飛脚が來て、急に明日になつたゆゑ、尊像の在所知れたとあるからは、今晩中に差上げいと、キツと云へとのお使ひに來ましたわいの。

新兵　委細畏まりました。今宵五ツまでには、右の尊像、差上げませうと、御返事申し上げてくりやれ。

新七　すりや、相違ござらぬな。大切な事なれば、必らずともに。

新兵　如才はないて。

新七　そんなら、わしは。

新兵　また御返事を。

新七　よいやまかせとな。

ト尻引ツからげ、引返して、新七、向うへ入る。

小女　そんなら、いよ〳〵最前の。

新兵　サア、こちらの手詰め。それゆゑ、この場の達入れは。

ト思ひ入れ。バタ〳〵にて向うより半次郎、走り出て來り

小次　申し〳〵新兵衛さん、最前茨の藤兵衛が所へ連れられて行たら

新兵　無理非道でも云うたのか。

半女　早う云や〳〵。

半次　サア、軍兵衛も文庵も、一緒に落合うて、この手紙を持つて行けとて、寄越しましたわいなア。

ト手紙を出す。

新兵　ドレ。

ト取つて開き

ナニ〳〵、「最前お斷わり申し置き候ふ印子の尊像の儀、二百兩の賣り口出來仕り候ふ間、其方へ遣はし申し候ふ、併し御契約の儀に御座候ふ間、二百兩さへ五ツ時ま

でに御持參下され候はゞ、お渡し申すべく候ふ、玉屋新兵衞さま、伊勢屋善八」……ヤア〳〵。すりや印子の尊像を受取るには、二百兩の金を持つて行かねば。

小女　思ひがけない大枚な事。

小勇　藪から棒に云つて來たは、寢耳に泥龜。

りせ　大枚な二百兩、新兵衞さん、小女郎さん。

小女　サア、その金がなければ、尊像は取返されず

新兵　勇藏さまへ請け合ひし

半次　この半次郎が歸參も叶はず

小女　新兵衞さん。

新兵　小女郎。

半次　お二人さん。

小女　こりやマア、どうぞ仕樣が

新兵　エヽ、コレ、何を云うても今と云うて今の事、何としたものであらうな。

ト當惑のこなし。小女郎、思ひ入れあつて

小女　親方さん、わたしを鞍替へさせて下さんせ。

三婦　アノ、年の短いお主を。

小女　サア、それぢやに依つて、年一杯にこの身を賣つて金の才覺。

三婦　云やる所は聞えたが、その相談も今宵の間には

出村　イヤ、その相談はおれがせう。

小女　エヽ。

出村　ソレ、百五十兩。

ト金を拋り出す。

皆々　ヤヽ、この金は。

出村　小女郎は、おれが抱へる。

小女　アイ、御深切は嬉しいけれど、お前の方へ行ては、義理が濟まぬ。ぢやに依つて、否でござんす。矢ツ張り辛い浮河竹、一生女郎で朽ち果てるわたしが心。それゆゑどうぞ親方さん。

出村　イヤ、おれも女房にやせぬ。矢ツ張り三婦が內に置く。

小女　エ。

出村　小女郎、お主が體は抱へぬ。心を抱へた。二年でも三年でも、そりや、其方の勝手次第。身の代の百五十兩

三婦　イヤ、その金は、身請けの手付け。

出村　みす〳〵虫のある事を知りつゝ、身請けする馬鹿があるものか。三婦、お主から取つた證文も、カウ〳〵カウ。

ト ずた／＼に引裂き

破つてしまへば、約束變替へ、常の習ひぢや。

小女　出村さん、嬉しうござんす。

ト 今の金を取上げ、最前の五十兩と一つにして

新兵衞さん、丁度都合した二百兩。

ト 新兵衞、思ひ入れあつて

新兵　最前の惡口は、こりや、コレ、小女郎を身請けする、戀の意趣と思ひの外、いま又、この新兵衞が

出村　難儀を見兼ねて、小女郎を抱へてやる。

新兵　アの、現在の。

出村　おれが面へ疵をつけた、玉屋新兵衞なれど、この場の手詰め。お主が難儀をするを見て、喜ぶやうな根性の小さい、出村ぢやないぞ。

新兵　ヤ。

出村　情は情

新兵　出入りは出入り。

出村　氣兼ねをせずと、マア、その金を遣やいな。

新兵　ムウ、忝ない。

ト こなしあつて、懐へ金を入れる。雨車になり、出村屋新兵衞、思ひ入れあつて

出村　身請けの相談やめる日には、爰にべん／＼居るでもない。大降りのせぬうち、ドレ、歸らうワ。

ト 立ち上がり、身繕ろひする。小女郎、こなしあつて

小女　出村さん、今のお前のお志し、お禮は追つて。

出村　抱へた奉公人に、禮を請ける事はない。隨分大事に勤めてもらはう。

ト 云ひ／＼、そこらを見て

おれが下駄や傘。

小女　ドレ、わたしが見ませう。

出村　イヤ／＼、それは。

小女　ハテ、わたしは奉公人、お前は旦那さん。

ト 下駄や傘を尋ね

爰にたんとござんすが、お前のは、どれぢやいな。

出村　下駄の歯に、血の付いてあるのぢやて。

小女　そんなら、これが。

ト 下駄の歯を見て

出村　コレサ。ちやつと爰へ。

小女　アイ。

ト 下駄を直す。新兵衞、思ひ入れあつて、その下駄を取上げ、我が手に額へ疵を附ける。

ヤア、新兵衛さん、それは。
小勇　我が手に、頭を割ると云ふは。
新兵　ハテ
ト出村が側へ寄りて
出村新兵衛、小女郎が身の代の百五十兩は、この玉屋新兵衛が、額の疵の癒らぬうちに。
ト下駄を直す。出村、思ひ入れあつて
出村　ハテ……慮外でごんす。
ト合ひ方になり、下駄を穿き、傘を持つて門口へ出かける。
小女　申し出村さん、お前の所は、いよ〳〵下谷三枚橋でござんすな。
新兵　それ〳〵、金の調うた時には。
出村　イヤ、御持參には及ばぬ。
小新　それでも。
出村　ハテ、野暮らしい。茶屋での事は内へは沙汰なし、しつかりと、所を云はぬも客の癖。
小女　ほんに頼もしいは
新兵　意趣のあるこの新兵衛に
出村　出村は男、……其うち逢ひませう。

ト唄になる。出村屋新兵衛、傘をさし、向うへ入る。皆々こなしあつて
三婦　譯は知らぬが、手詰めの一品、二百兩の金の揃ふ上は、新兵衛どのは。
新兵　成る程、さうぢや。
ト金を取上げる。
三婦　向うへ、行てから、間違ひがあつては濟まぬ。改めて行かつしやれ。
新兵　成る程、踏み出すからは、男には、八人の敵の譬へ。
ト金を改める。ギヨツとする。
ヤ、、、、この金は。
小女　新兵衛さん。その金が
皆々　どう致しましたえ。
新兵　いま出村から、受取つた百五十兩は、正眞の物なれど、おれが持つて居た五十兩は、皆銅脈。
三婦　ナニ、銅脈ぢや。
小女　そりやマア、どこから出た金でござんす。
新兵　女房のおゑんが手から元は出た金。ようも亭主を。
ト立ちかゝらうとする。小女郎、留めて
小女　待たしやんせ。なんぼうでも、おゑんさんが、お前に、

そんな似せ金を渡しなさんせう筈はない。こりや、どこぞで、摺替へられた覺えはござんせぬか。
三婦　氣を沈めて、よう考へて見さつしやれ。
ト新兵衛、思ひ入れあつて
新兵　成る程、さう云はれて見れば、人手へ渡した覺えがある。
小女　そりや誰れにえ。
新兵　その入り譯は長い事。これも矢ッ張り文庵めが仕業であらう。
小勇　ナニ、文庵が仕業とは、
新兵　尋ね逢うて、金の詮議。
皆々　早うござんせ。
ト新兵衛、花道へかゝる。
小勇　うぬをやつちやア。
ト新兵衛へかゝるを、取つて投げる。起き上がる所を三婦、取つて押へ。
三婦　爰構はずと
小女　新兵衛さん。
新兵　合點だ。
ト新兵衛、尻をからげ、舞臺、この見得よろしく、新兵衛、一散に向うへ驅けて入る。時の鐘、送りにて幕。直ぐにこの幕、引返す。

本舞臺、三間の間、日暮里の道具。爰に、新兵衛、文庵、善八を引ッ提へ、後に深田軍兵衛、藤兵衛、砂利場の岩、吉、立ちかゝつたる見得、ゴン／＼にて幕明く。
新兵　文庵、善八、よい所で出ッ會せた、もう、逃げるとて逃がしはせぬぞ。
文庵　一文でも借りのないおのれ。
善八　何が恐ろしくつて、逃げるものか。
ト振りほどく。新兵衛、思ひ入れありて
新兵　文庵、今日お主と相談して、岩や吉を玉に使つた仕事。悪事を働らくも人による。その時の五十兩、出してくりやれ。
文庵　今日おれと相談して
砂利　岩や吉を玉に使つた
吉　仕事とは。
新兵　とぼけた顔をせずと、その金を爰へ出せ。
善八　コレ新兵衛、最前、手紙で云つてやつた印子の餘像

買ひ手が出來て、二百兩と値がなつたが、わりやアその金を持つてうせたか。

新兵　オヽ、持つて來たが、五十兩と云つた尊像、一時經つか經たぬうち、二百兩に値がなつたとは、して、その買ひ手は、どこの奴だ。

軍兵　その尊像は、この軍兵衛か買ひ取つて、御所持なされてお出でなさるワ。

ト尊像を出して見せる。

新兵　ヤヽヽ、勇藏さまに詞を番つて、今宵中に差上げねばならぬ尊像。最早軍兵衛の手に入つたか。

ト藤兵衛、こなしあつて

藤兵　おれもわれとは馴染みだけ、難儀の樣子見ても居られぬゆゑ、仲に入つて尊像を取戻してやらうが、小女郎と切れて、軍兵衛さまの方へ遣つてくれまいか。

新兵　そりや、モウ、尊像さへ寄越してくれるなら、どうなりとも。

文庵　そんなら、小女郎を切れたといふ證據、われが持つて居る起證を、軍兵衛さまに上げてしまへ。

新兵　すりや、この起證を。

ト思ひ入れ。

軍藤　尊像は要らぬか。

ト出して見せる。

新兵　サア。

トこなし。

文庵　マア、その起證を。

ト引ツたくる。

新兵　イヤ、尊像と引替へなら。

ト取りに來る所をくらはす。

こりや、男の生面を。

文庵　ぶつたがどうした。

軍藤　この尊像は要らぬか。

ト突きのめす。

新兵　サア。

ト思ひ入れ。

軍藤　尊像を遣らうか。

ト蹴のめす。新兵衛、思ひ入れ。

皆々　サア／＼／＼。

ト皆々寄つて踏みのめす。新兵衛、キツとなる。

文藤　わりや、尊像は要らぬか。

新兵　例へ踏まれうが、ぶたれうが、いとひはせぬ。起證

を渡した上からは、サア、約束の通り尊像を。

軍兵　イヤ、遣る事はならぬ。

新兵　ナ、なんと。

文庵　戀の意趣ある新兵衛はじめ、小女郎兄弟、みじめを見せろと

皆々　軍兵衛さまのお頼みだ。

新兵　すりや、尊像を巻き上げたも、銅脈と摺替へたも。

軍兵　みんな此方の

皆々　云ひ合せだ。

ト新兵衛、思ひ入れあつて

新兵　さう聞くからは、新兵衛が絶體絶命。勇藏さまに番つた詞も反古になり、踏んだり蹴たりした上で、尊像を渡さぬからは、人に知られた玉屋の新兵衛。もう、料簡がならぬわえ。

ト脇差を拔いて、側に居る文庵、藤兵衛を一刀づゝ切る。これより禪のツトメになる。よろしくあつて、誂らへの鳴り物になり、先に善八、かゝる。よろしくタテあつて、切り倒す。それより砂利場の岩、吉、かゝる。よろしくあつて、兩人を切り倒す。これより藤兵衛、かゝる。よろしくありて一太刀切られ、へたるゆゑ、文庵、入れ代り、タテあつて、文庵を一太刀切る。文庵へたるゆゑ、新兵衛、眞ッ二つと振り上げるを、軍兵衛、觀念と切つてかゝる。この時、文庵、軍兵衛が落す尊像を拾つて逃げ支度する。藤兵衛も、そこに落ちてある金財布を拾つて思ひ入れ。此うち、新兵衛は、軍兵衛を切り倒す。この時、向うより出村屋新兵衛、以前の形にて、傘をさし、小提灯を灯し、出て來る。文庵、藤兵衛、ウロ〳〵花道にかゝる。文庵は、首尾よく花道へ行く。藤兵衛はうろたへて、出村に突き當り、財布を落したまゝ逃げて入る。出村、この財布を拾ひ、袂へ入れ、揚臺へ來る。新兵衛、軍兵衛へ止めを刺す。出村、提灯を差出す。これを新兵衛、切つて落す。出村新兵衛、傘をすぼめる。新兵衛、脇差を構へる。兩人、この途端よろしく、

拍子　幕

二幕目

門跡前眼鏡屋の場

役名――玉屋新兵衛。同女房、おゑん。同姉、幾

野。同弟、新七。醫者、安達文庵。茨の藤兵衞。中居手代、太四郎。同荷擔ぎ、喜介。越前屋小女郎。佐原多仲。出村新兵衞。

本舞臺、三間の間、正面、二重舞臺。上の方、二枚障子、その次に押入れ、戸棚、眞中に暖簾口。下の方、店戸棚の模様にて、遠眼鏡、磁石、その外いろいろの眼鏡、細工、大分に飾りつけ、よき所に門口すべて淺草門跡前、玉屋のかゝりよろしく、幕の内より舞臺先、上の方に、新兵衞姉幾野、屋敷女中、宿下がりの形にて、鏡臺に向ひ、おゑん、世話女房の形にて、風呂敷を前垂れにして、襷を掛け、幾野が髪を撫でつけて居る。新七、木綿やつし、股引、襷がけにて、二重舞臺、下の方に砥盥をかけ、眼鏡を磨いて居る。テンツヽにて幕明く。

ゑん 姉さん、いつそ結ひ直さうわいなア。

幾野 イエ〳〵、つい寺詣りして戻るばかり。どうで明後日は、上げらにやならず、明日結ひ直してもらふ髪、御慮外ながら、ちよつと撫でつけりやよいわいな。

ゑん そんなら待ちなさんせや。油もありと。お前、結ひ直した方がよからうになア。

幾野 イヤモウ、一年に一度とは云ひながら、宿下がりの度、お前の世話。見なさんせ、マア、男兄弟といふものは、姉が戻つて居るとも思はず、あの新兵衞の夜泊り日泊り。新七と云へば、世間見ずで、人に物云ふ事も出來ぬ代り、商賣はよう精出すなア。

ゑん アイ、モウ、あの子が居なさんせにや、内はほんの居喰ひ同然。商ひ事は新七さんで、どうやら斯うやら暮らしては居れど、仰しやる通り、一年に一度の姉さんの宿下がりさへ知らず。ほんにまだ、芝居さへお目にかけぬもの。堺町がよいげな。お出でなさんせえ。

幾野 さうぢや。歌右衞門が下つたげなの。

ゑん それに又、東藏に三十郎、どれも評判がよいわいなア。

新七 ハツクシヨ。

トくしやみして

なんぢや。耳から鼻へこそばゆいと思うたら、大きな百足めが入つて、イヤア、なんでも足の多いと云ふ知らせ。兄貴も今日は、戻るわいの。

ゑん それが定なら、どうぞマア、晝寐になと、戻つて下

さんすりやよいに。

ト佇立つて居る。幾野、氣の毒なる思ひ入れ。テンツツになり、花道より、中屋の手代、太四郎、木綿やつしの羽織にて、喜介、荷背負ひにて、風呂敷包みの荷を背負ひ、出て來て

喜介　もう二三間だ。門跡前の玉屋をしまつて、それから吉原ぢやア、暮れやせうぜ。

太四　それでも、かた〴〵今日の約束。玉屋のは、宿下がりの土產もの。遲くば預けて去なうわいの。

喜介　さうでもするがいゝ。越前屋の誂らへも、急なものでござりやすぞえ。

太四　えらせゝげの急ぎもの。田町の松見屋といふお針の內へ出せばよいげな。

喜介　そいつは、知れゝばよいがなア。

ト兩人、門口へ來て

太四　ハイ、中屋でござりまする。御注文を持つて參じました。

ト內へ入る。

新七　オイ〳〵。

ト下へ下り

エ、これは、悪い時分に髮にかゝつて居る。受取つて置きませうか。

幾野　サア、今しまふわいの。そこへ、どれなりと見て置かんせ。

新七　おやと云うて、わしにはどれが好いやら悪いやら、地金からして知れもせぬもの。

太四　そんなら、置いて參りませうか。

ト云ひ〳〵、荷を下ろし、反物いろ〳〵出す。喜介、煙草のんで居る。おゑん、髮をしまひ、手を拭きながら

ゑん　ドレ〳〵、八丈と、縞縮緬。お次は油でも大事ないなア。

幾野　何なとそこへ取交ぜて、預かつて置いて下さんせ。

ト合せ鏡、見て居る。

ゑん　オヽ、どれも好い縞ぢや。

ト新七、取つて見せる。

油手ぢやに依つて

ト摺り寄つて、あれこれ見るうち、紫に菊蝶と祇園守の縫ひ紋出る。おゑん、これを見て

オヽ、こりや派手な。なんぢやいなア。

太四　ヘイ、こりや、吉原のさる花魁のでござりまする。

ゑん　さうであらう。男向きもあり、揃ひぢやの。

太四　左樣でござりまする。どうでも派手なお客と見えて……ぢやが、今時はちと野暮ぢやな。

喜介　さうさねえ。マア、丁度芝居でする、心中事に着さうな衣裳。これもあんまり、有りあまつての派手でもあるまい。心持ちの悪い代物サ。

太四　なんぢや知らぬが、えらい急ぎだ、今朝云うて來ると直ぐに、縫はせるでござりまする。

ト此うち、おゑん、幾野、濟まぬこなし。新七も思ひ入れあつて

新七　イヤ、モウ、吉原も櫻時分ぢやに依つて、さま〴〵な派手があらうかい。

ゑん　ほんに忘れて居た。中屋さん、こりや、此方の新兵衞さんが、云うて遣らしやんしたぢやあらうがの。

太四　イエ〳〵、こりや、なんでも田町の、アレ、なんとやらいふお針衆。

ゑん　オヽ、それも此方に覺えがある。見やしやんせ、こりや、此方の定紋ぢやぞえ。

太四　ほんに、祇園守は、內方の御紋でござりまするなア。

ゑん　ぢやに依つて、置いて行きなさんせ。こりや、此方から屆けさゝうわいの。

太四　それは、丁度幸ひでござりました。そんなら喜介、田町へは行かいでもよいワ。

喜介　ハイ、左樣なら、內方の御注文、八丈が二反、縞ちりと紬が五反もござりまする。

ト荷拵らへして、脊負ひ上げる。

太四　そんなら、今日は先づ、玉屋さまで去ぬるぢや。

ト帳を附け、懷へ入れて

ハイ、左樣なら、お賴み申しまする。

ゑん　店のへも、よう云うて下さんせや。

太四　ハイ〳〵、畏まりました。サアごんせ。天王橋で一服のんで行かう。

喜介　エヽ、お前もあだじけない。鰌汁へでも寄ればいゝに。

ト合ひ方になり、太四郎、喜介、荷を背負うて、向うへ入る。此うち、三人思ひ入れあつて、顏見合せ

新七　モシ、おゑんさん、お前、その田町のお針とやらの所、知つてござりまするかえ。

ゑん　エヽ、どうしてマア、わたしがなんの知らうぞいな。

新七　それに又、その代物、預かつて置くお前の心。

トおゑん、傍向いて物云はずに泣く。幾野、鏡臺を片付け、こちらへ來て

幾野　ほんに、呆れて物も云はれぬ新兵衛が身持ち。これ程まであらうとは、わしも今まで思はなんだ。如何に父さん母さんが居てゞないとて、今ではマア、お前といふ温和しい女房持ちながら、あんまりの事で、最前からわしや、よう挨拶もならぬわいの。コレ、新七も附いて居ながら、なんで、時折り意見も云はぬ。

新七　サア、そりや如才はなけれどもナ、お前の常々仰しやるにな、また過ぎ行かれた親仁様の、くれ〴〵との御遺言。生さぬ仲の兒には、猶義理が深い、この跡式は、新兵衛が物、おれが名前を讓るからは、われが爲には親ぢや程に、大切にせいとのお詞。ぢやと云うて、惡い身持ちの、腰押しはしませぬが。

ゑん　アイ、そりや、わたしが皆證據。たま〳〵事の宿下がりに、こんな事まで聞かせます、わたしが身にもなつて下さんせ。女房の機嫌の取りやうが惡さにと、サア、思うては下さんすまい。けれど、新七さんやわたしが意見が、屆くやうな事ぢやござんせぬわいなア。

幾野　そりやモウ、如才のない事を、わたしぢやとて、知るまいかいな。何のと云ふもお前に氣の毒。姉甲斐に意見もようせずかと、思ひなさんせうが、知らなんだ。折節の狀文、無心の事も云うて寄越さいではなけれど、商賣の取引に要る事とばかり思ひ違へて、これまでは、甘やかした姉が皆な油斷。此やうなマア、派手な模樣。これ見よがしでもあるまいが、廻り〳〵て妾の内へ見せに來たのも天命。よい〳〵、こりや、わしが預かつて、どうで戻る新兵衛ぢやもの、その分では置かぬ。こりやわたしに預けなさんせや。

ト今の反物を取つて押入れへ入れ

オ、埒もない事で、遲うなつた。わしや、兩親の墓詣り、ついこの形で行て來うか。

新七　さうなされ、ぢやが、お前一人。わたしも一緒に參りましよ。

幾野　コレ。

トおゑんへこなしあつて

大事ないわいの。ツイ向うぢやもの。本堂樣へもお禮がてら。花屋は門にあり。おゑんさん、わたしや、ちよつと行て來ようなア。

ゑん　でも、もし、ちよつとわたしなりと。

幾野　何をマア、ツイ、爰から見える向うぢやもの。
新七　そんなら、早う暮れぬうちに。
幾野　ドレ、ちやつと行て來ませう。
　ト唄になり、幾野、後に心を殘し、袖頭巾を持ち、向うへ入る。新七、おゑん、殘つて
ゑん　エヽ、折の悪い。姉御さんの、案じなさんせにやよいが。
新七　イヤ、姉貴よりおゑんさん、こりや、只事とは思はれぬ。昨日からまだ戻らぬ兄貴。また金づくで、もしやひよつと、不料簡な事はあるまいかいな。
ゑん　そりやモウ、わたしも心ならぬ。昨日も昨日で、渡した金、疵養生の詫ひ代ぢやとやら云ふ、手荒い主の生れ性。男の立たぬ附合ひのと、嘘八百の間には又、小女郎どのへの義理張りが、どのやうな事になるまいものでもなし。
新七　わしや、一走り、廓まで、ドレ、樣子見に行きませう。
　ト門口を出る。向うバタ〳〵にて、新兵衛、序幕の形、頬かむり、尻からげして、走り出て來て、新七に行き當り

新兵　新七、わりや、日の暮れるに、どこへ行く。
新七　こなさんの迎ひに。
新兵　又おゑんが癪發して、どぶさり居つたのぢやな。
ゑん　モシイナア、門中ぢやにやかましう云はずと、内へ入りなさんせいなア。
新兵　オヽ、入る。おれが内ぢやもの、入らいでぢや。
　ト内へ入り
なんぢや。商人の店に、鏡臺飾り立つて、アタ見つともない。
　ト小言云ひながら座る。
ゑん　サア、ありや、幾野さんが宿下がりに見えてな。
新兵　なんぢや、姉貴の宿下がりぢや。ムウ。
　トこなしあつて
さうして、どこへ行かれた。
新七　アイ、たつた今、御堂樣へ、兩親の寺詣りがてら。
新兵　なんでわいら、附いてうせぬ。
ゑん　サイナア。新七さんが、附いて行かうと云うてゞあつたを、お前は留守なり、大事ないとて。
新兵　ソレ、さう云ふ、わいら心なしぢや。姉貴は、屋敷の御奉公人、わいらとは違ふ。なぜ獨り歩かせまするぞ

い。總體おのれら、この間四五日、おれが内に居ぬとて味な面ひろいで、よう戻つたとも吐かさぬな。
ゑん　こりやをかしいわいな　めん／＼が勝手に腹立てゝ、まだ何云ばうにも挨穗のない、門口から沸えて居なさんすがな。
新兵　沸えいぢや。一體、わいらの仕向きが惡い。
ゑん　何がいなア。
新兵　なんで、廓三界、新七を迎ひに寄越すのぢや。
ゑん　サア、それも廓にぢややら、どこにぢややら、わたしや知らぬが、新七さんが。
新兵　吐かすない。よう知るまい。昨日も昨日で、王子まで跡追うてうせて、その後へ姉貴の見えた事なら、定めて馳走もようせやしまい。大事の姉貴ぢや。けん／＼吐かして、おれへの當り、告げ口ひろいだであらうな。
新七　コレ兄貴、なんぼお前の女房ぢやと云うて、可哀さうに、おゑんさんが、いつこなさんの事を惡う云はれた事があるぞいの。
新兵　また最𡋽口吐かすがな。なんぢや知らぬが、おりや嫌ぢや。男の機嫌取る術知らぬに依つて、おれが腹立てりや、めそ／＼と、花屋の千代見みたやうな面しくさる。

煩らや、藥服めと吐かす。吉原から戻つて假寐すりや、晝まで起す氣は付かず、湯から戻りや、飯食へと吐かす。金が要りや、先へ工面して、まんざらおれに恥をかゝさず、その癖、悋氣するでもなし。
新七　コレ／＼、兄貴、それがどこに、おゑんさんの惡い事がある。
新兵　サア、惡いに依つて去るのぢや。
ゑん　エヽ、あじやらにも、なんぢやいなア。
新兵　あじやらぢやない。暇やる。去り狀持つて、出てうしやがれ。
　ト掛け硯、引寄せる
ゑん　エヽ、そりやお前、ほんまにかいなア。
新七　兄貴、氣は狂やさつしやれぬか。
新兵　なんの狂はう。默つて居い。
　トさら／＼と書く。時の鐘になり、花道より出村新兵衞、着付け羽織、頭巾にて出て來る。
ゑん　新兵衞さん、わしや否ぢやぞえ。なんぼ去り狀書きなさんしても、わたしや、去られやせぬ。爰の内は出て行かぬわいな。
新七　さうぢや。めん／＼の勝手に腹立てゝ、科もない女

房、退き去りして、世間がそれで濟むかいの。

新兵　濟まうと濟むまいと、おれが女房、新七、これ持つて、本郷まで送つて行け。

新七　イヤ、そりやようせぬ。

新兵　ようせぬものか。キリ〳〵うせう。

トおゑんをむごく引立て、門口を明ける。この時、出村新兵衞、本舞臺へ來て

出村　オヽ、爰ぢや〳〵。玉屋の新兵衞どの、お宿にござりますか。

ト頭巾を取つて、内へ入る。

新七　ヤア、お前は昨日。

ト新兵衞も、出村を見て

新兵　ほんに出村どの。すりや、昨日の金を。

出村　ア、コレ〳〵新兵衞どの、こなさんの顏の疵は、まだ癒りはしますまいが。

新兵　ムウ、それに又。

出村　イヤ、外にちよつと用があつて、わざ〳〵尋ねて來ました。

ゑん　モシ、ありや、三枚橋のわたしが兄さんでござんすわいな。

新兵　ヤア。

ト惘り思ひ入れあつて

そんなら、おゑんが

新七　實の兄御は。

新兵　知らぬ事とて、昨日の首尾。

出村　コレ、それに互ひに、

新兵　ハテナア。

トちつとこなし。

出村　妹、して、此お方が、弟御の新七どのぢやな。

新七　成る程、おゑんさんの親御は、本郷で山田さまといふお醫者。そんならお前も

出村　山田が悴なれども、三枚橋へ養子に參つたゆゑ、妹にも申しつけて、これまで隱して居りましたは、嫁の親里に、一家の多いは、却つて御面倒と存じまして、前の親御新兵衞さま、御存生のうちも、わざと御遠慮申しました。ぢやが新兵衞どの、今日は、ちと密々に、お話し申したい事があつて

新兵　ムウ、成る程、出村新兵衞どのを、おゑんが兄御と初めて聞いて、思ひ當る御深切。その男氣を見て、この新兵衞も、ちと、折入つて。

出村　サア、それも密かに。
新兵　爰は端近。何事も奥で
新七　おゑんさま、マア、お連れなされ。
ゑん　そんなら、兄さん。
新七　コレ、今の様子、わたしが聞いて居ります程に、なんにも仰しやりますなえ。
ゑん　そりや合點ぢや。何はなくとも、初めての兄さん、酒一つ。
出村　お取込みの様子、氣の毒ながら。
新兵　なんの御遠慮。マア、奥へ。
出村　左樣なら、ドレ、許さつしやりませ。
ト唄になり、出村新兵衞、今の去り狀を、見えぬやうにソツと拾ひ、おゑんを連れ、奥へ入る。
新七　コレ兄貴、昨日氏原勇藏さまへ。
新兵　コリヤ、やかましう云ふな。奥へ行け。
新七　でも、どうやら氣にかゝる事ばかり。
ト合ひ方にて、新兵衞に心を殘し、新七、奥へ入る。新兵衞、莨盆引寄せ、思案する。この合ひ方のうち、向うより藤兵衞、文庵、序幕の形にて出て來て
藤兵　文庵、よもや昨夜の體裁、新兵衞は、内に居やせまい。
文庵　イヤ〳〵、なんのそんなものぢやない。餘ツぽど膽の据つた新兵衞。おりや、この印子の贋像を囮にして、彼奴が所の居候ふ、匿まはれる顏で、ジッと張り番して居る程に、わりや、見屆けたら、訴人せい。
藤兵　そりや合點ぢや。なんでも褒美は山割りぢやぞ。
文庵　知れた事云はずと、マア、來い〳〵。
ト門口へ來て、内の樣子を見て、互ひに囁き合ひ、藤兵衞、直ぐに引返して花道へ入る。文庵、のさ〳〵足にて門口を明け
新兵　新兵衞、わりや、ようどつこへも逃げられぬな。
新兵　誰れぢや。何奴だ。人の内へ案内なしに、なんの用だ。
文庵　イヤ、誰れでもない。おれぢや。
ト内へ入る。新兵衞、悕り、思ひ入れあつて
新兵　安達文庵。われにも用があつたに、ようせたな。
文庵　イヤ、其方より、此方へ大分用といふは、外でもない。おりや、匿まうてもらひに來た。
新兵　何吐かす。わいらがやうなイケ畜生に、用はない。
文庵　なけりやよい。おりや又、これから人殺しの訴人。

新兵　なんと。
文庵　日暮里で、ばつさり軍兵衛さまを。
新兵　いけ口叩くと、行きかけの駄賃。
文庵　さうぢやあらうと思ふから、おりや、相談に來たのぢやが、なんと、匿まうてくれぬか。
新兵　して、匿まうたら、どうする。
文庵　コレ、この尊像、貴様、入用にあらうが。
ト懐中より出して
イヤサ、竹垣半次郎が身の上に、なくて叶はぬ印子の尊像。
ト見せる。新兵衛、思案の思ひ入れ。この時、障子よりおゑん、暖簾口より新七、見て居る。
新兵　成る程、その尊像ゆゑ、さま〴〵の艱難。イケ畜生と云ふが無理か。わりや、半次郎さま兄弟を、命にかけても世に出さにやならぬ身分で、その尊像の邪魔ひろぐ軍兵衛が肩、なんで持つた。
文庵　その軍兵衛が寂滅されて、行き端がなさの居候ふ。どうだ、匿まうてくれる氣か。
新兵　如何にも。匿まふからは、その尊像。
ト手をかける。文庵、突き退ける。立廻りに、新兵衛思はずおゑんと顔見合す。おゑん、障子をピツシヤリさす。新七もこなしあつて入る。
文庵　なんぢや。錢なしの癖に、この代物をどうするのぢや。
新兵　匿まふ代りに、おれが預かる。
文庵　へヽ、取上げてしまうたら、サア、よい去ねでは、おれも嫌ぢや。
新兵　すりや、尊像の代物渡したなら。
文庵　相談しまいものでもない。それまでどこぞ、邪魔にならぬ所へ、匿まうて下んせ。頼みました。
新兵　頼みとあれば、おれも男。シタが、邪魔にならぬ所と云へば、マア、差當つて縁の下。
文庵　ヤ。
新兵　蜘蛛の巣だらけぢやが、大事ないか。
文庵　そりや、ちと稀有な。鼬と相棲み。よいワ、酒さへ折節呑ませるなら。
新兵　どうでも、この家に居たいぢやで。
文庵　サア、値が出来たら、家移りせう。
新兵　ドレ、家主へ引合さうか。
ト合ひ方になり、新兵衛、二重舞臺の疊を上げ、文庵

文庵　縁の下へ入り

新兵　親方、酒呑まさぬと、あたけるぞや。居候ふの癖に。火の用心、ようしやなれ。

ト莨盆を入れ、疊を元のやうに直し、ホッとこなし、唄になり、新兵衞、思案しながら、奥へ入る。あと合ひ方にて、暖簾口より新七、緞子の油單かけたる挾み箱を抱へ、障子の内より、おゑん大風呂敷に、着替へ大分包みたるを抱へ出て來て、互ひに行き當り

新七　おゑんさん。

ゑん　新七さん、お前、どこへ行くのぢや。

新七　お前、どこへ行かんす。

ゑん　サア、わしや、ちつと急に、才覺せにやならぬ金があつて、

新七　サア、わしも、ちつと急に金が欲しいに依つて。

ゑん　それでもマア、そりや幾野さんの

新七　大事ごんせぬ。なんの、他人の物ぢやなし。

ゑん　でも、姉さんの宿下がり、持つてお出でた挾み箱。大それたマア。

新七　コレ。

ト囁く。

ゑん　そんなら、それをお前も聞いて。

新七　こなさんも、大方その心當て。着類きそげを風呂敷一杯。コレ、七つ屋でごんせうがな。

ゑん　それ知られたら、お前と一緒に、

新七　ちつと嫌らしいが、伊勢太まで。

ゑん　アイ、道行をせうわいな。

新七　そんならいつそ、日の暮れ紛れ。

ゑん　ちつとも早う、サア、ござんせ。

ト門口へ行く。この時、暖簾口より、出村新兵衞、出て

出村　いたづら女郎、不義者まて。

新ゑ　エヽ。

ト愕り思ひ入れ。出村新兵衞、ツカ〳〵と寄つて、兩人を引据ゑ、血相變へて

出村　ヤイ、妹め、てつきりおれが、斯ういふ事であらうと胸算用の桁違はず、人もあらうに新兵衞の弟新七どの、こりやどこへござる。

新七　サア、その先は、

出村　云はれまい。日暮れ紛れに妹と二人、囁き合うてコリヤおゑんめ、不義して居ると云うてしまへ。

ゑん　エヽ、滅相な。どうしてマア。

出村　吐かすなえ。こりや、なんぢや。

　ト合ひ方、最前の去り狀を出して

門跡前の玉屋新兵衛、男氣な者ぢやとは、おれも常々聞いて居る。それに、この頃越前屋の小女郎に、深う馴染んだ思案の外、ア、、妹が爲にようない事ぢやと思ふから、先へ廻つて、小女郎が樣子、この間二三度出會うた上、昨日王子の海老屋での達引。小女郎もおれが立て金して、半金の手附け渡して置くも、妹の顏を立てたいばかり。それになんぢや。おのりや、現在男の弟、この新七と怪しい譯があればこそ、最前おれが爰へ來て拾うて置いたこの去り狀。コリヤ。新兵衛も男氣で、われにも疵を附けぬ積り。おのれにも譯を云やせぬぞよ。新七どの、ソレ、こなさん、今の樣子をおれに云ふなとおゑんめに合圖さつしやらうがな。

新七　ハイ、成る程、そりや最前の時、兄貴があんまり譯もないに腹立てゝ、暇をやるの、去り狀のと、お前に聞かせますが氣の毒さに。

出村　サア、譯もないに、新兵衛が何の腹立て、暇の狀。

ゑん　イエ〳〵、そりやモウ、わたしに限り。

出村　まだ爭ふか。うぢ〳〵云や、うぬ、斯うしても云はせうぞよ。

　ト棕櫚箒取つて、おゑんを打ち据ゑる。新七、寄るを突き退けて、これをもしたゝか打ち据ゑる。この時、幾野戻りかけ、門口を明け

幾野　おゑんさん、いま戻りました。

　ト何氣なく内へ入る。おゑん、新七、これを見て

ゑん　ヤア、姉さん。

新七　面目ない〳〵。

　ト兩人、差俯向く。出村新兵衛、思ひ入れあつて

出村　こりや、御近所の、どなた樣かは存じませぬが、ちつと妹めに、內證で折檻いたさにやならぬ譯、不作法ながら、暫らく遠慮さつしやれて下さりませ。

幾野　イヤ、他人でもござりませぬ。新兵衛が爲にも、この新七が爲にも、姉幾野と申して、さるお屋敷に御奉公。宿下がり致して昨日から、爰に逗留いたしまする。あなた樣は又。

出村　出村屋の新兵衛と申して、おゑんが爲に肉身の兄。樣子ござつて、今までは御不沙汰いたしましたれども、新兵衛どのゝ姉御とあれば、猶更濟まぬこの場の體裁。

コリヤ、二人ともに、姉御に逢うて、面目ない〳〵と云ふ程なら、もう詮議にも及ばぬ。不義の妹。
幾野　イヤ、おゑんどのに不義はない。
出村　でも、暮れ紛れに囁き合ひ、着替への包みも持ち出して、二人一緒の駈落ちとは、黒い眼で見て置いた。
ゑん　申し、情ない兄さん、ようマア、物も聞きもせいで。
新七　それ〳〵、わしが姉貴を見て、面目ないと云うたまで。
出村　符牒の合うた不義徒ら。駈落ちでなうて、どこへ行く。
ゑ新　サア、それはな。
出村　なんで新兵衛が去り状出した。
ゑ新　サア、それはな。
出村　サア。
三人　サア〳〵〳〵。
出村　しやつとでも、物吐かして見い。
　トまた立ちかゝるを、幾野、よろしく留めて
幾野　マア、待ちなさんせ。コレ、現在、新兵衛が姉のわたしが證據。去り状〳〵と云はしやんすからは、新兵衛も、こりや、戻つて居やるのであらう。出村さんの面晴れ。なぜ、男らしく爰へ出て、二人が云ひ譯してやらぬぞ。
　トきつと云ふ。暖簾口より新兵衛、ツカ〳〵と出て
新兵　姉者人、なんでごんす。彼奴等に云ひ譯〳〵と、何云ひ譯をするのぢや。
幾野　わが身の身持ち放埒から、女房が辛苦、弟が氣重ね。いま新七がわしを見て、面目ないと云うたのは。
新七　有やうは、お前の挾み箱、質種にちよつと借りました。
幾野　おゑんさんの、そちらの風呂敷包みは。
ゑん　アイ、こりや、わたしが着類着そげ。もう隠されぬ。有やうは、質に置くのでござんすわいな。
新兵　さうした太い土根性な女房や弟が、身の云ひ譯、なんでわしがするもので。
幾野　なんでとは、おのれ、これを見おれ。
　ト合ひ方になり、幾野、二重舞臺の押入れより、以前の反物を取つて來て
祇園守に菊蝶の、この二つ紋。こりや、なんぢや。
新兵　エ。
　ト恟り、思ひ入れあつて

思ひがけない、この曠れ着……サア。
ト幾野、直ぐにこの反物にて、新兵衛を打ち据ゑ
幾野　曠れ着とはなんぢや。どこに曠れ着。金に詰まつて死恥を曝させまいと、新七や、あのおゑんどのゝ幾世の苦勞。わしが物まで盗み出し、金拵らへる、日暮れ紛れ。質屋へとは云はれず、出村さんに見咎められた二人が難儀。これ程心を盡す女房、可哀さうに去り狀、なぜ出した。
新兵　サア、それは。
幾野　それはでは、コレ、出村さんの疑ひ、まだ晴れぬぞよ。サア、去り狀くれる科があるか。
新兵　フム。
ト思ひ入れあつて
さうぢや。
ト脇差に手をかけ、死なうとする。新七、おゑん、あわてゝ留め
ゑん　コレ、その悲しさを見まい爲。
新七　兄者人、コレ、情ない。なぜ打明けて、最前の。
ゑん　金の入譯。印子の像。
新兵　そんなら、それを

ゑん　聞いて二人が俄かの思案。
新七　金さへあらば、こなさんの男も立たう。
ゑん　悋氣もせまい、小女郎どのゝ身請けもしなさんせいなア。
ト取りすがる。新兵衛、ヂツと差俯向いて、思ひ入れ。此うち、出村新兵衛、莨をのんで居て
出村　妹が去り狀、買ひませう。
新兵　なんと。
出村　身請けの後金、これでたんぞく。
ト序幕に拾うた財布のまゝ、投げ出す。
新兵　ヤ、こりや昨夜。
出村　金で買はれぬ命の寶。
ゑふ　それで足られば、わたしが衣類。
新七　盗んだ姉御の挾み箱。
幾野　なんの惜しまう。この場の納まり。
ト去り狀を引裂き
心解けたら、義理ある女房。
新兵　とは云へ、どうも。
出村　ハテ、氣が濟まずば、奥で酒。
幾野　酒は憂ひの玉箒。

出村　玉屋出村が額の瘢も
新七　こりや、丁度よい仲直り
幾野　サア、マア、奥へ
ゑん　ござんせいなア。
ト唄になり、出村新兵衞先に、新兵衞、おゑん、幾野これに附き、新七、財布を持ち、奥へ入る。あと合ひ方、暮れ六ツの鐘になり、花道より藤兵衞、以前のまま、頬冠りして出て來て
藤兵　文庵めは、首尾よく居候ふの食に附いたかしらぬ。なんにかけても抜け目のない彼奴と、これまで組んだ仕事。どうやら斯うやら物にし居る。玉屋の內の寂滅爲樂。金に恨みは數々だなア。
ト本舞臺へ來て
なんぢや。この薄暗いに、まだ灯もともさず、こりや、新兵衞めは、もう逃げつて、跡の空家ぢやないかしらぬ
ト門口を明けて內へ入り、以前の挾み箱に爪づいて轉け
オ、イタヽヽヽ、こりや何ぢや。とんだ所に挾み箱。ムウ、こりや、人殺しの新兵衞が、夜抜けする氣で、持ち出したのぢやな。時に、文庵めは、どこに居るか。大きな聲で呼ばれもせず。
トあたりをウロ／＼見廻す。緣の下にて、文庵、手を叩く。藤兵衞、恟りして
ヤ、宵働らきのお客ぢやないか。今のは慥か緣の下、變つた所に、なんであらう。
ト聞き耳立てる。
文庵　酒はどうぢや。約束ぢやが、酒呑まさぬと暴れるぞよ。
藤兵　おりや、約束した覺えはないが、アヽ、喰ひ醉うて寐立ちぢやな。
文庵　イヤ、まだ呑まぬ。
藤兵　でも、面妖な。さう云ふ聲はどこからぢや。
文庵　ハテ、爰からぢや。
藤兵　爰からとは。
文庵　緣の下ぢや。
ト前の蹴込みより這うて出る。文庵が顏、一面に蜘蛛の巢にて、眼ばかり光る拵らへ。藤兵衞、これを見て、
ギヨツとして
藤兵　エヽ、御免なさい／＼。宵からお前が巢を張つてござるとは知らず、聲山立てたは素人の私し。モウ／＼、

何にも邪魔をする事ぢやござりませぬ。
文庵　なんぢや、わりや素人ぢや。
藤兵　左樣でござります。
　トふる／＼慄ふ。文庵、思ひ入れあつて
文庵　臆病な奴ぢや。コリヤ・文庵ぢや、氣遣ひすな。
藤兵　どこに文庵。そのキヨロ／＼したお目玉樣。
　ト文庵、心付いて
文庵　エヽ、蜘蛛の巣が顏一面。道理で鼻が風引いたやうにあつた。
　ト額を拭ふ。藤兵衛、こなしあつて
藤兵　オヽ、文庵ぢや。おれは又、惡う心得て、膽玉が潰れまいものか。窄覗きの客人ぢやと思うて、邪魔したら、てつきり怪我の元。おれも、さま／゛＼惡道はすれど、玄人はどうやら氣味が惡い。
文庵　ハテ、うろたへた。そんな事で出世は出來ぬ。馬鹿な事を。
藤兵　でも、コレ、爰に引きちらけた雜物と見えて挾み箱。
文庵　こりや、一廉ぢや。ほんに、これも手まへて行けばまんざら酒の足しにはならう。
藤兵　ても慾張つた。こりや、疾におれが、物した代物ぢや。
文庵　ハテ、何事も山割りと、あれ程合點して居ながら、われが物はおれが物、おれが物はおれが物ぢや。マア、蓋取つて代物見い。
藤兵　ほんにさうぢや。
　ト挾み箱の油單を取る。この時、奧より新七、行燈を提げ出て來て、これを見て居て
新七　イケ盜人めら、何ひろぐ。
　ト棕櫚箒を取つて、後より擲る。文庵、藤兵衛、立廻りあつて
文庵　ヤア、わりや新七。
新七　文庵、藤兵衛、こりや、うぬら、味に商賣替へしたな。
文庵　見附けられたら、ソリヤ藤兵衛、おりや、この印子が大切ぢや。
　ト門口へ逃げる。新七、引ツ捕へて突き廻し
新七　イヤ、大切は其方より、此方に望みのその尊像。
文庵　ハテ、しやら臭い事まき出したな。
新七　命が惜しくば置いて行け。
藤兵　ナニ、熊谷の土手ぢやなし。

文庵　疊んでしまへ。
藤兵　合點だ。
ト　これより誂らへの合ひ方にて、三人の立廻りよろしく、新七、文庵が懐の尊像を引き出し、三人、これを奪ひ合ひになり、トゞ、文庵、尊像を引ツたくつて、花道へ逃げて入る。新七、それをトかゝるを、藤兵衞、引き留める。新七、これを見事に當て
新七　大切の尊像。文庵待て。
ト　身拵らへして、一散に花道へ追うて入る。藤兵衞、這々起き上がつて
藤兵　あの文庵の慾張りめ。これからおれは、新兵衞めが様子。斯うしては居られぬ。オヽ、さうだ。
ト　奥へ行かうとする。
出村　妹々、ちよつと逢ひたい。早うおぢや〱。
ト　この聲にて藤兵衞、思ひ入れあつて、あたりを見廻し、以前の文庵が出たる縁の下へ這うて入る。あと、合ひ方になり、奥より、出村新兵衞、おゐん、出て來て
ゐん　アイ〱、兄さん、わたしや、よう得心して居りまする。

出村　さうぢや〱。今も奥で云ふ通り、わが身の心たつた一つで、あの新兵衞が男も立ち、波風なく納まるおれが思案。最前渡したる五十兩の金は、印子の尊像、請け戻さねばならず、小女郎が身請けの後金の代り、勤めさすではない、暫しの間、廓へ其方が行てくれさへすれば其うちにはおれが金拵らへて、譯立てをするまでの人質。
ゐん　サア、そりやよう心得て居るけれどな。
出村　コレ、現在夫の新兵衞が、云ひ交して居る小女郎が代りと思へば、成る程腹が立たう。ぢやが、新兵衞と小女郎が仲、色戀ばかりでない、義理づく。竹垣半次郎といふ弟に、印子の尊像、取戻して、歸參させてくれと頼まれては、おれでも引かれぬ男づく。
ゐん　アイ、勤めさへせぬ事ならば、小女郎どのゝ代りに。
出村　そりや、この兄が胸にある。得心したら、これから直ぐに。
ゐん　エヽ、もうそんなら行くのかいなア。
出村　ハテ、隙入れて、あの屋敷の姉御に心遣ひさせるも氣の毒。
ゐん　ほんにさうぢやな。何をするのも男の爲。
出村　オヽ、よう得心した。おれが妹。廓ぢやと云うて、

まんざら麁末にもしやせぬわい。
ゑん　そんなら兄さん、わたしや、ちよつと髪撫でつけて
出村　ア、コレ、そんな見得はいらぬ。賣り物ぢやなし、ついその形で、早う立ちや。
ゑん　でも、ちよつと着る物一つ着替へてな。
出村　これはしたり、隙のいる程寸善尺魔。
ゑん　それでも、わたしや、新兵衞どのに。
出村　コレ。
　ト無理に表へ突き出し
明かして云うては、物がない。
ゑん　ぢやと云うて、別れにちよつと。
出村　ハテ、夜が更けるわいやい。
　ト唄になり、出村新兵衞、無理におゑんを引立て、花道へツイと入る。あと合ひ方にて、新兵衞、障子の内より出て
新兵　なんにも知らずに、出村どのゝ深切。可哀さうに、科もない女房、去り狀まで渡して愛想づかし。そでない事に腹立てゝ、むごう辛う云うたのは、末で歎きをかけまい爲、人を殺した新兵衞が、この世に居るも今宵ばかり。年月御恩の姉者人、免さつしやれて下さりませ。
　ト獨吟めりやすになり
〽花は散りても根に歸る、返らぬ嘆きかけ硯、筆が仲人に逢ひ初めて、まゐらせ候のくり言を、幾度思ひ返す書。
　トこの文句のうち、新兵衞、行燈を寄せ、掛け硯を取つて來て、書置にかゝり、よろしくあつて
心に思ふ百分の一、廻らぬ筆の後先を、よう汲み分けて姉者人、新七を大事に賴みまする。新兵衞と書く我が名さへ、これが限りであつたなア。
　トほろりと思ひ入れあつて、書置を卷き返して、封じる。
〽どんな浮世に守りの神も、あるかなきかの夢うつつ、夢より脆き花の夜嵐。
　トこのめりやすのうち、花道より佐原多仲、羽織、袴、大小の形、覆面頭巾にて出て、めりやすの切れに、門口へ來て
多仲　玉屋新兵衞、宿に居るか。
　トこの聲に、新兵衞、恟りして、書置を隱し
新兵　新兵衞、留守でございます。どれからお出でなされました。

多仲　さう云ふは、矢張り在宿
ト門口を明け、ツカ〳〵と寄つて
人殺しの科人、腕廻せ。
ト新兵衛へかゝる。立廻り。幾野、奥よりツカ〳〵と
出て、新兵衛を留め
幾野　新兵衛待て。あなたもお待ち下さりませ。なんで玉屋の新兵衛が、どうして人を殺しました。
多仲　夜前、日暮の里にて、澤田軍兵衛といふ侍ひ、遊所の遺恨に打ち果され、相手は玉屋新兵衛との訴へ。
幾野　して、あなた樣は。
多仲　名乘らば猶更、繩掛けにや叶はぬ。拙者は佐原多仲でござる。
ト頭巾を取る。幾野、新兵衛へこなしあつて
新兵　ヤヽ、幼少にて別れたる
幾野　そんなら、あなたが、
多仲　新兵衛が爲には實の兄。先達て彼れめは、御所望あつてこの家へ養子。その後不通は致せども、參らにやならぬ今日の仕儀。御不承ながら新兵衛めを、拙者方へ、戻して下されい。
幾野　ハイ、そりや、御不足もござりまして、不緣は申す

事ならば、親の代りにこの姉が、お戻し申すまいものでもござりませぬが、仰山な、マア、人殺しのなんのと、多仲さま、見す〳〵繩かけ、お引きなさる事を、ようお渡しは申しませぬ。
多仲　左樣存じて忍びの步行。拙者への義理立てめされて玉屋の家名斷絶いたすが合點か。
幾野　こりや、あなたのお詞でもござりませぬ。僅か五間の角屋敷、おこがましうはござりますが、親の讓りの跡式、新兵衛が貰ひ受けました上は、例へ斷絶いたしませうが、今更此方の名前ではないと、あなたへ戻しまするやうな、私しどもではござりませぬ。
多仲　さうお云やれば、こなたを始め、新七どのゝ爲にならぬ。
幾野　それも合點。兄弟連れで、背戸門に物乞ふやうになりませうが、今まで姉の弟のと、兄弟仲よう暮らしたもの、此方で緣は切りませぬ。
多仲　ではござらうが、侍ひの一分。あれ見よ、佐原多仲が弟、玉屋の家を斷絶させ、その身もかゝる首綱と、諸方の譏り、拙者が身で、安閑として居られず、血筋の捕り繩、人を殺せば助からぬ覺悟は兼ねて。新兵衛、捕つ

た。

ト また立ちにかゝるを、幾野、よろしく留め

幾野 モシ、多仲さま、そりや、あなたの御存分と申すもの。

多仲 何が存分。

幾野 人殺しの科助けてやらう、戻せと仰しやる事ならば、親の遺言背いても、わたしが勘當いたしまする。どうで遁がれぬ科ならば、わたしを始め、新七も、同じ咎めに遭ひませう。新兵衛、わが身も人殺しの、身に覺えさへない事なら、ちやつと云ひ譯しやらぬかいなう。

ト 新兵衛、これまでヂッと俯向いて居て

新兵 姉者人、だん〳〵の不孝、身の誤まり、免さつしやれて下さりませ。

幾野 そんなら、其方は覺えあるか。

新兵 男の立たぬ生死の切端。

多仲 弟め、なぜ尋常にこれへ出て、繩かゝらぬぞ。

新兵 さうぢや。遁がれぬ拙者が命。

多仲 多仲が繩かけ、屋敷へ引けば、玉屋の家名、恙ない。

幾野 ぢやと云うて此まゝ。

多仲 他家へ訴へ召捕らるれば、家名斷絶、重なる科。

新兵 兄者人、イザ、御存分に。

ト 潔よく、多仲が前へ來て、腕廻す。

多仲 云ふにや及ぶ、弟、捕つた。

ト 繩かけうとするを、幾野、多仲を突きのけ、新兵衛をちやつと門口へ突き出し

幾野 イヤ、新兵衛は、この家に居ぬ。

多仲 それ逃がしては。

ト 行かうとする。幾野、門口ピッシヤリさす。花道よりバタ〳〵にて、小女郎、出て來て

小女 ヤア、新兵衛さん、逢ひたかつた。

ト 縋るを、新兵衛、引き廻して口を押へる。幾野、心付いて、門口を明け

幾野 この家を離れて、二人が素振り。

ト 門口へ出ようとする。

多仲 イヽヤ、遁がさぬ、兄が捕り繩。

幾野 サア、それはな。

新兵 姉者人、只お免されて。

幾野 落すは氣遣ひ。内にも捕り繩。

多仲 どうで遁がれぬ。

藤兵 新兵衛、捕つた。

ト後より忍び出て、門口へ行くを、多仲、藤兵衛を引き連す。幾野、門口を押へながら

幾野　どうなと勝手に落ちてくれやい。

ト泣き落す。門口の新兵衛、小女郎、こなしにて、手を合せる。この途端よろしく　　拍子　幕

大切　小村井土手の場

浄瑠璃「櫻草對の紋」　富本連中

役名──玉屋新兵衛。越前屋小女郎。醫者、安達文庵。玉屋新七。賤の女、おせん。新兵衛姉・幾野。

本舞臺、三間の間、向う一面に遠霞の書割り、その前に、草土堤、春草のあしらひよろしく、この上に、富本連中、居並び、上の大柱、柳の立ち樹、日覆より吊り枝、左右は稻村。舞臺先に山吹の土手板。見事なる飾りつけ、下の柱、外に、、、、木下川道と書きたて傍示杭。すべて小村井村吾妻の森の景色よろしく、

時の鐘にて幕明く。

ト頭取出て、浄瑠璃の口上、名題役人僞れあつて、直ぐに、前彈きにかゝる。

〽春におくれて櫻に早き、空も朧の花心、行きへ嬉しき吾妻の、森を目當の二人連れ。

ト合ひ方にて、花道より新兵衛、着流し、頰冠り、一本差し、誂らへの形。小女郎、傾城、誂らへの形にて出て來る。

〽靈の玉屋の新兵衛と、小女郎が仲の憂き節を、仇口の端に流行り歌、右衛門坂行こ通ふ神、譯吉原に色かへぬ、松の操は自から、江戸紫に路考茶の、似合うた緣と餘所目さへ、三津の難波の便りまつ、そのはてしなさ、もどかしさ、今は願ひと川竹の、如何に流れの浮世ぢやとても、實と誠が行き合うて、導かしやんす極樂の、佛さんより神さんより、祈るは厚き御贔屓を、請地の村に隣りたる、小村井近き堺橋、人目堤をたどり來る。

ト兩人、花道にて振りよろしく、本舞臺へ來て

小女　モシ、新兵衛さん、爰はマア、なんと云ふ所でござんすえ。

新兵　さればいの、昨夜は姉の情にて、百年の命を延はりて、其方を連れて落ち行く先は、小村井といふ在所に、ちつと知るべもあるゆゑに、來る事は來たが、今もつくづく思ひ廻せば廻す程、人を殺めたその上に、印子の寃像失うては、半次郎どのゝ身の納まり。

小女　サア、そのお前に苦勞かけた、元の頼みは、皆わたし。出村さんの情、おゑんさんへ、どうも云ひ譯がないわいなア。

新兵　ハテ、色戀と云ふうちに、其方も元はお主の娘御、おれと一緒に殺しては。

小女　モシ、又その事を云はしやんす。

〽昔は昔今さらに、お主あしらひ、わしや嫌、そも突出しのその日から、無理な意氣地を立て通し、客も落さず帯解かず、酒で紛らす座敷つき、ふつとお前に初會の夜、心の內で杯を、拜んで受けた心意氣、傍輩衆に笑はれて、儘よおせゝが張りになり、果は遣り手や內證へ、忍び廊下の蔭言に、譏られるのを嬉しうて、待つ夜更け行く床の內、明し會うたる胸と胸、起證誓紙もまだな事、ほんに枕がもの云はゞ、堅い證據ぢやないかいな、それを思へば仇夢の、覺めて果敢なき今の身に、かかる歎きも心には、覺悟の上と云ひながら、おゑんが恨み、義理ある姉の、情思へば今しばし、忍ぶよすがの隠れ家を、いづくの程と見え分かぬ、かこち涙の玉苗に、春の水増すばかりなりけり。

ト兩人よろしくあつて

小女　それにマア、新兵衛さん、尋ねようと思ひなさんす在所は、知れてあるかいなア。

新兵　サア、なんでも小村井と云ふ名は覺えて居るが、大方このあたりであらうぞいの。

小女　エヽ、滅相な。さう云ふ事なら、誰れぞにちよつと

新兵　ほんに、問うて見たいものぢやなア。

ト向うを見る。

〽折と向うへ賤の女が、紺の前垂れ玉襷、頭に盥手に藥罐、さげて畔道いそ〳〵と。

トこの文句のうち、花道より、賤の女おせん、田舎娘の拵らへにて、裾をからげ、頭へ盥に飯鉢と茶碗を入れたるを載せ藥罐を提げ、出て來る。

〽東山ナア、東山のエ、お月出やる〳〵中でつかり、しよ〳〵けた、しよ〳〵げたよの、お月隠す

奴は、ろくな奴は隠さぬでは、月を便りの野良戻り、野越え山越え畔道越えて、がつくりそつくりそつくりがつくり、其まゝの、在所育ちと見えにけり。

トおせん、振りよろしくあつて、こちらへ来る。

新兵 モシ〳〵女中、ちよつと物が尋ねたい。小村井とやら云ふ在所は。

小女 このあたりではござんせぬかえ。

せん ア丶、そりや此方の隣り村。お前方、見れば江戸衆ぢやな。

新兵 イエ〳〵、わしらは行徳……ではない舟橋の者で、浅草の觀音さまに詣りまする。

せん 隠しなさるなよ。びらしやらと、じよなめきどのはおけんせんか。

小女 イエ〳〵、なんの傾城であらう。わたしはナ、オ丶、ソレ、主の妹でござんす。

せん 何をアレ、そちらな男どの。けんせん連れて駈落ちか。お内儀さんが笑止やなう。此方の男は其やうな、氣遣ひないと思へば、これも又。

〽夜さり〳〵の口癖に、曇らぬわしを疑ひて、いろぢやの〳〵、隣の兄の五郎八茶碗で濁り酒、わざくれないのその顔が、いやさのすいせうで氣はざんざ、ざんざ節にて紛らかし、ちよこ〳〵歩みて通りける。

トよろしくあつて、おせん、下座へ入る。

〽又も向うに人影は、もしや我が身の追手かと、暫し佇む稲村蔭、忍ぶ程なく走せ来る二人。

ト新兵衛、小女郎、こなしあつて、下の稲村へ小隠れする。向うバタ〳〵にて、文庵、新七、以前の幕の形にて出て来て、印子の尊像を奪ひ合ひ、花道にてちよつと立廻りあつて

文庵 うるさい餓鬼だ、新七め。うぬは、どこまで附いてうせる。

新七 どこと云つて命がけ、地獄の底まで、その尊像渡さぬうちは、動かしやせぬ。

文庵 面倒な。退け。

新七 キリ〳〵尊像、此方へ渡せ。

ト摑み合ひながら、本舞臺へ来る。

〽やらじ渡さじ根くらべ、前へどつさり後へころり、こけるも放さぬ鷲摑み、慾の熊鷹こなたは一途。

　義理と誠のもろ羽がひ、しめて根笹に足まとはれ、
　　轉びうつゝの爭ひは、いづれ劣らず果しなき。
トこれより誂らへの鳴り物になり、新七、文庵、尊像を楯に、見事なタテ、存分によろしくあつて、トヾ、文庵、新七を當て、花道へ逃げる。時の鐘、合ひ方になり、向うより幾野、以前の姉の形にて、袖頭巾に提灯を提げ、出て來る。これにて文庵、本舞臺へ引ッ返す。新七、心付き、稻村より新兵衛、小女郎、出て立ち塞がり、文庵を取卷く。文庵、恂りして

文庵　ヤア、うぬらは新兵衛、小女郎。

新兵　安達文庵、その尊像渡せ。

ト立廻りのうち幾野、本舞臺へ來て

幾野　嬉しや、二人は恙なう。

小女　ヤ、姉さん、面目ない。

新兵　この身の覺悟、南無阿彌陀佛。

ト脇差へ手をかくる。幾野止めて

幾野　ヤレ、早まるな、その尊像。

新七　取り得て再び命まで。

文庵　イヽヤ、渡さぬ。新兵衛、覺悟。

トかゝるを、新兵衛、立廻りあつて、文庵を引きしめ、尊像を取上げる。

幾野　出來た。新兵衛。歸參の土産。

皆々　エヽ、忝ない。

へ短かき夜半と曙の、越路の櫻うつし繪や、姿に殘す物語り

ト皆々よろしく

幾野　まづ、今日はこれぎり。

めでたく打出し

艶色競廓操（終り）

美濃屋三勝
茜屋半七

臺(だい)頭(がしら)霞(かすみの)彩(いろ)幕(まく)

布交五張



初演繪番附序幕

臺頭霞彩幕

序　幕

浅草寺の場
元柳橋の場

役名——信田の奥方、青柳御前。腰元、初野。同若草。有松源之丞。笠松角太郎。下部、吉平。同雁助。稲毛の家中、里遊。山の宿の伊之。花川戸の仁三。茶屋女房、お色。茜屋平左衛門。同女房、お今。同嫁、お園。同番頭、長九郎。同下人、彌八。稽古娘、お粂。同、お金。同、お通。東金屋茂右衛門。筑波屋茂右衛門。茜屋半七。

本舞臺、三間の間、向う一面の繪馬堂、いろ〳〵額懸けてあり、この下に茶店床几、大分並べ、爰に稲毛の家中里遊、着流し、大小、下駄がけ。山の宿の伊之、花川戸の仁三、勇みの形にて、腰を掛け、お色、前帶、茶屋女房の拵らへ、前垂れにて、茶を運んで居る。すべて浅草觀世音境内の體。三社堂の神樂、雙盤にて、幕明く。

ト下座と向うよりいろ〳〵の仕出し出て來り、引違へて入る。此うち舞臺の人數、捨ぜりふにて

伊之　里遊さん、今日は何所へお出でなさりやした。

里遊　わしは並木まで、凧を持つて來た歸りよ。

仁三　ほんに、春先は燈籠の代りに、凧か忙しうございませう。

里遊　イヤモウ、問屋から前借りをして居るゆゑ、急ッつかれて、からッきし素見に行く暇もなしよ。

いろ　道理で、この頃お前さん、わつちらが裏の黒文字が所へ、お出でないと思ひやした。それぢやア淨瑠璃はさつぱりだらう。

里遊　オ、サ、それで黒文字が所へも行かれないから、獨りで素語りをしながら、細工をするばつかりを樂しみ。さうしてお春坊は。

いろ　お聞きなさい。霜枯れのうちは達者で、これから錢にならうと云ふ春になつて、一昨日から風を引いて、店を見る事もならないから、せう事なしにわたしが出るの

サ。

里遊　そこが、切ない時には親を出せだ。

いろ　ほんにモウ、忌々しくつてなりやせん。

伊之　さう云はないがいゝのサ。今にいゝ客でも附けば

仁三　ソレよ、お前は阿母、左團扇だ。

いろ　ナニ、彼奴がそんな働らき、澁團扇が呆れらァ。

四人　ハヽヽヽ。

里遊　なんと、これから奥山をひやかして、蕎麥切り豆腐で一杯やらうか。

伊之　そいつはいゝね。

いろ　そんならマア、行つてお出で。

里遊　サア、來やれ。

ト此うち始終、神樂、雙盤にて、下座へ入る。直ぐに向うより、筑波屋茂右衛門、先に、茜屋半七、一本差し、羽織の形、ぱつち。銘々甲斐絹の袱紗包みを脊負ひし共を連れ、出て來り

筑茂　今日は大きに御苦勞。

半七　イヤモウ、それはお互ひの儀。

ト辭儀をして

もう奥方も、御參詣でござりませう。

筑茂　お屋敷が御遠方とは云ひながら、もうでござりませう。マア／＼、あの繪馬堂の茶見世へ參つて

半七　サア／＼、お先へ

ト此の鳴り物にて、皆々、舞臺へ來る。

いろ　オヤ／＼、筑波屋の旦那、お久しうござりますね。サア、あなた方、こちらへ。お供さん、御苦勞。

筑茂　天氣でよいの。

いろ　左樣でござります。結構な春で、ホヽヽヽ。お一つ、おあがり遊ばせ。

ト銘々へ茶を出す。また神樂になり、向うより東金屋茂右衛門、羽織、一本差しの形にて、袱紗包みを持たせし供を連れて、出て來り

東茂　オヽ、これはお二人、お早う

兩人　コレ、よい所へ、サア／＼。

いろ　あなた方は、今日はどちらへ。

トこれにて、東金屋茂右衛門、腰を掛ける。

筑茂　今日はお出入り屋敷のお目見得で。イヤ、お出入りも數多のうちに、格別の思し召しを以て、途中なから奥樣へ、お目見得を仰せつけられる程にと、御家老樣より昨日手前方までお使ひ。御如才はあるまいが、その差上

げる品は、御持參でござりませう。

東茂　左樣でござります。親どもより古くお出入りを致すお此にて、殿樣と申し、今日は奥樣へ途中のお目見得。

半七　親半左衞門參りますのところ、持病の疝癪ゆゑ、名代の私し。差上げる品は、彼樣な物でよろしうござりませうか。

東茂　ほんに、ちよつと御覽じて下さりませ。

ト兩人、共に持たせし包みのうちより、菓子折、銘酒など出す。

筑茂　イヤナニ、わざとお目見得の印に上げる品なれば……ホヽウ。これは御叮嚀。御途中のお慰みに、一入よろしうござりませう。

半七　お出入り頭の事なれば

兩人　萬事よろしうお指圖を。

筑茂　これは〳〵。

ト此うち、今の品を包みへ仕舞ふ。

コレ、お內儀、今に信田の奥樣が、これへ入らつしやる程に、その折はちつと、遠慮してもらはねばならぬ。

いろ　ハイ〳〵、そんなら、アノ、奥樣が……それぢやア並茶も

筑茂　イヤ〳〵、お茶も何も御持參ゆゑ、たゞ店を借りるばかりぢや。

ト此うち、東金屋茂右衞門、フト向うを見て

東茂　アレ〳〵、慥かにあの一群れは。

半七　イカサマ、大方お屋敷の。

ト筑波屋茂右衞門見て

筑茂　オヽ、あれだ〳〵。

ト三人、煙管をしまひ

いろ　ドレ、そんなら其うち、お髮さんの店へでも

筑茂　お二人ながら

半七　サア、お支度を。

ト賑やかなる鳴り物になり、三人は共を連れて下座へ入る。お色は下の方へ入る。ト向うより、着流し、袴つまみ、股立ち、大小の供侍ひ兩人、先に、奥方青柳御前、裲襠衣裳の形。腰元初野、同じく若草、同じく糸遊、抱へ帶。笠松角太郎、有松源之丞、羽織、袴にて、附き添ひ、これに續いて、紺看板の中間、茶瓶、油單の掛かりし挾み箱、草履取り、出る。この後より有松中間吉平、笠松中間雁助、世話奴にて、袱紗包みを持ち、この人數、並よく出て、直ぐに舞臺へ來る。

角源　これにて暫らく御休息。
皆々　ハア／＼。
　ト奥方、床几にかゝる。皆々よろしく扣へる。鳴り物、打ち上ぐる。
角太　誠に今日は、空も長閑に
源之　一入のお慰み
角源　恐悦に存じまする。
青柳　云やる通り、何所となう、流石に空も長閑けく、道道も、梅が香誘ふ風につれ、來るとはなしに御寺の庭。ほんに、よい慰みであつたわいなう。
若草　イエモウ、堅いお屋敷の內とは違うて、たまさか表の町續き。
初野　御覽も殊に珍しきその風俗、樣々の貴賤老若打交り
二人　目に正月とは、これでござりまする。
角太　イカサマ女中方の云ふ通り、年が年中御殿の中で、見るも／＼同じ顏、武張つた形のその外は、御覽じた事もないに、何を思し召してやら、今日のお物詣で。
源之　當時淺草寺の觀音は、靈驗殊に著るく、さればこそ諸人こぞつて信心いたすも、朽ち木の花の誓ひに漏れず、みな御利生にあづかるゆゑ。御前樣にもお願ひござらば、隨分御信心の籠められて。
青柳　サア、自らが願ひとは外でないが、殿樣四十四にお成りなされても、お世繼のないは前世の因緣か。どうぞお一人世繼を儲け、信田家の子孫長久をと、それのみ願ひに今日の參詣。皆も共に願うてたもや。
若草　ハイ／＼、そりやお願ひ申す段ぢやござりませぬ。
初野　若樣がお一方、もしお出來遊ばしたら、御殿は猶賑やかになり、よからうと存じますれば、どうぞお持ち遊ばすやう
若草　お願ひ申すでござりませう。
角太　イカサマ、お世繼ぎがござらないでは、大名のお家も他人の物、惜しい事でござりますれば、觀音をお賴みあつて、每晩々々御精を出されて……ハヽヽヽ、ナウ、源之丞どの。
源之　何事も御信心が第一でござりまする。即ち當寺へ御奉納の、布施物として二百兩、役人中より今日受取り、所持いたしてござりまする。
　ト此うち、下の方へ、筑波屋茂右衛門、東金屋茂右衛門、茜屋半七、袴を着て、銘々目見得の品を持ち、出て來り、此うち、鰐口の音、かすめたる雙盤。

筑茂　ヘイ／＼、御免下さりませ。笠松さま、有松さま、昨日御家老様より。

角太　オ、今日奥方様へ御目見得の事、承知いたした。

三人　よろしう御披露、お願ひ申し上げまする。

ト品を渡す。

角太　女中方、あの品、取次ぎ遣はされい。

腰元　畏まりました。

ト立ち上がり、三人が持参の品を、奥方が前に並べる。

角太　御前様へ申し上げまする。これへ出ましたるは、お出入りの町人、筑波屋茂右衛門、次に居りまするが東金屋茂右衛門、茜屋半左衛門病氣に付き、悴半七、お目見得遣はされませい。

青柳　成る程、噂のあつた三人の者。また何よりの品。

ト三人辭儀をして居る。

筑茂　ハツ。

ト平伏して、角太郎、源之丞に向ひ

冥加至極。

東茂　有り難い仕合せにござりまする。

角太　して、筑波屋、晝食の用意はよいか。

筑茂　田圃を見晴らし景色よく、奥山の茶見世を借り切り皆御膳部は先へ廻してござります。

源之　お供方の支度は。

筑茂　表門にお供待ちの分は、割籠に致して。

源之　それは一段、お世話でござつた。

腰元　御前様には、先づ御參詣。

青柳　イカサマ、お堂で百遍の返り詣でもしたいけれど、そんなら一先づ。

角源　御前様。

青柳　皆も一緒に。

皆々　先づお入り遊ばされませう。

ト唄になり、奥方、三人へ思ひ入れあつて、皆々附き添ひ、角太郎、源之丞、三人へ思ひ入れあつて、下座へ入る。筑波屋茂右衛門、東金屋茂右衛門、茜屋半七三人殘る。揚弓の音になり

筑茂　先づこれで、お目見得は濟んだ。

半七　なんとマア、大名の奥様は、手重いものではござりませぬか。

東茂　左樣サ。さうして人に物を貰つて、有り難いとも云はず。云つて見りやア、此方づれより、物を知らないものだね。

三人　ハヽヽヽヽ。

筑茂　マア〳〵、奥樣へまでお目見得をすると云ふは、お出入りの規模と云ふもの。

東茂　それでもお屋敷から渡つて居る、鑑札を無くした日には、闕所になつて、コレ〳〵彼の。

ト縛られる眞似をする。

筑茂　そりや猶更、疎かにしたと云ふ科で、どんな目に會はうも知れぬ程に、隨分大切にするがよいのサ。

半七　モシ、さうしてこれから、どう致しませう。

筑茂　もう、お目見得を仕舞つたからは、てん〴〵の勝手次第。併し、お歸りまで居る程の事はないが。

半七　居てよくば居りませうが、どうでござりませう。

東茂　ナンノ、お前、今日でなけりや、行かれぬと云ふ身ではなし。かこつけの女郎買ひも果ないではないか。

半七　そんなものかね。

筑茂　さうして此方は、今日のお賄ひを云ひつかつたりやお二人と違つて、トヾの仕舞ひをせにやならない。

兩人　成る程。

半七　そんなら、もそつと居りませう。まだ物馴れぬ私しゆゑ、何事もお引廻しを。

筑茂　これは御挨拶。イヤ、ほんに、なんぞ又お差支へもあらば、不躾ながら御遠慮なう。

半七　御深切の程、有り難い。サア、そんなら御一緒に、ちとお賄ひの方を、お手傳ひ致しませう。

筑茂　それは近頃恐れ多い。半七さん、お前は爰で一服あがれ。

筑東　サア、茂右衞門さま……これは相こう。

ト思ひ入れ。

サア〳〵、お出で。

トまた神樂、雙盤になり、筑波屋茂右衞門、先に、東金屋茂右衞門、下座へ入る。後に半七、一人殘り、莨のんで居る。向うより茜屋半左衞門、親仁の拵らへ、羽織、ぱつち。女房お今、ごま毛、女形、丸髷にて、出で來る。後より、お園、やつし、振り袖の形にて、土筆、蒲公英の花を持ち、續いて下人彌八、股引、尻端折りにて、風呂敷包みを脊負ひ、出て來る。下座より、お色、出て來り、半七を見て

いろ　もう、よいのでござりますかえ。

半七　イヤ、お堂へ御參詣ぢや。

ト此うち、皆々、舞臺へ來り

半左　オヽ、さう云ふは半七ぢやないか。
その　ほんに、半七さまぢやわいな。
　ト思ひ入れ。
半七　ホウ、これは親仁様、母者人、もう入院は濟みましたか。
半左　オヽ、サ、お寺にも初めて會うて、挨拶が濟んだら直ぐにと思ふと、ヤレ、杯ぢや吸ひ物ぢやと。
半七　定めし左様でござりませう。マア〳〵、お掛けなされませ。
いま　息子どの、お目見得を仕舞うたら、早う内へ歸らうとはせいで、こちらは留守に知れてあるに、いつまでべんべんと。
半左　これはしたり、お今、其やうに云やんないの。半七ぢやと云うて子供ではなし、それ位な事合點であらうがまだ大方お目見得が
半七　ハイ、お目見得は今、濟みましてござりまする。
いま　それ見たか。
半七　サア、筑波屋茂右衛門どのが、お歸りまで居るがよからうやうに云はれますゆゑ
半左　成る程〳〵。あの筑波屋の茂右衛門どのは、お出入り頭、何事もあの人の指圖次第。全體おれが出にやならぬ所なれど、寺の入院もまだし難く、又おしつけこのお園と娶合せ、何もかも呑つてしまふ其方ぢやに依つて、今日の名代。随分と氣を附けて、仕落ちのないやうにして戻るがよい。
いま　それ〳〵、随分と仕落ちのないやうに、明日なりと明後日なりと、其方の勝手に戻るがよい。ほんに、あんな者に身上を譲つたら、とゞのつまりは食はずに居るより外はあるまい。ナウ、お園。
その　モシ〳〵、母さん、内とは違ひまするわいな。爰は道中、人さんに聞えても……モシ半七さん、母さんの云はしやんす事、必らず御前、氣に留めずと
彌八　左様サ、阿母さんの仰しやる事を氣にかけると、茜屋の内には半時も居られませぬ。それだに依つて私しなそは、どんな小言を耳かうとも、此方の耳へ抜け裏同然。イヤ又、喧ましい奴も見たが、あんな喧ましい
　ト此うち、お園、氣の毒がり、コレ〳〵と袖を引く。
いま　どうしたと。わいらまでが一つになつて、さうしてこちらの耳からこらの耳へ抜け裏。ドレ、用心のよいやうに、どちらなりと塞いでやらう。

ト立ちかゝる。皆々、押へる。

半左 コレサ〳〵、どうしたものぢや。内でも外でも、其やうに。もうよいてや。

いま ナンノ、よからう。あの野郎め。

半左 これは如何な。

ト また取りさへ

又われも、云はずとも知れたあれが事。イヤサ、あんな事、云ふが悪い。重ねてから嗜なめ。

彌八 ハイ〳〵、重ねてから目の前で云はずと、蔭でばかり云ひませう。

いま アレ、矢ッ張りあのやうな

半左 サア〳〵、よいわいの。料簡しや〳〵。

ト 宥める。

その アヽモシ、半七さん、今ので袖に綻びが、ドレ、一針。

ト 懐の楊枝差しより、糸針を出し、半七が側へ寄る。

半七 アヽ、大事ない〳〵。左様なら親仁様、私しはあちらへ。

半左 オヽ、それがよい〳〵。

半七 母者人、お靜かに

その それでもちよつと、綻びを

ト また寄るを、突き退け

半七 ハテ、お園どの、お二人に氣を付けて下さい。

ト 唄になり、半七、下座へツイと入る。お園、思ひ入れ。

半左 サア、お今、觀音樣へお參り申さうかの。

いま ナンノ、先の知れもせぬ後生願はうより、サ、早う内へ歸つて、炬燵へでもあたるがましぢやわいの。

半左 エヽ、勿體ない。わざ〳〵さへ參るのに。

いろ 成る程、先刻から聞いて居るが、餘ッぽどむづかしい代物だ。

彌八 看板に僞はりなしサ。

ト お今、振向く。

いろ もうお一つ上げませうか。

ト 太鼓入りたる雙盤になり、下座より源之丞、中間吉平を連れて、出て來り

源之 それに居らるゝは、茜屋半左衞門どのでないか。

半左 これは有松源之丞さま、今日はお供でござりまするか。私しも奥樣へお目見得を仰せつけられ、出まする筈を菩提所の入院。講頭の事ゆゑ據ろなう、お屋敷樣へ

は病氣分。半七を名代に出して、あなた樣にお目にかゝり、なんともハヤ、申し譯も

源之　なんの〳〵。半七で事相濟んだれば、その遠慮には及ばぬ事。

半左　でも、御沙汰でもござりましたら、お執成しを。

源之　その儀は氣遣ひ致されぬがよい。

半左　サア、そんなら、こちらは、觀音樣へ〳〵。

いま　アヽ、地獄へなりと行きませう。

源之　アヽコレ、半左衞門、今お堂には奥方の

半左　そんなら暫らく念佛堂に、お待ち申してお參り申さう。左樣ならば源之丞さま。

その　これにお出で遊ばされませい。

いま　エヽ、口叩かずと、行きやいなう。

ト源之丞、顏を見る。

オヽ、ホヽヽヽ。

彌八　サア、お出でなされませ。

ト また雙盤の鳴り物になり、彌八、先に、四人、源之丞へ辭儀しながら、下座へ入る。矢張りかすめたる雙盤。

源之　イヤナニ、吉平、其方は奥方これにお出でのうち、黒門町の研屋へ參り、先達ての刀の研はあがりしか、大儀ながら一走り承つてくれい。

吉平　ハイ〳〵、畏まりましてござりまする。が、若旦那お心も除りようない角太郎さまも今日はお供、どんな事をなされうとも、お相手におなりなされまするな。ドリヤ、一走り行つて參りませうか。

ト また神樂雙盤になり、吉平、急ぎ花道へかゝる。向うより茜屋番頭長九郎、羽織、ばつちにて、出て來り互ひに行き合ふ。

長九　吉平どの。

吉平　オヽ、長九郎。

長九　どこへござるのだ。

吉平　旦那の御用で、黒門町まで。

ト云ひながら、別れて入る。

長九　オイ〳〵、それぢやア、アノ、源之丞さまも……おきやアがれ。尾の切れた奴凧とは、彼奴が事だ。

ト云ひながら舞臺へ來り、源之丞を見て

そこにお出でなさるのは、源之丞さまではござりませぬか。

源之　茜屋の手代長九郎か。

長九　モシ、好い所でお目にかゝりました。私しは石濱のお屋敷へ納め物から、役人方に引摺られ、丁度彼のへ昨夜參つて、只今歸りがけ。モシ、都路が急にあなたへ。

ト紙入れより、文を出す。

源之　コレ〳〵、長九郎、あの、都路が事ならば

長九　ハテ、さう仰しやらずと、ちよつと見て遣はされませ。

源之　イヤモウ、見るには

ト立退くはずみに、袖より、財布の金、落ちる。

いろ　モシ〳〵、何やら。

源之　オヽ、こりや奉納の二百兩。

ト取り上げる。

長九　モシ、そんな物は打ッちやつて置いて、マア、この封を

ト財布を取つて、床几に載せ、その手へ、無理に文を持たせる。この前より、角太郎、雁助を連れて來り、この時、これを見て、雁助へ囁く。源之亟、迷惑なる思ひ入れ。

源之　これはしたり、大切なる

ト長九郎、文を手に持ち添へ

長九　ハテ、折角都路が

源之　さりとては、迷惑千萬な。

トこちらへ逃げる。長九郎、矢張り放さず

長九　御迷惑ならば、小口ばかりを

源之　そんなら、見やうが、マア、この金を

ト又こちらへ來る所へ

いろ　ハイ、お茶をお上がりなされませ。

トわざと茶を出す。

源之　イヤ、もう呑むまい。

長九　茶を上がらずと、これをちよつと。

源之　ナニ、見たと云うてからに。

ト封を切る。此うち角太郎、雁助、いろ〳〵思ひ入れ。源之亟、これにて止むなく腰をかける。雁助、財布をツッと取り、角太郎、おいろ、雁助を蔭にすることなし。長九郎、源之亟、これを知らず

「文して申し上げ候ふ、我が身こと、急に田舍の客人、身請け致し候ふやう申し候へども」

長九　それ〳〵、どうでござりまする。

源之　なんの、おれが構はう。

トこちらへ來やうとする。角太郎、雁助、ちやつと床

几の下へ隠れる。長九郎、文を取り上げ、また源之丞
を捕へ

長九　サア、お構ひあるまいが、馴染の女郎が此やうに、コレ／＼「……候へども、我が身ことは外へ参り候ふ事は否にて、どうぞ／＼お前様のお側へ参りたく……」これだものを。マア／＼、お讀みなされまし。

源之　側へこれを讀んだと云うて、此方の心に

長九　マア、サ、お讀みなされませ。

ト突きつける。源之丞、據ろなく讀む。此うち雁助、財布の金を出し、跡へ石を拾ひ込み、元の所へ置く。

源之　「参りたき願ひに候ふまゝ、不便と御汲ませ、よしなに御計らひなし下され候ふやう、くれ／＼も念じ候ふ」

長九　モシ、それぢやアどうかして、遣はされずばなりますまい。

源之　阿房らしい、なんのつきに。

長九　でも、女郎の方から此やうに。

源之　何と云はうが此方には……それ／＼、大事の

ト財布を取つて懐中しながら、角太郎と顔見合せ

ヤ、角太郎どの、いつの間に。

角太　イヤ、たつた今。源之丞どの、奥方が何か貴殿に

源之　それは近頃。左様なら

ト行かうとする。長九郎、引きとめ

長九　モシ、どうでも身請けは。

源之　エヽ、知らぬと申すに。

ト振り切る。傾城になり、源之丞、急ぎ下座へ入る。角太郎、落ちつく思ひ入れ。

長九　成る程、女郎の方からあんなに云ふに、情を知らないお侍ひだ。

角太　長九郎、都路は身が請け出さう。

いろ　そんなら今ので、横合ひから

角太　コレ

長九　角太郎さま、あなたが、アノ、横合ひから

雁助　イヤ、旦那も、より／＼お通ひなされて、源之丞と互ひに知らず都路を

角太　心に靡かぬは、今こそあつちばかり、源之丞に惚れての心中。おれと云はずに、長九郎、われが合で請け出してくれい。

長九　今の身請けの文の事、精根揉んだも時々に、お供で参つた一座の端。その源之丞さまの女郎を、あなたに……成る程、此方の氣のない事、あなたの方へ随分と。さう

してお金は。
角太　明日とも云はず、雁助、金子を。
雁助　畏まりました。ソレ、二百兩。
長九　イヤ、また流石、角太郎さま。左樣ならこの金子で
いろ　濡れ手で粟餠、巧い御都合。
長九　でも、念の爲ちよつと金子を。
　ト包みを明け、金を改め
ヤ、こりや一兩々々に、殿樣のお極印。
角雁　ヤ。
　トぎよつとする。
長九　モシ、恐ろしい。こんな金ぢやア。
　トそこへ置く。
雁助　そんなら折角
　ト思ひ入れ
角太　コリヤ〳〵、何も申すな。
長九　イエ、人に申しは致しませぬが、あなたのお金を
角太　サア、その金は。
長九　只今なくば、明日にも、調ひ次第、茜屋まで。
雁助　長九郎、貴樣を呼びにやるワ。
長九　そんならそれまで、角太郎さま、イヤ、神佛に請け

られたわえ。
　ト思ひ入れ。神樂になり、長九郎、下座へ入る。
いろ　モシ〳〵、布施があると仰しやるゆゑ、とも〴〵に手傳ひましたが、源之丞さまへお返し申して參りませうか。
　ト角太郎、引ツたくり
角太　たわけ面め。例へ金子は遣はずと、お上の首尾よき源之丞、角太郎が出世の邪魔。その奉納の布施物を、紛失させた科で身の上。さすればまんざら、無駄にもならぬ。
いろ　そんなら私しへ、しつかりと挨拶が
角太　追つての事と、樂しんで居やれ。
いろ　オヤ〳〵〳〵。
角太　雁助、其方は、長九郎め、もし極印ある金子の事、人に吐かさば我が身の上。とつくり彼れを抱き込んで
雁助　呑み込みました。
角太　早く行け。
雁助　ハツ。
　ト三味線入りの浮いた神樂、かすめし雙盤になり、雁助、一散に下座へ入る。角太郎、思案の思ひ入れ。向

うよりお通、誂らへの着流しの形にて、本挾みを抱へお蝶、留め袖、娘の形、同じく本挾みを抱へ、お金も本挾みを抱へて來り、後先を振返り

きん　喜助の馬鹿やい。

しげ　ほんにいけない野郎ぢやわいな。

ト舞臺へ來り

つう　お前方、そんな事お云ひでないよ。オヤ、今日は小母さんだよ。

しげ　お春さんはどうおしだえ。

いろ　お春かえ。この頃は風を引いて寢て居るから、それでわつちが出るのサ。マア、お前方、ちよつとお寄りな。

つう　お春さんが病氣ぢや、ナウ、お蝶さん。

しげ　さうサ、どうしたもんだらうの。

いろ　なせ。なんぞ彼奴に用かえ。

しげ　アイサ、先度行つた横山町へ、晩に藏開きで、お通さんやお春さんやわたしらを、今ッから連れて行くから誘つて來いとお師匠さんが云ひなさるから、それで來やしたよ。

きん　お春さんが寢てお出でぢや、惡いね。

つう　小母さん、それぢや、おやりぢやあるまいね。

いろ　わつちや上げる氣でも、彼奴がどうして。お前方と違つて病弱いから、控つてもうせる事ぢやないわな。お師匠さんによく云つておくれよ。

しげ　アイ〳〵、そんならもう、わつちらは參らうかね。

いろ　コレサ、マア、折角お出でだに、お茶を一つたべてお出で。

ト茶を酌んで三人へやる。三人、これにて腰をかける。

角太　ホウ、このお娘達は唄か、豐後か。

いろ　どちらもでござります。ほんに、お前さん方に、このお通さんの藝をお目にかけたい。マア、下方はなんでもござれ、唄は杵屋正次郎、淨瑠璃は文字の方で、踊は長谷川町の藤間が弟子。ほんにそりやア、どこの踊でも彈初めでも、續く者はござりませぬ。

つう　オヤ、小母さん、そんな事を。

ト思ひ入れ。

いろ　云つてもよいわいな。

しげ　さうサ、小母さん、云ひなさる通り、ちつとも唄のない事だものを。わたしらがお師匠さんぢや、お通さんより先へ上がつた者が、みんな追ひ拔かれて、わたしら始め、一向なものサ。

つう　又そんな事をお云ひでないよ。
角太　イヤ〳〵、さうであらう。悧巧さうな顔つき。さう多勢なら、とても事に、身共がちと柔術を致へて、男と取組む塩梅を致へてやらうか。
　ト　お通、おきん、顔見合せ笑ふ。
いろ　そりやようござりませう。形はこんなでも、まだ生娘でござります。
角太　さうして、宿は近所か。
いろ　ハイ、直ぐにこの仲町で、美濃屋と云うて、暖簾のかゝつた内でござります。
しげ　小母さん、一服おのませな。
いろ　ほんに、ちつときついよ。
　ト　煙管、莨入れを渡す。おきん、お色が顔を見て
きん　小母さん、顔をどうおしだえ。
いろ　これか、こりや田虫よ。
角太　なんぢや、田虫か。コレ〳〵、それは捨てゝ置くと顔中へ擴がるぞよ。
いろ　オヤ、嫌だね。
しげ　お前、わつちらが法印様に、咒なつてもらひなりやよいね。

角太　コレ〳〵、身共が親から譲り請けた、田虫の咒ひがあるが、紅はないか。
いろ　イヽエ、爰には。
しげ　ほんに、いつも紅や白粉を、わたしが離した事はないに、今日に限つて。
つう　刷いたのでよくば私しが
角太　なんでも紅でさへあればよい。
しげ　どうでもお通さんだなう。
いろ　そんならちつとおくれ。
　ト　お通、鏡入れより銀の紅入れを出し、お色へ渡す。
左様ならどうぞ。
角太　ドレ〳〵。
　ト　取つて
なんだ、紅入れに三蓋松の紋が彫つてある。
いろ　三蓋松の紋が彫つてござりますかえ。
　ト　蓋を取つて見て
しげ　お通さん、誰れにお貰ひだ。
つう　アレサ、三蓋松の紋所はわたしが紋。このお銀さんの所へ誂らへて。
ぎん　わたしがお父さんが拵らへだなう。

角太　サア〳〵、爰へ顔を出したり。
ト角太郎、何か云ひながら、お色の顔へ、紅にて、何かべつたり書く。
サヽ、これが先刻の規模とやら。此うち始終、揚弓の音。
いろ　これがかえ。オヤ、怪しからぬ。お通さん、お忝け。
ト紅入れを返す。お通、鏡袋へしまふ。おしげ、見て
しげ　オヤ、椎茸さん、乾瓢さんのやうにおなりだよ。
いろ　お神楽をあげに来やしたのサ。ヒウトロゾカヒウ。
ト茶柄杓、團扇を持つて踊る。と神楽になり、以前の侍二人、下座より出で来り
侍一　角太郎どの、これにお出でか。
侍二　奥様御参詣も相濟み、只今これへ。
角太　ホヽ、こりや又、鯱張らずばなるまい。
紫銀　小母さん、どなたがお出でだえ。
いろ　お大名の奥様がサ。そんなら此うち湯へでも行かう
つう　わたしらも横山町へ行くのが遅くならう。
ぎん　ほんに、お師匠様が待つて居なさるだらうから、そんなら直ぐに
しげ　お春さんによろしく。

つう　ト云ひながら、おしげ、おぎん、先へ行く。アレサ、お前方、お待ちな。
トまた三味線入りの神楽になつて、おしげ、おぎん、先に、お通、向うへ入る。お色は下座へ下る。
角太　子供でも女めは、騒々しいものではある。
トこれにて、角太郎、扣へると、下座より、青柳、初野、若草、糸遊、源之丞、侍ひ附き添ひ、出て
初野　ついにおひろひ遊ばさぬに、お百度参り遊ばして、さぞ
三人　お疲れにいらせられませう。
源之　先づ〳〵これにて、足をお休め遊ばして、奥山の用意の席へ。
青柳　イヤ、ナウ、皆、其やうに思やれど、自らはさしてしんどいやう思はぬも、偏へに願ふ御佛の、大方お庇であらうかいの。
角太　それは何より。定めて女儀の事ゆゑに、觀音が足でも附けて、そこでお草臥れ遊ばさぬのでござりませう。
初野　アレマア、角太郎さまがあのやうに
若草　觀音さまを捉へてからに
糸遊　勿體ない、憎て口。

三人　ほんに、罸が當りませうぞ。
角太　ばちと云ふ物は太鼓三味線、その外知らぬ角太郎、先づ當るとは何よりぢやわいの。
ト茶かす。青柳、これに構はず、此うち繪馬堂を眺め
青柳　懸け並べたる繪馬堂のうち、竹刀を附けし額の姓名。信田の藩中有松氏とは、源之丞、其方が奉納したか。
源之　ハツ、お目立ちまして、恐れ入りましてござります。
青柳　流石は殿の日頃から、御意に違はぬ源之丞。武藝勵みは父兵庫が、流石は悴、ハテ、頼もしい。
源之　これは存じがけなき奥樣のお詞。冥加に餘り如何ほどか、有り難う存じ奉ります。
ト角太郎、ムツとして
角太　イヤ、イカサマ、これはお氣の毒千萬。併し斯樣なる品を奉納するは、金毘羅愛宕に限つたやうに、拙者は存ずるが、觀音へ武器を納めるは、源之丞、これは其許。
源之　成る程、仰せらるれば左樣ながら、あながち當寺へ納めましたを、某がどうやら以て
角太　お心得違ひではござらぬか。
源之　既に田村の謡にも、觀音薩埵の利益の矢先に、鈴鹿の鬼神を討ち亡ぼせし高名ありし物語り。作り物とはござらうが、遍ねく人の存ぜし事。さすれば拙者が奉納を、さのみお笑ひなさるゝ儀にも。
角太　ムウ。
ト思ひ入れあつて
尤も。そこで當時人足繁い金龍山、名聞の額なら、よしになされい〳〵。
源之　全く拙者、名聞の額にはござらぬ。
角太　仰しやるな。云はつしやるな。生兵法の癖として、人を嚇しの額から附け込み、立身出世のお望みか。能ある鷹は爪を隱すと。この笠松角太郎は、若年ながら劍術は拔け切つて、誰れ一人怖い事はござらぬ。さう云はれるが殘念なら。
ト竹刀の額を引ツたくり
サ、この場で身共と勝負して、武藝の極めを奥方へ。
トかさにかけて云ふ。
源之　これは如何な。笠松どの、どうして拙者が其許に
角太　及びませぬか。
源之　どう致して。
角太　アレ、いづれも、お聞きなされい。この額の有松氏

は、拙者には及ばぬと、それを無性に馬鹿々々しい、一刀の奥儀を極めた、身共に一太刀合せる者は、恐らく覺えござらぬわえ。

ト青柳御前へ當てつけて云ふ。源之丞、取り合ぬ思ひ入れ。此うち東金屋茂右衛門、下の方へ出て來り、これを聞いて、この時

東茂　アイヤ、角太郎さま、憚りさまながら、物事にさう御自慢はなされませぬもの。武藝に依らず何事にも、また上々と申すがござつて、我れより勝つた手練の者が、なければならぬ廣い世の中。あなたのやうに仰しやると、どこぞで自慢のそのお鼻が、拉げる事もまゝあるもの、不躾ながら御若年ゆゑ、そこへお心の付かぬが氣の毒。茂右衛門めがいらざる口も、お屋敷様ゆゑ申し上げます。必らずお腹を。

角太　イヤ〱、默れ茂右衛門、わりや町人の身を以て、この角太郎を貶みするな。

東茂　イエ、左様にお聞き下されましては

角太　イヤ〱、云ふな。ついぞこれまで、武藝に於て、後れを取らぬ身共に向つて、意見がましい今の一言。コリヤ、角太郎が云つた事を、耳に障つて申すなら、其方もまんざら無手ではあるまい。サア、爰で我れと、立合へ〱。

ト竹刀を持つて、立ちかゝる。

東茂　これは又怪しからぬ。町人の私し風情が、どうして左様な。

角太　知らずば又、なぜ口出し致した。

東茂　サ、それは。

角太　武士に向つて慮外な奴め。

ト打つてかゝる。茂右衛門、手早く身をかはし、ちやつと立廻りに、角太郎が竹刀を引ッたくり、ぶちのめす。

源之　茂右衛門、引きやれ。

東茂　ハツ。

青柳　ハテ、天晴れ見事。ナ、角太郎が太刀筋、自らこれにて見物した。茂右衛門、必らずこの場の事、口外いたさば屋敷の恥辱。勝つたなぞとの、勝手沙汰ばししやんなや。

東茂　御意にござらずと何がさて。源之丞さま、御前よろしう。

源之　その儀は身共が、イヤナニ、御前へ申し上げます。

用意いたせし奥山の茶屋へ、暫し御出であつて、御休息
遊ばさるゝが、よろしからうと存じまする。

青柳　如何にも。そんならその席にて、皆もおぢや。

源之　サア、笠松氏、お越しなされい。

ト袖を引く。角太郎、振り切る。

東茂　モシ。イザ御案内仕りませう。

ト神樂になり、皆々、角太郎へ思ひ入れあつて、下座
へ入る。角太郎、殘り、跡見送り、口惜しき思ひ入れ
あつて

角太　思ひの外、茂右衛門めに、エヽ、。

ト有り合ふ竹刀を、舞臺へ投げつけ、思ひ入れ。雙盤
になり、下座より雁助出て來り

雁助　モシ、お旦那。

角太　雁助か、口惜しい〳〵。

雁助　なんの事でござります。根ツから譯が知れませぬ。

角太　いま奥方の御前に於て、あの茂右衛門めに竹刀打ち
で……武士が立たぬ〳〵。

雁助　それで解りました。そんならあなたが茂右衛門に、
竹刀打ちでお負けなされて、それで口惜しい。

角太　オヽ、町人に後れを取つて、それで口惜しいが尤も
か。

雁助　成る程、素町人にお負けなされては、こりや、口惜
しいも尤も。

角太　道理であらうが。

雁助　お道理でござります。

角太　尤もであらうが。

雁助　御尤もでござります。

角太　腹が立つて〳〵、いつそあの茂右衛門め。雁助來い。

ト行かうとする。

雁助　ア、モシ、お旦那、そこが短氣は損氣とやら。あな
たの武士の一分は、小身ながら奴めが、お立て申してあ
げませう。

角太　なんと云ふ。一分を其方が

雁助　サア、茂右衛門ならば、仕返しをさせませう。

角太　アノ、仕返しを。

雁助　お腹の癒るほど。

角太　そりや、ほんにかよ。

雁助　命にかけて。

角太　すりや、それ程までに身共が事を。

雁助　ハテ、お主ぢやもの、家來ぢやもの。

角太　雁助、エ、、嬉しいぞよ。
ト手を取つて、思ひ入れ。下座にて
長九　阿母さん、ちよつとお出でなされませ。
トお今を連れ、長九郎、出て來り
角太　角太郎さま、まだこれにござりまするか。
角太　長九郎、其方もまだ歸らずか。
長九　ハイ、阿母様に話しがあれど、内では彼れこれ遠慮ゆゑ
いま　そんなら此うち、ちよつと噂をして置いた
長九　サア、それをとつくり相談して
雁助　此方もとつくり茂右衛門どのに。
角太　雁助、首尾よく。長九郎、これに居やれ。
ト矢張り鳴り物にて、角太郎、雁助を連れ、下座へ入る。
いま　時に長九郎、何かいの、この中話した事の口でもあると云ふやうな。
長九　モシ、お前の頼みゆゑ、やう／＼口開き出して、よい口がござりまする。
いま　そりや、どんな口ぢやぞ。
長九　ちとお園さまと、年は釣合ひますまいが。

いま　なんの、相伴に持たす男、そりや、年寄りでも大事ないが、金出しさうなお人かいの。
長九　金の所はいさくさなし。娘さへ美しけりや、いくらでもと向うの云ひ分。
いま　それがいつち肝心ぢや。只でも遣りたいと思ふ娘なれど、澁皮の剝けた奴、金取らずに遣るは損と思うて、そこでわが身に話したが、その口は出來やうかの。
長九　此方は出來るが、お園さんは。
いま　彼奴にいはずむず云はさぬやう、半七めを追ひ出して
長九　エ、。
いま　それから彼奴を無理矢理に
長九　モシ、半七どのは元、和州五條村の郷士侍ひ、厚倉甚左衛門とか云ふ人の息子。小さいから貰つた養子の事ゆゑ、なりや追ひ出しもならうが、お園さまは家の娘御、
いま　サア、わしも生さぬ仲なれど、此奴も今の金取つて
長九　脇へ嫁入らせ、その跡へ
いま　親仁めをころりと云はせ、いとしい今市善右衛門さんと、誰れ憚らず女夫になつて、茜屋の内を納める料簡。
長九　モシ、それだが、お娘は旦那の實の子、よもや外へは。

いま　それも親仁を口車。
長九　イエ〳〵、それより、アノ、お娘を先へ、どこぞへ
埋めて置いて
いま　イカサマ、それがよいわいの。
長九　マア、一服のみながら、好い智慧を出して見ませう。
ト莨を吸ひつける。此うち始終神樂にて、下座より里遊、伊之、仁三、おいろ、德利を盆の上に、酢蛸を鉢に載せ、持つて來る。
いろ　お前方は今まで山にか。
里遊　オ、サ、揚弓場を張つて居たワ。なんだ、大分洒落れかけるな。
いろ　いま湯歸りに大三サ。
伊之　こいつは一杯づゝ呑みたい。
いろ　オヤ、あやまるの。
長九　さう仰しやるは、里遊さんかえ。
里遊　茜屋の長九か。
長九　モシ、阿母さん、よい事がござります。コレ。
ト囁く。
いま　そりや、よからう。わが身頼んで。
長九　畏まりました。モシ、里遊さん、早速ながらお頼みか。
里遊　なんだ、怨靈の云ひ譯か。
長九　ナニサ、斯うでござります。わしらが內の娘を、ちよつと樣子のある事ゆゑ、いま親御が同道して爰へ來たなら、どうぞお前のお宅へ、ちつとのうち隱して置いてもらひたいのサ。
いろ　ヘエ、そんならお前が久松もどきで、その娘御と色事か。
長九　馬鹿な事な。
里遊　成る程、そりや承知だが、おれがこいつにかゝるやうな。
ト刀を見て思ひ入れ。
いま　イエ〳〵、そりや母親の私しが合點。
里遊　こんな阿母か。おらアさがり取りだと思ふ奴サ。
伊之　里遊さん、阿母の承知の仕事。
仁三　乙な話しでござりますの。
いろ　さうさね。現在のお母さんが合點での事なりや。
長九　ひどたけ位はいつでもよいのサ。ねえ、阿母さん。
いま　殺しさへしてもらはねば、後の減るものではなし。
里遊　そいつは面白狸だわえ。そんなら娘を捲き上げて、

おれが屋敷へ連れて行き、思ふ存分弄んで
伊之　アノ、阿母から迎ひの時は。
いろ　定めし只でもござりますまい。
いま　ハテ、その時はしつかりと、お禮をせいでなりませうか。
長九　ほんに爰等が、里遊さん、損のゆかぬ頼まれもの。
いろ　承知して上げなさい。
里遊　承知でなくつてどうするものだ。刀にかけて頼まれた。
　トこの時、下座にて
その　父さん、靜かにお出でなされまし。
里遊　アレ〳〵、あの聲が慥かに娘。
長九　モシ、來ますぞえ〳〵。
里遊　よし〳〵、
　ト呑み込む思ひ入れ。神樂、かすめたる雙盤になり、下座より、半左衛門先に、お園、彌八、出て來り
半左　オヽ、お今、爰にかいの。
その　ほんに、お前さんを一遍ぐる〳〵
いま　イヤ、其やうに尋ねてもらはずとようござんす。なんのマア、如何にわたしが腹を貸さぬ親ぢやとて、旦那どのゝ側にばつかりくツついて、この母は迷ひ子にならうと、誘拐しに連れられうと、案じもせぬ不孝の娘。わしが又内へ歸つて、どうするか覺えて居や。
　ト此うち長九郎、里遊へ、これだ〳〵と思ひ入れ。
半左　コレサ〳〵、さう思やるも悪い。全體後生嫌ひなわが身ゆゑ、おれが拜んで居るうち、大方奥山の茶屋にであらう。
その　サア、それで最前から方々と、ナウ彌八。
いま　イヤ〳〵、その云ひ譯は聞きませぬ。一體マア、娘は母に附くべきもの。それをば捨てゝ親仁どのばつかり大事に。
彌八　モシ〳〵、そりやお前の廻り氣。お園さまに限つて、どうしてそんな分け隔て。一體またお前さんが
いま　喧ましい。何をわいらが
　ト彌八、しよげる。
長九　コレ〳〵、口出しをしてよけりや、來合した番頭のこの長九郎が口をきくワ。何をうぬが、默つて居ろえ。
彌八　イヤ、默るまい。阿母様の云はつしやる事が無理だに依つて。
長九　無理でも、親御の云ふ事だワ。

彌八　なんぼ親でも無理は立たない。
長九　イヤ、この野郎めが。
彌八　この野郎めが。
ト立ちかゝる。
半左　これはしたり、わいらまで
ト押へる。
いま　サア、娘、内へうせい。
ト引ッ立てる。
その　堪忍して下さんせ。
トこの立廻り、ごつちやになり、あつちこつちするうち、里遊、酒を呑んで居る。彌八、長九郎を打ちのめす。お今、わざとお園を、里遊が方へ突きやる。これにて里遊、持つたる猪口を取落す。割れる。
半左　ヤイ／＼、コリヤ、おれぢやわいやい／＼。
彌八　オヽ、これは旦那様かえ。
いま　娘、來い。
ト手を取つて、引ッ立てる。
里遊　ヤイ／＼、待ちやアがれ。
いま　なんぢや。娘を親が連れて行くのに、脇から待てとは。
里遊　べら坊め、そんな事には構はぬが、なぜ侍ひの杯へ突き當り、衣裳へ酒をぶッかけた。
いま　そりや、アノ、誰れが。
里遊　その娘が。
皆々　ヤア。
トお園、惘りする。
里遊　うぬらが方のいきさつで、持つた猪口へ突き當り、粗相をしても大事ないか。
四人　サ、そりや。
里遊　慮外な女め。そこへ出ろ／＼。
トお園、慄へながら
その　母さん、父さん、どうぞお詫びをして下さんせいなア。
半左　オヽサ、なんにも案じる事はない。アイヤ、申し、お侍ひ様、此方のやつさもつさで、あなた様のお杯へ、娘がツイ不調法。何事も年端も行かぬ事、どうぞ御料簡遊ばしまして。コレ、お今、わが身も共々、お詫びをしやいの。
いま　なんの、わしへ不孝の罰が當つて、お園が粗相したは詫び言。する事は否ぢやわいの。

半左　ニヽ、わが身は。

里遊　喧ましいわえ。うぬらが喧嘩を見ちやア居ない。慮外な娘は屋敷へ引ッ立て、存分にせにやアならぬ。娘を渡せ。

半左　サア、そこをどうぞ。コレ、長九郎、われも好い所へ來て居てくれた。お詫びせい〳〵。

長九　サア、相手がお武家樣ゆゑに、怖くつてどうも物が

半左　ア、埒の明かぬ。彌八、お詫びしてくれ〳〵。

彌八　ハイ〳〵、イヤモシ、あなた樣のお腹立ちは、御尤もにござりまするが、何を申すも途中の事。御勘辨を以て、どうぞ此まゝ、お免しなされて下さりませうならば

里遊　ヤイ〳〵、二才野郎めの詫びで、料簡して濟まさうと思ふかえ。

伊之　此奴は人を、甘口にした奴だ。

仁三　こんな奴に構はずとも、連れてお歸りなされませ。

彌八　モシ、さう云はずと。コレ、茶屋のかみさん。

いろ　サア、お氣の毒ぢやござりやすが、わつちも何とも

里遊　口出しても承知はないぞ。後から屋敷へ詫びに來い。

半左　コレ、モシ、そこを。

その　どうぞお免し。

三人　喧ましい。

ト取りさへるを、突きのけ、お園を引ッ立て、行かうとする。此うち、下座より、筑波屋茂右衛門、出て來り、これを見て、三人を引きのけ、お園を囲ひ

筑茂　マア〳〵、待たつしやりませ。

里遊　ヤア、わりや筑波屋茂右衛門。

ト茂右衛門、長九郎、顔見合せ、思ひ入れ。

筑茂　半左衛門どの、どうした譯でござります。

半左　茂右衛門どの、聞いて下さりませ。このお園めが、ツイ、あなたの猪口へ觸つて、不調法したお腹立ち。お屋敷へ

その　わたしを連れて行くとの事。どうぞあなた、よいやうにお詫びなされて下さりませ。

三人　どうぞ、お頼み申しまする。

筑茂　ハヽヽヽ、なんの別しても。イヤ、里遊さん、聞いた所がさのみでもない事。茂右衛門が貰ひまする。料簡しておやり下さりませ。

里遊　イヤ、ならぬ。武士に慮外を其まゝに捨て置いては、刀の手前

伊之　取分け筑波屋の茂右衛門ぢやア

仁三　おいらがとも〴〵

兩人　料簡ならぬ。

筑茂　わしでは猶々料簡がならぬとあれば、引きませうが、里遊さん、刀の手前と云はつしやるが、大小差して途中の酒盛り。往來の邪魔でも、武士の法が立ちまするか。

里遊　サア、そりやア。

筑茂　屆ける所へ屆けたら、扶持方棒の喰ひ上げに……サア、そこらを云はぬがわしが挨拶。こりや、これぎりに料簡して。

里遊　ムウ、成る程、さう云はれちやア。

ト　お今、長九郎、よせと云ふ思ひ入れ。

料簡したいが罷りならぬ。

筑茂　ならずば此方も、屆ける所へ

里遊　ア、コレ〴〵、料簡するよ〴〵。

伊之　それぢやアお前、頼まれた

里遊　ア、コレサ、何も云ふな。茂右衛門が挨拶ゆゑ、この場を濟まして、先へ廻つて

ト思ひ入れ。

伊之　そんなら歸りを。却つてそれもようごんせう。

仁三　どこぞよい間で、よい肴を見て呑み直しませう。

いろ　酒ならわつちも、店を頼んで

里遊　そんなら來やれ。

ト行かうとする。

筑茂　すりや、得心して、この場の事は。

里遊　ハテ、お主の挨拶ゆゑ、ナア、二人とも。サア、來やれ。

ト雙盤になり、里遊、先に、伊之、仁三、お色、向うへ入る。

半左　ほんにマア、よい所へお出でゆゑ、この場の難儀も遁がれました。

その　有り難う存じまする。

彌八　イエ、モウ、どうせうかと存じましたが、流石筑波屋茂右衛門さま。

いま　折角うまうやりかけたに。

長九　モシ。

ト思ひ入れ。

兩人　お世話さまでござりました。

筑茂　なんの、お禮で痛み入ります。して、半七どのゝ云はるゝには、どうやら病氣。

半左　成る程〴〵、旦那寺の入院に就き、據どころなうそ

れゆゑに。
筑茂　さう云ふ事なら奥方も、まだ奥山にお入りなれば、誰れぞに逢はゞ、なんのかの。
半左　イカサマ、そこもござりますれば
彌八　ちつとも早うお歸りなさるが、よからうやうに存じまする。ナア、阿母樣。
いま　知らぬわいの。
その　でも、とてもの事に半七さまと。
長九　ハテ、のらくら者の半七さまを、待ち合はさずと、ナア、旦那樣。
半左　そんなら近日ゆるりと。長九郎、お園に駕籠借りて、わが身、先へ附いて行け。
長九　アノ、お園さまの駕籠にわしがえ。畏まりました。
その　それでもわたしや。
半左　エヽ、行きやいの。
　ト引き戻す。
彌八　サア、お出でなされませ。
　ト神樂になり、この人數、よろしく向うへ入る。下座より半七、出て
半七　オヽ、これにお出でゞござりますか。

筑茂　半七どのか。
半七　もう奥方もお立ちと見えます。
筑茂　ホウ、それでは參らずば……イヤ、半七どの、御家內にもたつた今お歸り。貴公も今までお出でなれば、お立ちにはもうござらいでもおかや。ちつとも早う追ツ附いて、御一緒がよからう。
半七　左樣ならもう、直ぐに歸りましても苦しうなくば。
筑茂　跡の所は我れらが受け込み。サア、お早う。
半七　そんなら此まゝ、茂右衛門さま。
　ト辭儀をする。
筑茂　終日御苦勞。
　ト思ひ入れ。半七、ツカ〳〵と花道へかゝり、向うを見て
半七　今夜はズツと大洒落に
　ト思ひ入れあつて、茂右衛門と顏見合せ
　お先へ參じます。
　ト寺鐘になり、ツイと向うへ入る。茂右衛門も合點ゆかぬ思ひ入れあつて、下座の方へ行かうとするを、下座より、雁助、ウロ〳〵と來り
雁助　茂右衛門さま、これにお出でなされましたか。

筑茂　笠松の御家来、何をキョロ〱。

雁助　イヤ、身共はあなたを、一遍ぐる〱

筑茂　何ぞ御用で。

雁助　左様でござります。御無心ながら、お貸しなされて下さりませ。

筑茂　これは性急な。定めし角太郎さまの御用で。

雁助　なか〱。主人が武士の立ちませぬ事ゆゑ。

筑茂　これはよく〱。して、金子の事か。

雁助　イヤ〱、お借り申したいと申すは、金子ではござりませぬ、

筑茂　ナニ、この茂右衛門に、金子でなうて、さうして何を。

雁助　脊中をお貸しなされて下さりませ。

筑茂　エヽ。

ト肝を潰す。

雁助　サア、餘儀ない無心も主人の爲、どうぞおぶたれ下されませ。

筑茂　脊中が借りたい、ぶたれてくれ。何の事やら一向

雁助　サア、奥様の御前で、主人角太郎に竹刀打ちで、其許がおぶたれなされて下されば、御主人の武士が立ちます。それゆゑ下郎があなたへ御無心。聞入れあつてお脊中を、お貸しなされて下さりませ。

ト茂右衛門、思案して

筑茂　茂右衛門今まで、いろ〱の人の無心も聞いたれど、脊中を貸せとは今日始めて。何か様子は存ぜねど、角太郎さまの親御、角左衛門さまのお取立てにて、信田のお家の御用聞き、お出入り頭となつたのも、皆あなたの御恩ゆゑ。その御子息の侍ひが、立たぬとあらば脊中は愚か、何なりと仰せ次第。

雁助　すりや、聞き届けて下されますか。脊中をお貸し下されますか。

筑茂　茂右衛門、承知いたしました。

雁助　アノ、お脊中を。エヽ、忝ない。然らば必らず奥様の

筑茂　御前に於て竹刀打ち

雁助　お打たれなされて下さるか。

筑茂　御恩の親御へする奉公。

雁助　もしもその時御違變あつては

筑茂　ハテ、得心した筑波屋茂右衛門。なんの念には及ばぬ事サ。

ト唄になり、茂右衛門、合點のゆかぬ思ひ入れにて、下座へ入る。

雁助　サア、首尾よく茂右衛門どのの、脊中を手もなく借りた樣子を、主人へ。さうだ。

ト急ぎ行かうとする。早めたる雙盤になり、下座より角太郎、急ぎ出て來て、互ひに行き合ひ、鉢合せして

兩人　アイタ……。

ト思ひ入れあつて

角太　雁助か。

雁助　お旦那、あなたに。

角太　もう奧樣も今にお立ち。して、茂右衛門の儀は如何いたした。

雁助　サア、茂右衛門を尋ね、話したところが

角太　承知はせまい。

雁助　仰しやる通り、なか〳〵以て承知のないを、この雁助ふるなの辯。張良、陳平、韓信が、手段の舌を動かして、どうやら斯うやら得心させ、又ぞろ御前で竹刀打ち。勝負は物の見事に、あなたに負ける約束いたし、侍ひならば金打どころ。町人金打いたして只今、別れてあなたへこの事、お知らせ申しに駈け出す所。

角太　すりや、なんと云ふ。茂右衛門が、アノ、身共に、打たれうとな。

雁助　イヤモウ、大きに骨を折りました。

角太　さうあらう〳〵。御前にて一つなりとも打つならば、身共が武士が立つと云ふもの、

雁助　一つどころか、あなたの存分、ぶつて〳〵ぶちのめして

角太　さう叩いても大事ないか。

雁助　サア、それ程に致すのは、並大抵ではございませぬ。

角太　さぞかし〳〵。この大恩は忘れは置かぬ。

雁助　ハテ、忘れはなされぬより、この場でしつかり骨折り代を。

角太　遣らいでどうせう。ソレ。

ト以前の金を渡す。

雁助　こりや、遣はれもせぬ以前のお金。

角太　明日の役に立てるまで、あの奧山の小町櫻、根岸へこつそり

雁助　埋めて置きませうか。モシ、私しへは。

角太　屋敷へ歸つて

雁助　そんなら今にも、茂右衛門を

角太　存分打つて以前の仕返し。
　トこの時、奥にて
呼び　御歸館。
　ト呼ぶ。雁助、思ひ入れ。
角太　行きやれ。
　ト思ひ入れ。三味線入りの神樂になり、雁助、下座へ行かうとして、下の方へ入る。ト下座より、青柳、初野、若草、侍ひ、源之丞、吉平、附き添ひ、後より東金屋茂右衛門付いて、出て來り、角太郎、茂右衛門を見て、思ひ入れ。
青柳　今日は殊にない氣晴らし。また出入りの者が心を盡して種々のもてなし、嬉しいぞや。誰れ〳〵にも、其方がよきに。
東茂　恐れ入りましてござりまする。
青柳　春の日足もたけたれば、イザ、下向さん。供觸れしや。
源之　畏まつてござりまする。
角太　アイヤ〳〵、最前の竹刀打ち、折惡しく積氣にて思はぬ不覺。御前の手前、何卒これにて茂右衛門と、いま一勝負御覽の儀を。

　ト茂右衛門、思ひ入れ。
青柳　すりや、最前のを恥辱と思うて。
源之　いま一勝負とお望みは、餘儀なき事と存ずれど
青柳　又もや過ちある時は、其方ばかりか主人の恥。こりや、立合はぬが
角太　イヤ〳〵、斯う健やかに相成つては、鬼神にも後れは致さぬ。是非とも勝負をお願ひ申す。
青柳　そんならどうでも
角太　サ、茂右衛門、今云ふ通り最前は、積ゆゑ身共が思はぬ負け。この度が互ひに誠の勝負。サヽ、表へ出やれ出やれ。
源之　茂右衛門、其許、今一度、笠松氏と勝負するか。
東茂　御前樣の思し召しも。もう、私しは
角太　そりやア卑怯だ。アノ、雁助に……イヤサ、願掛けして今一度、身共に勝てばそれこそ手柄、ナ。サア、キリキリ立合へ〳〵。
　ト角太郎、茂右衛門へいろ〳〵思ひ入れ。茂右衛門、何心なき思ひ入れにて
東茂　それ程までに仰しやる事なら、何遍なりともお相手に。

角太　忝ない……イヤ、屑背脊骨の用心して、キリ〳〵爰へ

ト力み返つて云ふ。青柳御前、思ひ入れ。

青柳　辭退の茂右衛門、承知の上は、角太郎が望みに任せ、最前の竹刀をそれへ。

腰元　畏まりました。

ト白囃子になり、腰元、以前の竹刀を眞中へ直す。角太郎、股立ちを取り、下げ緒を襷に掛け、凛々しく出る。茂右衛門も出て、互ひに向き合ふ。

角太　茂右衛門、ナ、ソレ、最前の……その返報を今爰で、よいか〳〵。

ト思ひ入れ。茂右衛門、合點のゆかぬ思ひ入れ。

東茂　此方は最早よろしう

ト側へ寄る。

角太　よいなら竹刀を、イザ。

東茂　イザ。

角太　イザ。

ト此うち白囃子にて、兩人、竹刀を一度に取り上げ、しやんと見得。これより角太郎、合點がよいかと、小さい聲にて云ひながら、立廻り。茂右衛門は不思議なる思ひ入れにて、立廻りに、何の手もなく、角太郎が足を搔いて、のめらせ、したゝかに打ち据ゑる。ト角太郎、グッと起き上がらうとするを、茂右衛門、竹刀にて押へる。

女三　ヤンヤ〳〵。

東茂　武術自慢の笠松さま、重ねてから自慢なされぬやう、とくと土性骨に。慮外は御免下さりませ。

ト平伏する。角太郎、グッタリとなる。

青柳　最前と云ひ今と云ひ、町家に惜しき茂右衛門が手の内。武士にも取立てたく思へども、何暗からぬ東金屋。褒美は追つて。源之丞、御寺の布施は別當方へ。

源之　いづれに致せ御下向まで、別當方へこの金子。吉平、白臺。

ト目錄臺を持つて來り、源之丞、懷中より財布を出し、載せようとして、石ゆゑ、悔りして

源之　ヤヽ、こりや、いつの間にやら布施の金子が

ト皆々思ひ入れ。茂右衛門も思ひ入れ。角太郎、これにて

角太　ヤア、お上の金を石にした、源之丞は大盜人。

源之　ナニ、某を盜人とは。

角太　盗人であるまいか。自分より誰れあつて、手も付けないその金を、石と品玉使つたは、有松、御身であらうがな。
源之　イヤ、全く以て。
角太　そんならどうして、その金が。
源之　サ、それは。
両人　サア〳〵〳〵。
角太　大盗人であるまいか。
　ト思ひ入れ。源之丞、当惑する。
吉平　アイヤ〳〵、角太郎さま、そりや思し召しが違ひます。
角太　どうしたと。
吉平　人の預かる金子なら、もし、出来心で摺替へる事もあらう。現在の我が預かりの金子を摺替へて、わざと身の罪を拵らへる、たわけもござりますまい。
角太　サ、そりやア。
吉平　但し主人が業と云ふ、證據がござりまするか。
角太　サア、さうぢやなけれど奉納の、お金を無くした源之丞、差詰め腹でも切らずばなるまい。
源之　サア。
角太　それともなんぞ、云ひ譯がござるか。
源之　ムウ。
　ト行き詰まる。
角太　云ひ譯なくば、潔く。
青柳　イ、ヤ、切腹いたすに及ばぬ。金子の科で彼れへは暇。
　ト思ひ入れ。
やらねば済まぬ金の科人。
ト茂右衛門も思ひ入れ。
角太　こりや、斯うなくては叶ふまい。命代りに永のお暇。
ドレ、大小を
ト立たうとする。
青柳　角太郎、其方も暇を遣はすぞよ。
角太　エ、そりや又、何ゆゑ。
青柳　何ゆゑとは、一度ならず二度までも、町人風情の茂右衛門に、後れを取つて殿様の、お名まで穢す不忠の其方。暇を遣はす自らに、何ゆゑとは慮外者めが。
角太　すりや、茂右衛門に。
ト茂右衛門が方を見やり
ハア、。

青柳　ト泣き落す。
身の災難と云ひながら、源之丞が武士の越度に、暇を取らすも依怙ならぬ、家の掟を立てる自ら。必らず恨みと思やんなや。
源之　犯す罪ゆゑ、切腹にも及ぶべきを、お慈悲に下さるお暇を、何しにお恨み申しませう。吉平、其方は屋敷へ歸り、此あらましをとつくりと
吉平　申し上げなばいづれも樣、さぞ驚きに如何ばかり。
隨分ともに。とは云へ、これまで辛き目に
東茂　水の流れと人の身の上、さぞかし如何と思し召さうが、お案じなきやう、吉平どの。
吉平　偏へに旦那の
ト茂右衛門、青柳を見て
東茂　コレ。
ト遠慮の思ひ入れ。時の鐘、合ひ方。
初野　御前樣へ申し上げます。山寺ならで春の日も
若草　鐘に散り行き、最早入相。もう、御下向が
女皆　よろしからうと存じまする。
青柳　イカサマ、よしなき角太郎が仕合ひの願ひに、餘程の隙入り。急ぎ屋敷へ

源之　御前樣。
ト思ひ入れ。青柳御前、源之丞を見て
青柳　時節を待つて
東茂　御歸參を
青柳　コリヤ。茂右衛門、大儀。
女皆　お立ち。
ト向う揚げ幕の内にて
大勢　ハア、。
ト三重、時の鐘にて、青柳御前、先に、皆々、吉平、源之丞へ思ひ入れあつて、附き添ひ、向うへ入る。角太郎は矢張り俯向き居る。茂右衛門、源之丞が側へ寄り
東茂　源之丞さま、何もお案じなされる事はござりませぬ。親旦那の兵庫さまには、たんと御恩にあづかりましたこの東金屋の茂右衛門、御恩送りにあなたの事、悪いやうには致しますまい。
源之　頼らん事も内縁の、者へは却つて面伏せ。そんならよしなに身の上を。
ト立ち上がる。
東茂　お氣遣ひなされますな。道々何かのお話しも。マア

お出でなされませ。

ト太鼓入りの雙盤になり、茂右衛門、附き添ひ、行かうとする。角太郎、思ひ入れあつて、ツカ〳〵と茂右衛門に近寄り

角太　待て、茂右衛門。

ト云ひながら、拔打ちに切りかける。茂右衛門、心得ちよつと立廻りに、角太郎を投げのける。角太郎、またた起き上がつて、立ちかゝる所へ、下座より、筑波屋茂右衛門、ツカ〳〵と出て、角太郎を留める。

筑茂　角太郎さま。何事でござります。

角太　ヤア、御前で身共に存分にならうと約束して、又ぞろ竹刀で某を

筑茂　ヤ。

ト思ひ入れ。

東茂　ナニ、こなたの存分にならうと、固く約束したとは。

角太　オ、、僞はり者の、あの茂右衛門。

トまた切つて行くを、筑波屋、留め

筑茂　モシ、その茂右衛門は、私しでござりまする。

角太　ヤ、すりや、打たれやうと雁助に

筑茂　約束したは、筑波屋茂右衛門。

東茂　ハア、道理で仕合ひの、その折に

源之　何か合圖を致したも

東茂　解らぬ筈だ。

角太　さうとは知らず以前の恥、雪がう爲に二度目の仕合ひ。無理に頼んで負けたる越度で

筑茂　そんなら、あなたは

角太　屋敷はお暇。

筑茂　南無三方、それゆゑ浪人なされては、この茂右衛門が其まゝに、見ては居られぬ御恩の御方。

東茂　此方も御恩のあなたに向ひ、餘り武術の廣言を、聞いて居られず一度二度。

源之　二度目の仕合ひを間違ひとも、知らぬ事から、こりやどうやら。

筑茂　東ヶ屋茂右衛門。

東茂　筑波屋茂右衛門。

筑茂　其方とおれとが

東茂　味な理窟で

ト兩人、思ひ入れ。ツカ〳〵と、双方、眞中へ來り

兩人　ムウ。

ト拔きかける。ジヤンと寺鐘鳴る。兩人、思ひ入れ。

納まる。

東茂　まんざら譯も知らないやう

筑茂　佛の庭で喧嘩も不遠慮。

東茂　互ひに大事の

筑茂　お方もあれば

兩人　重ねて、キッと。

ト羽織を肩へ、ひらりと掛ける。チョンと木の頭を入れ

サア、お出でなさりませ。

ト源之丞、角太郎へ思ひ入れ。源之丞、落ち着き、角太郎へ成る程と云ふ思ひ入れ。各々よろしく、　拍子　幕

幕の内、時の鐘のツナギにて、直ぐに引返し。

本舞臺、三間の間、下の方より上へかけて、一面の橋、附け際、石垣にて、舞臺先、波板、日覆より柳の吊り枝。すべて兩國元柳橋の體。爰に猪牙船、一艘、もやひあり、幕の内より五布蒲團を柏餅にして、寢て居る男あり。時の鐘、割り竹、拍子木の音にて、幕明く。

ト橋の上と向うより、按摩、夜蕎麥賣り、鮨賣りなど出て來り、行き違ひ、捨ぜりふにて、入る。ト向うバタバタにて、伊之、仁三、四つ手駕籠の垂れを、荒繩にて結はへ、擔ぎ出て來り、跡より、里遊、附いて出て

里遊　コレサ〳〵、何もさう急ぐ事はない。駕籠に附いた長九郎が、合點の捲き上げ仕事、靜かにやれ〳〵。

伊之　里遊さん、そりやよいが、駕籠の中でヂタバタして

仁三　騷がれるものぢやござりませぬ。手足を一つに縛しませう。

里遊　それよりは屋敷まで、連れて行く間が待ち遠しい。

伊之　おいらも後で廻りますぞえ。

仁三　そんなら爰へ、引出すべい。

ト繩を解く。内より、お園、轉び出て、其まゝ逃げようとする。三人、捕へる。お園、アレエ〳〵と、騷ぐ。此うち始終、時の鐘、向うより若い者、弓張り提灯を後よりお通、お繁、出て來る。

しげ　お前、大きに御苦勞だの。

若者　ハイ〳〵。

つう　お師匠さんはお泊りだらうね。

若者 ハイ〳〵。

しげ さうサ。

ト此せりふを云ひながら、何心なく舞臺へ來かゝる。舞臺は、お園、三人、いろ〳〵あつて、逃げるを、捕へる立廻り。此うちへ、三人、來かゝる。こちらは捕へようとして、提灯へ突き當たり、これにて提灯、打ち落とす。暗闇になる。お通、お絮、驚ろく。若い者は逃げて入る。里遊、お絮をお園と思ひ、捕へる。お園はこの間に逃がれ、伊之、仁三、お通を捕へて、引ッ擔ぐ。アレエと踠くはずみに、過つて川へポンと落ちる。お園は向ッへ逃げて入る。里遊、伊之、仁三はお絮を引ッ擔いで、下座へ入る。この途端、一緒の仕組み。お通は、川と思ひ、船の中へ落ちる。この時、寢て居る半七起き上がり、お通を捕へる。お通、アレエと逃げようとする。半七、思ひ入れあつて、其まゝ押し伏せる。

よろしく、拍子 幕

二幕目 鶴ヶ岡の場

役名｜東金茂右衞門。筑波茂右衞門。美濃屋庄左衞門。今市屋善右衞門。横井丹藏。下人、彌八。嫁、おその。番頭、長九郎。美濃屋小勝。百姓、次郎作。丸鐵坊。茜屋半七。

本舞臺、向う淺黄幕、眞中に玉垣、石燈籠を取りつけ、葭簾張りの店。上手、筋違ひに、芝居の表を見せ、三蓋松の幕を打ち、奉納鎌倉御免日本女舞元祖臺頭と大文字に書き、美濃屋小勝、同千勝、同萬作と書いたる額を上げ、木戸番、札を賣つて居る。幕の内より、右茶店に、三平、下男にて、茶を酌んでゐる。仕出し大勢、休み居る。木戸際にも、仕出し札を買うて居る。正面に「來る正月五日より、遷宮當社別當」と書きたる立て札、その外に「開帳來る正月七日より、本尊正觀音菩薩并多寶木三拾三間堂知事」と書いたる札を二本、並べある。此うちに、晝鳶丸鐵坊、乞食坊主にて、仕出しの巾着を切つて廻る。神樂の中へ、芝居のシヤギリにて、幕明く。

木戸　サア〳〵、今が始まり〳〵、三番叟ぢや〳〵。

ト皆々、捨ぜりふ。向うより今市屋善右衛門、町人の形。長九郎、手代にて、連れ立って出で

善右　長九郎、斯う又出かけた所は、春めいて、どうも云へぬ。

長九　出るもよいが、女へ乗りかゝつたところは、又どうも云へませぬ。

ト捨ぜりふにて、本舞臺へ來り

善右　一服いたさう。

長九　ようございませう。

ト床几へかける。三平、茶を酌んで來る。

三平　今市屋の旦那、茜屋の番頭さん、お參りなされました。

善右　お遷宮と開帳とで、この邊は豪勢賑はふの。

三平　左樣でございます。この間から奉納の臺頭が始まりまして、人の山でございます。

長九　イカサマ、仲町の三勝が出ると專らの噂ぢやが、出るかの。

三平　神主樣から無理にお頼みで、切りに一場出てございます。

善右　そりや大入りする筈ぢや。全體あの三勝は、日本に聞えた舞の名人、鎌倉の御前へ出て、お目にかゝつた御褒美に、あの通りの額を許され、この糸幕まで下されたとの事。

長九　今では仲町で女藝者、三味線彈いても、舞はもう見る事はならぬ。その癖、男嫌ひの蓮葉者。

善右　おれが友達の筑波屋茂右衛門が、首ツきり惚れて口説いても、いつかな側へも寄せつけぬげな。

長九　茶を一つ下され。

三平　ハイ〳〵。

ト向うよりお園、振り袖娘にて、人形を持ち、出て來る。後より彌八、下人の形にて、附いて來る。

彌八　モシ〳〵、もそつと靜かにござりませ。早いお人ぢや。

ト云ひながら、本舞臺へ來る。

長九　べら坊のお孃樣、彌八が供して相應ぢや。

彌八　番頭さん、イヤモ、誠に困り者ぢや。お孃樣、爰でお休みなされませ。

その　休むのかや。

ト床几へ寢て

蒲團と枕をおくれ。
彌八　お寐るのぢやない、腰を掛けて休むのでござります。
その　オッと、よし〳〵。
善右　馬鹿にもせよ時分の娘、彌八、うぬ、ばつちり云はしやせぬか。
彌八　その氣遣ひはたゞされますな。私しはござりませぬ。
善右　何がない。
彌八　大事の物が。
善右　ヤア。
彌八　去年の秋、疳瘡を煩ひ、膏藥と共に相果てまして、死骸は遠くへうッちやりました。
その　彌八や、其方は何がないぞ。
彌八　男の印がござりませぬ。
その　印とは、どんな印ぢや。
ト神樂、始終、かすめて居る。上手より、横井丹藏、しみたれて居る浪人にて、古編笠をかむり、謠を謠ひながら出る。
木戸　サア、三番叟々々々。
その　こちや芝居を見ようか。
トついて立つて、木戸へ入る。

彌八　アヽ。
ト云ひ〳〵、錢を拂ひ、附いて入る。丹藏、こちらへ來て
丹藏　一錢の御合力
ト長九郎、笠を覗き
長九　天竺ぢやないか。
ト丹藏、笠を取る。
丹藏　長九郎どの。
善右　丹藏か。
丹藏　善右衛門さま。
長九　コレ、御亭主、おれはちと、内證の
三平　御相談なら、その間に水汲んで參ります。店をお頼み申します。
ト手桶を提げ、下座へ入る。
丹藏　御兩所、拙者を呼びに遣はされた、して、御用の趣きは。
善右　イヤ、別の事ぢやないが、貴樣も知つて居る通り、この善右衛門は、亡くなられた半左衛門の實の甥。すりや、茜屋の後式は、おれが取るべきところを、今市屋へ、養子にやつて、大和三界から出てうせた、半七を婿にし

た、伯父貴の心意氣が濟まぬでないか。

丹藏　身共が姉のお今めは、下女奉公から引上げられ、茜屋の後妻。娘のお園とは生さぬ仲で赤の他人。半左衛門どのゝ居らるゝうちから、姉とこなたが狂うて居れば、おれはまア、男太夫。

善右　それ云はれちやアあやまる。後月、半左衛門どのが亡くなられたが運の向き口。

長九　この番頭が一味して、養子婿の半七を叩き出す積りなれど、お屋敷の御用を聞く、名前人の半七なれば、これぞと云ふ科もなし。

善右　殿樣の判の据つた、茜染めの御用の株札、あれを此方へ捲き上げて、科を拵らへようと思つたが、おいらが企みを氣取つた半七め、夜も晝も守と一緒に持つて居るゆゑ、引上げるやうがない。

丹藏　似せ札位は身共もやろが、そいつは餘ッぽどむづかしい。

ト此うち、丸鐵坊、後へ出かけ、聞いて居る。

丸鐵　その株札とやら、おれが盜んでやりませう。

ト前へ出る。

丹藏　わりや西方寺の弟子坊主。ても、むごい態ぢやなア。

丸鐵　これにはだん／＼。それはまゝよ。てまへ達の手に合はぬ仕事、おれが働らいてやらう。

善右　見事われが株札を。

丸鐵　人の懐の物を引いて取るが、この節の愚僧が稼業。

この代り首尾よくやつたら。

善右　働らき代は小判でやるワ。

丸鐵　忝ない。大事の仕事、こんな形では。

善右　ソレ、身の廻りの拵らへ料ぢや。

ト小判一兩、やる。

丸鐵　先づは着服。

ト懐へ入れ

云はゞ命がけの働らきを、一兩では甚だ少分。

長九　待て／＼。

ト矢立を出し、サラ／＼と書く。

拾兩の預かり一札、金は株札と引替へぢや。

丸鐵　忝ない。これでグッと力が附いた。

丹藏　この仕事さへ、首尾ようゆけば

善右　茜屋の身上は丸吞み。

長九　その時は、この番頭も

善右　今市屋の跡をやるワ。

丹藏　我れらは貴公の男太夫。
善右　これは御免ぢや。
丹藏　何かは後まで
三人　先づそれまでは
善右　祕すべし〳〵。
　　　顏見合す。
三人　ハヽヽヽヽハヽ。
善右　シイ。
　　　トちよん〳〵にて道具廻る。

本舞臺、三間、見附け、板目、松の模樣、東西に大盡柱、破風に紫に三蓋松の紋付きの幕を打ちたるかゝり、袖より、二三の松、すべて能舞臺の飾りつけ。眞中に、小勝、天冠、舞衣、太刀を付け、天女舞ひの形にて、毛氈の上に坐り居る。美濃屋庄左衞門、着付け、麻上下にて、附き添ひ、千勝、於勝、勝野、女の子の拵らへ、三蓋松の紋附きの、桃色の素袍の上ばかり、小づめ烏帽子にて、笛、太鼓、大胴、小鼓、白拍子の役にて、並び、道具、納まる。
　　　ト庄左衞門、向うへ出て

庄左　東西、高うはござりますれど、恐れながらこれより口上を以て申しあげまする。先づ以て當鶴ヶ岡御造營に就き、臺頭女舞ひ、興行仕りまするところに、誠に初めて古今稀れなる大入り大繁昌、總元締め美濃屋平左衞門儀は申すに及ばず、總一座如何ばかりか、斯樣な仕合はせはござりませぬ。別してお斷わり申し上げまするは、右臺頭元祖、各々樣御存じの美濃屋三勝儀は、さる仔細ござりまして、雪の下若町野花屋勝次郎抱へと相成り、女藝者を相勤め居りまする。然るにこの度當八幡宮奉納につき、神主樣より達つてのお頼み、右お目通りに扣へましたるは、美濃屋小勝でござりまする。
　　　ト小勝、辭儀をする。
この者は未だ若年にはござりますれども、臺頭座元相讓りまする御禮かた〴〵、大切に於て、三勝、淨瑠璃、御前操の鑑と申す所作事を、相勤めまするやうにござりまする。不調法なる幼少の小勝にござりますれば、三勝同然に思し召され、永く臺頭座元相勤めまするやうに、恐れながら御憐愍の程を、ずいと希ひ願ひ奉りまする。いよ〳〵美濃屋小勝、天女舞ひの始まり、その爲口上左樣に。



初演の繪番附

ト これより囃子になり、幕引く。伊兵衛、手紙を持つて來て、庄左衛門に囁く。

なんぢや、樂屋から。

ト何やら、又囁く。

よし〳〵。

ト花道へ行て、あたりを見廻し

御見物樣のうちに、茂右衛門さまと申すお方がござりますかな。

ト西の棧敷より

筑茂　茂右衛門と云ふはおれぢやが、なんぞ用か。

ト東の棧敷より

東茂　頭取々々、茂右衛門はおれぢやが、急用でも云つて來たか。

庄左　イヤ、何か急なお手紙が、參りました。

筑茂　コレ〳〵、筑波屋茂右衛門としてはないか。

庄左　イエ、只茂右衛門さまとばかりにござります。

筑茂　それではとんと解らぬが。

庄左　こりや樂屋からござりまする。

東茂　ムウ、そんならおれが覺えの手紙。

庄左　そんならそこへ投げませうか。

東茂　とんだ事を。いま樂屋へ廻る間、間違はぬやうに頼む。

庄左　畏まりました。

東茂　御免なさい〳〵。

ト云ひ〳〵、棧敷の後へ入る。筑波屋、こなしあつて

筑茂　樂屋から。もし三勝が……こりや、斯うしては居られぬ。

ト同じく棧敷の後へ入る。庄左衛門は本舞臺へ來りて右の手紙を伊兵衛へ渡す。伊兵衛、持つて引ッ込む。

ト鳴り物、三味線入りになり、小勝、天女舞ひの一くさりあつて、よき程に里遊、海鼠襟の合羽、頰冠りして、舞臺より出る。

庄左　エヽ、邪魔になるわい。

ト引きのける。里遊、花道を傳ひ、土間へ入る。又一くさりあつて、土間より半七、町人の拵らへ、着附け羽織頭巾にて、丸鐵坊が手を捩ぢ上げ、花道へ上がる。

丸鐵　アイタヽヽ、コリヤ、どうする〳〵。

半七　うぬ、太い奴だ。いま取つたおれが紙入れを返しやがれ。

庄左　東西々々。

ト留め場のうち、顔の知れた者二三人、バタ〳〵と駈けて來て

留場　なんでござります〳〵。

半七　この泥坊めが、おれが紙入れをスリ居つた。

ト云ふうち、丸鐵坊、見物へ見せて、淺黄縮緬の袱紗包みを摺り替へる。と又、庄左衞門、花道へ來て

庄左　茜屋の半七さまぢやござりませぬか。

半七　頭取、舞臺の邪魔、料簡さつしやれ〳〵。

留場　出しやがらざア、ぶち毆れ〳〵。

ト銘々、ぶちにかゝる。

庄左　ア、コレ〳〵、疵が着いちや大仰になる。うぬ、太い奴だなア。足元の明るいうちに、キリ〳〵お返し申せ。

丸鐵　おらア知らないワ。

庄左　エ、、これ程持つて居やアがるに、死太い奴だ。

ト懐へ手を突ッ込み、紙入れを出し

これでござりませう。

ト渡す。

半七　アイ〳〵、これでござります。

ト立合ひあり

庄左　しかも結構なお紙入れさうな。

半七　アイ、しかもこれは藤種緞子と云うて、今の世には根ッから無い物でござる。

庄左　お求めなされましたか。

半七　イヤ、こりや實父の筐でござる。

庄左　御大切になされませ。

留場　其奴、引摺り出せ〳〵。

半七　イヤ〳〵、これさへ取返せば、打ち叩きをするでもない。頭取、表へ出しちや騒々しい。樂屋口から突き出して下さい。

庄左　畏まりました。サア、うしやアがれ。

ト首筋を持つて、下座へ連れて入る。

半七　皆世話でござつた。一杯呑んで下され。

ト紙入れより、小粒を出し、紙に捻ぢて、遣る。

留場　これは有り難うござります。

半七　おりやもう出ませう。

留場　ハテ、もそつと御覽じませ。

半七　イヤ、又近いうちに來ませう。

ト半七、花道へ入る。ト西の土間より、腕の喜三郎、派手なる旅の形、一本差しにて上がり

喜三　藤種緞子の紙入れを、親の筐とあるからは、慥かに
　トこちらへ來て
　今の客は出られたか。
留場　ハイ、出なされました。
喜三　ちよつと逢つて、聽きたいものだが。
　ト云ひ〳〵、揚げ幕へ入る。これより所作のチラシにかゝる。

　チヨン〳〵にて、道具廻る。ト元の表へ戻る。矢張り所作のチラシにて、道具納まる。
　ト向うより次郎作、百姓の形、藁苞に牛蒡、梅の花を入れ、一荷にして
次郎　牛蒡や〳〵、梅の花や〳〵、手作りの牛蒡〳〵。
　ト賣り〳〵本舞臺へ來て、荷を下ろす。ト木戸より、お園、出て來て
その　彌八はどこへ行きやつた。彌八や〳〵。
　ト云ひ〳〵出て、次郎作を見て
　コレ、お前、彌八を知らしやんせぬか。
次郎　この娘は、つがもない問ひやう。ついに見た事もないおらに、てまへ、マア、どこから來たのだ。
その　わしかえ、わしや内。
次郎　サ、そのてまへの内はどこぢや。
その　あつちの方。
　ト向うを指差しする。
次郎　ハア、この娘は、餘ツぽど馬鹿ぢやわい。
その　アイ、わたしや餘ツぽど馬鹿ぢやさうな。
次郎　さう見える〳〵。
その　嬉しいなア。
次郎　その形、美しい器量ぢやが、アヽ、いぢらしいものぢや。
その　よう回向して下さんせ。
次郎　南無阿彌陀佛々々々々々々。
　トお園、梅の花を見て
その　オヽ、爰によい花があるわいなア。
　ト引ツ掴む。次郎作、恟りして
次郎　アヽ、コレ〳〵、この梅は商ひ物ぢや。さう手荒うしては臺無しになるわい。
その　イエ〳〵、こりや、わしのぢや〳〵。
次郎　これは又情ない娘ぢや。返してくれ〳〵。
その　否ぢや〳〵。

ト持つてせり合ふ。此うち、半七、善右衛門、長九郎
彌八、木戸より出て

半七　其方も氣を附けて居たがよいわい。

彌八　舞ひに見惚れて居るうちに、つい見遁れましてござ
ります。

ト善右衛門、お園を見て

善右　半七、お園は爰に居るぞや。

その　こちや、こんな美しい花があるぞえ。

次郎　コレ〳〵、半七さま、こなたの身内か。この娘が、
おれが商ひ物を

半七　ハテ、えいわいの。まんざら知らぬ顔でもなし、代
物を拂ひさへすりや、云ひ分はあるまいが。

次郎　イヤ、云ひ分がある。おらは百姓ぢやから偏屈な。
値をせぬ先に代物を取られちやア、忌々しい。堪えられ
ぬ。

善右　エヽ、この男は詰まらぬ理窟を云ふ。相手が氣狂ひ
で、知らぬと云うたらどうする。

ト次郎作、腕捲くりして

次郎　知らぬと云うて濟むものか。

善右　エヽ、忌々しい唐變木め。うぬ。

ト天秤棒を振り上げる。

次郎　おらを、それで打つか。

ト摑みかゝる。

半七　これはしたり、人立ちがや、マア、鎭まつたり〳〵。
ト無理に押し退け、善右衛門が持つたる天秤棒を引ツ
たくる。このはずみに次郎作の脾腹へ當り、ウンと悶
絶する。
なんとした〳〵。
トいろ〳〵見て
ヤ、こりや、怪我のはずみに思はぬ卽死。

善右　ドレ。
トいろ〳〵見て
南無三、こいつは。

半七　ホイ。
ト當惑する。

その　こちらは知らん〳〵。

善右　彌八、お園を連れて先へ行け。

彌八　ハイ〳〵、サア、お孃様。

その　オヽ、去なう〳〵。
トつか〳〵と花道へ行き、立ちとまり

ヒウドロ〳〵。

彌八 エヽ、悧りしましたいわの。

その アレ。

ト次郎作が死骸を教へ

オヽ、怖。

トついと向うへ入る。彌八、捨ぜりふ云ひ云ひ、附いて入る。善右衛門、こなしあつて

善右 コリヤ、半七、どうしようと思ふ。

半七 怪我とは云へど人の命、所詮下手人は遁がれはない。

善右 幸ひの薄暗がり、裏門の川へどんぶり。跡は由井ケ濱へ。てまへは爰を

半七 よろしく頼む。

トついと入る。暮れ六ツの鐘鳴る。木蔭より、丸鐵坊、長九郎、丹藏、出て

丹藏 善右衛門どん。

善右 待てば甘露の日和あり。

長九 この通り訴人すれば、半七めは下手人。

三人 うまい〳〵。

ト次郎作、ウンと起き返る。善右衛門、悧りして

善右 ヤア、南無三、生き返つた。

次郎 ヤア〳〵、とんだ所で持病が起り、恐ろしい目に遭うたぞ。

ト次郎作、あたりを見て

善右 次郎作、てまへ、今、死んだでないか。

次郎 何を云はつしやるぞいの。おらアけんねんと云ふ持病、腹立てるといつでも起きる。

丹藏 さうして、どこも惡くはないか。

次郎 氣が附きさへすりやア、常の通り。

善右 そいつは詰まらぬわえ。

次郎 もう日が暮れるさうな。今夜は道で泊らざアなるまい。

ト引ツ擔ぎ

そろ〳〵と行きかけませう。

ト行かうとする。善右衛門、思案して

善右 コレ〳〵、待ちやれ。

次郎 なんぞ用かな。

善右 ちつと貴樣に無心がある。

次郎 ハア、見る影もない百姓に。

善右 こなたの着て居る身の廻り、なんと、おれに賣つてくれぬか。

次郎　値がよか賣るまいものでもないが、買うてこなた、何にする。
善右　一旦死んで生き返つた、こなたの運にあやかりたい。
次郎　してマア、いくらに買ふのぢや。
善右　お坊、先刻の金持つて居るか。
丸鐵　三分爰に持つて居る。
善右　ちよつと貸せ。
ト取つて
持ち合はせた金三分
次郎　三分、高い物ぢや。賣りませい。
ト畚を下ろして、帶を解かうとして
待つたり、丸裸では歩かれぬ。
長九　おれがこの羽織を遣るワ。
次郎　これは只か。
長九　われが運にあやかるやうに、供養する心ぢや。
次郎　そりや忝ない。
ト帶を解き、丸裸になり、羽織を取つて
長九　ソレ、金。
次郎　忝なうござります。
ト取つて褌へ括り附け

そんなら、おれは行きますぞや。
善右　ア、コレ〳〵、必らずおいらが方へ、滅多に來まいぞ。
次郎　行かいでも濟む所ぢや。
善右　早う失なしやれ。
次郎　ハア、くつさめ。風邪引いたさうな。
ト鳴り物になりて、次郎作、向うへ入る。
長九　善右衞門さん、この古着を買うた心は。
善右　コリヤ。
ト囁く。此うち葭簾より、腕の喜三郎出て、後に立ち聞きして居る。段々次へ囁く。
三人　面白い。
善右　さうして後は
ト丹藏に囁く。
丹藏　おれが家老の文左衞門どのになつて
長九　丸鐵、貴樣は
ト囁く。
丹藏　代官ぢやと騙りを云ふ。
長九　こちら二人は不意を打つて
善右　半七めを片付ける。

長九　先へ行て待つて居ます。
丹藏　手番ひはいつもの宿で。
善右　早う。
長九　合點だ。
ト長九郎は向うへ走り入る。
善右　わいら二人は。
兩人　後のからくり。
善右　來い。
ト三人、上手へ入る。喜三郎、向うへ出て
喜三　おれが家老の文左衛門どの、丸鐵は代官の騙り、半七を片付けるは、いつもの宿屋で……惡い奴だなア。
トちよん〳〵にて、道具廻る。
本舞臺、一面の板目の書割り、眞中に樂屋口と云ふ貼り札、板松の裏、石燈籠、へげたのを張り、手水鉢など有り合はせに立てかけたる見得、舞臺前、小川の流れ。遠責めの太鼓にて、道具、とまる。
ト善右衛門、丹藏、出て、丹藏、次郎作が着たる着物を着換へ、頬冠りしてのめつて居る。善右衛門、丹藏が着物一つにして、川へ打込み、いろ〳〵ある所へ、
半七、上手より出て
半七　善右衛門、どうしてくれた。
善右　此まゝ爰へ水葬禮。お主も足を持つてくれ。
ト兩人して丹藏を擔ひ、下家へ打込む。
斯うしてしまへば、跡白浪。
半七　人の見ぬうち
善右　行きやれ。
ト始終遠責めにて、兩人、ツイと向うへ入る。暫らくあつて、丹藏、水だらけにて、這ひ上がり、丸鐵坊、出て
丸鐵　丹藏どのか。
丹藏　この態を見てくれ。
丸鐵　ハテ、何するも皆金儲け。
丹藏　寒うて堪らぬ。
丸鐵　こなたはコレ。
ト囁く。
丹藏　合點ぢや。
ト走り入る。
丸鐵　先づ株札は金と引替へよ。時に、今ちやつと云はせて來た、この革の胴亂、長九郎が證文は、先づこの中へ

納めて置いて
ト革の立派なる三度提げへ、最前の手形を入れる。ト
喜三郎、物を尋ねる心にて、出て

喜三　どうも落さう筈はないが。
ト丸鐵坊、これを知らず
丸鐵　マア、これで十兩よ。明日の働らき代が、廉うつもつても五兩。
ト捨ぜりふ云ふうち、喜三郎、丸鐵坊が持つて居る物を見付け、後より引ッたくる。
ヤイ〳〵、どうしやアがるのだえ。
喜三　こりやおれが胴亂だ。
丸鐵　ヤア。
喜三　大泥坊めが。
内で　重ねて再會、さらば。
トどんちやん、打ち上げる。
丸鐵　それを。
トかゝるを、引き廻し
内で　エイ〳〵、オヽ。
ト喜三郎、丸鐵坊を見事に投げる。チョンと木の頭。
喜三　幕だな。

トよろしく拍子　幕
道具立ての出來るまで、打出しのシャギリにてツナギ。

三幕目　野花屋の場

役名　東金茂右衛門。筑波茂右衛門。野花屋勝次郎。同女房、お縫。同隱居、勘齋。有松源之丞同奴、吉平。笠松角太郎。同奴、雁平。今市屋善右衛門。丸鐵坊。番頭、長九郎。娘、お通。横井丹藏。髮結ひ、お町。太鼓持ち、傳吉。百姓、次郎助。野花屋三勝。茜屋半七。

本舞臺、三間の間、向う塗り骨障子、上手中二階、いつもの所に門口、野花屋と云ふ掛け行燈。幕の内より、勘齋、隱居坊主の拵らへ、焙烙頭巾、立派なるはぎ〳〵の羽織にて、銀の太き煙管、振り上げて居る。お町、女髮結ひの拵らへにて、これを留めて居る。お縫、茶屋女房の拵らへにて、手拭を額に當て、俯向いて居る。踊り三味線にて、幕明く。

まち　申し〱、御隱居樣、マア〱、ようござりますわいなア。

勘齋　うぬらまでが一つになつて、あの女郞めが肩持ちやアがる　勝次郞と云ふキツとした男のある身を以て、客の側で嫌らしい色氣を持つが氣に食はぬ。

まち　サア〱、お前さんの無理は皆御尤も。マア、お下にござれいなア。

　　ト引据ゑる。始終踊り三味線にて、向うより野花屋勝次郞、亭主の形にて、細帶がけにて、濡れた手拭を折つて頭へ載せ、下駄がけにて、歸つて來る。

勝次　あの、次郞兵衞は、どこで稽古して來るのか、强勢に將棋が強くなつた。

　　ト云ひ〱、本舞臺へ來る。

勘齋　ヤイ、お縫、この後は客めらに、愛想らしく物を云ひますまい。又外の男の側へびろ〱と寄りますまいと云へ。エヽ、吐かせやい。

　　トまた立ちかゝる。

まち　これはしたり、マア、ようござりますわいなア。

　　ト留めるを、引き退け、打たうとする。勝次郞、門口へ來て

勝次　ヤア、こりやとんだ事だ。

　　トつゝと入る。勘齋を突き廻し

親仁樣、お縫めをどうなされます。

勘齋　ヤア、勝次郞か。

ぬひ　旦那どの、よう戻つて下さんした。お前の留守になると父さんが

勘齋　コリヤ〱、滅多な事をしやべるな。おりやどうもしやせぬぞ。

ぬひ　ほんに、あらう事かあるまい事か。

勘齋　エヽ、コリヤ〱。

　　トそつと拜む。

必らずなんにも、イヤサ、おりやなんにも覺えはないぞ。

ぬひ　エヽヽヽ。

　　ト勘齋を見て、手拭を打ち付け、腹立てる。勝次郞、こなしあつて

勝次　モシ、親仁樣、斯う云へば、どうか女房の贔屓するやうで、異なものでござりますが、まだ年若な奴。どうでお氣には入らぬ勝ち。そこを私しに免じ、御料簡なされて下さりませ。

勘齋　料簡するもせぬもないが、どこの國に茶屋の女房が

客の側で機嫌を取ると云ふやうな、詰まらぬ事があるものか。

勝次　ヘイ、そりや悪い事でござりまする。

勘齋　その癖おれが側へ寄ると、兎角ぴんしやん／＼と、怪我にも口を吸はせ居らぬ。

勝次　エヽ。

勘齋　イヤサ、口過ぎばかりがよい。なんと腹立てるおれが無理か。

勝次　至極尤もでござりまするが、全體、茶屋の女房が、客愛想のよいと云ふは、第一商賣のきつい妨げ。

勘齋　サヽ、さうとも／＼。

まち　お前方、無理ばかり云ひなさる。世間でなんと申しまする。あの、野花屋の内は、かみさんの愛嬌で持つてあると、人の目が鏡でござりまする。

勝次　お町どの、其やうな事云ふと、此奴がどこまでも附け上がるわい。

ぬひ　エヽ、つッともう、お前までが同じやうに、アノ、父さんがわたしを捕へて、いろ／＼の嫌らしい事を

勘齋　ヤイ／＼、おれがいつ其やうな。

ぬひ　云ひなさんしたわいなア。

ト角目立ち、せり合ふ。

勝次　これはしたり、おれが默つて居ろと云ふに、マア、默つて居らぬか。

ぬひ　エヽ、アタ腹の立つ。

トとんと下に居る、摺り鉦入りの合ひ方になり、向うより三勝、藝者の拵らへ。傳吉、太鼓持ちの形、ぱつち、尻からげ、片肌脱ぎにて、踊りながら出る。後より箱廻しの男、三味線箱を持ち、附き出る。

傳吉　さて又藝者の身の果は、お屋敷様か金持ちの、請け出しそつくりお妾に、三味線枕に洒落たんす。

ト無性に踊る。

三勝　エヽ、コレ／＼、傳吉さん、お前、そりやなんの眞似。人が見て笑はうわいな。

傳吉　ヘイ／＼／＼。

三勝　しつかい氣狂ひのやうぢやわいなア。

傳吉　あやまりました。

三勝　ほんに、呆れた人さんぢやわいなア。

ト云ひ／＼本舞臺へ来る。

傳吉　三勝さまのお入り。

ト呼びのやうに云ふ。

まち　お早うござんしたなア。
三勝　傳吉さんの悪洒落。如何なわたしも困つたわいなア。
　ト云ひ〳〵内へ入る。
勘齋　三勝、てまへに云ふ事がある。待つて居た。爰へ來い。
三勝　ホイ。來ると早々隱居さんの御託宣。
　ト莨盆提げ
　さらば聽聞いたしませう。
　ト眞中へ坐る。
勘齋　イヤ、外の事でもないが、てまへを筑波屋の茂右衛門どのゝ所へやる約束。今日は身の代を受取る筈。さう思うて用意しや。
三勝　そりや、なんで行くのでござんす。
勘齋　ハテ、知れた事、妾に。
三勝　否でござんす。
勘齋　なんと。
三勝　手かけ妾に行く程ならば、こんな身持ちをせうかいなア。
勘齋　ヤア。
三勝　云うてもおくれな。

傳吉　小夜嵐。チヤン。
勝次　イカサマ、われは妙な女。この仲町は云ふに及ばず、どこのいづくの藝者でも、相變らず色をせぬと云ふ者はないが、ちつとも色氣のないと云ふは、てまへばかりであらう。
ぬひ　サア、それでも初手から名高い三勝、人にすぐれて毎日毎日の繁昌、抱へたのは此方の仕合せ。ナア、お町さん。
まち　サイナア、蔭では皆、三勝さんを小町ぢやと云ひますぞえ。
傳吉　ハア、穴がないと云ふ事ぢやな。
勝次　篦棒め。
　ト叱られて、ちやつと引ッ込む。
勘齋　慥かにさう云ふであらうと思うた。例へお主が吐かしても、おれが抱へた奉公人、親方と云ふはおれだ。年のうちに客が附けば、脊たけ金取つておれが遣る。證文の表に何所何方へ遣され候ふとも、妨げ申すまじく候ふ親方の勘齋が得心して妾にやると、兎の毛が突いた程も點打つ奴はあるまいがな。
勝次　イヤ、ちつと私しが點を打ちませう。

勘齋　なんと打つ。
勝次　三勝は私しが抱へ、隱居なされたお前樣の奉公人ではござりますまい。
勘齋　なんと。
勝次　證文の表は野花屋勝次郎ぢやに依つて、お前樣の御自由にはなりますまい。
勘齋　こりや一番、尤もぢや。ヤイ、三勝。別紙の五十兩、戻せ。
三勝　エ、。
勘齋　ありやおれが隱居金、一札の名前もこの勘齋。妾に行くが不得心なら、さつぱりと金戻せ。
勝次　そりや私しが返しませう。
勘齋　見事われが五十兩を。
勝次　今日中に拵らへて、キツとお返し申しまする。
三勝　エ、モシ、それでは私しが
勝次　ハテ、何事もおれが胸に
ぬひ　マア、旦那どの、料簡に任して置いたがよいわいなア。
勘齋　悴、晩までに返さねば、三勝を妾に遣る。その時必らずこみづ云ふなよ。

勝次　そりや、あなたのお心任せ。
勘齋　エ、忌々しい。寶の山へ入りながら、そこな安太鼓持ちめ。
傳吉　ヘイ／＼。
勘齋　毎日うせて、とつぴはつたと客の物、やたら無性に呑み喰ひする冥利の爲、隱居所へ來て勘齋が腰膝、揉みやアがれ。
傳吉　畏まつたと云ふものゝ、藝者に按摩のお望みは、あんまりむごいお胴慾。
勘齋　しやべらずと、うせいと云ふに。
ト唄になり、勘齋、傳吉を連れて奥へ入る。あと、合ひ方。勝次郎、こなしあつて
勝次　コレ、三勝、なんにも案じる事はない。今でこそ縁あつて、勝次郎が奉公人、元は臺頭の大立物、人に知られた美濃屋三勝、五十兩位の目腐れ金で、恥をかゝせてよいものか。ナア、女房、さうぢやないか。
ぬひ　成る程、お前の云はしやんす通り、父さんにまたげられ、難儀はして居なさんしても、又どうなりと仕樣もあらう。落ちついて居たがよいわいの。
ト三勝、ヂツと思ひ入れあつて

三勝　去年の春からフトした縁で、奉公に來たその日から、何かに附けてお前方、御夫婦の御深切、わたしは眞實身に餘つて
ぬひ　これはしたり、常々の氣にも似合はぬ、そんな沈んだ事云ふものか。一つに可愛がるも大事にするも、こりや、互ひの後生づく。
勝次　今朝からおれもほつとりと退屈。中の間で內證酒、一杯やつて氣を晴らしたがよい。
三勝　爰でちよつとお町さんに、髮を撫でつけてもらひまして、追ッつけそこへ參じませう。
ぬひ　お町さん、わたしは今日はくる〳〵と、つい梳いて置いて下さんせ。
まち　暇が入つても大事ござりませぬ。結ひ直してあげませう。
勝次　イヤ〳〵、大概にして置くがよい。あんまり美しう作つてくれると、旦那どの氣が揉めやうぞよ。ハヽヽ。
ぬひ　じやら〳〵云はずと、マア、奧へ。
勝次　ハテ、おつな肴があればよいが。
ト唄になり、勝次郎、お縫、奧へ入る。此うちお町、鏡臺を三勝が前へ直し
まち　サア、致しませう。
三勝　ざつと撫でつけて下さんせ。
ト尺八入りの獨吟になり
〽逢ふは別れと兼ねては知れど、今朝のきぬ〴〵いつより辛や。
ト三勝、鏡臺に向ふ。お町、筋立てにて、髮を直す。此うち向うより、東金屋茂右衛門、丁稚長太を連れ、出て來り
東茂　この頃から手を替へ品を替へても、根強く返事をしねえのは、筑波屋めもしけ込む樣子。それで急に斯うとも云はれねえと云ふやうな理窟。なんでも手に入れる法を
長太　モシ、旦那、その法とは、三勝さんの事かえ。
東茂　馬鹿を云へ。コレ、てまへはもう先へ歸れ。
長太　そんならお先へ歸りまする。
東茂　コレ〳〵、今のやうな事を、內へ歸つても云ふなよ。
長太　アイ〳〵。
ト向うへ入る。
東茂　子供にや滅多な事は聞かされぬ。そこに居るは三勝ではねえか。

三勝　オヽ、東金屋さん、お珍らしい。
東茂　昨日はこま／＼とした文の返事。
ト云ひ／＼、内へ入る。
三勝　詳しう讀んで下さんしたか。
東茂　讀んだゆゑ、今日わざ／＼。
三勝　不束なわたしを、有り難うはござんすが。
東茂　てまへ、人に惚れられる事は
三勝　そゝ髪が立つ程、好かねえわいなア。
東茂　聞きやア筑波屋茂右衛門も
三勝　名を聞いてさへ、うるさうござんす。
東茂　イヤ、さうは云はれまい。なんぼ男嫌ひでも、女と云ふものは味なもので、義理に義理が重なれば、まんざら憎うはあるまいがな。
三勝　口廣い云ひ條だが、廣い世界に三勝が手を、握つた者があつたらば、二度とお目にかゝりませぬ。
東茂　いよ／＼その詞に違ひはないか。
三勝　この鏡臺の鏡に掛けて。
東茂　面白い。その心ならば改めて、色氣離れて話しがある。
三勝　改めて話しとはえ。

東茂　イヤ、さもなからう話されぬ。幸ひ今日は隙にござり、一杯呑んで待つて居るから、身仕舞ひ濟んだらば
三勝　何かは知らぬが、聞いて上げようわいなア。
東茂　有り難い。そんならキッと聞く氣だの。
三勝　ハテ、色氣離れた話しとあるゆゑ。
東茂　そこで聞く氣になりふりから、やつたやうぢやない三勝、男の性根を見せて、それから……ドレ、一杯呑んで待つて居るぞよ。
ト常の唄になり、茂右衛門、こなしあつて、奥へ入る。お町、髪を仕舞ひ、櫛を拭きながら
まち　三勝さん、お前、逢うてどあつたかえ。
三勝　そりや、誰れにえ。
まち　お通さんに。
三勝　お通が來て居ますかえ。
まち　先刻小勝さんが連れて見えたゆゑ、お縫さんが呑み込んで、奥の茶の間に。
三勝　早う呼んで下さんせ。
まち　幸ひこの間に、ドレ、知らして上げようか。
ト奥へ入る。

三勝　今日あの子を連れて來やうとは、思ひがけなかつたわいの。

ト合ひ方になり、お縫、お通の手を引き、出て

ぬひ　大人しうよう遊んで居やつた。ちやつと母樣の側へ行きや。

つう　母樣。

三勝　エヽコレ、今は大事ないが、必らず人さんのござる時、母樣と云ふまいぞ。

つう　アイ。

ト　お縫、こなしあつて

ぬひ　三勝さん、どうした縁か、姉妹より親しい仲のお前とわたし、何かの樣子を打明けて、聞いても居れば見ても居る。さうして、この子の父御さんは、まだ手懸りも知れぬかえ。

三勝　サイナア、五年前に、フトした事で初めて逢うて、たつた一度の添ひ寢。この子を宿して父さんの、お世話になつて生み落し、成人するを見るにつけ、その夜に別れたこの子の父さん、お顏も知らず名も知らず、まして尋ねる證據もなし、何を目當にこの年月。ほんに辛氣なわたしが身の上。

ぬひ　その殿御に誠を立て、身持ちを堅う持つが爲、男嫌ひの因縁を、知つた者はわたしばかり。シタガ、神佛のお惠みで、お前の眞實が先へも屆き、廻り逢はれぬ事はあるまい。必らずともに、くよ／＼と案じぬがよいぞえ。

三勝　其やうに御深切に、力を附けて下さんす、エヽ有り難うござんすわいなア。

ぬひ　これはいかな。コレ、お通や、この小母とあの小母と、爰で三人で遊ばうぞや。

つう　嬉しい／＼。

三勝　ドレ、雛樣や魚を折つてやりませう。

ト唄になり、三勝、お縫、紙にて、雛や鶴を折つて居る。此うち右の唄をかりて、向うより半七、口幕の形にて出て、花道にて

半七　内へ行けば出店ぢやと云ふ、出店へ行けば仲町へ行たと云うて、おれをウロ／＼さすわえ。

ト云ひ／＼、本舞臺へ來て

どうぢや、お變りもないか。

ト云ひながら、内へ入る。

ぬひ　これは茜屋の半七さん、お久しぶりと云はうか。ようお出たなア。

牛七　餘りお遠々しいから、門口を忘れた位だ。
ト下に居る。お縫、莨盆持ち、行きながら
ぬひ　マア、御機嫌ようて、おめでたうござりまする。
牛七　イヤ、御機嫌にないぢや。
ぬひ　ほんに、お月代が延びてござりまする。
牛七　後月から瘧を煩らうて、やう／＼と一昨日落ちたのサ。
ぬひ　それは御難儀でござりませう。モシ、あなたのお馴染みの顏は
牛七　三年も来ぬ事ぢやから、皆片附いてあらう。
ぬひ　併し、誰れか見せに遣りませう。ちやつとお出でや。
ト手を叩く。
牛七　イヤ／＼、よして下され。今日は筑波屋の茂右衛門に、逢はねばならぬ用があつて、爰へ来て居ると聞いたゆゑ。
ぬひ　ハイ、筑波さんは毎日お出でござりまするが、今日はまだお見えなされませぬ。もう追ッつけでござりませう。
牛七　是非逢はにやならぬ用。待つて居るうち、附合ひに羽織でも呼ばうかい。
ぬひ　畏まりました。誰れさんがよからうぞ。
ト此うち三勝は、折り鶴を折つて、お通を遊ばして居る。牛七、莨のみながら、フツと見て、煙管にて教へ
牛七　藝者衆ぢやの。
ぬひ　ハイ。
牛七　美しいな。名は。
ぬひ　三勝と申しまする。
牛七　ハア。
ぬひ　あなたは未だ
牛七　三年ぶりだもの。
ぬひ　左様ぢやなア。
牛七　早速ながら
ト煙管にて、舞臺へ書いて見せる。
どうだ。
ぬひ　イエ／＼、その事はさつぱり無しでござりまする。筑波さまも
ト三勝を顏にて教へ
いろ／＼なされても七里けつぱい、さう云ふ事には大の禁物。
牛七　ムウ。

ト溜息吐く。奥より傳吉、出て

傳吉　おかみさん、筑波さまが、舟から直ぐにお上がりなされ、二階へお出でなされてござりまする。

ぬひ　モシ、今見えましたといなア。

半七　爰におれが、待つて居ると云うて下され。

ぬひ　畏まりました。わたしはちよつと

半七　大事ない、行かつしやれ。

ぬひ　おゆるりなされませ。

ト合ひ方になり、傳吉、奥へ入る。半七、三勝に見惚れるこなしにて、うか／＼と側へ坐る。三勝、俯向いて、折り鶴を折つて居て、フツと顔見合す。

三勝　ホヽヽヽ。

半七　ハヽヽヽ。

三勝　サア、お通、こちらへおぢや。

トこちらへ連れて來て、折つて居る。半七、又うかうかとこちらへ來て、側へ坐る。三勝、また顔見合せ

三勝　ホヽヽヽ。

半七　ハヽヽヽ。

ト三勝、氣味惡きこなしにて、ツイと立つて

三勝　あなた、これに。

トお通が手を引き、行かうとする。

半七　コレ、三勝さん、ちよつと。

三勝　御用がござんすかえ。

半七　アイ。

ト片息で云ふ。

三勝　なんでござんすえ。

半七　なんぢや知らぬが、もう堪へられぬ。

ト抱きつく。

三勝　オヽ、馬鹿らしい。

トむごう振り放す。また起きて來るを

エヽ。

ト平手で、横顔ぴつしやり。チヤンと唄になり、三勝お通を連れ、ツイと奥へ入る。半七、頰を抱へて、三勝が入つた跡を、氣抜けのやうに見詰めて居る。やゝ暫らくあつて、やう／＼心を落ちつけて

半七　ハテ、どうしようなア。

ト手を組み、チヨン／＼にて、この道具を、ぶん廻す。

本舞臺、三間の二重舞臺、見附け、長暖簾、上の方、後に建仁寺垣、右二重眞中に、三勝、前の形、莨盆

な前に置き、長煙管を突ッ張つて居る。上手に筑波屋茂右衛門、着流し、一本差しにて、杯を三勝へ突き出す。角太郎、雁助、加勢して居る。下の方に東金屋茂右衛門、同じく杯を差出し居る。源之丞、吉平、加勢して居る。太鼓、踊り三味線にて、道具納まる。

角太　コリヤ〳〵、茂右衛門、必らずとやかに引けを取るな。後には、この笠松角太郎が扣へて居る。

雁助　下郎なれども、一騎當千の雁助が後楯だ。

源之　斯く云ふ有松源之丞、義に依つて命は惜しまぬ。

吉平　この吉平も千騎に一騎。

角太　筑波屋茂右衛門。

源之　東金屋茂右衛門。

雁吉　手際の程が

四人　見たい〳〵。

筑茂　エヽ、ざわ〳〵とかしましい。

東茂　鎭まつて居さつしやい。

筑茂　サア、三勝、おれが杯、受ける心か。

東茂　おれが杯を引受けるか。

筑茂　どちらへなりとも

兩人　返事が聞きたい。

ト三勝、こなしあつて

三勝　この杯を受けたら、お前方、なんとさしやんす。

筑茂　身請けして、おれが女房。

三勝　エヽ。

東茂　抱いて寝ると云ふ袋の杯。

三勝　そんならこの杯、マア、頂きますまいわいなア。

筑茂　イヤ、今さらさうは抜けさせぬ。

三勝　そりやなぜえ。

筑茂　われが親の平左衛門に、五十両と云ふ金を貸して、返済の出来ない時は、娘の三勝を渡さうと、書き入れた借用證文。

三勝　それをわたしが知らうかいな。

筑茂　なんと。

三勝　親の儘にもならぬが縁づく。殊に年のうちは、親方の心に任せた身の上。

東茂　金づくでは靡かぬ三勝、その心を見込んだゆゑ、東金が魂ひを絞り込んだ、酒は眞髄。

三勝　不束な三勝に、惜からぬお志し、添ないと云ひたいが、どうあつても否でござんす。

東茂　男嫌ひと知れた藝者。そりや合點で口說くのは、色氣離れた色になりたい。
筑茂　三年先から惚れ込んで、口說きにかゝつた其うちに、殿樣の御用につき、永々の國住ひ。戻ると直ぐに呼び出して、この間からの揚げ詰め。今さら外へ請け出されちやア、どうもおれの男が立たぬ。
東茂　この東金が面を立てるか。
筑茂　この筑波の男を立てるか。
東茂　殊に依つたら命づく。
筑茂　どちらへなりとも
兩人　杯の納まり。
角太　コリヤ、東金に返事いたすと、角太郎が生けちや置かない。
筑茂　これはしたり、よしない差出。
源之　筑波屋めに請け出されたら、源之丞が免さぬぞ。
東茂　お前の構ふ事おやござらぬ。
三人　エヽ、齒がゆいわい〳〵。
三勝　お二人さんへの御返事。トあたりを見る。合ひ方になり、三勝は杯を取上げ眞中よりホツと二つに割り
筑波さん、この片割れで酒が吞めますかえ。
筑茂　ヤア。
三勝　東金さん、但しこの片々で、酒が吞めやうと思うてか。
東茂　なんと。
三勝　どちらで吞むがよからうなア。
筑茂　さればなア。
東茂　そりや、どちらでも
兩人　吞まれまい。
三勝　どうしたならこの杯で、吞まれるやうになりませうぞ。
筑茂　割れと割れとを一つに合せて
東茂　膠に漆を突き合はせ
筑茂　丸う納まる
兩人　元の杯。
三勝　サア、そこでござんす。男嫌ひは兎も角も、筑波さんに返事をすれば、東金さんが男が立たず。また東金さんの詞に附けば、筑波さんの顏がすたる。わたしが手足を、杯のやうに打ち割つてもあげられまい。お二人さん、マア、そんなものではござんすまいか。

筑茂　ムウ、すりや、東金がなくばこの筑波に
東茂　筑波が引いたら茂右衛門に
筑茂　色よき返事を
兩人　する心か。
　　ト三勝、立ち上がり
三勝　膠と漆は心と心。
　　ト筑波屋、片割れを取つて
筑茂　細工は流々。
　　ト東金屋、取つて
東茂　仕上げの手際。
三勝　それ見た上は、わたしが思案。
兩人　キッと詞を
三勝　イエ、番ふには及ばぬわいなア。
　　ト兩人、キッとなる。
　　ホヽヽヽ。
　　トちやんと唄になり、三勝、こなしあつて、奥へ入る。
　　跡に皆々、顏見合せ
角太　筑波さんに返事をすれば
雁助　東金さんの男が立たず。
源之　東金さんの詞に附けば
吉平　筑波さんの顔がすたる。
角太　わたしが手足を杯のやうに
源之　打ち割つてもあげられまい。
四人　こりや尤も。
源之　コレ、茂右衛門、てまへ、マア、どうしやうと思ふ。
東茂　サア、三勝がくれた杯の、割れた思案は……何を
　　云ふにも側あたりが、節くれ立つたこの座敷。
吉平　山へでも參りませう。
東茂　それもよからう、サア、源之丞さま。
源之　吉平、供せい。
東茂　サア、ござりませ。
　　ト合ひ方になり、源之丞、吉平、東金屋、そろ／＼と
　　花道へかゝる。角太郎、雁助、筑波屋に、どうせうと
　　云ふこなし。筑波屋、よいと云ふ思ひ入れ。よき程に
筑茂　東金、待て
　　ト東金屋、立ちどまり
東茂　なんぞ用か。
筑茂　ハテ、用がありやこそ呼びかけた。四の五の云はず
　　と、後へ歸れ。但しはてまへ、おれが怖いか。
東茂　ハヽヽヽ、武藏野で生れたお庇、富士の山を茶漬の

菜に、毎日食つて居る茂右衛門。筑波位は庭の飛び石。ドレ、踏み躙つてやらうか。

ト皆々、附いて戻る。

筑茂　黒船が出入りするやうに、ちよつと橋詰までゞもあるまい。今の御見物はお氣が短かい。わつさりとやりかけろ。

東茂　三勝が事なら、金輪際首になつても、手にや渡さぬ。叶はぬ事だ、よしにしろえ。

筑茂　イヤ、そればかりぢやない。われには大分、意趣がある。

東茂　ヤ、なんと。

角太　ヤイ、茂右衛門、忘れもせぬ五年以前、淺草の境内で、大勢の人中で、よくも角太郎を打つたなア。一度ならぬ二度まで、われに打たれた腰骨、今に於て寒土用、二季の彼岸に梅雨八せん、頻りに痛む度毎に、口惜しくて口惜しくて、ぬるい泪がこぼるゝわい。

雁助　この雁助めも長の年月、うぬ出合うたら主人の恨み、晴らさんものと寐刃を合せ、親の敵を尋ねるやうに

角太　附け狙つてくれたよなア。

雁助　イヤ、逃げ廻つて居りました。

角太　べら坊め。サア、尋常に命、サア、茂右衛門、爰で逢つたがうぬが天

ト反り打たうとする。

筑茂　エヽ、喧ましいわい。こなたの手に合ふ東金屋ぢやアない。すツ込んで居さつしやれ。

角太　そこへよろしく

ト後へ、寄る。

筑茂　イヤナニ、東金、樣子あつて身に引請け、世話にせにやならぬ角太郎どの、おれが爰に居る程なら、疾にこの尻を持つて出入りする筈なれど、いま聞く通り永の留守、幸ひ今日の出合ひ。

東茂　五年が例へ十年經つても、男づくの遺恨。如何にもあの唐變木は、おれが打つた。オヽ、打ちのめした。その返しを今爰で

筑茂　不肖ながらさつぱりと、片附けてしまはうかい。

東茂　相手が筑波屋茂右衛門だけ、實があつて面白い出入りぢや。

ト源之丞、反り打ちかけ

源之　茂右衛門、大事の場所ぢや。助太刀は源之丞。

吉平　義によつて命は輕し。踏ん込んで勝負々々。

東茂　エヽ、これは情ない。東金筑波が晴れの達引。加勢を頼んで男が立たうか。
筑茂　後學の爲出入りするを、酒でも呑んで見物さつしやれ。
角太　我れ〱はそれが勝手。
隱助　扣へませう〱。
ト此うち、勝次郎、後へ出かけ居る。
東茂　サア、これからは互ひの運づく。
筑茂　勝つも負けるも天道任せ。
東茂　茂右衛門。
筑茂　茂右衛門。
東茂　そろ〱と
筑茂　やりかけうか。
ト身構へする。この時勝次郎、向うへ出て
勝次　イヤ、お二人とも、暫らくお待ち下さりませう。
東茂　勝次郎、わりや茂右衛門と茂右衛門が
筑茂　意趣の筋道知つて留めたか。
勝次　殘らずあれから承りました。慮外ながらお二人樣、あまり早急にござりまする。
兩人　ヤヽ、なんと。
ト合ひ方になり
勝次　サア、斯う申さば私しが、難儀になるが悲しさに、お留め申すと思し召さうが、あながち左樣ではござりませぬ。ハテ、よう物を思うても御覽じませ。一人を殺せば一人は下手人、男づくの遺恨には、命は惜しみはなされまいが、出入りの元は角太郎さま。東金さまも金輪際お世話なさるゝ源之丞さま。場所と所が悪いから、若旦那樣方の御難儀。サ、そこへお心の附かぬ、あなた方ではなけれども、お顔の合うた云ひがゝり、永々延びてござつた出入り、今爰でなされずとも、東金さまに筑波さま、逃げも走りもなされぬお相手、お二方の身の上も、片附いたその上で、マア、それまではこの出入り、私しがと申すは慮外。源之丞さまと角太郎さまへ、お預けなされて下されたら、憚りながらよろしきやうに、ヘイ、私しは存じまする。
ト兩人、こなしあつて
筑茂　東金、てまへはなんと思ふ。
東茂　負うた子に淺瀨とやら
筑茂　勝次郎が云ふも一理。
東茂　源之丞さまのお身の上。

筑茂　角太郎どの〻納まりも
東茂　さつぱり附いたその上で
筑茂　必らず引くなよ。
東茂　てまへも、引くなよ。
筑茂　マア、それまでは
　ト東金屋、勝次郎へ、顋にて
東茂　世話であつた。
勝次　これはもう、お歸りでござりまするか。
東茂　面白くもねえ事を、とんだ所へ引出して、內の前へ氣の毒千萬、つい野暮になるやつサ。
勝次　ハテ、私しが申した事、お取上げ下さりまして、有り難うござります。
東茂　なんの〳〵、又この頃におつさりと。
勝次　左樣ならばお近いうちに。
東茂　サア、參りませう。
　ト源之丞、先に、花道へかゝり
勝次郎の詞を立て、この場はこれで濟ましても、源之丞さまのお身の片附き次第、改めて又いさくさの返り咲。併し、お主はその時に、尻込みをするであらう。それとも膽があるならば、いつでも其方の勝手にかゝつて來い。

まんじりとも引かねえところが東ッ子。生れついたる癇積の、虫を撫つて待つて居るぞ。
筑茂　ハヽヽヽ、われが心に引比べて、そんなけちな筑波と思ふか。後へ寄らぬが、生れついたるおれが魂ひ。とつくりわれに見せてやらうぞ。
東茂　オヽ、その詞を忘れるなよ。
筑茂　其方で必らず忘れるなよ。
東茂　茂右衛門。
筑茂　茂右衛門。
兩人　重ねてキッと。
東茂　ドレ、山洒落としようか。
　ト唄になり、源之丞、吉平、東金屋、附き添ひ、こなしあつて、向うへ入る。
勝次　筑波さま、數ならぬ私しが、詞を立てゝの御料簡。有り難う存じまする。
　ト奥より、傳吉、花活けの箱を持ち出て
傳吉　旦那樣、この間申し上げました、これが東雲の花活けでござりまする。
筑茂　して、値段はどの位ぢや。
傳吉　百兩よりは二朱も引けぬと、道具屋が申して居りま



初演の繪番附

す。
筑茂　よい〳〵、とつくりと見て置から。コレ〳〵勝次郎おれはもう一度三勝に逢うて、杯の割れたせりふ。角太郎さまは雁助と、小舟で先へ歸らしやりませ。
角太　然らば身共は先へ歸り、最前云うた
筑茂　ア、コレ。勝次郎、早く舟を云ひつけやれ。
雁助　然らばお先へ、茂右衛門どの。
勝次　サア、お出でなさりませ。
ト誂らへの合ひ方になり、四人、奥へ入る。筑波屋、箱より花活けを出し
茂右　こりやア、見事、百兩には廉い物だ。これを殿樣へ差上げれば、御褒美に先づこの位。
ト莨盆を引寄せ
てつぺい押しに口說いても、所詮得心せぬ三勝。これからは叉手を替へて、色事師風に柔らかう。マ、どう云うたものであらうぞ。斯う云へば斯う。
ト思案して、煙管にていろ〳〵と
うまい。
ト吸ひ殻明ける。チヨン〳〵にて道具、廻る。

本舞臺、前の道具に戻る。
眞中に半七、捕り手四人に取卷かれ居る、上の方、丹藏、羽織、袴にて居る。下の方に丸鐵坊、柿の鉢卷にて、頭を隱し、股引、ぶツ裂きにて、十手を振り上げ居る、長九郎、留めて居る。踊り三味線、バタ〳〵にて、サア〳〵と、詰め合ひながら、道具、納まる。
長九　モシ〳〵、こりやマア、何事でござりまする。
丸鐵　昨日八幡の境内にて、余瀬村の百姓、次郎作を手に掛け、滑川へ沈めしは、茜屋半七と事露顯、遁がれぬところ、腕廻せ。
丹藏　イヤ〳〵、お代官、おてまへの詮議より、半七には所用あれば、暫くのうちお扣へなされい。
丸鐵　左樣仰せらるゝ御自分は。
長九　信田の御家老、矢田部文左衛門さまでござりまする。
半七　すりや、あなたが文左衛門さまとな。
丸鐵　大國の御家老職、輕々しく何ゆゑこれへ。
丹藏　密々の用事につき、密かに半七が宅へ參りしところ
長九　親方、お前が爰へ來てござるゆゑ、お供いたしましてござりまする。
丸鐵　外ならぬ信田家の御用。相濟むまでは暫時これに。

組子ども、引け。
四人　ハツ。
　トこなし。
丹蔵　半七、それへ出よ。
　ト半七、ハツと向うへ出る。
前々より其方始め、いづれも出入りの町人どもへ、下し置かるゝお家の職札。われ達には株札と稱ふる由。仔細あつて急に相改める。早くこれへ。
　ト半七、こなしあつて
半七　大切なるお屋敷の、御判のござる株札ゆゑ、私しが肌身離さず
　ト懐より、口幕の摺替へられた袱紗包みを出す。
とくとお改め下さりませう。
　ト丹蔵、取つて開き
丹蔵　其方が所持の株札はこれか。
半七　左樣でござりまする。
丹蔵　うぬ、武士を盲目だと思ふか。
半七　エ、。
丹蔵　これが信田の家の職札か。
　ト打ちつける。半七、取上げ

半七　ヤア、こりや大切なる職札が
長九　どう致しました。
　ト取つて
オ、、こりや太頭の木戸札。ヤ、、、ヤア。
　トわざと惘りする。
半七　ムウ。すりや、昨日芝居の中で
　ト向うを見て
摺替へられたか。ホイ。
　ト當惑する。ト奥より、善右衛門、出る。
善右　どなたもお許し下さりませ。
　ト半七が側へ坐り
半公、てまへマア、大變な事仕出したなア。聞えた。さては色狂ひか博奕に負け、賣り拂うて此やうな、銅脈を持つて居るな。うぬが縛られる分は構はぬが、株札を失ふと、茜屋の身代は上がりもの。闕所になるぞよ。
長九　イヤ〱、モシ、善右衛門さん、コレ、善右衛門どん、如何に先旦那の甥御おやと云うて、顎があがき過ぎるぞよ。常から實體な旦那で、色狂ひの博奕のと
善右　コリヤ〱〱、長九郎、それほど實體な旦那が、どうして株札をなくしたのだ。

長九　サ、それは

善右　この善右衛門は佛の甥、根が半七めは大和から、養子にうせた赤の他人。其奴に名跡を潰されちやア、伯父貴の位牌へ云ひ譯がない。ナア、文左衛門さま。

丹藏　オヽ、さうとも〳〵。コリヤ、善右衛門、遠慮ない力一ぱい詮議いたせ。

善右　畏まりました。半七、株札はどこへやつた。有やうに吐かせ。云うてしまへ。

ト半七、手を組み、默つて、思案して居る。

丹藏　どうで一應では吐かすまい。打ちのめして白狀させい。

善右　ようござりまする。

ト縫ひぐるみを持つて

大方師匠を打つたら、罰が中ると仰しやるであらうが、こりや文左衛門さまの御意。どなたも御免下さりませ。手短かにカウ

ト打ちにかゝる。半七、居ながら縫ひぐるみを引ッたくり、引ッくり返して、善右衛門を打ちのめす。

アイタヽヽヽ、コリヤ、うぬ、どうしやがる。

半七　親仁様から讓り請けた、茜屋の名跡は半七。我が物を我れが摺替へ、難儀するべら坊めが、廣い世界にあるものか。

善右　ヤア。

半七　いかい世話ぢや。よしてくれい。

ト此うち、二階引拔く。腕の喜三郎、杯を受けて、お町、酌して居る。

丸鐵　此方とても猶豫はならぬ。この場で糺す人殺し。

長九　申し旦那、今の理窟は解つたが、そんならほんまの株札は、別に持つてござりますか。

半七　ヤア。

丹藏　但し、云ひ譯の筋があるか。

半七　サ、その儀は。

丸鐵　人殺しの身の明りは。

半七　サア、その儀は。

兩人　サア。

皆々　サア〳〵〳〵。

皆々　どうだ。

喜三　イヤ、詮議の筋が間違ひました。

皆々　ヤ、なんと。

喜三　茜屋半七、職札とやらの在所とても、餘り遠くはあ

るまいから、さう心勞いたさぬがよい。
半七　見ますればお歴々樣。
丹藏　大切なる詮議に批判を打つ
丸鐵　御自分は先づ何人だ。
喜三　信田の左衞門が國家老、矢田部文左衞門と云ふ者だ。
皆々　ヤア。
ト大きに恟りする。
半七　アノ、あなた樣も。
喜三　如何にも。イザ、それへ參らうか。
まち　それがよろしうござりませう。
ト合ひ方になり
喜三　近頃當地の役人ども、不吟味の事多きがゆゑ、久々にての身共が出府。鬱散の爲、忍びの遊興。
ト云ひ〳〵、表へ出で、お町、銚子を持ち、附き出る半七、丹藏と喜三郎を見合せ
半七　思ひ掛けもない。
ト此うち、丹藏、そろ〳〵逃げようとする。
喜三　コレ〳〵、お侍ひ、待たつしやい。
丹藏　身共の事か。
喜三　いづれへござる。
丹藏　ひだるいから、食事に參る。
喜三　お尋ね申す儀がござる。暫らくのうち、下にござれ。
ト是非なく下に居る。
丸鐵　身共は即ち、當所の代官。そちらのお侍ひ。おてまへは
喜三　御姓名は。
丸鐵　ヤア。
喜三　何と申す。
丸鐵　丸鐵。
喜三　ヤア。
丸鐵　丸鐵岩之進。
喜三　ハテ、堅いお名だな。
ト云ひながら、とくと見て
ナニ、善右衞門とやら。
善右　ヘイ。
ト額にて、丹藏を敎へ
喜三　てまへ、あのお侍ひと近附きだな。
善右　存じませぬ。
喜三　知音ではないか。
善右　さら〳〵逢うた事もござりませぬ。

喜三　ムウ、長九郎とやら、てまへは定めて入魂であらう。
長九　とんだ事を仰しやります。見ず知らずでござりまする。
喜三　いよ〳〵さうか。
長九　根から存じませぬ。
喜三　知つたとは云はれまい。それは格別、牛七、お身、人を殺めた覺えがあるか。
牛七　斯らなりまする上からは、包みませうやうはござりませぬ。昨日八幡の境内にて、余瀬村の次郎作と申す者僅かの事の口論より、手荒う致すとは存じませねど、どう云ふ事かその場で氣絕、相果てましてござりまする。
喜三　して、その死骸は。
牛七　これに居る善右衛門、長九郎、二人の者が
善右　コレ〳〵、牛七、うぬが身に火が附いたとて、なんにも知らぬおいらにまで、飛火の仲間に入れようとは
長九　親方、そりや、お前、胴慾と云ふものだ。なんにも覺えはござりませぬ。
牛七　何を云うても證據がなければ。
　ト無念のこなし。
喜三　もうよい〳〵。ナニ、それにござる目玉の大きなお侍ひ。
丹藏　拙者が儀でござるか。
喜三　其許のお名は、なんとやら。
丹藏　身共は、ナニ、ソレ、熱海運左衛門。
喜三　して、御主人は。
丹藏　主人は、ナニ、泉州信田の家中サ。
喜三　身は矢田部文左衛門、御邊は熱海運左衛門、信田と信田、五音の通ひは、ハテ、身共が姓名によく似たお名で
丹藏　ヤア、。
喜三　サ、一つつげ〳〵。
　トてんつゝにて、揚げ幕より
次郎　牛蒡やごんぼ、椿の花や〳〵。
　トてんつゝにて、向うより、次郎作、新らしき畚、天秤棒に、前の品を入れ、長九郎が遣つた羽織を着て、出て來り
今日はめでたう野花屋さまで、一杯下されて歸りませう。
　ト舞臺へ來て
物もう。ハイ、余瀬の次郎作でござりまする。年始申し上げまする。

ト善右衛門、丹蔵、長九郎

長九　南無三、出て來た。

ト善右衛門、あわてゝ

善右　こりや堪らぬ。

コレサ、貴樣達の來る所ぢやない。去んだ〳〵。

ト無性に突き出す。

次郎　これはしたり、私しは年始の禮に。

ト善右衛門を退け、入らうとする。長九郎、突き出し

長九　貴樣、入つちや惡い〳〵。

ト半七、立つて、兩人を引き退け、次郎作を引き込み

半七　次郎作どのか。

次郎　半七さま。

半七　こなた、生きてくれたか。

次郎　生きて居りやこそ、參じました。

半七　よう生きてくれたなう。

善長　イヤ、此奴は幽靈。

トかゝるな、立廻つて

半七　人殺しの身の云ひ譯、嬉しや詮議の綱に

ト兩人を見事に投げ

取り附いたわい。

ト尻引ッからげる。次郎作、悧り。

次郎　なんのこつちや、譯が知れぬ。

ト呆れて、下に居る。

喜三　半七、出かした。其方が一筋の心より、ほどけかゝつた詮議の糸口、落着はこの一通。

ト口幕の一札を出だし

高聲に讀み上げい。

ト半七、ハッと取つて

半七　「一札の事、一つ、茜屋半七所持の誅札、盜み取りくれ候はゞ、我れ〳〵金十兩に買ひ求め申すべく、お約束キッと相違あるまじく候ふ。」

喜三　奥の宛名は。

半七　丸鐵坊へ、今市屋善右衛門、茜屋長九郎。

丸鐵　それを。

ト取りに行く。喜三郎、鐺にて突き廻す。

善長　こりや堪らぬ。

ト逃げ出す。半七、門口びつしやり。

半七　一人も動きやがるな。

ト喜三郎、丸鐵坊、丹蔵を留めながら

喜三　仔細あつて思ひも依らず、身が手に入つたる證據の

一書。

丸鐵 ところを。

ト振り放さうとするを、見事に引ッくり返す。このはずみに鉢卷取れて、毬栗の坊主になり、口幕の書き札落ちるを、喜三郎、手早に取つて、何食はぬ顔、口に銜へて、丸鐵坊を儅にて、引ッくり返し、直ぐに持ち替へて

喜三 これが誠の信田家の職札。

ト半七へ抛る。取上げて袱紗を開き

半七 如何にも相違ござりませぬ。

ト丹藏、うぬと寄るを

寄りやがつたら、胴腹抉るぞ。

丹藏 ア、、。

ト縮み上がる。次郎作はあちらこちらに、突き飛ばされ、うろ〳〵して

次郎 本當に怪しからぬ所へ來たわえ。

喜三 次郎作とやらんが參りしゆゑ、早速晴れし御身が虛名。ヤイ、泥坊めら、一々に縄打つて、拷問いたすものならば、外に口もあるべき奴。さりながら、遊所と云ひ忍びの遊興、此まゝに見遁がしてくれる。ナニ、半七、御身も殘念にあらうなれども、紛失の株札手に入るからは、穩便に計らうてよからう。

半七 御意でござりまする。何も皆あなたのお庇。エ、、有り難う存じまする。

丹藏 丸鐵坊、心持ちはどんなだ。

丸鐵 五輪五體鰍の如し。

長九 いかう風波が惡くなつた。

善右 奥へ行て、酒なと呑んでくれう。

丹藏 それがせめての心ゆかしだ。

ト善右衛門、次郎作を見て

善右 折角仕込んだ大事の目論見。うぬがうせたばつかりに

次郎 どうしました。

善右 この面わえ。

ト次郎作の横面を毆つて、ツイと入る。

次郎 アイタ、、、。

丹藏 差出者め。

ト同じく毆つて入る。

次郎 アイタ、、、、。

丸鐵 忌々しい。

ト隠つて入る。

次郎 アイタヽヽヽ。もう仕舞ひか。ハテ、無理な奴等だなア。

ト合ひ方になり、次郎作、續いて奥へ入る。喜三郎、こなしあつて

喜三 半七、先刻より見掛けしところ、其方の紙入れは、世に稀れなる藤種緞子、慮外ながらこれへ。

半七 これはハヤお目にとまり、恐れ入りました。

ト差出す。喜三郎、取つて見る。

喜三 その品に就きましては、御存じもない京物語り。元私しは大和の生れ、實父は和州五條村、厚倉甚左衛門と申す者。幼少の砌り茜屋へ、不通の養子に參りし節、親どもの筐でござりまする。

喜三 ムウ。すりや、いよ／＼おてまへは、甚左衛門の子息であつたか。

半七 あなた樣には親どもを、御存じでござりまするか。

喜三 イヤ、どうか承つたやうにも……不相應なるこの金物、紋所が三蓋松、これも實父の定紋か。よもやさうではござるまい。

半七 その金物は五年以前、柳橋の船中にて、手に入れたる紅入れの蓋。これも申さば筐同然。捨て置かれぬ譯がござりまして、斯やうにしつらひ、所持いたして居りまする。

ト喜三郎、憂ひを催ほすこなしにて

喜三 過ぎ去る月日は二昔。夢に暮れ行く二十年。思ひがけなう。

ト半七を見る。

半七 なんと御意なされます。

喜三 イヤ、思ひがけなう手に觸れしも、申さば他生の緣とやら。ハテ、珍らしい裂れを見申した。

ト半七が前へ置く。

半七 樣子ありげなお詞の端々。なんとやら私しは

ト喜三郎、立ち上がり

喜三 心勞にて、さて／＼疲れ申した。酒でも呑んで欝を晴らしやれ。某も今一獻酌み直さう。女ども／＼。

ト呼び／＼、行かうとする。

半七 申し、これにお刀が。

ト差出す。

喜三 ハテ、粗相千萬。必らず沙汰なし。

半七 遊里の儀なれば。

喜三　面目もない。

ト扇を顔におてる。

半七　ハテナア。

ト合點のゆかぬこなし。チヨン〳〵にて、道具、廻る。

ト元の二重舞臺へ返ると、勘齋、お縫が帶を半分解きかけ、引ツ張つてゐるを、お縫、兩手にて押へて居る。踊り三味線にて、道具納まる。

ぬひ　マア〳〵、待つて下さんせ。コレ、父様、それではお前、畜生でござんすぞえ。

勘齋　どうで人間の魂ひはない。例へ犬猫と云はれても、年寄つたこの勘齋、外に望みはなんにもない。金が欲しいと、嫁に惚れたがわしが因果。コレ、二度とは云はぬ。

ぬひ　エヽ。

勘齋　一人の舅に孝行ぢや。どうぞ叶へてくれいやい。

ぬひ　それ程までにわたしが事を、思うて下さるお志し、有やうは嬉しいわいなア。

勘齋　エヽ。

トへたばる。

ぬひ　サア、女は氣の弱い者。若い年寄りに限らず、私しがやうな足らはぬ者を、アノ、お前は御深切に、戀ひ慕うて下さんすは、よく〳〵であらうと思ひやつて、ツイ、味な心になり

ト嫌らしく云ふ。

勘齋　アヽ、なんと云うてくれるぞ。

トぶる〳〵と慄ふ。

ぬひ　又よう思ひ返して見れば、まんざら世間に

勘齋　オヽ、いくらもある事ぢや。

ぬひ　あんまり滅相な事なれど、いつその事思ひ切つて

勘齋　得心して下さるか。

ぬひ　アイ、どうなとするわいの。

ト此うち、勝次郎、後に出かゝり居る。

勘齋　こりやモウ、堪えられぬ。

トのしかゝる。勝次郎、ツカ〳〵と寄つて、勘齋を引きのけ、お縫が帶を、キツと持つ。

ぬひ　ヤア、旦那どの。

勘齋　倅

ト勝次郎、カツと睨む。勘齋、すつぽりかぶる。合ひ方。勝次郎、お縫を突き飛ばし、硯を取つて來て、去り狀をさら〳〵と書き

勝次　お縫、それ持つて出て行け。
ト お縫に抛りつける。お縫、取上げ見て
ぬひ　ヤア、こりや去り狀。
勝次　ヤアとは、おれが物を云ひ立てすれば、男の立たぬばかりでない、一家親類に至るまで、世間へ面の出されぬ事。見事暇を遣る。初手からわりや得心であらうな。
ト お縫、後手に帶を締めながら
ぬひ　アイ、得心でなうてわいな。仲町ばかり日は照るまいし。
ト とん／＼花道の角まで行く。勘齋、ソツと見送る。勝次郎と顏見合せ、くるりと後へ向く。お縫、ヂツと立ちとまり
勝次郎さん。去らるゝからは、嫁入りの時、持つて來たわたしが諸道具。
勝次　箸片しもうぬが物に、目かける勝次郎ぢやない。今直ぐに持たして遣はす。氣遣ひせずと、キリ／＼うせい。
ぬひ　うせるわいな。去られた内に未練らしう、なんの永たらしう居やうぞいな。
ト 云ひ／＼、袂より縮緬の袖頭巾を出し、すつぽりかぶり
アタ鈍臭い。
ト 唄になり、向うへ入る。
勝次　傳吉々々。
傳吉　ヘイ／＼。
ト 奥より、傳吉、出る。
勝次　いま奥で云ひつけた通り、奥倉のお縫が荷物、幸ひ來て居る出入りの者に、いま直ぐに持たせてやれ。
傳吉　畏まりました。
ト 入る。
勝次　親仁樣、モシ、親仁樣。
ト 勘齋、顏を上げ
勘齋　南無阿彌陀佛々々／＼々々。
勝次　これで私しも心がさつぱりと、あなたにも又お目にとまつた女があらば、女郎なりと藝者なりとも
勘齋　ヤア。
勝次　とつくり胸に手を置いて、思案して御覽じませ。
勘齋　おりや、矢ッ張り
ト 向うを見る。
勝次　なんと仰しやる。
勘齋　不孝者め。

ト唄になり、勘齋、奥へ。上手より、檜扇の紋附きの油單のかゝつた簟笥二棹、同じく長持、挾み箱一荷、葛籠、琴箱を、若い者擔ひ、皆々向うへ入る。勝次郎ト指を折り

勝次　都合七荷、隨分廉う積つたところが
一つ〳〵に、思ひ入れあつて
マア〳〵、これでよし。
トちよん〳〵にて、平舞臺へ戻る。

ト丸鐵、丹藏、着流し、善右衞門、半七を引ッ立てようとして居る。太鼓入りの踊り三味線、バタ〳〵道具とまる。

半七　最前に懲りもせず、うぬら、半七をどうひろぐ。
善右　三勝が意趣と云ひ
丹藏　茂右衞門さんの云ひつけ
丸鐵　うぬが腰骨、打ち抜くのだ。
兩人　覺悟さらせ。
半七　うぬらが手に合ふ、半七ぢやないわい。
ト半七、危ふくなる。中二階より喜三郎、口幕の形にて、飛んで出て

喜三　半七さまにほでさすと、うぬら一々踏み殺すぞ。
ト見事に取つて投げる。
半七　ヤア、あなたは矢田部文左衞門さま。
喜三　オヽ、文左衞門〳〵々々々。
善右　思ひも依らぬ。
兩人　このお姿。
喜三　べら坊めらが企みを見出さう爲、御家老樣の本名を騙り込んだるこの喜三郎。
兩人　ヤア。
ト喜三郎、半七が前へ手をつき
喜三　お坊樣、お久しうござりまする。
半七　左樣に御意なされても、とつと合點が參りませぬ。
喜三　イカサマ、お三つの時に、和州表を立退きましたれば、お見知りないは御尤も。これ、御覽なされませ。
ト腕を捲ると、文身あり。
半七　東雲院了榮大居士。こりや、實父甚左衞門どのゝ戒名。
喜三　この御位牌に召使はれました、腕平と申す、ネイ、下郎めにござりまする。
半七　ハテナア。

喜三　御奉公のうち酒を過し、喧嘩相手に手を負はせ、既に入牢もすべきところ、お旦那のお情にて、數多の金子を下し置かれ、夜のうちに和州を逐電。

ト丸鐵坊、うぬと半七に寄らうとするを、喜三郎、引き廻す。丹藏、半七にかゝるを、立廻りあつてとまり

只今にては信田家へ入り、組を預かる部屋頭。子分子方の大勢に、親仁々々と立てらるゝも、古主の御恩と、寢た間も忘れた事は

ト丸鐵坊を見事に投げ

ござりませぬ。

半七　ハテ、思ひも依らぬ

ト丹藏を引き廻し

不思議なお話し。

ト云ひながら、引敷く。

喜三　この腕に旦那の戒名、朝夕起臥し仕へ申す心で、御覽の通り腕の文身。平常大切に致すゆゑ、誰れ云ふとなく、腕々と、異名を取つた喜三郎。

ト長九郎、又かゝるを、立廻つて

久々にて今度の出府。昨日臺頭の芝居の内にて、フト目にかゝつた蔭種緞子は、常々から旦那の御祕藏。さてはと知れたところから、歸りの折から境内にて、すつぱり開いた、コレ。

ト長九郎を投げ上げる。

喜三　此奴等が惡企み、ついに覺えぬ提げ物を切られたが却つて幸ひ取返した、その中に入れてあつた證據の書附け。

ト長九郎を投げ

やつちやして來い、古主の御恩。せめて、九牛が一毛なりと、報ずる時節と思案して、借り着の裄丈、あわてふためき、先へ廻つて居るとも知らず、うまい〳〵と一杯食つて、これは〳〵御家老樣。ハ、、、、いかいべら坊ではござりませぬか。仔細と申すあらましは、ネイネイ、斯くの通りでござりまする。

半七　段々の御厚情。こなた樣のお庇がなくば、此奴等が企みにかゝり、どのやうな難儀に遭ひませうやら。エ、、忝なうござりまする。

喜三　勿體ないお禮のお詞。拙者めも明日は、御家中方のお供いたし、早く歸國仕れば、最早お目にもかゝりますまい。申すまでにはござらねども、隨分お身を大切に。

半七　左樣なら明朝は、早くお國へござりまするか。
喜三　御機嫌ようお暮らしなされませ。
　ト善右衛門、尻を捲くり、喜三郎が側へどつさり坐る。
善右　ヤイ、すべた野郎め。御家老樣だと吐かしたうぬ、大騙り、大泥坊だぞよ。
丹藏　オヽ、さうぢや〳〵。お屋敷へ注進したら、首と胴とは別れ〳〵。
兩人　サア。
喜三　サア。
三人　サア〳〵〳〵。
喜三　默れ、猿松めら。身共の先へ御家老樣の、お名を騙つたその上に、お代官との云ひ合せ。大泥坊めが、此方から訴へようか。
善丹　サ、それは。
喜三　うぬらを爰に捨て置けば、ろくな事はひろぐまい。道までおらが送り狼。
　ト善右衛門先に、一人づゝ首筋持つて、門口へ抛り出す。喜三郎も表へ出て
　左樣ならば半七さま。
半七　是非お歸りなさるゝか。
喜三　御縁もあらば
半七　又重ねて。
兩人　うぬ。
　ト戻らうとする。喜三郎、木戸をぴつしやり閉め
喜三　サア、うせやアがれ。
　ト唄になり、兩人を送つて、喜三郎、向うへ入る。半七、こなし、
半七　惡人めらが企みにかゝり、危ない所を助かつたも、廻り廻つて實父のお庇、忝ない。それはさうと、大切なお屋敷の御用、仕入れの金、茂右衛門に掛合はう。さうぢや〳〵。
　ト暮れ六ツの鐘鳴る。半七、奥へ入る。引き違へて、次郎作、勝次郎、出て
次郎　御馳走になりました。大きに食べ醉ひました。面白うて堪へられぬ。
　トひよろ〳〵する。
勝次　その足元では危ない夜道。明日歸ればよい事に。
次郎　イエ〳〵、この機嫌でふら〳〵と、やらかすが樂しみでござりまする。
　ト云ひ〳〵、最前の畚を出して、擔ひ

おかみさんへよろしく。
ト門口を出ようとして、斧が邪魔になるこなし。
何奴ぢや、惡い事をする門口ぢや、ハヽヽヽヽ。
勝次 怪我せぬやうに、氣を附けさつしやい。
ト唄になり、花道へかゝり
次郎 アレ〳〵、道が三つにも四つにも見える。こいつは堪らぬ。
トひよろ〳〵しながら、向うへ入る。勝次郎、見送り
勝次 あの正直な在所者が、ハテ、氣狂ひ水ぢやなア。
ト奥、バタ〳〵にて、勘齋、三勝を引ッ立て出て
勘齋 日が暮れたら約束ぢや、五十兩受取らう。
三勝 サア、その金は。
勘齋 出來ずばわれを、茂右衞門どのへ。
ト引ッ立てようとするを、勝次郎、引きのけ
勝次 私しが金渡しませう。
勘齋 ドレ、受取らう。
ト此うち、向うより、お縫戻つて來て、門口を押し明け、五十兩を投げ込む。勝次郎、取上げ
勝次 耳を揃へて五十兩。
勘齋 ドレ。

ト取つて
オヽ、こりや正金で五十兩。
勝次 云ひ分はござりますまい。
勘齋 ハテ、金の降る日和ぢやないか。
ト合ひ方になり、奥へ入る。
三勝 ヤア、あの金は。
トお縫、表を開け
ぬひ 旦那どの、云ひ合せの夫婦喧嘩。
勝次 去り狀をなりたけ實にやつて
ぬひ 調へた五十兩。
三勝 エヽ。
ぬひ 心にかゝるはこの去り狀。
勝次 暇遣はし申さずところ實正なり。
トお縫、開き見て
ぬひ 氣の利いたこのずの字。
三勝 これ程までに
ぬひ 情は人の
勝次 爲ではない。
三勝 エヽ、忝なうござんすわいな。
傳吉 旦那さま〳〵。

勝次　オイ〳〵。
傳吉　御隱居樣がお呼びなされます。
勝次　いま行くぞ。
ぬひ　わたしはどうせうえ。
勝次　廊下から
ぬひ　ソツと
勝次　次の間へ。
ぬひ　大事ないかえ。
傳吉　旦那さま〳〵。
勝次　ヤレ、せわしない。
　ト　お縫は上の方、勝次郎は奥へ、入る。
三勝　身に引きかけて御夫婦とも、不便をかけて下さんす。これも因果かいなア。
　ト奥より、半七、出て
半七　三勝、爰にか。先刻は半七を、ひどい目に遭はせたの。今に頬べたが、ひり〳〵するわえ。
　ト云ひ〳〵、側へ坐る。三勝、物も云はず、ツイと立つ。半七、裾を捕へ
待て、お縫に聞けば藝者の中でも、男嫌ひと云はれた三勝。ところを今日から改めて、好きになつてもらはにやならぬ。
　ト引寄せようとする。
三勝　ほんにマア、厚かましい。まだろく〳〵に取入つて近附きにもならぬわたしを
半七　ずんど厚かましい。初めて惚れろは法度か。濡れぬ先こそ露とやら。どうあつてもわしが思ひを。
　ト無理に引寄せる。品よく振り切る。
三勝　エヽ、知らぬわいなア。
　トまた行かうとする。この時紙入れ落ちろ。
半七　コレ、藝者に情はないと云ふ、書き物もあるまいがの。
　ト引据ゑる。三勝、紙入れを見附ける。
三勝　この紙入れの金物は。
　ト半七、ちやつと取つて、懐へ入れようとする。此うち、筑波屋、最前の花活けを提げ、後へ出かけ居る。三勝、半七が手を捕へ
モシ、半七さん、お前、この紙入れの金物は
半七　なんだ、この金物か。おつな物が目にとまつたの。お氣に入つたら差上げようか。
　ト差出す。三勝、よく〳〵見て

三勝 こりや違ひのない

半七 ヤ。

三勝 モシ、こりやマア、どう云ふ事で、お前の手へ入つたのぢやえ。サヽ、その譯が聞きたうござんす。

半七 ナニ、この金物がおれの手へ。これにやア大分、話しのある事だよ。その話しさへして聞かせたら、後ぢやアおれが云つた事を、お主は叶へてくれるのか。

三勝 サヽ、マ、どうであらうと、その話しが早う聞きたい、聞かせて下さんせ。モシ、どうでござんすえ。どうでござんすえ。

ト急き込む

半七 ハテ、きつい急き込みやうの。そんならおれが話して、ちつと受け憎い話しだが、エヽ、忘れもしない五年後、しかも淺草から歸りがけ、紺屋新地と吾妻橋から猪牙で、アノ、兩國まで來たところが、まさか獨りも淋しいから、柳橋から船頭に連れを迎ひにやつた後、起きても居られず柏餅、待つて居る間にとろ〳〵と、寢耳に何か橋の上、ばつたり人音、キヤツと云ふ、女の聲に見上げる途端、どつさりおれが乘つた船

三勝 モシ、その船へ落ちたのは、まだ娘ではなかつたかえ。

半七 それサ。まだ手入らずのほんの生娘。何かと思うて探るのを

三勝 怖さに逢ふも川の中、引留められたが緣の端、

半七 味な心についなつて、有無を云はさず布團すつぼり

三勝 サ、その時初めて男の肌。

半七 知つた同志でもある事か。

三勝 知らぬお方に下紐も

半七 結ぶの神がどううろたへ

三勝 ひよんな事してそれなりに

半七 別れた折は

三勝 しかも闇。

半七 顏も覺えず

三勝 名も聞かず

半七 コレ、その跡に落ち散つた

三勝 モシ、その片割れはコレ爰に。

半七 ヤヽヽヽ、こりや、アノ、おれがこの金物と

三勝 紋も變らぬ

半七 三蓋松。

三勝 しつくり合うた紅入れの

半七　二人が仲の

三勝　慥かな證據。

ト思ひ入れ。半七、膽を潰し

半七　ヤ、、、、そんならその夜の

三勝　娘と云ふは

半七　其方であつたか。

三勝　男はお前でござんしたか。

半七　さうとは知らず

三勝　永の年月

半七　三勝。

三勝　半七さん。

筑茂　エ、、忌々しい。

ト花活けを打ち附けて割る。チョンと木の頭を入れる。

三勝　逢ひたかつたわいなア。

ト抱きつく。茂右衛門、エ、、と氣を揉む。キザミにて

幕

四幕目　洲崎武藏屋の場　三十三間堂の場

役名　田宮右內。筑波茂右衛門。武藏屋お作。奴、關內。番頭、長九郎。下人、彌八。娘、お通。下郎、雁助。同、吉平。幇間、傳吉。ぜげん、長八。時雨ヶ岡の妙貞尼。美濃屋三勝。厚倉次郎太夫。茜屋半七。

本舞臺、向う奧深に浪幕。三間の間、二重舞臺、見附け唐紙、東西とも葭簀張り障子屋體。いつもの所枝折り門。これに即席御料理の看板、欄間通り武藏屋と云ふ紺の半暖簾。すべて洲崎の體。よろしく、流行り唄にて、幕明く。

ト向うより厚倉次郎太夫、國侍ひの拵らへ。關內、武骨なる雇ひ中間にて、附き添ひ、出て

次郎　ナニ、關內とやら、身は當地始めてなれば、何事も不案內。この所は何と申す。

關內　私しも存じませぬ。

次郎　おてまへは當地の生れではないか。それに存ぜぬとは。

關内　この當地で生れましたが、いつも雇はれて、旦那方に附いて歩きまする。旦那衆の行かつしやる方へ行けばよいから、どこがどこか根から存じませぬ。

次郎　これはハヤ、怪しからぬ。オヤ、どうだ。何にもせよ、もそつと行て見ようか。

關内　やたらに行て御覽じませ。どこかへ突き當るでござりませう。

次郎　さう致さう。

ト始終、流行り唄にて、兩人、本舞臺へ來て

次郎　即席料理、其方、腹はまだか。

關内　甚だ惡うござりまする。

次郎　これで認めを致し、何かととくと問ひ合せて見よう。案内をかへ。

關内　いくらがの買ひませう。

次郎　ハテサテ、案内を乞へと申す事サ。

關内　八文ばかりがの買ひませうか。

次郎　これは不機轉な男だ。

ト關内を引退け

頼まうぞよ〳〵。

さく　ハイ〳〵。

トお作、女房の形にて出て

これはノ〳〵、ようお出でなされました。コレ、お客があるよ。お莨盆、お茶も早く。お銚子おやぞえ。

次郎　コレサ〳〵、これはいかな。もそつと靜かに致されい。

さく　ハイ〳〵。

次郎　關内どの、お身も魂ひを落しつけ、必らずともにうろたへな。得て、斯やうな所では、狂人にされるものおや。

關内　落しつける魂ひはござりませぬ。

次郎　然らば、それへ參つても苦しうないか。

さく　サア〳〵、お上がりなされませ。

次郎　許しやれ。

ト二重へ上がる。

ソレ、履き物を取られな。

關内　それより人が取りまする。

ト砂をはたき、持つて上がる。此うちお作、茶を酌んで來て

さく　お茶上げませう。
關内　ヘイ。
ト取らうとする。
次郎　待て。身共より先へ、不躾な奴。
ト取つて呑む。
さく　お酒を差上げませう。
次郎　されば
さく　お供のお前は御膳を上がりますか。
關内　お膳は固くて嚙めますまい。飯と酒とに致しませう。
次郎　身共も下戸、酒は少しでよい。
關内　肴は澤山に賴みます。
さく　畏りました。追ツつけ差上げまする。
次郎　時に、身共は元來上方の生れ。この度殿のお供いたし、初めての出府。この邊に仲町とか云ふ所がござるか。
さく　仲町は近うござります。
次郎　然らばおてまへ、美濃屋三勝と云ふ藝子。イヤ、當地にては藝者と　申すさうな、其許御存じでござるか。
さく　三勝どのは、一と云うて二も三もない藝者の飛び切り、誰れ知らぬ者はござりませぬ。今日は後程、私しの所へお見えなさるゝ約束でござりまする。
次郎　幸ひ〳〵、近頃面倒な儀にはござらうが、なんと、その三勝に、近附きにしておくりやるまいか。
さく　お易い事、お引合せ申しませう。
次郎　それは過分。餘り侮りがましけれども
ト紙入れより、二朱出し
莨でも求めさつしやい。
さく　有り難うござりまする。
次郎　とてもの儀ならば、一時も早う面談いたしたいものだが。
さく　左樣なら私しが、呼びまして參じませう。
次郎　それは重々御大儀千萬。
さく　爰は餘り端近でもござりますれば、あの小座敷で御ゆるりと
次郎　イカサマ、待ち合す其うち、酒飯の認めを賄ひ申さう。
ト此うち、關内、履物を前へ置き、手を組みて、キツと見詰めて居る。
關内、そりや何を致す。
關内　お召物の番を致し居りまする。
次郎　ハテ、正直な奴。

關内　その代り大食でござりまする。

次郎　ハ、、、、女中、お頼み申す。

ト唄になり、次郎太夫、關内、下手の障子屋體へ入る。ト向う、バタ〳〵にて、雁助、逃げて出るを、吉平、追ひかけ出て、花道にて

吉平　待ちやアがれ。

ト帯際を取り、引据ゑる。

雁助　邪魔ひろぐな。

ト振り放し、本舞臺へ駈けて來る。吉平、續いて追ひかけ、よろしく留め

吉平　コリヤ、御用金の泥坊は、うぬが主人の倅太郎であらうがな。サ、眞直ぐに白狀し居らう。

雁助　この野郎め、とんでもない事をまき出しやアがる。それにやア慥かな證據があるか。

吉平　べら坊め、證據がありやア、うぬにや問はない。最前土手の松蔭で、チラリと聞いたひそ〳〵話し。

雁助　ヤア、。

吉平　うぬが首筋、取ッ摑まへて證據にするのだ。

雁助　イ、ヤ、知らない、覺えはない。

吉平　吐かさにや吐かさう、

ト立廻る。

雁助　ア、、待つてくれ〳〵。何もかも云つてしまはう。

吉平　キリ〳〵ほざけ。

ト突き放す。

雁助　何を隱さう。これには段々、深い樣子のある事だ、その譯は斯うだ。

ト逃げ出す。

吉平　どこへ。おらを騙かつて逃げようとは、さうはさゝない。

雁助　ところを、

ト立廻つて、吉平をちよつと當て、一散に東の花道へ逃げて入る。吉平、むつくと起きて

吉平　うぬ、いづくまでも

ト追ひかけ入る。ト又、流行り唄になり、向うより三勝、藝者の形。傳吉、帮間。お作、連れ立ち出る。

さく　傳吉さん、昨日は

傳吉　お前樣、飛んだ目に遭はせなされた。後のコツプはひどくこたえました。

三勝　さうして、半七さんは未だ見えずかえ。

さく　ハイ、まだでござりまする。

三勝　急に逢ひたい事があるから、早う來て下さんせと、堅く約束して置いたに、何をして居さんすぞいなア。
傳吉　私しがちよつと見て參りませう。
三勝　御苦勞ぢやが、ついそこらまで。
傳吉　お迎ひ申して參りませう。
　ト花道へ行く。
さく　ドレ、私しは、お杯の用意を云ひつけませう。
　ト奥へ入る。始終流行り唄にて、向うより半七、お通の手を引き、出て
半七　お通、好きな物なんでも買つてやるから、サア、もそつと歩べ〳〵。
傳吉　茜屋の旦那樣。
半七　傳吉か。
傳吉　三勝さまの待ち兼ね。今あなたをお迎ひに參るのでございまする。
半七　それは御大儀。サア、行きませう。
　ト本舞臺へ來て
傳吉　ツイ、そこでお目にかゝりました。
三勝　オヽ、半七さんか。待ち兼ねました。お通、ようおぢやつたなう。サア、ちやつと爰へ來や。

　ト二重へ抱き上げる。
半七　おれも氣が急いたれど、お通めが道草で、はつこりと困り果てた。
三勝　お前も誰れぞに、負はせてお出でるとよい事を。
半七　サア、さうも思うたれど、外の者を連れて來ては、また何かと話しの邪魔。
三勝　それもさうぢやなア。コレ、其方に遣らうと思うて持玩を取寄せて置いた。その風呂敷を取つておくれ。
傳吉　ヘイ、これでございますか。
　ト風呂敷包みを差出し
　お話しもあらうから、先づ私しは勝手へ。
半七　商賣柄とて、氣を利かすな。
傳吉　旦那、後程。
　ト合ひ方になり、傳吉、奥へ入る。風呂敷を開き、持遊びを出し
三勝　サア、これを遣りませう。
つう　父樣、これ貰うた。
半七　オヽ、よい物をたんと貰うたな。見や、大分大人しくなつたではないか。
三勝　サイナア、ちつとのうち見ぬ間に、思ひの外大きう

なつたやうな。お前が育てゝ下さんすゆゑ、わたしもさつぱり落ちついて、とんと案じを助かつたわいなア。

半七　平左衛門どのに預けて置くも、親兄弟の事なれば、もつとも如才はなけれども、血筋は争はれぬもので、父様々々と云うて附き纒ひ居る。可愛いものではないか。

　ト三勝、こなしあつて

三勝　お前、いかう顔色が悪いが、定めてこの中からの金の事か。

半七　男づくで筑波めに、約束した仕入れの金。其方の譯お聞いてから、打つて變つた無理變替へ。御用の日限りは段々迫る。下職どもは毎日催促。斯う云うて居るうちも、半七が身は屠所の羊。

　ト三勝を見る、三勝、ぎつくり。

三勝　わたしが口から茂右衛門さんに、頼めば直ぐに出來る金。定めてお前も心では、働らきのない者と、よもや思うてもあるまいが、義理に義理缺く云ひがゝり、どう云ふもつれにならうやら、どうしたらよからうと、心一つにとつおいつ、ほんにこの頃では夜の目も碌に

　ト半七、氣を替へ

半七　エヽ、勿體もない。何も其やうに、案じる程の事でもない。金は世界の廻り物、又どうなりとならうわい。

三勝　さうぢやけれど、わたしもあれこれとお客の方へ、文を上げて置いたれば、もつとやそつとは手助けの、出來ぬ事もござんすまい。

　ト半七、わざとイソ／＼して

半七　金の無心聞く客なら、其奴どうで一通りぢやアあるまい。

三勝　エヽ。

半七　此奴どうか怪しいわえ。

三勝　お前もマア、思ひ出したやうに、いろ／＼の事を云ひなんす。コレ、お通や、父様があんな無理云うておやる。わが身、叱つてたも。

つう　イヤ／＼。父様はおりや可愛い。

半七　オヽ、さうぢや／＼。

　ト引寄せ

　コリヤ、お通よ。ナンノ、母がな、父様の云ふ事を聞かぬから、母様を叱つてくれ。

つう　母様め。

三勝　エヽ、モウ、女の親ぢやと思うて、エヽ、コレ、父様を叱るのぢやわいの。

半七　母樣を叱れ〳〵。
三勝　父樣を叱れ。
半七　母樣を叱れ。
　ト　お通、いろ〳〵顏見合す。
ハヽヽヽ。
三勝　ホヽヽヽ。
　トこなしあつて
アレ、見なされ、この間からお前の方へ、ちやつと馴染みが附いたゆゑ。
半七　イヤモ、子供程正直な者はないわいの。
　ト傳吉、出て
傳吉　三勝さま、上方のお侍ひが、あなたに近附きになりたいと、最前から待つてござるとの事。ちよつとお逢ひなされませぬか。
三勝　上方のお方。ムウ、半さん、どうせういなア。
半七　お客とあれば大事の商賣、おれは待つて居る程に、お目にかゝつて來るがよい。
三勝　初めてのお客さんなれば、ちよつと顏も直さにやなるまい。お通や、よい物を遣るが、其方も奥へ來やらぬか。

つう　イヤ、父樣の側に居たい。
半七　おれは爰に待つて居る。どちらへも行きやせぬ程に母樣と一緒に行て來や。
つう　アイ。
　ト三勝、こなしあつて
三勝　侍ひと云うて來たは、もしや
半七　ハテ、逢うて見りや解るぢやないか。
　ト唄になり、お通を連れ、傳吉、附き、奥へ入る。
よく〳〵おれが事が苦になるやら、目には一杯涙を溜めて、どうか見すぼらしいやうな。
　トほろりとする。奥より長八、女衒の形にて出て
長八　半七どのか。こなたに逢はうと思うて、先刻から待つて居た。サア、三勝が身請けの金、出來たなら受取りませうか。
半七　長八どの、全體あれが身の上の事は、勝次郎どのが呑み込んで、此方に金の調ふまでは
長八　コレ〳〵、なんぼ親方が承知でも、この長八が呑み込まない。オヽ、首代の判ついて、請けに立つは何の爲、よき出世の附いた時、歩一と祝儀をしめるが當てだ。身請けの客のかゝつた三勝、おてまへの方に金が出來ざア、

こちらへ遣らにやアならぬ。
半七　その客と云ふも合點。こりやてまへも筑茂めに取込まれたな。
長八　イヤ、筑茂か、ちよくらか、そりや知らぬが、さるお侍ひに頼まれて、世話するはおれが商賣。
半七　その侍ひは、どこの何奴ぢや。
長八　それ聞いてなんにする。三勝を遣る事が否なら、いま爰で金渡すか。但しは遣らうか。サア／＼、返事せい半七。サヽ、どうだ。と云うたら、定めて金は爰にはない、して、渡す時刻は、暮れ六ツの鳴るを合圖に才覺して、キッと渡すと云ふであらう、こりや、いつも芝居でする格で、大概知れたものだ。日のうちは待つてやる、その代り、暮れ六ツがゴンと鳴ると、三勝はお侍ひへ。その時必らず四の五の云ふな。半七、キッと詞を番うたぞよ。ア、しんど。ドリヤ、其うちに一杯やらう。さらば。
　トついと奥へ入る。合ひ方。
半七　おのればかり合點して、一人しやべつて行き居つて、性急な奴ではある。それは兎もあれ大切な、お屋敷の御用金、才覺とても外に仕様もない。茂右衛門が云うた一言、三勝を遣りませうと、此方から投げかけて、筑茂めを頼むが近道。それがよい／＼。
　トつか／＼と向うへ行かうとして、キッととまり
それでは是非三勝を変に遣らずばなるまい。五年以來おれゆゑに、辛抱苦勞した女を、みす／＼あの茂右衛門めに。こりや、立つても居ても居られぬわい。
　ト誂らへの唄になり、向うより妙貞、比丘尼の拵らへ水晶の珠數を持ち、小女一人、附いて出る。花道にて行き違ひ、模様あつて、妙貞、本舞臺の方へ行きて
妙貞　ア、モシ／＼、あなたに物がお尋ね申したうござります。
半七　まだ四ツ前でごんせう。
妙貞　武藏屋と云ふは、どれでござりまするな。
半七　お前、勝手にさつしやれ。
妙貞　武藏屋を尋ねますのでござりまする。
半七　わしは茜屋半七でごんす。
妙貞　エヽ、すりやお前が茜屋の、半七さんでござりまするか。
半七　手水場なら左へ廻つたり。
　ト始終夢中のこなし。

妙貞　ヤレ〳〵、嬉しや〳〵。私しは根岸の者でござりまするが、お前にお目にかゝりまして、お話し申したい事がござりまして、お内へ人を上げたれば、武藏屋へ來てござるとの事。それゆゑわざ〳〵お後を追つて、參つたのでござりまする。

ト この時、半七、フッと心附き

半七　先刻からひつこう、相手になつて居さつしやるが、わしに何ぞ用でもありますか。

妙貞　ハイ、折入つてお前樣に。

半七　ついぞ見た事もない尼御樣。

妙貞　サア、お近附きではなけれども、詳しう譯を申したなら、早速に解る話し。

半七　何か樣子は知らねども。

妙貞　何を云ふも爰は門中。

半七　ハヽヽヽ、こちらへござりませ。

ト 三人、本舞臺へ來て

立ちながらの話しでもあるまい。サヽ、爰へ〳〵。

ト 二重舞臺へ上がり

妙貞　小夜や、わが身は、お勝手へ行て待つて居や。

小女　ハイ〳〵。

ト入る。

半七　して、マア、この半七には何用で、遠い所を。

妙貞　その話したい譯と云ふは

ト あたりを見て、袂より比翼紋の誰袖を出し

さて、お前、これ見覺えてござりまするか。

ト 半七、取つて

半七　こりや慥かに三勝が、千住寺へ奉納の、繪馬に掛けたるこの誰袖。

妙貞　この間千住寺へ、回向に參つたその折から、風の廻りに吹き散る誰袖、左の肩にかゝりしゆゑ、取上げて、見れば袖の裏に、願主の名を記しあれば、一方ならぬこの導き。

半七　イカサマ、それは不思議な事。何は兎もあれ、全體お前は。

妙貞　この袖に名を記した、三勝に血を分けた、生みの母でござりますわいな。

半七　エヽ。

妙貞　サヽ、斯うばかりでは御合點が行きますまい。この事ばかりは尼が口から、一生人には語るまいと、佛へ誓ひは立てたれど、話さにやならぬ、譯と云ふは、迫り迫

つた
ト合ひ方
もと私しが兩親は、米一合も取つた武士の果。居ても打詰らして十五の時、東金と云ふ町人へ、望まれて腰元奉公。程なう兩親も過ぎ行かれ、今以て親類と云うてはなし、わたしを育てた乳母親子は、世にある時の家の譜代、乳兄弟の平左衛門を、兄とも親とも力に思ひ、頼り少なう暮らすうち、緣は異なものゝトした事で、旦那樣のお手がかゝり、いつしかお腹に宿り、恥かしいやら怖いやら、ある中にも人にすぐれ、嫉妬深い奥樣ゆゑ、もし顯れたらどのやうな、諸い辛い目に遭はうかと、臥猪の床に棲む心、密かに旦那の仰しやるには、不便とは思へども、内の手前、世間の聞え、これぎりで暇やると、袂こぼるゝ涙金、御緣の切れ目と悲しさも、是非に及ばぬ淺草の乳母の所へ身を寄せて、産み落したはあの三勝。藁の上から緣切つて、平左衛門の娘にして、味氣ない世を見限つて、跡を彼岸の草隱れ、細き煙りも一筋に、佛に仕ふる念佛三昧、思ひ切つてはなか〳〵に、生顔を見たばかりで、永の月日を顏も見ず、まして便りもせぬ女が、今さら云うて打明かし、名乗らにゃならぬやうになつたは、よく〳〵の事であらうと、推量して下さりませいなう。
ト いろ〳〵こなしあつて云ふ。半七、思ひ入れあつて
半七　思ひがけないと申さうか、夢見たやうな今のお話し、三勝が聞きましたら、さぞ驚ろくでござりませう。その身は元より私しとても、今の今まで平左衛門の、眞實の娘さやと、思ひ詰めて居りましたが、それ程立派な恩愛を、思ひ切つたお前樣が、いま急に改めて、私しへお話しなさるゝは。
妙貞　この素性を話した上、改めてお前樣に、お願ひ申さにや、ならぬ譯合ひ。
半七　とは、又、何事でござりまする。
妙貞　半七さま、三勝と緣切つて下さりませ。
半七　エ、。
妙貞　驚りは道理でござんす。何を隱さう去年の秋、私しが九死一生の大病、どこからどうして聞きつけたか、平左衛門が駈けつけて、ソリヤ醫者よ藥よと、毎日々々加減の人參、わたしは熱に冒されて、何も樣子は知らねども、藥の價は大枚の、積つたところ五十兩、筑波屋茂右衛門と云ふ人に、借り請けた證文に、金が濟まずば三勝を、妾に遣らうと書き入れたは、無筆を知つての企み事。

代官所へ願はれては、一旦判を据ゑたれば、今さら云ひ譯の濟ましやうもならず、明日はいよ〳〵平左衛門は、入牢せねばなりませぬわいなう。昔は兎もあれ水子から、育てられたる大恩の、義理ある親が牢屋へ入るを、みすみす娘の身で、見て居られうか半七どの、生みの母が餘所事に、どうマア、眺めて居られうぞいなう。詳しう聞けばお通と云ふ、子まで生した半七どの。仲睦まじうせよかしと、祈らぬ親が世にあらうか。四十に足らで死ぬるこそ、安からめと兼好の、筆のすさびは今の身の上。とてもこの世を捨てゝ、生き甲斐もなきこの尼が、去年の秋の煩らひに、めでたう往生遂げたなら、今の憂き目は見まいもの。二十の年から十八年、願うた後世も水の泡、鬼になつて……緣を切る。これを思へば世の中に、義理ほど重いものはござらぬわいなう。

ト身を慄はして泣く。半七も段々胸に迫りたる思ひ入れ。

半七　段々の樣子を聞けば、御尤もとも御道理とも、申さうやうはござりませぬが、三勝と斯うなりましたは、色ばかりの事でもなし、深い仔細もござりますれど、義理に義理をしがらんだ、切ない心を察し入り、成る程、お頼み聞入れました。三勝と緣切りませう。

ト思ひ入れ。

妙貞　ヤ、、なんと云うて下さるぞ。

半七　併しながら、最前からの一部始終、打明けて聞かしたならば、兩方の義理に責められ、不料簡でも出さうかと、そこが案じ過されます。何事も私しが、心一つに納めまして、愛想のありたけを、疊みかけて云ふならば、さすれば親へ孝行と、云ふ所へ引かされて、茂右衛門が方へ行きさへすれば、お前の義理も孝行も、圓う納まる三方四方。思案の底は私しに、任せて置いて下さりませ。

妙貞　半七どの、よう聞分けて下された。嬉しうござる、忝なうござんすが、とてもの事に餘所ながら

半七　緣の切れるをとつくりと、見て落ちついて下さりませ。

妙貞　なんにも云ひませぬ。これでござります。

ト手を合す。

半七　これは又勿體ない。わしは兎もあれ、お通が爲には

妙貞　孫かとも云はれぬは

半七　儘ならぬ世の成行き。

妙貞　みな前生の約束事。

半七　今お別れ申しますれば

妙貞　重ねてはもう逢ひますまい。

半七　隨分とゝにお達者で

妙貞　お前も御無事で、さらばでござりまする。

ト行かうとする。半七、右の片袖を取上げ

半七　これはあなたへ

ト差出す。妙貞、取つて

妙貞　繪馬に懸けたる片袖の

半七　散つて落ちたは緣のない

妙貞　知らせであつたか。

ト顏見合す。半七、外ける。妙貞は袖に顏を當てる。これをキツカケに、チヤンと唄になり、妙貞、泣く泣く上手の屋臺へ入る。半七、俯向いて居る。ト向うより團平、中間の形、氣を急き、出て

團平　直々に逢ひたいものだが〳〵。

ト本舞臺へ來て

武藏屋、爰だ〳〵。

ト切り戸を入り

ちと、物が問ひたい、これに

ト半七を見て

半七、それに居召さるゝか。

半七　これは右内さまの御家來團平さま。

團平　旦那の急御用に就き、おてまへ宅へ參つた所が、これへと聞いて一目散に、駈けつけ參つた。

半七　それは御苦勞にござりまする。マア〳〵、これへ。

團平　イヤサ、なか〳〵左樣な悠長な儀ではない。半七どの、御自分、なんと心得てござる。富士の御狩場御用の幕は、七日以前に染め上げて、下屋敷へ持參の筈を、段々の願ひゆゑ、旦那右内さまのお執成しにて、昨日まで延ばせしところ、暮れになつても音もせず、今朝は家老中より、旦那へ向けて嚴しき催促。サ、身共と一緒にたつた今、染め物持參しやれ。早く〳〵。

半七　重ね〳〵の不調法、大切なる殿樣の御用。星入り、染め斑などがござりましては、私しは格別、お掛り右内さまの御面皮と存ずるゆゑ、この間も申しまする通り、染め地は殘らず打ツちやり、改めて二度の仕入れ、手間取りの日限延引。何卒明日晝過ぎまで

團平　飛んだ事をお云やる。殿を始め一家中、御發足は明卯の刻。それまでに、仕立てを出す一番組へ、渡さねば

旦那の武士がすたり申す。サ、立ちやれ、いま持參しやれ。

半七　然らば何卒、八ツ過ぎまで。

團平　ムウ。

ト空を見て

まだ九ツには間もあらうが、八ツ半までは凡そ二時。

半七　それまでに糊も乾き、干上がり次第手筈を致し、直さま持參仕りまする。それまでのうち旦那樣の御前を團平さま、これでござります／＼。

ト拜む。

團平　おてまへとても稼業の儀、如才のあらう筈がない。然らば身は立歸りて、その由を申し上げる。必らず少しの遲刻もならぬぞ。

半七　キツとお間に合はせまする。

團平　お暇申す。

ト花道へかゝる。半七、見送り

半七　御苦勞でござりまする。

團平　八ツ半だぞ。

半七　畏まりましてござりまする。

トまた、行かうとして、振返り

團平　染め物延引いたせば、旦那のお身の上だぞ。

半七　承知いたし居りまする。

トまた、行かうとして

團平　僅か二時だが、えゝか。

半七　よろしうござりまする。

ト云ひ／＼、段々附いて行く。

團平　旦那が延引いたせば、染め物樣の御身の上だぞ。

半七　エヽ。

團平　エヽ、馬鹿な男だ。

トついと向うへ入る。半七、花道に立ちながら、跡見送り、吐息つく。合ひ方になり

半七　手詰めになつた僅かの刻限。もうどう……さうぢや。

トついと奧へ入る。ト和らかなる合ひ方。三勝出て

三勝　風引かぬやう、氣を附けて下さんせえ。

ト云ひ／＼、奧より出て

オヽ、ほんに子供と云ふ者は、罪のないもの。始めての所でも、すや／＼とよう寢やる。どうやら羨やましいやうなものぢや。

ト內より、お作、出て

さく　三勝さん、爰にござりまするか。新場からお返事が

參りました。
三勝　オヽ、待ち兼ねて居た。ちやつと見せて下さんせ。
さく　左樣なら、慥かにお渡し申しまする。
　ト文を渡して奥へ入る。三勝、開き
三勝「詳しき文通より、推し參らせ候ふ。御申し越しの事隨分承知にて候ふ、四五日のうちには參り候ふまゝ、その節持參いたし……」
　ト讀みさし
四五日過ぎて、何の役に立つものか。マア、これは間に合はぬさうな。
　ト傳吉出て
傳吉　へい、仙臺河岸へ行て參りました。
三勝　よう早う歸つて下さんした。角錢さんに逢うて下さんしたか。
傳吉　さればでござりまする。今朝疾から家内連れて、江の島詣りをなされ、明後日でなくつちやお歸りなされませぬと、手代の六兵衛どのが申されました。
　ト三勝、ムッとして
三勝　エヽ、モウ、今日また、江の島參りをすると云ふ事があるものかな。
傳吉　へイ。
三勝　これぢやに依つて一昨日から、文を上げて置いたのぢやわの。
傳吉　へイ。
三勝　いま返事さしやんせいで濟むかいな。
傳吉　へイ。
三勝　此方は八ツ頃までに、いるのぢやわいなア。
傳吉　へイ。
三勝　サア、どうぢやいな。
　ト疊を叩いて、腹立てる。
傳吉　私しにどうか存じませぬ。
　ト頭を搔く。
三勝　あんまり阿房らしいわいなア。
　ト傳吉、おづ〳〵しながら
傳吉　歸りに芝の泉岳さまにお目にかゝりまして、お文をことづかりましてござりまする。
三勝　そりや幸ひであつた。ドレ、見せて下んせ。
傳吉　へイ。
　ト文を渡し
左樣なら、私しは

ト行かうとする。

三勝　なんぞ包んだ物でもなかつたかえ。

傳吉　イエ、逢うたばかりでござりまする。

ト つい と入る。三勝、封を切る。

三勝「この間はゆる〳〵御目もじなし、喜び入り候ふ、その節お頼みの事、隨分〳〵承知にては候へども、當月中には勝手悪しく」……これも斷わりの文言。人にくれ〴〵れ頼まして置いて、候へどもが好かんわいなア。

ト狀を打ちつける。

本所の四目屋さんは、久しうお出でず、眞間の紅葉屋さんは義理が悪し

ト いろ〳〵思案して

こりやマア、どうしたらよからう。

ト當惑のこなし。合ひ方になり、次郎太夫、障子屋體より出でて

次郎　それにござるが、三勝どのとやらでござるか。

三勝　アイ、私しは三勝でござんす。エヽ、あなたは今、噂のあつた

次郎　近附きになりたいと申す

三勝　上方のお侍ひ樣。

次郎　誠にハヤ國元までも、名高い其許。不思議な緣で御意得申した。元來國者にて武骨の拙者。失禮の儀もござらば、眞平御容赦下されい。

ト手を突いて云ふ。

三勝　如何にお武家樣ぢやとて、それはマア餘りお堅い。マア、お手を上げて下さんせ

次郎　然らば御免下されう。時に三勝どの、早速ながらおてまへに、お頼み申し上げたい儀がござる。

三勝　どう云ふお頼みか知らねども、身にさへ叶ふ事ならば

次郎　お聞き屆け下さるか。

三勝　マア、仰しやつて御覽じませいなア。

次郎　その頼みと申すは

ト云はうとして

何ともハヤ、

三勝　どう云ふ事でござんすえ。

次郎　仔細と申すは別儀でも

ト また云はうとして、三勝を見て、こなしあつて

どうもハヤ、氣の毒千萬。

三勝　いから云ひ兼ねなさんすは、御仁體と云ひ、お年配

エヽ、聞えましたわいな。どれぞ女郎衆か藝者衆に、あ
なたの思惑でもござんして、それでわたしに。
次郎　イヤ、外の女に用事はござらぬ。矢張り三勝どの、
こなた樣に。
三勝　どうでもわたしに。
次郎　申し出たすも面目ない。
　ト三勝、こなしあつて
三勝　お初にお目にかゝつたわたしを、御深切なお志し、
有り難うはござんすが、あなたは勝手を御存じあるまい。
上方の稽古さんとやらは、色客と云ふがあつて、あれに
もこれにも帶紐解き、添臥しをなさんすと、聞いては居
れど爰の土地は、其やうな自墮落な、身持ちの藝者は只
の一人もござんせんわいなア。
　ト此うち、次郎太夫、さうではないと云ふこなし。
殊にわたしは茜屋の、半七さんと云ふ殿御のある身、悪
うは聞いて下さんすな。どうもあなたのお詞は。
次郎　イヤ〱、三勝、手前、御自分に執心などゝ、左樣
な所存は且つ以てござらぬ。
三勝　それに又、今の樣子。
次郎　おてまへ、いま云はれた、茜屋半七が儀に附き申し
て
三勝　なんと云はしやんす。
　ト合ひ方。
次郎　何を隱さう、身共ことは、和州櫻井家に仕官いたす
厚倉次郎太夫と申す者。身共が兄は五條村の郷士、甚左
衞門秀晴と名乗りしが、悴甚吉、幼少の節、神田紺屋町
の町人、茜屋半左衞門方へ、一生不通の養子婿にくれ申
した。
三勝　ムウ。そんならあなたは、半七さんの眞實の叔父御
樣。
次郎　如何にも。この度殿のお供に附き、着いたすが否、
神田表の茜屋方へ尋ね參り、樣子は詳しう聞き申した。
三勝どの、おてまへはなう。
　ト思ひ入れ。
御自分ゆゑに一人の甥御を、奈落へ沈め申したわえ。よ
く聞きやれ。云ひ號けの娘そのは、健忘とやらん業病に
て、言語をも辨まへず、俗に云ふ色氣狂ひとか申すもの
茜屋の身代は、風の前の灯火同然。元を糺せば半七が、
おてまへに誑かされ、稼業の事も夢現。馬鹿めにかせ
よお園めは、半左衞門が實の娘。血筋の女を袖にして、

茜屋の身代を潰し、養父の位牌へどの面提げて、なんと云ひ譯があらうと思ふ。身共が斯う云ふからは、弓矢八幡、おてまへと半七が手を切つて、園と夫婦にせねば武士が立たぬ。サ、目の前に、物の見事に、半七と離縁いたせ。その一言を聞くまでは、この座は動かぬ。サアサア、三勝、返事ぶちやれ、ドヽ、どうだ。

ト力み返つて云ふ。三勝、こなしあつて

三勝 詳しい譯を御存じなければ、一途なあなたのお心でさう思し召すは御尤も。全くわたしが半七さまを、お客にすると云ふやうな、さもしい事ではござりませぬ。

次郎 イヤ〳〵、その云ひ譯も聞くに及ばず。どうお云やつても遊里の賣色。お身が半七を騙した嘘で、眞か嘘をこぼす、身共も網にかけようでな。商賣に精を出すはハレ、天晴れな畫狐だなア。

三勝 狐は愚か犬猫と、蔑すまれても、半七さまゆゑなれば、ちつともいとひは致しませぬ。

次郎 すりや、身共が詞をも、聞入れぬか。

三勝 お免しなされて、下さんせいなア。

次郎 エヽ、さりとは死太い女、承引せぬとて、其まゝに免さうか。達て爭はば、オヽ。

ト柄に手をかけ

この一刀にて、打ち放すぞ。

ト脅す心にて云ふ。三勝、こなしあつて

三勝 サア、お手にかけて下さんせ。

次郎 ヤア。

ト襟くつろげ、次郎太夫が側へ詰めかけ

三勝 サア、切つて下さんせ。

次郎 サア、それは。

三勝 サア〳〵。

ト段々に押し詰め

いつそ死んで、今の苦勞が助かりたうござんすわいなア。

ト次郎太夫、三勝を引き廻し、顔をキツと見て

次郎 すりや、命に替へても半七を

三勝 息あるうちはなんとマア、思ひ切られませうぞいなア。

ト次郎太夫、横手を丁と打ち

次郎 ハヽア、誠に死地に入らざれば善士となる事能はず、遊里の女に魂ひを奪はるゝは、花の美しきのみを愛して茨垣を知らぬたわけ者と、笑うた身共が却つてたわけ。冬枯れの櫻を見て、春の盛りを知らぬ譬へ。藝者の中に

も、まさかには、お身のやうな誠ある、貞節なる者もあればこそ、町人は家蔵をなくし、百姓は田畑を離れ、先祖代々の知行俸禄、惜し気もなく打ッちやるは、至極尤もなる事だ。五十に及ぶ次郎太夫、始めて遊里の女に出逢ひ、始めてこの理を分け申した。最早何事も申すまい。三勝、堅固に暮らしやれ。

ト差添を取り、腹切らうとする。三勝、あわてゝ留め

三勝　ア、モシ滅相な。

次郎　エヽ、面倒な。

ト引退け、また切らうとするを、いろ／＼と留め

三勝　アイナア、誰れぞ來て下さんせいなア。

次郎　エヽ、喧ましいわえ。

ト睨む。

三勝　ハイ／＼／＼。

ト云ひながら、立廻つて、刀を静かにキッと押へ

あなたはなんで、お腹をお切りなされます。

次郎　何ゆゑとは、よく思うて見さつしやれ。浮かれ女同然のてまへすら、色情の儀に依つて命を惜しまぬではないか。刀を手挾む次郎太夫、肉身甥御の半七が、義理ある養父の家名を潰し、天道の憎しみにて、その身の果は野末の小家、菰を被るは知りながら、意見も加へず見遁がしては、武士の義もなく勇もなし、とても腐り合うた悪縁、切り難いを切らうより、身共が腹を

トまた突くを

三勝　コレ、逸まつて下されまするな。あなたのお詞を立てまして

次郎　ヤア

三勝　半七さんの事に、フッツリと

次郎　なんと

三勝　思ひ

トこなしあつて

切りますわいなア。

ト身を打伏して、泣く。

次郎　そりや、おてまへ本心か。

三勝　現在殿御の叔父親さま、わたしが胸の劍刃で、なんと、殺されませうぞいなア。

ト次郎太夫、三勝が兩手を取つて

次郎　くど／＼と禮は云はぬ。主人より外次郎太夫が、下げぬ頭、兩手を突いて

ト三勝、その手を引き分け

三勝　勿體ない。

ト次郎太夫、振り切つて

次郎　御禮申す。

三勝　アレ、又わたしに、罰が當りますわいなア。

次郎　その心底を聞くからは、とてもの事に今一種。

三勝　外にあなたのお頼みとはえ。

次郎　御身が心のほだしに、魂ひが天界に飛び去る半七、釋迦孔子の意見でも、所詮思ひ切る氣はあるまい。てまへ、口から半七に、緣を切つて下されい。

ト三勝、こなし。

サヽ、云はれまい、身を切るよりも辛からうが、めぐりめぐりて、彼れが身の爲。

ト三勝、泣く。

但し否か、不承知か。

トきつと云ふ。

三勝　畏まりましてござりまする。

トこなしあつて云ふ。

次郎　よく聞き分けて下された。それで身共が武士も相立ち、半七が身も納まり、茜屋の家名相續。最前ちらりと承れば、半七めも爰へ、慥かに參り居るさうな。とてもの儀に、落着を餘所ながら見申したい。萬事よろしく頼み入る。

ト思ひ入れあつて、立ち上がり

姿と云ひ操と云ひ、かゝる遊里に斯程の貞女。芥の中の花ぢやなア。

ト獨吟の伊勢音頭になり、次郎太夫、下の障子屋體へ入る。

〽淺澤の、池に花咲く杜若、濁さば水は濁るとも、花の科ではないわいな。よい〳〵〳〵、よいやな。

ト此うち、三勝、奥を見て、また障子屋體の方を見て右の二本の文を取上げ、寸々に引裂き、捨てゝ、思案して、書置を書かうと云ふこなし。あたりを見て、硯がないゆゑ、取りに行かうとする。唄の後、合ひ方。奥より、お通出て

つう　母樣。

三勝　オヽ、お通、目が覺めたか。ドレ〳〵。

〽鶯の、雛に敎ふる囀りも、春風に散る梅の花、鳥の科ではないわいな。よい〳〵〳〵、よいやな。

ト三勝、最前の持遊びを並べ、いろ〳〵あつて

コレ〳〵、お通や。いま母さんが敎へる事を、よう覺え

て居て、父さんに云うてたもや。
つう　アイ。
三勝　オヽ、賢い〳〵。書置の事。
つう　書出しの事。
三勝　エヽモウ、何を云やるやら……一つ。
つう　二つ。
三勝　これはしたり、わしが云ふ通りを云ふのぢやわいな
う。よいかや。
　ト思ひ入れ。お通、俯向く。
書置の事。
つう　書置の事。
三勝　オヽ、さうぢや〳〵。
つう　さうぢや〳〵。
三勝　又、あれいなう。
つう　又、あれいなう。
三勝　ほんに、子供は正直な。わしが云ふ通り云へと云ふ
に依つて、こりや、母様が悪かつた。もうよい〳〵。
　トお通を引寄せ
　この頭是のない者を、後に残して
　へ雁金の、花を見捨てゝ歸るのは、情知らずや花知
らず、花の科ではあるまいし。よい〳〵〳〵よい
やな。
　ト此うち、半七、煙草盆提げ、奥より出る。三勝、物を
云はうとして、默つて、下の方へ行つて居る。
つう　父様。
　トこれにて、三勝、見て
三勝　オヽ、半七さん、いつの間に。
半七　三勝、どうぢや、てまへの方に金は調うたか。
三勝　イヽエ。
　ト思ひ入れ。
半七　なんの出來やう。さうした働らきのある女なら、お
れも、これ程、苦勞はせぬわい。
三勝　わたしの働らきのない事が、やう〳〵今知れました
か。お前もおそいお方ぢやなア。
半七　もう〳〵、ふつ〳〵と愛想が盡きた。
三勝　エヽ。
半七　そゝ髮立つ程、嫌になつた。
三勝　それではお前
　ト立つて行かうとして、下の屋體へこなしあつて
そりやお互ひ。

半七　ヤア。
三勝　わたしや疾から、愛想が盡きて居るわいなア。
　ト同じく立ちかゝり、上の屋體を見て
半七　さうであらう。おれもさう思うて居る。アタ鈍くさい。
三勝　茂右衛門さんの方へ行くが、父様も勝手になる、わたしも浮かみ上がる事。
半七　すりや、本當に行く氣か。
三勝　機嫌よう遣つて下さんせ。
半七　うぬ。
　ト煙管振り上げ、又チッとなる。
三勝　エヽ、勝手にさんせ。勝手にせいぢやいなア。
半七　例へ馬鹿でも、べら坊でも、お園と改め女夫になつて、睦まじう可愛がらう。
三勝　そりや眞實で
半七　云ひ號けのおれが女房に、なるが不思議か。わりや腹立たぬか。
三勝　なんともないわいなア。
　ト半七、いろ〳〵あつて、紙入れを出し
半七　エヽ、忌々しい。自由に放れやがらぬ。
　トむしやくしや腹に、引ッぱなし
縁切つたと云ふ、印ぢやぞ。
　ト打ちつける。
三勝　こりやどうも。
　トこの時、障子屋體より、次郎太夫の裾見えて、バタバタ。
　ト半七、お通を連れて向うへ出て
慥かに受取りました。
半七　お通、わりや、この父が可愛いか。
三勝　但し、母が、可愛いか。
つう　父様も母様も可愛い。
半七　エヽ、ぬめたな餓鬼ぢや。今、父と母が縁切つて別れるが、わりや父が方へ來るであらうな。
つう　イヤ、母様の方へ行く。
半七　阿房め、父が方へ來ると、何なりとわれが欲しい物買うてやる。又あの母に附いて行くと、血を絞つて毛氈にするが、それでも母の方へ行きたいか。
つう　父様には乳がない。否ぢや〳〵。
　トこの時、妙貞、障子の間より。手を出して拜む。半七、見て

半七　おのれ、無理云ひ居ると、あつゝを据えるぞ。

ト襟髪取つて、引寄せるを、三勝、捥ぎ放し、抱き取る。

三勝　コレ〳〵、よう云うた〳〵。なんにも知らぬこの子にまで、これがなんと

ト次郎太夫、障子の間より、手を出し、柄に手を掛ける。三勝、これを見て

ハア。

ト抱き締め、大泣きに泣き落す。半七、ツイと寄つて

半七　そのうぬが吠える涙を、汗になとかさやがれ。何奴がどう吐かしても、お通はおれが胤、畜生のやうなうぬには渡さぬ。放せ〳〵。放し居らう。

ト無理に引き取る。

つう　堪忍ぢやわいなう。

半七　大事ない、泣くな〳〵。コリヤ、親子は一世、面の見納め。

トお通を突きやる。

三勝　コレ、

ト取りつくを

半七　何しやがる。

ト惨う踏み倒し、ツイと障子屋台へ入る。三勝、いろいろあつて

三勝　エヽ、胴慾な半七さん。わたしこそ覚悟の上。お前はそんな水臭い、心になつて居さんすとは、わしや夢にも知らなんだわいなア。可哀やお通が寝覚めには、母を慕うて歎くであらう。乳房を焦れて泣くであらう。思ひ過して死ぬるにも死なれもせず。まして此まゝ永らへて片とき片時居られうか。こりや、なんとせう、どうせうぞいなア〳〵。

ト大泣きに泣く。バタ〳〵、早替りにて、次郎太夫出て

次郎　始終はあれにて見届けた。忝ないと申さうか。命に替へ、その身に替へ、我が子の恩愛に思ひ比べ、貞節の心、半七が為には守り神。初松魚の辛子より、生れて泣かぬ次郎太夫が、熱湯の涙を溢したわいなう。盡未來まで恩は忘れぬ。エヽ、忝ない。

ト三勝、むつくと起きて

三勝　さうぢや。

次郎　こりやどこへ。

三勝　どう思ひ直しても、せめて一度お通が顔。

次郎　イヤ、それでは却つて
三勝　邪魔なさんすな。
ト向うへ突き飛ばし、ツイと入る。次郎太夫、起き直り
次郎　こりや、待て〳〵。ア、、さうぢやなア。人間の苦樂は糾へる繩の如く、例へ萬劫を經と云ふとも、恩愛の紲は斷ち難しと、佛の金言、思ひ當つた。子まで生したる二人の者、世界の義理に責められて、心にあらぬ退き去りは、苦しうなうてなんとせう。長生きすれば恥多し。是非もなき世の有樣ぢやなア。
トばた〳〵にて、早禱りにて、妙貞、出て
妙貞　申し、伯父樣。
次郎　さう云ふ御邊は。
妙貞　三勝が生みの母。
次郎　さては、最前よりあらましを
妙貞　殘らずあの一間の内にて
次郎　互ひに若氣の
妙貞　盛りと盛り。
次郎　蕾に足らぬお還まで
妙貞　憂き目を見するも
次郎　義理と義理。
妙貞　燒野の雉子、夜の鶴。
次郎　地を走る獸まで
妙貞　恩愛に迷ふは
次郎　生ある慣ひ。
妙貞　世の譬へにも
次郎　申す通り
妙貞　子を持つて
次郎　泣かぬ親は
兩人　ござらぬわいなう。
ト兩人、手を取り合ひ、泣く。ごん〳〵と七ツの鐘、鳴る。この道具をぶん廻す。
本舞臺、一面通し二重舞臺、見附け、浪幕、三十三間堂開帳の立て提灯二つ。雁助、吉平、金財布を奪ひ合ひ居る。浪の音、木魚入りの合ひ方にて、道具納まる。
吉平　心得ぬ金財布、詮議の糸口、此方へ渡せ。
雁助　猪口才な嶺松め、この金は若旦那角太郎さま御所持の金子。

ト立廻り。
吉平　イヤ、四年以前、紛失したる御用金。
雁助　それには又、慥かな證據があるか。
吉平　一兩々々お家の極印。
雁助　ヤア。
吉平　中改めて。
ト引き取らうとする。
雁助　さうはならぬ。
ト爭ひ、立廻りにて、兩人、下座へ入る。上手より、半七、お通を抱き、出る。向うより田宮右内、袴羽織にて、氣の急く見得にて、團平を連れて
右内　全體其方が不念と云ふもの。何ゆゑ半七を同道して歸らぬ。
團平　そこへ心附ざませなんだは、下郎の不調法でござりまする。
ト云ひ〳〵、本舞臺へ來る。よき所にて、半七に行き當り
右内　コリヤ〳〵、おてまへは茜屋の半七ではないか。
半七　これは田宮右内さま。
右内　おてまへはなんと心得て居る。裾野の假家支配承はつて居る田宮右内。御紋の幕、表飾り、七日以前に調達いたし、差上げべき筈なるに、明日まで猶豫の願ひ、天氣の晴雨もあるべき事と、家老中へは沙汰に及ばず、身が料簡で延ばしくれたが、然るに今日まで屋敷表へ注進せぬは、俗に云ふ紺屋の明後日、只口きいて云ひ延ばせば、事相濟むと思うて居るか。今夜中に萬事速かに調はねば、主人への申し譯、右内は腹切らねばならぬわい、腹を。
半七　ハツ〳〵。
右内　これまで度々御用の節、諸職人より一番に、納めたる其方なれば、よもや相違はあるまいと、思ひ過しは一生の不覺。七日以前に情を以て、容赦いたさぬものならば、仕樣もやうもあるべきに、今日の今となつては、後悔先に立たずの誤まり。エヽ、なんとせう。身が運命の盡きるところ。屋敷へ歸つて切腹の用意。さうぢや。
ト行かうとする。半七、裾に取りつき
半七　ア、イヤ〳〵、暫らくお待ち下さりませう。
トまた行かうとするを、向うへ廻つて止める。
右内　この期に及んで未練はないわえ。
半七　親子の者を一寸試し、一分試しにお試しなされ、何

卒あなたのお身の云ひ譯。

右内 たわけ者め。容赦せしは身の誤まり。われが命なん百取つても、右内が云ひ譯にはならぬわい。

半七 エ、。

右内 とは云ふものゝ。

ト空を見て

最早何時。

半七 七ツ半時でござります。

右内 暮れ六ツまでは、未だ半時。時刻を計るは

半七 即ち三十三間堂の開帳の雙盤が

右内 刻限を限る合圖。

半七 それまでには調達いたし

右内 屋敷へ納めるものならば

半七 殿様の御用に相立ち

右内 斯く云ふ右内が身も安泰。

半七 例へ大地を穿つても

右内 半時なりとも延引せば

半七 調へませいでなりませうか。

右内 有無に依つてこれ限り。

半七 必らずともに御短慮を。

右内 さらばだ。

ト ついと入る。半七、こなしあつて

半七 半時に迫つたおれが命。思へば右内さまのお命。ま一度筑波茂右衛門に逢うて、頭を土に埋めて頼んで見るが獨參湯、明らさまに云うたなら、得心せまいものでもない。山の伊勢屋に居るとの事。サア、お通。

ト手を取るを

つう おりや、しんどい。

半七 エ、、四の五のと無理を云ひ居る。サア、負ぶされ。

ト お通を負ひ

居ればよいが

ト始終、音樂にて、半七、上手へ入る。引違へて筑波屋茂右衛門、長九郎を連れて出て

筑茂 三間堂の開帳で、とんだ賑やかだ。

長九 今日は結願とやらで、暮れ六ツまでは群集でござります。

ト ばたばたにて、雁助、財布を持ち、走り出て、長九郎に行き當る。

長九 アイタヽヽ。何奴だ。

筑茂 てまへは雁助ではないか。

雁助　茂右衛門どのか。大變だ〳〵。
筑茂　何がどうした。
雁助　若旦那が留めて置かれた、造營の御用金を、たうとう源之丞めにあげられたわい。
筑茂　ハテ、ざわ〳〵と騒ぐにや及ばぬ。ばれたらおれが呑み込んで、透けりさしや、よいではないか。ソレ、路用の金。
ト渡す。
雁助　おれが慥かに預かり置いた。
ト懐へ入れる。
長九　おいらもこの間のもやくやから、茜屋の内にや居るも居られず、茂右衛門さんの幇間同然。
雁助　それはさうと仲町の、三勝が事はどうなりました。
筑茂　半七と云ふ虫のあるうちは、おれが手には參らぬ女郎。
長九　邪魔になる茜屋め、いつそ手短かにバッサリ。
筑茂　コリヤ。
ト押へ、兩人に囁く。
雁助　すりや、開帳の果を合圖に
長九　三間堂の表通りで
筑茂　犬を附けて置いたれば、半七が戻り足を。
長九　合點ぢや。
筑茂　祝ひに鰻でも奢らう。二人とも、サア、來い。
ト三人、向うへ行きかける。
半七　面妖な、道でも間違ふ筈はないが。
トお通を抱き、向うより出て來る
ア、コレ〳〵、それへ行くのは筑波屋ぢやないか。
雁助　ソリヤ、半七ぢや。
筑茂　喧ましいわえ。おれだが、なんとした。
半七　ちよつとお目にかゝりたい。
ト茂右衛門、二人に目配せして
筑茂　きよろ〳〵した目玉で、呼び返したその用は。
ト云ひ〳〵、尻を捲り、岩臺に腰を掛ける。
半七　茂右衛門どの、この半七が一生懸命。
筑茂　仕入れの金が貸して欲しいか。
半七　お通、ちよつと下に居よ。
トお通を下ろし
コレこの通り、男が手を下げて頼む程に。
筑茂　ならぬ、否だ。半七、わりや美しい三勝を締めて仕合せ者ぢや。今での色事師、自慢せいよ。コレ、この茂

右衛門は、藝者には嫌はれても、金は腐る程持つて居る。その上、信田家の町人頭、わいらが爲にや親玉樣た、指圖を受けぬ先は、屋敷の御用は勤まるまいがな、イヤサその頬桁を過す商賣がたるまいがな。大きな面をさらすない。

半七　そりやモウ今さら云はいでも知れた事だ。茂右衛門おりや三勝と手を切つたわい。

筑茂　ヤア。

半七　男づくの約束と云ひ、取次ぎの御用に就き、狩場の幕を仕入れの金、貸すも矢ッ張りこなたの商賣。それを味にもつれの附いた、事の起りはあの三勝。さつぱり緣を切つてしまへば、外に意趣もない筈。おやに依つて約束の通り

筑茂　そりや嘘だ。そのお通と云ふ餓鬼も、三勝がひり出した女つちよ。コリヤ、爰へ來い、小父の側へ來い。

半七　ソレ、ちやつと小父樣の側へ行け。

ト　お通を突きやる。茂右衛門、取つて引きつけ

筑茂　オヽ、えゝ子めだわい。父親の面に似て、小盜みしさうな女つちよめ、此奴が三勝の腹から出たと思や、ほんに、怪體の惡い。

ト　平手で頭を敲る。

つう　痛いわいなう。

ト　半七、ちやつと抱き留め

半七　オヽ、可哀さうに〳〵。大人氣ない、何をするぞい。

筑茂　オヽ、緣を切つた、退いたのと、女郎と云ひ合せて相對の美人局。その手で行く茂右衛門ぢやない。

ト　最前落したる、財布を出し

二百兩三百兩は、いつでも懷に持つて居る。貸して欲しかろ。マア、ならぬ、馬鹿面め。

半七　これは又、氣の惡い。今となつて、なんと嘘を吐かう。おれも男ぢや。

ト　長九郎を見て

そこに居るは長九郎ぢやないか。

長九　長九郎も凄まじい。茜屋の内を出りやア、てまへもおれも四文と四文。茂右衛門さまのお世話になり、今ぢや筑波屋の子分。オヽ、長九郎さまだワ。

半七　イカサマ、そりや、てまへが云ふ通りぢや。併し、これまでのよしみもあり。

長九　旦那へ執成し云うてくれないか。

半七　ムウ、そちらに居るは慥かに雁助。

つう　父様、しゝがしたいわい。

半七　ホイ〳〵

　トお通に小用をやる。

兩人　いつそ。

　ト行かうとするを

筑茂　コリヤ、惡い〳〵。爰ぢや惡い。爰で酒が呑めるものか。さりとては卑しい奴等。

　ト見て押へる。

半七　茜屋の家を立てるか潰すか、人一人助ける事ぢや程に、茂右衞門どの、よいやうに……もうえいか。

　トお通を下に置く

皆執成しをして下され。

雁助　潰れやうがぶツ切らうが、おらア知らない。ナニ、根太ぢやアあるまいし。

筑茂　うぬがやうなべら坊には、相手になる張合ひがない。茂右衞門は大金持ち。御用が多い。サア、二人の者。

兩人　行きなさい〳〵。

　ト行かうとする。半七、キツと留めて

半七　茂右衞門、そりや餘り胴慾と云ふものぢや。おればかりではない、大切な右内さまの御身の上。三人四人の命にかゝる、お暮の仕入れの二百兩。コレ、情ぢや、慈悲ぢやわいなう。

　トはら〳〵と泣く。

筑茂　なんだ。わりや泣くか。二人も見い。半七は吠えてけつかる。

長九　女郎にしたら、よく賣れるであらう。

兩人　ハヽヽヽヽ。

　ト茂右衞門、思ひ入れあつて

筑茂　半七、いよ〳〵三勝を緣切つたに相違なくば、約束の金貸してやらう。

半七　すりや得心して。エヽ、忝ない。

筑茂　アヽ、コリヤ〳〵、マア、滅多に禮云ふな。これも三勝に直に逢うて、思惑聞いて見て、抱いて寝たその上で、茂右衞門が胸に落ちたら、貸してやるまいものでもない

半七　僅かなうちに迫つた手詰め。とても事に今直ぐに

筑茂　そりや、われが得て勝手。不得心なら何とする。

半七　ヤ。

筑茂　どうも仕樣はあるまいがな。

半七　サ、それは。

筑茂　これから三勝めに逢うて、めつきしやつきした上でどちらとも返事せう。半七。
半七　それでは。
筑茂　明日逢はう。
ト音樂になり、茂右衛門、兩人を連れて、悠々と向うへ入る。
半七　現在茂右衛門が手にある金、三勝と縁切つた、事を分けて云うたならば、貸さぬ事はあるまいと、思うたも當ての槌、頼みの綱も切れ果てゝ、どうあつてもおれが命は、暮れ六ツ限りに詰まつたか。ホヽホイ。
ト撻と下に居る。双盤、靜かに打ち出す。
ヤヽヽヤア。ありや開帳の双盤。右内さまの御身の上。
エヽエヽ。
トうろ〳〵して、上の方へ行つたり、下の方へ行つたり、お通、附いて廻り、いろ〳〵あつて、キツととまり
どうで寢腐つた半七が命。茂右衛門にぽツついて、首筋押へて今の金を。
ト駈け出し、花道へ行く。
つう　父樣やアい。

半七　エヽ、邪魔な足手纏ひ。と云うて爰に捨てゝも置かれず。
ト双盤、段々せわしくなる。
危ふいは右内さま。
ト駈け出し、お通、後より、半七が左の足を取つて、引き戻す。片足にて後へ戻り
邪魔な餓鬼め。
ト振り放すはずみに、我れも尻餅をつく。直ぐに背中へ取りついて、それなりに行かうとする拍子に、癪の病ひ發るこなしにて、慄へ出し
時も時、折も折とて、十日も前に落ちた瘧、いま爰ではね返ると云ふは、よく〳〵の因果であるか。アヽ。
ト向うより彌八、茜屋と云ふ弓張り提灯をとぼし
彌八　出たら最後、戻る術を知らぬ、悪い癖の旦那めぢや
ト云ひ〳〵、花道にて行き合ひ
彌八　旦那樣か。
半七　彌八か。
彌八　お前を迎ひに。
半七　お通を頼む。
ト直ぐに負はせる。

ソレ—

ト向うへ、走り入る。

彌八　コレ〳〵、どこへお出でなされまする。旦那〳〵。

ト伸び上がり

影も段々見えなくなつた。お嬢様、お前では解るまい。こりや詰まらぬものぢやの。

ト上手より、關內、ウロ〳〵捜し出で

關內　コリヤ〳〵、若い者、てまへ、おらが旦那を知らぬか。

彌八　わしも旦那さんを失うて、難儀して居る所ぢや。

關內　お身も旦那を落したか。ハテ、似た事もあるもの。

彌八　お前も尋ねて下んせ。

關內　おてまへも尋ねて下され。

彌八　旦那様いなう。

關內　おらが旦那めやアい。

ト呼び〳〵、兩人、入る。チョン〳〵にて、この道具廻る。

本舞臺、向う三十三間堂裏手のかゝり。上の方に、木燈籠に火を點しあり、下の方に手水桶、よき所に百度石、所々に三十三間堂貸し傘、百本のうち、總講中、と書きたる番傘、十本ばかり干しあり。始終双盤の音にて、道具、納まる。

ト眞中の傘より、筑波屋茂右衛門、ヌツと出る。バタバタにて、半七、慌か〳〵走り出る。これにてちやつと引ツ込む。本舞臺へ來て

半七　なんでもこの道筋より、外へ行きやうはない。

ト上手の傘より、長九郎、ヌツと出る。半七と顔見合せ、ちやつと引ツ込む。半七、キツとなる。また下手より、雁助出る。半七、探り廻る。三人、あちこちと傘の内を、拔け廻る事、いろ〳〵あつて、トゞ茂右衛門を引ツ捕へ

茂右衛門、何も逃げる事はない。われが懐の金財布、爰へ出しておれに渡せ。斯うなつたら貸しても借りる。また貸さいでも借らにやならぬ。キリ〳〵そこへ出しやアがれ。

筑茂　ハヽヽヽ、頤が横に裂けて、ありや大きな事まき出す。ならぬと云つたら、なんとするや。

半七　オヽ、斯うして借るわい。

ト傘にて打つてかゝる。茂右衛門、同じく傘にて、ち

筑茂　よつと受け
猪口才なほてゝんがう。叶ひもせぬ事さらすない。

半七　なにを。

ト立廻り

筑茂　二人の者、ソリヤ。

両人　合點だや。

ト双方より、打つてかゝる。半七、二人を相手に、見事に傘にて、様々立廻りあつて、よき程に、茂右衛門拔いて切りつけるを、傘にてどつこいと留める。誂らへの鳴り物にて、タテいろ〳〵あつて、茂右衛門より切り込む所を、半七、身を開くと、百度石へ切りつける。仕掛けにて、刃物、ポツキと折れる。半七、探り寄つて、茂右衛門を一かせ切る。また双盤、静かに鳴る。半七、三人を一かせづゝ切る。茂右衛門、血だらけにて、花道へ逃げる。半七、刃物逆手に持ち、振り上げ、凄き合ひ方になり、本舞臺へ引き戻し、段々に切る。よき程に、三勝、小提灯を提げ、走り出て

三勝　ヤア、。

ト悔りして、提灯、取落す。半七、轉げたる石に、腰をかけ

半七　ミ、水。

ト三勝、慄へ〳〵、石燈籠の灯を、提灯へ移し、あたりを見て、手桶の水を掬ひ、半七に飲ませ、いろ〳〵あつて、半七、刃物を放さうとして、離れぬこなし。顋にて教へる。三勝、怖々、指を一本づゝ放す。半七茂右衛門が死骸を探り、懐より、金の財布を引き出す。首に掛けて居るゆゑ、無理に引くと、茂右衛門を引起す。茂右衛門、しやんと立つ。半七、財布を取らうとしても取れぬゆゑ、顔にて教へる。三勝、落ちたる刃物を取り上げ、紐をフツリと切る。チヨンと、木の頭を入れる。茂右衛門、ばつたり轉ける。この途端、一時に、両人、後へべつたり坐る。キザミにて、拍子

幕

大切　美濃屋の場

淨瑠璃「其常磐津仇兼言」　常磐津連中

役名——美濃屋平左衛門。同娘、三勝。同娘、お通。醫者、篦棒庵。女房、お今。今市屋善右衛門

代官、今戸今助。有松源之丞。笠松角太郎。半七嫁、お関。田宮右内。茜屋半七、

本舞臺、三間の間、眞中、納戸口、これより下、押入れ、襖を嵌め、上の方は赤壁、役割り、觸れ紙の腰張り。東の方、かけ作り心の中二階、竹椽。この下へ人の出入り。よき所に、三蓋松の附いたる、衣裳長持を直し、いつもの所に門口、美濃屋と書きし染め暖簾、この外、路地口の心、棒庵、惣髪の醫者の拵らへ、踊りの稽古して居る。源之丞、ぱつち掛け、金入りの半切れにて、薪を割り居る。右、太鼓入り、賑やかなる所作のチラシにて、幕明く。

源之　コレ／＼、棒庵どの、こなたも商賣の醫者は打ッちやつて、夜も晝も踊りの稽古。馬鹿々々しい、よさつしやれ。

棒庵　てまへは、やう／＼一昨日から奉公人に來たから、譯はなんにも白しぼり。おれも醫者には飽き果てゝ、一心不亂に稽古するは、盗人の晝寐も心當て。すつぱり舞を仕込んで置いて

源之　なんぞの役に立ちますか。

棒庵　女形になるつもりサ。

源之　ヤア、。

棒庵　この前髪からの思ひつき、追ッつけ商賣替へるのサ

ト云ひ／＼、振りして居る。

源之　おきやアがれ。その面で女形も、氣が強い、

棒庵　イヤ、さう云つたものぢやアない。おれでも衣裳鬘をかけて、顔を作つて出たところは

源之　何に似たものであらう。

棒庵　大和屋か、濱村屋か、

源之　イヤ、猿に似て居るであらう。

棒庵　むごい事を云ひなさんすわえ。

ト奥にて

小勝　お富さん、後で淨成寺を浚つてもらひなされえ。

ト云ひ／＼出て

棒庵さん、姉さんの藥を、合して下さんしたかえ。

棒庵　イヤ、稽古でさつぱり、忘れてのけた。いま調合して進ぜる。ドレ／＼。

ト下に居て、藥を合せにかゝる。

源之　申し、小勝さん、親方の云はつしやるには、いよいよ明日お屋敷へ行く、舞の仕組みはようござりますか。

小勝　アイ、兼太夫さんも、式佐さんも、浚ひに氣が急く
と云うて、疾から奥へ來てぢやわいなア。
源之　そりや、よい手番ひでござりまする。
ト「月は程なく入り汐の」と、道成寺の出になり、向
うより、美濃屋平左衞門、鉢植ゑの松を、縄にて括り
手に提げ、案内して、田宮右内、奴附き出る。棒庵は
藥を合せながら、肱を振り廻し、振りして居る。二人
とも、本舞臺へ來て
平左　これが私し宅でござりまする。
右内　存じの外、早く參つた。
平左　暫らくこれに
ト内へ入り
歸つたぞよ。
小勝　父さん、戻りなさんしたか。
源之　お早うござりました。
平左　お客がある。そこを片附けい。
源之　ハイ／＼。
ト源之丞、小勝、片附ける。
平左　見苦しうはござりますれど
右内　罷り通る、許しやれ。

ト右内、ヅッと上へ通る。
平左　棒庵老、御苦勞、
ト云つても、構はず、匙にて、振りかして居る。源之
丞、時代莨盆、持ち行く。
源之　お莨、上がりませ。
右内　これは結構なお道具だ。
平左　舞臺の小道具を使ふなと云うたに、自墮落な奴等。
右内　イヤ／＼、住居と云ひ、家來の衣服、商賣柄、一興
でござる。ハヽヽヽ。
平左　ハヽヽヽ。
右内　内談なれば、暫時家内を。
平左　ヘイ。コリヤ、小勝、善太も棒庵どのも、勝手へ。
小勝　アイ。サ、奥へござんせ。
ト棒庵、構はず、夢中にて、振りして居る。
源之　コレ、棒庵どの。
ト大きな聲で云ふ。
棒庵　夜毎々々に袖絞る、しよんがえ。
ト唄で、踊りながら、奥へ入る。
源之　とんと氣狂ひぢや。
右内　家來、隙入りのうち、勝手へ參れ。

奴　畏まつてござりまする。

平左　ソレ、御案内申せ。

源之　サア、斯う入らつしやりませ。

ト「花の外には松ばかり」と謡にて、奥へ入る。亂拍子の鳴り物にて、右内、奥を見廻し

右内　平左衛門、近う／＼。

平左　へイ／＼。

ト少し向うへ出る。

右内　只今、途中にて申す通り、身共ことは信田の家中、田宮右内と云ふ者だ。

平左　その右内さまが私しへ、御内談とござる、その様子は。

右内　おてまへの娘三勝を、身請け致さん存じ寄り。なんと得心してくれまいか。

平左　お歴々の右内さま、有り難うはござりますれど、娘はこの間から

右内　病氣の事も聞き及んだ。その病と云ふは、深川の人殺し。

平左　すりや、詳しき仔細、御存じあつて

右内　身共が身請けは三勝が、命を延べる名醫の良薬。險目の早い黄金湯。用ひて見る心はないか。

平左　へイ。

トこなしあつて

あなたは御存じない事なれど、私しとは義理ある三勝。大病と云ふでもなけれど、みす／＼煩らうて居る娘を、金銀に目がくれて、あなた様へ差上げては、どうも心が濟みませぬ。

右内　ムウ。すりや、この儀は不承知とな。

平左　全快いたしたその上にて、彼れめにもとくと申し聞かせ、承知いたした上ならでは

右内　返答はならぬぢやまで

平左　暫らく御猶豫下さりませう。

右内　尤も。

ト右内、すつくと立ち、懐より捕り縄を出し、奥へ行かうとする。平左衛門、キツと留め

平左　アイヤ、血相變へて、こりやいづくへ。

右内　奥へ踏ん込み三勝に、縄打つて屋敷へ引く。爰放せ。

ト振り切り、行かうとするを、立廻り

平左　先づお待ち下さりませう。娘三勝には何科あつて、縄掛けようとは御意なされます。

右内　この程、三十三間堂の裏手に於いて、信田の用達筑波屋茂右衛門、並びに二人の若い者を、手に掛けて立退きしは、三勝が戀の遺恨、茜屋半七が仕業なりと、誰れ云ふとなく巷の風聞。その夜半七が手より拙者方へ、相渡したる二百兩は、五ヶ年以前紛失したる、殿樣の御用金。御幕の御用は調うたれど、盜賊の虚名遁がれ難し。殊に以てその夜より、逐電したる茜屋半七。子まで生したるこの家の娘、疑ひのかゝるは必定、代官所の手に渡らば、後悔詮なきお家の恥辱。ぢやに依つて

　ト また行かうとする。立廻り、ヂツと留め

平左　娘三勝を差上げませう。

右内　ヤ、なんと。

平左　得心いたして差上げましたら、あなたは如何なされまする。

右内　連れ歸つて身が女房。

平左　エヽ。

右内　代官は云ふに及ばず、右内と云ふ武士の妻女に、指差す事もいつかな叶はぬ。サ、妾が命の黄金湯、なんと合點が參つたであらう。

平左　よう得心仕りました。そのお詞を聞きましては、此方よりお願ひ申して。

右内　然らば離縁の證據が見たい。

平左　その儀はお氣遣ひ下されますな。三勝は半七さまと、疾に緣は切りました。

右内　切つたとばかりは緣者の證據。浮名の立つた二人の者、離緣の一札見ぬうちは、誠の退き去りとは思はれぬ。

平左　これとても御尤も。ちと思ふ仔細もござりますれば御返事いたすその間。

右内　奥の一間を借用申す。

平左　御休息下されませう。

右内　近頃面倒。

　ト 平左衛門、こなしあつて

平左　モシ、只今にも半七が

右内　去り狀を見たその上では

平左　いよ〳〵今のお詞に

右内　田宮右内は武士だぞよ。

平左　左樣ござらば

右内　互ひの心は

　ト「云はず語らず我が心」と唄ふ。

案内しやれ。

平左　サア、モシ、斯うお出でなされませう。

ト「都育ちは蓮葉なものぢやえ」と、兩人、こなしあつて、奥へ入る。これより手毬唄になり、この唄を借りて、向うより、お今、後家の形。善右衛門、腎虛病の拵らへ、綿帽子にて頭を包み、お今に手を引かれ、杖に縋り、出て、花道にて

善右　ヤレ、しんど。

ト花道に、べつたり坐る。

いま　イヤ、申し、善さんえ。よしないわたしに吸ひ取られ、強い體を此やうに、身は空蟬の蛻玉。達者なものは頰桁ばかり。さぞ本意なかろ、阿房らしかろ。堪忍して下さんせえ。

善右　其方とても近頃は、脾胃虛にその身を責められ、箸を放すと食ひたがる。

いま　夫は腎虛。

善右　妻は脾胃虛。

いま　ほんに、思へば世の中に

善右　虛の字はなんの

兩人　報いぢやぞいなう。

トこなし。

善右　間男のもくが割れて、町中の奴等が寄つて、たうとう家は追ひ出され

いま　まだも頼りは一人の弟、箆棒庵と云ふ醫者の所へ、夫婦連れての居候。美濃屋の裏おもて聞いて居れば、もそつとぢや。サア、立たしやんせ。

ト手を持つて引ッ立てる。善右衛門、立たうとして、ぐにや〳〵となる。

善右　なんぼ云うてたもつても、氣がわく〳〵するばかりで、體がすぼけて立たぬわいなう。

いま　ア、辛氣。

善右　大儀ながら、其方、負つてたもらぬか。

いま　ほんに、お前は癈んだ倒し者だ。サア。

ト脊中を當てがふ。善右衛門、肩へ手を掛けても、思ふやうにならぬ思ひ入れ。

なんの事ぢやぞいなア。

ト無理に負ひ、立ち上がり

味ない者のにえ肥り、この重い事わいなう。

ト始終、手毬唄にて、本舞臺へ來る。此うち、奥より、棒庵、振り袖の衣裳、鼻から上へ、顔を半分、女形にして、眉毛と鏡を持ち、納戸より出て

棒庵　北の窓は片明りで、思ふやうに顔が出來ぬ。爰がよい。爰がよい。

ト下に居て、鼻唄で居る。

いま　ちと物が、尋ねたうござりまする。

棒庵　尋ねたいとは、なんでござる。

いま　この裏に、篦棒庵さまと云ふ、醫者樣がござりまするか。

棒庵　篦棒庵。聞いたやうなが。篦棒庵とはおれだ。誰れだ／＼。

いま　さう云ふ譯は、弟ぢやないかいの。

棒庵　姉貴か。マア、此方へ、入らつし。

いま　ヤレ、嬉しや／＼。

ト内へ入る。

棒庵　こなた、マア、なんと思うて

ト顏見合せ、お今、恟りして

いま　アレエ。

ト善右衛門を取落す。

善右　アイタヽヽヽ。

棒庵　飛んだ恟りの仕樣。どうしたのだ。

いま　可哀や弟、いつ其やうな恐ろしい、化け物にはなつたぞいやい。

棒庵　オヽ、おれがこの形を見て、こりやア尤もだ。この間は商賣も隙だから、女形を仕込んで居るのサ。

いま　それでやう／＼落ちついた。そして、爰がわが身の内か。

棒庵　イヤ、愚老の内は裏の隅。爰は美濃屋平左衛門。

善右　そんなら三勝が内か。

棒庵　如何にもさうだ。

善右　爰が三勝が内なれば、金儲けの蔓に附いたわい。

棒庵　金儲けとは巧い話し。おれも半口乘れまいか。

善右　體の叶はぬ善右衛門、頼んでも乘せにやならぬ。

ト始終、棒庵、臺詞を云うては、切れ／＼に無性に振りをする。

いま　イヤ／＼、弟は滅多に頼まれぬぞえ。

棒庵　姉貴、こりやなせ／＼。

いま　今見て居りやア、をかしな事ばつかりして居る。どうでも氣がふれて居るわいなう。

棒庵　さう思はんすは尤もぢやが、ぞつこん女形に執心ゆゑ、片時も忘れぬ踊りの稽古。

いま　そんなら、猫の稽古して居るのか。

椿庵　漉つたものであらうかの。
いま　阿房らしい。
椿庵　時に、その金儲けの筋はどうだね。
善右　譯と云ふは、
　ト兩人に囁く。
いま　すりや、半七が在所を嗅ぎ出し
善右　人殺しの訴人すれば
椿庵　お定まりの褒美の金。
善右　どうぞ爰の内に、隱れて居て
椿庵　イヤ、幸ひの事がある、コレ。
　ト囁く。
善右　そんなら、おれはあの長持。
いま　わしはあの椽の下。
椿庵　別々に屈んで居て
いま　半七を見附け次第。
椿庵　代官所へ直ぐに注進。
善右　マア、おれが死骸から、片附けてくれ。
兩人　合點だ。
　ト兩人して、長持へ舁いて入れる。此うち、源之丞、
　後に出かけ、見て、引ッ込む。

椿庵　夜々按摩に出る椿庵。
　ト呼子を出し
　おれが呼子を吹くまで、必らずあわてゝ出まいぞや。
善右　承知〳〵。
いま　わしやひもじいが、食ふ物たもらぬか。
椿庵　さま〳〵の事云はるゝ。爰に何があるものか。早く
　隱れさつしやれ。
いま　エ、、ひもじい。
椿庵　この長持も人の見ぬ間に
　ト蓋をせうとする。
善右　待つたり〳〵。しゝがしたい。
椿庵　エ、、榮耀な和郎。そこどこか。
　ト蓋を閉め
　姉貴、何をうつかり。こなたも早く。
いま　大方蜘蛛の巣だらけであらう。
　ト椽の下へ這ひ込む。
椿庵　それよし、これよし。金に恨みは數々ござる。
　ト舞うて
　うまいわい。
　トついと入る。ト源之丞、出て

源之　それよし、これよし。金に恨みは數々ござる。
　ト棒庵が通りをして
うまいわい。
　ト暮れ六ツの鐘。源之丞、ツイと奥へ入る。引違へて
　平左衛門、行燈を提げ、出て
平左　娘や、三勝や〳〵。
　ト中二階にて
三勝　父さん、なんでござんすえ。
　ト障子明ける。三勝、ばらけ髪、掻卷きにて、蒔繪の
　鏡臺に凭れ、珠數を繰つて居る。側に、七輪に鐵瓶か
　けあり
平左　ちつと心持がよくば、話したい事もあり
三勝　アイ、そこへ參じませう。
　ト戀の手習ひの合ひ方ばかりになり、三勝、中二階よ
　り下りて來る。平左衛門、よき所へ蒲團を敷き
平左　サヽ、爰に〳〵。
三勝　勿體ない〳〵、打ツちやつて置いて下さんせいなア。
平左　ハテ、冷えると癪が募る。大事ない。
三勝　そんなら許して下さんせえ。
　ト頂いて坐る。フツと幕明きの鉢植ゑを見て
オヽ、可愛らしい松が。
平左　餘り枝振りが面白いから、其方の目慰みに。
　ト眞中へ直す。
三勝　オヽ、モウ、父さんとした事が、いつまで子供のや
うに。
平左　サア、思ふはいづれ親の常。それはさうと、この松
の替名はなんとやら
三勝　常磐木ぢやないかいなア。
平左　オヽ、それ〳〵、常磐木で思ひ出したが、頼朝さま
や義經さまの、母御の名は常磐御前。いま源氏の御代に
なつて、昔話しにはするものゝ、いかい苦勞をさつしや
れたさうな。伏見常磐の哀れな所を、馬谷めが、ようや
り居るぞい。
　ト三勝、簪にて、松の葉を梳かしながら
三勝　わたしも讀んだ、假名本の平家物語。義朝さまは討
死なされ、今若乙若牛若と云ふ、三人の子供衆を連れて、
雪の中にしよんぼりと、ほんに悲しい事で
　ト向うを見て、こなし。
ござんせうぞいなア
平左　その憂き辛勞を辛抱して、夫の敵清盛の、お妾にな



初演の繪番附

つた常磐御前、あれが矢ツ張り貞女とやらか。娘、わが身は、マア、なんと思ふ。

三勝　オヽ、モウ、父さんとした事が、いろ〳〵のむづかしい事を。

平左　イヤサ、其方の思惑を聞いた上、おれも覺悟。イヤサ、思案をせにやならぬ。

ト三勝、ぎつくり、また氣を替へ

三勝　もし又わたしが、常磐さまが、尤もぢやと思ふ心なら。

平左　コレ〳〵、この松の綠子は、なんにも白旗、源氏の御代に、なるまいとも云はれぬぞよ。

三勝　ほんに、さう聞けば、そこもあるわいなア。

トぢつとこなし。下座の路地より、按摩、出て、門口にて笛を吹く。善右衛門、長持を開け

善右　棒庵、首尾は。

平左　ヤア。

ト恟り。兩人、顔見合せ

善右　南無三方。

トちやつと引ツ込む。

平左　ハヽア、さては。

三勝　申し。

ト顔にてする。平左衛門は、大事ないと云ふこなし。梅とさん〳〵櫻の笠踊りとなり、按摩は向うへ行く。花道より彌八、茜屋と記したる弓張りを灯し、お園、懷手にて、附き添ひ出て、摺れ違ふ。お園、按摩を見て

その　アレエ。

ト按摩、恟りして、向うへ走り入る。

彌八　恟り致しますわい。そろ〳〵とお出でなされませ。

ト云ひ〳〵、本舞臺へ來て

オヽ、爰ぢやさうな。

ト門口へ來て

美濃屋平左衛門さまと申すは、内方でござりますか。

平左　アイ、爰でござる。誰れぢや。入らつしやれ。

彌八　サア、お孃樣、お入りなされませ。

その　イヤ〳〵、わしや怖い。

彌八　爰は三勝さんの所。怖い事はござりませぬ。

その　大事ないかや。

彌八　ちやつとお入りなされませ。

トお園、始終慄へ〳〵、内へ入る。

平左　こなさん達は、なんの用で、どこからござつた。
右内　イヤ、仔細あつて、身がこれへ召し寄せた。
　ト云ひ〳〵、奥より出る。
平左　右内さま、その仔細と御意なさるゝは、如何やうな儀でござりまする。
右内　三勝、平左衛門、これを見やれ。
　トお園が肌を脱がす。襦袢の上より、羽交締めに、縄にかゝり居る。
三勝　ヤア、その縄目は。
平左　さては。
右内　子まで生しても三勝は賤者。例へ呆気馬鹿にもせよ、云ひ號けとあれば園は本妻。有免ならぬ國の政道。
彌八　この中から噂ともなしに、怖い〳〵と泣いてばつかり。側で見て居るいぢらしさは、堪えられたものぢやない。忌々しい旦那面。とんだ事をしやアがつて、わしにまで此やうに、悲しい目を見せやがると、腹が立つ程旦那様に、矢ッ張りわしも、逢ひたい、逢ひたうござります。
　ト啜り上げて泣く、平左衛門、涙を拂ひ
平左　あちらを見ても、こちらを見ても、こんな悲しい事があらうか。三勝、せめての心晴らしに、とつくりと合點の行くやう。
　トこなしあつて、お園が側へ坐り
三勝　申し、お園さま、辨まへのない心にも、あの三勝ゆゑ、此やうな、憂き目を見ると憎からうが、よう聞いて下さんせ。この間の騒動、身にも命にも替へぬ程、いとしい半七さまばかりか、いたいけ盛りのお通まで、ともに行くへが知れませぬわいなア。
彌八　エヽ、すりやお通さままで、可哀や〳〵。
三勝　サア、大事の男は人殺し、なんにも知らぬお通まで、今宵のうちにも捕へられ、どんな憂き目を見やうやらと、思ひ過せば片時も、なじよと生きて居られうぞ。覺悟極めて幾度か、剃刀に手は掛けたれど、この世の別れに二人の顏、見てから死にたいばつかりに〳〵。
　トせき上げ、いふ〳〵あつてアイタヽヽヽ。
　ト差込むこなし。
平左　オヽ、尤もだ〳〵。
　ト脊中を撫でゝ、介抱しながら
この平左衛門も同じ事。子よりも可愛い一人の孫、お通

に逢はれる事ならば、火焰の中へ飛び込んでも、可愛らしい顏が見たい。も一度おりや抱きたうござる。未練な事ぢやが、可愛うて〳〵、堪えられませぬ。

ト泣く。此うちお園、始終、俯向いて居る。この時、顏を上げ、三勝に詰めかけ

その　三勝さん、そんならどうでも半七さまに、もう逢ふ事はならぬかいなア。

ト身を伏して泣く。

右内　ムウ、たつた今まで健忘の園、そちや急に正氣になつたか。

その　わたしや初手から心は亂れぬ。疾から本性でござんすわいなア。

皆々　エヽ。

ト、お園、こなしあつて

その　とてもこの世で半七さまに、逢はずに死ぬるが悲しさに、これをわたしが遺言と、思うて聞いて下さんせ。

ト合ひ方、條入りになり

云ひ號けの半七さん、一生わたしが殿御ぢやと、思ひ込んで居たものを、胴慾なは後の母樣、賴みの金に目がくれて、わたしを外へ嫁入りさせ、半七さんを追ひ出さうと、恐ろしい企み事。云へば義理あるお今どのゝ、科を世間に觸れるも同然。心一つにくよ〳〵と、それが嵩じて煩らひの、うちにつく〴〵思案して、作り阿房の似せ健忘、うつけよ馬鹿と、嗤はれても、お側に居るを樂しみに、いつぞは割つてこの譯を、云はう〳〵と思ふうち、三勝さんに馴れ馴染み、お子まであると聞いたゆゑ、よくよく因果はわたし一人、通とやら洒落とやら、譯さへ知らぬその上に、こんな身持ちで居る者を、なんのわたしに愛想があらう。人馴れなされた三勝さん、例へて云はば深山木と、花のお江戸の色櫻、心の悋氣せまいぞと、諦らめて見ても情なや、わたしも女の端ぢやもの、睦まじい仲を見る度に、羨やましうはあるまいか。その恨みも斯うなつては、お前もわたしも同じ事。半七さんの身に代り、下手人になつたその後で、せめて一言不便やと、そのお詞を未來から、待つて居ますとくれ〴〵も、よう傳へて下さんせ。現在云ひ號けはありながら、つひに一度も肌觸れず、刃にかゝつて死んだなら、賽の河原で迷ふであろと、それが悲しい。わしや悲しうござんすわいなア。

ト、いろ〳〵こなしあつて云ふうち、彌八、ぞくぞくし

て居て、此せりふの切れに

彌八　お嬢樣、とんだものだ。

ト大きな聲で云ふ。此うち、三勝、いろ〳〵苦しき思ひ入れにて、鏡臺の抽出しより、剃刀を出し

三勝　さうぢや。

ト死なうとする。平左衞門、留めて

平左　待て。如何にもこりや死なざなるまいが、われより先に平左衞門が。

ト剃刀を取り上げる。三勝、留めて

三勝　待つて下さんせ。

平左　イヤ、放せ〳〵。

トせり合ふ。

三勝　わたしこそ浮世の義理。お前こそ、なんで死なしやんす。

ト平左衞門、三勝が手を取り上げて、直し

平左　お嬢樣、お前を殺して跡に殘り、どの面提げて實の母御へ、なんと云ひ譯がござりませう。

ト三勝、うろ〳〵して

三勝　父樣、取逆上せて何を云うてぢや。お前、血迷うてかいなア。

平左　なか〳〵血迷ふ事ぢやござらぬ。生れしやつてから今日の今まで、齒ぶし〳〵も出さぬこなたの身の上。合點のゆかぬも御尤も、その譯を申しまするは

ト長持を見て

石の物云ふ世の中なれば、

右内　イカサマ、藁の上より手鹽にかけ、今日まで明かさぬ身の素性、容易には云はれまい。サ、かゝる事ゆゑこの右内が、三方四方の無事を思ひ、申し聞かせし三勝が身の上。

平左　重々のお情。この上のお願ひは、あなた樣より直々に、委細の事を三勝に。

右内　とくと申し聞かすであらう。

平左　エヽ、有り難う存じまする。お園どのも、マア、奧へ。

その　どうでわたしは無い命。矢ッ張り阿房で

平左　ヤ。

その　ホヽヽヽヽ。

ト泣き笑ひする。

右内　サ、三勝、案内しやれ。

三勝　いつそわたしも、氣拔けのやうになつたわいなア。

彌八　お嬢樣がうつゝたさうな。

右内　平左衞門、必らず短氣を。後刻、逢ひませう。

ト戀の手習ひの唄になり、三勝、泣いて居るを、右内引ッ立て、一件皆々、奧へ入る。平左衞門、後見送り

平左　根岸にござる妙貞さまの、御病氣が癒したさ、筑波屋に借りた五十兩、金戻さずば三勝を、女房にやらうと書き入れたを知らず、判を捺した無筆の悲しさ。それから今度の騷動。右内さまのお詞と云ひ、平左衞門が一生懸命。爰が思案の瞎ぢやわい。

ト靜かに時の鐘になる。向うよりぶッ裂き羽織、股立ちにて、今戸今助、捕り手を引連れ出て

今助　込み入つて詮議いたせ。

捕手　ハッ。捕つた／＼。

ト　ばら／＼と駈け入る。平左衞門、立ち塞がり

平左　待つた。思ひも依らぬ、何事でござります。

今助　身は當所の代官。今戸今助と云ふ者。この家の内に人殺しの半七、匿まひあるに相違ない。尋常に渡せばよし、異議に及ばゞ其方とも、屋敷へ引く。返答はなんと。

平左　存じも依らぬお疑ひ。全く以て左樣な覺え

今助　あらがはゞ、家來、此奴から

四人　ハア。

ト　かゝる。平左衞門、立廻り

今助　怪しいはあの二階。ソレ。

ト中二階へかゝる。平左衞門、四人と立廻つて、よろしく留まる。障子引拔くと、この内に右内、今助を、刀の鐺にて、キッと留めて居る。

右内　お代官、こりやなんとさるゝ。

今助　人殺しの半七が、詮議の妨げなすおてまへは。

右内　信田の左衞門が身内、田舍右内。

今助　何を猶豫。早く繩打て。

四人　ハッ。

ト又かゝる。

右内　苦しうない、手向ひ致せ。

平左　ハッ。

ト立廻りあつて

御意なくとも平左衞門、身に覺えなき無體の詮議。滅多に繩には

ト　ぽん／＼と取つて投げ

かゝりませぬ。

ト身構へする。

今助　鎌倉のお眼鏡を以て、當所の支配預かる今助。
右内　詮議の筋が相違いたした。
右内　この家に人殺しを匿まひしとは、訴人證據でもござるかな。
今助　ヤ、なんと。
今助　サ、それは。
右内　なんとでござる。
ト此うち、善右衛門、長持を開け、頭を出し
善右　その訴人は、私しでござりまする。
今助　それへ出て樣子を云へサ。
善右　さう自由には出られませぬ。どなたも御苦勞。
四人　エヽ、面倒な。
ト四人して、向うへ持つて出る。
今助　いよ〳〵この家に半七を
善右　イヤ、匿まうたか匿まはぬか、その程は存じませぬ。
今助　べら坊め、それに又
善右　サヽ、そこでござります。この家の娘三勝は、半七とは子までである仲。こりや三勝めが人殺しの在所を、知らぬ筈はござりませぬ。水喰はしてお責めなされると、直に在所は知れまする。憚りながら、慮外ながら、爰が詮議の鈴口、ぢやない、糸口でござりまする。
今助　實に尤も。ソレ、三勝を。
四人　ハツ。
ト行かうとする。
平左　イヤ、證據がなくば理不盡に、家搜しさす事は罷りならぬ。
源之　待つた。三勝に繩かけて、お手渡し致しませう。
皆々　ヤ、なんと。
ト合ひ方になり、棒庵に手拭にて、猿轡を嵌め、醫者の髷を、其まゝに引ッくり返して、簪を差させ、細引にて縛り、引ッ立て出て
源之　私しはこの家の下人、作藏と申すもの。三勝に繩かけお渡し申し上げるは、親方平左衛門に係り合ひなきとある、慥かなお詞下さりませう。
今助　ホヽ、手柄々々。ヤイ、家來ども、われ達、三勝を見知つて居るか。
四人　イエ、存じませぬ。
今助　身共も知らぬ。
ト棒庵、縛られながら、體をぐにやつかせ、女形の振して居る。

善右　お代官様、必らず騙されなされますな。其奴は三勝ぢやござりませぬ。ヤイ、おのれ、マア、人を盲目にすると云うても、大概程のあるものぢや。大馬鹿め。

源之　お代官様へ申し上げまする。この者が三勝に違ひないといふ、證據がござります。

ト こなし。

今助　ナニ、證據とは。

ト 思ひ入れ。

源之　御覧の通り三蓋松の紋所は、關三か三勝か、誰れ知らぬ者はない、これが慥かな證據でござりまする。

今助　イカサマ、相違なき慥かな證據。

善右　エヽ、申し〳〵、お前様もぬるい人ぢや。此奴は箆棒庵と云ふ、氣狂ひ醫者でござりまする。

右内　僞はり者め。棒庵と云ふ醫者は男。此奴は正しく女。

源之　左様々々、正直の交りなしの、三勝でござりまする。

ト 此うち、右内、下家へこなしあつて、扇にて疊を上げ、覗いて見て、鐵瓶を取つて、竹椽へ、湯を段々に流しかける、この前より、お今、出ようとしては引ッ込み〳〵、何遍もありて、トヾ眞赤になつて駈け出す。

いま　アツ、ヽヽ、ヽ。

源之　ヤア、飛んだ所から、妙な奴が。

いま　善右衛門さん、熱い〳〵、苦しいわいなア。

ト 善右衛門に取りつき、泣く。

右内　平左衛門、其奴に縄打て。

平左　ハツ。

ト お今を取つて押へ捕つた。

ト 縄をかける。

善右　イヤ、お侍ひ様、この者はお今と云うて、私しが……母でござります。何科あつて此やうに。

右内　吐かすまい。下家へ隠れ居つたるからは、家内を窺ふ泥坊夜盜。

善右　エヽ。

右内　縄打てと申しつけた、田宮右内が誤まりか。

善右　サ、それは。

右内　庇ふはうぬも同類ぢやな。

善右　イヤ、全く。

右内　お代官、なんと、左様ぢやござらぬか。

今助　御尤も。

ト 右内、刀を提げ、平舞臺へ下り

右内　有松源之丞どの。先刻より仔細あらんと、わざと詞もかけざりしが、

源之　ハッ。

　ト手拭を取り、納戸より大小を取り出し、しやんと差して

金子紛失の過まりにて、御勘氣の源之丞。お家の極印ある金子は、半七が手より出たる由。事を糺さんと存ずれども、騒動の場より行くへ知れず。必定この家へ頼らんと、存じつけて姿をやつし、入込んで斯くの仕合せ。

右内　イヤ、御用金盗みし盗賊は、半七ではござるまい。その仔細は、半七も、極印あるを知りながら、金子を使ふは我が身の訴人。半七とても斯程の事を、よもや心の附かぬと申すでもござるまい。

源之　すりや、外に盗賊が。

右内　詮議の目當は角太郎。善右衛門めも彼れが同類。屋敷へ引ッ立て、拷問いたさば、明りを立てる御邊が身の上。

善右　南無三、こりや堪らぬ。

　ト駈け出さうとしても、ぐにや〱して、自由にならぬこなし。

右内　サ、逃げらるゝなら逃げて見よ。百筋千筋の繩目より、病と云ふ縛り繩。ハテ、天罰ぢやよなア。

善右　ハア、悲しや。

　ト平左衛門、こなしあつて

平左　お代官様。可愛いわたしが娘なれど、脊に腹は替へられませぬ。

今助　其方に科はない。その證人は今戸今助。

平左　エ、、有り難うござりまする。

善右　申し、お代官、矢ッ張り此奴は篦棒庵。

今助　まだ〱此奴。最前から心をつけ、彼れが様子を窺ひ見れば、纔かゝつても一心に、舞に魂ひ奪はれしは、天晴れ臺頭の元祖たる、三勝が名人氣質。ホヽ、感ずるに餘りあり。不便には思へども、引ッ立て歸るは役目の表。

右内　源之丞には同類ども、詰所へ連れ行き盗賊の詮議。

源之　兎かう云ふうち夜も深更。

今助　ソレ、三勝を引ッ立てい。

四人　ハッ。

源之　とても遁がれぬ天の網。うぬも立て〱。

善右　なんぼう立てと仰しやつても、ツイ、立ちまする事

はなりませぬ。

源之　オヽ、よい事がある。

　ト お今の脊中へ、善右衛門を縛し附け

四人　三勝立て。

　ト 棒庵、悔り。この振りして花道へ行く。

源之　うぬ、立たう。

善右　お今どの、御苦勞ぢやが、やわ〳〵とやつて下され。

いま　ほんにお前とわたしとは、悪縁契り深しぢやなア。

源之　細言云はずと、歩め。

いま　ハイ。

　ト 源之丞、附き添ひ、表へ出る。此うち、右内の家來提灯ともし、門口に扣へる。右内、こなしあつて

右内　ナニ、平左衛門。先刻申し聞かせし事、返答の有無に依つて、一人ならず二人の命。

平左　お氣遣ひ下されますな。何事も私しが、胸に納めて御返答。

右内　吉左右を相待ち居るぞよ。

平左　左様なら、右内さま。

　ト 右内、ツカ〳〵と表へ出る。

平左　御苦勞に存じまする。

右内　さらば。

　ト 行かうとして、立ちとまり

さは云へ、迷ひの止め難きと、兼好が筆の跡。思へば便なき

　ト ほろりとして

提灯やれ。

　ト 唄になり、この人數、殘らず向うへ入る。平左衛門後見送り、こなしあつて

平左　右内さまと云ひ、お園どの丶心底を聞いては、例へ草を分けても、半七どのに尋ね逢ひ、去り狀取つてお園どのへ、義理立てねば人でなし。さすれば三勝が身、事無う濟み、半七どのも殊によらば、いづくの浦にか身を隠し、命を助かる事もあらうか。どう案じても、こりやグツと氣強う持つて、一番敵役をせにやならぬわい。

　ト 本釣り鐘、鳴る。

ありやもう九ツ。苦の世界とは、よう云うたものぢやなア。

　ト 静かなる合ひ方になり、平左衛門、奥へ入る。ト 金棒、拍子木、犬の聲、すべて物凄く、向うより半七、着流し、一本差し、頬冠りにて、お通を懐に入れ、ゆ

ろゆろと出て、後先を見廻し

半七　アヽ、嬉しや。今のは人ではなかつたさうな。

　ト こなしあつて

お通よ、何も怖い事はないぞよ。いま連れて行て、母様に逢はしてやる。オヽ、こりや、泣き寐入りに寐居つたか。よし／＼。

　ト 静かに本舞臺へ來て、門口をホト／＼叩き、聞き耳して、ソッと開け、内へ入る。

こりや誰れも居ぬさうな。いつそ幸ひ。

　ト 蒲團の上へ、お通をソッと寐かし、叩きつけ、又ソッと退き、表へ出ようとして、振り返り、ヂッと留まり

辨へなき子供にも、せめて夢にも現にもなりと、今云ふ事を蟲が知らせて、よう覺えて居てくれいよ。この父は義理に迫りて、よんどころなき人殺し。例へ逃げ隱れしたとて、どうで遁がれぬ天の網。この間から潔よう、名乘つて出る心なれど、われと云ふ足手纏ひ。今が一世の別れぢやぞい。隨分ともに爺様や、母様に孝行盡し、大きうなつてこの父が、命日忌日も思ひ出し、香花を手向けてくれ。千僧萬僧の弔ひより、其方が回向を、未來で待つて居るぞよ。母様にも逢ひたけれど、一旦緣を切つた三勝・今さら未練に逢ひもなるまい。娘よ、さらば。

　ト 表へツカ／＼出ようとする。平左衛門、奥より出て

平左　半七どのか。

半七　平左衛門どの、娘が事頼みました。

　ト 駈け出さうとする。

平左　待たつしやれ。

　ト 留める。振り切り、行かうとするを、突き廻し、表をピッシャリ閉め

用がある。マア、待たつしやれいなう。

　ト 半七、行かうとして、平左衛門と顏見合せ、双方、思ひ入れ。誂らへの合ひ方になり、平左衛門、顏にて下に居ろと云ふ。半七、ヂッと下に居る。奥にて

三勝　父さま／＼。

　ト 云ひ／＼出て

ヤア、半七さま。

　ト 寄らうとするを、平左衛門、突き廻し、最前の松の鉢植ゑを、三勝に突きつける。三勝、ギックリ。半七三勝を見る。三勝、寄らうとする。平左衛門、どつさり眞中へ坐り

半七　長うは云はぬ、半七が胸の苦しさ、口惜しさ、推量して下されい。
平左　オヽ、道理ぢや。
ト云はうとして
それを誰れが知つた事か。
ト有り合ふ硯箱を取つて、半七が前へ置き
サア、書いてもらひたい。
半七　ヤア。
平左　三勝への去り狀、三下り半をさら〳〵と
半七　この間武藏屋で、緣切つた三勝に、また改めて暇の狀を。
平左　口先ばかりの退き去りでは、肝心の證據にならぬ。細言云はずと早う書け。
ト半七、こなしあつて
半七　人の情も世にある時、これまで段々こなたの深切、舅ぢや婿ぢやと云うた事も
平左　皆嘘ぢや。大事の娘をうぬゆゑに、科人には、マア、せまい。おれが斯う云ひ出すからは、首筋押へても取らにや置かぬ。足元の明るいうちに、キリ〳〵書きやがれ。
三勝　ヤ。

ト立ちかゝる。
平左　コリヤ、一言云ひ交しても、ソレ
ト奧を指差し
女の義理が立つまいがな。
ト三勝、手拭を銜へ、キツと食ひしばる。
半七　此方から望んでも、書いてやりたい暇の狀。
ト筆と紙を取り上げ、書かうとして、また三勝が方を見る。三勝、身を慄はし、手拭を食ひ裂き、思ひ入れ。
平左　おれが無筆ぢやと思うて、また飛んだ事を書いても滅多に食はぬ。娘は無筆ぢやないぞよ。
ト力んで、見張つて居る。半七、思ひ切りたるこなしあつて、さら〳〵と書き、打ちつける。平左衛門、取り上げ
去り狀は三くだり半。こりやちつと長いやうだが、念の入つたは此方も勝手。改めて見い。
ト三勝に突きつけるを、三勝、頭振り、泣いて居る。無理に擴げて見せる。三勝、尻目に、書置と云ふ所を、フツと見て、ちやつと取り、心にて讀むこなしあつて
三勝　ヤア、どうでもお前は。
平左　ド、どうした。

三勝　イヤ、眞實わたしにこの去り狀。

平左　べら坊め、知れた事ぢや。これが本當の去り狀でなうて詰まるものか。男らしう書いた。これでちつとは落ちついた。

半七　斯う他人になるからは、互ひに恨み恚はない。疾にも名乘つて出る半七。お通が手枷に掛まれて、今まで生き恥さらうぢや。

ト立ち上がる裾を取つて、引き据ゑ

平左　待て。

ト寢て居るお通を、抱いて來て

この女めも、連れてうせう。

半七　ヤア。

平左　女子は母に附くと、その手で行くおれぢやない。三勝と退けば他人。われが胤のこの小びつちよ。此方へ置いては後暗い。娘、この小伜めも、勘當してしまへ。

三勝　エヽ。

平左　サヽ、いま奧で云うた通り、勘當せずば

ト奧を見て、半七を見て、顏にて敎へ

世間へ明りが立つまいがな。

ト三勝、いろ〳〵こなしあつて

三勝　お通、カ、勘當ぢや。

平左　出かした。もうよい。サア、連れて行け。

ト半七に突きつける。

エヽ、何を愚圖々々。

ト無理に懷へ押し込み、これにてお通、目を覺まし

つう　ヤア、母様。

ト三勝、ツカ〳〵と寄るを、半七を、平左衛門、首筋取つて、表へ突き出し、後ピッシャリ。三勝、ハア、と泣く。平左衛門、取返さうとして、ヂッと堪える思ひ入れにて

平左　フウ、何を吠える。われが爲には惡魔の半七。おりやモウ、憎うて〳〵。

ト三勝が脊中を撫でながら、熱い淚が溢れるわい。表へ云ふ。

半七めも人の端くれ。子伜めに目がくれて、よもや名乘つて出やアがるまい。何處に隱れ居つても、命が物種ぢや。イヤサ、命を助かり、うろ〳〵と、難儀しをるが、せめてもの腹癒せ。コリヤ、死んで花實が咲くならば、鈴ケ森や、小塚原、いつでも人の花盛り。一寸延ひれば廣い世界、必らず短氣を。サ、われも出すなよ。

トせりふ云ひながら、門口へ錠を卸ろし、鏡臺の抽出

しより、剃刀を出し、あたりを見て出刃、小刀、鋏などを、一つに集め、懐へ入れる。

内で　申し太夫様、お望みの新浄瑠璃、小勝さまも千勝さまも、一遍稽古を、やつておくんなされませ。

平左　オヽ、もう、稽古を始めるさうなゝナニ、三勝、今まで其方も商賣で、唄ひもすれば舞ひもした、道行き本や浄瑠璃の文句に作られ、おのが身を却つて人の口の端に、彈き唄はるゝが、見目でもあるまい。ナウ、三勝。アヽ、おれが心に引比べ、よもやそんな、野暮でもあるまい。ドリヤ、稽古でも見てやらう。

ト八ツの鐘、鳴る。平左衛門、こなしあつて、中二階へ入る。此うち半七は、表にて立ち聞き居る。

内で　さらば口上からやりませう。東西々々、いよ／＼この所「其常磐津仇兼言」新浄瑠璃の始まり。その爲口上左様。

ト拍子木なしの前彈きのキツカケにて、正面の襖、納戸口、一樣に打ち返す。ト高足にて、見附け、杜若を笠鶴にしたる、手綺麗なる世話唐紙、東西の柱に、懸け花活け、これに花を見事に活け、蹴込みには、板目緣側の書割り、爰に兼太夫、式佐並ぶ。時の鐘、鳴る。

半七、三勝、内と外にて、思ひ入れ。

へ常磐の松と契りしも、今は仇なる兼言と、更け行く空も四ツ過ぎて、早九ツか半七は、戀慕の闇のとぼ／＼と、心は行けど足元は、跡に引かるゝ亂れ髪、例へ後れて死ぬるとも、同じ道にと三勝も、所詮浮世を捨て草の、露の儚なき命毛に、殘し參らせ候べくも、これが限りと書置きに、云ひたき事の數々も、胸に餘りてつと／＼に、云ひ盡されぬ女文字、筆の歩みの一足づゝに、消えて行く身は惜しからねども、流石親子の別れの繼、切るに切られぬ恩愛の、千筋の緣に縮めからむ。戸口一重の内と外、互ひに隔つ仲々も、思ひに隔て泣く涙、墨もにじむや朧月。

トこの文句のうち、半七、花道までツカ／＼と行き、この足音にて、三勝、駈け出さうとして、門口に錠が卸ろしあるゆゑあせる。半七は花道にて、フトお通を見て、思ひ入れあつて、又しつぼりとなり、我れ知らずまた舞臺へ立戻る。三勝も是非なき心にて、硯箱を持つて來り、行燈を掻き立て、書置きにかゝり、いろいろ思ひ入れ。半七は覺悟を極めし心にて、脇差を拔か

うとする。お通、何心なく、その襟を捕へる。これにて、半七、抜き兼ねる事あつて、いつそ、とお通を抱き上げ、刺し殺さうとして、どうも殺されぬ思ひ入れ。三勝は書置を読み下して、胸に迫りし思ひ入れにて、ワツと泣かうとして、袖口を當て、泣き伏す。

半七　いつに變つて平左衛門どのゝ、無得心なる今宵の體。その上、退き状まで、是非と望んだあの心は。

ト思ひ入れ。

三勝　お園さまへの義理と云ひ、又一つには半七さん、わたしに心引かされて、ひよつと縄目の恥にもと、それゆゑわざと父さんの

ト思ひ入れ。

半七　現在孫の此奴まで、突きつけたのも命の枷か。

三勝　例へどう云ふ譯にもせよ、半七さんのこの書置。

半七　人を殺したおれが身も、爰で死ぬればこのお通、

三勝　可愛い子にもあれきりで、逢はれぬ首尾も因縁か。

半七　所詮生きては

兩人　居られぬわいの。

ト思ひ入れ。三勝、書置を巻いて、上書きをする。半七、思案極めし心にて、腹切らうとする。お通、これを見て

つう　アレ、父様が。

ト半七、白刃を捨て、ちやつと抱き上げ

半七　コリヤ、喧しい。

ト小さい聲にて、口を押へる。三勝、これを聞きつけ

三勝　今のは慥かお通が聲。

ト云ひながら、門口へ來る。

半七　さう云やるは三勝か。

ト戸を明けようとして、明かぬ思ひ入れ。

つう　母様、父様が脇差を

三勝　コレマア、待つて下さんせ。

トあせる。

半七　イヤ、とても死なねばならぬ。三勝、お通が事を

ト此うち、三勝、オロ〱して、戸を打ち壊し、表へ出る。

三勝　モシ、わたしも覺悟の

ト書置を見せる。半七、取つて見る。三勝、内を窺ふ。

半七　こりや、書置。

三勝　死ぬるに定めたお前なら、なぜに一緒に、半七さん、



初演の



繪番附

云うて殺して下さんせぬ。

半七　イヤ、其方は殘つてお通が事。三勝、さらば。

ト云ひ捨て、花道へ駈け出す。三勝、驚ろき、お通を抱き上げ、其まゝ走りつき、向うへ廻つてお通を突きつけ

三勝　ア、モシ。

ト思ひ入れ。

〽三勝取りつき、なう情なや、今さらそんな胴慾な、邪險も折に夜の門、もしや人目と無理に手を、引いて入り口さし寄せて、燈火覆ふ其うちに、頑是なき子のすや〳〵と、寐ばな起さじせめてもの、これが名殘りと抱き取り、ねんねこせねんねこせ、いとが母はどこへ行た、明日は死出の山越えて、二人一緒に行かうとは、なぜマア云うて下さんせぬ、わしが心を知らぬかなんぞのやうに、つれない事をとかこつのも、奧を憚る忍び聲。

〽半七もやゝ詞なく、恨みは道理、さりながら、一人死なうと云ふも皆、お通をどうぞ孤子に、させともなさの不便ゆゑ、其方ばかりは萬年までも、生き存らへてあれが事、見立てゝやつてくれぐれも、我れ亡き跡の香花を、賴む〳〵と口籠る。

トこの文句のうち、三勝、白刃を引き取り、無理に半七を捕へ、内へ入れる。半七、聲の立てられぬ思ひ入れにて、お通を抱いたまゝ、内へ入る。行燈へ有り合せの物を打ちかけ、灯の影を覆ふ事などあつて、三勝お通を下に寐かせ、思ひ入れ。

〽あれまだ矢ツ張りそんな事、云うて泣かせて下さんすな、これが世間に有り觸れた、色や浮氣ぢやあるまいし、初手は知られず知らぬ同志、わやくな緣を神さんが、ひよんなお世話のその後は、男嫌ひを云ひ草に、船宿衆や茶屋方の、女中がなんのかの客に、是非と口說かれ取持たれ、拔け憎い場をやう〳〵と、野暮に女の情絕つて、盡きぬ緣を松の紋、話しに聞けばしつくりと、合うて嬉しき紅入れの、二人が仲ぢやないかいな。それからきつと云ひ交し、二世や三世を打ち越して、今度の今度の、ずつと今度の先の世までも、夫婦ぢやぞえと幾度か、約束したを忘れてか、氣强いわいのと取り縋り、譯も淚にあやもなき。

半七　この上はなんとせん。お通に添へて平左衞門どのへ、

三勝　頼みの書置。
半七　サヽ、早うしや。
三勝　そんなら一緒に
三勝　アイ。
ト また時の鐘。お通の懐へ、二通、書置を入れ、有り合す長持の中へ寐させ、兩人、思ひ入れ
ヘ サア一緒にと身繕ろひ、立ち出でんとする折からに。
トこの時、バタ〳〵にて、向うより、捕り手四人、出て
捕一　人殺しの半七。
四人　動くな。
半七　とても生きては居られぬ身、腹掻きさばく我が覺悟。役人方とて容赦は致さぬ。
捕一　ヤア面倒な。
四人　腕廻せ。
半七　なんと。
ヘ 死ぬるをたかと半七が、恐れずひるまぬ切尖に、捕り手もあぐみ叶はじと、皆々後へ。
ト立廻りあつて、捕り手、下座へ逃げて入る。

半七　サア、この間に爰を。
三勝　半七さん。
半七　三勝、來い。
ヘ 最早この世に秋の月、嵐の雪と散りて行く、浮名は石碑に殘りけり。
ト引取り三重になり、半七、三勝が手を引き、向うへ入る。
チョン〳〵にて、一面の黑幕になる。源之丞、角太郎、出て、立廻り、追ひかけ入る。
ト幕切つて落す。一つ鐘、定念佛、哀れに凄く、上手より半七、三勝、出て、座を占めて、いろ〳〵あつて半七、三勝を引寄せ、殺さうとする。この時向う揚幕にて
平左　待つた〳〵。
トばた〳〵にて、平左衛門、弓張りを持ち、彌八にお通を負はせ、お園が手を引き、出て
逸まるな、待て〳〵。
半七　イヤ〳〵〳〵、人を殺した茜屋半七、所詮遁がれる筋はござらぬ。

三勝　それぢやに依つて、わたしも一緒に。
　トまた刃物に手をかける。後ろ黒幕切つて落す。
　向う奥深に、寺の惣門、東西筋違ひに、覗き繪のやうに一萬日回向の提灯、千日谷と書き附けあり。ト眞中に右內、角太郎に繩を掛け、源之丞、赦し文を差上げ居る。
皆々　これは。
右內　今朝奥方、お國に御男子御平産のお祝ひ、如何なる罪科の者なりとも、一旦は罪を赦せと、御主人の御下知。
皆々　エヽ。
源之　即ち家老中連判の赦し文。
半七　すりや、私しが重罪も
右內　尤も用金の盜賊は、この角太郎が業なれども、命を助け流し者。
源之　まつた斯くいふ源之丞が、虚名も晴れて直さま歸參。
平左　その上半七助命の御恩。
右內　お園は本妻、三勝は妾。
源之　茜屋の家、相續せよと、重ね〴〵の御仁政。
皆々　エヽ、忝ない。

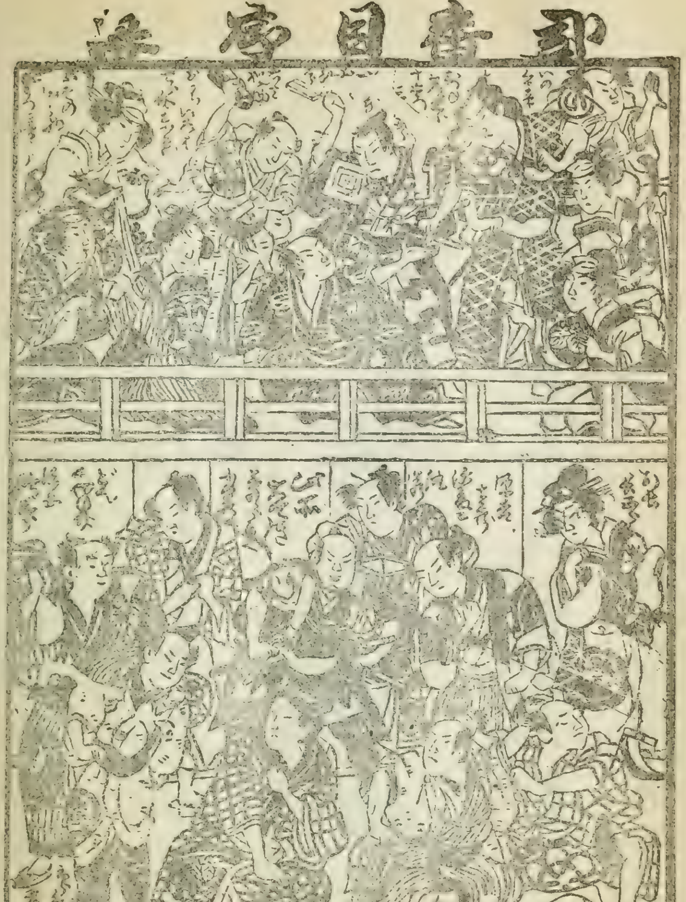
右內　萬事落着せし上は
半七　お禮の爲に此まゝお國へ
平左　めでたくこの場は、お立ち〳〵。
　トめでたく打出し。

幕

臺頭霞彩幕（終り）

おその六三

短夜仇散書(みじかようきなのちらしがき)



初演の繪番附

短夜仇散書

序幕

兩國橋袂の場
同　大のしの場

役名——大工、六三 實ハ小栗六三郎。福島屋娘、お園。同母、お梶。同召使、お勝。同番頭、太次兵衛。梶川長兵衛。金貸し、若林七郎助。遊び人、般若の彌五。同、山姥の權。家主、茂九郎兵衛。日なし貸し、市兵衛。藝者、お豐。大のしのお常。大工、平助。同、猪之助。下部、八内。髪結ひ、源吉。とこおばア　お松。船越十右衛門。

本舞臺、三間の間、正面に揚弓場の後、葭簀張りの見世物、芝居の横手。よき所に「八重霞」といふ行燈を掛けし水茶屋、長床几に仕出し大勢腰を掛け、おせん、茶屋女の拵へよろしく、茶を運び居る。上の方に髪結ひ床。茂九郎兵衛、家主の形にて踏ごみを穿き、山姥の權、般若の彌五、勇みの拵へにて風呂敷包みを抱へ、日なし貸し市兵衛、五十日かづら、古褄附きし拵へ、ちとが赦免を迎ひに来りし體。源吉、髪結ひにて、若い者の髪を結つて居る。すべて兩國橋詰めの景色。辻打ち、揚弓の音、さんげ〳〵の聲にて幕明く。

トいろ〳〵の仕出し大勢行き違ひ、捨ぜりふにて左右へ入る。此うち平助、大工の拵へにて出て来り、床几に腰をかける。

せん　平助さん、今日も仕事かえ。

平助　オイ。大のしへ毎日造作にくるから、煙草休みにやア廣小路をひやかすのだ。

せん　お茶上げうかえ。

平助　一杯いきたいの。

茂九　コレ〳〵、姐え、おれにもぬるくして一杯下さい。

せん　アイ〳〵。

ト茶を汲んで皆々へ出す。

權　モシ、大屋さん。待つて居るうちに、貧乏酒屋で鰌汁は氣なしかね。

茂九　イヤ、まんざらでもあるまいの。
彌五　併し、其うちに又、小母御は來はせまいかの。
市兵　成る程、ひよつとおいらが居ない所へ、赦免者が來て、叱られると悪い。わしも早く埒を明けて、月代を剃りたい。
權　氣遣ひさつしやろな、今日はどの道、埒は明くのよ。
平助　ハヽア、主達は、ゟおばアを迎ひに來た、勇み手合ひか。
權　誰れだ。貴様は大工の平助ぢやアねえか。
彌五　どこへ仕事に來たのだ。
平助　柳橋の大のしへ、仕事があつて來たのよ。コレ、そんなら何か、今日はおいらが友達の、六三が姉、ゟのおばアが、ゑてきちを出るのか。
權　さうサ。
平助　そいつは仕合せだの。
ト此うち床の内の若い者、髪を結ひしまひ
源吉　ハイ、ようござりやす。
ト思ひ入れ
若者　これはお世話、髪結ひ錢はそこへ置きました。
ト下座へ入る。
源吉　ハイ〱、ようお出でなされました。
彌五　コレ〱、髪結ひさん、赦免者はもう來る時分かえ。
源吉　アイ、もう今に參りやせう。……モシ、お前方は、あのゟおばアが迎ひの衆かえ。して、ありやア何の出入りだえ。
彌五　髪結ひさん。聞きねえ。何も御大層な出入りでもないのだが、爰に居る日なし貸しの市兵衛どのの頭を、ぶツ毀した出入りサ。
權　根は小母御も悪いのだ。借りた物を返さないで、催促した日なし貸しの頭をぶち毀すとは、とんだ話しだ。
茂九　今日は濟み口だから、相手方の市兵衛どのも連れて來たが、コレ、こなさんも腹は立つであらうが、その代りには、おばアも小三十日牢へ入つたよ……この上何にも云はぬがいゝぞよ。
市兵　イヤモウ、これに懲りねえ事はござりませぬ。貸した物を取らうと云つたばかりで、頭を一つ棒に振りました。イヤモウ、おツかない女でござるよ。
平助　アヽ、お前が相手方の市兵衛さんとやら云ふお方か。とんだ日に遭はしやつたのう。わしも今日はべらぼうに仕事が急がしいから、六三を呼びにやつたが、姉御が赦

免なら、來ればいゝが。

權　時に、大屋さん、間があらば一杯きめて來やせう。

茂九　イカサマ、ヤツつけおばアと洒落れよう。

源吉　沙汰があつたら、誰れぞ知らせにやりやせう。行つて來なさい。

茂九　そんなら頼みますよ。

平助　ドリヤ、わしらも仕事にかゝらうか。

權　サア、大屋さん、參りやせう。

ト辻打ちになり、皆々下座へ入る。源吉おせん殘り、捨ぜりふある。向うより梶川長兵衛、羽織着流し、大小、深き笠にて、五十日かつらの拵らへ。八内、中間にて、直ぐに舞臺へ來り、床几にかゝる。

八内　コレ〳〵、お茶を上げて下さい。

せん　アイ〳〵。

ト茶を持ち行く。

長兵　コリヤ、八内、福島屋の家内の者、未だ參らぬ樣子ぢやな。

八内　ヘイ〳〵、左樣に見えます。

ト此うち源吉、長兵衛の聲を聞き、合點のゆかぬ思ひ入れ。

長兵　然らば先程渡し置いた文箱、懷中いたして居らうな。

八内　左樣でござりまする。しつかりと懷中仕つて居ります。

ト懷より春慶塗りの狀箱を出す。

長兵　コリヤ〳〵、其方は横網町の浪人、若林七郎助方へ持參いたし、口上にて申さうは、手前ども事、今日は用事ござつて、大のし方へ參り居る事、しかと申してくれい。また内々の用向きは、手紙にて詳しく申し遣はす程に、急いで參れ。コリヤ、金子を入れある程に、人込みぢや、大切に致せ。

八内　畏まりました。左樣ならあなたは、大のしにお出ででござりませうね。

長兵　左樣々々。早う行て參れ。

八内　ドリヤ、一走り行て參りませう。

ト辻打ちになり、狀箱を持ち、スタ〳〵と向うへ入る。あと揚弓の合ひ方。長兵衛、煙草をのまんとして思ひ入れ。

長兵　コリヤ、娘、火入れの火が消えてあるぞよ。

ト差出す。

せん　アイ〳〵、いけて上げませう。

ト煙草盆を取つて釜の下の火を入れる。長兵衛、笠を取る。源吉、長兵衛の顏を見て

源吉　ヤ、あなたは、梶川長兵衛さまぢやござりませぬか。

長兵　左樣申すは、小柴掃部どのに奉公いたし罷りあつた

源吉　ヘイ、袖介めでござりまする。

長兵　誠に、左樣々々。袖介、久しぶりで出合うたわえ。

源吉　あなた樣にもお變りなき體、お喜び申し上げまする。

長兵　イヤ〳〵、近年は殊の外多病に罷りなり、見やる通りの長髮。それゆゑにお上へもお願ひ申し、御用向きは同役の衆中を相頼み、保養の間にお役所を退いて罷り居るが、氣の毒なは六三郎が先達ての越度。して、今以て尋ぬる品も

源吉　左樣でござりまする。里見家の重寶、印子の鯉魚、お旦那小柴掃部さまの預かりなりしに、御寶藏に盜人忍び入りしにや、右の御寶紛失なし、申しわけなう、掃部さまには御切腹。御子息六三郎さま、詮議の爲に町家の交はり。私しめも何卒手がゝりも知れんかと、人立ち多き場所に入り込み、髮結ひ商賣。梶川さま、御朋友のよしみ、手がゝりとてもお聞きなされましたならば

長兵　そりや手前と申し、如才とは存ぜぬ。ハテ、六三郎は格別、鯉魚はお家の御寶と申し、紛失させては身が立たぬ。イヤ、分けて聞かうは、お出入りの白銀町福島屋清左衞門こと、病死して後、お屋敷奧女中のお園ことは、お暇を申し請け、福島屋の跡目相續と承つたが、この程世間の噂を聞けば、お暇出でし六三郎とお園は、内々密通いたし、殊に懷姙

源吉　エ。

ト思ひ入れ。

長兵　イヤ、左樣な噂もあるが、そちや存ぜぬか。

源吉　イヤモウ、一向承りませぬ事。六三郎ことは、殿樣の御勘當より、乳母が娘、お松と申す者の世話に罷りなり、只今にては大工の世渡り。

長兵　ムウ。其お松と申すは、深川邊に罷りある、[illegible]と申す女の事か。

源吉　左樣でござりまする。女ながらも、一筋繩ではゆかぬ生れ附き。あなた樣には、よく御存じでござりまするな。

長兵　イヤ、承つたやうにもあるて。

ト思ひ入れあり

源吉　イヤ、袖介、幸ひぢや。身が髭ばかりを剃つてくれぬか。
ト長兵衞、床几に腰かける。源吉後へ廻り、長兵衞の髭を剃る。おせんは盥へ釜の湯を汲み、持ち來る。よろしく、唄の頭になり、向うよりお梶、後家の拵らへ、日傘をさし、お園は屋敷奉公人宿下がりの拵らへ、振り袖にて、お勝はお屋敷の召仕の拵らへ、日傘をさしかけ、太次兵衞、通ひ番頭の老けたる拵らへ、下女一人、供男一人、袱紗包みを持ち出て來り、花道にて
太次　モシ／＼、お園さま、今日は天氣もようて、お仕合せでござります。これからは大のしへお出でなされて、あの河岸からお船に召すがようござります。殊に今夜は、花火が揚がると申す事でござりまする。
かつ　それは／＼マア、お園さまに附いて參つた私しどもまで、よい仕合せでござりますわいな。
下女　モシ／＼、お屋敷と違うてわたしらは、毎晩々々大屋根へ上がつて、兩國の方を見て、イヨ、玉屋。アレ、あの通り褒めまするわいな。
下男　何を云はつしやる。
かぢ　これはしたり、阿房らしい。道中でどうしたものぢや。コレ、お園どの、見やしやんせ。町家の下女といふものは、はしたないものぢやござんせぬかいな。
その　イエモウ、お屋敷ぢやと申しまして、部屋方では、それは／＼氣さくな衆もござりますわいな。
太次　成る程、左樣な者もござりませうが、此やうな又、惡騷々しいどぶつが。
ト云はうとして
ハヽヽヽ。サア、大のしまで參りませうか。
ト唄の切れにて、皆々本舞臺へ來り、床几にかゝる。
せん　どなたもようお出でなされました。
トめい／＼へ茶を運ぶ。源吉見て
源吉　ヤ、あなたはお園さまぢやござりませぬか。
その　ヤ。
ト思ひ入れ。
長兵　ナニ、お園とは
トこの時髭を剃りしまひ
源吉　ハイ／＼、よろしうござりまする。
長兵　大儀々々、世話であつた。
源吉　ヘイ／＼、只今は商賣でござりまする、いつ何時でも御用があらば、

長兵　また頼むぞよ。

源吉　畏まりました。ハイ、あなた方、これにお出でなされませ。

ト お園思ひ入れ

ほんに、五十嵐へ行つて、鬢附けが切れて居た。この間にちよつと。

ト 思ひ入れ。

ドリヤ、取つて來ようか。

ト 唄になり、下座へ入る。

かぢ　これはしたり、あなた樣は、梶川長兵衞さまぢやござりませぬか。

長兵　さうお云やるは、福島屋の後家お梶どのか。よい折柄に逢ひました。お連れと申すは、

ト 思ひ入れあり

お屋敷へ御奉公に上がりめされた、お園どのか。お宿下がりと承つたが、エヽ、こりや今日は、船遊山と申すやうな事かな。存じ居つたら、お連れ立ち申さうに。併し、よい折柄お目にかゝつた。ちと向島邊へ御同道仕らうかな。ハテサテ、よい折柄お目にかゝりました。

その　ハイ〳〵、これはハヤ梶川さまのお嬉しいお詞。あなた樣には、この間より御病氣との事。存じよりませぬ所でお目にかゝりました。私しも五日のお暇、明日はお屋敷へ參りますれば、最早今日ばかりの、ハイ、樂しみでございますわいな。

長兵　ア、最早明日はお屋敷へ上がらつしやるかの。定めて二三日は、物見遊山を致されたであらうの。

太次　ハイ〳〵。イヤモウ、僅か五日のお宿下がりでござりますれば、家内は混雜仕つて、やう〳〵昨日、芝居も見物に參りました。

かつ　堺町も見物いたしました。面白い事でござりましたわいな。

長兵　芝居見物の折は、後家御も御同道でござらう。して、役者は誰れが贔屓ぢやな。さぞかし御馳走をなされたでござらうの。

かぢ　左樣でござりまする。何を申しまするにも、私しとは生さぬ仲、申さば義理あるお園どの。御存じの通り、近頃參つて程もなう、連合ひ淸左衞門は死去。この子の爲には實の伯父、福島屋淸兵衞は、向島の寮へ引込んでの若隱居。

長兵　オヽ、あの福淸といふのは、その御仁の事かな。

かほ　左様でござりまする。夫れは、連合ひ存生の時に、これなるお園どのを、あなた様へ嫁入りさせまする約束に致し置きましたとの事なから、只今にてはお暇を申し請ひましてなりとも、藤島屋の家を立てまするは、この子ばかりでござりまする。

長兵　アヽ、コレ／＼、お園どの、藤島屋の家は、お園どのの兄御がござると聞きましたが、なぜ又その兄御に家相續の儀を

かほ　これはしたり、まだ御存じござりませぬか。この子の兄御には去年の冬、病死いたしましたわいな。

長兵　成る程、惜か他用……ほんに、さうでござつた。許しながら、藤左衛門どの存生のうち、契約いたした縁組み、是非身共が申し請けて

その　左様ではござりませうか、何を申すも御奉公の只今の身の上。殊に、父さんの位牌所を立てさせにやならぬとの事。わたしや外へ嫁入りは

長兵　出来ぬとあらば、身共今より武士をやめ、小糠三合持たぬとも、お園どのなら聟入りを。

かほ　アノ、お前様が。

長兵　町家へ聟入り仕るて。

その　おやを申して、武家方を、どうして私しが

長兵　武家では町家が立たぬとお云やるか。以前は武士のしくじりの、大工の六三を入り聟にか。

その　エ。

ト思ひ入れ

長兵　なんと違ひはあるまいがな。

ト此時向う揚げ幕にて

六三　エヽ、見つともない。離しやれな／＼。

ト誂らへの流行り唄になり、向うより猪之助、職人の拵らへにて、六三の胸倉を取つたる手を、大工の六三キッと掴み、右の肩へ道具箱を載せて出て来る。後より若林七郎助、医者の金貸しにて、羽織大小、雛子にて、お供、町藪者にて、箱持ち一人、長棹の三味線箱を肩に載せ出て来る。花道にてよろしくあつて

猪之　コレエ、六三、金を借りてやつた猪之助を、締めるのかえ／＼。

六三　コレサ、猪之助。名立ちのお主を、なんで締めるの、どうするのと、そんな嫌味は云はぬものだ、併し人中、人ごみで、野郎呼はりしやるから

猪之　それでお主が、

六三　マア、そんなものよ。

とよ　申し、お前は大工町の六三さん、この頃はきついお見限り。ちつと遊びに來なさんせいな。

六三　ヤア、裏河岸のお豐坊か。今日はどこの雇ひだ。見さつし、斯う道具箱を擔いだところは、どうだ。箱持ちと見えるかえ。併し、氣の付かねえ箱持ちがあつたら、年中藝者に氣を揉ませるであらう。おえねえ氣紛れだぞ。

七郎　左樣々々、其やうな箱持ちが、藝者に付いて歩かれては、客は一倍氣ばかり揉んで、氣を揉み死に死なねばならぬ。

とよ　エ、、又、無駄ばつかり。

六三　お豐、客人は大のしかえ。

七郎　左樣。お主もちやつと付合つて行きやれな。

六三　そいつは有り難い。サア、參りやせう。

ト右の唄の切れにて、本舞臺床几にかゝる。お園見て

その　ヤア、六三さん。

六三　お園どのか。

長兵　さう云やるは、

ト見て

慥かに小柴の

七郎　梶川どのかな。

長兵　貴公の方へ只今使ひを

七郎　エ、、さては印子の

長兵　ア、コレ……うか／＼それを、ナ……御合點か。

（呑みこみ）

七郎　成る程、これは不調法。これなるお豐を召連れまして、屋根船で向島と心がけ、柳橋へ參つたところ。こりや貴公にも船遊山と見えましたが、左樣か／＼。

とよ　申し、梶川さま、よいお連れでござります。直ぐにあなたもお出でなされませぬか。

長兵　イヤモウ、身共病中ぢやて。

七郎　ア、まだ御全快ござらぬかな。

長兵　イヤモウ、御存じの通り、保養の間、ぶら／＼と出かけまして、今日は大のし方にて、一獻下さりませうと存じ付き、參つたところ、屋敷へ出入りの福島屋の家內、宿下がりの娘を同道仕り、引合ひましたを幸ひに

七郎　妾もとにお出でなさるか。成る程、福島屋の後家御、娘御のお園どの。誠に、花を飾りし其お姿。イヤ、あでやか／＼。末々は梶川さまの御新造樣。ア、お羨やましい儀でござるて。

ト これにて皆々思ひ入れ。

六三 成る程、お前樣の云ひなさる通り、お屋敷のお暇が出たら、早く御婚禮、今日爰へござつたも、云はゞ見合ひも同然な。日柄もようて、おめでたうござります。

その ア、コレ〳〵。どうしてわたしが、なんで

長兵 ア、イヤ〳〵、お園どの、そりや只今あの職人が申す通り。アイヤ、職人ぢやと存じたら、貴樣は小柴蒲部どのゝ子息。

六三 ハイ、六三郎めでござりまする。以前の身分でござつたら、御朋友の梶川どの、只今にては武家と町人、殊には輕い職人の、お目にかゝるも何とやら。これと申すも、某どもが、預かり置いたる印子の鯉魚、紛失なしたるお咎めにて、遂には切腹。家を立てるは御寶詮議仕出して、小柴の家名、相續いたす願ひにて、詮議のうちは町人ども。又この上にどのやうな、輕い身分になりまして、人の誹りを受けましても、寶詮議の其うちは、梶川さま、恥かしいとも存じませぬて。

長兵 成る程、こりや尤もな一言。さほど辛抱おしやらずば、失せたる鯉魚の在所も知れまい。……イヤ、それは格別、お梶どの、この手蹟覺えてござらう。

ト 合ひ方になり、紙入れより、福島屋清左衛門より長兵衛へ遣はしたる手紙を出し、お梶へ渡す。お梶よく見て

かち こりやコレ、過ぎ行かれたる連合ひの手蹟。お園をあなたへ差上げませうといふ手紙の文言。

その すりや、父さんが存生に、云はゞ約束のその手紙。今は形見のこの御手蹟。

長兵 なんと違ひはござりますまい。僞はりならぬこの手紙。

ト 又繰返し

お園は身共が女房ぢやぞ。外の男は間男ぢや。並べて置いて

ト 思ひ入れ

相手の男は侍ひでも、今は身輕な町人でも、容赦いたさぬ、眞二つ。六三郎どの、アイヤ、職人の六三とやら。なんと、左樣なものぢやないか。

ト 當てゝいふ。

六三 成る程、左樣。お屋敷でも、町人でも、間男ならばこりや同罪。首の飛ぶのも合點で、どうで色戀する氣ぢやア、命が惜しいの、死ぬ死なうとの約束も、色から起

る無分別。血の氣の多いその時は、死んで見たいも一盛り、男と生れたこれも名聞。年増もござれ、生娘藝者、女郎とありやア中三から、見世女に至るまで、二回目からは身上がりだ。人の女房に囲ひ者、色にするのも男の腕。取られる男はうつそりめら、薄鈍いから起つた事。梶川さま、そんなものぢやアござりませぬか。

長兵　すりや、鈍いゆゑ、思ふ女を

六三　盗まれる馬の性は鼻毛サ。

長兵　アノ、武士たる身共を

六三　イヽエ、取られたか知らぬが、こりやア話しサ。

長兵　ア、浮世話しか。

六三　左やうサ。

長兵　イヤ、さうなけりや。

六三　エ。

長兵　叶ふまいて。

トきつと思ひ入れ。

猪之　コレエ、、六三、わりやア姉のもとおばアが、喧嘩出入りで牢へ入つて、濟み方を付けるは、金がいると頼むゆゑ、親方を頼んで、向うの知れねえ作料を、五兩といふもの借りてやつたワ。それになぜなまけるのだ。なんでも今日は帳場へ連れて行く。サア、來やな。

ト引ッ立てる。

六三　ハテ、今日は平助が方へ行かにやアならぬ。さう思つてくりやれ。

猪之　イヤ／＼、なんでも今から連れて行く。エ、、來やと云ふのに。

ト引ッ立て行くとて、六三が腕を捲り、お園命と彫つてあるを見附け

ヤ、なんだ。「お園命」と六三が腕に。

ト云ふ。六三よろしく隱す。長兵衛、さてはト思ひ入れ。七郎助こなし。

七郎　コレ、六三。今これにて承れば、あの者が世話で、五兩の金子借用したも、入牢いたしたもとが濟み方に遣ふとの事。身もあのもとには、あの者が、深川に勤め致して罷りある時分から、心あつて通つたに、つひに一度の……アイヤ、それは格別、牢舍いたす所の方から、度々の無心。その請合ひは六三郎、てまへぢやぞよ、忘れはしまい。あの譯は、てまへが附けるのぢやぞよ。

六三　ハテ、お案じなされますな。姉御を牢から出したいばかりに借りた金。殊に今日赦免があれば、姉御とも

相談して、キツとお返し申しまするよ。必らずお氣遣ひなされまするな。

七郎　そりや、さうありさうなものぢや。

ト辻打ちになり、平助、バタ〳〵と出て來り、六三を見て

平助　コレ〳〵、六三、てまへどうしたものだ。急な仕事だから早く呼びにやつたに、悠長らしい、サア、來やれな。

ト六三を引ッ張る。

六三　ほんに、さう思ひましたが、ちよつと爰に用があつて。

平助　ハテ、來て下さいな。

六三　參りやすよ。

猪之　エヽ、平助、退いて居ろ〳〵。コレ〳〵、六三、親方の帳場へ來やな。

平助　ハテ、今日は此方の仕事をさせるワ。

ト兩方より六三を引ッ張り、辻打ちになり、六三は道具箱を持ち、二人に引ッ張られ、捨ぜりふにて下座へ入る。引違へてお常、大のしの女房の拵らへにて、下座より出て來り

つれ　これは福島屋の後家御樣、お屋敷のお園さま、今日はようお出でなされました。殊に今晩は、よい花火がござりまする。ゆるりとお涼みにお出でなされませ。

かち　これはお常さん、爰まで迎ひに來て下さんしたかえ。お取込みであらうのに。そんなら又今日は、お世話になりませうわいなア。

つれ　いつとても取込みまして、お構ひ申し上げませぬ。お園さま、お館下がりも、せめて十日づゝもあればようござります。ホヽヽヽヽヽ。梶川さま、若林さまも、御一緒がよろしうござりませう。モシお孃さん、今日はお一人かえ。

とよ　アイ、皆今日は船へ行きなさんしたわいな。

かつ　なんとお園さま、大のしへお出でなされませいな。

太次　御酒はたらぬが、肴あらしと出ませうかえ。ハヽ、ハヽヽ。

つれ　お前樣、お齒は丈夫でござりますかえ。

太次　イヤモウ、齒も達者、目も達者でござるて。

長兵　然らば若林氏も同道いたし、何かの話しは大のしにて。

七郎　左樣ならば、梶川さま。

長兵　お園どの、身共と一緒に。
ト手を取らうとする。
その　イエ、私しは。
ト振り切るを無理に引留めるとて、腹帯を探り見て
長兵　慥かに腹帯。
かぢ　エ。
ト立廻つて、お園を圍ひ、思ひ入れ。
長兵　後家御。
かぢ　梶川さま、お連れ立ち申しませう。
つれ　サア、お出でなされませ。
ト唄になり、皆々思ひ入れあつて、下座へ入る。直ぐに辻打ちになり、下座より權、彌五、茂九郎兵衞、市兵衞、捨ぜりにて出て來り
茂九　コレ〳〵、若い衆、もうお拂ひ者は來さうなものぢやぞよ。
權　さうサ、もう來る時分でござんす。
市兵　大方八ツでなくば、お拂ひはあるまいて。
茂九　マア〳〵、爰で、待ち合せるがよい〳〵。
ト時の太鼓になり、向うより中間二人、六尺棒を擔ぎ、先に立ち、次にもとのお松、悪婆の拵らへ。白歯、眉毛生えし年増女の體にて、縄にかゝり、人足、縄たびかへ、後より羽織股引の役人、供二人附いて出て、舞臺よき所へ引据ゑ
中間　下に居ろ。
役人　深川町まつが家主、參り居るか。
茂九　ヘイ〳〵、茂九郎兵衞、相手方市兵衞、召連れましてござりまする。
役人　相手方市兵衞。深川町まつ。それへ出ませい。
皆々　ハイ〳〵〳〵。
ト皆々蹲る。
役人　コリヤヤイ、其方ども事、相對の借用錢延引に及びし、論じ合ひ、口論いたし、女にあるまじき市兵衞を打擲いたし、疵附けの段、重々不届き至極に附き、入牢申し附けたるところ、市兵衞の手疵平癒の上、扱ひの趣き、連れ立つての願ひに附き、お聞濟みあつて、松が不届き御赦免あつて、所をお構ひなさるゝ。有り難くお請け申せ。
まつ　ア、有り難うござりやす。
役人　相手方市兵衞。それへ出ませい。
市兵　ヘイ〳〵。

　ト蹲る。

役人　其方、罪人と申せども、松と口論の相手になり、町役人へ預け置けど、双方とも異議なく相濟む上は、其方も只今よりお赦しなさるゝぞ。コリヤ、家主、左樣心得てよからう。

茂市　エヽ、有り難うございまする。

役人　家來ども、松が縛しめを解け。

中間　ハツ。

　トお松の繩を解き、突き放す。お松、まぢ〳〵して居る。下座より仕出し大勢出かゝり、噂をして居る。

役人　身共もこれより盜人の詮議。この程、淺草今戸橋にて、掛屋の手代嘉七、金子五十兩持參いたし、夜分通りかゝりしところ、侍ひ體の者一兩人、口論いたしかけ、懷中の金子奪ひ取り、その場を逐電。尤も金子に一兩一兩、三つ星の極印ある由。慥かの訴へ。三つ星の極印ある金子遣ふ者は、卽ちその夜の盜人。其方どもも左樣心得、手がゝりあらば訴へ參れ。キツと申し渡したぞ。

皆々　畏まりました。

役人　然らばこの旨、外々を吟味いたさん。家來、參れ。

皆々　ハツ。

　ト辻打ちになり、中間供の者に市兵衞も跡に附き、向うへ入る。四人殘つて

茂九　ヤレ〳〵、お松どの、暑い時分に、とんだ目に遭つたなう。

權彌　姐御、おめでたうございやす。

まつ　オイ、てめえ達はよく來てくれたの。

權　モシ、浴衣を持つて來やした。早く着替へさつしやいな。

まつ　そいつは氣がきいて居た。何も不自由はねえが、このモウ汗臭いにはあやまる。

　ト帯を解いて、權が持つて來た包みの中より、白縮緬の下帯と、浴衣を出して着替へる。此うち、揚弓場の者、矢張り仕出し段々に殖えて、兩方に立つて見て居る。

まつ　コレ、聞いてくりや。女の牢入りはおればかりかと思へば、御大層にあるものよ。シタガ、强勢多いの。イヤモウ、地獄にも佛だ。青茶婆アだの、金時のお留だのと、まだ〳〵上があるものだ。あの手合ひがほんの惡黨サ。

三人　首は細つて居るか。

まつ　毛筋ほどかゝつて居るよ。

ト此せりふのうちに着物を着かへる。仕出し騒ぐを見
附け
なんだ、此奴等は。面白さうに、見やアがる事はねえ。高が女の牢入りだ。面白いものぢやねえワ。おれが面を祭が渡るか。まじ〳〵と、暇の出た居候ふが川留めにあつたやうに、何をぎよろつきやアがる。おれに氣があるのか。色になつてやらう。サア、抱いて寢てやる。間抜けめら、爰へ來やアがれ。

トつか〳〵と行く。仕出し皆々兩方へ逃げて入る。この時辻打ちになり、源吉、油を買つて戻り來る。

三人　姐御、もう、ようごんす〳〵。

まつ　牢から來た御祝儀に、二三人も引ッ捕まへて、ぶッ挫いてやらうもの。惜しい事をした。

源吉　ヤア、姐御、おめでたうござりやす。

まつ　源吉さん、見ねえな。今度はもう法螺の貝だと思つたら、また歸りなすつたよ。

源吉　ナニお前、歸らねえでわな。

まつ　エヽ、世辭を云ふ者だの。コレ、剃刀を貸しな。

源吉　アイ〳〵、なんにするのだ。

ト出して渡す。

まつ　なんといつて、眉毛を見ねえな。どうか又、地獄にでも出るやうだわな。髮を解かねえと、一倍うつたうしいよ。

ト剃刀を手合せして

内へ歸ると、直ぐに鐵漿だ。ほんに昔、大坂でお仕置になつたとゝは、きうせん筋があつたと云ふが、わつちにもきうせん筋があるよ。

三人　そいつは氣障だよ。

源吉　コレ、姐御、床へ行つて髮を解かしねえ。

まつ　さうして行かうよ。「髮もおどろにとき亂れ、鐵漿も附けねば白齒となる。」

ト義太夫を一口語りながら、眉毛を剃る。

三人　イヤ、義太夫は餘ッぽどうまいものだ。

茂九　時に、お松どのや、なんと一緒に歸らねえか。

まつ　併し、わつちは身臭いから、錢湯へ入つて行かう。大家さんも、若い者も、先に行かつし。

權　さうしやせう。この單衣物は持つて行くかえ。

まつ　エヽ、氣障な。その褞袍は、大川へ淩ひ込んで行きやな。

彌五　呑み込みやした。

源吉　ほんに、湯といへば、おれも桁湯へ入つて來ようか。

茂九　そんなら歸るによ。

まつ　さうしな。大家さん、今日は御苦勞よ。

茂九　お茶でも上がれか。

彌五　エヽ、古いやつサ。

ト辻打ちになり、四人連立つて向うへ入る。お松殘る。揚弓の音。

まつ　アヽコレ、久しぶりで娑婆へ出は出たが、あの船越十右衞門さんを、附けつ廻しつ口說いたが、解つた返事をしてくれねえ。あんまり初心な。

ト思ひ入れ

さう云つても、コレ、何ぞ小錢の廻る話しがありさうなものだな。

ト此うち長兵衞、後へ出かゝり居て

長兵　好い仕事を云ひ附けてやらう。

ト合ひ方。

まつ　ヤヽ、お前は梶川さん。

長兵　もし、そちや牢舍と聞いたが、無事の赦免で先づはめでたい。それに附き、身が心をかけ罷りある、奧勤めのあのお園。お暇の出た六三めと乳繰り合つて、慥かに懷姙。殊さら六三は、今の身分では其方が弟と申すが、左樣か。

まつ　アイ。成る程。わつちが死んだ阿母は、六三どのゝ乳母でござります。云はゞわつちは乳兄弟。お屋敷をしくじつて、行き所が無いかして、今ぢやアわつちを便つての居候ふ。世間の手前があるゆゑに、弟にはして置くものゝ、食ひ潰しにして置いては、今日が行かねえわな。

長兵　尤もぢや。左樣思はゞ、好い金儲けがあるが、かゝつて見る氣か。

まつ　アイ、そりやアどんな話しだえ。

長兵　その話しといふは。

ト囁く。お松呑み込む。

まつ　エヽ、そんなら福島屋のお園を、お前さんが

長兵　コリヤ、靜かに云やれ。

まつ　モシ、その位な事は、ほんの口元サ。聞けば里見の屋敷に、印子の鯉魚といふ寶があるげな。それをお前が引揚げて。

ト思ひ入れあつて

長兵　コリヤ、他聞の聞え。……コレ、まんざらの事でもないが、何を申すもその品は、七郎助と申すを頼み

まつ　エヽ、七郎助とは表向き、俗醫が立たねば金貸しのあの浪人。あの人の手へ渡つちやア、滅多に知れる氣遣ひはないが、そりやア格別、お關が事は、わつちが請け込んだ。骨にならぬやう、金の來るまで、これといふ品でも、わつちに預けて置きな。

長兵　こりや尤も。コレ、預ける品は。

ト懷中より、赤地に雛鶴織りたる錦の袱紗を出し、裏を返すと、白地にて、文字書きある。

町家の女に申したとても、解らぬ價値とは思へども、とくと聞きやれ。

ト袱紗の裏を返し

「多年數度の軍功として、鯉魚の置き物遣はすべく候ふ間、今より里見家の重寶とすべきものなり。月日。里見義氏へ、源義詮判」即ち赤地の古金襴、模樣は雛鶴。これは印子の置き物たる、鯉魚を包むのこの袱紗。この品其方に遣はして置から。

まつ　すりや、アノ、これが、印子の置き物たる、鯉魚を包む袱紗と云ひなさるかえ。

長兵　他家にあつては益なけれど、里見の屋敷へ持ち行けば、鯉魚を詮議の手蔓の袱紗、滅多に出されぬ品ゆゑに

まつ　わしがキツと預かりやした。

ト懷中する。

長兵　殊にお關は正しく懷姙。屋敷へ行くとも、懷姙では

まつ　どうで始終は駈落ちの、六三と逃げぬ其うちに、あなたの手へ

長兵　入れる前方、はらめる餓鬼を、コリヤ。

ト囁く。

まつ　おろし藥を用ふる工面は

長兵　便りは後から。

まつ　梶川さま。

長兵　わし。

まつ　お待ち申しやす。

ト唄になり、向うへ走り入る。長兵衛殘る。後より七郎助出て

七郎　梶川どの、先達てより預け召された、印子の鯉魚。二百兩用立て置けど、この度嚴しき屋敷の詮議、金主方にも氣遣ひに存じ、賣り渡さんと申せども、賣り拂うてはお互ひに。云ひくるめても、なか〳〵以て

長兵　サア、左樣存じて家來に持たせ、手紙に添へて五十兩。あの金にて當分を

七郎　エヽ、すりや、先達て五十兩
長兵　遣はしたれど、今に家來か。ハテ、不調法な。
ト向うへ心遣ひ。辻打ちになり。八内、文箱を持ち、スタ〳〵と出て來り、舞臺を見て
八内　これはしたり、七郎助さま、お旦那もこれにお出でなされましたか。あなたのお宅へ參りしところ
長兵　コリヤ、口數云はずと、その文箱、急いであなたへ。
八内　ネイ。
ト七郎助へ渡す。
七郎　すりや、この内に貴公の御状。殊には添へて五十兩
ト封を切らうとする。
長兵　ア、コレ、人目ござれば
七郎　大のし方にて
長兵　とくと對談。
七郎　然らば御状は
長兵　その節しかと
七郎　拜見いたさう。
八内　ア、モシ、お旦那、誰れか
兩人　エヽ。
ト七郎助は文箱を懷中する。八内思ひ入れあつて
八内　アヽ、犬めおやさうな。
長兵　たわけ面め。
ト思ひ入れ。三人この見得にて、辻打ちになり、道具廻る。

本舞臺、三間の間、向う塗り骨障子、大のし座敷の體。上の方に九尺の障子屋體。「大のし」といふ行燈掛けある。下の方、黑塀の板めくれ、新規の板打ち附けある道具立て。爰に六三、道具箱を引寄せ、板削りして居る。平助猪之助も板などを削り居る見得。踊りの鳴り物にて道具とまる。
猪之　今日はべら坊に暑いぢやアねえか。
平助　それ〳〵、名代の盆のうしろ前だ。
六三　この位な事はあらうよ。
ト三人仕事して居る。矢張り右の鳴り物にて、奥よりお常、茶を汲んで來る。
つね　サア〳〵、煮花が出來た程に、ちつと休んでから始めなさんせいな。
平助　そいつは有り難い。猪之助、茶にさつし。
猪之　なんだかべら坊に暑いぞ。

平助　この男は暑いにまで、べら坊〳〵と、べら坊にべら坊仕込んだべら坊だ。
つれ　何をマア、阿房らしい。
　ト奥へ入る。
平助　サア、六、茶を飲まつし。
六三　オイ〳〵。マア、こいつを仕上げてしまはう。
　ト矢張り板削りして居る。二人は茶を飲んで、捨ぜりふ。此うち矢張りかすめたる踊りの鳴り物。奥よりお豐、銚子杯を持ち、お勝、丼を持ち、出て來り
とよ　六三さん、氣が盡きやうに、一つ飲んでからおかゝりな。
かつ　酢の物はお嫌ひかは知らぬが、持つて參りました。今にお吸ひ物をあげませうわいな。
とよ　サア、わたしが酌ぢやわいな、飲みなさんせ。
かつ　イヽエ、わたしがお酌しようわいな。
　ト兩方爭ふ。
六三　コレ〳〵、待ちなさい〳〵。今日は急がしいに、釣から助けに來た六三、酒を飲んで居ては仕事が出來ねえ。
かつ　さうではあらうが、お園さんのお指圖でござりますわいな。
とよ　仕事は捨てゝ置いてようござんすわいな。
平助　イヤ、とんだ事を云ふ手合ひだ。
かつ　左樣ならお前、只今は上がりませぬかえ。
六三　晩まで預けやせう。
とよ　そんなら氣任せにしなさんせいな。
　ト持つて行かうとする。
平助　アヽ、コレ、六坊が飲まずば、わしが飲みませう。
猪之　姐さん、おいて行きねえ〳〵。
かつ　イエ〳〵、お前方に上げるのぢやござんせぬ。
とよ　ハテ、來なさんせいなア。
　ト道具を持つて奥へ入る。
猪之　ニヽ、あの女めらは、しはい奴等だ。
　ト振返り見て居る。奥よりお常出て來り
つね　モシ〳〵、あの座敷の上に、雨の廻る所がござんす。併し、ありや屋根へ、上がらずば見えまい。お前方、ちよつと來て下さんせ。
平助　この暑いのに屋根へ上がるのか。
猪之　エヽ、酒も飲ませないで、アレ、あの六三を頼みなさい。

つれ　これはしたり。この暑いのに、霍亂しては惡うござんす。お前來て下さんせ。

平助　コレ／＼、あの六三は、霍亂しては惡いが、おいらはしても大事ないか。

つれ　サア、さうではなけれど、お前方に出來さうな仕事ぢやに依つて、マア／＼、來て下さんせいな。

平助　エヽ、おいらは否だよ。

つれ　ハテ、來なさんせいな。

ト捨ぜりふにて、お常は二人を引ッ張つて連れて入る。あと合ひ方。六三殘り

六三　エヽ、なんのこつた。爰の內の下ッ端も、餘ッぽどな代物だ。

ト誂らへの彈き流しの唄になり、奥よりお園出て來り、思ひ入れあつて

その　コレ、勝は居やらぬか。どこへマア行きやつたやら。

ト思ひ入れあつて

六三さん、逢ひたかつたわいなア。

ト駈け寄る。六三は此方へ飛び退き

六三　オッと、爰へお出でなさるな。大事のお嬢樣が埃だらけになりやす。其方へ退いてお出でなされませ。

その　コレイナア、六三さん、そりやお前聞えませぬ。定めしお前の腹立ちは、先刻にも聞きなさんした、あの堀川と、過ぎ行かれた父さんが、わたしにも知らさいで、武家方へ嫁入らすといふ、約束はあるではあらうけれど、わたしや、ふつ／＼嫁入りする心はござんせぬわいなア。

六三　モシ／＼、嫁入りなさらうが、なさるまいが、それを職人の私しが何を存じませう。お前樣は、堀川さまの奥樣サ。

トばた／＼と何なりと仕事して居る。

その　なんのマア、どのやうな事があつても、わたしや堀川へ嫁入りする心はござんせぬ。その行かれぬといふ譯はな。

ト六三が側へ差寄る。この時奥より

太次　お園さま／＼。

ト聲するゆゑ、二人は飛び退き、六三は仕事して居る。お園は鉋屑をあちこちして居る。太次兵衞出て來り

太次　お園さま／＼。……オヽ、爰にお出でなされたか。只今子供の踊りが始まります。ちやつとお出でなされまし。

ト手を取る。

その　ア、コレ、わたしやちつと爰に、
太次　エヽ、大工どのに何の御用がござりまして。
その　サア、大工さんに
六三　何か用がありやしたねえ。
その　サア、その用といふはな。
六三　その用は、土藏を建てる話しだつけね。
その　慥か其やうな
太次　アヽ、お園さまは土藏の普請なぞは詳しいかな。ハヽヽヽ。
その　何をマア、阿房らしい。わたしや大工さんに用のあるといふは、コレ〳〵、これぢやわいな。
ト鉋屑を取つて見せる。
太次　そりやア、鉋屑でござります。それが何になりますな。
その　わたしやこれでな、アノ、何ぢややら。
太次　それが何になりまするな。
その　アノこれが。……オヽ、それ〳〵、わたしや鶴を折つて見ようと、それを主に習うて。
太次　これはしたり、鉋屑で鶴がどう折れませう。サア、後家御樣がお呼びなされます。ちよつとお出でなされませ。
その　でも、わたしやちつと
太次　ハテ、お出でなされませ。
ト矢張り踊りの鳴り物にて、無理に連れて奥へ入る。
六三殘り
六三　エヽ、あの親仁め、氣のきかぬ奴ではないか。それにしても、宿下がりも、もう明日ぎりだと聞いたが、アヽコレ、どうぞ
ト鐵鎚を持つて叩き立てゝ居る。お園、ソツと差し足にて奧の方より心遣ひあつて出て來り、六三が側へ寄る。奥より平助、醉うたるこなしにて出て
平助　エヽ、剛的に削りが取つたわえ。コレ、六坊〻〻、内の下ツ腹が、一銚子、内所で氣を附けさせたから、餘ツぽどおつりきな氣持ちになつたが、コレ〳〵、あの天井の雨の漏る所を、マア來て見て下ツし。あいつはどういふ鹽梅式か、一ゑんと氣が知れねえ。サア、ちよつと來て下ツし。
ト六三を引ツ張り、連れて行かうとする。
六三　待たツし。爰を片附けてから見てやらう。
平助　ハテ、ちつと見て下さいよ。

太次　ト引ツ張る。お関心遣ひして居る。此うち踊りの鳴り物。三人捨ぜりふ。奥より太次兵衛出て来り

太次　モシ〳〵、お関さま、いま踊りの面白い最中でござります。ちやつとお出でなされませ。

その　ハテ、いま云ふ通り、ちつとわたしや

太次　ハテ、お出でなされませ。

平助　コレ、六坊、来て下さいな。

六三　いま行くわな。

平助　ハテ、来て下さい。

ト両方より六三とお関を、無理に手を取つて引ツ張る。六三お関振り切つて抜ける。平助太次兵衛うろたへて、差寄るとて互ひに鉢合せして

平太　アイタ、、、、、。

ト額を抱へ、捨ぜりふにて両方より手を引き合ふ。

太次　マア、お出でなされませ。

平助　ハテ、来てもらはうよ。

ト引ツ張り合ふ。二人とも捨ぜりふにて奥へ入る。あと見送り、両人思ひ入れ。奥より

おかち　お関どの〳〵。

トこの声にて、両人立別れて、知らぬ顔して居る。合ひ方になり、奥よりお梶出て来て

オヽ、娘、爰に居やつたか。そこにござるは、六三さんぢやござりませぬか。

トこれにて六三思ひ入れ。

只今では、町家にお住ひなさるゝ様子。それと申すも、親御様には御切腹。元の起りは印子の鯉魚。武将の御判の据りし袱紗。その品ともに紛失ゆゑ、それを詮議のその姿。殊には同じお屋敷へ、奥を勤めるお関どの、もしや訳が、

ト思ひ入れ

誰れしも若い時には、まゝある習ひ。殊に今では御勘当、何かに附けて御不自由。御用もあらば必らずともに、私しへ心措きなう。アヽ、世は様々な、

ト思ひ入れ。

ハテ、御苦労なされますなア。

トお関を上の方へ連れて来り、六三に向ひ、ちよつと思ひ入れ。六三は下の方にて、一腰を道具箱より出し、ちよつと思ひ入れ。踊りの合ひ方聞える。七郎助と猪之助出て来り

七郎　ヤア六三、爰に居つたか。コレ、先刻にも云うた通

り、姉のもとへ度々の貢ぎ、用立つたも、魚心あれども、無いのはもと。サア、姉が受合ひ。弟の六三、いま爰へ返してもらはうわい。

六三　モシ／＼、七郎助さま。そんなら何と云はつしやる。姉のもとに騙されて、貸しかけた十五兩、催促なさるが氣の毒と、わしが口出したのを幸ひに、こりや、あなた様、わしが方から

七郎　勘定してもらはにやならぬぞ。

六三　そりやア、お前様、今更御無理を

七郎　コリヤ、何が無理ぢや／＼。

六三　サア、無理ではござりませぬか。御存じの通り、やうやう牢から今し方、出ると早々人様の、介抱者と思ふから、古着の浴衣を引ッ張らせるは、弟の

七郎　コレ、その働らきが出來る位なら、なぜおれを頼んで、前金五兩、時借りをして寄越さねえよ。

六三　サア、そりやア姉御の科を、輕くしようと思つたから。

猪之　姉の事は思つて、友達の猪之助が方は、不義理にしても大事ないかえ。

六三　ア、コレ、どうしてこなたを

猪之　義理が惡いと思ふならば、おれが口入れの金を返してもらはうねえ。

ト　お園これを聞いて、いろ／＼思ひ入れ。

六三　コレサ、外聞の惡い。爰はどこだ。仕事に來て居る普請場だよ。おれもまんざら宿無しでもねえ。内へ取りに來やれな。

猪之　イ、ヤ、内へ行つてもいつでも留守だワ。そこで爰へ仕懸けたワ。

七郎　身共も、逢ふ時は笠脱がせるのぢや。六三どの、イヤ、六三郎、サア、その金を今爰へ。

六三　イエ、只今はござりませぬよ。

七郎　無うては濟まぬ。寄越せ。

六三　そりや無理でござります。

七郎　何が無理ぢや。金借りた上、何が無理ぢや。

猪之　おれも世話した五兩の金を、サア、いま寄越せ。モシ、あなた、お聞きなされませ。こんな太い奴が、この頃噂のある、三つ星の極印の金を、盗んだかも知れませぬて。

七郎　イカサマ、三つ星の極印の金、盗みかねない奴だわえ。

ト六三、無念の思ひ入れ。この時、長兵衛出かゝり
居て

長兵　成る程、人の金を借用して、斯様なる場所に於て、催促にあふは、さぞかし辛いものであらう。それを又側に見て居るその女も。……アイヤ、あの者と云ひ交して居る者なぞは、さぞかし面目なくも思ふであらうが、どうで又其やうな無分別な者は、どうして末が續くものか。お園どの、どうで一度は男を持つ身、其やうな無分別な者にはかゝはらぬがよい。こりや六三どのゝ儀ではござらんが、こりやお園どのへ身が、よい教訓を申し聞けるのでござる。ハテサテ、六三どのは、浪人すれば心までが、ア、氣の毒千萬でござる。

トよき所へ坐る。

六三　梶川さまの其お詞は、この六三めが、どのやうな盜み騙りもしたやうな、味に搦んだねまり事。こなさん、お園さんの事から起つて

ト腕捲りして立ちかゝるを

その　ア、コレ、六三さん、その事とはそれはマア、何を仰しやりまするぞいな。わたしやもう明日は、お屋敷へ上がりまする身分でござりまするぞえ。必らずともに、滅多な事を仰しやりまして、却つてお前様の、ナ、もし御勘當の妨げとも、なるまいものでもござりませぬ。ほんに〳〵、うか〳〵と物を仰しやりませぬがようござりますわいな。

ト思ひ入れにて云ふ。六三こなしあつて

六三　それぢやというて、あんまりな

ト腕捲りして立ちかゝる。この時七郎助、腕の彫り物を見て

七郎　ヤ、「お園命」

ト讀む。

六三　エ。

ト隠す事。長兵衛思ひ入れ。

七郎　ア、こりやおつりきな彫り物が、六三が腕に筆太に

長兵　「お園命」はちつと氣障だな。

七郎　氣障とござらば、梶川さま、彫つてあるのをよく改め、いよ〳〵貴公の思惑の

長兵　成る程、貴公によろしく。

七郎　呑み込みました。……ドレ、腕をま一度。

トかゝる。

六三　エヽ、何をさつしやる。
ト立廻りあつて、七郎助思はずこける。
七郎　ヤア、わりやアおれを投げたのか。
六三　どうしてお前を
七郎　イヤ、投げた、手向ひした。
猪之　手向ひしたら、この野郎は
トかゝる。六三取つて投げる。
七郎　ヤ、うぬは手向ひか。おのれは身共が
ト懷中して居る以前の狀箱を出し、思はず「斯うして
斯うして」と散々に打つ。六三この手をキッと取つて
六三　こりや、七郎助どの、如何に借用あればとて、こなたはわしが生面を
七郎　オヽ、打つたがどうした。叩いても大事ない。おのれがやうな野太い奴は、この上女の惚れぬやう、面に極印。
ト打つてかゝる。六三これを留めるとて、兩人狀箱を爭ひ、思はず投げる。この時、上の屋體の障子の骨、紙ともに打ち拔けし思ひ入れにて、バッタリ音して、よき程に仕掛けにて飛ぶ。七郎助思ひ入れあつて、尋れるこなし。

ヤ、六三を打つた狀箱は、どうした〳〵。
猪之　慥か障子のあの中へ
七郎　取つて來やれ。
猪之　心得ました。
ト猪之助走り行き、上の障子の中へ駈け込む。內より見事に投げ出す。
七郎　こりやどうだ。障子の內より、バッサリ、ドッサリ
長兵　おてまへござれ。
七郎　心得ました。
ト駈け行き、障子蹴放す。內に船越十右衛門、着流し、派手なる衣裳、一本差しにて、目尻に少し疵の附いたる體。文箱を明け、手紙を廣げ、五十兩の金改め居る見得。七郎助見て
七郎　ヤ、障子の內には見馴れぬ男
六三　あなたは船越
かぢ　折よく爰に
七郎　そのマア狀を。
ト寄るを、ヂロリと見やる。七郎助、氣味の惡き思ひ入れ。
十右　お前が御所持の文箱なら、ドレそこへ出て、渡しま

せう。

ト合ひ方になり、一腰提げて出て來る。七郎助、思ひ入れ。

梶川さまとは、あなたの事でござりまするか。

長兵　成る程、身共は梶川長兵衛と申す者。町人、して、おてまへは

十右　ハイ、私しは船越十右衛門と申しまする、深川邊の積み問屋、聞き及んだる梶川さま

長兵　すりや、其方が船越の

十右　十右衛門とは、私しが事でござりまする。旦那樣、こりや好い折柄に、お互ひに知る人に

兩人　なりましたわい。

長兵　コレ〳〵、その見てござる狀をば

ト手を掛ける。キツと思ひ入れあつて

十右　イヤ、この狀ばかりではござりませぬ。狀箱の内には金、しかもその量

長兵　五十兩。

ト數へる事あつて

十右　よく御存じ。成る程、數も五十兩、手紙の中の文言に、印子の置き物人知れず二百兩に預け置く、いま賣られては、各々の難儀になる事あれば、暫らくその品外へ渡さぬやうにとの、頼みの文言、少しなれども五十兩、内金に渡すと書いたる手紙。

ト長兵衛ギヨツと思ひ入れ。六三、さてはト思ひ入れあり

六三　その品とくとは書かねども、印子の置き物預け置く、その文言の狀といひ

その　割符の合うたる上からは、もしやお前の尋ねて居さんす

かぢ　親御の切腹なされたも、鯉魚を失ふその越度。

六三　疑ひもなき

ト寄るを、長兵衛立廻つて、十右衛門が持つたる手紙へかゝるを、留めて

十右　こりや梶川さま、この船越が持つたる手紙、斷わりなしに、こりやなんで

長兵　サア、詮議の手蔓にも

十右　イヤ、手蔓にならぬはこの狀

六三　そりや又、なぜな。

十右　文言怪しき事あれど、宛名なければそれぞと申し、コレ。……こりや手がゝりにはなるまいて。

長兵　成る程。手紙に先の宛名が、

ト七郎助と顔見合せ、思ひ入れあつて

併し、無ければ、それにて安堵。

七郎　でも入れ置きし五十兩、みす／＼外へ渡つては

十右　サア、金に覺えがござるか。

七郎　如何にも、金は身が方へ

十右　金はあなたの御承知なら、見らるゝ通り船越が、目尻に思はぬこの極印。男の面へ少しでも、疵が附いてはその分に

長兵　こりや尤もな十右衞門。目尻の疵の養生は、即ちその五十兩。男の面體、疵養生、五十兩なら濟ました上、證文がはりにこの手紙

十右　返してくれろと仰しやるのか。

長兵　如何にも。

十右　成る程、男の生面へ、疵が附いては十右衞門が、立たぬ所へ大枚の、扱ひ金の五十兩、これで濟ませと押し附けて、この船越を盜人に、仕立てる爲の工面とは、睨んだ眼は違ふまい。梶川さま、それに違ひはござるまい。

長兵　默れ、船越十右衞門、僅かな疵でも男の面體、極印附いたと思ふから、二言と云はず五十兩

十右　渡した金は一兩々々、皆三つ星の極印が

長兵　ヤ、そんならそれを

十右　遣つてよくば梶川どの、こなたの方で存分に。

ト打ち附ける。目當は違はず、長兵衞が目尻へ疵附ける。

七郎　や、目尻へ疵が……うぬを。

トかゝるを、取つて投げ、煙草盆にて七郎助をしたゝか打つ。長兵衞かゝるを、キツとなつて

十右　目尻の疵はこれで五分々々、六三を手籠めの二人の奴等。この船越が挨拶ながら、極印怪しき三つ星の、即ち金は元々へ。

ト差出す。長兵衞取つて懷中する。

長兵　ア、流石は船越

十右　ヤ。

長兵　驚ろき入つた。

十右　その代りにはこなさんへ、福島屋の旦那どの、これなるお園の親御の手蹟、嫁入らせうと自筆の手紙を、素直に梶川さま、わしに下さい。船越が不肖ながら、貰ひたうござります。

長兵　すりや、最前のこの手紙。アノ、船越が

十右　貰ひたうござりまする。
長兵　品に依つたら、遣りもしようが、此方も無心は、文箱の狀、それを渡さば、替へ〳〵に
十右　すりや、この印子の文言の、手蔓にならうといふこの狀
長兵　如何にも、それが
六三　ア、コレ、それを渡さば肝心の、詮議の綱を失ふ道理、それぱつかりは
十右　ハア、有つたというて宛名が無ければ、證據にもならぬ手紙。文言はわしも、こなたも、とつくりと腹に浸み込めば、あへて手紙が無いとても、空で覺えた胸と胸。親御の手紙と、替へ〳〵なら。
六三　何分よろしく、こなたの計らひ。
十右　わしに任せて、ナ。……サア、梶川さま、手紙と手紙を
ト差出す。長兵衞も所持の手紙を差出し、兩人取替へて
長兵　これが返れば、身共も安堵。
十右　此方も安堵させる娘御。後々兎やかう無いやうに、こりやお園さん、お前の方へ。
ト投げて遣る。お園取つて
その　嬉しうござんす。
六三　そんならそれで、兩方ともに
十右　安堵でござんせう。
ト目を附けて思ひ入れ。奥よりお勝、文箱を持つて、走り出て來り
かつ　只今急にお屋敷より、參りしお文と、お內から
ト差出す。お梶、手早く取つて開き見て
かぢ　こりやコレ、明朝間違ひなう、園を未明にお屋敷へ上げよと、お使ひを下されし、お年寄樣からの此お文。
その　すりや、アノ、わたしを
かぢ　明朝は未明に
十右　屋敷の迎ひ
六三　今日別れては又いつか
その　殊にこの身も
六三　只ならぬ
長兵　さてこそ妊娠。
七郎　今の返報。
トかゝる。十右衞門引附ける、猪之助は六三へかゝるを、キツと押へる。長兵衞立ちかゝるを、十右衞門留める。

立ち寄るお園を、お梶隔てる仕組み。
長兵　船越、何かと
十右　梶川さま
長兵　ムウ。
ト寄るを、キツと留める。
十右　其うちお目にかゝりませう。
トよろしく、ひやうし　幕

二　幕　目

本所中木場の場
本所内の場

役名━━大工、六三、實ハ小柴六三郎。本所おばア　お松。福島屋娘、お園。若林七郎助。子分、山姥の權。同、般若の彌五。同、長太。家主、茂九郎兵衞。下部、八内。番頭、太次兵衞。髮結ひ、源吉。船越十右衞門。

二幕目上濟むと、時の鐘になり。揚げ幕と幕の引附けより、若い者三人、六尺棒を突き、福島屋と書いたる弓張りを灯し、鉦太鼓を打ち
若一　迷子のお園やアい。
若二　迷子やアい。
ト呼びながら出て來り、幕の前通りにて行き合ひ
若一　どうだ、三助、お園さまの行くへは知れたか。
若三　イヤ〳〵、まだ知れぬ。おいらは柳原から、湯島本郷の方を尋ねて見よう。
若二　さうしよう〳〵。おいらは本所深川を尋ねて見ようわえ。
皆々　迷子のお園やアい〳〵。
ト呼びながら、東西へ別れて入る。鳴り物變つて、幕明く。

本舞臺、三間の間、上の方に障子たて切つたる二階家。正面二重舞臺。下手に竈を取りつけ、銅の茶釜ちり〳〵の蔓附けたるを掛け、鼠壁に臺所道具を掛け、荒神棚、よき所に水瓶、手桶、あけ流し、鼠入らずなど取附け、門口引き戸にて、よき所に戸袋を取附け、戸一枚に〽と大文字に油障子へ書きあり、上の二階へ丸太階子かけ、間不戸の戸棚、眞鍮の

錠おろし、欄間に誂らへの螢籠を吊しあり。門口に井戸。幕の内より權、彌五、長太立ちかゝつて居る。茂九郎兵衞、煙草のみ、古本見ながら義太夫を語つて居る。大山參り三人、白き行衣にて、一人は御神酒の雨掛けを擔ぎ、納め太刀を大分に持ち、門口に立つて「南無奇妙頂禮、さんげ／＼、大山大聖不動明王」と、さんげ／＼の鳴り物にて、深川網打ち場のあたり、賑やかに幕明く。

權　時に今年は早かつたの。
彌五　今日はどこから來た。
大山　ナニ、新町泊りよ。
長太　そりやア早い筈だ。
彌五　早くお神酒を預けて、錢湯へ行きやな。
皆々　さうすべい／＼。
長太　晩にはあけすりに行かうぞえ。
大山　待つて居や／＼。
權　時に長や、五合當つて來やな。
長太　おれが行くが最期之助、五合や一升は當ての權助だ。
彌五　行つて來や／＼。
長太　行つて來べい／＼。
大山　なんまいだぶつ。

ト掛け念佛。長太この中へ交り、さんげ／＼の鳴り物にて向うへ入る。

權　大家さんは、べら坊に本が好きだの。
茂九　ナニ、こりやア義太夫本だが、忘れた所を口の中で浚つたのよ。
彌五　淨瑠璃を浚はずと、溝でも浚ひねえな。
權　べら坊に蚊が殖えたな。
茂九　蚊の居るを、ナニ、大家が知るものか。
彌五　店賃ばかり欲しがつて、溝のざまを見たがいゝ。
茂九　つかへたら浚はつしやいな。大家へ遠慮はない。
權　エヽ、誰れが又遠慮をするものか。

ト四つ竹になり、向うより源吉、スタ／＼と出て來り、内へ入る。

茂九　ソリヤ、誰れか來たぞ。
權　誰れだ／＼。
源吉　氣遣ひな者ぢやアない。髮結ひの源吉だよ。
彌五　アヽ、兩國の羊か。
茂九　とんだ見世物だの。
源吉　コレ／＼、お前方は昨夜からお世話でござります。

權　モシ、二人の手合ひは、此方に居られますかえ。

茂九　オイ、今日は二階住ひよ。

源吉　ちよつと逢はせてくんなさい。

茂九　よし〱、大家さんが呑み込んで居る。逢つても大事ない。コレ〱。

ト丸太階子を叩く。二階障子を明け、六三顔を出して

六三　誰れだ。源吉ぢやアねえか。

源吉　アイ、わたしサ。お前にちつと

六三　ドレ、そこへ行つて逢はうか。

ト合ひ方になり、源吉は門口をシヤンと締める。六三下りて來る。

源吉　こりやアどなたもお世話でござります。

茂九　ナニサ、わしらも店子のよしおばアが弟の六三どの。

脇　おいらも姐御の子分、子方。

彌五　へこましても外聞が悪いわな。

源吉　そりやア忝なうござります。モシ、六三さま、氣の毒なは後家御様、お屋敷からは迎ひの人、云ひ譯のない福島屋の體裁。ありやア、マア、どうなさる思し召しだえ。

六三　ハテ、どうといつて、せう事がない。以前は槍も突かせたる、武士の倅も世につれて、今は大工の六三郎。相手の女は箱入りの、當時分限の福島屋、殊に屋敷の宿下がり、連れて逃げたは、提灯に、釣鐘よりも釣合はぬ事と思へど、只ならぬお園が懐姙、一日々々日に立てば、連れて退いてと云はれちやア、そこが氣性の江戸ッ子だ。命づくでも、腕づくでも、五分でも引かぬ職人氣質。お先眞暗、向う見ず、どうするもんだ。せう事がねえ。

源吉　すりや、モウ、女、子供を連れて逃げるは、若い者の當り前。併し、向うが誠に人のいゝ上なしだから、中へ人を入れるといふ。そんな話しも聞きませぬが、こりやアいつそ此方から、十右衛門さまを、なんと渡り引に遣つたらば

六三　サア、おれもさうと思つて居る。そんなら、誰れ彼れと云はうより、船越を頼んで、福島屋へ行つてもらはうか。

源吉　それがようござります。

ト此うちお園、二階の障子を明け、窺ひ居る。

茂九　成る程、後手にならぬうち、此方から誰れぞ入るがようごんす。

彌五　いつそ、おいらが行つてやらうか。

六三　イヽヤ、てめえ達ぢやア、却つて向うが、びく〳〵者だ。こりやアどうでも

ト二階を見る。お園と顔見合せ

その　何ぢややら、わたしが事から、あなた方に御苦勞かけまする。お氣の毒でござりまする。殊には、お恥かしい事ながら、お屋敷へは歸られぬ體。たゞ心にかゝりまするは、義理ある親子の後家御様。あなたのお案じないやうに。

六三　そりやアおれも合點だ。殊に、姉御のおとどの、女でこそあれ、滅多に後へ寄るものぢやアない。姉御の顔づくでも、うつかりした者が渡り引に來るものか。そこで今から、おれが十右衛門どのゝ所へ行つて、あの男を向うの方へ遣るつもりよ。

その　エ、そんならあの船越さんを……こりやようござんせう。して、お前、直ぐに行きなさんすかえ。

六三　ツイ一走り行つて來る。姉御は奥に晝寢の時分。起して話すに及ばぬ事。目が覺めたら、ちよつと話して下さい。そのマア脇差を爰へ

その　アイ。これかえ。

ト階子に半分よりかゝつて、二階より脇差を差出す。

六三取らうとする。ちよつと思ひ入れあつて

ア、イ、エ、こりやおよしなされませ。

六三　ハテ、男の魂ひ。ちよつと差しこ。

その　イエ〳〵。そりや悪うござんす。以前は小柴の御子息でも、今は大工の六三さん。頼むお方も船越さん。町人同志の相談に、この一腰は目に立つて、殊にはわたしも案じられる。刃物はどうぞわたしへ預けて

ト思ひ入れ。六三もこなし。

六三　成る程、女の小さい心から、案じられるは、こりやア尤も。いゝワ、そんならてまへが落ちつくやう、大工の六三、丸腰で行かう。

その　嬉しうござんす。それでわたしも安堵いたしましたわいなア。

ト脇差を抱へる。

源吉　イカサマ、こりやアそれがようござりまする。お園さま、お案じなされまするな、私しも附いて參りまする。

彌五　おいらは行かずとよからうの。

六三　なにさ、貰つた女を揚げた渡り引ぢやアなし、ぬし達は行くに及ばぬ。それに附けても兩國で、見かゝつた梶川が、七郎助への手紙の文言、正しく鯉魚を盗み取り、

質入れしたはあの梶川、七郎助から迫かしたら、正しく
在所も

源吉　エ。

　ト思ひ入れ。

六三　アイヤ、大儀ながら

その　六三さん

六三　ドリヤ、行つて來ようか。

　ト流行り唄になり、六三先に源吉附いて向うへ入る。
　お園は二階へ上がり、障子をさす。

茂九　コレ〳〵、若い衆や、六三があゝ云つて行きは行つたが、其うちに待ち兼ねて、彼方から玉を揚げに來まいものでもない。どの道、始末方は家主が呑み込んで居るから、必らずへこむまいぞ。

二人　合點だ〳〵。

彌五　大屋さんが振りに出りやア、店子の手合ひも、その算段で挨拶するわな。

權　時に姐御を起し、始末方を掛合はうぢやアねえか。

茂九　ハテ、そりやアマア、その時の事サ。

　ト向うより、バタ〳〵にて長太、一升徳利を持つて來り、内へ駈け込む。

長太　來たぞ〳〵〳〵。

　ト騷ぐ。

三人　何が來た〳〵。

長太　向うの方から、渡りに來たぞ〳〵。

三人　來たか〳〵。

長太　來た段ではない。いま酒を取りに行つたところが、あすこの話しには、この町内にゐるおばアと云ふ、姐御の内はどこだと聞きに來たと、酒屋の内で聞いて來た。油斷するな〳〵。

彌五　コレ、エヽ、向うからどんな立派な男が來ようが。併し、用心はして居るがいゝ。

長太　さうだ〳〵。角が八本生えて居やうが、おッかない事はない。マア、何にしろ、玉は出して置かぬがいゝぞよ。

權　よしサ。用心に如くはない。彌五や、長蔦はあらうの。

彌五　ある段か。長蔦でも、薪ざつぱでも、みんな浚ひ出すがいゝ。

茂九　足らずば自身番から、鐵砲でも、割り竹でも、取つて來や〳〵。

三人　合點だ〳〵。

ト三人思ひ入れあつて、薪ざつぱや長鳶を持つて

権　うしやアがつたら、ぶツくらはせろ／＼。

彌五　しめべいぞ／＼。

ト思ひ入れ。さんげ／＼の合ひ方になり、向うより酒屋の御用、角樽を提げ、後より太次兵衛、羽織袴の形。供の男、白木の臺に取り肴を並べ、これを持つて出て來り、花道にて

御用　モシ／＼、小母さんの内は、向うの、螢籠の吊した内サ。

太次　ア、あの内か。

御用　左樣サ。

ト本舞臺へ來る。

太次　ハイ、ちとお頼み申しませう。

三人　ソリヤ、來たぞ。

茂九　油斷するな。

三人　ぶツ挫け／＼。

ト家内立ち騒ぐ、太次兵衛肝を潰し、慄へ聲にて

太次　ハイ、お頼み申しませう。

皆々　なんだ／＼。

太次　イヤ、別の事でもござりませぬ。あなたは、しらおばア樣のお宅でござりまするか。

権　しらおばアとは何の事だ。しら几帳面の名を

三人　云やれな／＼。

茂九　モシ／＼、こなさん、どこからござつた猿唐人かは知らねえが、こんなすかまたな名で、人前が通るものかな。途方もない間抜けぢやアないか。

太次　ハイ／＼、御免なされませ。慥かお名は、お松さまとやら申しました。

茂九　お松かえ、お松なら爰の内だ。入らつしやいな。

ト引摺り込む。

太次　ハイ／＼／＼。

ト入る。

御用　モシ、樽は爰へ置いて行きますよ。

ト樽を内へ入れて、駈けて向うへ入る。

彌五　コレ、こなさんは大分慄へるが、なにか、今日は瘧日か。

長太　氣のきかぬ間抜けぢやアないか。

権　用があれば、キリ／＼云はつしやい。おへねえ朴念仁だ。

太次　ハイ／＼／＼、御免なされませ。私しは本白銀町、

福島屋の通ひ番頭、太次兵衞と申しまする者でございまする。承りますれば、

ト云はうとする。

茂九　ア、モシ／＼、お前、なにかえ、福島屋から來なすつた番頭さんかえ。

太次　左樣でございまする。

茂九　そんなら、宿六を起して逢はせやせう。コレ、若い衆や、姐御を起して下さい。

三人　オイ。……モシ、姐御、起きなさい／＼。

ト暖簾口にて呼び立てる。

まつ　オイ／＼。なんだ、やかましい。

ト合ひ方になり。奥よりことお松。浴衣の形にて、鏡臺を抱へ、出て來る。皆々見て

三人　姐御、福島屋から人が來たよ。

まつ　ア、なにか、お園さんの渡り引か。ドレ、どこに來て居る。エ、お前か、アノ、わつちの内へ渡りに來なすつたのは……コレ、てめえ達も見や。假にも網打ち場の土地で、ことおばアとうるさがれるせうがにやア、どんな無駄出入りでも、面つくばかりでも濟み濟ましをするお松が内へ、モシ、お前、何しに來なすつた。イヤサ、お前を渡りに寄越すとは、ほんに福島屋の内も、めでたい手合ひばかり居ると見えるなう。

皆々　さうサ／＼。おいらは、わい／＼天王が面を忘れたと思つた。ハ、、、、、、、。

太次　ハイ／＼。これは、どなたもおやかましうございまする。モシ、あなたが伺ひ及びましたることおばア樣でございまするか。おばア樣と承りましたが、ハテ、お若い事でございまする。ハ、、、、、、。モシ、私しは外の事でも參りませぬ。お園どのゝ儀に附きまして、參上仕りました、通ひ番頭の太次兵衞と申す者でございまする。あなたの弟御、大工の六三どのが、連れて逃げられたお園どのは、お屋敷へ上げねば、どうも相濟まぬ儀がございまするゆゑ、どうぞ娘御を私しへ、お返し下されまするやう、へ、、、、、。コリヤ／＼、持つて參つた品を、これへ持て／＼。

ト白木の臺に酒樽をお松の前に差出し

偏へに、私しへお渡し下さりまするやう。ハイ／＼。これは又輕少ながら、お目にかけまするものは、へ、、、、心ないものでございまする。

ト追從して思ひ入れ。お松ギロリと見て

まつ　エヽ、こりや何かえ、弟の六三が連れて來たお園さんを、お前が迎ひに來なすつたのかえ。
太次　左樣でござります。へヽヽヽヽ。
まつ　モシ、そりやアお前、折角のお出でだがね、アイお連れなさいと、いま直ぐにお渡し申しても上げられない始末サ。それにお前、酒肴を持つて來なすつたが、お忝なうございます。と直ぐに貰つても置かれねえ羽目サ。折角持つて來なすつたが、こりやア持つて歸つてくんなさいよ。
太次　左樣ではござりませうが、この品は、マア〳〵お納めなされて
茂九　コレ〳〵、モシ、そりやお前がいくら云つたといつて、無駄な話しだ。主があゝ云ひ出しては、梃でもいかねえよ。
權　さうだ〳〵。コレ、番頭さん、折角持つてござつたが、酒も、肴もそれなりに
彌五　持つて歸つて下さいよ。
太次　左樣なら、どうでもアノ、お園どのは
權　云ふは無駄だよ。早く歸らつしやい。
皆々　歸つてもらはう〳〵。

太次　ハイ〳〵、左樣ならもうお暇申しませう。コレ〳〵、久八、その品を又持つて歸るのぢやぞ。
下男　それは迷惑な。
ト樽と肴を取集める。
まつ　コレ〳〵、長太や、てめえ、あの油を買つて置いて來やよ。
長太　アイ〳〵。わしらは今夜はあけごり（曉垢離）に行きやすから、油屋へ届けて行きやせう。
まつ　さうしてくりや。
茂九　コレ、小母御。福島屋の渡り引も、主達を寄越す位なら、大概知れた話しだ。家主が居るにも及ぶまいてな。
まつ　さうサ、大家さん、お急しがいにおかたじけ。マア、歸つてくんなさいよ。
茂九　さうしませう。用が出來たら直ぐに呼びに寄越さつしやい。コレ〳〵。こなた衆も又來さつしやいよ。
權　あけごりをしまつて、直ぐに來やすよ。
彌五　其うちお前一人でいゝかえ。
まつ　よくなくつて。女一人だといつて、てめえ達百人居るより丈夫だ。
三人　又、から口を云はしやるよ。

茂九 イヤ、性はそんなものサ。
太次 ハイ、左様なら、お暇申します。どなたもおやかましうござりました。
まつ オヤ、小父さんお歸りかえ。また來年來たら寄んなさい。今年は土用の入り口が寒くつて大違ひだの。エヽとんだ縮屋だ。ホヽヽヽヽ。
權 成る程、縮屋の掛取りか、女出入りの渡り引か。
彌五 解らねえ代物だ。ハヽヽヽヽ。
茂九 小母御、氣を附けさつしやいよ。
まつ 晩に來なさい。
太次 ハイ、お暇申しませう。
三人 ドリヤ、あけごりに行つて來ようか。
ト四つ竹節になり、太次兵衛と下男は酒肴を持つて先に立ち、長太は油差しを持ち、茂九郎兵衛は捨ぜりふにて門口の路地へ入る。權と彌五は向うへ入る。お松あと見送り
まつ ほんにマア、如何に人のいゝ内だといつて、おれが内へ寄越す者に事を缺いて、あんな堅木の棒を寄越すとは、變痴奇な内だぞ。
ト此うちお園、二階より下りかゝり居て

その モシ／＼、お姉えさん、わたしを迎ひに來た者は歸りましたかいな。
ト合ひ方。
まつ お園さん、氣遣ひしなさんな。例へどんなおッかない男がかゝつて來やうが、六三の前から預かつたこなさんを、敷居の外へ五分五厘、出すやうな姉ぢやアねえ。氣にするは無駄だよ。
その サア、さういふお前の賴もしい、男も及ばぬ氣前を聞き、わたしや安堵いたして居りますわいな。
まつ ナニお前、女の氣の強いも、あんまり出來た話しぢやアねえのよ。そりやマアさうと、お園さん、お前大分髮がばら附いて來たの。髮へかゝつてうるさからう。わつちがちよつと撫で附けてあげうか。
その お取込みの中、お世話になるその上に、どうしてマア
まつ ハテ、大事ないわな。ちよつと撫で附けてあげう。鏡臺も爰にあるよ。
その そりやお嬉しうござります。
ト鏡臺を直し、鏡に向ふ。お松、櫛道具を取つて來る。誂らへの合ひ方。

まつ　この暑いのに髪のばら附くが、いつち悪いものだよ。どうでお前、錢湯へはやられず、行水をお使ひ。湯を沸かして置いたよ。

その　そりや有り難うござります。

ト髪を撫でつけながら

まつ　エヽ、お前のおぐしは强的たんとあるの。わつちらもお前方の時分には、したゝか髪もあつたが、斷うだりむくつちやア、意氣地はねえサ。

その　なんのマアお前さんが、今から其やうな事云うて

まつ　そりやアさうと、お関さん、お前アノわつちが弟の六三を、天にも地にも無いやうに思つて、死ね、死なうと、逃げ走りもしなさつたが、わつちやア眞のところを云ふがね、そりやア悪いよ。お前の身の爲には悪い。切れてしまひな。

その　エ。

ト恟りする。

まつ　イヽエ、わつちやアお前の事を可哀さうにと思ふから、こんな事も云ふものよ。どうであの職人の六三にくツついて居るものゝ、行く〳〵はぐるの裸、とゞのどんづまりが、モシ、辨天へでも出にやアならねえ羽目になるよ。わつちやアそれが氣の毒だ。その上お前は身が重いさうだ。誠にこいつが手こずりものだ。初産ではあらうし、身二つになるといつても、譬へにも云ふ軒下三がい、モウ〳〵、甘口な話しぢやアない。しつけねえ苦勞をしようよりは、あのやうにお前を思つて居る梶川さんの

その　エ。

ト恟りする。

まつ　サ、弟の連れて來たお前を、姉のわつちが、こんな横を云ふ事もねえが、こりやア、性はお前を思ふからわつちやア云ふのよ。所詮あの六三と、梶川さんと、一口に云へるものか。此方は身性もきまらねえ居候ふの身、向うは立派なお侍ひ。主のところへ行つた日にやア、そりやア云ふ目が出るよ。おらが野郎にくツついて居ると道行が詰まらねえ勝ちだ。上の口へは心元ねえのサ。

ト　いろ〳〵思ひ入れあつて

その　其やうに眞實に云うて下さんす、誠に親身も同然のお詞、お嬉しうござりまする。どうした事やら、六三さんの事、わたしや片時忘れませぬ。添はれぬ義理にて二人が、例へ命に及ぶとも、それをわたしは、悲しいとも

思はぬ。只悲しいのは、お腹の嬰兒、世が世であらば、誰れあらう、小柴掃部どのゝ初孫とも、六三郎の總領とも敬まはれうに、情ない、親が死ぬれば胎内の、この子も可哀や日の目も見ず。

ト鏡にうつるお松とちよつと見合ひ、愁ひのこなしあつて

どうも思ひ切られませぬわいなア。

ト思ひ入れ。

まつ　エヽ、そりやアお前無分別な、と云つたところが始まらねえ話しだ。氣の毒な事にやア、剛的苦勞を

ト此うちお園、鏡臺の抽出しに隱しある、古金襴の袱紗を見附け、ソツと出し、よく／＼見て

その　模樣は雛鶴、色は赤地の古金襴、裏にもわたしが見覺えの、文字のあるのは、いつぞや御殿の蟲干しに拜みし、これか印子の鯉魚を包みし、袱紗がどうして爰に。

まつ　エ。

ト思ひ入れ。手早く取つて、懷中して

アイ、それでちつと、うつたうしくもありやすまいよ。

ト撫で附けしまひ、手を拭いて居る。お園、懷中の袱紗へ口を附け

その　見覺えのあるあの袱紗、思ひも依らぬ、爰にあつたは、どうも合點が

まつ　ゆく、ゆかねえはお前の身の上。どうで弟にくツついて居ちやア、末の詰まらぬ事だらけ。顏にしかけのあるうちに、梶川さんの

その　エ。

まつ　思案しなんし。

ト思ひ入れ。唄になり、お園心遣ひあつて、そろ／＼丸太階子を上がる。お松、跡見送り

目角の強いあのお園、印子の鯉魚を包んだる、袱紗といふ事、お屋敷から見覺えて居るからは、うか／＼鏡臺針箱へ入れても置かれず。ハテ、氣がゝりな。

ト思ひ入れ。合ひ方になり、お松あたりを、窺ひ／＼有りあふ物の中へ匿さんとする事二三度あり、ト軒に吊りある螢籠を見附ける。此うち向うより七郎助、以前の形にて出て來り、門口より窺ひ居る。此うちお松、以前の袱紗を赤地の方を上へ出し、丸めて、螢籠の中へ入れる。七郎助何心なく

七郎　もし坊／＼、もし／＼。

ト大きな聲で呼ぶ。お松、愕りして

まつ　エヽ、誰れだな。……七郎助さん、わつちやア悔りしたよ。モシ、お前、なんぞ用があつて來なすつたのか。

七郎　用があつて來たかとは、もし、つれないぞよ〱、お主がまだ仲町に藝者の時分、通ひ詰めたる七郎助、一度の情もある事か、つれなら當つたその上に、厚かましくもこの間、牢屋へ入つた物いりを、ようマアぬつくり十五兩。それも返さず、コレ、せめて身共が堪能する程

ト抱き附かうとする。お松突き退け

まつ　エヽ、お前も、いつも〱御息災な、いゝ機嫌らしい。コレ、お前アノわつちを口説きに來なすつたか。但しは外の用で來なすつたのか。

七郎　ハテ、知れた事、そもじを口説きに……ア、、イヤイヤ、身共大事の用があつて參つた。

まつ　ソレ、見なさい。そりやア大方、梶川さんから

七郎　左樣々々。六三が爰へ預けて置く、あのお園の儀に附き

まつ　ア、コレ。

ト思ひ入れ。七ツの鐘鳴る。お松心遣ひあつて、兩人、そろ〱と表へ出て、花道へ行き

お前もマア氣の利かねえ。二階に居るのは福島屋のお園。確かにお前は梶川さまから、おろし藥を賴まれて持つて來なさる約束だが、あのお園に服ませるおろし藥は

七郎　左樣々々。それではつかり身は參つた。コレ〱。

ト懷中より藥の包みを出し

これが彼の月よどみのおろし藥。何卒もじが働らきで、お園に服ませて、六三が胤をおろさす手段。

まつ　ソレ見たか、さうあらうと思つたに、あんまりお前は、うんのろ作左衞門だ。

七郎　イヤ、また作左衞門と改名いたさぬ。

まつ　エヽ、おへねえ間拔けだ。コレ、お前、斯うしねえ。この裏に茂九郎兵衞といふ家主がある、そこの內へ行つて、爰から來たと云つて待つて居な。

七郎　成る程、おてまへには話しもあれど、お園が二階に居るうちは

まつ　まだその上に、今にも六三が歸つて來ちやア面倒だ。コレ〱。

ト囁く。七郎助呑み込む。

七郎　然らば其うち、家主方で

まつ　路地を入つて突き當り、井戸端から二軒目だ。

七郎　それが家主

まつ　ハテ、行きなさい。
七郎　イヤ、久し振りで叱られた。
ト唄になり。とつかはと路地の中へ入る。お松藥の包みと、書附けを見て
まつ　そんならこれが、お園に服ませるおろし藥。六三が歸らぬ其うちに
ト思ひ入れ、入相の鐘鳴る。あたりを窺ひ、藥鑵を取出し、今の藥を仕掛け、七輪の上へ掛け、思ひ入れあつて、行燈取出し、油をつがうとして、油差しなきゆゑ
エヽ、まだあの野郎は油を買つて來やアがらねえ。エヽ、日の暮れるに氣のきかねえ。ほんにまだ行水も使はなんだ。ドレ、今のうち使つてしまはうか。
ト獨吟になり、大盥を舞臺よき所へ置き、門口を締め、浴衣細帶にて、戸を一枚取つて來り、正面へ横に置く。この時戸に角大師、豆大師、横になる。お松、手拭を啣へ、手桶を提げて行き、張り子の釜の蓋を明ける。仕掛けにて湯氣パッと立ちのぼる。お松、右の湯を汲んで來り、戸の蔭にて盥へ湯を明けて、ちよつと入れて見て、水を埋める事よろしくあつて、細帶を戸へ掛け、白縮緬の湯卷を取つて戸へ掛ける。角大師の札の上へ行くゆゑ、ちよつと取つて脇へかけ、手拭を啣へ、浴衣を取つて戸へかけ、行水を使ふ思ひ入れ。此うち獨吟。よき時分、向うより船越十右衛門、序幕の派手なる形、一本差しにて出て、花道へ來る。唄、一くさり切れる。
十右　福島屋を家出した、お園どのゝ隠れ家は、慥かに六三が姉といふ、おとおばアが一人棲み、この網打ち場の裏通り。
まつ　このマア長太の氣紛れめ、どこまで油を買ひに行つた。日の暮れるに、エヽ、氣の揉めた。コレ〳〵、剛的な藪ッ蚊だぞ。
トまた獨吟になり、十右衛門花道より、窺ひ〳〵門口に立つて、内を見る。お松、體を拭き居る。この唄のうち兩方の窓を下ろし、舞臺はほのぐらき體。爰にて軒に吊せし籠の螢、自然と、ほつかり〳〵と仕掛けにて光り、このあかりにて、籠の中に隠せし古金襴の錦、螢火と共にうつろ仕掛け。唄一ぱいに切れる。十右衛門思ひ入れ。
十右　頼みませう〳〵。おとどのゝ内は爰かえ。



初演の給番附

まつ　アイ〳〵、誰れだえ。どつから來なすつたえ。
十右　アイ、ちよつと話しがあつて、船越の十右衞門が來ました。
まつ　エ、十右衞門さんか。
十右　内にか。許さつしやい。
　ト戸を明けてズツと入る。お松うろたへ
まつ　ア、待ちなさんせ。
十右　大分暗いの。なぜあかりを
まつ　アイ、わつちは今、行水を使つて居やすから、ちよつとお待ちよ。
　ト思ひ入れ。
十右　そいつは不躾な。ゆるりと使はつしやいよ。
　トお松、此うち身仕舞ひして、浴衣を着る。十右衞門、螢籠へ目を附ける。誂らへの合ひ方。門口にて蟲の音する。
　ア、、あの光りはなんだ。
まつ　アイ、ありやア螢籠サ。
十右　ハテ、螢の光りとよく見れば、螢火ならぬまだ外に、金色奪ふ籠の内、その色妙なる螢の光り。殊に何やら赤色の、外にもそれと

トつか〳〵と寄る。お松うろたへ、戸板を取つて、十右衞門が道に横たへ、留める。十右衞門立廻りあつて戸板を取りのけ、螢籠へかゝるを、お松有りあふ盥を取つて打ち返す。十右衞門惘りする。蟲の音一時にやむ。十右衞門思ひ入れあつて、螢籠へかゝる。お松、手早く螢籠を取つて、鏡臺の抽出しへ籠と共に打ち込み、思ひ入れ。
まつ　こりやアどうだ。そこらあたりが行水の捨て所なき蟲の聲。その蟲の音も一時に
十右　鳴きやんだのも行水の
まつ　その場と共に
十右　軒の螢も
まつ　エ。
　ト思ひ入れあつて
　一服あがれな。
　ト煙草盆差出す。
十右　アイ。……こりやアなぜ行燈を
まつ　聞きなさい。油を買ひに行つた野郎が
十右　歸らないか。
まつ　左樣サ。

十右　ハテ、日の暮れるのに
ト暮れ六ツの鐘、向うより長太、油差しを持ち走り出て
長太　姐御〳〵。油を買つて來やした。
ト出す。
まつ　この間抜け野郎め、イケ埒の明かない。何をしてうしやアがつた。
ト油差しを取つて、行燈へさし、直ぐに附け木にて煙草盆の火を取つて、行燈へ移す事。
長太　なんのこつたな。さう叱る事はねえ。ちつと位遅い事もあらうわな。
まつ　何を返答がへしをしやアがる。
十右　ハテ、もういゝわな。
まつ　癖になるわな。
長太　エ、、猫ぢやアあるまいし。
まつ　又たわ事を。
ト矢張り時の鐘。長太、向うへ走り入る。
十右　時に、お松どの、十右衛門が今日爰へ來たは、外の事でもねえが、こなさんの知る通り、福島屋のお園どの、大工の六三と譯あつて、家出したのは、こりやハヤ、世間にまゝある習ひ。只氣の毒なは屋敷から、宿下がりに來て逗留のうち、出來たこの駈落ち。一家の手前は濟まさうが、濟まぬは屋敷の役所の手前、云ひ譯ないとてわしへの頼み、よんどころなく渡りに來たが、お松どの、六三がこなたに預けたといふ、其お園どのを
まつ　オヤ、そりやア大きなあべこべだね。此方から又福島屋へ、お前を頼んで、案じなさるな、娘御のお園さんは、わつちが方で預かつたと、お前を頼みに弟の、六三が先刻行きやしたよ。
十右　ハテ、そりやアどこで道が違つたか。
まつ　十右衛門さん、聞きなさい。所詮釣合ひの悪い夫婦だもの、ナニ向うで直ぐ素直にくれるものか。併し、こけ込んで來たせうがにやア、韋駄天が革羽織を着て、鬼鹿毛に乘つて來ようが……とサ、こんな通りを云ふでもない。どんな勇みが來ようと又、挨拶もしまいと思つたが、日頃からお前ならばと、思つて居る船越さん、鬼のやうなわつちでも、どうかこいつは、小ッ恥かしくなつて來たやつサ。
ト嫌らしき思ひ入れ。この時門口へ、七郎助出て、内を窺ひ、氣を揉む思ひ入れ。

十右　コレ、お松坊、てめえいゝ機嫌らしい。なんの眞似だ。この十右衛門も獨り身でもなし、女房のあるを知つて居ながら、まだ仲町で藝者をして居る時分から、心意氣は憎くなし、男と生れちやア幾つになつても、まんざらでもねえが……何を云ふにも、女出入りの渡りに來て、味な話しになつちやア、あんまり浮氣らしい、世間體が惡いぢやアないか。

まつ　ナニ、打ッちやつて置きねえな。

十右　イヤ、さうでねえの。譯道の解らぬ事は嫌ひな生れだ。そりやア、マア、さうと、わざ〳〵お馬を乘り出したお園どのゝ事、どう方を附けてくれるつもりだ。

まつ　そりやモウ、外の人の來た話しぢやアなし、わつちが方に心意氣のあるお前。あの子をどうするものかな。梶川さんの方からも、賴んでは來たれども、お前あの子を連れてお歸り。

トこれを聞いて、門口にて七郎助思ひ入れ。二階よりお園窺ひ居る。

十右　さうこなさんが、云つてくれゝば、賴まれた男も立つといふもの。そんなら、いま直ぐに連れて行かうか。

ト立ち上がる。

まつ　ア、コレ、待ちなさいな。わつちも六三からは預かり、梶川さんからは賴まれ、二方三方から云ひ込んであるあの子の道行、今さら斯うとも。モシ、斯うしてくんな。

ト囁く。十右衛門呑み込み、思ひ入れあつて

十右　エヽ、そんなら後まで待つてくれろと云ふのか。そりやどうなりとしまいものでもない。必らずともに、間違ひなく賴みます。

まつ　氣遣ひしなさるな。その代りにはお前も又、わつちが心意氣を、間違はしてくんなさるなよ。

十右　承知サ。お松坊

まつ　十右衛門さん

十右　慥かに螢の

ト鏡臺の抽出しへ目を附ける。お松ちやつと抽出しを閉す。十右衛門思ひ入れ。お園二階より窺ふ。

まつ　蚊がくはうによ。

十右　イヤ、うつたうしい蚊だ。

ト唄。お園は二階の障子を閉す。思ひ入れあつて、十右衛門奥へ入る。あと合ひ方。表に窺ふ七郎助、ツカツカと入り、お松が胸づくしを取つて

七郎　コレ、もし、何もかも、聞いたぞ〳〵。
まつ　コレ〳〵、七郎助さん、何をお前聞いたと云ふのサ。
七郎　ハテ、知れた事。内外を貫く我れらを先にして、あの船越に氣のある樣子。その上、梶川どのが惚れてござるお園を、こりや福島屋へ、返す氣ぢやな〳〵。
まつ　コレサ、靜かに云ひなさいな。梶川さまとあれ程まで、對談したお園が事、今更なんと變替へるものか。併し、外の男と違ひ、道理の解つた十右衞門さん。遣る事はならぬと云つたが最後、どんな氣紛れを起さうも知れぬから、やはらを云つてやらかしたのサ。
七郎　エヽ、そんならありや誠ではないな。
まつ　モシ、斯うだわな。
　ト囁く。七郎助呑み込む。
七郎　そりやまんざらでもない話しだ。よし〳〵、承知承知。そんなら身共は、初夜を打つのを合圖にして、逢ひに來るから、その時必らず
まつ　否と吐かせば、ふん縛つてお前に渡すワ。よしかえ。
七郎　コレ、それに違ひはないのか。併し、おれを歸して後には船越。エヽ、氣が揉めるワ〳〵。
まつ　さう思はゞ行かずといゝわな。その代りには梶川さまへ、皆云つてしまはにやアならぬよ。
　ト此うちお松、藥を掛けし七輪の下を煽いで居る。
七郎　アヽ、コレ〳〵、それを云はれては、我れら面目次第もないわえ。コレ〳〵、それはさうと、あの藥の事は、よしか〳〵。
まつ　七郎助さん
七郎　エヽ、後が案じられるわえ。
　ト七郎助、心を殘す思ひ入れにて、向うへ行かうとして、合ひ方になり、引返して路地へ入る。お松あと見送り
まつ　エヽ、いゝ氣な唐變木だ。うぬがやうな間拔けと、十右衞門さんと、一口に云へるものか。エヽ、だりもく野郎め。
　ト藥を煎じ居る。二階よりお園、以前の一腰を持つて來り、拔き足して表の方へ行かうとする。
まつ　お園さん、お待ちよ。
その　アイ。
まつ　こりやアお前、どこへ行きなさるのだ。
その　サア、わたしや
　ト思ひ入れして

モシ、とゝさん、わたしやお前を疑ふぢやござんせぬが、あの二階から窺へば、十右衛門さんへ渡さうと云ひなさんすは、六三さんの顔も立たず、わたしを内へ歸しなさんすお前のお心。それもあるまいとは申されませぬが、その上に、あの七郎助どのに、今宵の初夜にわたしを渡さうと、今の約束。どういふお前の心の變つたこの内に、うか／＼しても居られませぬ。六三さんに尋ね逢ひ、主と相談せにやなりませぬ。とゝさん、只今までは何かときついお前のお世話。有り難うござりまするが、もうわたしやこの内には

ト行かうとするを引廻して、門口へシヤンとさし

まつ　イヽエ、弟が前から預かつたお前、引渡すまでは、五分でも外へ出されないよ。

その　サア、さう云ひなさんすは尤もぢやが、わたしやどうもお前の心が

まつ　どうしたとえ。

その　知れぬ事ぢやと思ふから、どうもお世話になつて居ては

まつ　コレ、なにか、わつちの心が知れねえ。

その　アイ、外でもござんせぬ。先刻お前の鏡臺に、入れてあつたる古金襴、模様も慥かに雛鶴の、印子の鯉魚に添へたる袱紗、よう覺えて居りまする。あのマア袱紗はどうしてお前が持つて居なさんす。

まつ　サア、あの袱紗は

その　どうしてこの内にはござりまする。

まつ　アイ、買ひやした。

その　エ。

まつ　柳原の古着屋見世に、吊してあつたあの袱紗、慥か五十か八十で、値段が出來たから、有りやうは精靈棚の打敷きにと、買つて戻つた雛鶴の、この袱紗ならコレ爰に

ト螢籠の袱紗を出して見せる。お園、よく／＼目を附け

その　さてこそ違はぬ、印子の置き物へ、添へてあつたるこの袱紗。この出所を詮議せば、鯉魚の行くへも知れる道理。とゝさん、どうぞこの品を

まつ　欲しくばお前に上げるわな。

その　嬉しうござんす。これさへあれば、六三さんと相談して、鯉魚の行くへを。

ト袱紗を持ち、行かうとする。

まつ　ア、コレ、お園さん、お待ちな。お前その袱紗を、弟六三に渡さぬうち、待つておいでよ。

ト誂らへの合ひ方、一つ鉦

このマア藥を服んでお出で。

ト茶碗へついで差出す。お園こなしあつて

その　とゝさん、こりやマア、なんの藥ぢやえ。

まつ　月よどみのおろし藥サ。

その　エ、。

ト　ぎつくりする。

まつ　わつちが袱紗を持つて居るを、見附け出したるお園さん、どうで六三に話すは必定、これぢやア此方の目論見も、元の鞘へは納まらぬ、それぢやア所詮お陀佛と、往生極めてこなさんを、堀川さまへ連れて行く、その前に腹の子を、むかはり月の質同然、流した後で連れて行く。利上げをしてももう叶はぬ。覺悟極めてお園さん、おろし藥を服んでおくれ。

その　そりや、アノ、わたしを堀川へ、渡さう爲にお腹の嬰兒。

まつ　水に流してしまふのサ。

その　そりや又、あんまり

まつ　藥を服むか。

その　サア、それは。

まつ　但し、六三を思ひ切るのか。

その　サア、それは。

まつ　おろしてしまふか。

その　サア。

きつ　サア。

兩人　サア／＼／＼。

まつ　キリ／＼服んでしまはんせ。

ト差しつける。お園思ひ入れあつて

その　エ、胴慾な。この荒ましを六三さんへ

ト行かうとするを引きつけ

まつ　エ、際分けのない。喰つてしまへ。

ト　お園が襟髮を掴み、藥を服まさうとする。お園服むまいと爭ふうち、思はず茶碗の藥をお松の顏へぶツかける。お松「ツツ」といふて顏を抱へ、苦しんで倒れる。お園、駈け寄つて介抱して

その　コレ、とゝさん。コレ、堪忍して下さんせ。こりや誠に怪我でござんす。ア、、どうぞ好い藥が欲しいものぢや。

ト いろ／＼介抱するうち、門口に七郎助窺ひ居て、この時、ツカ／＼と入る。

七郎 ヤ、、、、こりやアおと、どうした／＼。

その サア、わたしへ眼めと差しつけさんしたこの藥、思はず怪我に、おとさんの顔へかゝつたわいな。

七郎 ヤ、、、、、こりや先刻に渡したおろし藥に違ひない。ア、コレ、顔に火傷させたな。痕が附いてはならぬ。コレ／＼、爰に好い藥がある。

ト 紙入れより火傷の藥を出し、お松の顔へ附ける。此うちお園、袱紗と一腰を持ち出て、表の方へ行かうとする。七郎助見附け

ドッコイ／＼、われを逃がしてよいものか、殊にわれが持つて居るは、そりや梶川さまの手にあつた、印子の鯉魚に添へたる袱紗。

ト 思はず云ふ。お園「さては」とこなしあつて

その さてこそ鯉魚は梶川を、詮議したなら行くへも知れる。この由早う、六三さんへ。

七郎 南無三、それを聞かれたか。こりやモウやけぢや。お園は爰から

ト 引きつける。お園振り拂つて、突き倒し、其まゝ表へ出て、一散に向うへ入る。七郎助、跡を追はうとするところへ、奥より十右衛門出て引きつけ、立廻りのうち兩人あやまつてお松をしたゝかに踏む。これにてお松心附き、起き上がる。この時お松が顔、おろし藥に火傷せし上に藥を塗られ、見苦しき顔にて、よろしくよろめき上がり

まつ お園さん／＼。……そんならお園は

十右 この船越が預かつた。

その ヤ、、、、。そんならお前が

七郎 おとは顔が

まつ 今の火傷で、もし見苦しく

ト 鏡を取り、顔を見る事あつて

ヤ、、、、。おろし藥に思はず怪我を

七郎 お園は中木場。追ッかけて

まつ 逃がしはせぬぞ。

ト 行かうとする。十右衛門引き附ける。この手を振り切り向うへかゝる。十右衛門は七郎助を引附ける。お松花道へ行き、振り返る。時の鐘の送り、雷の音きびしく、雨車にて、お松はお園の後を追うて向うへ入る。この仕組み、道具廻る。

本舞臺、三間の間、向う土手、うしろ一面の藪畳。よき所に樋の口、松柳茂りたる吊り枝。一體、この道具に誂らへあり、すべて中木場のあたり。雨車、雷の音、よろしく道具とまる、ト左右より、夕立にあひし釣師の仕出し四五人、捨ぜりふを云ひながら出て來り、東西へ別れて入ると、バタ／＼にてお園、一腰を抱へ、袱紗を持ち、一散に走り出て來り

その　ア、コレ、折惡いこの夕立。早う六三さんに逢うて、この一腰を渡し、その上で鯉魚の手がゝり、この袱紗、早う渡して

ト思ひ入れ。雷きびしく鳴るゆゑ、耳を押へて俯向いて居る。この時向うよりお松、よろめき／＼、顔を抱へ、走り出て來り、苦痛の思ひ入れ。

まつ　アイタヽヽヽ、エヽ、心は急けど、思ひがけないこの怪我で、氣を失つた其うちに、お園めを見失うた。ア、コレ、どうぞ捕まへて、證據の袱紗を取返したいものだ。

ト云ひ／＼舞臺へ來る。お園は雷に恐れ、目を閉ぢ、耳をふさぎ、口の中にて雷除けのお經をよみ居る。お松、暗きゆゑ、何心なくお園に行き當る。お園慟りして

その　桑原々々。

ト慄へ居る。お松も慟りして

まつ　エヽ、誰れだな。暗がりに何をして居るのだ。イケ馬鹿々々しい、慟りさせたよ。

その　ハイ、桑原々々。

ト耳を押へ、慄うて居る。

まつ　オヤ、なんの事だな、桑原々々と、雷どころかおやアない。此方は火傷の面が、ぴり／＼と、痛くつてならないのぢやアねえ。……ソリヤ、また光つたワ。

その　ア、、桑原々々。

ト蹲まる。お松に、稲妻の光りにて、お園が姿をちよつと見て

まつ　どうやらこなたは

ト探り寄り、お園を見附け

まつ　ヤ、お園どのか。

その　お松さんか。

ト逃げんとする。お松追ひかけ、立廻りあつて、キツと引附ける。

まつ　エヽ、逢ひたかつたわいの。コレ、お園どの、よく

こなさん、折角仕込んだおろし藥を、わつちが面へ。コレ、手盛りをくつた此とこ、醜い火傷のこの怪我も、皆こなさんのさせる業。その上、梶川さんが渡しなすつた雛鶴の袱紗も、こなたが揚げて、六三野郎に渡す氣か。思へば腹の立つ女め、證據の袱紗を寄越しやアがれ。

ト　お園を酷く捻ぢつけ、打ち打擲する。

その　ア、コレ、とゝさん、腹の立つのは尤もぢやが、六三さんが尋ねて居さんす印子の鯉魚の、その手がゝりのこの袱紗、どうもお前に渡しては

まつ　渡されぬからは、此わしを訴人する氣か。コレ、以前は乳母の娘でも、今ぢやア六三がおらア姉のとゝを、うぬらは寄つて訴人をするか。

その　どうしてお前を

まつ　その氣が無くば、袱紗を寄越すか。

その　サア、どうもそれでは

まつ　寄越しやアがらねば、六三が所持の

ト　持つて居る一腰を引ッたくる。

その　ア、コレ、それを

ト　寄るを突き退け

まつ　寄りやアがるな。達てと云ふに渡さぬと、見たか、六三が親の形見の一腰で、これでうぬをぶッた切つても、取らにやアならぬ。寄越しやアがらぬと、この一腰で

ト　白刃をスラリと拔き放す。

その　ア、コレ、滅多な事を、

まつ　命が惜しくば、キリ／＼その品を。

その　サア、どうもこれは

まつ　渡さにや、うぬも酷い目見せて、

ト　切りつける。

その　ア、コレ、危ない、滅多な事を。

ト　立廻り、振り袖にてキッと留める。

まつ　エヽ、離しやアがらぬか。

その　どうぞ助けて。

ト　兩人捨ぜりふにて白刃を爭ふ。此うち雨車の音、蜩の聲、時の鐘、兩人拔き身を奪ひ合ふうち、思はずあたりへ投げるはずみに、正面の藪垣へ打ちつけ、竹の垣に當つて、誂らへの場所へ白刃しやんと立つて居る。兩人これを知らず、立廻りあつて、お園袱紗を持ち逃げるを、お松捕へて

まつ　うぬをやつて堪るものか。逃がしはせぬぞ。待ちやアがれ。

ト襟髪を捕へて引き戻す、お園逃げる。お松引き戻す
はずみに、よろ〳〵と藪垣にこけかゝり、急所をした
たかに白刃にて切り裂き、「アッ」と苦しみ、思ひ入れ
あつて
ヤ、、、、こりやアおれを、切つたな〳〵
その　ア、コレ、どうしてお前を
まつ　イ、ヤ。切つた〳〵。コレエ、、お園が、姉のもと
を、切つた〳〵。
その　イエ〳〵、わたしや切りやせぬ〳〵切りやせぬぞえ。
ト　おろ〳〵するを引ッ捕へ、藪の際へ引きつけ
まつ　お園が、姉のもとを切つた〳〵。
トよろぼひ〳〵こけかゝる。この時藪の内より件の白
刃を取つて、お松をしたゝかに切る。
ヤア〳〵、切つた〳〵。藪の内から、わしを切つた
は
六三　こなたの弟の六三でござる。
まつ　ヤ、その六三が假にも姉を
ト立ちかゝるを、藪の中より又切りつける。これにて
お松、土手より、コロ〳〵と落ちる事あつて、ようよ
う這ひ上がる仕組みよろしく、時の鐘の頭、忍び三重、

雨車烈しく、藪垣を押し分け、六三（お松と早拵り）
白刃を振り上げ、下を見下ろす。舞臺にまろびしお園
これを見て
その　ヤア、六三さん。
六三　コレ。
トつか〳〵と土手を下り、お松のむしやぶり附くを又
切り下げ、立廻りにて引き附けて、膝に敷き
南無阿彌陀佛。
ト止めを刺す。始終若い合ひ方。お園、六三に縋つて
その　申し、六三さん。こりやお前、もとさんを
六三　以前は乳母が娘のもと、家來ながらも世につれて、
今は假にも姉なれど、人の知つたる悪黨も、弟の六三
が手に、これも宿世の因果づく。
その　印子の鯉魚の手がゝりたる、雛鶴織つたる古金襴
六三　袱紗を所持する上からに、疑ひもなき貴の盗賊。
その　心憎きは梶川長兵衛。
六三　捕へて詮議と思へども、人殺しといひ、取分けて、
姉といふ字が遁がれぬ大罪。
その　わたしも二世と定まる夫、それを嫌うて大外れた、
お前の胤を身に宿し

六三　所詮長らへ果てぬ身は
その　尋ね寄るべは庵崎の
六三　實の伯父たる福清どの。
その　せめてわたしが暇乞ひ。
六三　爰から直ぐに
その　死ぬる覺悟の
ト思ひ入れ。よき時分、梶川の下郎八内窺ひ出て
八内　姉のかたきを殺した六三。そのマア品を
トかゝるを、立廻つて六三引敷く。お園あわてゝ
その　ア、コレ。
六三　毒くはゞ皿。
トぐつと突ッ込む。八内苦しむ。
その　ヤ、こなさんは
六三　コレ。
ト、チョンと木の頭、兩人見合つて思ひ入れ。時の鐘の送りにて。ひやうし　幕

三幕目　向島福清の場

役名――大工、六三實ハ小柴六三郎。福島屋娘、お園。中村少長。市川鰕鶴。市川團車。福島屋清兵衛。

本舞臺、三間の間、正面綺麗なる大和葺きの屋體、茶壁、小袖簞笥を取付け、上の方に精靈棚を吊り、門口は風雅なる枝折り戸、萩垣の間より朝顔這ひかかり居る。上の方に建仁寺垣、梧桐、杉などの庭木、石燈籠、手水鉢、四つ目垣、萩桔梗紫苑など秋草の盛り、軒に誂らへの綺麗なる切り子燈籠を吊し、これに鈨菊と菊蝶の紋を付け、「循定院環春光阿禪界居士、申の霜月廿九日」、「善覺院春譽了玄居士、申の極月八日」右の兩人の戒名を書き、二人の位牌を並べ、すべて向島福清別莊の庭先。三味線入り、弘福寺禪のツトメ、施餓鬼の打鳴らし。

この模樣にて幕明く。

ト清兵衛、着流し、庭下駄にて、迎ひ火を焚き居る。

下男一人、丁稚一人手傳ひ居る。盆棚には所化一人回向して居る。供の男、門口に待つて居る。清兵衛、本向けして回向の體。

清兵　願我心淨如香爐。願我心淨如智慧。火念焚燒皆當香供養十方三世佛。一切敬、南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。

ト本向けして香たくべ、鈴を鳴らし、回向する。丁稚と下男は道具を片附ける。所化は回向を終り

所化　さて〳〵、爰もとは、きつい蚊でござります。

清兵　御苦勞にござりまする。コリヤ、お茶をあげいよ。

丁稚　ハイ〳〵。お茶上がりませ。

ト出す。

所化　イヤ〳〵、お構ひなされまするな。方々でござれば、もうお暇いたしませう。

清兵　これはあまりお麁末。お夜食を參つてござりませ。

所化　イエ〳〵。只今下さりました。

清兵　お往持へよろしく頼みまする。

所化　申し聞かすでござりませう。……コリヤ、伴助よ、穿き物を、

ト供男、穿き物を直す。所化は捨ぜりふにて、歸り、うろたへて取つて返し、ツカ〳〵と内へ入り。盆棚の方へ行く。

清兵　これはお所化には、なんぞお忘れなされましたか。

所化　ハイ〳〵。ちと失念仕つた物がござるて。

ト盆棚の上へ置いた、紙包みのお布施を見付け

これにござりました〳〵。

清兵　お煙草入れかな。

所化　イエ〳〵。何より大切なお布施を忘れました。ハ、ハ、、、、。

清兵　ようござりました。

ト合ひ方になり、所化は網代笠を持ち、供男附いて、スタ〳〵と向うへ入る。門口に蟲の聲する。

丁稚　モシ、旦那様、お庭の蟲めが、一倍今夜はよう鳴きまするわえ。

清兵　成る程、昨夜よりは蟲めが餘計に鳴くやうぢや。ちと蟲の音でも聽きませうか。

丁稚　左樣がよろしうござりませう。

清兵　イヤ、先刻臺所へ見えたは、ありや誰れぢや。

丁稚　ハイ、本家の福島屋からお人が參りましたが、今にお園さまのお行くへが、知れぬさうにござります。

清兵　ア、、まだ知れぬか。所詮約束した男があつての駈



初演の

散書 大切



繪番附

落ち、案じる事はあるまいが、其うちにひよつと不料簡な心が出ては
ト思ひ入れあつて
案じぬでもなし
丁稚　左様でござります。今朝ほども大川橋での噂には、昨夜深川の中木場でおとおばアといふ女が切られて、その詮議最中だといふ評判でござりまする。
清兵　すりやアノ、おとといふ女が切られたといふ噂があるか。そのおとといふは、慥か大工の六三が姉、六三はお園が譯ある男。もしやその事で。
ト思ひ入れ
ドリヤ、抹香の切れぬやうに、香盛つてやりませう。
ト唄になり、香爐を取出し、盆棚の前にて香を盛る。丁稚は門口の朝顔を水へ打ち居る。この唄を借りて、向うより送りの男二人、三つ龜甲の紋附いたる留守居提灯、一張は紅葉鶴の紋を附け、持つて出る。後より中村少長、市川露鶴、役者の餘所行きの形にて出て來り、門口へ來て
少長　コレ若い衆、福島屋の宿は爰だの。
丁稚　左様でござりまする。

少長　親方はお内か。
丁稚　ハイ、宿に居られまする。マア、お入りなされませ。
少長　さうせう。サア、露鶴さん、お入りなされ。
露鶴　マア〳〵、少長さんお前から。
丁稚　モシ、旦那、堺町から、少長さんと露鶴さんがお出でなされました。
清兵　ア丶、これは珍らしい。サア、此方へお通し申しやれ。
二人　ハイ、親方、御免なされませ。
ト内へ入る。
清兵　これは珍らしい、よう來なさつたの。暑いが、芝居は評判がようて、いつもながらおめでたうござります。今夜はどこへ行かれたのぢや。
露鶴　ハイ、武藏屋へお客人がお出でなされまして、暮れ方から屋根船で參りましたが、久しくお目にかゝりませず、殊にはお馴染の佛樣の新盆でもあり
少長　アイ、水向けながら、盆棚も拜みたう、次手ながら參りましたが、誠に光陰矢の如し、御夫婦ながら、思ひ合うた新盆とは、これも變つた御縁づくでござります。
ト清兵衞、ホロリとして

清兵　ア、、お二人ながら若いに、ようマア寄つて下さりました。よもやと思ふと、夫婦の者が新盆に、月こそ變れ、日數は十日も經たず、あの世の旅へ二人連れ、今夜も娑婆へ夫婦の者、手に手を取つて

ト思ひ入れあり

コレ、盆棚に菓子折がある。爰へ持つて來い。ドリヤ、薄茶でも立てゝ進ぜませう。

ト唄になる。清兵衛は臺子を取出し、茶を立てにかゝる。この唄へかぶせ、捨て鉦、蟲の音しきりに聞え、向うより六三、頰冠り一本差しにて、お園が手を曳き出て來り、花道にて

六三　コレ、お園どの、こなたの實の伯父御福清どのゝ、別莊は爰らか。

その　アイ、向うの軒に燈籠のかゝつた内が、わたしが伯父さん、福清さんの寮でござんすわいな。

六三　ア、、あの燈籠の

ト遠目に見るこなしあつて

あの燈籠に附いたる紋は、銀菊に、慥か菊蝶。

トお園いろ〳〵見る事あつて

その、「循定院環春光阿禪昇居士、霜月廿九日」。

六三　ア、、そりや、こなたの兄御の連れ添ふ女中の戒名だの。

その　アイ、あの此方の「善春院達譽了玄居士、極月八日」あれがわたしの

六三　兄貴の戒名

その　ハイ。

六三　南無阿彌陀佛々々々々々。……ア、、常から多病といふものゝ、よもや今年が新盆にならうとは、うろたへた神様も御存じあるまいに、その回向する我れとても

その　人を殺めて、明日知れぬ、殊に他人である事か、親身でなけれど姉といふ、一字の付いた[illegible]さん。

六三　殺して立退く身の罪科、今度あの世へ歸りには、わしら二人も道連れに、最期の場所は隅田堤、手がゝりされと知れながら、詮議のならぬ日蔭の身、あつて詮なさこの袱紗、その云ひ譯は二人が書置、福清どのへ屆けた上

ト書置を出す。

その　二人一緒に死ぬる身の、せめてこの世にあらうちに、回向いたすは去年の冬、實の兄さん、また外に、云ひ交したる女中さん、云はゞわたしが姉さん同然。定めて伯

父御の盆棚へ、二人仲よう睦まじう、蓮の臺の手枕も

六三　年に一度の魂祭り、今日は日蔭の二人づれ、敷居の
峠越ゆるとも、せめて今宵の精靈へ、心ばかりの

その　手向けとなるや生垣の、蔭ながら、御回向を、六三
さん

六三　コレ。
ト思ひ入れ。時の鐘、唄になり、兩人は、窺ひ／＼門
口へ入る。矢張り蟲の音しきりにする。此うち清兵衞
薄茶を立てる事あつて

清兵　ほんに、二人に聞かうと思つた。今度の狂言は、世
話事であらうの。

露鶴　ハイ、「お千代半兵衞」でござります。

清兵　ア丶、こりやよからう。慥かあの半兵衞は、人殺し
であつたの。

少長　左樣でござります。半兵衞の人殺しは、この前、助
高屋が致されました。

清兵　ほんに、さうであつたの。敵役を殺した後、二人死
なうと心中に、その道行も、爰らあたりの地名の文句。
どうでも派手な心中には、隅田川が色氣があつて、いつ
ちよいて。

ト是にて門口の兩人思ひ入れ。蟲の音やむ。清兵衞
思ひ入れ。

少長　モシ、親方え。今まで鳴いたあの蟲が、一度に鳴き
やみましたぞえ。

露鶴　ほんに、わたしも左樣に存じます。なぜマア、あの
蟲の音が

清兵　イカサマ、門火のあたりが映つた所爲か、どうして
マア。
ト思ひ入れ

丁稚　モシ、親方、忘れて居りました。先程貸本屋が持つ
て參りました淨瑠璃本。
ト出す。清兵衞取つて

清兵　オ丶、こりや「八重霞浪花濱荻」婀娜なもとの新屋
敷。もとと異名のある女、慥かに切られた

少長　ハイ、噂でござりまするて。
ト門口の兩人思ひ入れ。唄になり、向うより市川團車、
頭取にて、羽織の形にて、息せきと出て來り、これに
て門口の兩人顏を外け居る。團車、胡亂らしく見て

團車　誰れだ。若い女のやうでもあり。二人連れで
ト口を明けながら、ズツと入り

ハイ、御免なされませ。頭取でござります。

露鶴　ア、團車さん、お出でか。

清兵　これは珍らしい。サア、此方へござりませ。

團車　これは旦那、この間は御無沙汰仕りました。モシ、お二人、お前方の後を追うて、板橋へ來て聞いたところが、疾に行きなさつたとの事。それから三挺で急がせたところ、生憎汐時が惡くて、よう／＼と今着けやした。武藏屋へ行つて聞いたら、此方へとの事。後を追うて參りました。モシ／＼、いつも中戸屋へござる御隱居が、二人のところへ、劍菱を片馬寄越しなさりやした。コレコレ、この上札を、明日お部屋へお貼りなされまし。

ト名題役觸れを出す。

少長　そりやアお氣の毒な、よくお禮申して下さりませ。ドレ、その札を見せなさい。

ト取つて開き見て、思ひ入れ。

アヽコレ、頭取さん、こりやア二番目の役觸れだよ。

團車　ドレ／＼、お見せなされませ。

ト見て

成る程、こりやア淨瑠璃の名題役觸れ。ハテ、麁相したわえ。さぞ跡で合役が尋ねて居やう。ハテ、氣の毒な。

露鶴　ハテ、お前も久しいものだよ。

團車　モシ／＼、旦那え、お氣を附けなされませ。只今門口に、若い男と、慥か女と二人連れ、今頃は得てあるやつでござりまする。油斷なされまするな。

清兵　エヽ、そんなら門口へ、若い男が女を連れて、この家のまはりを。

ト思ひ入れあり

道理で庭に鳴きつるゝ、千草の蟲の鳴く音さへ、一度にやむは、さては身寄りの兩人が、回向ながらに餘所ながら、爰へ便つて

ト思ひ入れ。

丁稚　不用心なら、見て參りませう。

清兵　ア、コレ、云ひ附けもせぬに、何を差出た。客もあるに

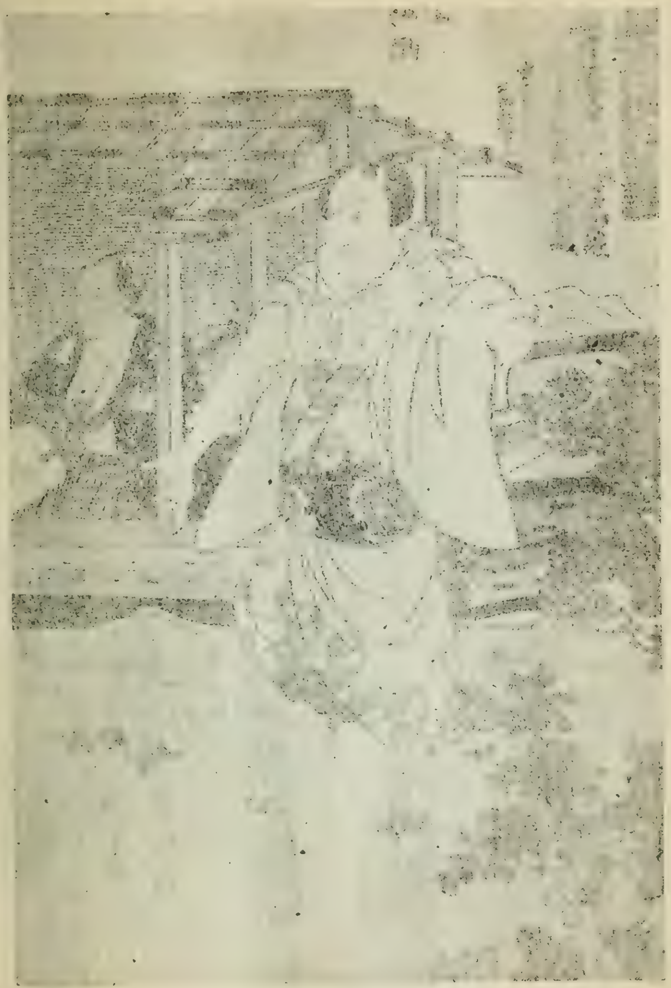
丁稚　でも、お前

清兵　ハテ、捨てゝ置きやいの。

トこれにて門口の兩人、囁き、窺ふ。

團車　モシ、旦那え。ほんにこの盆は、あなたの聟御樣の新盆でござりまする。

清兵　さうサ、若死をしやうはしか、それは／＼夫婦なが



初演當時



繪　錦　の

ら、伯父の福清を、實の親より大切に、殊に取分け、夫婦仲が、よいが上に諠まじう。八百年も添ふやうに、コレコレ

ト小袖箪笥の抽出しより、誂らへの派手なる、銑菊と菊蝶の紋付いたる、男女二つの小袖を出し

春になつたら江の島參り、夏は湯治に、斯う／＼と、役者衆の衣裳のやうな、對の形なる派手小袖、ア、、若い時といふものは、後は噂も眞實に、女夫連れ立つ定業は生れ附いたる誠の心中。……それに引替へ情ない、わしが爲には眞實の姪、云ひ交したる男こそ、人を殺めて明日知れぬ。

トうか／＼とせりふあつて、キッと氣を變へ

こりやア、折角遊びにござつたお前方に、不馳走な亭主振りだ。お話しの「お千代半兵衞」。この淨瑠璃の「お園六三」も仕組みは同じ心中の、合へば異見を島の内、袖に涙を福島屋、島太夫の節附けは、ア、、また格別なものだなア。

ト本を出し、表の方へ聞えるやうに、思ひ入れ。この時五ツの鐘鳴る。皆々思ひ入れ。

少長　ア、、あれは初夜でござりまする。もうお暇しませうかえ。

露鶴　お客は船でお待ちなされてござあらう。もう參りませうわい。

清兵　これはしたり、馳走もならで氣の毒な。とは云ふものゝ、留められもせぬ客人と同道。そんなら又其うちにござりませ。よう日向に來て下さつた。

園車　左樣なら、私しもお暇いたしませう。併し、お前方は船でござらうが、わたしは山の宿に寄る所があれば、モシ、旦那、提灯をお貸し下されまし。

清兵　オヽ、お易い御用ぢや、コレ、その提灯を貸して進ぜいよ。

丁稚　ハイ／＼。畏まりました。

ト「五百崎福清」と書いたる小田原提灯を出し、渡す。

園車　これは有り難い。明日早速お屆け申しまする。

清兵　これは頭取、今夜は假宅かな。

園車　イエ／＼、眞面目な用でござります。ハ、、、、、。

少長　左樣なら親方、其うちお目にかゝりませう。

露鶴　ちとお話しにお出でなされませ。

清兵　近いうちに尋ねませう。氣を附けてござりませ。

園車　サア、土手までは御一緒に參りませう。

清兵　ようござりました。

ト唄になり、あい／＼提灯を持ち、奥の男先に立ち、少長鶴、後より團車は小田原提灯をともし、捨ぜりふ云うて入る。丁稚奥へ入る。此うち門口の兩人、ちよつと小隱れする。あと合ひ方、清兵衛殘つて

ヤレ／＼、若い衆といふものは、向島から堺町へ、渡り歩きをするやうに、ハテ、元氣のよい。

トこなしあつて

オヽ、燈籠が暗うなつた、ドレ、油をつぎませうか。

ト誂らへの合ひ方になり、清兵衛は油つぎを出し、切り子燈籠へ油をつがうとする時、小さき差し金の蝶二疋、燈籠の灯を取りに來る。尤も此うち、そろ／＼と兩人窺ひ出て來る。

オヽ、又小蝶めが火を取りに來をつたか。我が身を知らぬ蟲けらめ、飛んで火に入る夏の蟲。爰らあたりを、まよまよと、見附けられては科人の。心からとは云ふものの、可哀や二人は、ア、イヤ、二つの蝶も遂には命を……ナ、飛んで火に入る夏の蟲けらの、コレ、遁るゝだけは高飛びして、親類縁者へ、必らず悲しい　アイヤ誠に人には命が物種。

ト二つの小袖を取つて

今はこの世に亡き二人、せめてはおれが實の程。ならう事なら生き殘り、先祖の後を立てるが孝行。親には疾に死に別れ、跡に殘つたこの伯父が、便りといふはお園ばかり……アイヤ、餘所事とのみ思うたが、お前方の若盛り、浮氣盛りの死ぬ死なう、その時辛抱したればこそ、若い二人が跡を弔ふ。その逆さまに上乘りして、氣強い伯父を泣かすなよ。

ト表の方へ思ひ入れ。この時門口の二人、堪へかね「ワツ」と泣き落す。清兵衛、恟りして

さてこそお園は

六三　モシ、よしなき六三に連れ添うて

その　兄の回向と二つには、お暇乞ひを

清兵　ヤ。

六三　委細はこれに

ト二人が書置と、袱紗を添へて内へ投げ込む。清兵衛取つて

清兵　ヤレ待て二人、ソレ。

ト小袖二つを投げて遣る。兩人外にて、めい／＼取る、清兵衛、書き物を取つて、短檠にかざす。

その　こりや兄さんの

六三　夫婦の晴れ着。
清兵　それも形見ぢや
兩人　エヽ。
清兵　「書置の事」。……ヤ。
　ト撞とこける。木の頭。
兩人　モシ。
　ト手を合す。この仕組みよろしく、ひやうし
幕の内、禪のツトメにてツナギ、引返し。

幕

大切　隅田川の場

淨瑠璃「道行浮名の散書」　常磐津連中

役名——大工、六三實ハ小柴六三郎。福島娘、お園。
梶川長兵衛。若林七郎助。般若の彌五。山姥の權。
大工、猪之助。子分、長太。在所娘、おわた。

本舞臺、三間の間、一面の黒幕、下座の方へ少し橋
の袂を見せ、手輕き飾り附け。すべて源兵衛橋の體。
爰に長太、權、彌五、夜鷹蕎麥を食つて居る。蕎麥屋、
箸や皿を片附けて居る。靜かなる禪のツトメにて幕明
く。

長太　爰へ湯を一杯くれ。
蕎麥　ハイ〳〵。
權　コレ、蕎麥を食つても死にはしまいか。
蕎麥　なんのお前、そんな噂がございますが、みんな嘘で
ございます。
長太　コレ、蕎麥屋、この道で、十七八な娘と、若い野郎
を見かけやしなんだか。
蕎麥　イエ〳〵、そんな衆は
彌五　どつちへうせた知らん。
　ト此うち蕎麥屋は道具を片附け
蕎麥　ハイ、これは有り難う。……蕎麥イ〳〵。
　ト呼びながら荷を擔ぎ、下座へ入る。
長太　サア、强勢腹がよくなつた。
彌五　大方彼奴等は、お園が伯父の福清の寮とやらに、う
しやアがるだらう。
權　そりやアあの三圍のか。
　ト云ひながら下座を見て

三人　コレ〳〵、あそこへ「福清」といふ提灯が來るぞ。
彌五　ほんに、大方内の男だらう。とッ捉まへてお園が事を
　ト　また靜かなる合方のソトメになり、下座より團車、前幕の形にて、尻を端折り、「福清」といふ提灯を下げて、何心なく出て來る。
三人　待ちやアがれ。
團車　ハイ、、、、。
三人　べら坊め、何も怖い者ぢやない。
長太　コレ、わりやア福清が所の男だらう。其方の内に、お園と六三が居るであらうな。
團車　ア、、モシ〳〵……成る程、提灯が提灯ゆゑ、さう仰しやらうが、私しは福清さまへ用があつて歸り道、夜に入つたゆゑ、こりやアお借り申して參つたのでござります。内方の事は存じませぬ。御免なされませ〳〵。
三人　ナニ、嘘を吐きやアがる。
團車　イエ〳〵。嘘ぢやござりませぬ。私しは堺町の頭取でござりまする。
三人　なんだ、頭取だ。
　ト　提灯の灯にて顏を見て

彌五　ほんに、頭取の團車だ。
長太　おきやアがれ。
　ト　突き放す。此はずみに以前の役觸れを落す。
何かおつこちた。
團車　ハイ、これは役觸れでござります。頭取座で急がしさまぎれに……モシ〳〵、どうぞこれへ下さりませ。
長太　これがアノ、芝居で讀む口上か。
團車　左樣でござりまする。
三人　讀んで聞かせろ〳〵。
團車　とんだ事を、道中で
長太　讀みやアがらぬと、ぶッ挫くぞ。
團車　ハイ〳〵、讀みます〳〵。
　ト　怖れながら受取り
「淨瑠璃名題、お園六三、二行浮名の敵討、太夫常磐津兼太夫、三味線岸澤式佐、相勤めまする役人、尾上松助、瀬川多門、澤村田之助、右の役人罷り出で相勤めまする。いよ〳〵この所淨瑠璃始まり、その爲口上左樣に……」。
　ト　云ひながら、いろ〳〵身交しして、雪駄を持つて、提灯を吹き消し、一散に向うへ逃げて入る。
三人　ハ、、、、、。

長太　併し、お園六三が道行とは氣障だ。眞崎の埼玉屋に、
　親方が待つて居るであらう。
權　なんでもこれから手分けをして
彌五　おらア、福壽の內から、梅若の方を尋ねべい。
長太　そんならおいら二人は、小梅の方から錦糸堀。
權　見當り次第にお園めを
彌五　引ッそびいて眞崎へ。
三人　後に逢ふべい。

ト矢張り時の鐘、禪のツトメにて、彌五は下座へ、權と長太は向うへ入る。ト、ゴンと時の鐘の頭。チョンと黑幕切つて落す。

本舞臺、三間の間、ズッと前へ突き出して高き草土手。上の方に大師堂道と記せし石の榜示杭。日覆より柳の吊り枝、後は浪の張り物。土手に沿うて誂らへの屋根船。奥深に向う河岸を遠目に見せ、すべて向島土手の飾り附け、この道具に納まる。

ト矢張り時の鐘だらりにて前彈きにかゝると、チョンチョンにて屋根船の簾を捲き上げる。

爰に太夫三味線、羽織袴にて居並び、淨瑠璃になる。

〽昨日まで、かへすがへすも折紙を、御詫いとはせの文月も、今宵は命を散らし書、それも誰れゆゑ秋鹿の、戀ゆゑ身をも沈むらん。

ト合ひ方かすめ、時の鐘にて、花道より六三先に、釻菊の紋附いたる形見衣裳、一本差しにて、手拭の端を持ち、お園、菊蝶の紋附いたる同じ衣裳にて、六三が手拭の端をとらへ、連れ立つて出て來る。直ぐに淨瑠璃

〽お園六三は亡き人の、これも形見の晴れ衣裳、世は釻菊の果敢なくも、枯れて空しき菊蝶は、法の花へと移りゆく、その人事も明日は又、我が身に同じ死出の旅、所も西へ向島、草に浮名を殘すとは、露白髭の森越えて。

トよろしく舞臺へ來り

その　モシ、六三さん、仲のよかつたお二人の、此お形見にあやかつて、未來でお前と睦まじう添はうと思や、モウモウ、こんな嬉しい事はござんせぬわいなア。
六三　云やればそれもそんなもの。去年の冬は、世上へパッと噂のあつたお二人の衆、この新盆にならうとは
その　知らぬが佛のお國から

六三 今宵はゆかりの魂棚へ

その お二人さんの、連れ立つて。

ト 淨瑠璃になる。

へ手を引き合うて道行も、去年の錦繪見るやうに、誰が淨瑠璃でしつぽりと、誠の床の假り枕、羨やましいぢやないかいな、思や此方も早うあの、未來へ行つたら兄さんの、蓮の臺のお隣りへ、越していつまで寢よとまゝ、叱り手のない樂しみな、隣で暮らすが何よりな、併しその時餘所々々に、面白い事出來やうかと、死なぬうちから女氣の、それが迷ひとかこつにぞへア、じやら/\と何をマア、まだ行かぬ先、氣を廻し、冥土の事をもう爰で、愚痴にも程のあるものを、さりとては又悋氣ぼう、そんな事では二世の世で、夫婦喧嘩の絶え間なく、ハレ益體も内證で、兄貴が意見いはれうと、笑ふが泣くの盂蘭盆會へ折に勸化の小娘が

ト 摺り鉦入りの唄、合ひ方になり、向うよりおわた、田舍娘、高端折り、手甲脚絆草鞋の形、御先祖の通りの拵らへにて、「木母寺念佛堂建立」と染めたる幟を持つて出て來り、花道にとまる。

へ陸命長兵衛の、お方との、麥搗き杵の數取りに、南無阿彌陀々々々々南無阿彌陀佛。仲をうたふぞ相腰、品やり、味やり、文をやり、南無阿彌陀佛、何と鳴海の浴衣染め、手振り袖振り、踊り振り、南無阿彌陀々々々々々、南無阿彌陀佛へ連れにはぐれて只一人、心閻魔のおのが在所へ。

ト この文句にて、よろしくあつて舞臺へ來り、二人を見て

わた モシ/\、もと物が問ひたうござんす。今方爰を、婆さん達の四五人連れ、關屋の方へは行かなんだかえ。

六三 イヤ、そんな衆達は……ムウ、見れば勸化の幟を持つて、ア、こりや、盆だに依つて、アノ江戸へ

わた アイ。木母寺の念佛堂、江戸勸化に出た歸り、村の衆にはぐれたゆゑ

その ほんに、年端もゆかぬ身で、ようマア殊勝に

わた サア、わたしや去年の冬、大事な人に別れたゆゑ、菩提を弔らふその爲に

その わたしも別れた兄さんの

六三 また、二人が亡き跡の

その せめて追善供養にも

ト思ひ入れあつて、簪を抜き

モシ、志し、上げませう。

トおわたへ遣る。

わた　ヤア、アノ手の内にこれをかえ。……ほんに團扇にあるやうな、姐さんとよい男、こりやお前方、てつきりと

へ心中とやらで死ぬのかえ、コレナア、モシ、そんな病にこちらが村の、酒の寒竹さまだんべ、所名うての生き藥師、かゝらしやるなら、ツイわしが戻りに次手に云ひ附くべいへ畑の南瓜に女郎は人がの、いつか色づきやしめたがるえ、そこらでせな子が張り番だ、おや〳〵〳〵なんとしよかの、唄を友なる夜の道、ちよこ〳〵歩み急ぎ行く。

トよろしくあつて、おわた下座へ入る。兩人あと見送り

六三　まだ辨まへなき小娘の、今の詞を聞くにつけ、福清どのゝ餘所ながら、先刻の御意見思ひ出し、こりやどうも一緒には

その　エ、。

ト思ひ入れ。

六三　サア、この六三は紛失の、鯉魚の在所は知れながら、姉殺しの日蔭の身の上。詮議もならず、捨てねばならぬこの命。其方は跡に生き殘つて、兄貴に代り親御の家。……コレ、古いせりふと思やらうが、聞き分けてくれ、お園、さらばだ。

ト立ち上がる。お園驚ろき

その　ア、マア、待つて……コレイナア。

ト引据ゑる。淨瑠璃

へなぜそんな事今さらに、云はれるやうな仲かいな朋輩方の一所へ、よると役者や御家中の、男の噂たび毎に、いつも小柴の御子息は、御器量よしと奥中の、その評判にいとど猶、緣を結ぶの神さんよりも、無理な御願を堀の内、押繪の額も御利益で、叶うた時の有り難さ、云はれぬ程の嬉しさを、お腹に宿す間もなう。お身の難儀に町住ひ、めぐり逢ふ瀬も憂き事の、つもりで死ぬる際となり、一人殘れとようもよう、むごい事をと取縋り、恨み涙の雨やさめ。へ流石男は日に泣かで、心に泣いてこの上は、膝を叩かず、指さゝず、義理の數數打捨てゝ、一緒に死なん、こなたへと、聞くに

心も、いそ〳〵と。

ト蟲の音、一つ鉦になり、六三はお園の手を引き、立ち上がる。これより向うの遠見引き、道具を廻す。淨瑠璃

〽しかもこの春、宿下がり、梅若さんの開帳へ、參りし折もこの道に、散るとは知らぬ花盛り、今宵は蟲に鳴かれ行く、哀れはなんと木母寺の、こなたに二人身を寄せて。

トこの文句のうち、靜かに舞臺を廻すと、遠見の飾り附け、眞崎の模樣になる。

六三　サア、爰が命の捨て所。

その　覺悟は疾から

六三　お園

その　六三さん。

ト手を取り交す。淨瑠璃

〽見合す顏が名殘かと、互ひに抱きつ抱きしめ、男女の仲々は、わりなき契りなりけらし。

ト、チョンと黑幕にて淨瑠璃を消す。この時、下座より猪之助出て來り、兩人を見て

猪之　見附けた。六三、お園はおれが

トお園へかゝるを、六三突き廻して猪之助を引きつけ

六三　ムウ、うぬは猪之助だな。われが爰らにうせるからは、長兵衞や七郎助も、大方そこらにうせるであらうが、鯉魚の詮議も科ある身ゆゑ、よんどころなく捨て置いたが、見かけたからには遁れかぶれ。サア、二人の奴らはどこにうせる。

ト縮み上げる。

猪之　アイタヽヽヽヽ、コレサ〳〵、七郎助は知らないが、長兵衞どのは眞崎に

ト六三の手を叩き落す。六三また引ツ捕へ、

六三　待ちやアがれ。その長兵衞が眞崎の、うせる所へ、うぬは猿曳き

その　そんならお前は

六三　命の次手に印子の鯉魚、お主は暫し福清どのへ。

その　必らず死ぬ時は

六三　二人一緒。

ト猪之助振り切るを、襟髪取つて

サア、行きやれ。

ト時の鐘の送りにて、お園、先に、六三は猪之助を引摺り、向うへ走り入る。ト佃節になり、チョン〳〵と

チヨンとキツカケに、黒幕切つて落す。

草土手た所へ引きつけると、舞臺一面の水船になり、

七郎　コレ、親方はマアどこにぢやぞい。

彌五　サア、埼玉屋に飲みながら、わしらが吉左右を待つ

との事ゆゑ、あそこへ仕掛けて聞いたところが

權　船頭や若い者を連れて、飲みながら、稻荷の方へ出

たとの事。

彌五　如何に月夜だといつて

七郎　サア、そんなら稻荷の方を尋ねて見よう。

トまた佃節になり、三人舞臺へ來ると、鳥居の中より、

長兵衞、楊枝をくはへながら、船頭若い者、銚子杯

鉢肴なぞを持つて出て來る。

ヤア、長兵衞さまぢやござりませぬか。

長兵　さう云ふは七郎助、何をマア今時分。

七郎　今時分どころかいの。お前から預かつた品、聞けば

聞くほど寐覺めの惡い代物ゆゑ、是非請け戾してもらは

うと、精靈棚もほつたらかして、急がしいのに今日一日。

長兵　サア、そりやア合點。大金にする代物ゆゑ、是非此

方へ請け戾すが、何を云ふても今はちつと

七郎　モシ〳〵、大金になつた時に受取りませう。此奴を

わしが持つて居ては、まさかの折に繩が投けぬ。サア、

こりやアお前に戾しまする。

ト懷より鯉魚を出して長兵衞に渡す。

長兵　ハテ、氣の弱い。そんならこりやア、マア受取つて

大金にした時に。

ト鯉魚を懷中する。

七郎　我れらへキツと、利に利を添へて

長兵　そりやア、合點。……して、わいらはアノお園を

彌五　サア、手分けをして尋ねても

權　さつぱり行くへが

二人　知れませぬ〳〵。

長兵　大方どこぞで六三めと。エヽ、忌々しい。ついでく

れ。

ト杯を取り上げる。側よりつぐ、トまた佃節になり

向うより六三、矢張り猪之助を引摺つて出て來る。七

郎助見附け

七郎　アレ、六三めが〳〵
ト思ひ入れ。
長兵　ヤ。
ト思ひ入れ。六三は花道より皆々を見て
六三　長兵衛そこにか、七郎助。
ト猪之助を投げのけ、ツカ〳〵と來て
ハチ、よく爰にうしやアがつたな。
トきつとなる。
長兵　姉のかたきを殺した六三
七郎　何しに爰へ
皆々　うしやアがつた。
六三　オヽ、その譯は改めて、云ふに及ばぬ鯉魚の置き物、二人のうちにある事は、手紙で知れた寳の行くへ。サア、おれにキリ〳〵渡してくりやれ。
長兵　ハヽヽヽヽ。押しの重たい二才野郎め、云ひ號けのあのお園、よんどころなく手を切つた、その意趣返しと思つたところ、うぬが方からうせたは幸ひ、爰で片附け、お園は女房、さう思つてうしやアがれ。
六三　イヤ、印子の鯉魚をおれに渡せ。
長兵　疊んでしまへ。
皆々　合點だ。
ト矢張り佃節になり、花々しきいろ〳〵のタテの道具にて、六三に打つてかゝる。立廻り。よいキッカケに「どつこい」と誂らへの鳴り物になり、これより六三皆々を相手に、面白き水のタテ、いろ〳〵とあつて、皆々水船へ一々切り倒し、七郎助を切り下げる。後より長兵衛「ムウ」と切つてかゝると、また鳴り物變つて、見事なタテ様々あつて、トゞ長兵衛の懐より鯉魚を引き出し
六三　こりやコレ、尋ぬる
長兵　何を小癪な。
ト爭ふはずみに鯉を水船へ落す。
六三　ヤヽ、大切な印子の鯉
長兵　水の深みへ。
ト兩人思ひ入れ。この時大ドロ〳〵、早笛になり、今の鯉、一丈あまりの大鯉になり、水中に現はれる。兩人これをキッと見て
六三　ヤヽヽヽ、印子の鯉の忽ちに
長兵　丈餘の鯉魚と變ぜし不思議。
六三　何は兎もあれ、ソレ。



初 演 當



時の錦繪

ト水船へ飛び込まうとする。

長兵　イヤ、わしには

ト引き留める。ちよつと立廻り、長兵衛をポンと當て

六三「ソレ」と水船へ飛び込み、この鯉魚と立廻り、

鯉は舞臺へ刎れ上がる、六三續いて飛び上がり、鯉を取らうとして刎ね返される事あつて、やう／＼に鯉を抱きとめ、其まゝ白刃を鯉の眼に突き立てる。大ドロドロ。この時長兵衛起き上がつて

南無三、それを。

トかゝるを突きのけ

兩人　どつこい。

トしやんと見得。

まづ今日はこれぎり。

めでたく打出し

短夜仇散書（終り）

文月恨鮫鞘

おつま
八郎兵衛



初演の繪番附

文月恨鮫鞘

序幕　洲崎の場

役名——矢島勇藏。梶岡文藏。古手屋太平次。雪駄直し、雁助。駕籠舁き、彌助。丹波屋忠兵衛。紺屋助三郎。藝者、おオ。利倉屋佐兵衛。仲居、お倶。岩田屋勘兵衛。藝者、丹波屋お妻。古手屋八郎兵衛。

本舞臺、三間の間、後ろ淺黄幕。正面瓦屋根、白壁造りの社、鰐口。神前、賽錢箱、所々にみだけ錢大分。東の方、筋違ひに、冠木門、見附け、建仁寺垣、振りよき松の樹。門の柱に「即席御料理」と云ふ札を掛け、西の方、葭簀張りの水茶屋、内に遠眼鏡を臺に載せ、懸け燈籠。少し上に、彌助、駕籠舁きにて、四つ手駕籠を下ろし、その中に、銜へ煙管にて客を呼んで居る。下の方に、雪駄直し雁助、鼻緒をすげて居る。仕出し、大勢入り亂れ、群集の體。すべて洲崎辨天巳待ちの參詣、賑やかに辻打ちにて、幕明く。

ト茶屋の亭主、茶を酌みながら、遠眼鏡の云ひ立てして、忙しきこなし。仕出し、寄り集まり

仕一　いつも〳〵賑やかに、お參りのある辨天さま、今日は取分け巳待ちのせゐか、夥しい人でござる。

仕二　左樣サ、假宅があるので、又一倍群集します。

仕三　一服のんで、晝見世を見物しませう。

仕四　わしは品川に思惑があるから、遠眼鏡と出掛けませう。

亭主　サア〳〵、御覽じませ。斯う振つてお目にかけますれば、高輪から八ッ山、品川沖の釣船、羽田の辨天、たんと、目の下に見えませうがな。

仕一　これは奇妙々々。とんと二三丁もこちらのやうに見えまする。

亭主　御覽じまして、とんと御仁體の廢りませぬ、よいお慰みでござりまする。

仕一　モシ、品川の思惑は見えたかな。

仕二　品川よりは晝見世を、素見して迷はせようか。
仕三　これはきつい所で受けさせる。サア、行きませう。
亭主　お茶をも一つ上がりませぬか。
仕二　イヤ／＼、澤山たべました。
仕四　茶の代も、眼鏡の代も、爰に置きました。
亭主　ようお出でなされました。

ト始終、辻打ちを生け殺しにて、仕出しは下座へ入る。彌助は客を呼んで居る。この鳴り物にて、向うより、梶岡文藏、黑絽の羽織、帷子、大小にて、殿中の笠を冠り、出て來る。後より太平次、一重羽織、町人の拵らへにて、誂らへの脇差を差し、菅笠を手に持ち、出て來て、花道にて

太平　卒爾ながら、それへお出でなさるゝは、梶岡文藏さまではござりませぬか。
文藏　成る程、身共は梶岡。

ト振り返つて、見て

オヽ、さう云ふは、花町河岸の古手屋太平次。
太平　ほんに、旦那文藏さま。
文藏　さて、一別以來。
太平　イヤ、爰は途中、先づ社內へ。
文藏　イカサマ、あれなる床几へ。
太平　御案內いたしませう。

ト矢張り鳴り物にて、兩人、本舞臺へ來る。

彌助　アイ、駕籠。旦那・駕籠やりませうか。駕籠々々。
太平　サア／＼、これへお掛けなされませ。お茶を上げて下さい。
亭主　ハイ／＼、これはどなたも、ようお出でなされました。

ト茶を二つ、盆へ載せ、出す。

太平　さてマア、先達ては御狀でござりましたが、彼の一儀は調ひましたかな。
文藏　されば、その儀に就いて、わざ／＼出掛けたが、今日は巳待ちと聞いたに依つて、彼の奴が安否も聞きたし、それゆゑこの邊まで、罷り越したて。
太平　ほんにその事も、御狀の追而書きに詳しい御文體。いよ／＼彼のは女だてら、お國を駈落ちして
文藏　江戸へと聞いたゆゑ、誠に祕術を盡して搜したところ、一兩日以前、仲町でフト見掛けたわい。
太平　ハヽア、それで聞えました。この頃岩田屋かち、新子の藝者が出ると云ふ噂は、そんなら彼のでござります

るか。
文藏　慥かにそれに、違ひなし〳〵。
太平　それでは旦那、どうせうと、あなたのお心任せと云ふもの。
文藏　ところで彼奴を身請けの金に、先達て家來を以て、差出したる三光の刀。
太平　アヽ、モシ。
　ト彌助と茶屋の亭主へ心遣ひのこなし。文藏、呑み込み
文藏　サア、三……ナ、ソレ、三朝に似た駕籠舁き、身は遠方の者ぢやに依つて、戻りは其方が駕籠を雇ふ程に、棒組を呼んで、用意して置いてはくれまいか。
彌助　ハイ〳〵、有り難うござります。左樣なら直ぐにでござりますか。
文藏　イヤ〳〵、これから大門屋で、ちと手間取る事もあらう。よい時分には人を寄越すわ。
彌助　ハイ〳〵、畏まりました。口を掛けて置きませう。
太平　御亭主、ちとあなたに御內談申す事があるが、店をわしに預けて、用があるなら足して來てはくれまいか。
亭主　畏まりました。丁度別當樣に賴まれた用もあり、行つて參りませう。
彌助　私しは棒組みを拵らへて、次手に飯を一杯かッ込んで來ませう。
兩人　それがいゝ〳〵。
亭主　ハイ、左樣ならお賴み申しまする。
彌助　ドレ、行つて來ませう。
　ト辻打ちにて、彌助に附いて、亭主入る。文藏、太平次、摺り寄つて
文藏　太平次、聞いてくりやれ。お身にもあらまし知つてであらうが、同家中關口孫太夫が娘お才は、生れつき容色美麗なれば、身共甚だ執心ゆゑ、傍輩どもを賴み、夫妻に申し入れたるところ、親どもは元より、お才めが不得心。ところで身共、傍輩の思惑、武士が一旦申し出しては、刀の手前相立たぬと、いろ〳〵手を替へ品を替へ申し入れても、不承知なるこそ道理、同家中柏木助太夫が悴、助三郎と乳繰り合つて、舌たるい二人の仲。戀の仇の助三郎、何がな越度を拵へつけて、縛り首にと思ふうち、彼れが預かりの、吉良のお家累代の重寶、三光の正宗。
太平　その刀が助三郎の預かり。先達てお國より、便物に

お入れなされた三光正宗。

文藏　家來雁助へ申しつけ、寶藏へ忍び入らせ

トこの話しのうち、最前より、直しの駕籠へよりかゝり眠つて居る雁助、目を覺まし、聞き耳立て、この時菅笠を取り

雁助　まんまと首尾よく盜んだが、モシ、旦那、私しは剛氣にまご／＼この態。いゝ所でお目にかゝりました。

トそこへ出る。文藏、恟りして

文藏　ヤア、そちや雁助。われがまご／＼より、身共がまご／＼。お才が事に質物の金、道なしにならうかと、大抵や大方の、まご／＼ではないわいやい。

太平　主も家來もまご／＼とは、先づ雁助どの、貴樣のまごまごとは。

雁助　サア、そのまごつき始めを、思ひ出してゾツとする。質屋の手紙に金を添へ、すた／＼持つてお國へ行けば、旦那は江戸へと聞いて恟り。お屋敷は寶の刀が紛失と、上を下へと詮議最中。サア、まごつき出すまいか、二合半の折助が、大枚八十兩と云ふ金を、隱さうしがくもある事か、尾籠ながら褌へ括りつけ、土用のうちの温氣にも、行水一つ使ふさへならず、體の汗の臭さ、こりや堪らぬと夜逃げにして、江戸へと志すところを、あの御用人矢島勇藏どのに見咎められ。

文藏　ナニ、勇藏に見咎められ。して／＼、金子は、手紙は、金は、どうした／＼。

ト恟り急き込んで、立ちかゝる。

太平　オツと、息繼ぎに咽喉を濕した。

ト茶釜の茶を酌んで遣る。

雁助　サア、その勇藏どのゝ云はれるには、主人の家を缺落ちしたが、どうしてまい／＼と舞ひ戻つたは、怪しい奴と引ッ捕へ

文藏　して、金子は、手紙は、金はどうした／＼。

ト急き込む。

太平　ソレ、息繼ぎだ。

トまた茶を酌んで遣る。

雁助　懷へ手を差し入れ、慥かに手掛り、白状するか、しならぬか、否か、應か、應か、否か、二つ一つの返答が聞きたいと、胸づくしを引ッ掴む。此方も一期の大事ぞと、弱みを見せず、コレ、勇藏とやらでえ藏とやら、出直せ、この廣いお屋敷に、その盜人は外にはないか、よし無いにせよ有るにせよ、それ程大事の刀なら、なせ

早くは詮議せぬ、刀盗人イケ面倒なと、云ひさま取つて投げ付けようと存じましたが、物の見事に押ッ伏せられ大事の手紙を

文蔵　取られたか。

雁助　そこはぬからぬ、コレ、この通り、引き出す手紙を奪ひ合つて、中より引き切り、宛名の方は即ち爰に。

ト貫入れより出して、文蔵に渡す。

文蔵　ドレ。

ト取つて

「尤も書状に印形仕り、此方帳面とも押切り判いたし差上げ候ふ間、御請け戻しの節は、御自身御出でなされ候ふとも、お使ひにても、この書面御持参下さるべく候ふ、その節異議なく御渡し申すべく候ふ、念の爲斯くの如くに御座候ふ、以上、梶岡文藏さま、深川佐賀町伊勢屋太左衛門、判。」すりや、勇藏と爭つて、手紙の前書は

太平　あるにはあつても、宛名はない、密書の文言。氣遣ふ事はござりませぬ。

文藏　して、質置きのその金子は。

雁助　肌身離さぬ褌へ、持ち重りのする狸の金高八十兩。

ト渡す。

文藏　出かした雁助、お才が身請けの手助かり。助三郎は刀の紛失、一生埋れ木。

太平　反古にはならぬ密書の片割れ。後日に質請けある時の、證據は手紙へ押切り判。

文藏　誠に身共へ名宛ての書状なれど、人目を憚るこの文面。太平次、其方、暫時預かつてはくれまいか。

太平　イヤ、どう致して。紙屑籠から出たやうな、八百屋の紙袋とは大きな違ひ、御大身樣のお家に關はる、大切なこの手紙、恐ろしや〳〵。これは眞平、御免なされませ。

文藏　そんなら雁助、其方が暫らく

雁助　モシ、主腹よければ下主腹知らぬとは爰の事。その手紙で八十兩と云ふ金を、信州まで持つてあくせくして、それからまごつき出して、今日と云ふ今日、旦那へお渡し申し、ヤレ嬉しやと溜息も吐かぬうち、又その手紙を預かれとは、あんまりお胴慾でござりまする。

文藏　成る程、これも尤も。と云うて身共が持つては猶濟まぬ。どうぞ暫らく隱して置きたいものだが。

雁助　左樣サ、僅か一尺に足らねえ反古のやうな物でも、

粗末にならぬその書き物。どこぞへ忍ばせる所が

ト あたりをキヨロ／＼見廻して

モシ／＼、ある／＼。この前お七が吉祥寺で、欄間へ隠れて忍び負せたその格で、あの神前の十二銅、お捻りの紙と入れ替へて、賽錢箱の片隅へ、ちよいと載せてはどうでござりませう。

文藏　イヤ、こりや出來た／＼、孔明々々。今の世の楠木正成、智謀と云ひ頓智の程、恐るべし／＼。ちつとも早く。

雁助　合點でござりまする。

ト 神前の十二銅を取つて來て、渡す。

太平　コレ／＼。

ト 手紙と入れ替へ、錢を包み、賽錢箱の角へ載せて

なんとモシ、これぢやア晩まで氣の附く者はござりませぬ。

文藏　奇々妙々。

雁助　さて、仕舞ひのつかぬは私しばかり。聞けばその矢島勇藏どのも、この江戸へとの風聞。見附けられたら質屋の藏、縛し上げて、どんな憂き目を

太平　見るのは必定。爰から直ぐに逃げるが一の手。

雁助　それだと云つて、此のまゝでは。

ト 此うち、懐より、金を一兩出して

文藏　これを路銀にその身を隠し、當座の凌ぎ。

雁助　アノ、たつた一兩で。

太平　コレサ、旦那の心に如才はない。望みが叶へば後からどうとも、ほんの當座の口養ひ。

雁助　呑み込みました。顔さへ見咎められねえやうに、雪駄直しや猿廻し。まんざら退いた仲でもない。

文藏　得心したら、ちつとも早く。

雁助　必らず後の吉左右を。

太平　そりやアわしが呑み込みました。

文藏　そんなら太平次、大門屋の

太平　隠れ座敷で祝ひにお一つ。

文藏　よからう／＼。サア、來やれ。

雁助　デイ／＼／＼。

ト 辻打ちになり、文藏、先に、太平次、下座へ入る。雁助は直しの荷を擔ぎ、三人、こなし、よろしく、入る。ト 出の唄になり、向うより、幇間二人、白地の帷子、肌など脱いで、投扇興の臺と、扇四五本持つて出て、花道よき所にて、向ひ合うて、扇を投げる。後よ

りお妻、酒に醉うたる體にて、お才に手を引かれ、出て來る。仲居のお銀、白傘さしかけ、お妻が鏡袋を持ち、出る。丹波屋惣兵衞、扇使ひながら、出て來る。後より助三郎も笠をかむつて出る。

帮一　こりや誰れより、おれがいつち上手。

帮二　よく味噌を上げるよ。モシ、お妻さん、ちつと參らうではござりませぬか。

惣兵　どうして、あれ程醉つて居るお妻、道中で投扇興が出來るものか。後の酒は醉ふから、扣へて呑めと云ふのに。

きん　今日はお才さんとの初見參。姉妹分のお杯ぢやと云うにな。帮間衆を呼んでの大騷ぎ。

さい　今日始めてのお近附きに、おしをらしう云うて下さんすお妻さん、わたしや眞の姉さんとも存じまする。

帮一　これから洲崎の呑み直し。

帮二　併し、危ないお妻さんの足元。

惣兵　マア、あすこで茶でも呑む事だ。お妻、危ねえによ。

つま　お忝け。旦那樣、お前の頼み、久しい馴染みの岩田屋の新子、近附きになれと云はしやんすゆゑ、内では氣が張るに依つて、山の松本で呑んだけれど、まだ醉はぬぞえ〳〵。丹波屋のお妻、この位な酒で醉ふのぢやない。ナウ、お銀どん。

きん　アレ、それ程醉うて居ながら、申し、旦那樣。

惣兵　ハテ、マア、なんであらうと、今日の旦那は此方のお妻。マア、あの床几へ。

帮兩　先づ入らせられませう。

つま　オヤ、モウ、否だよ。

トこの一件、殘らず舞臺へ來る。助三郎も一緒に來て下座に扣へる。

さい　モシ、お妻さん、もう御酒はよしになされまして、サア、爰で

惣兵　茶がよからう〳〵。

帮兩　今の勝負が附きません。大門屋より武藏屋で、投扇興々々。

つま　よからう〳〵。お銀どん、先刻の物を。

トお銀、呑み込み、帮間兩人へ、紙入れより出して、祝儀をやる。

帮兩　これは、ありが〳〵。モシ、お妻さん。

つま　ハテ、野暮な。ちつとばかり、笑うて下さんすなえ。

惣兵　コレ、酒を呑むなと、平常から云ふのに、聞き入れ

なう、パツ〳〵と困つた代物。
つま　それでも今日はお前のお許し。妹分のこの子が近附きの印。サア〳〵、又呑まう〳〵。
惣兵　大酒を呑む姉分を持つて、お前も末が思ひやらるゝ。時に、座敷の事も何もかも、兎角てめえがいゝやうに。
つま　アイ〳〵、承知して居まする。コレ、あの子や。先づ藝者商賣にするからは、第一が酒、二が色事、三が人にたんと金遣らねば、マア、深川では好い藝者にはなられぬぞえ。マア、色事の仕樣は、姉分のわたしが、お師匠樣にならうかいなア。
さい　存じ足らはぬ不束者、其許樣へ、よろしうお頼み申し上げまする。
ぎん　お才さんは堅い〳〵。
帮一　其許樣へお頼み申しまする、と云ふ臺詞廻しは
帮二　とんと濃野屋の若旦那。
ぎん　ほんにどこやら、傳藏と云ふ所もあるなア。
つま　ヨ、ヨ、濃野屋。
帮兩　ハヽヽヽ。
ト大勢、大笑ひ。
惣兵　呆れるワ。シタガ、いつも達者で勤めてくれるお妻、云ふのぢやねえが、おれが抱へた程がある。この丹波屋も、人に知られた芝居好き。
帮一　ツテツテンツントン。
ト口三味線云ふ。
惣兵　コレ、お妻、常からおれが寢起きにも、呑むな〳〵と云ふ酒、澤山呑んで其やうに、猩々にならんず下心。身の毛は至つて可愛らしいが、深川の水を呑んぢや氣が強い。
ト先幸四郎にて云ふ。
皆々　高麗屋ア。
惣兵　エヽ、大べら坊め。
ト此うち、二人の樣子を、つく〴〵見て居て、この時笠を取り
助三　ヤア、其方は。
トお才、助三郎を見て
さい　ほんにお前は。
ト立ちかゝらうとする。
惣兵　オヽ、二人ながら、知り人か。
さい　ハイ……イヽエ、サア、見知り越しのやうに
助三　オヽ、さうぢや〳〵。なんの近附きであらう。とん

と知らぬ他所の人。女の心と猫の鼻は冷たいとやら、さう云ふ心とは知らず、うか〳〵今日も尋ね歩き、足手かいさま來て見れば、あの彌助が居所は知れず、こりや、二人云ひ合せて、わしを突き出すのぢやな〳〵。

さい　なんのマア、わたしが心に、露芥子ほども、あなたを退けて

助三　なんの〳〵、いゝ口な事ばつかり。こりや、モウモウ、どうも。

ト立ちかゝらうとする。

惣兵　コレサ〳〵〳〵、ようごぜえす〳〵。知らぬ同志が其やうに、ぷり〳〵する事はないと云ふ所だ。よし〳〵、ようごぜえす、お妻や、ノ、ソレ。

ト仕方して見せる

でもあらうから。

つま　なんぢややら譯の知れぬ、お二人の素振り。旦那さん、こんなら大門屋へ。

ぎん　粋を通して、サア、ござんせ。

ト立ち上がる。

さい　アヽ、モシ、お銀どん、それでは

助三　オヽ、惡からう。大方その大門屋とやらに、色めが待つて居るであらう。

さい　どうしてマア、其やうな。

惣兵　ハテ、ようごぜえす。お才坊や、追ッつけ勘兵衛どのも見えるであらう程に、爰に待つて居て、一緒に大門屋へ來るがいゝ。

助三　イエ〳〵、矢ッ張り一緒に、連れてお出でなされませ。

惣兵　ようごぜえす。サア、お妻、お銀どん、ソレ、日傘を。

ぎん　アイ〳〵

ト傘を持ち、お妻の手を引く。

つま　そんならお才さん、後から。

さい　左様ならお靜かに

ト辭儀をする。

助三　イエサ、矢ッ張り一緒に。

惣兵　ハテ、ようごぜえす。

ト辻打ちになり、お妻先に、お銀、傘をさしかけ、惣兵衛、こなしあつて、下座へ入る。あと、楊弓の音になり、お才、もぢ〳〵して、莨を吸ひつけ、助三郎へ遣る。助三郎、あちら向く。この事よろしくあるうち

ト下座より、彌助、すた〳〵出て、この體を見て、後へ寄り、下の床几へ腰を掛ける。お才、こなしあつて

さい　モシ、助三郎さま、わたしがやうな身になりましたは、みんなあなたを思うてからの事。譯をお話し申さぬゆゑ、お腹立ちは無理ならねど

助三　イヤ〳〵、聞く耳はござりませぬ。そりや大方門違ひ。脇をお尋ねなされませ。

さい　そんなら、これ程に云うても

助三　聞かぬ〳〵、あんまり阿房らしい。其方の事が氣になつて、今日は彌助の所へ行て逢はうか、明日は行かうかと思へど、深切にしてくれる八郎兵衛、先づ當分は逢ひもするな、文も遣るなと遠慮勝ち。逢はれぬ事なら、せめて文なと遣らうかと、コレ。

ト懐より出して

此やうに書いてはあれど、なんの心變りのしたおのれ、文を見ても腹が立つ。

ト封を切り、我が手に、ずん〳〵に引裂き

斯うして〳〵。

トぐる〳〵と丸め、お才へ投げつける、彌助、惘り、その文をソツと拾ひ、懐へ入れる。

さい　そりやわたしも同じ事。逢ひたいと懐かしいで、ついぞ覺えぬ胸先へ、癪とやら云ふもの覺えたも、あなたが戀しいばつかりに、心を籠めた、コレ。

ト文を出し

此やうに屆けるばかりにしたなれど、あなたがさう云ふお心なら、わたしも斯うして

トずん〳〵に引裂き

つツとモウ、腹の立つ。

トぐる〳〵と丸め、助三郎へ打ちつける。また彌助、上の方へ行き、拾ふ。

助三　コリヤ、おのれ、男に投げ打ちし居つたぞよ。

さい　アイ、投げ打ちしました。

助三　もう料簡がならぬわい。

さい　と云うて、どうなされます。

助三　どうするとは、斯うするわい。

ト兩方より立ちかゝる、此うち彌助、床几にある莨盆、茶碗などを片附け、ウロ〳〵して、あちこちとする。この時中へ入り、双方を留め

彌助　どつこい〳〵、待つた〳〵。よい仲の戀いさかひ、犬も喰はぬぞ。待つたり〳〵。

助三　彌助か。留めるな、退け〳〵〳〵。
彌助　退かぬ〳〵。
さい　彌助、放してたも〳〵。
彌助　イヤ、たもらぬ〳〵。コレ、お二人ながら氣を鎭めて、彌助が申す一通り、お聞きなされませ。
ト合ひ方。これにて助三郎、こなし、後へ寄る。お才もこなし。
成る程、助三郎さまには、譯を御存じないゆゑ、お腹の立つは御尤もだが、モシ、可哀やお才さまは、お前ゆゑには幾世の御苦勞、お國を一緒にお立退きなされても、江戸は物見高い土地、お二人一緒に置きましては、お上屋敷への聞えもあり、花町河岸の古手屋八郎兵衞どのと相談して、あなたは古手屋の知るべの方へ身を忍び、お才さまは私しが、しつかりとお預かり申しまして置きましても、互ひに心さへ變らねば、いつ何時、おめでたにお逢ひなさる事も
助三　サア、その心が變つたゆゑに
さい　變らぬと云ふ譯も聞かず腹立てゝ、そりや胴慾ぢやわいなう。
ト泣く。

助三　なんぢや、胴慾ぢや。おのれが胴慾ぢや。コリヤ、ヤイ、この助三郎はな、大切なる三光の正宗を預かりながら、紛失させし越度にて、縛り首にも遭ふべきところ、殿のお慈悲に命全う、親人の勘當請け、お國を追放、江戸表へ上つても、賴りない身を忍び、刀詮議に心を碎く其うちにも、其方の事が案じられ、朝夕忘れた事はないに、おのれはマア、この深川の藝者奉公。ソレ、其やうに着飾つて、榮耀らしう。心の腐つた女に、詞交すも腹が立つ。腹が立つわいやい。
さい　サア、わたしが仲町へ身を賣つたは、お前の爲に。
助三　ナニ、わしが爲とは。
さい　コレ、これが上げたいばつかりに。
ト財布に入りし金を、出して遣る。
助三　こりや金。餘程の事ぢやが、どうしてこれを。
彌助　サア、その譯は私しが、掻いつまんでお話し申しませう。私しが元はと云へば、お才さまの親御、關口孫太夫さまに、幼少より御奉公、足輕まで經上がりましたが、其うち母には死別れ、今は手薄い駕籠舁き。イヤ、身の上の事は後廻し、お國で紛失いたしました、三光の正宗ゆゑに、あなたは御流浪。この難儀を一日も早う、お助

け申したけれど、手懸りとても知れぬ刀。もし質物に入れはせまいかと、質と云うても慥かに大枚の金高、工面どうかと案じるうち、お才さまの仰しやるには、せめて足しにはなるまいが、賤しい勤めに身を賣つて、その身の代をあなたへ上げ、御歸參がさせましたいと、しをらしいお心を、もどくは却つて深切が、不足になると思ひ詰め、あなたへ相談したればとて、御得心はあるまいと、お才さまと二人して、相談しての藝者奉公。その金もお才さまの手より、助三郎さまへお渡しなさるが身の潔白と、今日まで待つた甲斐あつて、お逢ひなされた今の仕儀。ハテ、刀さへ取戻し、御歸參なされば、お才さまは立て金して、身請けはいつでも埒の明く事。様子と云ふは、この通りでござりまする。

助三　誠に昔を忘れぬ、彌助どのゝ貞實、お才が貞節。助三郎、盡未來際忘れは置かぬ、忝ない。

彌助　そんなら、お得心が參りましたか。

さい　わたしに疑ひ晴れましたか。

助三　晴れいでなんとせう。女房とは思はぬ。コレ、拜んで居るわいの。

ト手を合す。

さい　モシ、勿體ない。わたしに罰が當ります。そしてマア、女房とは思はぬとは、そりやあなた

彌助　オツと、解りました。後は云はずと、久しぶりのお二人様、積る話しはどこぞで。オヽ、あるあるこの茶屋の二階を借りて、ちやつとお出でなされませ。

助三　ぢやと云うて、近附きでもないこの茶屋へ。

彌助　ハテ、そこはわしが呑み込んで居りまする。

さい　そんなら行ても大事ないかや。

彌助　なんの大事がござりませう。善い事には寸善尺魔、世間構はずゆつくりと。

さい　申し、助三郎さま。

ト手を取る。

助三　重ね重ねいかいお造作。

彌助　お禮で痛み入りまする。ハヽヽヽ。

ト唄になり、お才、助三郎が手を引き、東の門の内へ入る。彌助、こなしあつて

吉良のお家では一二を爭ふ、柏木助太夫さま、關口孫太夫さま。その御子息にお娘御、移れば變る今の身の上、人間の一生は七轉び八起きとやら、今にも寶が手に入れば、直ぐに御歸參。それに引替へおれが身は、七轉び八

轉び、起きる瀬の當てはなし。斯う轉びづめたらば、駕籠舁きよりは藝者になればよかつた。

ト此せりふのうち、床几に腰を掛け、叺煙草入れより、煙草をのむ。煙草、粉にて、雁首にてすくひ／＼のみながら

こいつア、煙草が船間だ。錢はなし、生憎にぐび／＼するほど呑みたいが、よし／＼。

ト立ち上がつて

モシ、辨天さんえ、御無心ながら十六文、ちやつとお貸しなせえ。今に大門屋の客を持ち出すと、酒代で直にお返し申しやす。ハイ／＼、お易い御用とは痛み入つた御挨拶。お詞に甘えて遠慮なしに、ハイ／＼。

ト神前へ上がり、そこらのみだけな、一文づゝ拾ふ。この時、下座より、太平次、文藏、出て來て、悄りして

文藏　ア、コレ／＼／＼、理不盡な。そちやなんで、その賽錢へ手を掛ける。

太平　コレ／＼、滅法界な。賽錢を盜んで、罰が當るぞ。

彌助　大きにお世話。お茶でも上がりやれ。

ト鼻であしらひ、構はず拾ひ／＼、十二銅のお捻りを取り集める。兩人、氣を揉み

文藏　待て／＼／＼。そちやなんで、賽錢を取り集める。

彌助　わつちやかえ。別當樣に頼まれて、粗末にならないやう、今日は巳待ちでお參りも多し、大事に番をしろと、云ひ附けられて集めるのサ。

太平　待て／＼／＼。聞えた／＼、尤もだが、その賽錢には、ちと曰くがある程に、待つてくれ／＼／＼。

彌助　ナニ、賽錢に曰くがあるものかな。オヽ、こりや洒落た十二銅だ。箱の角にちよい上がりだな。

ト以前の賽錢十二銅を取つて、箱へ入れようとする。

文藏　コリヤ／＼／＼、その賽錢買はう。サア、買はう程に、賣つてはくれまいか。

彌助　變つた事を云はつしやる。僅か十二文のお捻りを買ふとかえ。

文藏　オヽ、いくらでもよい、身共大信心。辨天の賽錢を買へば、立身出世と云ふ事だ。いくらに賣る／＼。

彌助　そりやハヤ、信心で御祈禱になる事なら、賣つてもあげようが、いくらかくらと相場はなし、マアいくらに買ひなさる。

太平　待てよ、十二銅のお捻りだから、倍にして百二十四

彌助　文に買はう。
　ナニ、十二文を百二十四文とかえ。ト思ひ入れあつて、ちやつと捻くり廻し、心附き、ハヽア、と云ふこなし。
文藏　倍增しではちと相談が、なり憎いわえ。
彌助　こんなら二百五十。
文藏　途方もない。この十二銅で、どんな立身出世をせうも知れねえ。それを二百五十とは、ふてらつこい人だ。
彌助　そんならグッと附け上げて、二分だ。二分なら賣つてもよからうが。
文藏　イエ〳〵、まだ〳〵話しが解らねえ。たつた二分とは押しの重てえ。
彌助　そんなら三分。
文藏　押しの重たい。重た增し〳〵。
太平　重た增しなら二朱上げて、三分二朱。
彌助　まだ〳〵〳〵。
文藏　イヽワ、グッとはずんで丁度に買はう。小判一兩。
彌助　一兩かえ、まだコレ値賣りのなりさうなお捻りだが、長い事は御意屈。此方もはずんでまけてやらう。
文藏　アノ、一兩で賣つてくれるか。
彌助　そこは江戶ッ子、いさくさなしだ。
兩人　エヽ、有り難い。
彌助　サア、前錢〳〵。
文藏　オッと、承知だ。
　ト此うち始終、彌助は正面神前へ上がり、賽錢箱へ腰を掛けて居る。文藏、太平次は上下に分れて居る。この時、文藏、懷中の紙入れより、小判一兩を出す。太平次も文藏に立ちかゝるうち、彌助、お捻りの手紙を取つて、最前助三郎とお才が引裂き捨てたる文殼にて十二銅を包み直し、斜に構へる。文藏、彌助が側へ來て
文藏　四文錢でもある事か、たつた十二銅を、一兩で買ふとは、うろたへた辨天さまも御存じあるまい。
　ト一兩と十二銅とを取替へ、文藏、頂いて、懷中する。
彌助　コレサ、ばゞアは云はねえものだ。これが又一兩でその身の出世を買ふなら、世界にこれ程廉い物はあるめえによ。
太平　出世か出家か知らねえが、うぬはマア、丸儲けにした、小判一兩。酒でも買へサ。
彌助　お忝け。まだこの上にお前方の、奢りをちよつと突

ッ込む氣サ。

文藏　押しの强い。ほんに、わりやお釜を起したな。

彌助　アイサ、いらぬお世話、お構ひでないよ。

文藏　おきやアがれ。

太平　文藏さま、なんの事だ。今の酒は醒めるし、まん直しに

文藏　また二朱も切り込まうか。

彌助　〆子の兎だね。お供しやせう。

文藏　厚かましい。いらぬお世話。

太平　お構ひでないよ。

彌助　おきやアがれ。

ト辻打ちになり、兩人、腹立てるこなしにて、下座へ入る。彌助、殘つて

なんでもこいつが、物になりさうな手紙の片割れ。これを一兩に買ふからは、彼奴等に附き纏つて、もつと錢儲けをせにやアならねえ。ドレ、莨を買つて來ようか。

ト辻打ちにて、下座へ入る。この鳴り物にて、向うより岩田屋勘兵衞、夏衣裳、羽織にて、菅笠を冠り、出る、後より古手屋八郎兵衞、夏衣裳、菅笠を冠り、出て、花道にて

八郎　そこへござるは、岩田屋の勘兵衞どのではござらぬか。

勘兵　オヽ、八郎兵衞さん、お前も今日は、巳待ちで辨天へか。

八郎　イヤ、わしはこなさんに、ちと話しがあつて、內へ寄りましたが、今日は洲崎へと聞いたゆゑ、わざ〳〵爰まで後を追うて。

勘兵　それは大きに、暑いに御苦勞。話しとあれば、あの床几へ。

八郎　サア〳〵。

ト矢張り鳴り物にて、兩人、舞臺へ來り、床几へ掛けて

勘兵　時に八郎兵衞さん、話しと云ふは、なんぞ氣遣ひな事ぢやござりませぬか。

八郎　イエ〳〵、そんな事ぢやこざりませぬ。こなさんの抱へ、お才の事で。

勘兵　お才の事とはえ。

八郎　サア、あのお才が事は、兄と云ふでもなし、また從兄弟と云ふでもなけれど、ちと據ろない人がある。その人へも相談せずに、アノ、閻魔堂橋の彌助と相談して、

こなさんの方へ遣りましたが、どうも長らく勤めもさせ憎し、義理の缺ける事もあるゆゑ、どうぞ立て金して、お才を此方へ引取りたいと思ひますが、急に相談が出來ませうかな。

勘兵　そりやハヤどうなりと、ならぬ事もござりませぬが、お前も知つての通り、屋敷で年は丁度よい恰好、器量に於ては云ひ分なし、氣に入つた奉公人ゆゑ、何がなしに八十兩で取りましたが、内へ連れて戻ると、左樣然らば三つ指で、日暮れになると片隅へ寄つて、思ひ出しては泣き、傍輩の子供と、何か話しをしては、めそ〳〵泣いてばつかり、大概の事なら相談しませうかい。

八郎　それは千萬忝ないが、まんざらこなさんに損もさせられまい。マア、どの位にして下さる氣ぢや。

勘兵　なんの、外ではなし、お前なりわたしなり、まんざらな事もなりますまい、八十兩で取つた奉公人、カウツ、何かなしに百兩サ。

八郎　モシ、それでは、ちつと金が張るではござりませぬか。

勘兵　どうして〳〵、わしに如才はござりませぬ。この間も小濱屋の客人が、年季を買ひたいやうにも云つて、云ひ込んであるが、こなさんがそれではと思ふ氣なら、こちらも急な相談ゆゑ、ハテ、可哀さうに、あの子もまだ年は行かず、他人の中へ遣らうより、お前の方へ遣りやわしもよし、あの子は猶よし、と云ふものだ。が、これもいゝ、それとの相談づくさね。ハヽヽヽヽ、慾張る奴サ。

八郎　そんなら外に、身請けせうと云ふ客が。

勘兵　こちらへやれば、まだ〳〵話しに、花の咲く事もござりやすて。

八郎　ようござります。成る程、百兩に極めませうが、モシ、岩田屋の。なんと斯うしては下さるまいか。マア、爰に金が三十兩あるが、これを取つて後金は、來月中頃まで待つては下さるまいか。

勘兵　イヤ、滅相な。そりやむづかしいわだ。こちらへ遣れば猿が餅、おどけた事だが、柿の種と結びと來て居る。それだに依つて

八郎　そんならどうぞ、十日時分まで。

勘兵　でなければ出來ませぬか。そんなら斯うサ、今爰で三十兩、手附けを受取つて、後金七十兩は、當月二十八日まで待ちませう。

八郎　エヽ、忝ない〳〵。そんなら後の七十兩、今日は

勘兵　二十八日、明後日の晩まで。

勘兵　アイサ、日限りが切れると、不愛嬌に外へ相談しますぞえ。

八郎　どうして、外へ遣られぬ大事の身請け。サア、三十両渡しませう。近しい仲でも金の受取を。

勘兵　そりや仰しやらいでも、これが第一の發端と云ふものだ。

ト八郎兵衛、胴巻より金を出す。勘兵衛は矢立を出して、手附けの受取を書く。

八郎　手附けの金、三十両。

勘兵　ソレ、受取。二十八日までゞござりますぞえ。

ト互ひに改め、懐へ納める。

八郎　ようござります。どうぞお才に、ちよつと逢つて行きたいものぢやが。

勘兵　先刻、内を出ましたが、丹波屋のお妻と一緒に、大方大門屋に。

八郎　そんなら、お妻も來て居りますか。

勘兵　ヨウ〳〵、お妻と聞いて、おつきな顔をするな。

八郎　なんの勘兵衛さん、じやら〳〵と。

勘兵　ハヽヽヽ。ドレ、お才を寄越しませうか。

ト辻打ちになり、勘兵衛、こなしあつて、下座へ入る。八郎兵衛、残つて、こなし、莨のみ居る。この鳴り物にて、向うより矢島勇藏、夏衣裳、羽織、袴、大小、深編笠にて、出て來て、直ぐに本舞臺へ來り、八郎兵衛を見て

勇藏　それに居るは、古手屋の八郎兵衛ではないか。

ト云ひながら、笠を取る。

八郎　ヤ、あなたは吉良の御家中、矢島勇藏さま。先づは御健勝に居らせられまして、重疊に存じ奉りまする。

勇藏　其方も無事で、重疊々々。さて其許を訪ね、面談いたしたい儀もあれば

八郎　何か御用とござりまする。先づ〳〵これへ、お掛けなされませう。

勇藏　然らば許しやれ。

ト合ひ方。床几へ掛ける。八郎兵衛、莨盆を出す。

八郎　して、御用の趣きは。

勇藏　別の事でもない。この度お家の騒動は、詳しう承知いたし居らうが、改めて申すではなけれど、柏木助三郎お預かりの三光の正宗、何者とも知れず盗み取り、行くへ知れず。その越度にてお国を追放。然るに御親父助太

夫どの御夫婦は、二とない辛勞。若輩者の助三郎、古主の恩義を忘却せず、世話いたす由、兩親の喜び、一家の勇藏、猶以て祝着仕る。

八郎　これは〳〵、恐れ入りましたる御挨拶。ナニ、これしきのお世話申したとて、古主の御恩に比べては、九牛が一毛。何卒右紛失の刀、捜し求むる手懸りを

勇藏　氣遣ひ召さるな。よい手懸りが手に入りましたて。

八郎　ナニ、紛失の刀の手懸り、相知れましたか。

勇藏　如何にも。その手懸りと云ふは、同家中梶岡文藏、日頃佞奸邪智の惡者。御用人關口氏の息女お才どのへ戀慕いたし、類を以て友を集むる若侍ひ。媒介と號し、夫婦に申し入れたるところ、兩親は元より、お才どのも不得心。然るに寶の一腰預かりの、柏木助三郎へ心を通じある由、妬ましく思ひ、全く彼奴が仕業とは推量すれど、これぞと云ふ手懸り無きところに、彼れが召使ひ雁助と云ふ者、右の刀紛失の砌りより、國遠なして行くへ知れず。猶々以て不審に存ぜしに、當月初旬、何となく屋敷へ來り、詫びを願ふ由。彼奴引ッ捕へ拷問なさばと、騙し寄つて問ひかくれば、詞の轉倒。正しくこれぞと、手を下ろし、懷中を詮議すれば、怪しき密書、引取らんと存ぜしに、彼奴もしれ者、一生懸命引き合ふはずみに引き切る密書。中よりちぎれて前文は、コレ、この通り。

ト懷中より出して見せる。八郎兵衞、讀んで

八郎　こりやコレ、一腰を質入れして、八十兩受取つたる質屋の書狀。

勇藏　サア、その後の宛名は、下部雁助所持なせば、何卒彼奴を詮議仕出し、重き罪科に身を苦しめ、白狀させなば早速に、刀の在所は知れる道理。八郎兵衞、これを以て助三郎が歸參の手蔓。頼むは其方ならで外になし。古主の恩義を思はゞ、ナ、合點が行たか。

八郎　畏まりました。例へ宛名は手に入らずとも、この手蹟にてそのもより、尋ね捜して相知れませぬ事はござりますまい。

勇藏　早速の承知、滿足〳〵。猶も頼み入りたきは、身共は江戸表の御用、當月中に相片附き、來月初旬には歸國いたす間、何卒來る二十八日までに手懸りを求め、一腰の質請け、金高は八十兩、手廻らぬ儀もござらば、袖ケ浦の屋敷まで、早速申し越しておくりやれ。

八郎　段々の御厚情、委細畏まりました。八郎兵衞、命に替へましても、來る二十八日までには

勇蔵　すりや、日限りも御承知とや。しかと左様か。

八郎　實の父母を、奈落へ落す法もあれ。

勇蔵　ハツア、武士も及ばぬ八郎兵衛どの、勇蔵、兩手を突いて御禮申す。

八郎　これは〳〵、畏れ多い、お手上げられませい。

勇蔵　この事お頼み申さんばかり、わざ〳〵參つた某。最早これにて。

八郎　もうお歸りなされますか。途中でお茶さへ。

勇蔵　イヤモ、何より勝る貴殿の心腹。

八郎　左様ならば勇蔵さま。

勇蔵　お宿へよろしう。

ト唄になり、八郎兵衛、ハツと手を突き、辭儀をする。勇蔵、こなしあつて、向うへ引返し、入る。この唄のうち、東の門の内より、助三郎、お才、出て來り、腰を掛けて居る八郎兵衛の左右より、下に居て

助三　なんにも云はぬ、八郎兵衛、様子は詳しう聞きました。

さい　並々ならぬ眞實を、聞けば聞く程、なんと禮を云はうやら、手は合はされど心では、ほんに拜んで

兩人　居るわいなう。

ト拜む。此せりふのうち、八郎兵衛、これはしたりこれはしたりと、迷惑のこなしあつて

八郎　これはしたり、お前方二人して、私を拜ながらして。そしてマア、助三郎さま、いつの間にこの所へ。

助三　サア、わが身にも隱し、今日爰へ來たは、お才が事、あんまり音信せぬゆゑに、あの彌助が内へ行たれば、内は錠が下りてあるゆゑ、向うの内で問うたれば、今日は洲崎の辨天へと、聞いたに依つて、お才に逢ひに來はせぬけれど、彌助に逢ひたさに。

八郎　なんの彌助でござりませう。心は矢ツ張りお才さまに。

助三　なんのマア、さうした譯では。

八郎　サア、ようござりまするが、お才さま、あなたのお身の事を。

さい　これもみんな彌助の世話で、あの二階を借りて、詳しうお話し申したわいなう。

八郎　そんなら若旦那にも、御承知でござりまするか。

助三　段々の入り譯、詳しう聞いて、身の代の八十兩も、最前受取り、コレ、爰に。

ト見せる。

八郎　それで先づ落ちつきましたが、落ちつかれぬは刀の手懸り。只今勇藏さまより、受取りました密書の片割れ。この宛名の片割れを。
彌助　モシ、八郎兵衛さん、その密書の片割れは、慥かにこれぢやござりませぬか。
　ト ちやつと茶店より出る。
八郎　オヽ、彌助どん、この密書の片割れとは。
彌助　ソレ、讀んで見さつしやりませ。
　ト 八郎兵衛、勇藏より受取りし手紙を開き
八郎「お手紙拜見仕り候ふ、然ればこの度、火急に金子お入用に就き、お家御重代三光の正宗一腰を以て、金百兩御用立て候ふやう、御書面には御座候へども、思し召し通りには相成り難く、即ち金子八十兩、御家來彌助どのへ相渡し申し候ふ」
彌助「尤も書状へ印形仕り、此方帳面とも押切り判いたし、差上げ候ふ間、御請け戻しの節は、御自身お出でなされ候ふとも、お使ひにても、この書面御持參下さるべく候ふ、その節異議なくお渡し申すべく候ふ、念の爲斯くの如くに御座候ふ、以上、月日、梶岡文藏さま、深川佐賀町、伊勢屋太郎右衛門、判」

八郎　しつくり合うた密書の文言。質屋は佐賀町、伊勢屋太郎右衛門。
彌助　質入れ高は八十兩、お才さまの身の代も、しつくり合うた八十兩。
助三　二人の衆の深切も、お才が實義も一時に、再び手に入る寶の一腰。
さい　念が屆いて御歸參の、手蔓も二人の厚い世話。
八郎　ちつとも早くこの手紙、持つてさへ行くならば、渡さうと、質屋の印形。
助三　せめてはわしがその質屋へ、佐賀町なれば道も近し。
彌助　わしも別當樣へ、用事のあるこそ丁度幸ひ。仲町通りは人目立つ。中木場から佐賀町へ。
八郎　彌助、道まで見送つて。
彌助　心得ました。
助三　八郎兵衛、お才、行て來うぞや。
さい　あたふたして、怪我なさんすな。
八郎　靜かにお出でなされませ。
助三　合點ぢや。
彌助　サア、面白くなつて來たわえ。
　ト 唄になり、助三郎、先に、彌助、附いて、下座へ入

る。八郎兵衛、お才、残る。

さい　八郎兵衛……ではない、さん、助三郎さまの御歸參も叶ひ、めでたうお國へござんしたら、わたしが事もよいやうに。

八郎　そりやお氣遣ひなされまするな。最前親方勘兵衛どのにも逢ひまして、立て金の相談して置きました程に、きな／＼案じぬがようござりまする。

さい　そんならわしが身の上も。

八郎　二三日のうちには、キッと埒を明けますわいの。

さい　エヽ、嬉しや。さうなつたら、わしや直ぐに助三郎さまと一緒に。

八郎　左樣いたしませいでは。

ト此うち、お才、癪の差込む思ひ入れ、苦しむ。八郎兵衛、見て、仰天し

ヤヽヽ、なんとなされました／＼。

ト介抱する。

さい　イヽヤイナウ、嬉しやと思うたら、どうやら胸先が

ト胸を押へて、苦しみ

アイタヽヽ。どうぞ、湯でも水でもあるならば

八郎　ハイ／＼、ござります／＼。

ト茶店の湯を汲んで來て

ソレ／＼、氣をしつかりとお持ちなされませ。サア、湯を一口あがりませ。何やかやのお心遣ひで、お癪が起つたも。ドレ／＼、押へてあげませう。

ト後より、脇腹を押へて、介抱する。この以前、お妻、出かゝり、見て居て、ムッとするこなしあつて

つま　ハイ、お邪魔ながら御持病の、お見舞ひでござりますでござんす。

ト介抱して居る八郎兵衛を突き退けて、中へ入る。八郎兵衛、恟り。お才、胸先を押へながら、堪へ居る。

八郎　オヽ、お妻か。なんぢや、きよと／＼しい。

つま　ハイ、きよと／＼しうござんせう。アイ、わたしよりはお前のその顏、恟りして、きよと／＼しい。

八郎　なんぢや／＼、お妻、また持病の虫が起つたな。

つま　ハイ、起りました。これが起らいで居られうか。新子だてら、アタ嫌らしい、アタしつこい。癪が起つたのなんのと、これで最前のお方が云はしやんした事が知れた。彼の色めが大門屋に、待つて居るであらうと悋氣づくし。今までの男を捨てゝ、大事の大事のわしが男を、ようも／＼取りくさつたのぢやな。

さい　コレ、お妻さん、そりや大きな間違ひでござんすぞえ。

つま　なんの〱、云ひ譯、聞きともない。よう知つて居る。先刻になんと云うた。そんならわしが身の上も、オオ、二三日のうちには、キツと埒を明ける、嬉しうござんすとは、なんの事ぢや。

さい　サイナア、そりや、アノ。

八郎　アヽ、コレ〱、なんにも云ふまい。云うてよければおれが云ふ。

つま　云ふ筋があるならば、云はんせ、聞かう。

八郎　オヽ、云うて聞かさう、高が斯うぢや。岩田屋の店から出る、新造のお才、惚れたに依つて身請けするのぢや。お妻、さつぱりとした挨拶であらうがな。

つま　成る程、立派な御挨拶でござります。さう聞いては猶ならぬ。退いてもらはう〱。

八郎　退いて欲しくば、われから先へ、退いてやらうワ。

つま　イヽヤ、あの子を退かさにやなりやせぬ。

八郎　なつてもならいでも退かして見せるワ。

つま　どうして退くのぢや。

八郎　斯うするのぢや。

ト　お才が側へ寄らうとする。

つま　アタしつこい。側へ寄せる事はならぬわいの。

ト引退ける。

八郎　何を此奴が。男を捕へて

ト立ちかゝらうとする所へ、奥より、お銀、出て

ぎん　モシ〱、お妻さま、旦那様がちよつと來い、早う呼んでくれと急いでぢや。早うござんせいなア。

つま　アイ〱、今參りますと云うて下さんせ。

ぎん　今では濟まぬわいの。わたしと一緒に、サア、ござんせ。

ト無理に引ッ張る。よんどころなく、お妻、お銀に引摺られ、入る。

八郎　モシ、お才さま、彼奴が悋氣は持病で、平常の事、茶漬食ふよりは手輕う思うて居りまする。何も案じる事はござりませぬ。

さい　それぢやてヽ、お妻さんに、委細の譯を。

八郎　滅相な。七人の子は生すとも、女に肌を許されぬ世の譬へ。脇から漏れても、ついお妻が口からでも漏れたやうに思はれては、お身の爲にならぬ。それぢやに依つて、どこまでも

さい　なんのマア、わしが身の上、打明けて云うたとて、其方に繋がるお妻どの、よもや外へ話しする事でもあるまいわいの。

八郎　サア、わしも左様は存じますれど、御主人助三郎さまに繋がるあなた、なりや私しが爲には矢ッ張り御主人。それを世話すると云ふ事が知れては、お前は勿論、助三郎さまの、お身の害になりまする。お妻に限つて、さう云ふ事の、ないと云ふは知れてはあれど、そこが石の物云ふ世の中。大事の事、隱す事は、マア、どこまでも人に聞かさぬが、お二人樣のお身のお爲。それはさうと、あなたの身請けの金の催促、こればつかりが

ト思案する。この前より、お妻、出かゝり、樣子を見て居て、この時、締め泣きに泣く。八郎兵衞、お才、悄り。

つま　ハア、。

八郎　ヤア、お妻、そんなら今の樣子を、先刻にから

つま　聞いて心が晴れました。お才さま、八郎兵衞さん、堪忍して下さりませ。

ト そこへ出て、面目なきこなし。

八郎　どうしたものぢや。お主も素人のやうに、悋氣も大概人を見てしたがよいわい。

つま　サイナア、それぢやに依つて、わしが悪かつたと、あやまつて居るぢやないかいなア。

ト八郎兵衞、思案しい〳〵

八郎　カウッ、こちらの口で、二十兩は心當てもあるが、それではどの道、話しにもかゝらず。ハテ、どうしたものぢやらう。

つま　コレイナア、八郎兵衞さん、その金の事は、どうなとならうわいな。

八郎　どうなとならうとは、心當てがあるか。

つま　あるに依つて、どうなとならうと云うたのぢやが、もし間違うたら、アノ

八郎　アノ、とは。

つま　アノ、とは、父さんに呑み込ませ、例へわたしが年を切り増しても、出來ぬと云ふ事はない程に、必らず案じなさんすないなア。

八郎　そんなら其方、工面して

つま　お前の爲にお主なら、わたしが爲にも、矢ッ張りお主ぢやないかいなア。

八郎　そりやさうぢや。

つま　ぢやに依つて、この身をどのやうに苦しめても、男の爲にする苦勞、樂しんで居るわいなア。
八郎　そんなら必らず、頼んだぞや。
ト この時、下座より、船頭、走り出て
船頭　モシ、お妻さん、靈岸島の露遊さんが、粂本までござつたところ、洲崎と聞いて、わざ〳〵小舟で、大門屋へお出でなされました。ちやつとお出でなされませ。
つま　アイ〳〵、今そこへ行くわえ。
船頭　今そこへぢやア、また例の癇癪が恐ろしい。わたしと一緒に、サア〳〵、お出でなされませ。
つま　アイ〳〵。モシ、八郎兵衛さん、まだ外に用もござんす程に、晩には粂本へ。
八郎　オヽサ、合點だよ。
さい　そんならお妻さん、わたしや一緒に先へ歸りますぞえ。
八郎　そんならお妻。
ト 花道へ行きかゝる。
つま　アイ。モシ〳〵、八さん、まだ外に用が
八郎　あるか。
つま　サア、あるやうであつたが、アノ、なんぢややら。
八郎　何を云ふのぢや。
船頭　サア、お妻さん、早く。
つま　サア、行くわいな。
ト 行きかゝる。
八郎　お妻〳〵。アノ、わが身は、今夜、粂本ぢやの。
つま　アイ、粂本で待つて居るぞえ。
八郎　アノ、粂本。粂本ぢやの、よし〳〵。
ト 行きかゝる。
つま　モシ、八さん。
ト 呼びかける。八郎兵衛、立戻つて
八郎　なんぢや〳〵。
つま　粂本ぢやぞえ。
八郎　オヽ、粂本、覺えて居る。
つま　そんなら晩に
八郎　承知々々。
ト 辻打ちになり、お妻、八郎兵衛を見返り見返り、船頭を連れ、下座へ入る。この鳴り物にて、向うより、利倉屋佐次兵衛、木綿一重物、古帶、少し老けたる拵らへにて、手拭を冠り、出て來る。奥より、太平次、出て、舞臺にて行き合ひ

太平　ア、コレ〳〵、手拭で顔は見えぬが、慥かにこなさんは、佐次兵衞ぢやないか。

トこれにて、佐次兵衞、振返り

佐次　オ、、太平次さまか。

太平　ナニ、太平次さまかもすさまじい。いゝ所で逢つた。この間貸した二十兩の金、ありや、どうするのぢや。

佐次　どうするもので、借りたに依つて借りたのぢや。貸したに依つて貸したのであらうかい。

太平　イヤ、わりや、おれをちよぼくるのか。貸したに依つて貸したとは、なんの事だ。ほんに借りる時の地藏顔、濟す時の閻魔顔と云へど、返しもせずに、その面はなんだ。モウ〳〵、料簡して〳〵、しぬいた上だ。逢つた時に笠の臺、飛ばないやうに用心しろ。

ト羽織を疊み、肌を脱ぎ、尻を端折る。

佐次　コレ〳〵、太平次さん、身拵らへして、どうするのだ。

太平　どうするものだ。二十兩と云ふ金を、返せばよし、四の五の吐かしやア、捻り殺すのだ。

ト草履を取つて、腰へ挾む。

佐次　ア、、コレ〳〵、太平次さん、短氣をしまい。早まるまいぞ。

太平　早まるなとは、金があるか。

佐次　サア、その金があるなら、ナニあやまるもので。これには段々譯はあれど、くだ〳〵云うても聞入れまいが、斯うぢや。いづれ四五日のうちには持つて行く。間違つたら、もう四五日のところを。

太平　イヤ〳〵、そんなぬらりくらりの云ひ譯、聞き飽きた。貸した金だに依つて取るのだ。サア、二十兩、耳を揃へて爰へ出せ。

佐次　これは又、無理も大概程がある。それこそ比丘尼に何とやらぢや。

太平　この親仁め。洒落どころぢやない。返しやアがれ。

佐次　返す金は無えよ。

太平　無えと云つて、無えにするものか。無けりや斯うして取るワ。

佐次　なにを。

ト摑み合ひになる。辻打ちにて、下座より、助三郎、三光の刀、鮫鞘の一腰を抱へ、走り出て來る、佐次兵衞、見て、もう叶はぬと云ふこなしにて、助三郎が持ちたる一腰を、引き拔き、太平次を一太刀あびせる。

太平次、ウンと轉ける。佐次兵衛も其まゝ轉んで、うろたへる。助三郎、恟りして

助三　ア、、コレ〳〵、その刀は大切な

ト佐次兵衛、起き上がつて

佐次　コレ、なんにも云ふまい。怖い事はない。人殺しはおれだ。命は疾から投げ出してある。聲立てると、こなさんも、懸り合ひぢやぞ。

助三　アイ、、、。

ト慄へる。

佐次　それが嫌なら、誰れも來ぬか、あたりへ心を附けさんせ。一思ひに止めを刺すのぢや。氣を附けさんせ、氣を附けさんせ。

助三　ハイ〳〵〳〵。

ト慄へながら、ウロ〳〵して居る。此うち、佐次兵衛、太平次が脇差と目釘を抜き、身を入れ替へ、手早くして

佐次　コリヤ〳〵、人の見ぬうち早く〳〵。

助三　ようござりますか〳〵。

佐次　ハテ、よいてや〳〵。早く行かんせ。

助三　有り難うござりまする。

ト一腰を抱へ、一散に向うへ、走り入る、佐次兵衛、こなしあつて、小聲になり

佐次　太平々々。

太平　よしか〳〵。

ト起き上がる。

佐次　妙々。

太平　まんまと。

文藏　首尾は。

ト文藏、出る。

佐次　モシ、お望みの三光の正宗。

文藏　手も濡らさず、エ、、忝ない。

太平　ぴつしより汗になるやつサ。

文藏　イヤ、二人とも、出來た〳〵。あれで見たが、誠にほんまの事と見えた。

佐次　そこらは又老功で、立師に立師が寄つたものだから。

太平　イヤ、ヒラリと抜いた所は、實恟りしたやつよ。

ト此うち、文藏、抜身を、太平次が鞘に、差しても差しても、嵌らず、いろ〳〵して見る。

佐次　時に文藏さまえ、その三光の刀を、急に入用と仰しやる譯は。

文藏　イカサマ、太平次は知つても居やうが、佐次兵衞、お主は知るまい。斯う云ふ譯ぢや。あのお才から起る事、助三郎めを罪に落す爲の正宗、質屋の手紙を引上げられ、お才が身の代で質請けされ、助三郎が手より殿へ上げれば、これまで骨を折つた身共は鼻毛。そこであの一腰を此方へ引き上げ、身共が手より差上げれば、助三郎はいよいよ重罪。さうなればお才を身請けして、おれが宿の花と眺める趣向。なんときついか、孔明であらうが。

佐次　成る程、恐れ入つたもの。惡い事にかけては、五分も拔け目はござりませぬ。

太平　モシ、それはいゝが、拔身で持つては居られますまい。なんぞ替へ鞘が。

文藏　成る程、これではどうも。

佐次　モシ〳〵、ござります〳〵。

ト茶店の火吹竹を持つて來て

これぢやアすつぱり。

ト云ひながら、差して見て、柄を手拭にて卷き

どうでござります。誂らへても、斯うしてくれはせぬものぢや。

文藏　こりやよい。よいはよいが、また先刻の賽錢の格ではあるまいか。

太平　これぢやア、氣遣ひござりませぬ。

ト此うち、彌助、出かゝり、見て居て、合點のゆかぬこなし。

佐次　巧く行つた祝ひに、旦那、百ぴだけあがりませぬか。

文藏　コリヤ、皆までのたまふな。羽織の紐〳〵。

太平　旦那の方は十が九ツめでたいが、さて、おれが望みが待ち遠い。

佐次　それも案じまい。現在のお妻が親、佐次兵衞が羽織の紐羽織の紐。

太平　違ひなし違か。

佐次　勿論〳〵。

文藏　アコレ、くれ〴〵もこの刀は、おれが戀を叶へる爲の、結ぶの神。

太平　わしはお妻を宿の花、佐次兵衞どのは御隱居樣。

佐次　左團扇で四ツ壺の胴取り。

文藏　お才と二人、手に手を取つて、春は上野や飛鳥山。

太平　夏は冷みの屋形船で、お妻と二人、橋の下。

佐次　御隱居樣は、奴豆腐に紅葉おろし。

文藏　雪見に轉ぶ所まで、炬燵の上でいぢり燒き。

三人　イヤ、こいつは堪らぬわい。
ト三人、浮かれる。此うち彌助、下座より、ソツと出て來たり、床几にある短刀を取つて、茶店の火吹竹と取替へ、手拭に包み、元の通りにして、また床几へ、ソツと置く。皆々知らずに
文藏　喜びぢや。もつと切り込め。
佐次　そんならま一度、大門屋へ。
文藏　何かを誂らへ
太平　合點でごんす。
佐次　早くごんせ。
ト佐次兵衛、太平次、下座へ入る。此うち、彌助、吹替へた短刀を、駕籠の屋根の間へ入れ、知らぬ顏して、兩人下座へ入るを見て、ソツと駕籠を擔ぎ、行く。文藏は捨ぜりふ云うて、花道へ行き、彌助を見附けて
文藏　コリヤ、待て。
ト大きな聲にて云ふ。
彌助　ハイ、。
文藏　爰へ來い。
彌助　ハイ〳〵。
ト其まゝ舞臺へ來り、文藏が前へつくばふ。

文藏　コリヤ、何かの樣子を聞いたか、聞かぬか。
彌助　アイ、聞いたでもなし、聞かぬでもなし。
文藏　おのれ、憎くい奴だ。
ト彌助、悄り。文藏、鼻紙袋より金を出し
ソレ。
ト彌助に遣る。取つて、合點のゆかぬこなしにて
彌助　こりや有り難うござりやす。
トつか〳〵と又駕籠を舁き、花道へかゝる。
文藏　大願成就。
彌助　なんにも知らずに。
文藏　ムウ。
彌助　べら坊や。
ト、チョンと木の頭。
文藏　忝ない。
ト火吹竹を戴く。キザミ、彌助、駕籠を舁き、向うへ入る。

幕

二幕目　粂本の場

役名――香具屋彌兵衛。柏木助三郎。利倉屋佐次兵衛。丹波屋惣兵衛。女房、お今。仲居、お若。若い者、喜助。駕籠舁き、彌助。丹波屋お妻。岩田屋お才。古手屋八郎兵衛。

本舞臺、三間の間、二重、茶屋場の道具。上の方、一間、折り廻しの障子屋體。向う、打拔き、植込み石燈籠、柴垣、下草のあしらひ、中庭の模様。上下の柱に、粂本と云ふ掛け行燈。いつもの所に門口。舞臺に、お今、女房の拵らへにて、莨盆を扣へ、屆け文二三本、前に置き、鼻紙に書いたる文を見て居る。側にお若、仲居にて、挨拶して居る。門口外に、肴屋、八百屋、盤臺へいろ／＼肴を載せ、御膳籠の蓋へ青物を載せ、見せて居る。同じく餅屋の若い者、書附けを持ち、立ちかゝり、料理番、肴を見て居る。若い者、越後屋と記したる餅の通ひ箱を持ち、立ちかゝり、すべて仲町粂本の店の模様、よろしく、騒ぎにて、幕明く。

いま　そんなら、こりや、呼びに來てゞあつたかや。

ト封を切り、開く。

わか　ハイ、たつた今、仲裏へ行きましたら、箱屋から、丁度よい、呼びに行く所ぢやと、お八重さん、お花さんが、急な事ぢや、今日中に屆けてくれいと

トお今、文を見る。

若者　オイ、越後屋か。ソレ、箱よ。

ト餅屋に渡す。

餅屋　ハイ、お書附けでござりまする。

ト若い者、受取り

若者　昨夜の口取りは別だ。よく帳面を消して下さいよ。

ト金を渡す。

餅屋　ハイ／＼。肴屋さん、この不漁に魚揃ひだの。

肴屋　ナニサ、引合ひはないが、ほんの痩せ我慢サ。

料理　時に傳公さん、仕込みはしまつて、ほんの用心だ。何がよからう。

肴屋　吸ひ種に榎田の鰺が生きて居らア。

ト見せる。

八百　なんと、番公さん、この山葵を見なさい。駿河の一

番だぜ。
ト見せる。
料理　ほんに、こいつは囲へるね。その花丸と白の頭を、置いて行つてもらはうぜ。
八百　アイ〳〵、ちつと値が張りますよ。
ト蓋へ選り分ける。此うち、若い者、銜へ煙管にて、見て居て
若者　おきやアがれ、雷さまの呪ひに、胡瓜がひけたものだから、瓜と名が附きやアみんな氣張るの。
いま　なんぢややら、急な事だと云ふ文だが、お若、なんぞ心當りが。
わか　アイ、金糸さんはこの間の、一座の揉め合ひ。惣助さんは何かこの間の、お約束があるさうでござりまする。
いま　そんなら喜七でも遣らずばなるまい。大傳馬町のお店から、金吹町へは順もよし。然し、只使ひばかりも遣られまい。番公、なんぞ見繕ろつて、二軒前、お客の所へ重詰めにして。
料理　ハイ〳〵、何がよからうな。
若者　見舞ひものならこの節は、蕎麥の評判が中位だから、外の物よりや饂麵が通り物だぜ。

わか　向うで冷やして上がるばかりに。
いま　下地の鹽梅をようしてや。
料理　ハイ〳〵。傳公さんの仕合せだ。鰺を五十ばかりと此方の鯛を二枚。
肴屋　オツと、洗ひやすか。
料理　八百屋さんは、その山葵を十本と、早松を十四五、剝いて置いてくんない。
八百　アイ〳〵、開きでないやつを、選りやせう。
料若　ドレ、おいらも慰みに。
いま　ドレ、いつもの通り、上封じを。
ト肴屋、鯛を洗ひ、八百屋、松茸を拵らへる。若い者、料理番、餅屋も手傳ふ。お今、お若に指圖して、お若、盆に飯粒を取つて來て、兩人、上封じをする。此うち、騷ぎ唄になり、向うより香具屋彌兵衞、着流し、羽織を手に持ち、船頭を連れ、出て來り、花道にて
船頭　モシ〳〵、旦那、いつも仲町と云ふと、小濱屋へばかりお出でなさりながら、今日に限つて粂本とは、どう云ふ理窟でござりやすか。
彌兵　こりやアどうだ。遊びに理窟があるものか。高が八郎兵衞と附合ひに、この粂本で目に附いた、丹波屋のお

妻。どうも面白さうな女郎だから、小濱屋へ度々呼んで口說いても、譯のある二人が仲たと、さつぱり受けつけないから、今日は白化けに糸本で、仕舞はせて置いたに依つて、ぶツつける氣よ。

船頭　さうなされちやア、あのお子さんは兎も角、私しどもで、ちつと小濱屋へ。

彌兵　ナニ、義理の惡い事があるものか。係り合ひでもありやアしまいし。また附合ひだと云つて置くがいゝ。

船頭　さう拔けざア、なりますまい。

彌兵　サア〳〵、先へ行かつし。

ト入れ替つて、船頭先に、彌兵衞、門口へ來る。

船頭　お客だよ。

わか　アイヽ。

ト立ちかゝる。

わか　オヤ、彌兵衞さん、ようお出でなされました。

若者　藤本さん、お早かつたの。

トこれにて、お今も立ちかゝり

いま　オヽ、お珍らしい。道理でお暑うござります。

彌兵　なぜえ。わたしが火でも脊負つて來ましたか。

わか　オヤ〳〵、不動樣ださうな。ホヽヽヽヽ。

いま　モシ、八さんはえ。

彌兵　また癪を云ふの。今日は八郎兵衞をまいて、たつた一人のこつてり遊びサ。

いま　それでも、あのお妻さんを

彌兵　仕舞ひに寄越したのは彌兵衞サ。それにや譯もあるが、それを話すは後の事サ。

若者　なにか旦那が御しやります。大方お後からでござりませう。

船頭　イエ〳〵、眞面目に今日はお一人だが、ちつと趣向があるから、旦那がよしと仰しやるまで、八さんが來さしつても、知らせずに置き申して下さい。

若者　ナニ、隱れん坊ぢやあるまいし。

彌兵　時にお妻坊は。

いま　疾に奧座敷へ來てゞござりますが、何やら丹波屋の親方と、大方內證話しでござりませう。

わか　マア、別の離れ座敷で、お一つお上がりなされませいなア。

彌兵　イカサマ、それもよからうが、日向を乘つて來たら、びつしより大汗になつた。なんと御無心ながら、湯がちつと沸いて居ませうか。

わか　ハイ〳〵、お行水でござりますか。
彌兵　ざつと一杯、浴びせてもらひたいね。
いま　お易い事でござりまする。ソレ、喜助、湯殿へ湯を
取つてお上げ申しや。
若者　ハイ〳〵、畏まりました。
いま　番公、お肴の支度よ。
料理　ハイ〳〵。
彌兵　そんならお今さん、面倒ながら。
いま　サア〳〵、お通れ申しませう。
彌兵　ドレ、綺麗にして、色に逢はうか。
ト騒ぎ唄になり、お今、先に、彌兵衛、若い者、附き、肴屋、八百屋も、これまでに拵らへしまひ、料理番、肴青物を持ち、附いて、奥へ入る。肴屋、八百屋、餅屋も、一時に捨ぜりふにて、荷を擔ぎ、向うへかゝる。この騒ぎを借りて、向うより、佐次兵衛、序幕の形にて、すた〳〵出て來り、花道にて、商人と行き合ひ、三人、向うへ入る。佐次兵衛、門口へ來り
佐次　さて、仲町ど云ふ所は、繁昌なうちにも、取分けこの粂本は賑やかだぞ。アレ、晝から、あのマア、騷ぐ事はえ。イヤ、ちとお頼み申します。

わか　アイ〳〵。
ト云ひ〳〵、門口へ出て、佐次兵衛を見て
お前は、どれからござんしたえ。
佐次　イヤ、苦しうない者でござりまする。お内方に仲裏の、丹波屋の親方は來てゞござりまするか。
わか　成る程、慥かお妻さんが呼びに上げて、惣兵衛さんは來てゞござんしたわいなア。
佐次　そんならお世話ながら、お妻が親の佐次兵衛でござります。娘が事に就いて、ちよつとお目にかゝりたい。苦しうなくば、爰もとで、お逢ひなされて下されいと、云ひ通じて下さりませ。
わか　アイ〳〵、そんならお前さんは、お妻さんの親御さんかいなア。マア、此方へお入りなさんして、ゆつくりとしてお出でなさんせ。お妻さんも幸ひ、藤本のお客で早うから此方へ、來て居なさんすわいなア。
佐次　アイ〳〵。
ト内へ入りながら
いま丹波屋で聞きましたら、此方へ出て居るさうにござります。
ト此うち、お若、莨盆を取つて來り

わか　サアノ\、一服お上がりなさんせ。ドレ、さう云つて上げませうか

ト始終騒ぎ唄にて、おわか、奥へ入る。

佐次　先づ落ちついて、一服のまうか。

ト下に居て、煙草のむ。奥にて

惣兵　ハテ、ようごぜえす。ちよつと店までだ。

ト矢張り右の鳴り物にて、奥より惣兵衛、内着にて、出て来り

オヽ、佐次兵衛どん、ようござつたの。

佐次　これは丹波屋の親方、娘めが呼びに寄越し、私しもちつと急な事で、只今お内へ参つたところが

惣兵　此方と聞いて来さつしたのか。

佐次　先づ当年は、きつい暑さでござりますが、皆御機嫌ようござりますか。

惣兵　アイ\/、お前もいつもお達者で。お妻も相変らず精を出してくれるから、こんな喜ばしい事はごんせぬ。して、わしへの用と云ふは。

佐次　別の事でもござりませぬ。娘が御相談でござりますが、これでお話し申しても

惣兵　ハテ、ようごぜえす。外の内ぢやなし、この米本は兄弟分、殊に奉公人の話した。遠慮はござらぬ。して、どう云ふ筋だな。

佐次　ハイ、早う申せば、娘のお妻めを

惣兵　また年季でも入れようと云ふ相談かの。

佐次　三年も入れずばなりますまい。

惣兵　可哀さうな。そりや、どう云ふ入訳で。

佐次　サ、お話し申すも涙の種。マア、私しが運の悪さ。因果のつくばいを、聞いて下さりませ。御存じの通り、二才野郎の時分から、引ッ張りや小盗者の世話ばかり焼いて、駈け歩るくにた山師。娘をお前へ売つた金で、どうやら斯うやらして居たところに、後の月の末、常州筑波の裾を流れる、水無の川の谷合ひに、山の芋が半分鰻になりかゝり居るとの事、聞くと何か闇雲に、行つて見たところが、モシ、マ、口で云ふやうな事ぢやござりませぬ。頭から胴中までは、正真の鰻になり、清水を呑んで、胴から末はまだ山の芋で、崖の赤土に着いてござります。こいつ〆めたワ、この佐次兵衛が運の開き時、此まゝ江戸へ出したなら、御府内の金は残らずおれが物と、即座に相談極め、その清水も、崖の赤土も、痛めぬやうに水船へ移し、船廻しの持込みまで、五十両渡し、先へ

歸つて、場所の相談から何から、また十兩餘りも出して、今日か明日かと待つうちに、追風がなさに手間を取り、やう／＼四五日後に持込みで、やれ嬉しやと開けて見て悄りせまいか呆れまいか、清水は乾いて鰻めはくたばりいつか干物。まだしも半分づゝの干物なら、原價くらゐは取返せど、日數を食つてこの通り

ト懐より、小鰻の干物を出し

こんな鰻になつての成佛ゆゑ、誠に三文にもならず、力も精も盡き果てゝ、ぶら／＼病の發るところへ、さる人が奇妙な事を云つて來ました。淺草の觀音と、同金同作の兄佛、三寸八分の觀音がある。開帳の相談に乘らぬかとの勸め。ところで私しが思ふには、弟でさへ、元日から大晦日まで淺草の參詣、ましてこれは兄佛だけ、大繁昌は知れてある。此まゝでは先が詰まらず、いつそのくされもう一勝負、して見ようと思ふゆゑの御相談。少少の事なら云ひませぬ。今度は一生の片附きゆゑ、年季はお望み次第、七八十兩お借り申したうござりまする。

トいろ／＼こなしあつて云ふ。

惣兵　成る程、譯を聞けば、有り難くもなんともないが、モシ、父さん、お前の山も、もういゝ加減にしたがようござんすぜ。鵺の落し胤ぢやあるまいし、山の芋が鰻になるの、觀音の兄だの弟だのと、五百羅漢が大坂鐵を出しやしまいし、そんな當にもならない事で、娘を苦ませるも、あんまり褒めた事でもあるまいと、サア、おれが精腹揉んでも、しつけた癖なら止めもさつしやるまい。ようござえす。年季を入れる事はどうともしませう程に、マア、お妻に逢つて、どうとも相談したがようごんす。

佐次　イヤモウ、山なれ海なれ、なければならぬ金づく。私しがこの料簡なれば、ハテ、そこが親の高下。へ、、首筋を押へてなりと、否は云はせませぬ。

惣兵　サ、そこが相談だ。幸ひお妻も、お客で奥へ來て居るが、ちよつと呼んでやりませうか。

佐次　ハイ、私しも急ぎます。なりませう事ならどうぞ。

惣兵　斯うしませう。おれが居ちやア、また相談のしにくい筋もあるものだ。内證にちよつと用もあるから、お妻も爰へ呼び出して

佐次　お前はお部屋で

惣兵　一服のんで居ませうよ。

佐次　それではあんまり勝手づく。

惣兵　ハテ、ようごせえす。

ト騒ぎ唄にて、惣兵衛、奥へ入る。佐次兵衛、見送り

佐次　先づ親方の受けはよいワ。

ト莨をのみにかゝる。奥にて

つま　アイ〳〵、ちよつと行て來るわいなあ。

ト流行り唄になり奥よりお妻、座敷着の形、鼻紙を持ち、出て來り

オヽ、父さん、よう來て下さんしたなア。

ト云ひ〳〵、舞臺へ出て來る。

佐次　オヽ、娘、この頃は逢はぬゆゑ、寮から來ようと思うたばつかり、何やかや取込みだらけで。ママ、暑さの障りもなうてよいワ。

つま　アイ。お前も、マア、お達者で、此やうな嬉しい事はござんせぬ。さうして、昨日あげた文は。

佐次　オヽ、屆いた。その事もあり、おれも又、急に逢はねばならぬ譯があつて

つま　それゆゑ來て下さんしたかいなア。

佐次　して、マア、急に來いと

つま　サア、お前を呼びに上げたはな。

佐次　おれを呼びに寄越したは

つま　その用と云ふは

佐次　用と云ふは

つま　あのな。

佐次　あの

つま　どうも急に、云はれぬわいなア。

佐次　べら坊め、呼び寄せる程の事を、云はすと埓が明くものか。

つま　そんなら思ひ切つて云ふ程に、どうぞさうして下さんせえ。

佐次　そりやモウ、どんな事でも、おれもちつと頼む事があれば。

つま　聞き屆けて下さんすか。

佐次　サア〳〵、どんな事だ〳〵。

つま　アイ、お前を呼びにやつたはな、外の事でもござんせぬが、親方さんへも薄々と、先刻に話して置いた程に、どうぞわたしを二三年、年季を入れて下さんせ。

佐次　ヤア、用と云ふは、その事か。

つま　どうぞ得心して、下さんせえ。

佐次　サア〳〵〳〵、まんが直つて來たぞ〳〵。

ト喜ぶ。

つま　モシ、父さん、何を其やうに、喜びなさんすぞいなア。
佐次　これが又、喜ばいでならうか。開いた口へ餅と云はうか。てまへその心なら、二三年は愚か、五年でも十年でも、乃至奴になりと
つま　すりや、聞き分けて下さんすか。
佐次　ハテ、年季を入れるは、おれが勝手ぢやわいやい。
つま　父さん、エヽ、嬉しうござんす。
　ト拝み、喜ぶ。
佐次　コレ、拝んでくれるかな。一旦瀬に立つたわれが、頼まぬうちに其方から、元手をくれる孝行娘。忝ない、忝ない。
　ト同じく拝み、喜ぶ。お妻、不思議さうに
つま　エヽ、そりや、なんと云はしやんすぞ。
佐次　イヤサ、おれが最前、頼みがあると云つたも、急に七八十両、なければならぬ事があるゆゑ、年季の相談。大概親方も呑み込んで居る。それをおれが云はぬ先に、われが方から年を入れ、元手をくれる禮を云ふのよ。
　ト お妻、驚ろき
つま　エヽ、そんならわたしが、年を入れうと云うたのは

佐次　又おれが瀬に立つではないか。
　ト お妻、ムッとして
つま　何を阿房らしい。これまで役に立つた上、また年季を切り増して、お前に金を遣らうとて、急に呼びにやらうかいなア。
佐次　ヤア〳〵、そりやわれが方に、急に金が入る事があるゆゑ、年を入れる相談か。
つま　知れた事いなア。
佐次　おきやアがれ。道理こそ、あんまり相談が巧過ぎると思つたが、われに使はれる金の事に、うろたへ眼で來るものかえ。
つま　さう云ひなさんすりや、わたしも又、お前の山事の金に、苦界の年を入れる事は、金輪際、アイ、否でござんす、否ぢやわいなア。
佐次　オヽ、おれもわれが入る金に、判する事は、金輪際否だ。
つま　もうお前を頼まぬわいなア。
佐次　オヽ、おれは頼む。親方に頼んで、年を入れて見せう。それより前に、その差し飾つた頭の物、おれに寄越せ。

つま　エヽ、いろ〳〵の事を云はしやんす。この前も鏡臺の抽出しから、斷わりなしに持つて行かしやんして、大抵困つた事ぢやないわいなア。

ト腹立つて云ふ。

佐次　例へ手籠めに持つて行かうが、他人の物ぢやなし、お父さんが借りるのぢや。サア、キリ〳〵取つて、寄越せやい。

つま　なんの阿房らしい。髪の物は勤め道具。ひよつと又此方の手詰め、間違ふ時は僅かな物でも、わたしが都合せにやならぬわいなア。

佐次　おれも又、爰まで來て、素手の孫三で詰まるものか。キリ〳〵寄越せ。

つま　否ぢやわいなア。

佐次　エヽ、情のこはい。

ト無理にお妻が頭の櫛笄を引き拔き、持つて

この上は肝心の、親方から鍛へてくれう。

ト行かうとするを

つま　胴慾な父さん、そりや、マア、どうぞ

ト行きにかゝるを

佐次　寄りやアがるな。

ト突きのけ

なんでも直に逢うて

ト騷ぎになり、佐次兵衛、血相變へ、奥へ走り入る。

お妻、見送り

つま　コレ、父さん、なんぼお前が其やうに、血相變へて親方さんに、相談なさんしても、肝心のわたしが得心せぬぞえ。エヽ、アタ阿房らしい。

トこなしあつて

サア〳〵、ほんの云ひがゝりとは云ふものゝ、父さんの胴慾から、モウ、この筋では……とは云へ、是非今日中に金が出來ねば、請合うたこの身は元より、八郎兵衛さんの顏も立たず、こりや、マア、どうせう。段々と日は詰まる。今さら外に心當てが。エヽ、マア、なんとしたら、よからうぞいなう。

トあちこち、いろ〳〵思ひ入れあつて

イヤ〳〵、斯う云ふうちも親方さんが、年季の事を父さんに、ひよつと騙され呑み込んでは、この上の心がゝり、腹の立つのも辛抱して、騙しあやすも男の爲。今一度三つ金輪で。さうぢや。

ト思ひ入れ。流行り唄になり、お妻、ツイと奥へ入る。

右の唄にて、向うより、助三郎、前幕の形、一腰を持ち、出て、花道よき所へ來ると、後より八郎兵衞、出て來ながら

八郎　モシ〳〵、それへお出でなさるは、助三郎さまではございませぬか。

ト云ひ〳〵側へ來る。

助三　オヽ、八郎兵衞、其方に逢はうと内へ寄つたら、只今他出との事ゆゑ、大方桑本であらうと、行くところであつた。

八郎　それは丁度よい所でお目にかゝりました。私しも一昨日は、巳待ちに洲崎でお別れ申してより、彼れこれと心ばかり揉めまして、お見舞ひも申しませぬが、いよいよ正宗の脇差は

助三　直ぐにその時、質請けして

ト脇差を見せる。

八郎　ハテ、爰へ持つてお出でなさる手間で、なぜ一昨日直ぐにお屋敷へ持つて行て

助三　渡す譯は知つて居れど、この一腰は其方の手から、差上げてたも。

ト差出す。八郎兵衞、受取りながら

八郎　そりや又なぜでござりまする。

助三　サ、この三光の正宗を、わしが手から勇藏どのへ差上げなば、歸參する事もあらうが、可哀さうにあのお才

八郎　お前ゆゑに一日でも、勤めさして置いては、お國元の御一家衆へ、お顏が立たぬと仰しやりますのか。それゆゑに私しが、三十兩手附けを打ち

助三　コレ〳〵、八郎兵衞、その後金の日限りは二十八日、今日の暮れまで。殊に其方は養子の身分。七十兩と云ふ金が

ト思ひ入れあり、懷より、封の切れし文を出だし

この狀を讀んで見や。

ト八郎兵衞、取つて、上書きを見て

八郎　こりやお才さまより、あなたへの文。今日の日當。

ト開き、心にて讀み

ヤヽ、こりやお國元でお才さまを、無理所望せし文藏が、今の勤めを幸ひに、暮れが過ぎると身請けの埒明け

助三　國へ連れ行くその文體。なんと生きて居られうか。

八郎　御尤もぢや、留めますまい。如何やうともなされませとは、申すものゝ、後金の七十兩は、才覺いたし、もう受取るばかりに出來てござりまする。今は七ツ、暮れ六

ツまでは未だ一時ございます。その間に金が調ひ、身請けが濟んでも、犬死なさるお心か。モシ、この金ゆゑには八郎兵衛、骨も肉も蕩けるやうにござりまする。折角見かけてお出でなさるお二人、どうぞ無事にお添はせ申したいと、思ふ心ばつかりで、幾瀨の胸を碎きまする。ちつとは家來のこの身にも、なつて見て下さりませ。

　トいろ／＼あつて云ふ。助三郎もこなしあつて

助三　あやまつた、料簡してたも。今のやうに云うては、其方の志しを無にする道理。もし暮れまでに金が調はねば

八郎　そりや手當を致して置きました。

　ト助三郎、行かうとするゆゑ

モシ、あなたはどれへ。

助三　サア、その一腰を差上ぐる矢島勇藏どのは、出入り方の振舞ひに、山の松本へ來てござるとの文通。後金の間違ふ時は、生きて面目なきこの身ゆゑ、某が手よりは差上げられず、それゆゑにこそ今日までも、期を延ばせしもこの譯ゆゑ、これより勇藏どのにお目にかゝり、詳しう頼み置く程に、松本のお立ちも暮合ひ限り。この所へ見えたなら、其方の手から差上げてたも。

八郎　ようござります。それ程思ひ詰めてなら、お心の濟むやうに、お預かり申しませうが、また私しも心の落ちつくやう、斯やうなされませ。その事をお斷わりなされたら、勇藏さまを待ち受けがてら、口山の松本で、お氣晴らしに御酒でもあがつて、暮合ひまで一寸入りなされまし。其うちには身請けの埒も明け、この一腰も持つて、お才さまもお連れ申して參じまする程に、私しが心安めと思し召し、必らず外へ行かず、短氣を出さず、私しの吉左右を、キツとお待ちなされて下さりませ。

助三　聞けば聞く程、深切の心遣ひ。成る程さうしませう。

　ト少し行つて、立ちとまり

鐘は無常の響きありと、八幡の鳴出しが助三郎の

八郎　エ。

　ト顏見合せ

助三　待つて居るぞや。

　ト唄になり、助三郎、向うへ走り入る。八郎兵衛、一腰を差して、後を見送り

八郎　モシ、必らず短氣を出さつしやりまするな。滅多に外へござりまするな。ア、埒もない。若いうちと云ふものは、無性に心が小さくなつて。併し、互ひに云ひ交し

て、お國を斷落ちまでしてござつたからは、無理でもないかい。イヤ、こんな事は云つて居られぬ。おれが金の當と云ふは、お妻が方ばかり。余本に出て居るか知らん。ちよつと逢つて樣子を、どうぞ聞きたいものだが。

ト門口へ來り、内を窺ふ。この時、奥にて

つま　イエ〱、どつこへも行きやしやせぬ。

ト騒ぎ唄にて、お妻、出て來り、思はず互ひに顏見合せて

八郎　コレ〱、お妻ぢやないか。

つま　オヽ、八郎兵衛さん、逢ひたかつたに、よう來て下さんしたなア。

八郎　して、客は馴染みか。

つま　イエ〱、初會ぢやけれど、今お前が上がんなさんしては悪い。呼ぶまで爰で、話さうわいな。

八郎　時に早速ながら、巳待ちの時、洲崎での譯合ひ。商賣とては手に附かず、其方の所へ通ふのと、若旦那の賄ひに、恥かしい事ながら、おれが方でも出來にくい。今日を限りの手詰めの金。暮れと云ふても一時そこら。よもや如才はあるまいが、段々胸づかへで氣が急かれる。どうだ、都合は、調うたか。

つま　サア、その金はな。

ト思ひ入れ。

八郎　コレ、お妻、今さら間違ひもしまいが、たつた今もお才どのから、若旦那への文。暮れまでに此方の金が調はねば、岩田屋めがぐるになり、文藏に身請けさせ、國元へ遣るとの知らせゆゑ、突き詰めた助三郎さま、生きては居ぬと云はつしやるぞ、やうやうなだめては置いたものゝ、今となつて其方の方の、金が調はねば、心當てなき、請負うた當惑。さすれば大事のお二人は、生きてござらぬ。その時こそ、どうもおれも……サ、さうなれば、大勢の、命にかゝはる七十兩。

トしいをりとなる。お妻、これを見て、思ひ入れあり

つま　アイ、その金は出來てござんす。

八郎　ヤア、なんと云はんす。

つま　サア、なんぼ足らはぬわたしぢやと云うて、お前の難儀になる事を、請負ふからは……マア〱、詳しい事は後での話し。もう受取るばつかりでござんす程に、必らず短氣な心を持つて下さんすなえ、エヽ。

ト涙を隱し、思ひ入れ。

八郎　すりや、金は出來たか。

つま　アイ。

　ト八郎兵衛、こなしあり

八郎　エヽ、有り難い〱。コレ、お妻、其方はおれが女房とは思はぬ。二人三人の命の親、金が出來るに、なんで短氣を出さう。

　トこの時、お妻が頭へ目を附け

お妻、見れば一昨日、淵崎で逢うた時までは、差し飾つて居た櫛、笄、簪までないは。

つま　サア、聞いて下さんせ。此方の都合が出來た上にも。ひよつとお前が要る事もあらうかと、その心當てに思うて居たを、あの父さんが手籠めにして

八郎　また借りられたかいの。この前もそんな事があつて。マア、それはそれ、此方の金はキッともう、受取るに間もあるまいの。

つま　アイ、もう追ッつけでござんす。

八郎　エヽ、忝ない〱。それでおれも落ちついた。イヤ、落ちつかれぬは鬮三郎さま。斯う云ふうちも心元ない。一走り橋本へ行て、キッと金の出來る事を、お話し申して

　ト行きかゝり、思案して

イヤ〱、おれが行つて來る間に、金が其方の手に入つても、この手附け證文がなければ、身請けをひねるまいものでもない。彼れこれのうちに日が切れては、又お才さまの方が心元ない。コレ、お妻、これはお才さまの手附け證文、其方に預けて置く程に、おれに構はず金が手に入り次第、この證文と一緒に勘兵衛へ渡し、身請けの方を附けて置いてくりや。

　ト前幕の證文を出す。お妻、受取り

つま　合點でござんす。必らず氣遣ひなさんすな。

八郎　そんならキッと、頼んだぞよ。

　ト奥にて、七ツ半の時計、鳴る。

ヤヽ、ありやもう、七ツ半の時計。

つま　ちつとも早う。

八郎　ドレ、一走り。

　ト騒ぎ唄になり、八郎兵衛、向うへ走り入る。お妻、見送り、證文を見て、思ひ入れ、ワッと泣き

つま　こりや、マア、どうせう、なんとせう。これまで馴染みの客人は、主ゆゑみんな遠ざかり、急な間には合ふまいと、丈夫に思うて年を増す、その相談も逆様に、父さんの胴慾から、食ひ違うたる入り譯を、打明け話さば

その座にて、いとしい男の身の上と、それが悲しいばつかりに、これまでつかぬ嘘云うて、騙して置くももう半時。七十兩の金がなければ、お主や男の命づく。こりやマア、どうせう、なんとしたらよからうぞいなア。

トいろ〳〵あつて、泣き落す。この前より、彌兵衛、莨盆を提げ、後へ出かけ、窺ひ居て

彌兵　その金、おれがくれてやらう。

ト合ひ方になり、前へ出て來る。お妻、悄り

つま　エヽ、お前は彌兵衛さん、マア、いつの間に。

彌兵　へヽ、晝前から。

つま　そんなら今日の

彌兵　客はわつちサ。

つま　エヽ。

ト思ひ入れ。

彌兵　婀娜と氣前の仲町で、友達づくの附合ひから、フツと見染めた枕頭、一座のよしみと諦めても、惚れかゝつたらどこまでも、留め度のないが色の道。さしをつくのも振られるのも、承知で毎晩通ひ詰め、今日は白化け手短かに、八郎兵衛を呼ぶこの茶屋で、逢ふか逢はぬを聞き切らうと、自惚れ過ぎた鼻の先。逢ふも道理この場の様子、部屋でのもやもや聞き拔いて、相談する氣で來た彌兵衛。ちつとばかりやア、お妻さん、附合つてもよからうぜ。

ト莨を吸ひつけにかゝる。此うち二重へ、お今、佐次兵衛、出て、囁き合ひ、佐次兵衛、有り合ふ衝立へ隠れ、兩人、窺ふ。

つま　そんなら何かの様子をば。

トこの時、お今、前へ出ながら

いま　コレ、お妻さん、なんにも彌兵衛さんに、お隠し申す事はないぞえ。今さら云ひ譯がましいけれど、今日はお前を呼ばしやんしたは、八郎兵衛さんの譯と云ひ、なんでも様子のある事と、思ふに違はぬ深切なお志し。わたしへも打明けて、お話しなさるは互ひの爲。

彌兵　長くは云はない、七十兩、ソレ、使つたがいゝわな。

ト財布を抛り出す。お妻、こなしあつて

つま　エヽ、申し、彌兵衛さん、堪忍して下さんせ。お前さんはあの八郎兵衛さんと、兄弟分とやら。また御家來筋ぢやのと、折々は一座でござんしたが、この頃は毎晩毎晩、小濱屋へ呼び出して、八さんと切れて、逢へとの憎て口、あんまりぢやと思ふから

いま　サ、そのお話しちお互ひに、云うてしまへば水に流し、色氣を離れて
つま　金を遣らうと仰しやるは。
彌兵　サ、ここが昔への仇を恩、惜さ餘つて可愛うたり、切ない心を感心して、今日の手詰めを救ふこの金、遠慮なしに受取つて置くがいゝ。
つま　すりや、眞實この金を。エヽ、嬉しうござんす。何かの様子を知つての上は、包み隠しは致しませぬ。めぐりめぐつて八さんや、お主の命を救ふ御恩。そウ〳〵、なんとお禮の云ひ様も、お志しのこの金は、そんならどうぞ。
ト取らうとするを、彌兵衛、ちやつと押へて
彌兵　コレ、待ちや。其方の手詰めを救ふからは、おれが無心も聞いてくれるか。
つま　ナニ、わたしへ御無心とはえ。
ト彌兵衛、財布を取つて
彌兵　ソレ、お今さん、頼んだ事を。
トお今、お妻が側へ寄り
いま　アイ〳〵。コレ、お妻さん、彌兵衛さんの無心と仰しやるは、この書き物をとつくりと讀んだ上、血汐に染めて欲しいお望み。
ト書き物を出す。
つま　エ。
いま　サ、どうで心は濟むまいけれど、得心なければ三つの命、救ふ手段も蔓も切れ、誠の義理は立たぬ程に、よう料簡して御返事を。
トお妻、取つて開き
つま　起證文の事。一つ、其許様と夫婦の契約。
ト讀みさし
香具屋彌兵衛さま、丹波屋つま。エヽ、すりや、これ取らうばつかりに。
いま　サ、互ひの爲と云うたは爰。これには段々深い様子が。
つま　否でござんす。アイ、この起證に血をあやし、可愛い男を突き出して、嫌なお客を添ふ事は、マア、否でござんす。彌兵衛さんにも似合ひさんせぬ、惚れたら惚れたで、口説き様もあらうのに、人の落ち目に附け込んで、有り難さうに見せびらかし、金で色戀買はうとは、まだ修業が足りやんせぬ。ハテ、苦勞するだけしつくして、叶はぬ時は八さんと、手に手を取つて死ぬるが高。襟に

附いたと云はれては、ちつとは知られた丹波屋お妻、仲町の名が恥かしい。お前の色には、マア、なるまいわいなア。

トこなしあつて云ふ。此うち、彌兵衛、ヂツと莨のみゐて

彌兵　イヤ、お妻、今のむ莨が毒となれ、この彌兵衛はおぬしにやア、惚れて居ぬぞよ。

つま　それに又、この起證は。

彌兵　サ、それを望むは深い入り譯。

いま　お前が間夫の八さんへ、立て通す義理あれば

彌兵　此方も切ない義理詰めを、色戀でない一通り、ト、とつくり。

つま　エヽ。

彌兵　聞いて下され、お妻どの。

ト訛らへの合ひ方になり、彌兵衛、思ひ入れあつて

何を隱さうこの彌兵衛は、十一から古手屋の、親旦那にに使はれた奉公人。成人するに從つて、律儀者だとお目にとまり、御一家衆の香具屋へ、十右衛門さまが親分で急養子。今では八郎兵衛どのと兄弟分。これはおれが身の素性。さて氣の毒なは古手屋の、内の揉合ひ、兼ねて噂も聞いたであらうが、おくのさまの實の阿母が、亡なられると直に、下女のお山と云ふに手がかゝり、引上げて後連れ。程なく十右衛門さまも病死。所で今の阿母かのさばり出し、その弟の太平次と云ふ、のらくら者を引摺り込み、それとおくのさまを女夫にして、古手屋の内をせしめやうと云ふ、お山めが謀叛を起し、八郎兵衛へはなんなりと、科を拵らへ追ひ出さうとする。その心を知つて、娘御と祝言は名ばかり、其方の所へ通ひ詰め、それ誤まりに追ひ出される心。中に立つていとをしいのは、おくのどの、この彌兵衛を人と見掛け、涙をこぼし云はつしやるには、必らずお妻どのゝ事を、悋氣で云ふではさら／＼ない、阿母の手前、太平次の身の納まりを附ける間、どうぞ當分遠ざかり、退き分にしてもらうてくれい、母さんさへ見送つたら、直に内へ引取らうと、事を分けたるくれ／＼のお頼み。お氣遣なされますなと、請負ふ事は請負うても、これまでの樣子と云ひ、今日の手詰め、どのやうに頼んでも、表向きぢや出來ぬ相談。爰は一つ狂言で、兄弟分のこのおれが、眞實で逢ふと云ふ、素振りを見せたら憎みが附き、遠ざかる事もあらうかと、それゆゑ毎晩巣を變へて、心に思はぬ仲町通ひ。

今日は是非とも壊す氣で、この粂本へ上がつたが、三方四方丸くなる、印は身請けの七十兩。其方に遣つて起請を貰ひ、八郎兵衞に見せた上、一旦愛想を盡かさして、おくのどのゝ云ひ條立て、内さへしつくり納まつたら、その時起請を引裂いて、跡の始末はこの彌兵衞が、命にかけて一つにする。ちつとのうちの辛抱も、古手屋の爲、男の爲。その次にやこの彌兵衞が、ちつとは忠義の爲だと諦らめ、聞き分けて下され。コレ、手を合せて拜みますわいなう。

トいろ／＼こなしあつて云ふ。お今も思ひ入れあつて

いま　あれ聞かしやんしたか。あゝした實を打明けて、ともども勸めてくれいとお頼み。心意氣さへ變らずば、呼び返すばかりが實でもない。たゞ何事も八さんのお爲、その上つゞまる今の難儀。

トきつと云ふ。お妻、これまでヂツと俯向き、聞き居て、この時、顏を上げ、思ひ入れあつて

つま　成る程、頼もしい彌兵衞さんのお心意氣。今さらなんと云ひやうも、よう聞き分けては居るけれど、今別れてはどうも

ト煙管突ツ張り、こなし。

彌兵　サ、義理が立つまい。そこを一旦立てるはこの金。起請さへくれるなら、七十兩は直ぐに遣る。

つま　サ、それは。

彌兵　金が出來ずば八郎兵衞を、みす／＼見殺し。それでは、實に男を思ふ、誠の義理は立つまいがな。

トきつと云ふ。お妻、術なき思ひ入れにて

つま　ハア、。

ト泣き落す。

佐次　したり。

ト佐次兵衞、二重より轉げ落ちる。

彌兵　誰れだ、悔りするわえ。

ト佐次兵衞、そこへ出て

佐次　ハヽア、末世とは云ひながら、誠たる人もあればある。ハイ／＼、私しは、お妻めが親にござります。今あなたのお話しを、餘所ながら聞いて感心いたしました。如何に兄弟分の爲だと云つて、命から一番目の、七十兩と云ふ金を出して、家を立て身を納めさゝうと云ふ男氣。また娘はその身の年を入れ、夫の難儀を救はうと云ふ實心。それから見ればこの親は、人の皮着た犬ぢや、猫ぢや。コリヤ娘、あやまつた。流石われが可愛さに、年を

入れるを邪魔したが、今日からは誠の善人、金輪際、八郎兵衛どのへ、添はさにや置かぬ。いま當分、あなたのお志しを立てゝ、男の難儀を救ふ間、思ひ切つて遠ざかつてくれ。可哀いさぞ悲しかろ。心根が思ひ遣られて、一生泣かぬおれが目から、酸漿のやうな血の涙が出るわいやい。

トこなし。

彌兵　サア、親仁どのが好い手本。千萬云うても同じ事。末の所は二言はない。ちつとの間、切れてくれるか。

つま　サア、それは。

佐次　但し男を見殺しにするか。

つま　サア。

いま　金はいらぬか。

つま　サア。

彌兵　起證をくれるか。

つま　サア。

三人　サア。

四人　サア／＼／＼。

彌兵　お妻。返事はなんとぢや。

トお妻、キツと思ひ入れあつて

つま　ふッつり思ひ

三人　ヤ。

つま　切りました。

ト泣く。

彌兵　オヽ、出かした。切ない義理を聞き分けて、よく云つたとは云ふものゝ、彌兵衛は鬼だ。

ト泣く。

いま　そんなら心の變らぬうち、この書き物へ。

ト以前の書き物へ、小刀を添へ、出す。

つま　アイ。

ト取つて、泣いて居る。

佐次　コレ、お妻、あなたのお氣を休める爲、サヽ、ちやつと、ちやつと。

トこれにて、お妻、是非なく小指を切り、起證へ血を着けて、出す。彌兵衛、取つて

彌兵　拵らへ事とは云ひながら、木でも石でもないおれが、仲を裂くのも、浮世かいなう。

ト思ひ入れ。

つま　そんならどうぞ、約束の通り。

彌兵　成る程遣らう、金は遣らうが、とてもの事に、いま

八郎兵衞が來るは治定。逢つてすつぱり双方へ、愛想づかしを見た上で。

つま　そりや又、あんまり。

彌兵　それが互ひの辛抱づく。ついにしつけぬ役廻りで、憎まれるなら、八郎兵衞が、縁を切つたと云ふ時に

佐次　コレ、あの金を貰ふが潔白。

つま　こりやモウ、心を鬼にして

いま　互ひに思はぬ

佐次　愛想づかしを。

つま　必らずその時

彌兵　彌兵衞は男、未練はないのサ。

ト納まる。佐次兵衞、思ひ入れあつて

佐次　もう彼れこれ入相前。内の衆にも呑み込ませて。

いま　成る程。コレ、喜助もお若も、みんなおぢや。

兩人　アイ〳〵。

ト云ひながら、喜助、お若、走り出て來る。

いま　コレ、ちつと樣子があつてな。

ト囁く。

兩人　ヘエ、そんなら八郎兵衞さんをかえ。

いま　ア、、コレ。

ト頤にて、お妻へ惡いと思ひ入れする。お妻、ヂツとなる。此うち、彌兵衞、金を紙へ包み

彌兵　ソレ、近附きの印。

ト兩人へ投げて遣る。喜助、お若、戴き

兩人　有り難うござりまする。

ト辭儀する。

佐次　モシ。

トまた兩人に囁き

鹽梅よう頼みますぜ。

兩人　合點でござりまする。

ト云ひ〳〵、門口の外を見て、直ぐに戸を閉めて、内へ入り

喜助　噂を云へば影ではない。

わか　八郎兵衞さんがござんすわいな。

トこれにて、皆々、思ひ入れ。

つま　ナニ、八さんが。

ト立ちかゝるを

彌兵　ハテ、妾が細工の仕上げだワ。

トお妻を、ヂツと引据ゑる。お妻、それなりに、ヂツと思ひ入れ。お今、彌兵衞に、上の小座敷へ行けと、

思ひ入れする。彌兵衛、心得て、莨盆を提げ、入る。
佐次兵衛は、お妻へ、キツと云へと、思ひ入れして、下の方、二重の衝立へ隠れる。此うち、お今、お若へ云ひつけ、銚子と茶碗を取寄せ、お妻に、一つ呑めと勸める。お妻、頭振る。無理についでやり、酒を呑ませる。喜助、鉢卷を締めたり、尻を端折つたり、いろいろ支度して、これでは悪いとこなし。お若も同じく、腰帯など締め直す思ひ入れ。よき時分、流行り唄になり、向うより、八郎兵衛、以前のまゝ、走り出て、花道にとまり

八郎　ア、嬉しや／＼。なんのかのと云はつしやるを、やう／＼四ツまではなだめて來たれば、急に短氣も出さつしやるまい。併し、九ツまでにお才さまを連れて行かねば、生きて居ぬとの一徹。もう彼れこれ入相前、大方お妻が、金を受取つたであらう。まだ条本に出て居るか。逢つて委細を

トいそ／＼、門口へ來り

なんだ、もう戸を閉めて。オイ、ちよつと爰を、爰を開けてもらはう。

ト戸を叩く。皆々、思ひ入れ。此うち、お今、衝立にて、お妻を隠す。喜助、思ひ入れあつて

喜助　誰れだ／＼。内ぢやみんな、留守だ／＼。

八郎　なんぼ留守でも、誰れぞ居やう。急な事だ。ちよつと開けて

喜助　イヤ、あんまり今日は賑やかだから、疲れてみんな寢てしまつた。用があるなら明日ござい。

八郎　馬鹿々々しい、さう云ふ聲は喜助ぢやアないか。八郎兵衛だ、心が急く。

ト無性に叩く。

いま　コレ、そりや何するのぢや。早うお入れ申さぬかいの。

喜助　ハイ。ソレ明けました。

ト戸を明ける。八郎兵衛、内へ入る。

八郎　まだ暮れ前から、なんの事だ。

ト云ひ／＼、お今を見て

留守だと云ふお今さんは、爰に。アイ、まだ今日は逢ひませぬの。

トお今、八郎兵衛をちよつと見て

いま　八郎兵衛さん、ようお出でなされました。

ト知らぬ振りして居る。八郎兵衛、何氣なく

八郎　ヤレ〳〵、氣を急いたら咽喉が乾く。コレ、お若、茶を一つくりやれ。
わか　アイ、茶は慥か、もうござりませなんだ。
八郎　そんなら湯を持つて來てくりやれ。
わか　イヱ〳〵、湯もござりませぬ。
八郎　面倒な、水でもいゝワ。
わか　ハイ、水ぎれでござりまする。
　トあちら向く。
八郎　コレ、喜助、氣の附かない、莨盆を貸してくりやれ。
喜助　水さへきれるものを、火がござりませぬ。
　ト同じやうにあちら向く。八郎兵衛、不思議さうに
八郎　ソヽ、そんなら頼まない。
　ト下に居て
お今さん、お妻は此方に、出て居ますか。
いま　イヽエ。
八郎　そして、どこへ出て居ますの。
いま　されば、此方をば最前、ナウお若。
わか　慥か江戸の、お客を送つてゞござりました。
八郎　ハテナ、そんなら誰れぞに言傳てか、文でも殘しちやア行きませぬか。

いま　イヽエ。
　ト八郎兵衛、急き込み
八郎　エヽ、コレ、急に逢はにやア解らぬ用だが、コレ、お若、ちよつと一走り丹波屋へ行つて、よく聞いて來てくりやれ〳〵。
わか　エヽ、お前さんも、江戸へ行つた者が、仲町で知れますものかいな。
八郎　エヽ、急な事だ。行つてくりやれ。
　ト急いて云ふ。
わか　無駄に行く足はござんせぬわいなア。
　トつん〳〵、奥へ走り入る。八郎兵衛、心得ぬこなしあつて
八郎　どうも合點がゆかぬわえ。もう一遍逢はぬうちは、江戸は愚か、爰の内の敷居も、一つ跨ぐ筈ぢやないが。
　ト云ひながら、あちこち見廻し、フト衝立の前にあるお妻が莨入れを見附け、心にうなづき
最前からの素振りと云ひ、そこらここらがどぎ〳〵と、なんだか味にあしらつて。そりやマア兎も角も、矢ツ張りお妻は爰の内に居るを、なんぞわしに、逢ひ憎いやうな筋でも云つて、頼んだ事でもごんすか。

ト少し腹立つて云ふ。

いま　これはしたり、八さんでもない、物の云ひやう。なんぞ此方に居るものを、隠して置くやうな廻り氣。最前江戸へ、行つたに違ひござんせぬわいなア。

ト八郎兵衛、こなしあつて

八郎　イヽエサ、どのやうに云はしつても呑み込めませぬ。急な事で、逢はぬうちは、心が急いてなりませぬ。其やうな事を云はずと、どうぞ此方でなくば、近所を捜してなりと、ちよつと逢はして下さいよ。心が急きます。捜して下さい、頼みます／＼。

トうろ／＼、心の急くこなし。あたりへ氣を附けるこなし。此うち、お妻、手酌にて、酒を呑む事あつて、ヂツと堪へ、この時、堪へ兼ねたるこなしにて、後を見ると、彌兵衛、金を見せ、早く愛想づかしを云へと仕方する。これにてお妻、ヂツと思ひ入れあつて

つま　酔醒めで咽喉が乾く。茶でも水でも持つて來て下さんせ。

ト八郎兵衛、この聲を聞いて

八郎　ヤ、そこに居るは、お妻か。

つま　アイ。

ト衝立を取る。

八郎　最前からあれ程尋ねるに。ア、氣合ひでも悪うて、それで物も云はぬか。マア、心が急く。ちよつと爰へ。

ト手を取りに行きかゝるを

喜助　イヽヤ、お妻さんの側へは寄せない。

ト引き留めるを、撥り倒し

八郎　マア／＼、爰へ、ちやつと來てたも。

ト手を取り、側へ引きつけ

心が急くゆゑ、長く云ふには及ばぬ。段々時刻は近附いて、心が堪らぬ。約束の物は定めてもう、受取つて置いてくれたか。サア／＼、どうぢや、出來て居るか。ヤヽ、

トあたりへ氣を兼ね、心急いて云ふ。お妻、此うち、思ひ入れあつて

つま　サア、その金は

ト云はうとするを、お今、後より咳拂ひする。これにて、お妻、心附き、後を見る。この時又、彌兵衛、金を見せ、愛想づかしを云へと、仕方する。お妻、また下の方を見ると、佐次兵衛、あの金がなければと、八郎兵衛を指差し、腹切り死ぬる眞似をして見せる。お妻、うろ／＼こなし。八郎兵衛、急いて

八郎　コレサ、お妻、あれほど手管を云ひ合はせ、やうやう一時遁がれになだめて來たゆゑ、どうも心が落ちつかぬ。もしも出來ないその時は、百年目とは覺悟極めて居るものゝ、ならう事なら、サヽ、返事は、どうぢや〳〵。

ト　お妻、いろ〳〵云ひ兼ねるこなし、思ひ切つて

つま　知らぬわいなア。

八郎　ナニ、知らぬとは。

つま　アイ、請負うた金の事は、知らぬわいなア。

トこなし。八郎兵衞、驚ろき、急き込み

八郎　ヤ、すりや暮れ方までに出來ると云つたは

つま　アイ、嘘でござんす。

八郎　ナニ、嘘とは。

ト引きつけるを、お今、眞鍮を提げ、ちやつと兩人を引き分け、前へ出て、隔てる。八郎兵衞、思ひ入れにて、扣へる。

いま　なるたけとは思うたなれど、斯うなるは覺悟の前、お妻さんも何やら云ふ事もあるさうなが、側へ寄らしやんすと怖がる程に、そこからなんなと、云うたがよいわいなア。

喜助　コレ、八さん、無性におれを殴り倒し、側へばかり寄りたがるが、仲町の大事の女郎衆、手をかけると免さないぞ。

ト前へ出る。八郎兵衞、これに構はず

八郎　コレ、お妻、すりや頼んだ金は、眞實出來ぬな。

トきつと云ふ。お妻こなしあつて

つま　八郎兵衞さん、もうこの世では、お前の顔は、見まいと心に、錠を下ろして居るに、爰へは何しにござんした。

八郎　エヽ、あれ程の約束を、間違へるのみならず、今更そんな事を吐かして、濟まうと思ふか。

つま　濟まうが濟むまいが、嫌になつた男、どうならうが構やせぬわいなア。

トこれにて、八郎兵衞、グツと急き込み

八郎　コレ、お妻、そりやマア本氣で云ふのか。イヤサ、おぬしやア、氣でも違やアしないか。

トきつと云ふ。お妻、思ひ入れあつて

つま　これがマア、氣も違はいで。

ト泣かうとするを、彌兵衞、佐次兵衞、また後にて、仕方する。お妻、氣を替へ

八郎兵衞さん、一體お前の身の上を、よう思うて見やし



初演の



絵番附

やんせ。例へわたしが、女房にならうと思うたとて、肝心の内方には、おくのさんと云ふおかみさんがあつて、お前は入り婿、今までは夢中で暮らしたけれどな、わたしや急に云ひ交した

八郎 ヤ。

つま 可愛い男が出來たに依つて、その方へ行けばこの身の出世なり、又お前に附いて居ては、一生涯日蔭の身で、いつまでも術ない目をせにやならぬ。これ程モウ、知れた事はないわいなア。

喜助 それ〳〵、それがいつちいゝ料簡サ。

八郎 すりや、その理窟が今解つて、それでおぬしやア、襟に附くのぢやな。

つま アイ、マア、襟と云や襟、なんぢやゝら譯はないわいなア。

八郎 エヽ、さう云ふ穢ない根性ぢやアなかつたが、いつの間にさうした。エヽ、うぬは。

ト思ひ入れ。

喜助 なんだ〳〵。血相變へてどうさつしやる。大事の女郎衆に、手でも出しや免さぬぞ。

八郎 ヤイ〳〵、お妻、それでおぬしやア心が濟むか、それで立つか。

つま なんの、切れてしまうたら、いさくさはないわいなア。

八郎 イヽヤある。これまでと云ひ、今宵の手詰め。云つた詞を覺えて居るか。イヤサ、忘れはしまい。覺えて居るか。

つま よう覺えて居る。よう覺えて居るけれどな、それもこれも無茶苦茶と、エヽ、ツッともう、いつそ打明け

ト云はうとして、あたりへ氣を兼ね、術なき思ひ入れ。

エヽ、。

トあり合ふ茶碗を打ちつけ、微塵に割り、これにて氣を替へ

サア、わたしや今、夜の明けたやうに思ふわいなア。お前もわたしにかゝつて居やしやんしてはな、内方も治まらず、何かの邪魔にもなる程に、美しう切れてしまうた方が、兩方よしぢや。ナアおかみさん。

いま それ〳〵、よう思案して見たならば、それが尤もさうな事。

トぢつと俯向く。

八郎 エヽ、うぬはなア〳〵。

トいろ〳〵無念のこなし。

つま　サア、憎からう〳〵、けれど、退きしなと云ふものは、どうで丸うは行かぬ。憎いと思うて、ひよつと又、短氣な事などしなさんすと、お前の爲に。サア、わたしばかり死ぬ事は厭はぬけれど、何事もお前の身が大事。イヤ、千も萬もない、わたしが氣は、もう水臭うなつて居るぞえ。その水臭い者を、どうの斯うのと、思うて下さんしたと云うて、詮ない事。必らず腹は立てさんすな。あんまり甲斐性のないのでホッとして、とんと嫌になつた。ふッつりと思ひ切つて下さんせ。わたしは又これから、新らしい男の方へ行て、榮耀せにやならぬわいなア。

八郎　ムウ、

トロ惜しき思ひ入れ。お妻、額を押へ、涙を隱し、俯向いて居る。此うち、始終、彌兵衛、佐次兵衛、思ひ入れあるべし。喜助、立ちかゝり

喜助　なんだ八郎兵衛さん、お前口惜しいか、無念がるのか。憚りながらお前の身分で、仲町通ひは、ちつと御勿體ない色事だと思つて居たが、大きな間違ひ。あの位に云はれたら、もう殘り惜しい事はあるまい。サア歸りなさい。一人で行きにくかア、引摺り出して

トかゝるを、見事に投げ出し

八郎　腕なしめ、寄るな。おれを見事に突き出させた、男の面を見ぬうちは、貧乏ゆるぎもしやアしない。大方そこらにまじ〳〵と、いゝ子の振りでうせるだらう。そのわれが色と云ふは、

トお今を引退け、お妻を捕へ

サア、それを云へ。その男を吐かせ〳〵。

ト胸倉を取つて詰なむ。此うち見兼ねて、彌兵衛、出て來り、八郎兵衛を振り放し、ちよつと立廻つて、兩人、キッと見得になり

彌兵　小賢しながらおれ樣だ。

ト合ひ方、舞臺へ出て來る。

八郎　ヤア、おぬしやア彌兵衛、そんならこの頃、噂のあつた

彌兵　一度は義理よ、二度は太鼓、そのじやらつきが誠となり、撥も入らずに破らせた、新規新米新色事。お妻が間夫はこの彌兵衛。

八郎　なんと。

彌兵　末は女房の約束も、屏風の影でこそ〳〵と、さしで極めぬ三つ鼎、親に渡つた深い仲。

佐次　オヽ、丁度似合ひと思ふから、互ひの胸を聞いた上、如何にも貰はう遣りませうと、この親が納得した、天下晴れての娘が戀婿。

ト云ひながら出て來る。八郎兵衞、これにてグツと急いて

八郎　コレ、彌兵衞、一座の義理は女郎の表、内證は兄弟分、も一つ刎げば家來筋。その大恩のおれを突き出し、見事お妻を女房にするか。

ト突きかゝつて云ふ。彌兵衞、ヂツと思ひ入れあつて

彌兵　口でまだ〳〵面倒だ。嘘か誠は、コレ。

トお妻を圍ひ、起證を擴げ、お妻が指もろとも、八郎兵衞に見せる。

八郎　ヤア、こりやお妻が起證。

彌兵　二世までと夫婦の固め。

八郎　うぬを。

ト彌兵衞に立ちかゝる。

喜助　手向ひすりやア

ト取りつくを、毆り倒し、直ぐにお今を引きのけ、彌兵衞が胸倉を、キツと取つて

八郎　うぬ、畜生め。

ト無念の思ひ入れ。

彌兵　素性を糺しやア乞食非人、神も佛も同じ人間。昔は昔、今は今。五文と五文のこの彌兵衞。大事の色を取られたは、其方のうんのろ。あれ程に云はれても、未練を殘す心から、胸倉を取つてどうするのだ。イケ見つともない人そばえだ。

ト振り放す。

八郎　もう料簡が

ト脇差に手をかけ、立ちかゝり、拔かうとして、正宗と心附き、寶物ゆゑ、これでは切れぬと云ふこなし。皆々、思ひ入れ。お妻、始終泣いて居る。彌兵衞、ヂツとなつて居る。

八郎　エヽ。

ト脇差に手を掛けたなり、無念のこなし。この時奥より、お才、走り出て、八郎兵衞に取りつき

さい　コレ、八郎兵衞、身請けの後金が埒が明かぬに依つて、もう文藏が方へ渡すと云ふ相談最中。あんまりの悲しさに、爰までソツと拔けて來た。コレ、どうせうぞいなう。

ト急いて云ふ

八郎　すりや、後金が遲いゆゑ。
さい　オイナウ。どうぞ金は出來ぬかいなう。
ト矢張り取りつき、泣く。お妻、彌兵衞も、互ひに思ひ入れ。八郎兵衞は彌兵衞を見て、脇差に手をかけたり、お才を見て、辛抱の模樣、いろ／＼あつて
八郎　大事ござりませぬ。まだ六ツは打たぬに依つて
さい　それでももう、文藏が方の金を取つたさうなわいなう。
八郎　すりや、もう金を
ト急いて、行かうとする。お才、始終取りついて居る。
彌兵　八郎兵衞、待て。
八郎　なにを。
ト立ちとまり、振返る。
彌兵　すりや、もうお妻に、この上とも云ひ分はないな。
トきつと云ふ。これにて八郎兵衞、立ち戻り、彌兵衞、お妻を見て、無念の思ひ入れ。お才、矢張り附いて來り
さい　コレ。
ト取りつき、泣く。
彌兵　この後未練のないやうに、男らしくすつぱりと、譯を附けて歸りやれな。
ト八郎兵衞、また脇差へ手を掛ける。思ひ入れ。彌兵衞もこなし。お才、取りつき
さい　コレ、早まつてたもるな。わしやどうぞいなう。
トしがみつき、泣く。八郎兵衞、お才と脇差を見て、身を慄はし、ヂツと堪へる思ひ入れ、いろ／＼あつて、氣を替へ
八郎　思ひ切つた、思ひ切つたぞ。今までは犬のやうな賣女めに騙されて、義理のある家も治めず、おのれゆゑにや、今までの體裁。思ひ出して見ると腹が立つわい、口惜しいわえ。云ふ事もあるが、もう云はない。今までの事を、ない昔だと思やア、忘れてしまつてなんでもない。さう云ふ土性骨のうぬへ、何を云つても馬の耳へ風、蛙の面へ水。蟇蛙め、まじ／＼しやアがるな。もうフッツりと思ひ切つたぞ。ナニ、思ひ切るからにやア、洲崎の濱へ一文凧の、吹き飛んだ程にも思はねえわい。
トこの時、お妻、ちよつと顏を上げ、また俯向く。
嬉しいか、嬉しからう、嬉しさうな面だ。ふッつり思ひ切るからにやア、金輪奈落の底までも、うぬが面は見やアしねえぞ。この後道山道で逢つても、びく／＼するな。

何も逃げ隠れする事はないぞ。月夜の晩でも仲町の眞中を、大手を振つて歩きやアがれ。われがやうな野良犬に、ナニ、拳一つ當てるものか。畜生女め、猫又め。うぬはまだ、おれがひよつと拳でも當てやうかと思つて、怖がつてうせやアがるな。エヽ、馬鹿々々しい。こんな所に未練らしく、愚痴を云ふでもない。これからは岩田屋へ行つて、屋財家財を賣つてなりと、身請けの片をつけようかい。

ト行きかゝるを

喜助　コレ、エヽ、御託はそれで、もういゝか。投げられた返報に

トかゝるを、見事に、取つて投げ

八郎　お才さま、サア、ござりませ。

ト唄になり、お才が手を引き、八郎兵衛、足早に、向うへ入る。喜助、體の痛むこなしあつて

喜助　オヽ、イタヽヽヽ。うぬ、よくおれを投げたな、待ちやアがれ。

ト合ひ方にて、喜助、後を追ひかけ、向うへ走り入る。暮れ六ツ、鳴る。皆々、後を見送り、お妻、ワツと泣き伏す。

彌兵　道理だ〳〵、尤もだ〳〵。

つま　アイ〳〵。

ト大泣き。三人、介抱して

いま　出かしなさんした。それでこそ男への心中。

彌兵　其方の今の辛抱で、八郎兵衛が身分も立ち、古手屋の内も治まる。

佐次　モシ〳〵、あつて過ぎた云ひ譯は、皆様がよう御存じ。それよりは身請けの切端、いま打つたは、ありや暮れ六ツ。

彌兵　成る程、頼みを聞き入れ、難儀を救ふ七十兩。

ト財布のまゝ、お妻へ渡す。

つま　エヽ、忝ない。

ト頂く。

彌兵　ちつとも早く、それで身請けを。

佐次　ア、イヤ、娘が行ては岩田屋で、八郎兵衛と落ち合ふと、この場の事は水の泡。彼れこれ云ふ間に時刻が延びる。こりや、おれが裏口から、おくのさまから來たつもりで、埒明き次第岩田屋から、八郎兵衛へ渡せばよいではないか。

ト行かうとする。

つま　アヽ、コレ。

ト以前の手附け證文を出す。彌兵衞、取つて

彌兵　ソレ。手附け證文。

ト佐次兵衞、取つて

佐次　これがなければ、員數が解らぬ。

彌兵　そんなら首尾よく

佐次　行て來ませう。

ト門口外まで走り出で、思ひ入れあつて、そろ／＼花道へ行き、金と證文を改めて居る。舞臺はこれに構はず、お妻、ホツと思ひ入れ。心の緩むこなし、よろしく

つま　モシ、彌兵衞さん、お才さんの身請けの方が附く上は、これで死んでも嬉しうござんすが、たつた一つ悲しいは、いま八郎兵衞さんが、奈落の底まで顏を見ぬと云はしやんした。そんならわたしやいつの世に、この云ひ譯をせうぞいなア、エヽ。

ト泣き伏し、これより目を見詰め、癪の發るこなし。

彌兵　オヽ、尤もだ。この彌兵衞もおくのどのに、頼まれたばつかりで

トしいたりとなる。

いま　オヽ、コレ／＼、癪が發つたわいな／＼。

トうろたへる。此うち。佐次兵衞、證文を懷へ入れ金を財布へ入れる。

彌兵　大事ない／＼、反らさぬやうに。

トお妻を抱き上げ

コレ、うろたへずと、黑丸子だ。

いま　アイ。

ト佐次兵衞、これを聞いて

佐次　ナニ、癪が。

ト思はず舞臺を見る。彌兵衞もこれを聞き附け

彌兵　ヤ、あの聲は。

ト佐次兵衞、ちやつと財布を懷へ入れる。チコンと木の頭。お妻、ウンと反るを、彌兵衞、ヂツと押へて梃子でもいけぬ。

トこなし。佐次兵衞、構はずに、向うへ入る。お今も思ひ入れ、よろしく、キザミにて

ひやうし幕

大切

仲町裏手の場
寺町墓所の場

淨瑠璃「文月恨鮫鞘」　常磐津連中

役名＝香具屋彌兵衛。矢島勇藏。柏木助三郎。梶岡文藏。利倉屋佐次兵衛。岩田屋勘兵衛。駕籠舁き、彌助。同、三。同、六。岩田屋お才。丹波屋お妻。古手屋八郎兵衛。

本舞臺正面、二間の二階、前側、伊豫簾を下ろし、この下、通り、忍び返し附きの黒板塀、眞中に切り戸、出入り。上の方に同じく一間の二階、前側、青簾、この下、建仁寺垣、これは隣家の心。この間、木戸口。すべて粂本横手の模様。騷ぎ唄にて、幕明く。

ト右騷ぎの中へ、時の鐘を打ち込み、向うと下座より卵賣り、鮓賣り、按摩、茹豆、夜蕎麥賣り、その外ぞめきの仕出し出て、捨ぜりふにて、別れ入る。此うち向うより園藏、羽織、着流しにて、扇をぱちつかせ、船宿、提灯を持ち、先に立ち、出て來り、舞臺附け際にて

船宿　モシ、園藏さん、無性に引摺つて來なすつたが、お前どこへ上がる氣だえ。

園藏　船州、聞かつし。今夜親方が五明樓へ來さしつたから、後から附け込んで、百足引取つたを無きものにして表櫓へ上がる氣よ。

船宿　へエ、わつちやア又、海かと思ひやした。

園藏　これサ、無作法な。

ト兩人、舞臺へ來ると、下座より、棒公、着流し、尻を端折り、手紙を持ち、スタ〳〵出て、双方摺れ違ひ、棒公、思ひ入れあつて、引返し

棒公　モシ〳〵、そこへ行きなさるは、園藏さん、頭ぢやないかえ。

ト園藏、船宿、立ちどまり

園藏　誰れだ〳〵。オヽ、棒公、どうして來た。

棒公　イエモシ、鎌右衛門頭が、急に目が惡いから、この手紙をお前へ早く屆けてくれ。先は知れて居る。五明樓だと云ふから、宙を飛んで行つて聞いたら、たつた今表櫓へと教へたに依つて、片息になつて來やした。

團藏　ヤレ〳〵、そりやア御苦勞。明日屆けてもよからうに。

棒公　イエ〳〵、なんだか急な事だとサ。委細はこの手紙に。

ト手紙を渡す。

團藏　また埒もない事だらう。

ト云ひながら、封を切り、船宿の提灯にて見て

なんだ「私し儀、急に眼病にて、大切淨瑠璃の觸れ讀めかね候ふ間、早々御歸り御讀み下さるべく候ふ、急な事ゆゑ、急の爲左に認め上げ候ふ……この所只今の續き幕、淨瑠璃名題、お妻八郎兵衞、文月恨鮫鞘。太夫、常磐津兼太夫、三味線、岸澤式佐、上調子、岸澤松藏、相勤めまする役人、澤村田之助、市川市藏。

ト讀みさし

成る程、龜右衞門と云ふ人も、馬鹿念な男だ。コレ、見さつし。

ト手紙を持つたまゝ、棒公に見せる。

棒公　その爲め口上左樣に……まで書いてあるやつサ。

團藏　サア、歩ばつし。

ト始終、騒ぎにて、三人、下座へ入る。ト直ぐに前彈きにかゝり、上手の二階の簾、卷き上げると、常磐津連中、居並び、直ぐに淨瑠璃になる。

へ憂きと云ふ、限りは穐の一夜より、重なる思ひ深川と、聞くさへ辛き星の數。

ト合ひ方になり、正面の簾上がると、內にお妻、行燈に向ひ、書置を書いて居る。

へ晴れぬ今宵は行燈の、灯影も共に女氣の、細き闇りを搔き立つる、その簪の足さへも、二心とやさぞやさぞ、身の云ひ譯にそれぞとも、云はれぬ義理に我が名さへ、妻とは云へど妻ならぬ、結ぶの神もすきぎれに、かきあたりては後の世の、緣も契りも薄紙と、書き置く筆の藻汐草、淚に薄き墨の色。

ト合ひ方。お妻よろしくありて

つま　ほんに思へばこの身ほど、因果な者が世にあらうか。母さんには小さい時に死別れ、父さんの胴慾から、十五の年から勤めに出で、間もなう八郎兵衞さんと云ひ交し、互ひに變るな變らじと、苦界のうちの樂しみに、この世は愚か二世三世、添ひ遂げうと思うたに、その甲斐さへも今日の仕儀。彌兵衞さんの深切に、退引きならぬ義理

詰めゆゑ、心に思はぬ愛想づかし、さぞ腹が立つたでござんせう。これまでの深切に、打つて變つたる憎て口、腹も立たいでなんとせう。これとても・みんなお前の、苦勞をも助けたさ。二つにはお內方の譯。とてもお前に添はれぬからは・死ぬると覺悟極めしこの身。この書置を見なんして、ちつとは恨みも晴れるなら、樂しみは未來の縁。さは云へま一度機嫌のよい、お顏を見て死にたいわいなア。

へいとゞ朧に秋の癖、空定めなき天の川、月よ心よ曇り勝ち、戀路の鬼か丹波屋の、妻に誓ひし金言も、いたづら髮にとめ伽羅は、殘るも憎や香具屋の、色香燃ゆるか古手屋は、仇と悋氣を解き分けて、薄き契りを八郎兵衞。

ト合ひ方、時の鐘、蟲の音になり、向うより八郎兵衞、頬かむり、以前の一本差し、思案の思ひ入れにて、出て、花道にとまる。

へ今宵限りと突き詰めし、鐘もろともに忍び出で、秋風寒く身に染むも、つれなさ增るその人を、やつきり、きり／＼、きり／＼す、すだく千草も宵の夢、浮世の夢と鮫鞘の、鯉口くつろげ落し差し、はや後夜の鐘指折りて、一つ二つや三つ四つ、夜なか四つ筋四つ辻を、川邊傳ひに上がりつ下りつ幾度か、やもめ烏のうろ／＼と、戀の奴に使はれて、彼處に來れば身の上を、彈くか語るか佇みて、內の樣子を窺へり

トよろしくあつて、舞臺附け際へ來り

八郎　人の心と飛鳥川、變るが習ひと云ひながら、あのお妻に限つて、よも／＼と思ひの外、打つて變つた今宵の仕儀。大恩受けた御主人の、若旦那の御身の御難儀。今宵中に七十兩の金が出來ねば、とても生きては居られぬ義理。面目ないは、お才どのと云ひ女房おくの、阿母の惡企みとは云ひながら、祝言したその夜から、あのお妻が所へは、夜毎々々に通へども、側へと云うては一夜さも。ついに一度の悋氣もせず、おれを思ふ女の貞節。それに引替へ八郎兵衞は、今宵中に身を果すも、前生からの約束と、諦らめてくれ女房ども。何事も請負うた金が敵の世の中ぢやなア。

ト聞き耳立てる。

へその仇人を待つぞとも、內は白鷺しよんぼりと、濡れた仲ぢやと人さんに、羨やまれたもはや昔、

思はれ通しの入れ黒子、命と云ふ字を書いたのも、夢其に變りは夏毛の鹿の、慕ふわたしが心をば、にもさぞや今頃は、恨み云うたり腹立つて、緣も切る氣でござんしよが、コレ、爰から拜んで居りますと、人目思へば詞立てゝ、云はぬ心の暇乞ひ。それと知らねば束の間も、心許さぬ目釘竹、しめる夜露に更けて行く、奥の座敷はまだ騷ぐ。

ト兩人、よろしくあつて

アレ〳〵、あの二階の樣子を聞けば、慥かにおれが身の上を、唄ひ囃すか。あれも大方、彌兵衞めが仕業。いよいよ、以て免されぬ。二人ともに眞ッ二つ。

〽覺悟極めし恨みの鮫鞘、尻引ッからげ身繕ろひ、上にはやう〳〵書き殘す、後の噂の封じ目も、互ひに浮名やとゞむらん。

ト八郞兵衞、よろしくあつて、舞臺にと窺ふ。お妻、書置を書きしまひ、封じにかゝる。淨瑠璃切れると、下座の合ひ方、蟲の聲。奥にて

喜助　お妻さん〳〵、彌兵衞さまがお呼びなされまする。

彌兵　お妻〳〵。裏口へ出て、ちつと涼まう。早く來や早う來や。

ト八郞兵衞、その聲を聞いて思ひ入れ。お妻、書置を隱し、こなしあつて

つま　アイ〳〵、いま行くわいなア。

ト立ち上がる。チヨンと上下の簾下りる。八郞兵衞、さては、とこなしの所へ、下座より、三、六、四つ手駕籠を舁き、出て來る。これにて八郞兵衞、小隱れをすると、後より、文藏、勘兵衞、佐次兵衞、いづれも尻からげにて、出て來り、皆々、舞臺にて

勘兵　これサ三公、六どの、大儀だの。

三　なにサ、商賣と云ふうち、常住目をかけて下さる旦那の御用。

六　殊に頼み手が岩田屋さんなり、モシ、しつかりでござりやせうね。

文藏　オヽサ、望みほど身共がくれる。早くやれ〳〵。

三　そんならモシ、お約束の所へ屆けたなら。

六　寺町の裏通りで待つて居ます。

文藏　エヽ、くどい奴だ。

三六　サア、やッつけべい。

ト騷ぎにて、兩人、舁き上げ、向うへ入る。

勘兵　さてマア、これで身請けの埒も明き

佐次　おめでたう存じます。
ト三人、行かうとする。八郎兵衞、思ひ入れあつて、勘兵衞を引ッ捕へ
八郎　勘兵衞、身請けとは氣がゝりだ。して、そりやア誰だ。
勘兵　知れた事、お才が身請けだ。
ト三人、思ひ入れ。
八郎　默りやアがれ。あれ程宵に朝までと、男同士が番つた詞。
勘兵　そりやア出鱈目、口約束、證文は今日の日限り。
八郎　サ、その肝心の證文に、二十八日限りとあるからは、夜の九ツまでは約束の日限り。まだやう／＼四ツそこら、外へ身請けはならないぞ。
佐次　コリヤ、證文々々と、子供を脅すはこれか。
ト懷より、以前の證文の引裂いたるを出だし、持つたる提灯にて、八郎兵衞に見せる。
八郎　ヤ、その手附け證文は。
佐次　オヽ、娘がくれた。例へお主が手にあつても、金が出來にやア役に立たぬ。それよりあなたに上げまして、御祝儀でも頂けと、孝行娘がおれにくれた。
文藏　それ／＼、あの證文があるうちは、日限りのなんのと面倒ゆゑ、十兩遣つて破らせた。
八郎　すりや、預けて置いた證文まで
佐次　まだ／＼、今度のお客の彌兵衞さまは、われがやうなひつてんとは違ふ。初對面が、コレ、七十兩。
ト以前の金を、財布の儘出して見せる。
勘兵　それぢやアお妻も喰ひ附く筈。おれも金ゆゑ喰ひ附いて、お才はあなたへ上げてしまつた。
八郎　イヤ、それぢやア濟まぬ。白い黒いを分けにやア立たぬ。
ト勘兵衞にかゝるを、文藏、佐次兵衞、立ちかゝり、三人、滅多打ちに立廻る。八郎兵衞、手に餘るゆゑ、拔く心にて、柄に手を掛け、ハツと心附いて、たるむ。この間に、三人、八郎兵衞を毆り倒し、さん／＼に打擲する。これにて八郎兵衞、衣裳、引拔きになり、トド、文藏、ちよつと當てる。八郎兵衞、ウンと悶絶する。
文藏　いつその事に。
ト柄へ手をかけ、立ちかゝるを
勘兵　モシ、必らず短氣を

ト留める。

佐次　あんな奴に構はずと

文蔵　サヽ、來やれ／＼。

ト合ひ方、蟲の聲にて、三人、いそ／＼、向うへ入る。

ト下座より、中間、留守居提灯を提げ、後より勇蔵、袴、大小にて、出て來り、中間、思はず八郎兵衛に行き當り、これにて、八郎兵衛、心附きて

八郎　おのれ勘兵衛。

ト立ち上がるを、勇蔵、透かし見て、引き留め

勇蔵　ヤヽ、そちや八郎兵衛ではないか。

ト八郎兵衛、勇蔵を見て

八郎　ヤ、あなたは矢島勇蔵さま。この所へはどう致して。

勇蔵　只今の樣子、其方が形。こりや、口論でも。それは格別、一昨日洲崎に於て約束の通り、よんどころなき招待にて、松本へ罷り越し居るところ、助三郎が參り、申すには、三光の正宗首尾よく手に入り、大切な品ゆゑ、八郎兵衛が手より差上げたく、歸宅の節、仲町桑本と云ふ茶屋へ立寄り、彼處に其方を待ち受け、渡さんとの演舌ゆゑ、取るものも取り敢へず、その趣き屋敷へも申し遣はし、暮れ過ぎ當所へ立寄り見れば、其方も居らず、時刻の違ひもあらんかと、所用を辨じ又ぞろ只今、訪れ聞くに、一向相解らぬ樣子ゆゑ、是非に及ばず、罷り歸る途中。爰で逢ひしは互ひの仕合せ。

八郎　ハツ、お待受けの間違ひは、云ふに云はれぬ仔細ゆゑ、皆私しの不調法、幾重にも御免の儀を。

勇蔵　して、一腰は相違なく

八郎　段々あなたのお情にて、取戻しましたる三光の正宗。

ト腰に差したる、脇差を差出す。

勇蔵　先づは安堵。念の爲、イザ。

ト受取り、提灯引寄せ、一腰を拔いて、よく／＼見て、驚ろき

ヤヽ、こりや三光の正宗と、似ても似つかぬ眞赤な僞せ物。

ト八郎兵衛、恟り。

八郎　エヽ、なんと仰しやります。

勇蔵　ヤイ、八郎兵衛、助三郎こそ若輩とは思はうが、身に引受け世話する其方、なぜとくと改め差上げぬ。

八郎　すりやこの一腰は

勇蔵　尤も相州物とは見ゆれど、紛失の中心でない。只今も申す如く、役人中へも達したれば、その由お國へ注進



初演當時



の 錦 絵

あれば、某までが不念。コリヤ、繰り言ながら正真の正宗、行くへ知れぬが、もし外より詮議仕出だす時は、助三郎が歸參は愚か、引ツ捕へて切腹。とくと思案を致した上、返事を相待つ。さらば。

ト始終合ひ方にて、夢藏、脇差を戻し、ツイと向うへ入る。八郎兵衞、ヂツと思ひ入れ。脇差を取上げ

八郎 チエ、、人の運の傾むく時は、斯うも凶事の重なるものか。すりや、こりや似せ物。オ、、、。

ト脇差を持ち、向うへ行き、後へ戻り、いろ／＼こなしあつて、ヂツとなり

お才さまの勤め奉公、賣女めが愛想づかし、元の起こりはこの一腰。まだしも手に入る喜びは、若旦那の歸參をと、たつた一つの綱も切れ、踏んだり蹴たりの生き恥は、世界へ面が出されねえ。チエ、、口惜しい。

トいろ／＼こなしあつて、へたる。ト時の鐘、鳴り、奥にて、九ツの拍子木を打つ。八郎兵衞、これを聞いて悔り

ヤ、アレ／＼／＼、ありやもう九ツ。お才さまを連れて行く、約束の時が切れゝば、助三郎さまも生きてはござらぬ。こりやモウ、絶體絶命だわえ。

ト きつと思ひ入れ。この時、板塀の内にて

彌兵 お妻／＼、サア、涼まう、先へ行きやいの。

つま アイ／＼、裏口はよう風が入るわいなア。

トこの聲を聞いて、八郎兵衞、思ひ入れあり、手ばしこく身繕ろひして、右の脇差を拔き、後へ隱し、窺ふ。好みの合ひ方、蟲の音、時の鐘の銅羅にて、切り戸を開け、彌兵衞、お妻が手を引き、何心なく出て來るを、窺ひ寄つて

八郎 彌兵衞か。

つま 八郎兵衞さん。モシ。

ト彌兵衞を引きのけ、書置を持ち、八郎兵衞が側へ寄るを

八郎 お妻め、うぬを。

ト切りつける。お妻、アツと倒れる。彌兵衞、コレと抱き留める。この時、本雨、烈しく降つて來る。八郎兵衞、支へる彌兵衞を振りほどき、一太刀浴びせる。彌兵衞、アツとタヂ／＼となる。八郎兵衞、行くを、お妻、起き上がつて留める。彌兵衞、手を負ひ、是非なく向うへ逃げて入る。これより、凄き合ひ方、一つ鉦、蟲の音、本雨、頻りに降つて、兩人、よろしく立

廻り、蘇枋だらけになり、トヾ、むごくお妻を切り倒す。此うちお妻、簪を、八郎兵衛が懐へ入れ、倒れるを、乘つかゝり、止めを刺し、ホッと思ひ入れ。この時、早拍子木になり、切り戸と下座より、若い衆大勢、捧、弓張りを持ち、出て來り、この體を見て

大勢　ソリヤ人殺し。

トてんでに棒を振り上げ、打つて來る。八郎兵衛、無性に脇差にて、薙ぎ廻る。これにて、大勢、向うへ逃げて入る。花道角まで追ひかけ、キッと思ひ入れあつて

八郎　おのれ彌兵衛め。

ト時の鐘の送りにて、八郎兵衛、向うへ走り入る。この道具、ぶん廻す。

向う一面の玉椿の卒塔婆垣、いろ〳〵の石塔大分。後ろ黒幕、よき所に墓原の高燈籠、上げ下ろしあり、すべて深川寺町裏手の模樣、よろしく、爰に佐次兵衛、勘兵衛、三、六、傘を持ち、金を分けて居る。雨車、寺鐘にて、道具納まる。

ト皆々、舞臺へ出て

佐次　さて、物事が斯う巧く行くものか。

三　それ〳〵、さぞ今頃は文藏さまが、いゝ事をしてござるだらうよ。

六　併し、お才があの樣子ぢやア、急に色事はなるまいぜ。

勘兵　そりやア彼方の御勝手次第。此方は褒美の符牒分け。

佐次　一つしめべい。

四人　よい〳〵〳〵。

ト手を打つ。向うより太平次、前幕の形、尻からげにて、走り出て來り、皆々を見て

太平　ヤア、みんな揃つて、爰に居たか。

ト皆々も太平次を見て

佐次　ヤア、お前は太平次さん。

三人　どう云ふ事で今頃に。

ト此うち、太平次、舞臺へ來り

太平　どう云ふどころか聞いてくりやれ。八郎兵衛が惡事を見出さうと、仲町をへちまうたら、切つた突いたと大騷ぎ。その場へ行つて見たところが、人殺しは八郎兵衛、切られて死んだは丹波屋お妻。

佐次　ヤア、そんなら娘は。ホイ。

勘兵　して、八郎兵衛が身の上は。

太平　まだ彌兵衛をも殺す氣で、逃げたを追ひかけ行つたと云ふ。樣子を見ようと、慕つて來たが、あの騷動ぢやア、まだどこへ刎ねが行かうも知れぬぞよ。

三六　イヤア。

勘兵　この場の四人は懸り合ひ。

佐次　こいつはいつそ、此方から、仕掛けて行つて、娘の敵。

三　殺したところが、お祟りなし。

六　こいつはおれも、半口乘るべい。

佐次　ソレ、捜せ。

ト身拵らへして、皆々、捨ぜりふにて、棒ちぎり、いろ〳〵の物を持ち、下座へ、ワヤ〳〵云うて、入る。

ト本行黃葉のツトメになり、本雨やんで、向うバタバタにて、彌兵衛、前幕の書置を持ち、走り出て來るを、八郎兵衛、追ひかけ、花道にて、兩人、いろ〳〵立廻りながら、舞臺へ來り、彌兵衛はどうぞ書置を見せようとする。八郎兵衛は彌兵衛を切らうと、この模樣の立廻り、彌兵衛、度々、危ふく持て餘し、石塔の間より、遁がれ廻り、トヽ、又一かせ切り附けられ、ウンと倒れるを、八郎兵衛、仕留めんと立ちかゝる。この時、また本雨、頻りに降り來り、下座より、以前の三階、殘らず、若い衆、皆々の仕出し、捨ぜりふにて出て來り、八郎兵衛を見て、皆々、立ち騷ぎ、てんでに打つてかゝる。これにて、入り亂れになるゆゑ、八郎兵衛、彌兵衛を取逃がす。彌兵衛も是非なく、書置をそこに捨てたまゝ、下座へ逃げて入る。跡は皆々、ごつちやに立ち騷ぐを、八郎兵衛、脇差にて無性に切り立てる。これにて皆々、叶はず、向うを下座へ、逃げて入る。八郎兵衛、これを追ひかけ、彌兵衛を尋ねる心にて、花道中程へ行く。彌兵衛、見えぬゆゑ、取逃がせしか、殘念と云ふ心意氣、こなし、いろ〳〵あつて、トヽ、ホイと、ばつたりと下に居て、息切れのこなし。この時、本雨やんで、一つ鉦の念佛になり、捨ぜりふに、彌兵衛を取逃がせし口惜しさを云ひ〳〵、又々本舞臺へ來り、いろ〳〵こなしあつて、持つたる脇差を離さうとして、離れぬゆゑ、大石塔の臺石へ、肱を打ちつける。これにて脇差、小手を離れて、手の痺れ痛むこなしよろしく、息切れするゆゑ、あたりを見廻し、同じく石塔の、花活の竹筒を取つて來り、樒を取り捨て、右の水を吞み、むせ返り、やう〳〵心を

靜め、覺悟を極めし思ひ入れあつて、あたり見廻し、高燈籠を切り落し、これを側へ置き、右の臺石へ腰を掛け、うろ／＼と諸肌を脱ぎ、腹を切らうとして、フト彌兵衞が置きし、お妻が書置に目を附け、不思議さうにして、構はず腹切らうとして、心にかゝる思ひ入れあり、何心なく見て

八郎　書置きの事。

ト讀んで、何をと云ふこなしにて、拋り棄て、また腹切らうとして、ヂツと書置に目を附け、思ひ入れあつて、脇差の先にて、掻き寄せ見て

「生は死の基、逢ふは別れの始めとは、兼ねて傳へ聞き參らせ候へども、今更のやうに思はれ、胸も迫り、筆も立てども定かならず。」

ト讀んで、ナニ畜生めがと打ちつけ、脇差を取り直し、覺悟極め、腹切らうとして、兎角心にかゝると云ふこなしにて、また脇差にて、掻き寄せ、見て

「誠に御許樣、我が身、假初めならぬ六年の御馴染み、末の緣も頼み暮し候ふところに、思はずもお主のお身の」

ト讀みさし、下に置き

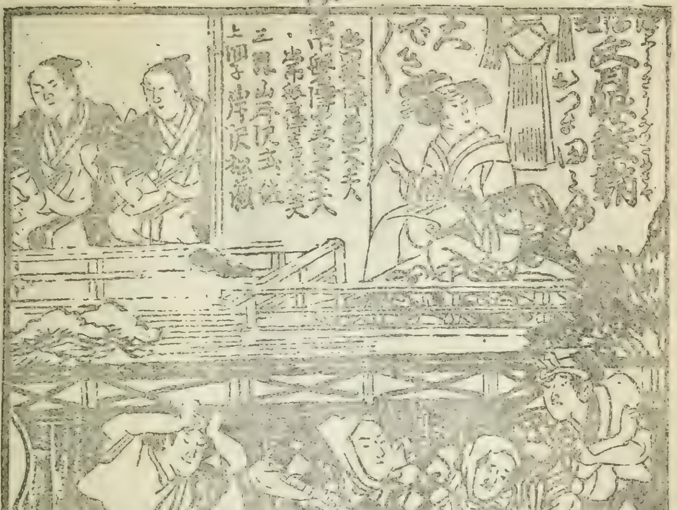
「御請合ひ申し候ふ金子の、心當ても間違ひ、當惑の折から、彌兵衞さまのお頼みには、わざとそもじ樣につれなく當り、愛想つかし、一旦緣を切り候はゞ、古手屋の内方も治まり、差當たり御難儀になり候ふ、七十兩の金も調ひ申すべきとの事、それゆゑ、彌兵衞さまの敎へに任せ候ふゆゑ、七十兩の金を下され、即ちその金と手附け證文を、父樣に渡し候へば、お才さまの身請けも埒明き、御顏も立ち候はんと存じ候ふ、只何事も御身の爲と、心に思はぬ愛想づかし申せし時は、劔を呑むより悲しく、とても存らへぬ命、先立つ覺悟に極め候ふ、亡き跡にてお疑ひ御晴らし下され、未來の契りを待つより外御座なく候ふ、只一遍の御回向頼み候ふ。南無阿彌陀佛。八郎兵衞さま、妻。」

ト讀みしまひ、脇差を捨て、身を慄はし、いろ／＼こなしあつて

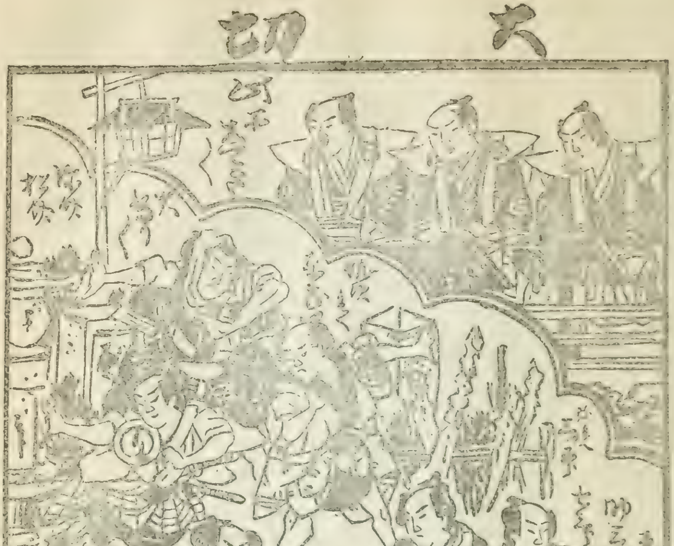
チエヽ、聞えぬぞよ、お妻。斯う云ふ事とちつとでも知つたら、仕樣もあらうのに、今となつちやア、屆かぬ繰り言。家を思ひ、この身を思ひ、彌兵衞が深切。おれが短氣を推量して、命を捨てる覺悟の書置。する事なす事鵤の嘴。未來で云ひ譯、南無阿彌陀佛。

ト脇差を取つて、腹切らうとする。下座より彌兵衞、

三幕目



初演の



繪　番　附

彌兵　傷口を手拭にて卷き、走り出て
コリヤ待て、八郎兵衞、早まるな。
ト留める。
八郎　彌兵衞か。面目ない、南無
トまた腹切らうとする。此うち、下座より、助三郎、お才、勇藏。文藏に繩を掛け、彌助、正宗を持ち、走り出て來り
助三　ヤレ、待て、八郎兵衞、切腹には及ばぬぞ。
ト留める。八郎兵衞、この體を見て
八郎　ヤ、、この樣子は。
さい　八郎兵衞、わしや無事で戻つたわいなう。
彌助　コレ、八郎兵衞さん、正眞の正宗は、不思議に洲崎で、わしが手に入り、幸ひ隣の道具屋へ、賣り拂はうと思つたところ、三光の正宗と極めがついて恟りし、宵の騷動聞くより早く、これを持つて駈けつけて、お二方を救ひ、お供いたしてござります。
勇藏　騷動の起りと云ふは、この文藏。早速召捕り、お國で成敗。
文藏　惡の報いと云ひながら、エ、、忌々しい。
勇藏　この上は助三郎は歸參。お才と祝言。
八郎　イデ、人殺しの申し譯。
ト脇差を取り直す。
彌兵　イヤ、正宗の盜賊と申し上ぐれば
彌助　幾人切つても死ぬにやア及ばぬ。
八郎　チエ、、忝ない。
彌兵　先づ今日はこれぎり。
トめでたく

打出し

文月恨鮫鞘（終り）

きのへさるわか建暦よろづ惠方の榮
久しよし

とら卯の間大磯に海道一の曲者は高麗寺の門番御存の江戸名物鬼王が初上下も損料の借着とみえぬ着拔ひ內な賄ふ月小夜に十六夜が色の譯しらぬ頓な弟の團三郎足ぬ目貫の片方ハ鶏上戸の百足屋金兵衛孝行息子は祐成に姿も二世と三世の緣結び近江に八幡は譜代秘藏娘の舞鶴がおやわかな文上べく候に一筆書の狩野の繪馬願主は然もてい滿町紙屋槌屋の名前も治兵衛男氣小春は町藝者町飛脚忠兵衛梅川が故鄕の二の江に粉屋の孫右衛門久離きつたる下駄の緒を異見の種蒔中田甫に七年以前の正夢は時致が箱根の渡船ふり出し競ふ繪双六寶　合の梅が谷に工藤祐經勝色の對面

御贔屓常春世話狂言

御慶會我扇

箱入臺附

〆而七しな



この時の一番目は菊五郎の五郎でしたからそれに因んで菊
五郎が松助時代の五郎の錦繪をお目にかけます

御慶曾我扇

役名――若侍時太郎。丹波八右衛門。横田要平次。判人、勘六。居候ふ、權七。道具屋源六。茶屋女房、おみの。番頭、萬太郎。藝者、紀伊國屋小春。藝者、お米。同、藤次。帽子、おとみ。女髮結ひおつな。茶屋娘、およし。家主、三右衛門。浪人龜谷忠兵衛。同娘、おさん。乞食坊主、傳海。壹蔦、大磯の虎。

序幕　深川富ヶ岡の場

知らせに行き口上觸れ入ると、直ぐに佃節になり、向うより四つ手駕籠一挺、これに勘六、判人の形。權七、治兵衛の所の居候ふにて附添ひ出て來り

權七　成る程。吉原からは餘ッぽどあるの。

勘六　さうサ、この梅川さんも、吉原の旦那の所に辛抱して、奉公して居ればいゝのに、どうもお客を振つてならねえ人ゆゑ、深川の砂打場、治兵衛どのゝ所へ鞍替へに行くのだが、樽屋の親方だけ、元金で相談を極めたその上で、矢ッ張り吉原の花魁の形。頭の物もすつぽり付けて遣るとは、豪氣な道引だらう。

權七　成る程、砂打場で吉原の花魁の形で出たら、素敵に流行るだらう。

ト この話しいうち、幕の内より、大磯の虎、深く頭巾をして出て來り、後より駕籠の内へ手を入れ、頭の物と頭巾を引ッたくり、一散に逃げ出し、土間の内へ隠れる。

兩人　泥坊々々。

ト 權七は駕籠に付き、幕の内へ入る。勘六は向うへ追ひかけて入ると、向うより、源六、道具屋の形にて出て來る。土間より、虎、のか〳〵上がり、源六に行き合ひ

虎　モシ〳〵、源六さん、

源六　エ、誰れだ。悸りさせた。

虎　わたしサ、虎でござりやす。

源六　オ、虎か。いゝ所で逢つた。いつやらてまへの所か

ら買つた鷄の目貫、ありやア片々ばかりか。

虎　なアに、兩方揃つて居りやす。もう一つの方は、わしがちつと入用があつて持つて居りやす。

源六　片々の値にしちやア、ちつと高いぜ。未だにどつこへも賣らず、爰に持つて居らア。

トちよつと出して見せる。

虎　ナニ、お前、高い事があるものか。ありやア一體友切丸と云ふ刀に付いて居た目貫。緣頭や鍔は疾に賣つて、わしが喰つたり呑んだりしてしまつたが、この目貫は北條家で、いま大層に探して居るさうだ。其所へ持つて行つて賣らうものなら大金になる。二つ持つて居れば、あんまり儲かり過ぎるであらうと思つて、お前とわしと一つ宛、別に賣る氣だ。潰しにしても知れたものだ。

源六　そいつは耳寄りだ。おれも北條家に心安い傳手があるから、其所へ持つて行つたら儲かるだらうわえ。

虎　まだ賣り物がござりやす。

トいま盜みし笄を出す。

源六　こりやア又、出所はよいかえ。

虎　氣遣ひがあるものか。わしがのだものを。

源六　てまへのだけに心遣ひだ。こりやアおれが預かつて置かう。

虎　そんならこの間に。

源六　おれが内へ來さつし。

虎　お賴ん申しやす。

ト兩方へ別れて入る。

本舞臺、三間の間、上手右の方、片鳥居。眞中、葭簀張りの出茶屋、床几二脚程並べ、この茶屋の下の方に菰を敷き、忠兵衛、深編笠にて鼓を打つて居る。およし、この茶屋の女にて仕出しに茶を酌んで居る。おさん、扇を持ち、仕出しに合力を受けて居る。流行り唄、大拍子にて幕明く。

ト仕出し捨ぜりふを云うて行き違ふ。直ぐに向うより時太郎、ぶッ裂き羽織、馬乗り袴、若殿の形。八右衛門、義平次、外に近習二人、羽織袴、近習の侍ひにて中間二人付き添ひ、春次、藝者の形。おみの、茶屋の女房の拵らへ、勘太郎、船頭にて火繩筥を提げ出で、この人數、本舞臺へ來る。

みの　およしさん、よいお天氣でござんす。

よし　これは稻穗屋のおみのさん、どなたもようお出でな

されました。サア、これへおかけなされませ。

トこれにて、皆々床几へ腰をかける。

みの　サア〳〵、春次さんも爰へおかけ。

春次　アイ〳〵、お末さんはもう來さうなもの。

みの　左樣サ。大概遲いね。

勘太　お末さんが遲いばつかりで、義平次さんの御機嫌が惡い。

義平　コリヤ〳〵、ツカ〳〵と何を申す。お末が參らぬとて何しに身共が。

みの　ほんに、面々の事を棚に上げて置いてからに。

近一　すりや、勘太郎は、何かお末と譯があるのか。

近二　譯がある段ではござらぬ。ナア春次。

春次　左樣サ、大概惚けて居ますよ。

勘太　コレサ、お前方、恨みなものだ。何時わつちが。大概嘘を云ひなせえな。

みの　大概嘘もいゝ。嬉しいが聞いて呆れる。

義平　すりや、お末はこの勘太郎と譯があるか。さうとは知らず……ハテ、好い事をして居るな。

春次　義平次さんも大概甚助だね。

よし　サア、お一つお茶を上がりませ。

トみな〳〵へ茶を酌んで出す。八右衞門、思ひ入れ

八右　最前より、あの者どもの申す事を聞いて居れば、大概〳〵と申す事を、けはしく申すが、當所の通言と相見えます。

勘太　通言ぢやアござりませぬ。流行り詞でござりやす。

八右　それはどちらも同じ事だ……お國とは事變りし當所の繁華、一入賑はしい儀でござりまする。

時太　イカサマ、昨日は上野白鬚向島、今日は深川富ヶ岡の景色、日々の遠見も、眺めに飽かぬ事ぢやて。

義平　御意にござりまする。併しながら、いくら景色がようござりましても、色氣を云ふ物がなければ、面白味は薄いものでござる。

みの　さう云ふうちにも義平次さんは、ちつと色氣があり過ぎます。

義平　馬鹿を云はつしやるな。

勘太　時に、色氣と云へば、砂打場の治兵衞さんの所へ、吉原に居た梅川と云つた女郎が、おすわと云つて鞍替へに來たさうだが、器量は好し、形は好し、頭は吉原風で見世へ出るとの事。誠に珍らしい評判でござりまする。なんと一遍、素見して見ようぢやアござりませぬか。

義平　何にしても珍らしい。その女外へ呼び出す事はならぬか。

勘太　何所へでも呼ばれます。この頃に桝正でも呼びませうか。

皆々　それがよからう〳〵。

八右　ハテ、梅川とは似寄りな名……併し。只今申した、一遍素見すと申すは、その女へ水でも浴びせるのか。

近一　これはどうしたものでござります。素見すと申すはぞめき歩きするのでござる。

八右　ハ、ア、……ぞめき。ぞめきとは彼の、陸奥の錦木の類かな。

近一　ヤ、これは解らぬ。

八右　イヤ、身共にも解りませぬ。

近二　おてまへは野暮だぞ。

八右　左様さうにござる。

皆々　こいつは大笑ひだ。ハ、、、。

ト流行り唄になり、向うより、お末、藝者の拵らへ。おとみ、輕子にて菓子の袋を持ち付き添ひ、この後より、源六、以前の形にて出て來る。

源六　オイ〳〵、お末坊、そんなに急いで行かずともよからう。

とみ　源六さん。此お子は、お屋敷のお客で八幡樣へ。

源六　知つて居るよ。おれもお出入りのお屋敷だが、何も屋敷の衆だと云つて、さう急いで行く事はない。船頭の勘太さんが付いて居るに依つて、そこで足が早いのだな。

すゑ　源六さん、又しても惡口ばつかり。

源六　エ、、嬉しさうな面わえ。

春次　おすゑさん、遲い〳〵。

すゑ　オヤ、おみのさん、春次さん。

近習　早く來給へ〳〵。

トこれにて、お末、おとみ、源六、本舞臺へ來る。

すゑ　これはどなたもお早う。

義平　てまへは遲かつたな。

源六　その代り旦那、支度が出來ると、驅けた程に〳〵、誰れのか顏を見ようと思つて。

義平　ヤア、誰れのか顏を見ようとは、そりやア誰れの。

すゑ　お前さんのサ。

義平　ほんにか。

近習　ヨウ〳〵、色男さま〳〵。

源六　さう思つてさへ居れば大丈夫だ。ナア勘太。

勸太　されば、どうでござりやすか。
源六　何もそんなにツンとする事はねえ。
ト勸太、脇へ散らしながら
勸太　カウ、おとみさん、お前の持つて居る袋はなんだ。
とみ　こりやア今、船橋屋から年玉に貰つたのサ。
勸太　ア、菓子か。
ト此うち、おさん、皆々の前へ扇を出し、合力を受ける。
八右　何れも御覽なされい。女の子さうにござるが、隨分見目も好い器量で、乞食をするとは、可哀想な儀ではござらぬか。
時太　不便な奴ぢや。なんぞ取らせて遣はせ。
よし　こりや、あそこに居る浪人者の娘でござりまする。
義平　見れば浪人者が、鼓を打つて居る樣子。何も慰みでござるから、親に謠を唄はせて、この小女郎に舞を舞はせてはどうでござらう。
近習　成る程、こりや好い思ひ付きでござらう。
八右　ア、イヤ／＼、見ますれば武士の浪人、おてまへ方でも拙者でも、今にも浪人いたせば、あの通りでござる。武士は相身互ひの事。其やうに嬲らつしやらぬがようござる。
義平　イヤ、浪人いたすはそれだけな罪がござつて、身から出た錆と申すもの。丁度七年以前、同家中龜谷忠太夫が伜忠兵衞、奥小姓梅川と不義いたし、館を出奔、聞けば二人が仲に子も出來たとの事、定めし今は浪人して、乞食非人にがなつたでござらう。思へばあの浪人は、その忠兵衞かも知れませぬ。思ひなしかこの女郎は、どこか忠兵衞に似て居るやうな。
近一　我れ／＼は新參ゆゑ、顏は存ぜぬが、家中の噂で承つた。
近二　成る程、乞食を致すのも、その身の自業自得と申すものでござらう。
義平　おてまへ達は御存じないが、忠兵衞が出奔したその日より、足輕で居られた八右衞門どの、お取立てにて御近習役。浪人する者があれば、出世する者があり、世の中はさま／＼でござるて。
八右　義平次どのゝ仰せの通り、させる功もござらねど、殿の思し召しに叶ひ、斯樣に立身いたせし某、それゆゑ猶更忠兵衞どのを、氣の毒に存ずるて。
源六　時に、ちよつとお慰みに、この小僧に踊りを踊らせ

ませう。コレ〳〵、小僧、一文やるから踊を踊れ。
　トおさん、冠を振る。
踊らねえか。この餓鬼は。
　トおさんの頭をくらはせる。おさん、泣いて忠兵衛に取りつく。忠兵衛、頭を撫で介抱する。
する　源六さん、可哀想に、役にも立たぬ事を……おとみどん、それをお遣りな。
とみ　アイ〳〵……サア〳〵、機嫌直しに、これを遣りませう。
　ト右の菓子袋のまゝやる。忠兵衛、これを取り頂く。
義平　最前より餘程の間、若殿はさぞ御退屈。
する　モシ、なんと伊勢屋へでも、行かうぢやアございませんか。
源六　ようございませう。サア、どなた様も。
時太　然らば八右衛門。
八右　ハツ。サア、義平次どの。
義平　若殿様。
時太　皆も一緒に。
勘太　サア、お出でなされませ。
　トこの人數皆々下座へ入る。八右衛門、床几に殘る。

　およし、手桶を持ち
よし　モシ、御浪人さん、店をお頼み申します。あなた、御免なされませ。
　ト手桶を提げ、下座へ入る。
八右　ドレ、身共も伊勢屋へ。
　ト行かうとする。忠兵衛、八右衛門の側へ寄り
忠兵　ア、イヤ〳〵、八右衛門どの、暫らくお待ち下されい。お懐かしうございまする。龜谷忠兵衛めでござりまする。
　ト編笠を取る。八右衛門、思ひ入れあつて
八右　イ、ヤ存ぜぬ、知りませぬ。忠兵衛ならばお金の盗賊、引ツ縛つて屋敷へ引く。迂濶にその名は申されまい。
忠兵　身より出せし不義の科、親の罪にてこの如く、流浪いたすは自業自得。ハテ、心得難きは今の一言。この忠兵衛を盗賊とは。
八右　イヤ、覺えないとは申されまい。この一品に覺えがあらう。
　ト忠兵衛の小柄を出す。忠兵衛、見て
忠兵　如何にも、これは拙者が所持の。
八右　サ、この小柄ゆゑ貴殿の御親父、忠太夫どのには長

の押締め。この程の御裁許には、切腹とのお取沙汰でござる。

トこれを聞き、忠兵衛、恟りして

忠兵　ヤヽ、そりや何ゆゑの儀でござりまするな。

ト合ひ方になり

八右　七ヶ年以前お國元にて、御親父忠太夫どの、御寶藏御番の夜、其許には梅川とか申す奥小姓と不義いたされ、國遠ありしその折に、家中の騒動、忠太夫どのゝ當時御番を怠りたるうち、御寶藏の矢尻を切り、御用金二百兩盗み取りし曲者あり。貴殿の出奔即ちその夜なり。是非とも其許へお疑ひかゝらにやならぬ譯。拙者はその頃足輕にて、お屋敷の外構へ、怪しき曲者引ッ捕へんと思ふうち、先もしれ者、拔き合せたるそのはずみ、慥かに左の小腹に手應へ、切りつけしと思ひしに、殘念ながら其まゝ逃げ去り、又ぞろ後へ怪しき奴、聲をかくればこの手裏劍、我れへ打ちかけ行くへ知れず、貴殿の所持の小柄とは、存せぬゆゑに殿へ差上げ、先ッ斯う／＼と申し上げしが、家中のうちに貴殿の品と、存ぜし者これあつて、いよ／＼お金の盗賊は、忠兵衛なりと相極まる。その御褒美にとて某は、御加増あつて御近習役。人の非を取り身の出世、却つて物憂く、忠太夫どのゝ手前と申し、氣の毒に存ずるゆゑ、證據の小柄は某預かり、其許の身の詮議をも只管願ひ、忠太夫どのゝ切腹も、忠兵衛を召捕り參るまでと、願ひ出して百日の日延べ。その日限りも今明日。御親父の命は風前の灯火同然。誠に氣の毒千萬な。

忠兵　てもさても／＼、思ひがけなき親人の身の上。尤も拙者若氣の至り、お家の御法度を相背き、奥小姓の梅川と、忍び逢ひたる因果にて、その身も重く一家中へ顯はれ、はや五月の岩田帶、是非に及ばず連れ退きし、不孝と云うてはこの上も、なき事ながら親人の、命に拘はるお咎めとは、眞以て存せぬゆゑ、日を送つてお詫びせんと、思ひの外に盗賊あつて、かゝる大事になりしとは、今まで知らぬこの忠兵衛、罪と因果は覿面に、報いし事の恐ろしさ。親に替へ身に替へ、語らひましたその女、浪人の寄るべなきを、物憂く思ひ、子仲まで生したる仲を密夫いたして又ぞろ駈落ち。立ちがたき武士の意地。女敵討つておのれやれ、憂き日を見せんとこの年月、幼なき者を手一つに、この艱難は幾年か。これ皆即ち主親の、罪は目前この程は、鳥目となりし忠兵衛が、身の罪おの

れを責めるの道理、千萬今さら悔ゆるとて、申し譯なきこの忠兵衞。八右衞門どの、介錯頼む。

ト腹を切らうとする。八右衞門、留めて

八右　うろたへるも程がある。貧に閉ぢられ、うつけとなつたか。貴殿の金を盗まぬ事を、存じて居るは手前ばかり。貴殿が爰で相果て、御親父の命は誰れが助くる。金を盜まぬと云ふ申し譯は何者が致すぞ。殊に幼なき者は、獨りで生ひ立つと思はつしやるか。さりとては早まつた儀を。近頃たわけに存じられまする。

忠兵　御尤もなる御教訓ではござれども、差當りまして金子の云ひ譯。親どもが命を助けまする、その當とても。

八右　ずんとござる。お家の金には一兩々々に、三ツ鱗の極印ござれば、この金子を詮議仕出し、貳百兩に纏めて差上げたなら……まだ／＼これは手遠い詮議。それよりも近道は、北條家の烏帽子子となりし、時致さまの箱根山、下山のその折に、失ひたりし友切丸、曾我家の家來より、中心はその頃詮議して差上げしが、肝心の目貫が紛失。この目貫は黄金の鷄、今お屋敷にてこの目貫。詮議最中、何卒これを手に入れて、差上げるものならば、例へ重罪の科人たりとも、御赦免あつてその上御褒美。まだ此方が近道でござらう。

忠兵　忝なうござる。然らばその目貫、命に替へても詮議仕出し、差上げまして親人の、命を助けたう存じまするが、今明日と申しては。

八右　そりやハヤ両三日の御猶豫は、この八右衞門が知行に替へても、お願ひ申して見ませうが、成るたけどうぞ。

忠兵　親の命に拘はる事、承知いたして居りまする。

八右　先づはそれにて一つの安堵。拙者が申すまではござらねども、只今のやうに、必らず短氣を出さつしやらぬか。

忠兵　御深切、忝なう存じまする。

八右　して、御住宅は。

忠兵　この十二軒と申す所に、僅かな浪宅を構へ居りまする。

八右　さぞ御不自由勝ちにござらうと、申して侮りましく拙者が貴殿へ。

忠兵　ア、イヤ／＼、そのお心遣ひは御無用になされて下さりませ。浪人いたしても、相應に少々の貯へも。

八右　でござらうが、それはお嗜なみ。近日お尋ね申すでござらう。

忠兵　左様ならば八右衛門どの。
八右　必らず吉左右相待ち申す。
　ト唄になり、八右衛門、思ひ入れあつて下座へ入る。
　忠兵衛、残り
忠兵　古朋輩とは云ひながら、頼もしい八右衛門どの。それに付けても右の目貫、詮議いたすも當て……切ない時の神頼みとやら、斯う云ふ時は一心に、八幡宮へ参詣して来よう。
　トおさんの手を引き、下座へ入る。と流行り唄になり、向うより、三右衛門、家主の形にて、蝶足の膳、蓋茶碗、箸箱などの絡げたるを持ち、権七、継ぎ棹の三味線箱を背負ひ、後より、小春、芸者の形にて、漬物の器を提げ、片手に日傘と蛇の目の傘の括りしを持ち出て来る。グッと後よりおつな、大丸髷結ひの形にて出て来り
つな　其所へ行くのは、北新堀の小春さんぢやアないか。
小春　オヽおつなさん。
つな　お前の形は、そりやマアなんの真似だえ。
小春　わたしや急に此方の方へ引越す積りサ。内に置いた雇ひの婆さんが、あんまり吝い事を云つて、ヤレ佐倉炭は無駄だから堅炭にしろの、毎日生肴ばかり食つて居ると毛が抜けるから、干物にしようのと、わつちも新場の犬かなんぞのやうに、癪に障る事ばかり云ふゆゑ、ツイ座敷から食べ過ぎて歸つた時、喧嘩をしたらそれッきり、どつか出て行つてしまつたと思つておくれ。それからわたしも獨りで居て、眞に新場は飽きたから、賑やかな方へ出て来ようと思つて。
つな　それは何しろ好いこつたね。そして、何所へ越しなさるのだえ。
小春　何所だか、わつちやア知らないよ。
つな　人を馬鹿にした。お前の越して行く先を知らないのか。
三右　おつな坊、斯う云ふ譯だ。この小春が云ひ出すと、ちつとも待たぬ氣性だから、おれが近所に空店もなし。好い内のあるまでと、云つても直ぐに越したいと、もう彼方の家主へ、店を明けてやつてしまつた。あんまり氣が短つかいが、そこが生れ付きの氣性ゆゑ、てめえも知つて居る砂打場の治兵衛が内、見世が三軒あつて、子供が一人しかないゆゑ、後二軒空いて居る、見世を仕切つて貸さぬかと云つたら、治兵衛どのも、この子の事をよ

く知つて、男嫌ひの小春なら、貸してやらうと云ふゆゑ、マア當分、假宅代り、彼所へ越させる積りよ。

權七　わたしが親方はね、女の肌に觸れると、何か身に災難があると云つて、小さい時から女の味を知らずに女嫌ひサ。天道樣が頼んでも聞きやアしないが、この小春さんも生れ付いて男嫌ひ、その癖男の眞似をするが好きで、女らしい所はちつともないゆゑ、そこで親方が氣障がなくつていゝと云つて、貸してやるのサ。

つな　さうでござりますかえ。小春さんの男嫌ひも、治兵衞さんの女嫌ひも、世間に誰れ知らぬ者はない。二人ながら寄り合つたら、さぞ色氣のある事だらう。シタガ、江戸の方から砂打場へ越して來るのに、をかしな方を廻つて來たものだね。

三右　成る程、八幡前まで船で來たゆゑ、次手に八幡樣へ參つて行かうと云ふから。

小春　大家さん、わたしや大層草臥れた。向うの茶屋で一服のんで行かうぢやないかえ。

三右　いま船から上がつたばかりだぜ。

小春　それでも、重い物を持つて居るせゐか。

三右　大層な事を云ふ。そんならマア彼處で休まう。

ト　これにて皆々本舞臺へ來て、床几に腰をかける。下座より、およし、出て

よし　これはどなたも、ようお出でなされました。

ト　皆々へ茶を酌んで出す。

つな　小春さん、お前の持つて居るのは、そりやアなんだえ。

小春　こりやア例の漬物サ。

つな　未だに喰物好きだね。

小春　さう云ふうちに、わつちやヤ意地が汚ないかと思ふよ。

三右　酒飲みと云ふ者は、いづれさうしたものだ。

小春　オヤ、氣の毒だが、酒呑みと云ふ程呑みやアしないよ。

つな　さうサ、呑みやアしない、浴るばかりサ……ほんにお前が仲町へ出れば、また仲町は繁昌だ。

小春　おかたじけよ。大概冷かして置いておくれ。

つな　男嫌ひだと云ひ觸らして置いて、いつか話しが極まつて、ずる／＼べつたり、治兵衞さんの所へ引越し女房と云ふやうなこつちやアねえかえ。

小春　おつなさん、また始まつたよ。氣障な。

権七　そんな事が冗談にも、親方の耳に入ると、小春さんは直ぐに店立てだ。
三右　それだから二人寄ると、何所に喧嘩があつたの、又は角力の話しだのと、色氣のない話しばかりする。あれで治兵衛があの商賣をして居るのもをかしい。
つな　商賣と云へば、わたしが治兵衛さんの所へ、二三度髪を結ひに行つたが、吉原から來た子だと云ふが、あの子は好い子だね。
権七　吉原で梅川と云つた女郎。大層流行るが、どう云ふ料簡か、親方が客を取らせずに、藝者のやうに使つて居やす。
三右　そりやア矢ッ張り兩使ひだらう。小春も藝者の隙な晩は、見世で客を取るがいゝ。
小春　眞平御免なさいませ。
ト　ばた／＼になり、下座より、源六、勘太とお末を引ッ立て、義平次、これに付き添ひ出て來り
源六　うぬらは太え奴等だ。
勘太　カウ、源六さん、なんだな。人を捉まへて、太いの細いのと、白癬が焼芋を買やアしめえし。
源六　この野郎は悪く洒落る野郎だ。人が揚詰めにして置く藝者を、なぜ横緒を切つた。
すゑ　コレ源六さん、義平次さんも聞いて居なさんすに、ツカ／＼と、そんな覺えはござんせん。
義平　イヽヤ、身共が聞いて居つて、猶腹が立つた。あの伊勢屋の小座敷で、二人一緒に抱きつき合ひ、なぜヒソヒソと話しをして居つた。
勘太　そりやアなんでござりやす。あの子が癪が發つたと云ふから、ナウお末さん。
すゑ　それ／＼、あの人に頼んで、押へてもらつて居たのぢやわいなア。
源六　よく嘘をつく奴等だ。癪が發つた者が、にこ／＼と嬉しさうに笑つて居た、あんな癪があるものか。
勘太　そりやアアノ、血の道で笑つたのサ。
義平　イヽヤ吐かすな。武士たる者の目や耳を、蔑ろに致す憎くい奴。手討ちに致す。源六、それへ引据ゑい。
源六　サア、うぬらア動きやアがるな。
ト　義平次、刀の柄へ手をかける。源六、二人を引据ゑる。小春、この中へ入る。
小春　モシ／＼、マア、お待ちなされませ。
義平　わりやアなんだ。

小春　女サ。
義平　そりやア知れた事だ。何しに出た。
小春　留めに出たのサ。モシ、お前さん、野暮ぢやぞえ。道具屋の源六さん、久しいものぢや。好い加減におしな。
源六　わりやア紀伊國屋の小春だな。留めに出たが譯を知るめえ。人の揚詰めの藝者を。
小春　ア、モシ〳〵、源六さん、譯は聞かないでも、大概知れたこの經緯。先刻から無性に揚詰めだ〳〵と、日本橋の吉兵衞さんではあるめえし、高が色事でござんせう。
義平　身が揚げて置く藝者を、船頭の癖に、あの野郎めが、小胸の悪い事をしをるゆゑ。
小春　なぜえ。船頭なら色はせぬものかえ。嫌なお客の機嫌きづまを取つて、年中苦界で暮らして居る者を、たまには惚れた男に逢つて、辛い悲しい話しをするのが樂しみ……とサア、わたしは知らぬが、さう云ふ譯のものださうサ。
義平　イヤ、さう云ふ譯でも斯う云ふ譯でも、身が金を出して買つた藝者。なんのわれが横合ひから、要らざる世話サ。すツ込んで居らう。
小春　成る程、わつちやア要らざる世話サ。シタガ、一旦この中へ入つて、お前に高飛車を喰つて、指を啣へて引ツ込まれもしまい。要らざる世話をするのが大好き。云ひ出しては五分五厘でも、後へは引かぬわたしが性分。お侍ひさん、不肖ながら聞いておくれ。わたしもこれから仲町へ、賴んで出りやア新子の小春。古く居なさる藝者には、ちつとは上手を遣ふ爲、肩を持つのが當り前。座敷を買つたと恩がましく、内へ飼つて置く物のやうに、モシ、お前はぶざで知るまいがね、藝者と云ふものは座敷へ出て、三味線を彈いて面白くお座を浮かせば、それで濟むもの。お客と寢ようと初めから、極めて出る子は一人もない。内證ならば色事の、浮氣は土地からお客には、たんと噓をも佃節、吹けよ川風聞き流し、それを氣強にお侍ひ、深川へ來て澤山な、抜身はいつそ馬鹿らしい。心があさりと指さして、笑はれ草も山さんの、地金を出すのはあんまり古風。粹にわたしに下さんせいなア。
源六　成る程、きついものだ。久し振りで小春が達入れ。男も及ばぬ云ひ草に、今度此方へ出る祝ひに、ネヱ旦那。
義平　イカサマ、あんまり野暮らしく、云ふのも却つて興が覺める。小春とやら、この場はお主に
小春　預けておくれか。

義平　すつぱり遣らう。
小春　それでわたしも、顔が立つと云ふもの。
つな　小春さん、きついもの。わたしもうか〳〵聞いて居るやつサ。
すゑ　兼ねて噂に聞いた小春さん、有り難うござんす。モシ、お前も禮を。
ト勘太、モヂ〳〵して
勘太　モシ、小春さん、大きにお世話になりやした。
小春　イヤモウ、お禮で痛み入ります。わたしもこれからお前方の方へ出る積り。お頼み申しますぞえ。
すゑ　なんのマア、わたしの方から頼まにやならぬわいなア。
小春　ほんに、わつちも女の癖に、思へば要らざる事さね。
三右　その氣前だから、治兵衛どのも、ウンと承知をしたのだ。おいらはこの道具を持つて先へ行くから、小春坊一人で後から來ても知れるだらう。
小春　そんなら先へ行つておくれ。
權七　内を片付けて置きやせう。
つな　用のあるのに、わたしもツイ。
小春　お前方も早う早う。

すゑ　アイ。お禮はこの後。おつなさん、一緒に行きませう。
三右　コレ、早く歸るがいゝぜ。
ト流行り唄になり、三右衛門、權七、兩人向うへ、おつな、お末、勘太、下座へ入る。
義平　なんのこつた。源六、油揚を鳶にさらはれたやうな心持ちだな。
源六　左樣サ。併し、今日に限つた事もねえ。色は氣長にするがいゝね。
義平　さう云ふてまへも、あのお末に氣があるのサ。どうも手強い奴でござります。
小春　先の手強いのぢやアあるまい。
兩人　そりやアなぜ。
小春　お前方、ちつと鏡でも御覽な。
源六　これは御挨拶。そんなら色氣を止めて、慾にかゝらう。モシ義平次さん、お屋敷で詮議する、彼の目貫が、やう〳〵の事で手に入りました。
義平　それは重疊。ドレ、見せやれ。
源六　お見せ申しませうが、片々がござりませぬ。
義平　ハテ、それは如何いたした事やら。マア

源六　なんにしろ、片々でも先づ見せやせう。

ト件の目貫を紙入れより出して見せる。此うち、後へ忠兵衛、編笠を持つて出て、この様子を聞いて居る。義平次、目貫を見て

義平　こりやア正眞の黄金の鶏。して價は。

源六　五十兩に賣りたうござります。

義平　五十兩が物はしつかりあるが、今は金がない、よいか。

源六　なんぼお心安い仲でも、掛けぢやア氣がねえ。

トこれを聞き忠兵衛、思はずツカ／＼と出て

忠兵　その品、身共が買ひませう。

ト合ひ方。

源六　この人は氣でも狂つたさうだ。こりやアお前達の買はれる物ぢやアない。小判で五十兩だよ。

忠兵　例へ五十兩が百兩でも、拙者が買はねばならぬ品。

義平　其許は忠兵衛どのではござらぬか。

忠兵　義平次どの、面目次第もござりませぬ。貴殿方へ何として、顔の合される身の上ではござらねど、差當つて親どもが、命の綱と存ずる一品。それゆゑ顔を押拭うて。

トこれを聞いて小春、忠兵衛をヂツと見て思ひ入れ。

義平　成る程、御尤もなる思し召し。シタガ、この品は價が高うござる。お浪人の今の身の上。ぶしつけながら、お手には入るまい。

忠兵　アイヤ、値段も後で承り居つた。拙者めが現金に買ひますから、斯様な事もあらうかと、貯へ置いた五十兩。

ト摺替へられし五十兩を出し、源六に渡す。

源六　イヤア。こりやア小判で五十兩。ハテ、風體に似合はぬ。

忠兵　檢めて受取らつしやれ。

ト源六、一兩々々檢めて

源六　モシ、義平次さん、この金は慥かお觸れの。

義平　ドレ。

ト檢め見て

成る程、こりやア一兩々々、三ツ鱗の極印。すりや、噂に違ひなく、お金の盜賊龜谷忠兵衛。

忠兵　アイヤ／＼、暫らく。

ト右の金を取つて見て

ヤ、、こりやコレ如何にもお屋敷の極印。ハテ心得ぬ。この金は先つ頃、箱根權現造營の折柄、別當所より受取

りしが、ムウ、さてはあの時の曲者が、摺替へ居つたか。さうとは知らず只今まで、心付かずに所持して居つたが、この身の誤まり。ハテ、なんとした物であらうな。

源六　どうでこんな事であらうと思つた。所詮埒は明きませぬ。

義平　いよ／＼この金所持して居れば、忠兵衛はお金の盗賊。引ツ縛つて屋敷へ引くと云ふ所なれど、只今は遊興の場所。武士の情に見逃がして遣はす。源六、その品は手前が。

忠兵　アイヤ／＼、是非とも拙者が。

源六　でも、その金は役には立たぬ。どうしてこれを。

ト忠兵衛、小春を見て思案なし

忠兵　暫らくそれに待つて居て下され。

ト合ひ方になり、小春の側へ來り

ついぞ今までお近付きでもないおてまへ樣に、斯樣な事を申すは異なものなれど、兼ねて噂に承り居つた、男も及ばぬ達引強い小春どの。そこを見かけて拙者が頼み。見らるゝ通り五十兩の金のいきさつ。はたと當惑。

ト懷中より金の胴卷を出し、この中より粂三郎が紋の付きし簪を出し

忠兵　この簪は、拙者が語らひし女の差したる品なれど、只今にてはあつて益なし、何卒この一品を拙者にお取りなされて、五十兩のこの場のいきさつ。男の命に拘はる一儀。よく／＼の事と思はつしやれて、どうぞお救ひなされて下さるまいか。

小春　御浪人なされても、お侍ひ樣の一分。女のわたしへ兩手を突き、それ程までに……嬉しうござります。ほんにお心根が思ひやられて、私しはあなたの方からお頼みなうても、お世話申さにやならぬ身の上。と申せば話しが長うなる。マヽ、この品はお前樣のお心ゆかし、私しが預かりまして、この場の始末は、どうとも致しませうわいなア。

忠兵　ハテ、お心ありげなそのお詞。それも聞きたし。ママ、何にしろ早急の所。御承知下され、忝なう存じまする。

小春　なんの、そのお禮に及ぶ事。

ト源六の側へ來り

モシ源六さん、今聞いて居なさんす通りの譯。わたしも御浪人に頼まれて、嫌と云はれぬ日頃の氣性。そりや、お前も知つて居なさんせう。と云うてわたしが今爰に、

五十両と云ふ金を、持ち合して居やう筈もなし。爰がお前へわたしが頼み。どうぞ明日の晝までに、わたしが今度の新宅へ。

源六　オツと皆まで云ひなさんな。達引強いお前の氣質。よもや噓を吐きやアしまい。お前の達引に惚れて、此方も達引。お前の請合ひ、なら、あの人に貸つて上げやせう。

義平　コレサ、それでは、

源六　ハテ、ようごせえす。爰らが一番達引どころだ。

小春　嬉しうござんす源六さん、わたしが一生の恩に着る。

源六　ナニ、たつた一日。待つたとて恩に着せる程の事もあるまい。

忠兵　イヤ、拙者こそ一生の恩に着る。小春どの、エ、、忝ない。

小春　そんなら主に、その品を上げて下さんせ。

源六　この目貫を直ぐに渡します。
ト忠兵衛に目貫を見せる。

忠兵　然らばこれにて。
ト手を出す。これにてゴンと暮れ六ツの鐘鳴る。

小春　ありやモウ暮れ六ツ。

忠兵　ハテ、折悪いこの程の。
ト俄に目の見えぬ思ひ入れ。源六、これに目を付け

源六　ハヽア、お前は鳥眼か。
ト忠兵衛、思ひ入れあつて

忠兵　なんのマア、
ト目を隠すこなし。小春、思ひ入れあつて

小春　ほんにわたしも日の暮れまで、ウカ〳〵爰に……モシ、そんならこれはわたしが預かり。いづれ其うち、お前に逢つて、ゆつくり話しも。
トあたりへ氣兼ねして、右の簪を胴巻へぐる〳〵卷いたまゝ懐中へ入れ
ドレ、八幡様へ。

源六　そんなら小春坊。

小春　源六さん、明日来なさんせ。
ト唄になり、小春、思ひ入れあつて下座へ入る。源六忠兵衛の目の前へ手を出して、いろ〳〵試めし、いよいよ目の見えぬと云ふこなしあつて、ツツと莨入れの金物をへがし、義平次と囁き居る。

忠兵　サア、今の目貫を渡して下され。

源六　いま検めて置かしやつた目貫。しつかりと渡します。

ト莨入れの金物を紙に包み渡す。忠兵衛、これを取り知れぬやうに探つて見る思ひ入れ。

義平　これから伊勢屋で呑み直さう。

源六　それがようござります。

義平　源六、来やれ。

源六　しつかり渡したよ。

ト時の鐘になり、両人、舌を出し、こなしあつて下座へ入る。

忠兵　エヽ忝たい。あの女中のお庇で、どうやら斯うやら、片しながらもこの目貫。せめてこれでも。

ト懐中を探し

これはしたり、あの胴巻の儘、今の女中に渡してしまひ、紙入れはいつぞや箱根で盗人に取られた儘、何も懐中に入れる物が。ア、コレ、胴巻を渡さねばよかつた。大切な品と云ひ、目は不自由なり。ハテ、何所ぞへ。オヽ、あるぞあるぞ、先刻に貰ふたこの菓子袋。この中へ入れて。

トおとみのくれし菓子袋の中へ右の目貫を入れ、懐中して

あの額堂に娘が待つて居るであらう。ハテ、不自由な事ではあるぞ。

ト探り探り下座へ入る。時の鐘になり、向うより傳海毬栗坊主の拵へに、腰へ薦を巻き、杖を突き、百補を持ち出て来り

傳海　ア、叶ひませぬ盲目には、右や左のお長者様。

ト云ひながら舞臺の方へ来る。下座バタバタにて、勘太、お末、出て来り

勘太　どうで斯うなるのは色事の三段目だ。行き當りばつたり。

すゑ　何所へなと連れて行つて下さんせ。

勘太　案じる事はねえ。一緒に来やれ。

ト駈け出しさうにする。傳海、向うへ立ち塞がり

傳海　そりや悪からう。

勘太　なんだ。この乞食坊主め。

傳海　おれが娘だや。遣る事ならぬ。

すゑ　ヤア、お前は。

傳海　親は此やうに乞食して居るのに、わりやア好い氣な親を見殺しにするな。

すゑ　これもお前の心柄。お前はわたしの本の親では。

傳海　エヽ、この女の恩知らずが。われが親は二の口村の百姓孫右衛門と云ふ者。總領の野郎めは、北條の家中へ

養子に行たとやら、實名は龜谷忠兵衞とて、今は浪人。この頃聞けばこの近所へ來て居るさうな。妹のわれはおれが貰うて、一人歩きのなるやうに、育て上げた恩のある、この傳海には乞食をさせ、おのれは藝者で候ふと色事して爰を駈落ち。イヤ、呆れ返つた罰當りめが。これからはわれが汁氣のあるうちは、飯盛りでも夜鷹にでも賣つて、おれが喰はにやアならぬ。サア、おれと一緒にうしやアがれ。

すゑ　エヽ、嫌ぢやわいな。實の父さんに相談もせず、斯う云ふ勤めに賣らしやんした、云はゞお前は誘拐し同然。お前の自由になるものかいなア。聞けばわたしの兄さんは、この十二軒に居ると云ふ噂。そんなら先刻の浪人者か。

勘太　てめえの兄貴か。

傳海　なんだ、この野郎は、娘を連れて逃げるなら、親のおれに養育金、たつた今寄越しやアがれ。

勘太　乞食を親に持つて堪るものか。

傳海　さう云や娘は。

すゑ　エヽ、嫌ぢやわいなア。

　トこの立廻りのうち、下座より、小春、出て來る。この體を見て矢庭に傳海を引退け、面桶にて傳海の眉間を喰はせる。これにて傳海、ワッと額を押へる。此うち、小春、お末、勘太に囁き、早く行けと云ふ仕方、

兩人　そんならこれから。

小春　砂打場の治兵衞さんの所へ。

　ト寄るを小春、兩手にて突き倒し、砂を打ちつけ

一緒にお出で。

　ト勘太郎、お末を連れ向うへ入る。傳海、起き上がり、目の砂を拂ひ

傳海　いま聞けば、砂打場の治兵衞とは、いつぞや箱根で……丁度幸ひ、其所へ仕掛けて。ヤ、こいつは奇妙だ。

　ト杖を取り、頷いて向うへ入る。下座よりおつな、おさんの手を引き、後より忠兵衞、探り〳〵出て來て、

つな　夜になると、お前の眼の不自由な上に、この子は泣くし、さぞ困りなさるであらう。

忠兵　イヤモウ、晝のうちはお前は髪結ひに出さつしやるし、夜は雇ひにわしが内へ。ほんにこなたで助かります。坊主めが機嫌直しに、先刻に貰うたこの菓子を遣りませう。

つな　オヤ〳〵、美しい菓子だねえ。ドレ〳〵。

ト菓子の袋を取り、中より菓子を出して、おさんをあやしながら菓子を遣る。おさん、この菓子を一々取つて口へ入れる。ト、右の金物を心付かず、おさんに食はせる。おさん、思はず呑み込む。

さん　父さん、咽喉が痛いわいなう。

トこれにて、忠兵衛、心付き

忠兵　ヤヽ、この菓子袋の中に。そんならもしや。

つな　何か光る物を食べましたよ。

忠兵　ヤヽ、すりや大切な。

トおさんの口へ指を入れ、いろ〳〵思ひ入れ。

はや呑み込んだか。

つな　毒でござりますかえ。

忠兵　エヽ。

トおつなを突き倒し、おさんを抱へ、チヨンと木の頭。

ひよんな事をしたなア。

ト當惑の思ひ入れ。これをキザミにて、よろしく、初午の鳴り物にてツナギ。引返し　拍子幕

二幕目

綱打場樋屋の場
三十三間堂の場

役名――丹波八右衛門。淺田五左衛門。船頭、勘太郎。路地番、長吉。家主、三右衛門。大工、與太郎。居候ふ、權七。藝者、お末。樋屋おすわ。家來、象助。乞食坊主、傳海。道具屋源六。判人勘六。紀伊國屋小春。樋屋治兵衛。

本舞臺、三間の間、一面の平舞臺の世話屋體にて、本疊を敷き、眞中襖にて仕切り、下の方、向う襖暖簾口、勝手道具よろしく飾りつけ、上手襖を立て切り、この後は長屋店の體。いつもの所に門口。爰に與太郎、大工にて仕事をして居る。權七、以前の居候ふの形にて、古き地口行燈を五つ程、これを剝がし居る。長吉、路地番の形にて、勘太郎船頭にて、兩人にてこれを手傳ひ、屋體の後、鐵棒の音。初午の鳴り物、屋體囃子にて幕明く。

勘太　これサ、權七、一々讀んで居ては埒が明かぬ。好い

加減に剝がしてしまやな。

權七　去年の地口行燈は、みんなこじつけだ。今年はなんぞ思ひつきがありさうなもんだ。

長吉　初午の思ひつきは、何時もあり來りだが、また親方が好い思ひつきがあるだらう。

ト權七、行燈の剝しを丸め、紙屑籠へ入れる。

與太　權公、その引つ切りを取つて下つし。

權七　引つ切りとは、なんの事だ。

長吉　エヽ、氣の利かねえ男だ。その道具箱にあるよ。

權七　オッと合點だ。

ト道具箱より大小の紙繪を出して

與太郎は嫌な奴だぜ。道具箱の中へ、こんな繪をしまつて置きやアがる。

長吉　ドレ、見せや〳〵。こいつは無理だな。これを箪笥の抽出しへ入れて置くと、着物が溜ると云ふ事だ。

權七　與太郎は道具箱の中へ入れて置くから。道具でも溜める氣だらう。

與太　ナニ、そりやア、おれとあれとを、正寫しに描いてもらつたのサ。

長吉　あれとは誰れの事だ。

與太　ソレ、權公、てめえと一座の。

權七　彼の女か。よく受けさしやアがる。コレ、ちよつと見てくりや。おれの所へも毎日文を寄越しやアがる。

ト懷中より文を出す。

勘太　ドレ、おれが讀んでやらう。

ト文を披き見て

なんだ。「よき便りに任せ、文して申し上げ參らせ候ふ。これサ、權さんや。お前は憎らしいよ、ふとの心も知らず、與太郎と二人で、よく浮氣をしたの、ほんね〳〵憎らしい」。

長吉　この女郎は越後ッ方だな。

權七　默つて後を聞かつし。殺し文句が書いてあるよ。

勘太　「わたしはお前の事を思ひ暮らして、この頃は、ほんね〳〵おまんまも、ろく〳〵に斷つた。四度しか喰べねえよ」。

權七　嘘をつけ。なんの、そんな事が書いてあるものか。

勘太　それでも爰に書いてあるものを……「ほんね〳〵、お前の事を思ひ出すと、外のお客が嫌になつて、毎晩毎晩寢たく存じ參らせ候ふ。」

與太　この文は、ほんね〳〵だらけだよ。

長吉　權七が色には稀態な文だ。
權七　コレ、エ、うぬらは大分おれを見縊るな。
與太　智慧のねえ野郎だ。直に熱くなりやアがるワ。
權七　熱くなつたらどうする。
與太　ざまア見やアがれ。
　トこれより摑み合ひになり、勘太郎、これを留める。通り神樂になり、向うより、三右衞門、金助、藁苞を脊負ひ、出て來り、この中へ入り
三右　コレ〳〵、家主が來た。靜かにしろ〳〵。
三人　大家さん、退きなさい〳〵。
三右　此奴等は、家主の云ふ事を聞かないか。一體これはどう云ふ譯だ。
勘太　この文を、この箱から發した事す。
　ト三右衞門、文を取つて見て、
三右　ア、、こりやア權七が、あひるの文だな。
與太　大家さん、よく知つて居なさるな。
權七　知られえでどうするものか。大家さんは色一座だもの。
勘太　そんなら大家さんは、あひるに馴染があるか。
皆々　こいつは大笑ひだ。

三右　なぜ〳〵。家主はあひるへ行かぬものか。コレ、てめえ達は文字を知らぬワ。あひると云ふ字は家鴨と書く。なりや、家主に縁のある物だや。時に、この喧嘩はおれが貰つた。これも皆反古にしてしまつて、この紙屑籠へさらりと捨てゝしまふがいゝ。
　ト右の文と紙箱と一ツにして、紙屑籠へ入れる。
權七　大家さんの云ひなさる事だから、皆笑つてしまひませう。
三右　それがよい〳〵。なんでも笑ひにするがよい
勘太　そんなら店賃なしにしやせう。
三右　イヤ、それはならぬ。
勘太　時に、後から來た若いのは、お前のお連れかえ。
三右　イヤ、この人はなんだか、治兵衞どのに用があると云つて、尋ねて來たゆゑ、おれが連れて來たのだ。
權七　さう云へば、お前は箱根で逢つた伊勢詣りだの。
金助　左樣でござります。その時から御縁になりまして、御厄介になりに上がりました。
權七　ムウ、居候ふに置いてくれろと云ふのか。カウ、おらが親方は、居候ふは大好きだ。おらが内に居さつし。
金助　もと、この邊に心當りな事がござりますれば、是非

お世話に相成りまする積りで參りました。
三右　時に、普請も大概でザツとして置くがよい。眞中は仕切つたか。
與太　この通り、店を直に奥座敷にして、爰を勝手にしました。
三右　先づ小春と治兵衛どのと、同居も同じ事だが、二人ながら女嫌ひに男嫌ひだから、分ける所は分けねばならぬ。ところで新宅の事ゆゑ、小春の方へ用があつて來た人も、槌屋へ用があつて來た人も、まごつくと悪いからおれが表札を拵らへて來た。
ト懐中より板を出し
これより右の方槌屋治兵衛、これより左の方紀伊國屋小春……斯う書いて置けば、間違ひはない。これを門口へぶツつけて置け。
粂助　治兵衛さんは、お留守でござりまするか。
勘太　今に歸るから、待つて居るがいゝ。
粂助　左様ならば、奥をお借り申しまして。
ト其まゝ奥へ行かうとする。
長吉　オイ〳〵、其方は隣りの内だ。
粂助　左様ならば、こちらかな。
ト襖を明けさうにする。
權七　これサ、そこは店だ。おれが内に奥はないよ。
粂助　左様ならば、暫らくお借り申しませう。
ト通り神樂になり、粂助は奥へ入る。直ぐに向うより勘六、以前の判人の形にて出て來る。
權七　オヽ、判人の勘六か。昨日の泥坊はどうした。
勘六　マア、聞いて下さつし。花魁の頭の道具を、すつぱり持つてうしやアがつた。後から無性に追ひ駈けて行つた。
皆々　捕まつたか〳〵。
勘六　どつかへ見失なつた。
皆々　おきやアがれ。
勘六　併し、あの簪は、花魁の紋があるから、直に知れるのサ。時に、治兵衛さんは。
勘太　湯に行つて、まだ歸らねえ。
與太　用があるなら、云ひ置いて行かつし。
勘六　イヤ、云ひ置いては行かれねえ用だ。花魁の身の代の事だ。
與太　カウ、身の代はねえが、こはだと海苔ばかりだ。
勘六　馬鹿を云はつし。鮨ぢやアあるめえし。

ト聖天になり、向うより小春、茶の袋を持ち、治兵衛、
褞袍股引の形にて、十能を擔ぎ出て來り
治兵　小春坊、買ひ物に行くなら、おらが内の野郎を使へ
ばいゝのに。
小春　イヽエ、わたしやア道で次手があつたから。そして
お前も、なんだか買ひにお出でだね。
治兵　なんだか昨日見て居たら、鏡の蓋へ火を載せて運ぶ
から、十能があるめえと思つて、こりやアおれが家見舞
ひだ。
小春　オヤ、よく氣が附いておくれだ。こりやア、有り難
うござんす。
治兵　カウ、當分のうちは、マア、おれが内の竈で飯も炊
くがいゝ、大概不自由な物は、おらが内のを使ふのがい
いぜ。
小春　アイ、どうせモウ、落ちつくまでは、是非お前の所
の物を借りる積りサ。
治兵　そして、大層いかいこと茶を買つて來たな。お主が
茶を持つて。
小春　茶袋十能、とらヤア〳〵。
治兵　おきやアがれ。

ト兩人、本舞臺へ來る。
皆々　親方、いま歸んなすつたか。
勘太　小春さんと一緒だね。
小春　いま道で逢つたゆゑ。
治兵　オヽ、こりやア隣りの普請が出來たね。大家さん、
よく來なすつた。
三右　なんの仲でも、ちつとは仕切りがないと、なんぞ間
違ひのあつた時惡い。
治兵　さうサ。時に今日、直に長屋へ蕎麥でも配らずばな
るまい。
勘太　わつちがさう云つて來やせう。幾らだね。
三右　家主が三つ。後が一つづゝよ。
勘太　家主は、なんでも慾張つて居るものだ。
三右　大きにお世話。
勘太　そして、裏から直に長屋へ配らして、わしやア次手
に湯へ一風呂。ドレ、行つて來やせう。
ト勘太郎、向うへ入る。
勘六　親方、先刻からお前さんの歸るを待つて居やした。
治兵　オヽ、こりやア、判人の勘六。おすわの事でか。
勘六　今日は、モシ、是非。

治兵　承知だよ。マア、遊んで行かつし。今に挨拶をしよう。
三右　時に、小春の諸道具を、改めて取分けるがいゝ。
治兵　諸道具も大層だ。なんだか下らねえ物が、いかい事あるぜ。その膳の上の曲物はなんだ。
小春　こりやア、つくばねサ。
治兵　ハヽア、さてはいけるの。
小春　南無三、顯はれた。
三右　イヤ、モウ、酒と云つては目のない女だ。一番好きな物が酒と喧嘩。嫌ひな物が三味線と色事。こんな女もないものだ。
治兵　藝者が三味線が嫌ひでは、躄が飛脚をするやうなものだ。併し、おれもこんな商賣して居ながら、生れついて、女嫌ひ。それゆゑ外の女なら世話もしないが、男勝りで氣障氣のねえ小春ゆゑ。
小春　これが合縁奇縁と云ふものかいなア。
治兵　時に大工さん、酒でも呑みなせえ。
與太　アイ、有り難うござります。
三右　大工さんばかりに呑ませずと、店越しの祝ひに、此方も一杯やらうではござらぬか。

長吉　喰ひ物と云ふと、直にしや〳〵り出る家主だ。
三右　家主だと云つて喰べずに居られるものか。べら坊め。
小春　昨日貰つた酒がござんす。
權七　そいつは奇妙だ。わたしが捌きやせう。
ト權七、酒をちろりへ明けて鐵瓶にて燗をする。
勘六　モシ、親方。私しの方はどうなりやす。
治兵　エヽ、この男は、野暮な事を云はずと、マア、酒でも呑みなせえ。
勘六　わたしやア汁粉なら氣があるけれど、酒はちつとも。
權七　成る程、汁粉の好きさうな面つきだ。
勘六　面で汁粉を喰ふものか。
三右　ハテ、役にも立たぬ事を云つたものだ。時に肴は、
治兵　權七、なんぞさう云つて來やな。
三右　なにサ〳〵、爰に有合ひでいゝぢやアないか。今に荊妻も來るし……なんだ、嫁菜に、ほか〳〵、寺納豆。こいつは妙だぜ〳〵。
治兵　無理に妙にしたがるやつサ。サア〳〵茶碗で始めろ始めろ。
ト　これにて皆々捨ぜりふにて酒を始める。治兵衛呑んで、勘六へ獻す。

勘六　わしやア親方、呑めやアしやせん。

長吉　勘六、そんなに野暮を云はずに、我慢して呑め〳〵。

勘六　風邪薬を呑みやアしめえし、我慢して呑む理窟もねえ。

權七　なんでも親方の呑んだのだから、一つ呑まつし。

皆々　呑まねえと云ふがあるものか。呑め〳〵。

ト嫌がる勘六に無理に呑ませる。

三右　時に、みんなに藝を一つ見せよう。

治兵　大家さんにも藝があるか。

小春　わたしもついぞ見た事がない。なんぞしてお見せ。

與太　大家さん、お前が藝をして、面白くねえとぶん毆るよ。

三右　そんな剣呑な藝なら止さうよ。

小春　ハテ、マア、そんな事を云はずに、してお見せよ。

皆々　大家さん、なんぞやらかしねえ〳〵。

與太　惡けりやア、おいらが寄つて締めるぜ。

三右　藝も三味線がなくつては。

治兵　そんなむづかしい事を云はずに、三味線なしにやんなせえ。

三右　無理な事を云ふ。仕方がねえ。三味線なしにやらかさう。

皆々　ヤンヤ〳〵。

三右　まだ何もしねえものを。

治兵　お前に藝をされて堪るものか。

三右　それでもちよつと一つ。

治兵　ハテ、それには及ばねえ。

ト勘六、酒が廻りし思ひ入れにて、

勘六　カウ〳〵、おれも人間のうちだ。なぜにおれを除れも構はねえ・おれも藝をしよう〳〵、

ト よろ〳〵と立つて踊りさうにする。

小春　オヤ〳〵、あの人は呑めえもしねえ酒に、醉つたさうだ。

治兵　奥へ連れて行つて寢かしてやれ。

皆々　勘六、奥へ來さつし。

勘六　嫌だ。おれが藝をして見せらア。なぜ家主にやア藝をさせて、判人にやア藝をさせねえのだ。

治兵　飛んだ生醉が出來た。

皆々　マア〳〵奥へ來さつし。

ト騒ぐ勘六をなだめながら、與太郎、長吉、權七、三人にて無理に奥へ連れて入る。

三右　飛んだ交せッ返しだ。

ト此の時、上手の襖を明け、おすわ、吉原の傾城の形にて出て

すわ　子供や。上草履を持つて來やよ。

治兵　コレ、おすわ、子供にも大人にも、内の野郎は今一人も居ねえ。こんな狹い内て、上草履を穿かないでもいい事だっ

小春　吉原から來た、おすわさんと云ふのはあの子かえ。わつちはまだ近づきにならねえ。

治兵　ほんに、さうだつけ。コレ、おすわ、この子は、おらが内を仕切つて貸した、小春さんと云ふ藝者だ。隣りづからの事だ。これから心安くしやうぜ。

すわ　さうおざんすかえ。モシ、あの人さん、ちつと座敷へ遊びに來なまし。

小春　アイ……治兵衞さん、どこに座敷があるえ。

治兵　ナニ、ありやア吉原の詞の癖だ。どうもまだ直らねえ。

小春　ほんに、吉原の花魁と云ふものは、子供みたやうな者だねえ。

ト三右衞門、おすわの顏を見て

三右　ハヽア、見事。

ト手を拍つ。

すわ　エヽ、この人さんは、恟りしいすよ。

三右　さても／＼、美人の寄合ひだ。コレ、治兵衞どの、斯う云ふ美しい者を二人寄せて、それで女嫌ひとは、因果な事ではござらぬか。

治兵　なんのお前。畢竟、小春が男嫌ひで、嫌らしい氣のないのに、又おすわが吉原に居るうちから客を振つて、どうもならぬと云つての鞍替へ。これもあんまり嫌らしい方でもなし。それで斯うして話しもして居らるゝと云ふもの。わしも又、女の肌さへ觸れば、直に災難が來ると云ふ親の遺言。それゆゑ女の味を知らずに嫌ひサ。

小春　災難と云へばね、わたしやア女の癖に、角力を見るのが大好きで、本角力は見られねえから、稽古角力を毎日々々行つて見たところが、わたしの贔屓な角力が勝つたゆゑ、わたしやア浮れて、着物と帶を抛らうと思つて、棧敷から逆樣に落つこちて、聞いておくれよ、櫛も簪も粉微塵サ。

すわ　オヤ、そんならおまはん、上から下へ落ちさしつたのかえ。

小春　さうサ、下から上へ落ちるものは誰れもないがね、飛んだ災難に遭つたものサ。

すわ　おまはん、落ちないやうにしつかりと、掴まつて居さつしやればいゝに。

小春　先から氣が付きやア、掴まつて居たらう。

すわ　それでも、落ちると怪我をしいすわね。

三右　イヤ、こりやア、尤もだ。成る程、花魁と云ふものは、詰まらねえ事を云ふものだ。

治兵　イヤ、凡そ詰まらぬと云ふは、何時かおれが係り合つた事があつて、藤澤の方へ行つた時、道で雷が鳴つて、おれが鼻の先へ落ちたゆゑ、おれが雷を手づかめえにして、見世物に出さうと思つて、落ちたを合圖に、グッと引つつらめえた。

すわ　オヤ、馬鹿らしい。雷さんに引ッ裂かれたら、どうさつしやらうえ。

小春　そしてお前、本當につらまへなすつたのかえ。

治兵　のしかゝつて押ッ伏せて、繩がねえから帶を解いて、くる／＼と縛つた。

すわ　オヤ／＼、さうしたら、太皷や何かゞ、みんな壞れてしまひしたらうね。

治兵　ナニ、木に畫いた雷ぢやアあるまいし、雷獣と云ふ獸だらうと思つて、つらめえたら、犬ッころだつた。

小春　なんのこつた。半分はお負けだね。

治兵　なアに、ほんの事よ。

すわ　そんなら、犬が雷様に化けて居たのかえ。

治兵　さう詰まらなく根問ひをされちやア、話しが出來ねえ。

三右　先刻から聞いて居れば、あんまり色氣のねえ話しで呆れ果てる……イヤ、おらはこんな事をしては居られぬ。今日は番だつけ。

小春　ほんに、わつちもうつかりして居たが、おまんまを炊かねえけりやアならねえ。

治兵　飯を炊けるか。

小春　ついぞ炊いた事はないが、當ヅッぽうにやッて見よう。

三右　おれが炊いてやりたいが、番だからちよつと行つて來ませう。

治兵　そんなら又お出でなせえ。

三右　治兵衛どの、隣りの事を頼みます。

治兵　アイ／＼……おすわ、てめえ、火を起してくれえ。

すわ　アイ〳〵。

小春　ドレ、焚きつけませうか。

　ト四ツ竹の合ひ方になり、三右衛門、向うへ入る。小春、無性に附木を焼べ、釜の下を焚きつける。おすわ、鼻紙にて火鉢を煽ぎ居る。治兵衛、行燈を出し、火を灯し居る。向うより傳海、錢にて拵へたる錫杖と、扇を持ち出て來り、門口に立ち

傳海　ヤレ〳〵〳〵〳〵、これは皆さん御存じ知られし、花のお江戸の北新堀に、色氣白齒の藝者の小春、思ひ深川砂打場には、槌屋治兵衛と人にも知られ、女嫌ひのなんのとて、いつか小春としつぼり馴むき、離れ難い爺町なら、世帯も一つで貝の柱に、茅の屋根とは、思ひ一剝き、剝きたてならば、水も洩らさず小春が赤貝、味をしめては、こりや又堪らぬ。さりとは〳〵氣長い事ぢやに。ホウ、、、、。

治兵　ヤイ〳〵、喧ましいわえ。なんぞ面白いちよぼくれかと思へば、イケ嫌らしい。治兵衛と小春が、何か譯でもあるやうな。どつからそんな事を聞いて來やアがつた。

傳海　そんなら爰が、治兵衛さんの所でござりやすかえ。

治兵　知れた事よ。

傳海　ヤレ、嬉しや。

　ト内へ入る。

治兵　エ、、薄汚ねえ。なんで内へ入りやアがつた。

傳海　治兵衛さん、お久しうござります。

治兵　どうか、この坊さんは見たやうな。

傳海　人に物を借りて置いて、見たやうなとは、妙に出て來たね。

治兵　ム、ウ。そんなら、いつか箱根の湯場で。

小春　ほんにその時の。

傳海　小春さん、おめでたうござりやす。ハテ、羨やましい事だね。

小春　坊さん、止しておくれ。わたしやア、片附いたのでもなんでもなし。今だに男嫌ひサ。

傳海　エ、、左樣かな。こりやア、粗相を申しやした。

すわ　なんだやら、いつそ汚ならしいあの人。なんでおざんすえ。

傳海　モシ、何も別に汚ならしい者ではござりやせん。高が乞食坊主でござりやす。

すわ　わつちやア、氣味が惡うおつす。

治兵　いゝわサ〳〵。默つて居やれ。

若者　ト初午の晝日村になり、向うより若い者一人、丼正と書きし小ら提灯を持ち出て來り

若者　治兵衛さん、屋敷のお客が、おすわさんを呼びたいと云ふから、お迎ひに來ました。

治兵　ホイ／＼、石清水が内へ行つたら、さう云つて下つし。おらが内の子供に外へは出されねえが、お前の内だけ遣りますから、所望されました客だから、よく頼みますと云つて下せえ……カヤ、おすわ、ちよつと行つて來やし

すわ　屋敷の客と云へば、もしやひよツと。

治兵　なにサ、貝賣らしいから、座敷ばかり出て、方々見物して來るがいゝ。ア、それにしても、髪結ひのお綱が來ないで、頭が。

小春　わたしで撫でつけてあげようか。

治兵　そんなら、さうしてやつてくんねえ……カウ、お前ちよつと待つて居てくんなせえ。

若者　ハイ／＼。

ト内へ入り居る。治兵衛、襖を明け、鏡臺を出してやり

治兵　おらが内に鏡臺のあるもをかしからう。

すわ　それなら、ちよつとお頼み申しいす。

小春　アイ／＼。

ト　おすわ、鏡臺に直る。小春、後より髪を撫でつけて居る。奥より、勘六、出て來り、

勘六　モシ、親方、先刻は大きに醉ひ過しやした。日も暮れたから歸りたうござりやす。あの子の始末は、どうなりやす。

治兵　オヽ、こりやア大きに御苦勞だつたらう、(?)今日はもつと預り置い。度々の(?)だが、二三日のうちに來て下さつし。

勘六　モシ、親方、それぢやア相談が運びやすまい。あの子の身の上を聞いて、金が手放つてもいゝから、此方へ貰ひたいと云ひなさるから、不躾ながら、手打ちにしやす、手重からうと、お前さんとわたしの仲だから、云ひ悪い事も云つたらうがやアござりやせんか。お前さんの云ひなさるにやア、高いのは合點だから、さつき預りさのあるなたに從つて、無理にも買ひたいやうに云ひなさるから、それぢやアまだ、藏へに出す氣もなんにもないのを、わたしがいろ／＼掛合つて、無理に買つた奉公人。その上の達引にやア、元金で上げやしたによ。それに、明日來いの、明後日來いのと、酒屋の御用が掛取りに來

たやうに云ひなさつちやア、それぢやア筋が違ひやせう。

治兵　マア〳〵、一々尤もだ。併し、此方もいろ〳〵心當りの違つた事もあるし、いづれ二三日のうちに。

勘六　カウ〳〵、治兵衞さん〳〵、好い加減に人を馬鹿にしなせえな。今日が日になつて、吉原の方へ、なんと云ひ譯があるものか。お前の顔だけ、直に玉を引取らせ、その金が解らねえと云つちやア、あんまり達引がねえ。見そくなつた人だ。嫌とも家主はどこだと聞かねえけりやアならねえやうに、わざと其方からさせるのか。途方もねえ人だ。

ト少し聲高に云ふ。

小春　モシ、勘六さんとやら。外に人も聞いて居るのに、靜かにお云ひな。

勘六　外に誰れが聞いて居やすえ。

ト傳海を見て

なんだ、乞食の坊さんが一人居るが、ごてつきの錢貰ひにでも來たのか。

傳海　イヤ、そんな者ぢやござりやせん。わしや爰の治兵衞さんに、五十兩と云ふ貸しがあつて、それを取りに參りました。

勘六　ハ、ア、治兵衞さん、お前、乞食坊主に金を借りなさつたのかえ。飛んだ話しだ。座頭金と云ふはあるが、乞食金と云ふのは始めてだ。こんな坊主の金まで借りて返さねえとは、道理でおれが方の埒が明かねえ。

治兵　勘六、あんまりふざけた口をきくなえ。乞食の金を借りやうが、うぬが世話になるものか。内へ歸つてさう云へ。槌屋の治兵衞だワ。間違ひはねえ。明日にでも金が出來りやア、此方から持つて行つて返すワ。嫌らしい事を吐かすと、只は歸さねえぞ。

ト勘六、氣味の惡き思ひ入れにて

勘六　ようごぜえすわな。そんなに腹を立てなさる事はねえ。間違ひがなけりやヤ、それ程の事はござりやせんが、間違ひがあるからの事でござりやす。

トもぢ〳〵思ひ入れ。おすわ、フツと、小春が持ちし簪に目を附け

すわ　モシ、お前の持つて居なさる簪は、初手からおまはんのかえ。

小春　イ、エ、こりやア、昨日、さる浪人者から、ちよつとした事で、わたしが預かつて居るのサ。

すわ　浪人者と聞くにつけ、そんならもしや、この近所に。

小春　アイ、僅か十二軒とやらに居る人ださうサ。
ト これを聞き、勘六、側へ來り
勘六　ドレ、ちよつとその簪を見せなせえ。
ト 取つて見て
成る程、こりやア、この子の紋所。そんなら……これを寄越した浪人者は、十二軒だと云ひなすつたね。そんなら彼奴に違ひねえ。
ト 簪を持ち、外に出さうにする。
小春　お前、簪を持つて、どこへ行くのぢやえ。
勘六　ちつとのうち、これを貸してくんなせえ……親方、明日來やす。
ト 簪を持ち、一散に向うへ駈けて入る。
治兵　なんだか氣狂ひのやうな野郎だ。
小春　マア、かなりに。これでお出でな。
すわ　こりやア、有り難うおつす。そんならわたしやア行つて來いすよ。
治兵　こりやア、大きにお待遠。お前、お頼み申しやす。
若者　ハイ〳〵。
治兵　ドレ、おれが履物を見てやらう。
ト 門口へ出て、いろ〳〵履物を直し
なんだか、ごた〳〵履物があるぞ。
ト 緋天鵞絨の鼻緒の駒下駄を取り
こりやア、小春、お前のか。
小春　イヽエ。
治兵　ハテ、おらが内には見馴れぬ。
ト 傳海、この下駄へ目を附ける。
小春　アヽ、それは矢ツ張りわたしのサ。
治兵　なんの事た。
傳海　ハテ、派手やかな下駄でござりまするな。
ト 下駄をヂロ〳〵見て、こなし。
治兵　ソレ、爰へ下駄を出して置くよ。
すわ　こりやア、憚りでおつす。
ト 門口へ出て
今の簪を見るにつけ、別れし娘の……十二軒とやら云ふ所に。
治兵　ツイ、持正の横町だ。
すわ　そんなら行て來やんせう。
治兵　内へよく云つてくんなせえよ。
若者　ハイ〳〵、サア、お出でなされませ。
ト 頭になり、若い者先に、おすわ、思ひ入れあつて向

うへ入る。

傳海 治兵衛さん、先刻から默つて居りまするが、箱根でお貸し申しました五十兩、どうぞお返しなされて下さりませ。

治兵 そりやア、此方も覺えのある金、返しは返さうが、今と云つちやア

傳海 出來ませぬか……ようござります。お貰ひ申しますまい。その代り、わたしを此方の内へ置いて下さりませ。

治兵 エヽ。

傳海 以前はわしも箱根で、相應にして居た所化坊主。恥かしい事だが、あの時この小春どのをフッと見初め、氣がまぐれ、勤めの木魚も本尊も、みんな小春どのゝ顏に見え、それから自棄に墮落して、三島の女郎に、すとんと嵌り、たうとうお寺は傘一本、乞食坊主のこの姿。わしが坊主にならぬ前に、餘所から貰つた娘がござるが、この深川で奉公。昨日の暮れ方八幡で、ちよつと逢つて、ヤレ嬉しや、この身の便りと思ふうち、後から女だか男だか出て、これ御覽なせえ、わたしが額へこの通り、疵を附けて、その娘をツイと引ツ浚つて連れて行きましたが、なんと世の中には、酷い奴もあるもの。慥かに娘も其奴の内に、匿まつてある筈。行つて詮議をしようにも、この通り頭がヅキ〱と、今に死なうも知れませぬ。便りに思ふ娘には別れ、身の置き所に困る坊主。ひよつとわしが死んだなら、不承ながら内から葬ひを出して、わしが額をぶち壊した奴を、下手人に取つて下さりませ。

ト小春、焚きさしの竈の下を焚いて居ながら、この話した聞き、底氣味惡きこなし。

小春 コレ、坊さん、お前の頭を打たれたと云ふ、その相手を知つて居たさんすかえ。

傳海 アイ、知つて居るともつかず、知らぬでもなし、いま治兵衛さんの見た駒下駄。丁度娘も、こんなを穿いて居ましたよ。

小春 そんならお前、その娘御さんが、わたしの内へでも來て居なさると云ひなさるのかえ。

傳海 されば、どうでござりますやら、そこの所も知れませぬよ。

小春 なんだか氣味の惡い坊さん。治兵衛さん、お前、内へ置く氣かえ。

治兵 何しに汚ねえ、乞食坊主を、内に置くものか。

傳海　ア、モシ〳〵、乞食坊主と御しやりまするが、そんたら乞食坊主の貸した金だから、金返して下され。
治兵　サア、その金は。
傳海　ハテ、出來ねえ金を無理に取らうとは申しませぬ。それだから、わしを内へ置いて下さりませ。
治兵　でも、今にも死ぬやら知れもせぬものを。
傳海　そんなら金を返さつしやるか。
治兵　サア、それは。
傳海　内へ置いて下さるか。
治兵　サア。
兩人　サア〳〵〳〵。
　ト此うち、ガンと音して、竈に掛けたる釜、割れて飛び出す。これにて三人、吃驚飛び退き
治兵　今のはなんだ。
　ト見て
　釜がいり割れた。
小春　中へ何か入れるを忘れたわいなア。
治兵　ア、らつちもねえ。
　ト竈を見て
　十把の附木を、みんな焚いたな。とんだ話しだ。
傳海　飛んだ話されたか、今の音で頭の芯へ響いたやら、アイタヽヽヽ。どうでもこいつは、内に置いてもらはずばなるまい。
小春　皆さん、この金わたしが返しませう。
傳海　イヤモ、今いふ通り、[illegible]
治兵　これサ、お主が生なか口を出しやアす。
小春　ハテ、ようござんす。元この金は、わたしが兄貴に借りて、お前が借りた金。その時、妙な間違ひで、[illegible]かお金が取替つた樣子。そんな事はマア云はず、[illegible]く、見つともない。五十兩とは僅かな金。佐渡の山の稼ぎ粕。こりやア、どうぞ拜むから、わたしに返さしておくれ。
治兵　お主の氣性ぢやア、見ても居られまいが、金がありやアしめえが。
小春　サア、どうでもわたしがする事を、お前、默つて見て居ておくれ。
治兵　いゝかの。
小春　どうでもなるわいな。
　ト合ひ方になり、小春、思ひ入れあつて、着物を脱ぎ、長襦袢一枚になり、頭の簪を抜き、紙に包み、傳海

海の前へ突き出し
モシ、坊さん、お前の知つての通り、あゝ云ふ譯で借りた金。どうもわたしが濟まさねば、治兵衞さんへ立たぬ義理。と云つて金のなる木は持つまいし、さして女のわたしが事、金がないに違ひないが、恥外聞も打捨てゝ、女だてらこの形に、なつて扱ふこの場の始末。頭の物からこの着物、それだけにはなるまいが、恥かしながら着たまんま、外に着替へも內證は、苦しがりでも表は猫で、浮世を延べ棹の、洒落て暮らせど有やうは、見榮も飾りもこれ一つ切り。心を添へて五十兩の抵當に、どうぞ取つておくれいなア。

治兵　成る程、噂に聞いた小春が心、見るは今が初めてだが、小氣味のよい氣性だ、女のお主を裸にして、默つて居られぬ場所なれど、爰は一番達引に、この治兵衞が恩に着よう。

傳海　もと小春どのに惚れたゆゑ、貸した五十兩、その小春どのが裸になつての達引。乞食にもそれ相應に達引がござります。この着物は其まゝにと、云つちやアわしが虻も取らず蜂も取らず。小春どのゝ心を無にする道理。こりやア、わしが貰つて、五十兩は濟ませませう。

小春　そんなら、さうしておくれか。エヽ、嬉しうござんす。

治兵　成る程、坊さんも達引者だわえ。

傳海　ナニお前、わたしより小春さんは、ほんに江戸ッ子の生膽だ。

ト云ひながら三建目に取りし忠兵衞の紙入れを出し、小春の簪を入れる。治兵衞これを見て

治兵　ハテ、風體に似合はぬその紙入れ。

傳海　ナニ、こりやア、餘所で拾ひました。

ト思ひ入れ。初午の鳴り物になり、向うより源六、萠黃の風呂敷を脊負ひ、小提灯を持ち出て來り、右の提灯にて門口の表札を見て

源六　なんだ、これより右、槌屋治兵衞。これより左、紀伊國屋小春。ハヽア、御支配違ひと見えるな。ハヽヽ。

ト門口を明け

小春は內に居るか。

小春　お前は源六さん。

源六　明日の晝間來いと云ふ約束を、夜になつて來るのが通り者だ。サア、約束の金を取りに來たぜ。

ト云ひながら、小春の形を見て

なんだ、この寒いのに襦袢一つで。
小春　借金の抵當に、着物も頭の物も、みんな遣つたわいな。
源六　して、おれがのはどうするのだ。
小春　どうと云うて、この始末。
源六　寄越さねえ氣か。
小春　もう二三日待つておくれな。
源六　剛氣に輕く出たな。おれも金の代りに取る物がある。
小春　今度取らるゝ物は、襦袢と湯文字。これを取られると、わたしやア……もうちツと待つておくれな。
源六　イヤ、そんな物を取らうとは云はねえ。われが内と感附いて來た藝者のお末。おれに渡しやれ。
小春　イエ、わたしやア知りません。昨日ちよつと逢うたお末さんとやら、そんなに心安くもないわたしが、内へ何しに來るものかな。
傳海　イヽエ、來たに違ひござりません。そのお末は、わたしが娘。どうか逢うかと目を附けた先刻の履物。
小春　エヽ。
治兵　そんなら貴樣はお末の親か。
源六　コレ、小春、昨日浪人者が、お主の氣質を見かけて頼んだ目貫の價。おれも餘ツぽど達引いて、金も取らずにその品を、先へ渡して、今日まで待つた、その上に、五十兩の金も出來ずば、取らずとよしと。カウ、此方から安目を賣るから、お末を出してもいゝぢやアねえか。
小春　それでも、わたしやア知りもせんものを。
源六　知らざアちよつとおれが家探し。
ト奥を目がけ行きにかゝる。小春留めるを振り切り又行きにかゝる。治兵衞、源六を突き廻し
治兵　半分仕切つてからなれど、云はゞ矢ツ張り治兵衞が家。どこの人だか知らねえが、家探しなぞとはならねえ事だよ。
源六　それでも慥かあの奥に。
治兵　ハテ、奥に誰れが居やうと、要らざるお世話だ。ママ、下に居やれサ。
ト源六を下に置く。
源六　コレ、治兵衞どの、お身樣の内なら、家探しもしまいが、小春に貸した五十兩。
治兵　その金、おれが拂つて遣らう。
小春　イヽエ、お前、それでは。
治兵　イヽワサ、打つちやつて置きやれ。先刻お主に達引

きをしてもらつたその返禮、おれが扱ふ。默つて居やれ

ト同じく帶を解き、股引腹がけの形になつて、右の着物を、源六の前へ突き出し

源六さんとやら、お前は今來なすつたから、樣子も知んなさるめえが、斯う云ふ譯だ。わしが借金の抵當に、見なさる通り小春が、着物や帶を取つて、女が裸になつての挨拶をしたゆゑ、貸し方も達引に、納得して、やうやうの事で納まつた。そこへ又お前が金の催促に來たものだから、義理としてもおれが一番、挨拶をしなけりやアならねえ筈だらうぢやアねえか。この搔卷でも、おれが爲には風防ぎだ。明日の朝まで、カツ、番頭さんだか旦那だか知らねえが、おれに一番達引をさしてくんなせえ。

源六　成る程、流石槌屋の治兵衞さん、樣子を聞けば尤もな事。何を云ふにも、先へさう云ふ手本が出ちやア、わしも嫌とは云はれまい。わしも一番達引に、明日までと云ふ事なら。

治兵　待つて下さるか。そりやア忝ない。

傳海　成る程、源六さんとやらも、餘ツぽど達引者だわえ。

源六　昨日から矢鱈に、達引々々と達引づくめだ。どうかしまひにやア粋をしさうだ。そりやアさうと、あのお末、どうも爰に。

ト奧へ心附き。傳海、留めて

傳海　イヽエ、お末は奧には居りませぬ。お末が居所は、わしがじつかり。なんであらうと、わしと一緒に。

トいろ〳〵目で知らせる。源六領き

源六　さう云ふ事なら。

ト治兵衞の着物を纏め、風呂敷に包む。

治兵　ハテ、何時まで裸で居らるゝものかな。

傳海　そんなら、わしもこれを持つて歸ります。

小春　お前の方へ遣つた物、賣るなりと、どうなりと。

傳海　ハテ、氣前のよい小春さんだ。そんならあなた、御一緒に參りませう。

ト兩人、門口の外へ出る。

傳海　後は二人が裸同士。これがほんに猫に鰹節。アヽ羨やましいなア。

源六　おきやアがれ。

ト源六、門口をぴつしやり立てる。傳海。源六に囁く。源六領き、兩人、下の露路口へ入る。

治兵　たうとう借金乞ひは拂つてしまつたが、差引殘つて裸が二人。おらが内に借金乞ひの寄場を見るやうだ。

小春　それにまだ明日、あの勘六とやらも來るであらうね。

治兵　明日は明日の風が吹くわな。そりやアいゝが、お主も寒からう。

小春　わたしよりお前が寒うござんせう。

治兵　誰れでも裸で居りやア寒い。時に思ひ出した事がある。おぬしやア夜具をどうした。

小春　ほんに、わたしもさつぱり忘れて居た。あの大家さんに頼んで置いたに、まだ持つて來てくれぬわいなア。

治兵　そいつは大變だ。おいらが内に蒲團がたつた一枚。早速今夜着て寢る物に困るだらう。野郎どもは露路の闇爐裏へ行つて寢るし、おすわが夜具は茶屋へ遣つたまゝ内にはなし。この蒲團を貸してやつては、おれが着て寢る物はなし。四ツを打つたから損料屋も行けず、と云つて二人一緒に寢るのは、おれも嫌なら、てめえも嫌であらうし、これにはとんと困つたの。

小春　何にしろ、酒でも呑まねば立ちきれぬ。

治兵　先刻の酒がまだあるだらう。

小春　アイ。

　ト立たうとして

　オヤ、どうせう。わつちやア立たれないよ。

治兵　なぜ。

小春　それだつても。

　トもぢ〳〵する。

治兵　ハヽア、裾なしだの。飛んだ幽靈だ。

　ト治兵衞、奥へ向ひ

　オイ〳〵、權七、誰れぞ來てくれ〳〵。

皆々　アイ〳〵。

　ト權七、先に長吉、與太郎、出て來り

權七　オヤ、頭、お前なぜ裸になつて居なさる。

長吉　カウ、小春さんも裸だ、ハヽア、二人で角力でも取るのかえ。

治兵　べら坊め、今殘らず借金の抵當に、着物を取られたのだ。

與太　そいつは詰まらねえ。もし、てらでもしてもらひなせえ。

長吉　うさアねえ……そりやアさうと、風でも引くと詰まらねえ。わたしらが半纏でも着なせえ。

治兵　なアに。寒くはねえ。先刻の酒があるだらう、出してくれろ。

皆々　アイ〳〵。

　ト徳利、茶碗などを出す。

小春　モシ、これからいつそのくされに、思ひ入れ騒がうぢやアないかえ。

治兵　それだ〳〵。無性に踊でも踊つて溫たまるがいゝ。サア〳〵始めろ〳〵。

トこれより茶碗にて酒始まる。

小春　治兵衞さん、斯うした酒を吞むのが、本當に酒盛りだね。誠にいゝ心持ちだよ。

治兵　こんないゝ心持ちがあるものか。借金は拂つてしまふし、さば〳〵とした。

小春　そして今夜は、さつぱり寒くない晩だね。

治兵　寒いものか。おらア暖たかくつて〳〵、コレ、見やこんなに汗が出らア。べら坊に暑い晩だ。

ト態と團扇にて煽ぐ。

小春　わたしやア、暑くつて堪へられないから、どうか霍亂をしさうだ。

權七　イヤ、餘ツぽど負け惜しみだ。小春さんは暑いと云ひながら、火鉢へ噛りついて居るぞ。

小春　わたしが火鉢へ取つついて居るのは、あんまり暑い晩だから、蚊燻しをしようと思つて。

長吉　親方、懐へながら團扇使ひをする事もねえ。

治兵　こりやア、蚊を煽ぎ出すのだ。あんまり何も肴がねえな。カウ、なんぞ水貝に冷素麪でもさう云つて來やな。

與太　飛んだ事を云ひなさる。この寒いのに。そして、四ツ過ぎで何があるものか。

小春　たゞ酒ばかりでよいから、わたしに思ひ入れ吞ませておくれよ。

治兵　てめえ達も、しみつたれに寒がらずと、思ひ入れ、騒げ〳〵。

與太　斯う云ふ時は、藝者の五六人も入れて、思ひ入れ騒ぎてえものだ。

長吉　カウ〳〵、小春さん、なんぞ三味線を彈きなせえ、彈きなせえ。

小春　わツちやア三味線は嫌ひだ。

治兵　そんな藝者があるものか。そして、おぬしやア座敷へ出て何を彈く。

小春　そりやアお前、仕方がなくつて彈くけれど、ついぞ流行り物の、よしこのや、二上り潮來なんぞのやうな、色氣のあるものは彈いた事はねえよ……わツちやアなんでも唄が好きだ。先の音羽屋の親方が拵らへたと云ふ、それ、深山の奥のその奥の、ずつとの奥に一人居てと云

ふ唄が大好きサ。

治兵　ありやア松緑が拵らへた「物思ひ」と云ふ唄だ。今度おれがその真似をして、押ッ被せの唄を拵らへた。

小春　なんと云ふ唄だえ。

治兵　松の庵と云ふめりやすだ。とても隠居のやうにはゆかねえが、弾いて聞かせよう。

皆々　親方、やんなせえ／＼。

治兵　小春の三味線があるだらう。出してくりやれ。

与太　アイ／＼……小春さん、お前の道具箱は、どこにありやす。

長吉　てめえ、大工の癖が失せねえな。道具箱と云ふがあるものか。三味線箱だらう。

権七　オッと、爰にあり／＼。

ト三味線を出す。治兵衛これを取り

治兵　先の松緑は聲がよかつたが、おらア親不孝で聲が悪い。

小春　爪弾きで小さくおやりな。

治兵　知れた事よ。大きな聲で真面目にやられるものか。

斯う云ふ唄だ。

ト調子を合せ

〽夜や更けぬ、一人寝られぬ物思ひ、逢うて話しの山々は、富士を向うに筑波を後に、深山の奥おやなけれども、世を牛島や寺島に、帰ッて見てもすましても、迷ふた先のその先の、ずッとの果はどうなろと、何時も逢はねばじれが来て、別るゝ憂さをくらぶれば、松の庵は憩の楽しみ。

トこの唄を、治兵衛、弾き唄ひに唄ふ。

皆々　妙々。

ト褒める。

小春　とんだいゝねえ。先の唄に似て、手がみんな違ッて居るから、その唄の手際では、女嫌ひも少々受取り悪いね。

権七　さうサ。これが不思議の一つのうちサ。

治兵　まだ気障を云ひ出しやアがる。三味線を弾いたら又暑くなつた。

与太　わしらは暑いから、路地へ行ッて涼んで来やせう。

長吉　路地番の圍爐裏は又格別暖かで……イヤ、とんだ涼しい。

治兵　そんなら、てめえ達は、もう行つて寝るか。おらも大分酔つた。

小春　わたしも大層酔ひましたよ。

權七　コレ、皆や、親方と小春さんが、ほろ酔つてたつた二人。

與太　これを殘して行くと云ふは、誠に氣が悪いねえ。

治兵　べら坊め、女嫌ひと男嫌ひ。斯う云ふ氣のいゝのはねえ。

皆々　それでも妙な張合ひで、

治兵　馬鹿ア云ふな。

皆々　アヽ、氣が悪い／＼。

ト云ひながら皆々奥へ入る。

治兵　サテ、酒で溫たまつた。これから寢るとしたところが蒲團が一枚。困つたものだ……オヽ、いゝ事を思ひ出した。蒲團がたつた一枚だから、マア、おれが爰へ寢るワ。よしか。其うちおぬしアそこで一人、酒でも呑んで待つて居るがいゝ。其うちにおれが目が覺めたら、又起きてお主を寢かすワ。

小春　そんなら替り番こに寢るのかえ。

治兵　さうよ。マア、そこで緩りと呑まつし。其うちおれが。

ト此やうな事を云ひながら、熟睡の體にて、とろ／＼寐入る。小春は無性に酒を注ぎ、呑み居る。

小春　治兵衛さん／＼、お前、いゝ氣前だねえ。わたしを一人裸で置いて、もう寢入つたのかえ。ほんに、マア、若い男に若い女。夜更けて二人こんな形。只の人ならこれが、マア……世の中はよくしたもの。

ト又た酒を注ぎ呑む。この時分より差し金の鼠出て、櫺子を傳ひ、眞中の柱に掛けてある紙屑籠を落す。小春恟り見て

オヤ、なんだ。氣味の悪い。あの鼠が紙屑を落したさうだ。そこら中紙屑だらけに。

ト云ひながら、その反古を掻き寄せ

嫌らしい文がある。大方内の人達の……エヽ、なんぢや。よき便りに任せ文して申し上げ參らせ候ふ、これサ、權さんや、お前は憎らしいよ、ふとの心も知らず、與太さんと二人でよく浮氣をしたの、ほんね／＼お前は憎らしい……オヤ／＼、こりやア、なんと云ふ文だらうねえ……ほんね／＼、お前の事を思ひ出すと、外のお客が嫌になり毎晩々々寢たく存じ參らせ候ふ……どこの女郎だらう。嫌らしいなう。

トあちこちと見て、大小の給を見附け、

オヤ、大小の疵があら、ほんに、こりやア、嫌な形だなう。

ト云ひながら、この疵をヂツと見て、治兵衛の寐顔をフツと見る。また酒を注いで呑み、後の反古を出して見て、

オヤ／＼、こりやア鎖口の疵がある。天神様が風呂敷包みを持つて、なんだらう。天神様貧乏屋へ自身にござる、

トまた[illegible]出して見て

オヤ、この人はなんだ。夜遁の御無理は御尤も……夜遁の御無理は御尤も。

ト思ひ入れ。ゴンと時の鐘。

オヽ、寒いな。大分酔ツたさうだ。

トいろ／＼思ひ入れあつて、トヾ屏風の中へ入る。

治兵衛さん、堪忍しておくれよ。

ト屏風を引き廻す。時の鐘になり、下の踏掛口より、傳海、先に、源六、長吉、與太郎、出て来り

源六　そんなら貴様の娘を来させ、いよ／＼おれに。

傳海　親のわしが自由自在、奥に居る客に、この事をちに聞いたれば。

長吉　わしがとつくに見て置いた。

與太　今夜直ぐに引浚つて、お前の所へ。

源六　そいつは有り難い。身請け代は、ソレ。

ト懐中より金を出し、二人に渡す。

長吉　そんなら、これからそびき出し

與太　駕籠に乗せて須崎の方へ。

傳海　この着物と[illegible]は、お前の方で、どうぞ金にして下さりませ。

源六　オツと合点、こなさんには、しつかり禮を。それまでの印は。コレ。

ト懐中より質置の目貫を出し

こりやア、捨売りにしても五十両の代物。この目貫を貴様に預けて置かう。

傳海　金目の代物、しつかりとおれが預かりました。二人の衆はわしと一緒に。

長與　裏から廻つて。

傳海　サレ。

ト両人囁き、長吉、與太郎、傳海、路地の内へ入る。源六残り、傳海が渡した着物を一緒に風呂敷へ包み居る。向うより勘太郎出て来り、この體を見て窺ひ居る。源六、これを知らず

源六　まんまとお末を引ッ淺へばおれが女房、巧い〳〵。
勘太　うぬは、源六。お末をどうした。
源六　おれがそれを知るものかえ。
ト勘太郎が突き倒し、一散に向うへ入る。
勘太　うぬ、待ちやアがれ。
ト源六を追ひかけて、同じく向うへ入る。また路地の口より若い衆二人、駕籠を擔ぎ、これに與太郎、長吉附き添ひ、向うへ入る。後より傳海、出て、件の目貫を出し
傳海　こりやア、コレ、兼ねて友切丸に附いて居た鷄の目貫。北條家へ差上げれば、褒美の金。此方はおすわで又ぞろ金。こいつは巧いワ。
ト云ひながら同じく向うへ入る。路地口より金助、出てこの樣子を聞き
金助　御主人方の身の云ひ譯に、なるべき品のあの目貫。後ぼッ駈けて。さうだ。
ト件の藁苞より大小を出し、腰へぼッ込み、追ひかけて向うへ入る。合ひ方になり、舞臺の屛風を明け、治兵衞、出て、火鉢にかけたる土瓶の口より水を呑む。小春こなし。治兵衞、呑ませてやる。兩人思ひ入れ。

治兵　小春、おぬしやア恨みなもんだぜ。たうとうおれを。
小春　堪忍しておくれ。どうも仕樣がないわいなア。
治兵　隨分人並な野郎になつて、小粹轉のきいた眞似をして居れど、なんだか勝手が知れなくつて、小ッ恥かしいやうで……ほんに女と云ふものは、おらア今まで大分損をした心持ちだ。
小春　わたしも廿歳の上を越しても、ほんの白歯、女の方から厚かましう、お前に極まるゝが恥かしいわいな。
治兵　小春、てめえの白歯は少々噓らしいぜ。
小春　なんの、マア、お前、大概知れて居るぢやアないかいな。
治兵　おれにもナニ知れるものか。女に肌を觸れゝば、直ぐに災難が來ると、親の遺言を背いて、お主と斯うなるからは、この後どうかお主の方に、妙な引ッかゝつた野郎でもありやア、おらア眞劍に野暮になるぜ。
小春　お前がそれ程な心意氣なら、わたしも嬉しい。今日から直ぐにわたしが身は、治兵衞と云ふ大きな錠を、體中へ下ろして置くわいな。
治兵　どうか。合鍵の出來さうな事だ。
小春　お前ぢやアあるまいし。

治兵　おらア今まで知つての通り。

小春　それでも仇にはならぬ。先刻の勘六とやらの話しでは、遁がれぬ縁でおすわさんを、無理に買つたと云ふ話し。その遁がれぬ縁が氣に喰はぬわいな。

治兵　いゝワ、あのおすわか。ありやアおれがどこまでも、世話せにやアならぬ主筋。と云つたやうなもの。そんなら又てめえにも聞きたい。先刻の書、浪人者の所から預かつたと云ふが、その浪人者はてめえの色か。

小春　止しておくれ。なんのわたしが。

治兵　そんなら、なんだ。

小春　サア、その浪人はね。

　ト話さうとする。この時バタ〳〵になり、奥より權七、半纏を着て走り出て來り

權七　親方、小春さん、大變だ〳〵。先刻來た乞食坊主が、お前の匿まつて置いた藝者のお末さんを、引ッぱらつて洲崎の方へ逃げて行きました。

小春　エ、、そんならあの坊主めが。

　ト立たうとして立たれぬ思ひ入れ。治兵衞留めて

治兵　小春、待ちやれ。何か譯は知らねえが、お主が匿まつたと云ふ女。引浚つたあの坊主。女のてめえがそんな形でも行かれまい。おれが行つて取返して來て遣らう。

小春　そんならお前、どうぞして。

治兵　と云ふおれもこの形ぢやア。

權七　モシ、親方、わしが半纏を着て行きなせえ。

治兵　そんならこれを。

　ト手早く、權七の半纏を着る。

權七　三間堂の方でござりやす。

小春　お前は早う。

治兵　そんなら小春。おやアねえ。いゝや。内を氣を附けろ。

　トごん〳〵になり、一散に向うへ走り入る。小春、思ひ入れあつて

小春　女の肌を觸れると、直ぐに災難が來ると云ふ、治兵衞さんの身の上。引くに引かれぬ男の短氣。もしや今のが災難に。

　ト思はず立ち上がる。權七、これを見て

權七　小春さん、お前の形は。

　トこれにて、小春、悔り坐る。

小春　焦れつてえよ。

　トよろしくありて、道具廻る。

本舞臺、三間の間、一面の柾木垣、後ろ三間堂の屋根を遠く見せる道具。爰に駕籠屋、以前の四つ手駕籠を擔ぎ、長吉、與太郎附き添ひ、傳海の腰を、兼助、留めて居る。屋體囃子にて道具納まる。

兼助　サア、坊主め、目貫をおれにキリ〳〵渡せ。

傳海　この餓鬼め、しやらくさい。おのれ、そばへをしやアがるな。如何にも目貫は持つて居るが、うぬに渡して詰まるものか。

兼助　さう云や、いつそ刀にかけて。

傳海　面倒な。この小倅、疊んでしまへ。

兩人　合點だ。

ト兼助にかゝる。この立廻りのうち、傳海は駕籠に附き添ひ、向うへかゝる。向うより、治兵衛、走り出て來て、この駕籠の棒先を捉へ、舞臺へ突き戻す。

兼助　ヤア、治兵衛さまか。

治兵　こなたはいつぞや箱根で逢つた兼助どの。

兼助　この坊主めが御主人方の、詮議なさるゝ黄金の目貫を。

治兵　ナニ、この坊主めが。

駕屋　ト駕籠舁き二人、息杖を持ち
小僧め、うぬを。

ト兼助にかゝる。これにて刀を落し、息杖を引つたくり、立廻りながら、下座へ入る。長吉、與太郎、治兵衛へかゝる。治兵衛、兩人をポン〳〵と當て、傳海と立廻つて、駕籠の垂れを明ける。内より、お末出る。

治兵　小春が世話した藝者のお末、おれが來たから氣遣ひねえ。お前は、これから知るべの方へ。

する　そんならわたしや、十二軒に兄さんが。

治兵　そこへなりと、ちつとも早く。

する　合點でござんす。

トお末、向うへ走り入る。

傳海　あれを遣つちやア。

ト治兵衛引きつける。與太郎、長吉、心附き起き上り、これより三人、駕籠の息杖、開帳札などを持ち、世話の立廻り。トゞ、與太郎、長吉、逃げて入る。治兵衛傳海の襟首を締めつける。

治兵　サア、坊主め、その大事な目貫とやらをそこへ出せ。

傳海　それをおれが知るものか。

治兵　知らねえと吐かしやア締め殺すぞ。

ト襟首を締めつける。

傳海　アイタヽヽ。ア、出すよ／＼。出すから、もちつと緩めて下さい。

トこれにて、治兵衛、手を放し

治兵　サア、キリ／＼出せ。

傳海　いま出すよ。ア、忙しない。野暮に力の強い男だ。この目貫はの。

ト云ひながら息杖を叩く

爰にあるよ。

ト出しぬけに、治兵衛の背中をくらはす。これにて、治兵衛、前へのめる。直ぐに傳海、首筋へ足を踏みかけ

傳海　動きやアがるな。泥坊野郎め。うぬが小春と巧い仲。そのむやくしさに、あのお末を引浚つて来たこの傳海。それさへうぬが取返し、小胸の悪い樋屋の治兵衛。罰が当ると云はるゝを、承知の上のこの坊主。名僧智識のお御足を、額へしつかり、極印もんだと思やアがれ。

ト踏まへられて、治兵衛、金助の落したる刀手に觸はるゆゑ、これを取り、傳海の内股を突く。これにて、傳海、たぢ／＼となる。治兵衛、起き上がつてキツと見得。

治兵　男の額へ[illegible]を、踏みかけられては一分の、立たぬ達引。毒を喰はゞ、さらりとしめた坊主が罪。數も三十三間堂、佛の庭で丁度よく、お念佛でも。

ト傳海、ちよッとかゝるを、見事に投げ退け

ほざきやアがれ。

ト曲撥になり、治兵衛、傳海を切り殺す。傳海、人殺し／＼と喚くゆゑ、治兵衛、左の手にて口を押へ、脇腹を抉る。これにて、傳海、治兵衛の小指を喰ひ切る事。トヾ、切り倒し、止めの刀を刺し、傳海の懐中より紙入れを出し、件の目貫を出し、右の紙入れは、何心なく死骸の側へ打捨て置き

これが黄金の目貫とやら。ア、コレ、殺す程の恨みはなけれども、降つて湧いたるこの災難。これと云ふも、親の遺言に背いて小春と……ハテ、争はれぬ……マア、何にしろ、逃がるゝだけは、云ひ抜けて、小春に逢つて、この様子を。さうだ。

ト頬かむりをして向うへかゝる。向うより中間二人、留守居提灯を灯し、後より左衛門、八右衛門、袴、[illegible]羽織の形にて出て来る。花道にて、治兵衛と摺れ違ひ、

治兵衛、足早に向うへ入る。

五左　何か怪しい風體の奴でござる。

八右　左樣でござる。併し、打捨て置かつしやるがようござる。

トこれにて、兩人舞臺へ來る。

中間　人が切られて居りまする〳〵。

ト兩人、立ちより、死骸を改め見て

五左　八右衛門どの、御覽なされい。非人體の者と見えまするが。

八右　左樣でござる。こりやア盜賊の仕業でもござるまい。定めし辻切りか、試しものゝ類でござらう。

五左　なんぞ證據になる物でも……家來、提灯。

トあたりを尋ね、件の紙入れを見附け

爰に紙入れやうの物が落ちてござる。

八右　ドレ、お見せなされい。

ト中を改め、いろ〳〵書き附けなど出し

虎信どのへ、箱根山別當……この虎信とは、慥かに、龜谷の。

五左　ヤア。

ト八右衛門、直ぐに懷中して

八右　後日の證據。

五左　ちよつと身共に。

ト八右衛門の懷中へかゝるを、よろしく拂ひ退ける。

チヨンと木の頭。

八右　家來、提灯やれ。

トきざみにて、よろしく　　　拍子幕

三幕目　　石橋庵の場

役名――北條時太郎。横田義平次。關山郡藏。高瀨權藏。船頭、勘太郎。道具屋源六。髪結ひ、おつな。茶屋女房、おみの。藝者、春次。槌屋おすわ。龜谷忠兵衛。

本舞臺、三間の間、正面一面の中二階、裾は黒板塀、下の方に誂らへの門口。柱に石橋庵桝正と云ふ聯を掛け、尤も中二階、伊豫簾下ろしあり、幕の内より源六、勘太郎、摑み合つて居る。大拍子、佃騒ぎに

て蓋明く。

勘太　コレ、源六、お末を何處へ埋んだ。それを吐かせ。

源六　盗人猛々しいとは、うぬが事だ。お末より、うぬが引揚げて、何所へ忍ばせた。吐かしてしまへ。この源六も男の意地。女はおれが貰つたぞよ。

勘太　イヽヤならない。船頭ながらこの勘太郎と、譯のある事は、誰れ知らない者もない。それをお主に取られては

源六　男の立たぬは相身互ひ、邪でも應でも貰つて見せう。

勘太　石が砂利になつても遣られねえと云つたら、どうする。

源六　どうするものか。お定まり、この源六が腕で貰はう。

勘太　さう吐かしやア、この勘太郎も、鰐柄を握る腕骨、この力瘤で遣られない。

源六　何を大束な。さう吐かしやア、うぬを。

勘太　何をしやアがる。この野郎め。

ト大拍子、佃騒ぎになり、兩人、掴み合ひになる。この鳴い物にて、向うより、おつな、ぶら提灯を提げ出て來り、この體を見て

つな　ヤ、お前さん方は、何をごたつくのだ。どう云ふ譯か知らないが、マア、待ちなさんせ／＼。

源六　エヽ、邪魔な女だ。退いて居やアがれ。

つな　女の際に色氣がないが、この喧嘩はわつちが預つたよ。あれサ、マア、爰をお離しよ。恐しい力だぞ。

源六　喧ましいわえ。女の知つた事ぢやアねえ。サア、野郎め、お末は何處へ引出した。吐かしてしまへ。

勘太　さう云ふうぬが無理往生に、何所へか埋めて置いたであらう。それをまき出してしまやアがれ。

つな　サア／＼、それだからわつちが留めるのだアな。そのお末さんの居所は、わつちが爰で聞かせるから、マア、爰をお離しよ。

源六　ナニ、てめえがお末の居所を知つて居るか。

勘太　そりやア何所だ／＼。

つな　そのお末さんは今夜あたり、とんだ災難に逢つたと云つて、わつちが雇はれ先の兄御の忠兵衛さんの内へ、たつた今戻つて居なさるよ。

源六　そんなら、その忠兵衛と云ふ浪人者の兄の内に、お末は居るな。

つな　病犬でも追はれたやうに、色を眞青にして、せいせいと云つて駈け込んだとサ。

勘太　こりやアいゝ事を聞いたわえ。そんならいよ／＼兄

源六　貴の内だな。
源六　兄貴に渡つて、否でも應でも
勘太　おれが貰ふワ。
源六　イヽヤ、おれが先だ。
勘太　うぬが先なら、おらア萬だ。
源六　喧ましいわえ。うぬはそこにまごついて居やアがれ。
ト勘太郎を突き飛して下座へ入る。
勘太　この野郎め、うぬ、どうするか見やアがれ。
ト大拍子になり、勘太郎、後を追ひかけて入る。おつな一人殘つて
つな　なんの事だ。千だの萬だのと、飛んだ惠比須講だ。ほんに千と云へば、明日のお汁の實は、千六本でもして上げよう。ドレ、八百屋へ行かうか。
ト大拍子、流行り唄になり、おつな、下座へ入る。中二階、伊豫簾の内にて
みの　サア、三ツ打ちの薩摩で參りませう。
皆々　しやん／＼／＼。
ト狐拳を打つ聲。流行り唄になり、葭簾を卷き上げる。ここに時太郎、義平次、權藏、郡藏、おみの、春次、序幕の形にて酒を呑んで居る見得。

時太　サア、身共が勝ちぢや。義平次、一つ呑め／＼。
義平　イヤモウ、恐れ入りましてござります。御前の鐵砲で、これで丁度三杯。
時太　なんと、狐拳は上達であらうな……上達の婆アと申す洒落は如何ぢや。
みの　ほんにマア、よくさう出ます事でござります。
時太　ナニ、よく出る。よく出るよく何十文字とは、これは長刀ぢやと申すのぢやが如何ぢや。
春次　イヤモウ、恐れ入りましてござりますわいなア。
義平　コレ春次、恐れいり豆福山椒とは、正月の洒落ぢやが、どうぢや。
郡藏　これは横田氏、正月は物事改まつて、新らしうなるに、それは餘り古うござるて。
時太　コリヤ／＼、古いなら身共が新らしい地口を申さうか。聞け／＼。
みの　サア、承はりませう。
皆々　御前、なんとでござりますな／＼。
時太　アヽ、なんとやら申した。オヽ、それ／＼、恐れ入谷の鬼子母神とはどうぢや。感心か／＼。
權藏　イヤモ、感心信濃の善光寺とは、義平次どの、如何

でござらうな。

吉々　ハヽヽヽ。

義平　時に、モウこのおすわは、歸つて參りさうなもの
おや。

霧波　ほんに、何所を徘徊いたして居る事ぢややら。

權藏　ちよいとその邊を見物と、申したところが例の外八
文字ゆゑ、道中に暇時づゝもかゝるでござらう。

吉次　ほんに、おすわさんは、吉原に居やしやんして、外
珍らしいさうにござんすわいなア。

みの　おやと云うて……私しがちよつと、迎ひに行て參じ
ませうかいなア。

時太　よいわ〳〵。氣儘に致して置け〳〵。戻りたい時分
には戻るであらう。

義平　鮑貝を縁の下へ、伏せて置きましたら歸るでござ
らう。

霧波　何を云はるゝ、猫ではあるまいし。

みの　ほんに、猫と仰しやれば、義平次さん、ちつと昔の
流行り唄を、彈いてお聞かせなされませぬか。

ト三味線を出す

義平　これはどうしたものぢや。ナニ身共が昔の流行り唄
を存じて居るものか。年寄りではあるまいし。當世の唄
なれば、何なりとも彈いて聞かさう。

時太　サア〳〵、もう一つ景氣を附らうかの。

霧波　前時代節の御手前には及びませぬが

權藏　おみの、加勢を頼む〳〵。

みの　三味線で參りませう。

ト[illegible]を打ち、誂らへの出の唄になり、向うより、
おてう、料理茶屋の下女の拵らへ、ぶら提灯を提げ、
後より、おすわ、吉原の傾城の形にて出て來り、花道
にて後を見返り、思ひ入れあつて

すわ　ほんに、あそこの角で見かけたは、慥かに卯吉さ
んぢやと思うたが。

トこなし。

てう　オヤ、おすわさんには、いま見かけたあの[illegible]さを
するやうな人が、お前の色かえ。

すわ　ホヽヽヽ、この子とした事が。

てう　それでも、いつそ寄り惜しがつて。

すわ　エヽ、モウ、子供衆や……オヤ、サア、行かうかい
なア。

ト矢張り右の唄にて、本舞臺へ來り、また以前の方を

見て
どう思うて見ても、形恰好、憎いと思ふ忠兵衛さんに逢ひはたい。逢うて恨みの數々を……イヤ〳〵、よう思うて見れば、よしや忠兵衛さんにしてからが、今宵のお客は以前の御主人。付き〴〵のお方は父さんの朋輩衆。奥表と隔てしゆゑ、わたしも顔を見知られぬが、まだしも仕合せ。其やうな事からツイひよつと、わたしが身の上知れたなら、あれ見よ六條京之進の娘が、多くの人の慰みもの、傾城遊女の憂き勤めと、朋輩衆の口の端に、かゝるのが口惜しい。また逢うたなら喰ひついてなと、恨み云はうと思うた男。もしやそれと顔見たりや、娘のおさんはどうしてぢや、なぜに一緒でない事かと、あの子の事に引かされたり、また懐かしいが一杯で、張り詰めた氣も何所へやら。ほんに思へば女子程、甲斐ない者はないわいなア。

ト此うち、おてう、下の方に居て、片手にぶら提灯を提げ、片手に袂から手玉を出して取つて居る。この時

てう　オヤ、おすわさん、どうしてもお前は、あの人と色だね。

トおすわ、氣を替へ

すわ　オヤ、この子とした事が、アノ今の人はわたしが兄さんに、よう似てぢやゆゑ。

てう　兄さんは兄さんだらうが、腹合せの兄さんかえ。

すわ　アレ、又そんな事を云ふと、きかぬぞよ。

トこの聲を聞いて二階より

時太　コレ〳〵、其所に居るのはおすわぢやないか。

義平　コレ、そもじは其所に何して居やる。

權藏　ちつと受取れぬ由良之助ぢや。

義平　これは御挨拶。

みの　そして、由良之助とおかるが天地して居りますね。

てう　アイヨ、裾廻しが切れたからサ。

みの　オヤ〳〵、きついこつたね。

春次　サア〳〵、おすわさん、皆さんがお待ち兼ね。

皆々　サア〳〵、爰へ來給へ〳〵。

すわ　いま行くわいなア。

ト流行り唄になり、おすわ、門の内へ入る。

義平　加茂川に放して見たき都鳥とやら、吉原姿の女郎を、この深川で買つて見たいと御しやる、御前の思し召し付き。なんと何れも、隅には置かれぬ若殿でござるてな。

みの　ほんに、假宅この方のお遊びでござりますわいなア。

ト謠らへの唄になり、後の襖を開け、おすわ、おてう、出て來り

すわ　ほんにおみのさん、仲町とやらの景色は、一入面白うあつたわいなア。

みの　お前、その形で行かしやんしたのかえ。さぞ人が眼を潰したでござんせう。

時太　サアおすわ、一つ呑め〳〵。

すわ　ハイ、有り難う。

　トお辭儀をしさうにして氣を替へて

イエ、わたしは酒は。

義平　嫌ひでも、あがる所ではあがるであらうと、云ふ詞は古風ぢやが、一つ呑み給へ。何か浮ぬ顏ぢやな。

てう　その筈さね。あそこで今、色を見かけたからサ。

霜藏　ハヽア、おすわがその色と云ふのを

權藏　見たいものぢや〳〵。

すわ　エヽ、モ、この子は嘘ばつかり。

　ト睨める。

義平　大方吉原に居る時、馴染んだ男でがなござらう。

すわ　イヽエ、モウ、何所でもそんな浮氣な事は。

みの　なくつてはと云ひたいやうだが、ほんにこの子は、さうでござりませうよ。

義平　ヤ、此奴が。女は女同士だと思つて、身贔屓を致し居るな。コリヤ〳〵、御前のお杯ぢや。一つ呑め〳〵。

すわ　ほんに、主のお館に勤めて居たならば、私し風情の女子、お杯どころか、まだお目見得もなるまいに、畏れ多い。

義平　ヤ。

すわ　イヽエ、わたしや酒は嫌ひぢやわいなア。

　トわざとツンとする。

時太　そのひぞつた所が、彼の吉原町の張りとやらであらう。オヽ、うい奴ぢや〳〵。

義平　ほんにおすわは、吉原町に居た時は、名は何とやら申したな。

みの　慥か梅川さんとやら、云はしやんしたさうにござんす。

義平　コレ、おすわ、いよ〳〵左樣かな。

すわ　ホヽ……、なんでござんす、氣味の惡い。アイ、梅川と云うたが、なんとしたえ。

義平　さればサ、六七年以前の事ぢやが、お屋敷に今も勤めて居る、六條京之進が娘、梅川と申す女子、奥小姓を

勤めて居たとの事。奥表と隔てたれば、どのやうな女子ぢややら、顔は知らねど、此奴、大の粗ッつ早もので、お中小姓の亀谷忠兵衛と申す者と、不義いたしてお屋敷を出奔いたし居つたが、承はつた年頃と申し、名と申し、なんと似寄りの事もあるものではござらぬか。

ト此うち、おすわ思ひ入れ。

郡蔵　我れ／＼は新参の者ゆゑ、詳しい訳は存じ申さぬが、忠兵衛とやらんも、怪しからぬ不所存な者。桂川を連れ出奔いたした夜に、御用金貳百両紛失。それゆゑ親忠太夫へ疑ひかゝり、その咎より押籠めと申す事。

権蔵　近日落着いたすと、申す事ではござらぬか。

義平　これサ、内々承はつたが、腹だらうと申す事でござる。

ト腹を切る真似をする。おすわ、思ひ入れ。おみの。こなし。

すわ　そんならあの折お金の紛失。それゆゑ親御へ疑ひかゝり……そりやマア、ほんまの事かいなア。

義平　おすわ、怪しからぬ気にかけやうな。お主は亀谷親子に由縁でもあるやうぢやな。

すわ　イエ／＼、なんのあらうぞいな。赤の他人のわたしでも、察して見ればその桂川……さんとやらの為には舅御の、腹切らしやんすと云ふ事を聞いたなら、さぞや悔り、心の内は、どのやうであらうぞいなア。そしてマア忠兵衛さんとやらは、その事を知らしやんせんのかいなア。

義平　何へ知つて居たとてどうなるものか。親の首へ縄をかけると申すは、あの忠兵衛が事ぢや。

みの　銚子はマアどうしたのだえ。

ト　杯を取上げ、こなし

時太　これは座敷が浮かぬな。コレ、其方達、なんぞ面白い事でも申さぬか。

みの　ほんに御前、お湯でも召しまして。

時太　それ／＼、座敷を替へて

郡蔵　貴公は如何でござりませう。

時太　なんの、へぼとやらの為に。

トこの時雨車の音する。

みの　モシ／＼、丁度折よいこの春雨。

春次　モシ、粋でござりますね。

時太　大酒と致せ／＼。

郡蔵　ソリヤ、御前の御意でござる／＼。

義平　イヤ、奇妙〳〵……存のよ際げよ一寸先は闇の夜。

ツイ〳〵のツイ。

ト義平次、唄ひながら踊つて、ヨロ〳〵とする。

みの　モシ、お危なうござります。

ト三味線を取上げる。おすわ、立ち上がつて辛気な思ひ入れ。この見得、流行り唄になり、簑垂れバラ〳〵と下りる。時の鐘。合ひ方。雨車の音。拍子木鳴り物にて、向うより忠兵衛、古き蛇の目傘をさし、とぼとぼと出て来り、下座より若い者二三人、頬かむり、女郎買ひの形にて出て来る。花道にて忠兵衛に行き合ひ忠兵衛これを知らず突き当る。若い者、口小言を云ひながら向うへ入る。

忠兵　オヽ、いま鳴る鐘は、もう初夜でもあらうかい。アア、コレ、暮れ前にはとつくに戻らうと思うたに、あの家主どのゝ留守であつたに依つて、帰りを待つたで思ひの外に遅うなつた。併し、もう家もそつとぢや。常ならば、なんの雑作もない道ぢやけれど、折悪いこの程の病ひ。アヽ、難儀な事ではある。マア何は兎もあれ、おさんもいから待つてゞあらう。こりや、少し急がずばなるまい。

ト云ひ〳〵花道付け際まで来る。下座より、おつな、大根人参菜漬などたゞげ出で来り、忠兵衛に行き合ひ

つな　モシ、お前さんは、眼のお悪いのに、何所へお出でなされます。

忠兵　オヽ、さう云ふ聲は、おつなどのか。

つな　お前さん、御用があるなら、なぜ私しをお使ひなされませぬ。そして今時分、何所へお出でなされます。

忠兵　サア、妹お末が事に付き、一の鳥居の家主の所まで、ちよつと行て来ればたらぬゆゑ、

つな　そんならわたしが付いて参りませう。お危なうござりますぞえ。

忠兵　系なうござるが、例へ眼は不自由でも、心覚えの道筋ぢや。大事ない。其方は内へ戻つて、妹や娘を頼みますぞえ。

つな　モシ。その大家様の所へ、わたしでは済みませぬかえ。

忠兵　イヤ〳〵、女子では解らぬ事、ツイ行て来る程に、内を気を付けて下され。

ト行き過ぎる。

つな　モシ〳〵、もつと左の方へお出でなされませ。アヽ、

どうか危ない……ア、、其所が辷ります〳〵。
忠兵 オツと、承知ぢや〳〵。
つな 怪我をなされますなえ。
ト兩方へ別れ、おつな、揚げ幕へ入る。忠兵衞、本舞臺へ來る。好き時分おすわ出かゝり、窺ひ居る。忠兵衞、とぼ〳〵として足駄を踏み返し、鼻緒を踏み切りたるこなし。
忠兵 南無三、鼻緒を踏み切つたさうな。
ト其所らを尋ねる。この時、おすわ、ツカ〳〵と忠兵衞の側へ行き
すわ モシ。
忠兵 ヤ、、誰れぢや。
すわ エ、、お前はなア。
ト胸倉を取らうとする途端、門の内より、義平次、郡藏、權藏、出て來り
三人 コレおすわ。
すわ エ、。
ト恟りする。
義平 おぬしやアマア、座敷を拔けて變つた所に。
郡藏 何をして居るのぢや。

すわ サア。わたしや……オ、、それ〳〵、通りのお方さうなが、眼は不自由な夜の道、鼻緒を踏み切り、難儀さしやんすが笑止さに、尋ねて上げうと。
ト其所らを探して
オ、、爰にあつたぞえ。
ト忠兵衞、思ひ入れあつて
忠兵 これは〳〵、どなたか知らぬが、深切なお女中、忝なうござる。
義平 さう云ふおてまへは、龜谷忠兵衞どのではござらぬか。先達ては途中にて。
忠兵 ヤ、、その五音こそ古朋輩。
義平 横田義平次でござる。
郡藏 我れ〳〵は新參者ゆゑ、未だ知る人ござらねど、關山郡藏と申す者。
權藏 拙者は高瀨權藏。
忠兵 これは〳〵、何れも方。
郡藏 兼ね〴〵承つた龜谷氏。一家中で一二を爭ふ家柄と云ひ、御器量と申し、日頃自慢の其許も。
權藏 殿の息が拔けますと、忽ち微祿のその物腰。風吹きの鳥おどしを見るやうな。ハテ、氣の毒千萬。

兩人　ム、、ハ、、、、。

忠兵　これは面目もない對面いたしてござる。イヤモウ、不所存の拙者ゆゑ、御家中にては、種々の御批判は覺悟の前。斯樣に途中ながらも、貴殿方にお目にかゝるも、何か心が咎めまして。イヤ、御緣もござらば又重ねて……

ア、コレ、履物が其所らに。

ト此うち、おすわ、忠兵衛の鼻緒を立てゝやりたきこなし、いろ〳〵ある。

すわ　サ、この履物の前鼻緒が。切れくさつて居る程にな。

忠兵　ドレ、こちらへ下され。

すわ　どうぞわたしにすげさせて。

ト誂らへの合ひ方。

義平　そんなら、おすわが忠兵衛どのゝ、あの鼻緒を。

すわ　躓く石も緣の端、憎い石でも緣なりやこそ、ひよんな拍子に蹈みかけて、切れてしまつたこの鼻緒を、見ぬ顏せぬお女子の操。サ、どうぞわたしに、立てさせて下さんせ。

忠兵　ハテ、よう似た……深切な女中。イヤナニ、これなるお女中は。

義平　サ、近頃まで吉原にて、梅川と申した中三、浪人召されても、その傾城に履物の鼻緒をすげさせるとは、

標帶　ハテ、全盛な事でござる。

忠兵　フム。すりや、その女中は、吉原にて遊女奉公、その名は梅川どのとな。

ト思ひ入れあつて

世間に似寄りは儘ある習ひ。とは云へ物腰その名まで、これ程も。

ト思ひ入れ。おすわ、鼻緒をすげようと、いろ〳〵こなしあつて、みす紙にて鼻緒を立て、この臺詞を聞いて

すわ　薄紙一重に隔てられ、云ひたい事も。

義平　ヤ。

トこの時、自烈て鼻緒を引切り

すわ　エヽ、切れてしまうたわいな。

ト思ひ入れ。

忠兵　ハテ、よく似た

義平　龜谷氏、異な事を承はるやうだが、貴公がお屋敷を出奔の砌り、連れ退き申された女中の名も、慥か

忠兵　その名は同じ名を呼べど、あの梅川めとこの梅川どのとは、雲泥の相違。見ず知らずの身共にさへ、目が不

自由なを氣の毒と、斯樣に深切にして下さるこの女中の心に引替へ、お聞きなされい。一人の娘を捨て、密夫を拵らへ、駈落ち致すとは、人面獸心と申さうか、人でなしと申さうか。
すわ　エ、なんと云はしやんすえ。子までであるその仲で、間男したと云はしやんすのかえ。
義平　ヤ。
忠兵　赤の他人の女中の聞く前、この身の恥と……七人の子の仲へは、よう申したものでござる。
すわ　エ、なんのマア、其やうな道ならぬ事しやうぞいな。男の方に氷臭い
義平　コレ〳〵おすわ。お主は異な事が耳に障つたな。
すわ　サ、女の心は、みんな一圖に男が大切。その女の心も知らしやんせずに、間男したの密夫したのと、エヽ、お前はなア。
忠兵　ヤ。
すわ　サ、モシ、穿きなさんせ。
ト髷結へにて立てたる鼻緒を忠兵衛の側へ持ち行く。
誂らへの合ひ方。
義平　コレ、龜谷氏、おてまへ、その足駄を穿き召さるか。

すわ　惡いてんがう。
忠兵　サア、折角の女中が志し、知らぬお方がこれ程までに……最前よりの詞の端し、よもや尋ねるその人にて。
義平　サ、おてまへ、何を云はるゝ。揚げた客と云ふは、若殿時太郎さま、その傾城に足駄の鼻緒をすげさせて、それを穿くとは、尾羽打枯らした浪人の足には、ちつと奢りであらう。
ト足駄を取つて捨てようとするを、おすわ、義平次を掻き退けて、忠兵衛の足元へ足駄を直し
すわ　綺羅を飾つた客人も、見すぼらし氣な浪人さんも、一夜流れのわたしが身。世界の男は皆夫。憎いと思ふその夫に、云ひたい事も朧月、雲が隔てゝ烏羽玉の、この黑髮の髷結へ、これにて立つた操の鼻緒。どうぞ穿いて下さんせいなア。
トこなし。忠兵衛、思ひ入れあつて
忠兵　ハテ、心有り氣なその詞……イヤ、何は兎もあれ、御深切と申さうか、忝ないと申さうか。サ、お手をお手を。
ト塵紙を出し、おすわに遣り
折角のお志し、頂いて穿きまする。

ト下駄を穿き

このお禮も、顏見た上で申したけれど、折悪しき鳥眼。

御縁もあらば又重ねて。

すわ　逢うたその時、又わたしも。

義平　然らば忠兵衞どの。

忠兵　イヤ、方々にも、もうお別れ申すでござりませう。

ト上の下座の方まで行き、思ひ入れあつて合ひ方。

忠兵　似たとこそ云へ女の物腰。もしやアノ梅川が。

すわ　アノ云はしやんした詞の端々。わたしやすつきり。

忠兵　イヤ〳〵、あの道知らずの女なら、なか〳〵身共に。

すわ　逢うて詳しう聞きたい事も。

義平　ヤ。

忠兵　人目の關はこの鳥眼。

すわ　もしやと思ひし心の迷ひか。

忠兵　ハテナア。

ト思ひ入れあつて行き過ぎるを

義平　アコレ、待たつしやれ龜谷氏。

忠兵　義平次どの、身共をお呼びなされたは、なんぞ用は
しござつてか。

義平　用と申すは外でもござらぬ。もしも爰に居るこのおすわが、貴殿の女房梅川にて、斯様に巡り逢つたなら、女敵ぢやと討ち召さるか。

忠兵　御念に及ばぬ、刀の手前。眼に遮らば容赦は致さぬ。

義平　ハヽヽ、云はれな。おてまへ、現在敵はソレ其所に、あるを鳥眼に素知らぬ顏。當世すゞる龜谷氏。

忠兵　や、なんと云はるゝ。すりや、その女中こそ。

義平　貴殿の女房。

權藏　慥かに梅川。

忠兵　さては、いよ〳〵仇ある女か。

すわ　イヽヤ、恨みは此方にあるものを。

義平　ソレ、その聲が。

忠兵　梅川ならば武士の意地。

ト探り寄る。義平次、おすわを圍ひ

義平　これは不眼な。ソレ、其方だ。

ト忠兵衞、探り寄るを、權藏、郡藏、あちこちに立ち塞がり、忠兵衞を小突き廻す。

郡藏　これはしたり龜谷氏、此方ではござらぬ。

權藏　其所でござる。梅川は此方に居る。ハテ、勘の悪い。

郡藏　これサ、爰でござる〳〵。

ト郡藏、權藏、尻を捲つたり、べつかつかうなしたり

して、忠兵衞を嬲りものにする。忠兵衞、堪り兼ねて郡藏、權藏、兩人を見事に投げ退け、探り寄つて義平次を突き退け、おすわを引捉へる。

すわ　アヽモシ、なんでわたしを。

忠兵　なんでとは憎くき女め。覺悟いたせ。

ト刀の柄へ手をかける。この時、簾を上げ

時太　ヤア、身が揚詰めの傾城を、なんと致す。

忠兵　ヤ、、慥かにお聲は。

郡藏　若殿時太郎さま。

忠兵　ハヽハツ。

ト平伏する。

時太　見馴れぬ浪人、遊所ゆゑに差免すぞ。

忠兵　ハツ、恐れ多くも計らぬお目見得。

ト顏を上げる。

郡藏　今の返報。

ト郡藏、かゝるを、時太郎に見えぬやうに突き廻して小手を取る。

時太　目通り叶はぬ。

ト扇を打ちつける。

すわ　モシ。

ト寄るを義平次、隔てゝ

義平　立たつしやい。

ト忠兵衞、刀を納める。木の頭。

忠兵　ハツ。

トよろしく木の頭。郡藏をしかじかと捻ち倒しながら平伏すること。これをキザミ、よろしく

拍子幕

四幕目　十二軒浪宅の場

役名――縫谷忠兵衞。同娘、おさん。同妹、お末。船頭、勘太郎。道具屋源六。判人、勘六。家主、三右衞門。親方、喜三郎。醫者、道庵。畫師、梅太郎。丹波八右衞門。同家來、丹三郎。昔蔦、大磯の虎。

本舞臺、三間の間、平舞臺。向う鼠壁。正面、納戸口、上の方、平舞臺に反古貼りの障子屋體。下座の口、町の木戸口を見せたる道具。一體深川十二軒、

亀谷忠兵衛浪宅の體。こゝに忠兵衛の髪を、おつな梳いて居る體。梅太郎、阿蘭陀外療の看板を書いて彩色して居る。道庵、醫師の拵らへにて、側に繪の具を溶いて居る。大拍子、流行り唄にて、幕明く。

梅太　道庵さん、蘇枋をもうちつと溶いて下さいまし。

道庵　オツと合點。もう緑青はよいか。

梅太　もう仕上がつてござります。

忠兵　梅太郎どの、隨分丁寧に彩色して上げて下され。

梅太　和蘭陀療治の看板に、こんな立派なのはござりますまい。道庵さんだけ豪勢に、丁寧に彩色しました。

道庵　その代り、貴様が瘡をかいた時は、おれがしつかり療治してやらう。

梅太　イヤ、眞平。ほんの事だが、この梅太郎なんぞは、瘡氣と云つちやア、藥にしたくもない。

道庵　それはよいが、畫の具を溶いたら、五本の指が青く赤く、黒く白く。とんと富の札のやうぢや。こりやア落ちればよいが。

つな　もう、わたしが髪を結つてしまふと手を洗ふから、その時一緒にお洗ひな。

梅太　おつら足を付けるな。瘡の藥でも貰はうと思つて。

つな　オヤ嫌だよ……ほんに恐ろしい頭書でございます。

忠兵　いかう逆上るに依つてた。

ト此うち、梅太郎、阿蘭陀療治の女の腹裂き看板を忠兵衛に見せて、

梅太　モシ先生、見なさいまし。飛んだ綺麗に上がりました。

忠兵　ちつと強過ぎたやうぢや。

つな　オヤ、氣味の惡い、嫌な畫だなう。そりやアマア、女の腹を裂いてどうするのだえ。

梅太　どうするものか。腹裂き女サ。

つな　腹裂き違ひとは違ふかえ。

道庵　ハ、ア、おつなどの、それも洒落のうちのお祖師様かな。

つな　洒落は洒落だが

梅太　藥箱を持たぬと云ふ事か。

つな　南無三、藥屋を見られたか。

ト此うち、忠兵衛、看板をヂッと見詰めて居て

忠兵　ア、コレ、どうで一度は此やうに。

つな　エ。

忠兵　どうぞその看板は、わしが眼にかゝらぬ所へ置いて

下され。

ト眼を閉ぢて思ひ入れ。

梅太　ヘエ、。

ト不思議さうに裏返して立てかけて置く。

つな　サア、よろしうござります。

ト紙にて手を拭く。

忠兵　ヤレ／＼、忝ない／＼。頭が輕うなつたやうぢや。

道庵　成る程、器用な女子ぢや。男の髮も出來るな。此やうな女房を持つ亭主は果報者ぢや。

つな　モシ、道庵さん、なんぼ髮梳きだと云つて、あんまりな合せ鏡だね。シタガ、斯うして居る方が、餘ッぽど氣樂で粹だと思ひます。

梅太　お前が仲町に居る時分にやア、評判の輕子であつたが、人間と云ふものは、おつうそげるものだの。

つな　なにサ、うつとうしい江戸意氣だのなんのと、下らない山さんに合せて、稻妻笑ひをすると思つて、見れば氣恥かしいから、グッと悟りを開いて、金の出る前垂れと棧橋の風には隙をやつてしまつたから、さば／＼としたわな。

道庵　成る程、そこらが通り者ぢやて。夜晝面白をかしく暮らす輕子を止めて、この裏に女髮結ひあり綱。イヤ、おつな氣前の女だぞ。

忠兵　ほんに奇特な女中。あの派手な商賣をした者が、云はゞ袖乞ひする浪人の內へ、不自由であらうから、何かの世話してやらうと、商賣の片手間には、朝晩の釜元から、娘の世話まで、よう深切にして下さるおつなどの、忝なうござる。

つな　なにサお前さん、これもほんの、相緣奇緣とやらさね。わたしばかりではござりませぬ。道庵さんも梅太郎さんも、平常斯うして心安くして居なさるから、これも相緣奇緣の獅子頭だね。

道庵　カウ／＼、おつなどの／＼。洒落は洒落、今日は十四日ぢやが、彼の大屋めが明暮れに、宿料の催促を。

忠兵　ヤ、その手當も、いろ／＼才覺いたしたが。

梅太　モシ／＼、先生々々、それは決して御苦勞になされますな。おつなどのと話し合つて置きましたから、大屋を機嫌よく歸してお目にかけませう。

忠兵　ハ、ア、そりや如何いたして歸すのぢやな。

つな　細工は流々、仕上げを見てお出でなされませ。モシ、道庵さん。

ト幸庵に囁き
どうぞお前も頼みますよ。
幸庵　ハヽヽヽ、成る程。これは好い思ひ付きぢや。承知承知。
ト此の時、雨車の音する。
忠兵　ハヽア、また雨がぽろついて參つた。
つな　サア〳〵、大騷ぎだ〳〵。
皆々　サア〳〵、雨漏りの始まり〳〵。
ト皆々盥や壺の其皿を配りて居る。大拍子、流行り唄になり、向うより、三右衞門、勘六、番傘をさし出て來り、皆々直ぐに門口へ來り
三右　忠兵衞どのは、內に居るゝかな。
勘六　大陸さん、よもや古風に留主を使ひもしやすまい。
兩人　イヤ、御免なさい。
ト皆々內へ入る。
皆々　ソリヤ、來たぞ〳〵。
忠兵　これは大陸樣、ようござりました。
三右　イヤ、餘りよくも參らぬ……カウ勘六、おれが物語りの間、一服のまつし。
勘六　當り前、大陸臺詞の云ひ立て、やりなせえ〳〵。其うちおいらは……火を一つお貸しなせえ。
ト好き所に貫のみ居る。
三右　さて忠兵衞どの、一々申すに及ばぬ。どうぞ其許、おれが店へ見えたその日より、これは店賃でござると、かけた錢一文も取つた事はござらぬぞや。又その上に、味噌薪まで、おれが通ひで取つて進ぜたら、即ちおれが三軒四間のかけも、一緒に引ッ背負つて、わしが役の五人前、九段目ぢやアなくつて、積んだ茶店だ。
勘六　意地の汚ねえ喰物洒落だ。早く埒を明けなせえな。
三右　サア、忠兵衞どの、今日は是非。
忠兵　サア、一々御尤もだ。もう一兩日の所を。
ト此うち街太郎、おつなに囁く。おつな、三右衞門の側へ行き
つな　大陸さん、モシ、ちよつと耳をお貸しな。
トこれにて、三右衞門、おつなを見て
三右　オヽ、おつな坊、なんぞ用か。
つな　モシ、彼のから言傳がありましたよ。
三右　ナニ彼の……ハヽア、あひるの色か。
つな　昨日わつちが仕舞ひに行つたられ、沁み〴〵とお前の事ばかり云つて、素敵に受けさせやしたせ。

三右　ト三右衛門、嬉しき思ひ入れにて
ほんにか。して〳〵、何と云つた〳〵。
ト乗り地になる。おつな、思ひ入れあつて
勘六　早く憎くなる奴サ。
道庵　ハヽア、大屋先生も好色と相見えます。
三右　イヤモウ、色と飯とは引張りだ。
道庵　飯の方は自由にならうが、女の方はむづかしい。
三右　これは御挨拶……して、どうした〳〵。
つな　お前は剛氣に氣前者で、第一男が好いとサ。
三右　オウ〳〵。
つな　錢金には大風で、人に物を遣る事は大好きで、芝居の大家さんとは違つて、氣障がねえから、わつちやア命だと云つて、大層受けさせやしたぜ。
ト三右衛門の脊中を叩く。
三右　ほんにか〳〵、道理で左の耳が痒かつた。
ト嬉しき思ひ入れ。
つな　この受け賃に、なんぞおくれな。
三右　堅い餅なと奢らうか。
つな　オヤ、堅い餅を喰ふ料はしねえよ。大屋さん、わつちが頼みを聞いておくれな。

三右　なんだ〳〵。
つな　この受け賃に今日の借金乞ひは、無茶にしておしまひな。
三右　ヤア……とんだ事を云つたものだ。隨分受け賃なら、四文位は奢らうが、滅法界もない。この大屋は色男だが、錢づくになると命と釣替へだ。
つな　エヽ、慾張り大屋め
三右　なんだと。
トこれにておつな、梅太郎へ思ひ入れ。
梅太　道庵さん、ちつと〳〵。
ト梅太郎、道庵を上の方へ連れて來る。
わしが思ひ出したが、あの大屋は、慥か能狂言が好きだと思つたが。
道庵　違ひなし〳〵。のろま人形や能狂言なぞが、好きであつた〳〵。
梅太　そんなら道庵さん。
道庵　オツと承知ぢや。
トこれより道庵、摺り足になり
なう〳〵、それなる家主どのへ物申さう。
三右　ハヽア、何事にて候ふぞ。

道庵　この家の勘六、甚だ面工が惡く候ふ程に。
三右　ホウ。
道庵　なか／＼御推量候へ。
三右　ホウ。
道庵　家賃など催促いたさるゝとは、日が明かぬと申すものにて候ふ。
三右　ホウ。
道庵　家主め、大たわけにて候ふ。
三右　ホウ。
道庵　大べら坊にて候ふ。
三右　ホウ。
　ト始終鼓を打つこなし。
道庵　左樣に思はれ候はゞ、面工の直るまで、店賃はお待ち候へや／＼。
三右　イヤア／＼／＼。
道庵　ハヽア。
　ト兩人、こなし。
勘六　ハヽヽヽ、おかつしやいな。大屋さん、お前、好い機嫌ぢやアねえか。如何に春永だと云つて、お前マア、この勘六を連れて、何しに來さしつたのだえ。

三右　成る程、ハタと失念いたして候ふ。……コレ忠兵衛どの、外の事おやないが、貴樣の妹お米が事で、今日自身番横町の喜三郎が所から、この家主へかゝつて來て、貴樣を預けると云つた。いよ／＼妹の年季を拔いて遣らつしやるか。
勘六　こなたが親判をついた女でもないが、あの妹の身の上の事は、わしが引請けませうと、玉を引留めて置かつしやるからには、片も付けずばなりますまい。わしが判を入れた女ゆゑ、さら／＼等閑にしては親方へ濟みやせん。忠兵衛さん、どうさつしやるのだえ。
忠兵　どうと云つて、聞けば大枚五十兩と云ふ金。尾羽打枯らした忠兵衛が、其やうに性急には。
三右　成る程、尤もだ。浪人の貴樣、この艱難の中で、出來やう筈はない。
勘六　モシ大屋さん、わしもちつと感付いて來た事もあるが、爰の内の忠兵衛どのは、さう一途に金が出來まいとも云はれませぬて。
　ト思ひ入れ。
三右　それも尤もだ。成る程、まんざら當のない者が、妹の事は私しが引請けまするると、請合ひもせまい。して見れ

ば、身請けする心かな、忠兵衛どの。

忠兵 成る程、身請け致すなどゝ申すではござらぬが、不慮な事にて奉公先を下がつた妹。これなる判人へ、是非とも五十兩遣つて片を付けねば、判を入れた勘六どのが、先様へ濟まぬゆゑ、商賣が出來ぬと、達てせがまるゝゆゑ、マア、どうなと致さうと請合うたが、大枚の五十兩と云ふ金子が……成る程、少しは心當りが無ければ、どうなとしませうとは申さぬが、成る程、金子五十兩、所持して居るが、ちつと譯あつて使はれぬ金。

三右 ハア、そんなら浪人の貴様が、五十兩と云ふ大金を。

勘六 この簪の出所と云ひ、いよ〳〵胡散な。

忠兵 ヤ。

三右 コレサ、忠兵衛どの、使はれぬ金と云ふが、何所にあるものか。サア、早く濟ませて、おれも肌を脫ぎてゑ。

勘六 なんでも今、親方を連れて來るから、早く濟ませてしまはつしやい。

三右 さう〳〵、さうすりやア双方浪風なしに、納まると云ふものだ。

勘六 その時は又、わしが好い所へ嵌めて上げやせう。そんならマア、わつちやア親方を連れて來ます。

忠兵 ア、コレ、どうもあの金は、

三右 エヽ、出し澁ねえ。サア勘六どん、おれも地代の事で丸八まで行くから、一緒に行かう。

梅太 ドレ、おれもおばば鐵が所へ行つて、初午の割前を勘定しようか。

勘六 そんなら後方參りやす。

忠兵 隨分ゆるりとござりませ。

三右 どうしてゆるりとして居らるゝものか。

勘六 いつだと思ふ、正月だ。

ト大拍子になり、三右衛門、勘六、梅太郎、向うへ入る。合ひ方になり、奥より、お末、出て來り

すゑ モシ兄さん、わたしやひよんな事で、お前に氣を揉ませて、心ないやうでござんすが、お前マア、どうせうと思ひなさんすえ。

忠兵 ハテ、どうと云つたとて、其方の年季を抜くには、五十兩と云ふ大金……マヽ、どうともならう程に、必らずきな〳〵思はぬがよい。

道庵 貴公もいろ〳〵の御心配で、一倍眼病の障りにもなるぢやて。如何でござる。少しは快い方かな。

忠兵 どうも。まだはつきりと致しませぬ。

つな　ほんに、まだお藥が一服あつた。ドリヤ、煎じて上げうか。

ト　おつな、藥を煎じて居る。

忠兵　イヤモウ、入相頃からは、とんと見えませぬて。

道庵　さうでござらう。この御病症は、一朝一夕の事ではござらぬ。これが世に申す難治の症と申して、治し難い病でござるて。

すゑ　そりやマア、どうしたらようござんせう。わたしやモウ、苦勞でならぬわいなア。

忠兵　それぢやと云うて、例へ病後は盲目となるとも、それも業病なら是非がないぢや。

つな　モシお醫者さん、好い藥はござりませぬかいなア。

道庵　サ、この病を癒すには、忽ち癒る藥はあれど、これはなか／＼得難い藥ぢやて。

すゑ　そりやマア、どう云ふ藥でござりまする。金づくで買はれる藥なら、例へわたしがこの上に、二度の勤めをするとてもいとひませぬ。

つな　ほんにわたしも、不思議な御縁で、爰の内に雇はれて參つて居ますれば、どう云ふ事か他人とは思はれませぬ。こんな器量でも、亭主を持たぬこのおつな。わたしも勤め奉公などしても、金で癒る藥なら、この藥を買うて上げうと存じますよ。

忠兵　忝ない。してマア、その良藥と申すは、價は何程位な品でござる。

道庵　エ、なか／＼金子にて調達いたす藥なら、得難い品とは申さぬが、申しても無駄な事ぢやが、それ程までに深切な女中さんなら、云うて聞かさうが、その良藥と申すは、五歳未満の小兒の生血を服すれば、忽ち全快いたす。これはなか／＼取り得難い藥でござるて。

つな　オヤ／＼、芝居ではあるまいし、どうして其やうな藥があるものか。

すゑ　其やうな氣味の悪い藥でなうても、外になんぞ好い藥はないかいなア。

道庵　サ、外にあれば、生藥師と呼ばれしこの道庵、今まで全快させにやア置かぬおやて。

忠兵　所詮取り得難きその良藥。マア、氣長に療治いたしませう。どうぞ加減のお藥を。

道庵　承知いたしした。あの女中衆を取りに遣はさつしやい。

つな　わたしが行つて取つて參りませう。お末さん、このお藥は、もうよからうからお上げよ。

する　アイ〳〵。
道庵　あの看板は、明日持つて參らうか。
忠兵　左樣なら、どうぞお藥を。
道庵　承知でござる。サア、おつなどの、道行を致さうか。
つな　なにえ、蹈之助と致さうかえ。をかしな道庵さんだよ。
道庵　悪い耳な。道行を致さうと云うたのぢや。
つな　それは淺友談合にしやせう。
ト兩人、洒落ながら向うへ入る。忠兵衞、お末、殘り思ひ入れあつて
する　兄さん、わたしやこの艱難の中で、お前に苦勞をかけ、憎い奴ぢやと思ひなさんせうが、わたしやアノ云ひ交した勘太郎さんと、女夫にならねば生きては居ぬ氣。どうぞ好い思案して下さんせ。必らず甲斐ない奴ぢやと、叱つて下さんすなえ。
忠兵　なんの叱らう。女子はその一圖な心が花ぢやもの。一體この忠兵衞は、其方の二つの時に、北條家の龜谷忠太夫どのへの養子。實の親は二口村の孫右衞門どの、百姓ながらも物堅い氣性。出入りをしては實父へ未練が殘り、養父へ不孝の行跡でもあつてはと、久離を切つて音信不通。それゆゑにこそこれまでも、生みの御恩を一日も送らぬこの身。せめては心の孝行に、實父の愛子の妹の其方、身に引請けて世話するのが、せめては孫右衞門どのへの御恩報じ。只何事もこの兄が、呑み込んで居る程に、何かに付けて苦勞して、目の惡いその上に、其方、必らず煩らうてくりやるなよ。
する　お前、眼の悪いその上に、必らず煩らうて下さんすなえ。
忠兵　ハテ、益體もない。五年この方の艱難苦勞、それを一々氣に病んでは、もう今頃は命の百もなければ足りぬて。この忠兵衞が體は、苦勞の問屋、なりや、苦勞の殖える程が、商賣の繁昌ぢやてハ、、、。
する　オホヽ、、兄さんとした事が、何を阿房を云やしやんすぞいなア。
トこの時、向う揚げ幕にて、泥坊々々と聲して、バタバタにて、大磯の虎、出て來り、がらりと門口を開けて内へ入り、押へて居る。忠兵衞、悔りして、お末をちやつと上の障子屋體へ入れる。
忠兵　なんぢや。人の家へ慌しう駈け込んで。こなたはマア、何れの人ぢや。

虎　わしやアなにサ……モシ、爰の内は何商賣だえ

忠兵　人の家業を要らぬ詮索。身共はフト致した浪人。家業と申すはござらぬが、畫を致す、先づ繪畫きでござる。

虎　ナニ、繪畫きだ。そんなら畫を下さい。

忠兵　ナニ、畫をくれろ。繪は畫いたのはないが、して、どのやうな物が望みでござる。

虎　なんでもよい。畫いたのがなければ畫いて下さい。隨分ゆるりとでござりやす。其うち待つて居やせう。

ト忠兵衛の顏をフッと見付け

どうかこなたは見たやうだが。

忠兵　さうお云やれば、どうやらこなたも見覺えの。

虎　ある筈だ。こなたはおれが高麗寺の、門番をして居る時分、夫婦ながらおれが家に。

忠兵　これはしたり、虎どのでござつたな、ヤレ〳〵、久しう逢ひませぬ。それはさうと、身共が家と知つてござつたのか、知らずにか。何やらソワ〳〵と。

虎　いま稻荷横町で、年季野郎の持つて居た風呂敷包みを……なにサ、病犬に追はれて、思はず知らず爰の内へ駈込んだが、勿怪の幸ひ。好い人に逢つたわえ。

忠兵　ヤレ〳〵、それはひやいな。病犬に喰ひつかれると、至つて後がむづかしいものさうにござるて……そして、こなたは今にアノ大磯に。

虎　疾の昔隨徳寺サ。コレ忠兵衛どの、こなた夫婦を世話して、永々居候ふに置いたからには、親分だとか何とか、もくを付けて、外の人なら恩にも着せるだらうが、おらアそんな氣障な事は云はねえが、なんだか何所へ行つてもヅキが廻つて。

忠兵　ヤ。

虎　この頃は江戸の方へ來て居るが、近付きもなくつて、方々まごついてばつかり歩くが、ヤレ〳〵、好い人に逢つた。カウ、昔のよしみで忠兵衛どん、ちつとのうち居候ふに、置いてもらはずばなるまい。

忠兵　そりやハヤ、夫婦の者が厄介になつた事もあれば、隨分居らるゝもよいが、して、今の商賣は。

虎　こなたも一つ鍋の物を喰つたやうでもねえ。大抵おれが商賣は、知れさうなものぢやないか。

忠兵　ア、そんなら江戸のうちに、何所ぞで門番でもして居らるゝかな。

虎　馬鹿な事を云つたものだ。大磯で門番をしたと云つて、日本國中門番をして歩く奴もねえものだ。あんなしみた

れな商賣を、何時までして居るものか。今の商賣は、素敵に儲かる商賣だ。マア、貴様も喜んで下さい。

忠兵　それは何よりの事。身共も祝着いたす。して、その渡世は。

ト虎、小聲になり

虎　コレ、こなたは他人とは思はないから、云つて聞かせるがの、喜んで下さい。おらア今ぢやア、箔の付いた稼ぎ手よ。

忠兵　それは好い事な。何をして稼がれるな。

虎　こいつは解らねえ……カウ、泥衆よ。

忠兵　左官の手傳ひをするなどゝ云ふ

虎　コレサ、泥坊だよ。

忠兵　エ、……そんならアノこなさんが。

虎　なんと、好い商賣であらうが。カウ、高イ聲ぢやア云はれねえが、どうでこんたも、おらが内に居て、穢れた水を呑んだ體だ。コレ、おいらが仲間へ入る氣はないか。人の物は我が物。こんな好い商賣はないぜえ。

忠兵　例へ餓死すればとて……イヤ、どうして身共のやうな不器用者が。

虎　ハテ、氣の弱い。出來ずばよいが、コレ、忠兵衞どの おらアこの頃ヅキが廻つて居るから、ちつとのうち爰の内へ、匿まつてもらはねばならねえ。

忠兵　一旦こなたの厄介になつた事もあれば……どうも其やうな渡世をして居らるゝうちは、匿まふと云ふ事は

虎　ならないか。

忠兵　また恩の返しやうもござらう程に、料簡して下され。

虎　ならざアいゝワ。その返報にやア、今にでもお手になつた時にやア、兄弟同様に居候ふに居たこなた、抱いて入る臺詞廻しもあらうワ。マア、何にしろ、今夜一晩は爰の内へ泊めてもらはにやアならねえ。

ト莨の火を探して

カウ宿六、さう他人にしねえものだせえ。ちつたア堅い餅でも燒かねえか。今夜は思ひ入れ御馳走にならにやアならねえ……コレ、莨の火を一つ下せえ。とんだ火の用心の好い内だ。

トこの時、揚げ幕の内にて、轡の音して、絹羽織の侍ひ一人走り出て、花道高場の前あたりに下座なきる。これをキツカケに唄になり、向うより、八右衞門、羽織大小、馬乘り袴にて、鞭を持ち、中間、腰に馬柄杓を差し、供二人にて出て來り、門口にて囁く。侍ひ、

門口にて

侍　頼みませう〳〵。

忠兵　どうれ。

ト立つて來り、門口を開け

ヤ、これは丹波八右衛門どの、見苦しき浪宅へ、ようこそ御入來。

八右　御在宿で拙者も重疊……コリヤ、少々手間取らう程に、其方は其うち、八幡へでも參詣して來やれ。

兩人　畏まりました。

ト下座へ入る。

忠兵　見苦しうはござれども、サヽ、お通り下されい。

八右　然らば御免下されい。

ト合ひ方、八右衛門上座へ通り、虎に目を付け

八右　龜谷氏、あの者は貴殿、お知る人でござるか。

忠兵　サ、知る人と申すでもござらねど。

虎　ヘエ、知る人でねえ者が、爰に神輿を据ゑて居るものを……エ、あなたはお初にお目にかゝりました。私しはこの忠兵衛と、兄弟同様の者でござります。お心安うお頼み申します。

忠兵　エヘン〳〵。

八右　ト咳にて紛らすこなし。

先達ては途中で御意得、その節お話し申した、貴殿の養父忠太夫どのゝ、命乞ひの儀。拙者身に引請けて、重役中へ願ひしところ、彼の目貫だに差上げなば、助命は元より、直さま再勤申しつけるとの御申し渡され。それも今明日に迫りし絶體絶命。如何でござるな。鵆の目貫は、お手に入つてござるか。

忠兵　サ、お喜びなされい。やう〳〵の事で手に入りしその目貫も、計らず娘のおさんめが。

八右　ヤ。

忠兵　サ、やう〳〵の事にて、片しの目貫は手に入りましたが、今片しには心當りもござりませねど、何卒それまで養父の助命、せめて日延べなりとも、相成りまする事ならば、御前よしなにお執成しを。

八右　ハテサテ、氣の毒千萬な。一具揃はぬその時は、御用に立たぬその目貫。さすれば養父も絶體絶命。

忠兵　この忠兵衛が命に替へ、身を粉に碎いて尋ねても、心當りのなき片し。殊に養父の一命も今明日に限るとあれば、思慮分別も愚に返り、斯くまで拙き我が運命。是非に及ばぬ八右衛門どの、無念ながらも拙者めが、その

夜の盗賊となりませう程に、拙者に縄打ち丹波氏。お屋敷へ引かれ、せめて養父の命乞ひを。

八右　切端詰まつたその一言も、御尤もではござるが、武士たる者が、身に覚えなきその夜の盗賊と。

ト虎へ目を付け

さある時には、貴殿の千辛萬苦も水の泡。また身共が心配も……と申して猶豫ならざる今明日。

忠兵　おやに依つて、この忠兵衛めが一生懸命。サヽ。お頼み申す。八右衛門どの。

虎　モシ〱、片しの目貫と云ふは、これでござりますかえ。

ト莨入れより片しの目貫を出す。忠兵衛、八右衛門、見て

忠兵　ヤ、こりやコレ、紛ふ方なき鷄の目貫。

八右　いま折好くもその目貫。未だ武運に盡きざるところ

忠兵　さはさりながら、どうしてこなたが。

虎　拾つたわ。

両人　ヤ。

虎　アイ、拾ひやした。いま聞くところが、忠兵衛どのゝ身の上、なけりやアならぬこの目貫、御用に立つなら賣りやせう。

忠兵　何は兎もあれ、忝なうござります……してその價は。

虎　いくら寄越せと云つたところが、高が浪人者のこなた。所詮つばまつた金はあるまい。それに引ツかゝつて、三日待つてくれろの、五日待つてくれろのと云ふ段になりやア面倒だから、金より外にこの目貫を、こなたに賣る法があるが、その相談に乗らつしやるか。

忠兵　金子にあらでその目貫、賣らうと云ふは何を代りに。

虎　サア、代りと云ふは、先刻ちらりと見かぢつた、澁ツ皮の剝けたあの女、あの子と引替へなら、この目貫、こなたに渡してやりやせう。

忠兵　ムウ。すりや妹のお末に、アノこなさんが。

虎　イヽヤ、惚れやアしねえ。そんな嫌味のある男ぢやアねえ。惚れやアしねえが二十や三十の端下金を取つて賣らうよりも、あの女をおれが、此方の物にすりやア、あれを玉に使つて、悧口に立廻りやア、五十や百の金、儲ける事を知つて居らア。サア、忠兵衛どの、聞きやアこなたの養父の、命に拘はる目貫。こりやア妹を一人、棒に振らざアなるめえ。

ト忠兵衛、思ひ入れあつて
忠兵　無くて叶はぬその目貫、妹は目貫と代へ〴〵に。側へ妹が不得心でも、これはつかりは理も非に曲げて、兄の威光で得心させ、妹は其方に遣る程に、是非ともその品を身共が方へ。
虎　すりや、こなたも承知で目貫と妹を
忠兵　是非代へ〴〵にしてもらはにやアならぬ。
ト　この時、好き時分より お末出て、ツカ〳〵と忠兵衛の側へ行き
すゑ　モシ兄さん、わたしをあの怖い人の所へ遣ると云はしやんすが、それではお前も知つて居やしやんす、あの勘太郎さんへ。
忠兵　サ、、尤もぢやが、其方が得心せぬ時は、養父の命にかゝりや繋かる兄が身の上、活かすも殺すも其方が心にある事ぢや……サ、、尤もぢや〳〵。はしをり鏡の妹一人、思はぬ方へ義理詰めにして、捨てゝしまふ兄が心は……コリヤ、是非とも得心して、行つてもらはねばならぬぞ。
すゑ　事を分けたる兄さんの詞。是非得心せにやアならぬけれどな、どうしてアノ怖い

忠兵　ア、コレ……これぢや〳〵。
ト手を合せて拝む。
すゑ　アイ……アイ。そんならわたしや参りますわいなア。
ト泣き伏す。
忠兵　出かした妹、浮氣な藝者商賣しても、義理と云ふ事辨まへて、そんなら得心して……エ、、忝ない。
すゑ　兄さん、わたしが心の内を、推量して下さんせえ。
ト思ひ入れ。
虎　ハ、ア、この女は足があると見えるな。儘よ。足があらうが手があらうが、又おれが炙焼きの仕様がある。そんならいよ〳〵得心して。
すゑ　アイ、行くわいなア。
ト思ひ入れ。此うち、八右衛門、始終思ひ入れあつて
八右　流石は亀谷氏の妹、よう物の道理を辨まへて、その身を捨てゝも兄の難儀を救はんと、思ふ心の殊勝らしさ。オ、、出かされた〳〵。イヤナニ忠兵衛どの、身共がこの場にある時は、何かに遠慮も……下部の見えるまで暫時一間で休息いたして。
忠兵　甚だ見苦しくはござれども。
八右　忠兵衛どの、妹御、必らず首尾いたされい。

虎　ト合ひ方になり、八右衛門、上の障子屋體へ入る。
器量の好いその上に、小悧口なこの女。こいつはとんだ金の蔓に掘り當つたわえ。

ト につこりとして莨を喫ひつける。通り神樂。流行り唄になり、向うより、三右衛門、先に喜三郎、藝者の親方の拵らへ、後より、源六、勘太郎、付き出て來り花道にて

勘太　モシ親方、あの女を外へ遣つちやア、どうもこの勘太郎が男の一分

源六　立たぬは此方も同じ事。是非ともこの源六に。

喜三　ハテ、こなた衆も騒々しい。どつちへなりと、金の早い方へ團扇を揚げやす。何しても、元方の兄貴に掛け合つての事。マア、お前方も此方へ入らつせえ。

ト 皆々内へ入る。

三右　サア兄貴、約束の通り親方を連れて來たが、五十兩金があると先刻の詞。そんならいさくさなしに、身請けをして片を付けて、同じ事なら妹が好きな方へ遣るが兄の情と云ふもの。

喜三　それがならざア、昨夜掛合つた通り、今日中の切端其方で立て金をせにやア、コレ、爰に居る源六さんの方へ遣つてしまふが、それでようござりまするか。

すゑ　兄さん、今のやうな譯になり、外のお方へ行くのはそりや覺悟して居るけれど、どうも源六さんの方へ行つては。

源六　この勘太郎に心中が立たねえか。ヘエ、古風な奴よ。それよりは、この源六が方へ來りやア、玉の輿とまでは行くめえが、まさか味噌漉を持たせねえ。カウ、幾度云ふも同じ事だが、グッと心を切り替へて、粋になるがいいぢやアねえか。

すゑ　例へ野暮でも古風でも、好いた男と一緒に暮らし、結ぶの神のかみごまに、つまの命も繼ぎ棹の、細い暮らしも糸卷きの、三は切れても二世かけて、この糸道も爪あかぎれ。手鍋提げるが樂しみぢやわいなア。

ト 勘太郎へ思ひ入れ、虎、思ひ入れあつて

虎　イヤ、そんならこの女は、一人ならず二人三人、絡んだ足のある樣子。イヤ、そんならこの目貫は、迂濶にやア渡されねえわえ。

忠兵　目貫がなければ養父の身の上。今明日につゞまる切端。

虎　さう思ふならこの女の、兄貴のこなたが身請けをして、

足なし女にした上で、おれに渡しやア目貫は其方へ。
忠兵　ナ、金はあれども訳あつて。
源六　そんなら大枚五十両で。
三右　持つて居るならすつぱりと。
喜三　片を付けずにお末は彼方へ。
すゑ　それではわたしが生きても死んでも。
虎　こいつは話しがむづかしい。そんなら目貫は何所ぞへ貰つて――
忠兵　ア、コレ待つて。
虎　そんなら女は、おれに渡すか。
忠兵　サア、それは。
喜三　サア、此方の客へは身請けをさせるか。
源六　おれに女房にするか合點か。
忠兵　サ、それは。
三右　但しこなたが身請けをするか。
虎　目貫は外へ渡さうか。
忠兵　サア。
皆々　サア〳〵〳〵。
虎　忠兵衛、返事は
皆々　どうするのだ。

源六　なんのこつた、立派に表店を張つて、繁華のお江戸で銭儲けをする町人すら、今日五十両と云ふ金を出して、贔屓子供を身請けする者は、マア稀有だ。それに手習ひをする浪人の身で、どうして五十両と云ふ金か。
喜三　ないもしないに口巾つたく、五十両と云ふ金を、持つて居ると、この喜三郎を呼び寄せて、こなたはきよくるのだな。
三右　コレ、忠兵衛どの、こなたが金があると云ふから、もつとも早く片を附けうと、親方を連れて来たこの三右衛門。サア、金があるなら出さつせえ。
源六　大屋さん、お前もあんまり正直過ぎるワ。なんぼ以前が武士だの、由ある者だのと贅沢をあげても、無い袖は振られない。あつたら口へ流行り風でも引かつしやるだ。
虎　こりやア埒はない。ドレ、お暇いたさう。
ト立ち上がるを忠兵衛引留める。
源六　お末はおれが。
忠兵　ア、コレ待つた。一寸延びれば尋とやら、後の難儀はこれからこれまで。こりやモウ是非ともこの金を、
喜三　なんだ〳〵。又しても金々と、本の事なら今宵で、

貴様が五十兩と云ふ金を出せば、二つない首を遣らア。コレ、この首を進上申すワ。
源六　本のこつたが今爰で、現金に五十兩と云ふ金を
兩人　出す奴があるものかえ。
忠兵　イヤ、その奴はこの龜谷忠兵衞だ。
兩人　なんだと。
ト忠兵衞、懷中より五十兩の金を出し、封を切つて
忠兵　ソレ、正金で五十兩。
兩人　ヤ。
ト立ちかゝるな
忠兵　檢めて受取り居らう。
ト喜三郎の横面へ投げつける。
喜三　アイタヽヽヽ。
ト額をしかめる。源六、三右衞門、見て
兩人　こりやコレ小判で五十兩の嵩。
喜三　ほんにこれは誠の金。
ト手早く檢め見て
頭も丁度五十兩。道理で心持ちよく痛かつた。カウ源六さん、見なさる通りだ。金は此方が先だから、女は元方兄貴の方へ。

源六　左樣では、どうもこの源六が。
喜三　金の生る木を植ゑないのが、お前の不調法だ……ヘエ左樣なら忠兵衞さん、年季證文はあなたの方へ。
ト忠兵衞へ證文を渡す。忠兵衞、受取つて
忠兵　戻すからには、妹が身の上に、云ひ分はござりますまいな。
喜三　なんのお前、これでさらりと云ひ分は。
忠兵　其方になくても、此方にある。
喜三　エ、。
ト恟りする。忠兵衞、喜三郎を引きつけ、キツとなつて
忠兵　うぬ、動きやアがるな。浪人しても身も侍ひ、武士に向つて、あるとあらゆる雜言過言。まだその上に何と申した。身請け致せば二つない、首を身共に進上すると申したな……その首がこの首か。
トいろ〳〵振り廻す。喜三郎、苦しき思ひ入れ。三右衞門いろ〳〵氣を揉む思ひ入れ。源六、鉢卷をして
源六　コレ喜三郎、てめえも江戸ッ子ぢやアねえか。一度死ねば二度は死なねえ。やるならおれがちよつと。
ト縫ひ包みの貢盆にて打つてかゝる。この間に喜三郎

又かゝるを、忠兵衞、双方をキッと留め

忠兵　コリヤ、身共に向つて何と致す。イヤサ、コリヤ、どうせうと思ふのぢや。痩浪人でも鎧谷忠兵衞、おのれら如きの無法者、何十人でも、コリヤ、この通りぢやぞ。

ト双方を引きつける。

兩人　アイタヽヽ。コレ、ちよつと緩めて下さい〳〵。

忠兵　打ち放すは易けれど、云はゞ大事の前の小事ゆゑ、安穩に濟まして遣はす。とつとゝ歸つてしまへ。

源六　うぬ、忠兵衞……思へば〳〵、詰まらぬ者はおれ一人。

喜三　可愛いと云うて暮れの金。

源六　エヽ、そんな機嫌ぢやアないわい。

喜三　時に、もう歸らうぢやアねえか。

三右　歸つて飯でも食はうとも〳〵。

源六　よく喰ひたがるぜ……大屋さん、何時だ。

三右　四ツだ。

兩人　ナニ、蕎麥屋ぢやアあるめえし。

三右　サア、來なせえ。

ト流行り唄にて、三右衞門、源六、喜三郎、入る。

すゑ　モシ兄さん、お前のお庇で身請けになつたわたし。嬉しい事は嬉しいが、してマア、この身の納まりは。

忠兵　サ、嫌でもあらうが養父の命、兄が爲。

すゑ　すりや、この虎さんとやらの方へ。

虎　値段が極まれば目貫は兄貴へ。サア、お末坊、返事はどうだ。

トお末、思ひ切つて

すゑ　お前に任せたこの體、どうなとして下さんせ。

勘太　コレお末、おぬしやアそれでこの勘太郎へ。

すゑ　濟まぬは合點、さりながら、云ふに云はれぬ兄さんの、この場の難儀、察してやつて何事も、わたしが胸に、サ、一旦云ひ交した詞を反古には、サ、兄さんの詞は反古にはならぬわいなア。

トよろしく勘太郎、呑み込むこなし。

忠兵　サ、妹もあの通り得心の上は、約束通り、あの目貫は。

虎　渡しやせう。すつぱりと渡さう。受取らつしやい。

ト以前の目貫を忠兵衞に渡す。忠兵衞、押し戴き、こなしあつて

忠兵　エヽ、忝ない。これと云ふも妹、其方が得心なしたるゆゑ、身共が手に入るこの目貫。これにて養父の

身の上も。

虎　無難に濟ますその代り、事に依つたらこの身のひゞを、こなたになする。

忠兵　ヤ。

虎　サア、これからはこの女は此方の氣儘。納戸の内で足でも揉まつし。

ト手を取る。

する　アヽ、モシ〳〵。

ト振り切るを

勘太　うぬ、その女を。

虎　喧ましいわえ。

トぐつと引寄せる。この時、虎、一通を落す。唄、通り神樂になり、三右衛門、先に後より勘太郎、花道へ。虎、嫌がるお末の手を取り納戸口へ入る。舞臺に忠兵衛一人、門口にて、源六、喜三郎、ちよつと囁き下座へ入る。あと合ひ方、忠兵衛、こなしあつて

忠兵　忝ない〳〵。其方が兄の心を汲み分け、得心してくれたばつかりに、養父の助命。この忠兵衛が不孝の罪。

トこの時、上の障子より八右衛門出て

八右　晴れて歸參の龜谷氏。

忠兵　この上ともに丹波氏、御前よろしうお執成し。

八右　承知いたしてござる。イヤナニ、忠兵衛どの、お心柄とは云ひながら、長々の艱難。その甲斐あつて一具の目貫、貴殿の方より差上げらるゝその時は、再び榮ふ龜谷の家。めでたう歸參の寶來山、君の惠みのお土器、頂戴あるは今明日。餘所外ならぬ八右衛門、斯樣な喜ばしい儀はござらぬ。

忠兵　何から何まで、御深切なる丹波氏。重ね〳〵のお禮は、歸參の上にて。

八右　友一人殖えて嬉しき炬燵かな。申さば新參の某。御再勤の上は、萬事よろしくお指圖を。

忠兵　これは〳〵、痛み入つたるそのお詞。不所存ゆゑに斯樣にまで、尾羽打枯らせし忠兵衛には、好い敎訓の貴殿の御出世、お羨やましう存じまする。

八右　なにサ〳〵、貴殿とても、今日までの艱難は、明日よりは昔語り。定めて珍說もござらう。飮酒を汲み交す折、ゆる〳〵承りませう。ナニ、忠兵衛どの、斯樣いたしませう。幸ひ今日、家老重役中兩三人、お下屋敷に居らるれば、拙者萬端暮れ六ツまでには、首尾を繕ろひ置くでござらう程に、その刻限に目貫を持參いたさるゝ

やう、致したうござるて。

忠兵　すりや、暮れ六ツまでに。

　ト思ひ入れあつて

畏まりました。

八右　然らばお暇いたすでござらう。

忠兵　これはく、浪宅とは申しながら、あまりと申せば、なんの風情も。

　トこの時、八右衞門、虎の落したる一通を拾ひ見て

八右　大磯の虎どのへ、横田義平次。

忠兵　ヤ。

　ト八右衞門、ちよつと懐中して

八右　イヤナニ、忠兵衞どの、後刻迎ひの衣服上下を、持たせ遣はすでござらう。然らば目貫は暮れ六ツまでに。

忠兵　持參いたすでござりませう。

八右　何卒吉左右。

忠兵　お待ちなされい。

　ト兩人こなし。唄になり、八右衞門、侍ひ中間を連れて向うへ入る。忠兵衞、殘り、こなしあつて

忠兵　誠に朋友に信ありと、ハテ頼もしき丹波氏……それにつけても、昨日八幡にて、初めて逢つたる女に、僅かの形代を以て、五十兩の金子を請合はせ、それにて買ひ取りし片しの目貫、云はゞあの女中の男勝りの氣性ゆゑ、再び歸參の鎌谷忠兵衞、エヽ忝ない。忘れは措かじ。歸參の上にては金子は勿論、厚く惠みを……それに引替へ憎くきあの梅川め。夜前圖らず巡り逢ひしこそ幸ひ、實否を糺し、討つて捨てんと思ひしに、折惡しく古主の若殿、時太郎どのゝ御前ゆゑ、無念ながらも其まゝに打捨て置きしが、これとても養父の命乞ひ叶ひし上は、行くへを尋ねて武士の意地。

　ト思ひ入れあつて

今日の日足も最早入相、暮れ六ツまでに持參なす、その約束の一具の目貫、片しは爰に。又片しは

　ト思ひ入れあつて

ア、差すまじき物は

　ト柄を叩いて

刀ぢやなア。

　トこなしあつて合ひ方になり、忠兵衞、暖簾口へ入る。合ひ方かすめて大拍子になり、向うより、勘六、おつなに冗談しながら出て來り

勘六　カウおつな坊、おれが色になつてくれる氣はないか。

つな　アイ、隨分くれる氣があるね。

勘六　そんなら眞面目に色だぜえ。

ト門口へ來り、おつな、門の戸を開け内へ入り

つな　色は色だが、築地へ歸らずに、何時までも其所に居ろ。

トついと納戸口へ駈け込む。

勘六　彼奴もとんだ阿婆摺れだ。

ト思ひ入れあつて

エヘン〳〵。

ト咳拂ひをする。下座より、源六、喜三郎、出て來り

源六　カウ勘六、詰まらない目に遭つた。

勘六　して、お末が事はどうなりやした。

喜三　サア、人は見かけに依らぬもの。アノこの家の浪人が、たうとう五十兩と云ふ正金を出し、身請けをしたから、證文を返してやつた。

勘六　源六さん、お力落しだねえ。

源六　なにサ、負け惜しみぢやアねえが、あの位な色を拵らへようと思やア、幾人でも出來らア。そりやアさうと、あの忠兵衞が、五十兩と云ふ金を出すと云ふのは、どうも合點がゆかねえわえ。

勘六　さうサ、親方お前よく檢めて見なすつたか。又あのお觸れのあつた、三ツ鱗の極印のある金ぢやアないかえ。

喜三　サア、おれも氣が付かなんだが、よもやそんな金でもあるまいが。

勘六　モシ、念の爲に、檢めて見なさいやし。

ト最前の金を出し、檢め見て

ヤア、こりやコレ、一兩々々に。

勘六　三ツ鱗の極印があるね。

源六　そりやこそな〳〵。袖乞ひをする浪人が、五十兩と云ふ金を出すにやア、何れ曰くがなくちやア叶はない。

喜三　ハテ、見かけに依らない。そんなら爰の忠兵衞は、これこだわえ。

勘六　ア、讀めた。

ト懷中より前幕の簪を出し

あの梅川さんが、吉原から住替へに行く道で、荒稼ぎに遭つて、頭の物を取られたから、後を追つかけたが、皆暮れに見失つてしまつたが、そんならあの働らきも、忠兵衞だわえ。この簪も、あの藝者の小春が、浪人者から預かつたと云ふから、感を付けて、あらにしようと思つて、ちよつと借りて來たが、いよ〳〵ゑてだわえ。

喜三　この金は使ひ、れえう忠兵衛に逢つて、妹を取戻すか、本の金を取るか、詰め開きをしなけりやアならぬ。

ト入らうとするを

源六　コレ喜三郎どん、それよりはな。

ト囁く。喜三郎、思ひ入れあつて

喜三　ムウ。そんならこれを返さずに、代官所へ訴へて出れば。

勘六　さうサ、其方がね、モシ。

ト三人密々と囁きながら向うへ入る。合ひ方になり、暖簾口より、おつな、おさんを抱き出て来り

つな　お前、其やうにわやくを云ふと、化物に遣つてしまふよ。

ト門口をソッと開けて見て

オヤ、化物はもう消えて失くなつたよ。

さん　おいらは八幡様へ行て、菓子貰はう〳〵。

つな　オヽ、いや〳〵。その菓子では懲り〴〵したよ。

さん　それでも、行かう〳〵。

つな　もう今日は日が暮れるから、明日におしと云ふに。

さん　嫌ぢや〳〵。

つな　お前も寝起きの悪るいお子だぞ。そんな事をお云ひだと

ト其所にある棊闘きの魔裂きの看板を取つて来り

コレお見よ、怖い小父さんが、此やうにすると云ふよ。

さん　アレ、怖い〳〵。

つな　それだから、温なしくおしよ。

ト始終合ひ方。この時、暖簾口より、忠兵衛出て

忠兵　おつなどの、おさんは何をわやくを云ふのぢや。コレ、温なしうせぬか。

つな　ソリヤ、お父さんもお出でだ。温なしくおしよ。云ふ事を聞かぬ子は、此やうな目に遭はせますね。

トまた看板を見せる。忠兵衛、チッと思ひ入れあつて

忠兵　ア、思へばこの身を裂かるゝより。

つな　エ。

忠兵　アヽ、癪が差込んで参つた。

つな　オヽ、気の小さい。併し、縮に背いてさへ不気味でござりますね。おさんさん、駄々云ふとこれだよ。それだから、温なしくおしよ。

ト云ひながら看板を片付けて

モシ、わたしや今夜大裏まで、ちよつと用があつて行て来ますから、もつと早いが行燈をつけて。

ト行燈を出し
おまんまを上げる支度をして置きませう。あそこに急焼を取つて置きました。お茶は沸いて居るか知らん。
忠兵　イヤ／＼、構はつしやるな。まだ欲しうない。
つな　それでもお前さん、わたしは居らず、もう追ッつけお目が不自由であらうから、わたしの居るうち、あがつておしまひなされませ。
忠兵　マア／＼、そんなら其所へ何やかや、出して置いて下さればよい。
つな　そんなら、まだあがりませぬか。
ト云ひながら、膳椀飯櫃など其所へ出して
そんなら斯うして置きますから、お腹の空いた時分。オヤ、肝心の事を忘れるやつサ。
ト懐中より薬包みを出し
モシ、こりやア道庵さまの加減のお薬でござります。これも爰へ掛けて置きませう。
ト薬土瓶を火鉢へ掛けて、行燈、火打ち箱を出し
これでよしと。ほんにまだ何やら。
忠兵　もう大抵の事なら捨て置いて、用があるなら早う行くがようござらうぞえ。

つな　アイ／＼。そんなら明日の朝、早く参りませう。モシ、おさんさんえ、お父さんがね、追ッつけお目が悪くなるから、日が暮れたら、あの行燈へ火をお灯しえ。好い子だ程に、温和しうおしだと、お前の好きな水飴を買つて来るよ。ほんに、あれはお腹の薬ださうだね。ハイ、左様なら。
ト流行り唄になり、おつな、向うへ入る。かすめたる大拍子になり、引違へて、丹三郎、絹羽織の侍ひにて中間に廣蓋へ麻上下を載せたる臺を持たせ、出て来り
丹三　御免下され。
ト門口を開け
龜谷忠兵衛さま、御在宿でござりまするか。
忠兵　イヤ、これは丹波氏の御家来、丹三郎どの。
丹三　主人丹波八右衛門申しまするは、早速屋敷へ参り、重役中へ先刻の様子を申し達しましたるところ、即ち殿の上聞に達し、御前にも殊なう御満足。直さま目貫を持参なし、お屋敷へ帰参いたさるゝやう、主人八右衛門までの上意。供人萬端、洲崎武蔵屋にてお支度あるやう、手當いたして置きますれば、先づは御歸参の門出、めでたう麻上下にて、右の方までお出であるやうにと、主人

八右衞門口上でござります。

ト以前の白木の臺を出す。

忠兵　すりや、なんと云はるゝ。殿にも御滿足。拙者に歸參仰せつけらるゝ。チエ、、忝ない。

ト思ひ入れあつて

イヤ、御主人に申さるゝやうには、早速目貫を持參なし、お指圖を請けるでござらう。重々の御禮、萬端武藏屋にて申し上げるでござらうと、よろしく申し傳へて下されい。

丹三　畏まりました。忠兵衞さま、さぞお喜びでござりませう。

忠兵　イヤモウ、御推量下されい。

丹三　然らば後刻、お目にかゝりませう。

忠兵　くれ〴〵もよろしう。

丹三　畏まりました。

ト かすめたる大拍子になり、引返して向うへ入る。

忠兵　ヤレ〳〵嬉しや、心を盡せし甲斐あつて、浮木の龜谷忠兵衞が、再び古主へ歸參の門出。ア、、喜びあれば悲しみと、その喜びの手の裏を、返す隙なき悲しみは、養父の助命の種となる、鷄の目貫の片し。昨日やう〳〵買ひ取りしを、誤まつてその座にて、菓子と心得腹內へ、納めしこそは娘が因果、目貫の片しなき時は、大恩請けし養父の身の上、手こそ下さね、この忠兵衞が殺すも同然、是非に及ばぬ。大の虫より小の虫。

ト おさんを引寄せて

コレおさん、幼なけれども武士の娘、よう聞けよ。其方が命をこの親に、くれる時は養父の助命。それにて父は孝も立ち。義理も立つ。サア、爰の道理を聞き分けて……ア、、幼なき者に此やうな事、云うたとて詮ない事とは云ふものゝ、聞分けない程猶いぢらしい……夕を待たぬ陽炎の、臨終につゞまる娘が命。せめて未來を助かる爲、親が手づから香花を。オ、、さうぢや〳〵。

ト 忠兵衞、こなし。これより獨吟になる。

〽月は冴ゆれど胸の闇、髮のおくれのはら〳〵〳〵と、共に亂るゝ親心、鬠の片紐のほぐ〳〵と、子に迷ひ行く小夜千鳥、啼いて口說くぞ哀れなれ。

ト この唄のうち、忠兵衞、愁ひのこなしあつて、誂らへの古机、瀬戸物の花活に樒の花を入れ、手向水、土器の燈明などよろしく飾りつけ、團子入り誂らへの線香を出し、いろ〳〵こなしあつて、この唄の切れに六

ツの不釣り鐘の頭を打ち込む。これより忠兵衛、そろそろ目の見えぬこなし。誂らへの篠入りの合ひ方。

忠兵　ヤヽ、最早暮れ六ツ……折も折とてこの眼病。丹波氏に請合つた、養父の命取りとある、時刻も廻る入相の、塒に迷ふ親鳥が、その雛鳥の頑是なき、まだ笹啼きの辨まへぬ、幼なき者を没義道に、如何に忠義なればとて、非道の刃に現在の、親が手にかけ殺すとは、如何なる因果か業罰か。せめて一目我が子の顔……と思へど詮なきこの鳥眼……チエ、、顔が見たいわいやい。

ト　この臺詞のうち、おさん、思ひ入れあつて、溫なしく火を打ち行燈へ火を灯し、忠兵衛の側へ來て上下を眺め、思ひ入れあつて

さん　父樣、これを着て、のゝ樣へ行かしやれや。

ト　上下を持つて忠兵衛に見せる。忠兵衛、探つて見て、思ひ入れあつて

忠兵　コレ、父がな、これを着て、殿樣の御前へ行く前に、其方は行かねばならぬが、合點か。

さん　アイ、合點ぢや〳〵。サア、早う賽の河原とやらへ行て、遊んで歸る程に、赤い裂れ買うて下されや。

忠兵　オヽ、買うてやりませう〳〵。其方が欲しがる色元結ひ、髪の飾りは姫御前の、幸先祝ふ物なるに、その髷結ひは旗曼陀羅、花簪の瓔珞華鬘。お寺へ納めて後弔ふ程に、草葉の陰から喜んでおぢや。

さん　アイ、嬉しい〳〵。

忠兵　アヽ、なんにも知らずに、思へば其方程、果報拙ない者はない。母の胎内より浪人して、所々方々をさまよひ歩き、あられぬ所で出生なし、産神參りも髪おきも、心ばかりに祝ひもせず。母に別れて丸一年、晝は一日稼ぎに出て、往來の人の袂に縋り、合力受けるその中に、情かけるは稀れにして、素性賤しき者にまで、しつこい女郎と叩かれたり、頭の瘤や顔の痣、絶える隙なき憂き艱難、夜は疲れてすや〳〵と、この父親が懷中にて、夢現にも母樣に、どうぞ逢ひたい〳〵と、アヽ、道知らずの梅川を慕ふ心のいぢらしさ。一日半日心よう、紙雛の飯事も、しもせぬ上に刃にて、親が手にかけ殺さねば、ならぬ仕儀になつたるは、因果と業と惡緣と、がんぢ絡みの縺れ合ひ。親子と生れて憂き目を見するか。チエ、、思へば不便の、我が子の身の上ぢやなア。

〽子を捨つる藪に生ひ立つむら烏、父よ母よと啼く烏、森の小烏夜の鶴、現の闇に散る雪の、思ひな

き身のくらべこし。

ト此うち、忠兵衛、子役を引寄せて愁ひのこなし。始終唄の切れ、合ひ方。本釣り鐘。かすめのある事。忠兵衛、いろ／＼切りかねる思ひ入れあつて気を替へ

未練の嘆きに時移らば、養父へ不孝。所詮遁がれぬ娘が命。こりやモウ心を鬼に。さうぢや。

ト刀を抜き、おさんを引寄せる。

さん　アレ、怖いわいなう。

ト云ふ口を、ちやつと押へて思ひ入れ。この時、奥よりお末出て、慌てゝ忠兵衛に縋り

すゑ　モシ兄さん、お前は氣ばし迷うてか。なんでこの子を。

忠兵　イヤ、氣も迷はぬが、このおさん、殺さにやならぬ譯あつて、現在親が手にかける。樣子は後で解る事。妹、留めずと突放せ。

すゑ　ぢやと云うて可哀さうに、譯は何にも知らぬけれど、わたしが見ては殺させぬ。

さん　コレ、伯母樣、父さんが怖いわいなう／＼。

ト逃げる。

すゑ　オヽ、さうぢや／＼。早う何所ぞへ逃げて行きや。

オヽ、さうぢや／＼。

トおさん、逃げて門口の方へ行くを、忠兵衛、追ひかけ行くをお末支へる。この時、暮れ六ツの鐘を打ち出す。

忠兵　ヤヽ、ありやモウ暮れ六ツ。ホイ。

ト鳥眼になつたる思ひ入れ。誂らへの合ひ方になる。

すゑ　エヽ、鈍な子ぢや。早う門の外へ逃げて行きや。

忠兵　エヽ、丹波氏へ契約の、刻限移らば養父の身の上、邪魔な妹、突放せ。

すゑ　イエ／＼、なんぼうでも放しやせぬ。

忠兵　エヽ、面倒な。

ト忠兵衛、立廻つておさんを引寄せ、刀をさしつける。お末、その手に縋り、其まゝ忠兵衛、刀を振り上げ、キッとなる。

〽子は安方の安からぬ、親は空にて血の涙、誰が爲付けて世を唄ふ、さてこそうかれ安方。

トこの唄のうち、いろ／＼兩人立廻りあつて、忠兵衛、お末を盲目當てにちよつと當てる。お末、ムウと倒れる。忠兵衛、思ひ入れ。合ひ方止む。忠兵衛、急いたるこなしあつて

打ち切る鐘は娘が知死期。是非に及ばぬ。南無阿彌陀佛。

ト眼を塞ぎ、思ひ切つておさんを突く。おさん、苦しむ。忠兵衛、血刀を口に啣へ、口貫を探つて見て

せめて娘の死骸を、一目見んにもこの鳥眼。

ト思ひ入れあつて

ヤ、何時の間にやら我が眼病、平癒なしたは……さては娘おさんが血汐、計らず服して我が眼病……さるにても取り得し目貫は。

ト行燈を引寄せ見て、悄りして

ヤ、こりやコレ、似ても似つかぬ眞赤な似せ物。すりや、娘も犬死。さても／＼、斯くまで心を盡せしに。ホホイ。

トうつとりとなり、撻と下に居て、こなしあつて

もうこの上は、例へこの身はお咎め受け、八裂きになるとても、古主の御前へ推參なし、養父の助命を。さうぢや。

ト向うを見詰めながら、作の上下を着ようとする。この時、お末、心付き

すゑ　モシ、おさんは何所に。

ト嗟る思ひ入れ。忠兵衛、こなしあつて

忠兵　エヽ、足手纏ひに面倒な。

トお末を引立て、門口の外へ突き出し、戸を締める。好き時分より、勘太郎、頬かむりして窺ひ居て

勘太　お末か。

すゑ　ヤ、お前は。

勘太　來い。

ト手を取り、花道へかゝる。向うより人音するゆゑ、引返し、ゴン／＼にて下座へ入る。直ぐに向うより捕り手四人、凛々しき形にて十手を持ち、ツカ／＼と出て來り、皆々花道にて囁き、門口へ窺ふ。此うち、忠兵衛、上下の上を着て、下の紐を結びながら門口を明ける。捕り手、十手にて

捕手　御上意。

ト打つ。これにて忠兵衛、タヂ／＼と舞臺の好き所へ戻る。皆々、ツカ／＼と込み入り、ひろみし所を双方より十手にて

四人　御上意々々々。

ト打ち据ゑる。忠兵衛、くる／＼と立廻り、下に居る。四人、押取卷き、キッとなつて

動くな。

トこれにて、忠兵衛、思ひ入れあつて

忠兵　イヤ、何れも、思ひがけなるこの手籠め、何ゆゑあつて拙者めを。

捕手　ヤア、何ゆゑとは白々しい。三間堂の人殺し、龜谷忠兵衛、腕廻せ。

ト十手にて引きつける。忠兵衛、矢張り紐を結びながら

忠兵　ナニ、三間堂の人殺しとや。取つてもつかぬ御難題。この身に毛頭覺えござらぬ。

トよろしくやりほどき、見事に投げる。

捕手　例へ如何ほど陳じても、まだその外に盜賊の、疑ひかゝつた、忠兵衛捕つた。

トかゝるを、矢張り上下を付けながら、よろしく立廻り、双方へ捕り手を蹴散らし、捕手皆々十手にて圍ひ

四人　うぬ、手向ひか。

忠兵　イヤ、全く手向ひではござらねど、何れも方へ一つのお願ひ。この身に覺えなけれども、人殺しや用金も、身に引請けて御定法、身は八裂きになるとても、少しもいとはぬ龜谷忠兵衛。なれども只今貴所方の、云ふに從ひ行く時は、時刻の延引、養父の身の上、片時を爭ふ絶體絶命。何卒この儀を得心召され、武士は相身互ひとやら、暫時御猶豫下さらば、古主の御前へ直訴なし、擲して願ひを達しなば、その時こそは例へ百人二百人、如何なる手練が向ふとも、少しも動かぬこの忠兵衛。なれども今の情の返禮に、その時こそは何れもの、お手柄させん拙者が存念。

捕手　ヤア、くど／＼とその云ひ譯、おてまへの身は立たうが、此方どもの役儀が立たぬ。ソレ、何れも方。

四人　腕廻せ。

ト忠兵衛、思ひ入れあつて

忠兵　斯程まで事を分け、暫時の猶豫を願へども、聞入れなくば是非に及ばぬ。例へ金鞘猛火の中でも、切つて切つて切り拔ける。申し譯は後日の事。

四人　捕つた。

ト双方よりかゝるを、忠兵衛、見事に投げ

忠兵　手向ひ御免。

トこれにて誂らへの合ひ方になり、忠兵衛、いろ／＼目覺ましき捕り物のタテあつて、トゞ双方の捕り手四人を當てる。忠兵衛、思ひ入れあつて

片時も早く、御前へ。さうだ。

ト行きかける。おさんの死骸を見て思ひ入れ。

思へば不便な娘が最期。なれども其方が死したるゆゑ、この限も。……犬死とばし思ふなよ。父も追ッつけ……さうだ。

ト行きにかゝる。好き時分より、虎、窺ひ出で忠兵衛を留め

虎　われを突き出し、おれが身投けを。

ト帶際取つて引戻す。この途端に行燈返り、暗がりの模樣。忍び三重になり、兩人、暗がりの立廻りあつてト、忠兵衛は摺り拔け、門口の外へ出る。此うち捕り手皆々心付き、虎、探り居るを忠兵衛と心得、双方より捕つたとかゝる。忠兵衛、聞き耳して門口を締める。虎、捕り手を返す。この途端一時に木の頭、銅鑼の送りにて、忠兵衛は一散に向うへ入る。虎、捕り手をよろしく踏まへ、向うを見込む。キザミよろしく

拍子幕

五幕目　洲崎武藏屋の場

役名──龜谷忠兵衛。丹波八右衛門。淺田五左衛門。家主、三右衛門。判人、勘六。武藏屋金之助。同下女、お秀。親方、喜三郎。槌屋治兵衛。同抱へ、おすわ。紀伊國屋小春。壹蔦、大磯の虎。

本舞臺、三間の間、平舞臺、正面、腰障子、上の方同じく折廻しの障子屋體。下の方、茶壁、下地窓、枝折り門、すべて洲崎武藏屋の體。鰐口の音、座附きの唄にて、幕明く。

ト爰に治兵衛、小春、酒を呑んで居る。下女お秀、前垂れがけにて酌をして居る。上の方に、三右衛門、勘六、喜三郎、煙草盆を扣へ、五德に並んで聲高に爭つて居る。

勘六　モシ〳〵大屋さん、マア、靜かになさいな。

喜三　今お前がそんなに筋を出して云つたとて、どうなるものか。

三右　どうもならないやうには貴樣達がしたのだ。なんの云ひつけ口をせずともの事を、この家主に餘計の氣を揉せる手合ひだ。

治兵　大屋さん、ついぞないお前、熱くならしつたの。

小春　モシ、なんだか知りませんが、一つおあがりな。

ひで　モシ、マア、一つおあがりなさいませ、
三右　イヤ〳〵、今夜酒などを呑まれるものか。大事が起つて居るワ。この三右衛門は、そんな機嫌ではない。
小春　そりやアお氣の毒だね。
治兵　ナニ、大事が起つて居るえ。そりやアどう云ふ事だ。
三右　コレ、聞かつしやい。わしはこの手合ひのお庇で、お侍ひ様に呼ばれたワ。爰の内まで。
治兵　ナニ、お侍ひ様に爰の内まで呼ばれたえ。小春、似た事もあるものぢやアねえかの。
小春　さうさね。そして大屋さんえ、そのお客に逢ひなすつたかえ。
三右　イヤ、まだ逢はない。此方から呼ぶまで、其所に待つて居ろと云はしつた。ナウ女中。
ひで　左様でござります。好い時分には逢ふと、爰に待つてお出でなされまするやうに仰しやりました。
治兵　そいつはおつりきだわえ。おれも矢ツ張りその傳だが……コレ、お秀どん、おすわが客と云ふは、矢ツ張りそのお侍ひぢやアないか。
ひで　左様でござります。今そのお屋敷さんへ出て居なさいます。

治兵　して、そのお屋敷の者は、なんと云つて、客と云ふは幾人だ。
ひで　お屋敷の名は存じませぬが、お二人様でござります
治兵　小春坊、知つちやアないかの。
小春　マアお聞きよ。先刻お前が、ソレ、番場へ出て行きなさつた後で、爰の武藏屋から座敷を云つて来たと思ひなせえ。お客はと聞いたなら、眞面目なお屋敷だと云ふから来て見ると、いま座敷へ出ては悪いと云ふ評判だから、其うつちよつぴり相手を見付けて行かうと思ふ所へ、丁度お前が来たゆゑ、マア水入らずに始めたが、今夜はマア、どうしたのだらうね。みんな狐に化かされたのだらうね。みんな狐に化かされたのならをかしからうね。それはさうと大屋さん、お前はなんで腹を立つて居なさるか知らないが、マア一つおあがりな。
三右　おれが腹を立てるのは、矢ツ張りその事サ。そんならこなたを爰へ呼ばせたのも、この二人が業だ。
小春　そんなら勘六さんに、あのお方の馴染みのお客の座敷かえ。それは有り難う。モシ、お前さん方も爰へ来ておあがりな。マア大屋さん、爰へお出でな。
三右　イヤ〳〵、どうして〳〵、酒どころではない。貴様

達も譯を聞いたなら、酒も咽喉へは通るまい。

治兵　ハヽヽ、氣味の惡い、とんだ四段目だ。カウ勘六どん、こりやマアどう云ふ譯だえ。

勘六　大屋さんのは斯うでござりやす。十二軒に居た虎信と云ふ繪畫きが、ちつと胡散な事があつたから、わしが心安いお侍ひさんへさう云つたら、要らざる云ひつけ口をして、おれを爰へ呼ばせると云つて、この大屋さんが理窟を云はつしやるのでごぜえす。

喜三　モシ、、砂利の上へ出る大屋が、こんな事を嫌がつて家主の役が勤まるものか。馬鹿らしい。

三右　馬鹿らしくつても、おらア嫌だ〳〵。忌々しい手合ひだ。

小春　モシ〳〵、マア靜かにおしな。それはさうと、その虎信さんとやら云ふ繪畫きが、どんな事をしたのだえ。

治兵　コレ小春、てまへ、その繪畫きは心安いか。

小春　アイ……イ、エ。

ト思ひ入れ。

治兵　カウ、そんならその十二軒の繪畫きの引合ひで、爰へ呼ばれたのだな。おらアさつぱり知らない人だが。

勘六　イ、ヤ、お前はさうぢやアねえ。三十三間堂の。

治兵　ナニ。

ト思ひ入れ。

勘六　今に解りやせう。

三右　こなたも又、要らざる口をきかずとも、商賣の判人なら判人で居るがいゝぢやアねえか。とんだ判人だ。

勘六　判人しなせえな。

三右　エヽ、洒落どころではない。おらは判人しても、世間の人が難儀する事だ。貴樣達は恨みなものだ。

喜三　大屋さんも、もう好い加減に愚痴を云ふがいゝ。おらア五十兩と云ふ使はれない金を取つて、氣が氣ぢやアない。

三右　そりやア、取つたが貴樣の誤まりだ。

喜三　それだから、云ふ所へ云つたものだからいゝぢやないか。

三右　貴樣がよくつても、おれが惡い。

勘六　成る程、解らねえ大屋だぞ。

三右　コレ、何が解らねえ。

喜三　何もかも解らない。

三右　何が解らないよ。

勘六　ハテ、マア、いゝぢやないか。

三右　イヤ、よくない。コレ、何が解らない。
喜三　解らない〳〵。
三右　何が解らない〳〵〳〵。
勘六　成る程、こいつは解らない。
三右　コレ、何が解らない。
勘六　解らない〳〵〳〵。
ト三人立つて、わや〳〵云つて居る。流行り唄、鰐口の音になり、奥より金之助、料理茶屋の息子の形にて出て來り、この中へ入り
金之　モシ〳〵。お前方は、何を其やうに、解らない〳〵と云ひなさるのだ。こんな解つて居る事はないぢやアないか。
三右　この子は爰の息子の金之助どの。
喜三　何が解つて居るのだ。
金之　ハテ、お前方三人は、大屋さんに藝者屋の親方に判人。ソレ、解つて居りやせう。
三人　成る程、こいつは解つて居るワ。
金之　解つて居るなら、モシ、奥にお出でなさるお侍ひさんが、お前方に逢ひたいと仰しやるから、サア〳〵、お出でなされませ。

三右　ソリヤこそな。そのお侍ひが逢ひたいと云はつしやるも、みんな貴様達のする事だ。
勘六　また始まつた。
小春　カウ〳〵、どう云ふ譯だか、皮切りをしないうちは譯が解らない。マア、お前方、瀬踏みをして見て下さりやし。
金之　サア〳〵、お出でなされませ。
勘六　そんなら、サア、大屋さん。
喜三　行きやせう。
三右　行きは行かうが、貴様達、先へ立つて行かつしやい。おれは一番後から行く。なんだか氣味が悪い。
勘喜　とんだ大屋さんもあるものだ。
ト勘六、喜三郎、先に、後より三右衛門、奥へ入る。
金之　モシ、お前さん方、さぞうるさからうと思つて、一杯かついで、追ひこくつてしまひやした。
小春　オヤ、きつい事だね。モシ金さん、一つおあがりな。
治兵　サア、一つあげやせう。
ト金之助に杯をさす。
金之　これは有り難い。
ト一つ呑んで

小春さん。
ト小春へ杯をさす。
小春 お抑へにしようかね。
金之 イエ〱……イヤ、わたしやア今夜、素敵な用があつた、忘れ切つて居やした。
ト思ひ出したやうに立つ。
治兵 素敵な用とはなんだ。色事か。
小春 お樂しみだねえ。
金之 ナニ、今日出來て來た、凧の糸目を付けさせるのであつた。
治兵 カウ、色をする者が、凧をあげずともいゝぢやアねえか。
金之 なんの、お前方ぢやアあるまいし。
小春 それでも聞いた事があるよ。
金之 そんな世辭を云はずとも、座敷の好い時分、わしが呼びに來るから、氣儘酒になさいやし……妾が幕で候ふ。
ト立つて上の下座の方まで行く。
カウ、お出で〱。
ひで アイ〱。
ト立つて金之助の側へ行く。金之助、兩人へ仕方をして
金之 カウ、ちつと氣を利かせさつし。
ト流行り唄になり、お秀を連れて下座へ入る。
治兵 成る程、利口な子だわえ。
小春 ませたやうでも何所やらが、子供のうちが可愛いぢやアないか。
治兵 カウ、可愛いと云へば小春、先頃ろかんざし を預かつて達引をしたと云ふ男は、てまへのなんだ。
小春 ほんにその事を話さうと思ふうち、ツイ云はなんだがね。
治兵 云はないでも知れたてまへ。
小春 アイ、色サ、モシ、色をした女か、しない女か、お前、知れないかえ。
治兵 おれがてまへに付いて歩きやアしまいし、知れるものか。
小春 エヽ、その事ぢやアないわな。あの時。あの時。
治兵 ナニ、あの時。
小春 エヽ、とんだ感違ひを彈く三味線だぞ。
治兵 ムウ。あの時は、おれも初めてだから、なんだか知れなかつた。

小春　エ、、なんだなア。
ト治兵衛の手を握る。
治兵　アイタ、、、。
ト小指を押へる。小春、ちよッと目を付けて
小春　モシ、お前の小指は、どうしなさつたのだえ。
治兵　この指か。こりやアなに
ト思ひ入れ。
小春　どうしたのだえ。
ト立ちかゝる。この時、揚げ幕にて
侍ひ　門を締めろ〱。人は一人も
同　出す事はならないぞ。
ト時の太鼓になり、侍ひ二人、上下を着たる忠兵衛と
虎を中へ挾み出て来り、本舞臺へ来て
家内の者〱。
ト奥にて
ひで　ハイ〱。
ト出て来り、皆々を見て
ハイ、お氣の毒様でござりまするが、今夜はお座敷がも
う
侍一　コリヤ〱女、料理を申しつけるのではないワ。浅
田五左衛門どの、丹波八右衛門どのは居らるゝであらう。
ひで　ハイ、お屋敷のお方がお二人、御一座で。
侍二　その座敷へ案内いたせ。
ひで　ハイ、ちよつと承はりまして。
侍一　コリヤ〱、聞かずとよいワ。それに違ひはない。
ト此うち、小春、忠兵衛を見て
小春　ヤ、あなたは。
忠兵　イヤ、女中、先達ては段々。
侍ひ　案内いたせ。
ひで　ハイ。
トお秀、案内して忠兵衛小春、顔見合せ、こなし思ひ
入れあつて、皆々奥へ入る。治兵衛、小春、残り、あ
と見送り、思ひ入れあつて
小春　先刻勘六さんの詞と云ひ、今の様子。何か仔細のあ
りさうな、あなたの身の上。
治兵　ハヽア、簪を預かつたと云ふ浪人は、あの人だな。
小春　アイ。
ト俯向いて思ひ入れ。
治兵　なんだか餘ッぽど込入つた、譯のある仲と云ふやう
な様子だが、コレ小春、本當にあれは、てまへのなんだ。

小春　話せば長い事だがね……モシ、譯は明いてから、内へ歸つて詳しく話すからお聞きよ。
治兵　なぜ〳〵。爰で話しては惡いか。
小春　惡くはないが、ひよつと。
　トあたりへ思ひ入れ。
治兵　ハヽア、どうも怪しいぜ。
小春　また感違ひを彈くのかえ。それよりはお前の指のいきさつを、云つてお聞かせ。
治兵　これも話せば長い事だが、内へ歸つてから話して聞かせよう。
小春　爰では云はれないのかえ。
治兵　お互ひサ。
小春　なんのお互ひであらう。わたしは曇り霞みはない。なんでも譯を聞かなければならない。サア、誰れに切つて遣つたのだえ。
　ト胸倉を取り
サア、云つてお聞かせ。
治兵　なんのこつた、喧ましいわえ。
　ト振り放さうとする時、勘六、後より出て
勘六　サア、治兵衛さん、奧のお侍ひさんが逢ひたいと云はつしやるから、お出でなさいやし。サア、小春さんも。
小春　一緒に行くもをかしいね。オヤ、喜助どんをちよつと使ひに遣つたから、モシ、勘六さん、ちよつと三味線を繼いでおくれな。
勘六　ナニ、三味線が要るものか。
小春　どうしたと云ふのだえ。
治兵　なんだか氣障だぜ。
　ト右の三人、殘つて思ひ入れになる。道具廻る。
本舞臺、三間の間、二重舞臺、竹垣の蹴込み。左右の袖一間程下げて、建仁寺垣、植込み、石燈籠、つくばいの手水鉢などよろしく、右の唄にて、道具納まる。
ト二重舞臺の上の方に、淺田五左衛門、野袴ぶッ裂き羽織、下の方に丹波八右衛門、羽織袴にて住ひ居る。上の方に忠兵衛、三右衛門、下の方におすわ、立ちかかり居て
すわ　エヽ、お前はなア。
忠兵　ヤア、人面獸心とはおのれが事だワ。
すわ　なんとえ。

ト両人立ちかゝるを、忠兵衛を三右衛門留める。

八右　コリヤ〳〵、女、扣へぬか。

五左　八右衛門どの、一體この度の詮議は、身共一人にて致すところ、龜谷忠兵衛見知り人とあつて、達ておこまへが望まれての添へ役、察するところ両人が素振り、いよいよ女は北條家の奥小姓梅川。また浪人は龜谷忠兵衛に相違ござらぬ。家主、縛ぶて。

八右　これは如何な事。龜谷忠兵衛ならば拙者古朋輩、よう存じて居りまする。決してこの浪人、龜谷忠兵衛ではござらぬ。

すわ　エヽ、なんと云はしやんすえ。

八右　コリヤ女、何も其方が存じた事ではないぞ……イヤナニ御浪人、思ひ設けぬ災難ゆゑに、氣も轉動いたされてか、目貫の又は養父の命乞ひのと、あられぬ事を云はるゝが、場所が悪い。それは筋違ひでござらう……コリヤ、家主も承はれ、これなるお方はな、鎌倉のお隠し目付け、淺田五左衛門どの。この度の御詮議は、北條家の家中、龜谷忠兵衛と申す者。先年主人の用金貳百両盗み取り、屋敷を出奔いたせしと申し上げし輩あつて、即ち鎌倉三老方より、即ちこの淺田五左衛門どのを以ての御詮議。然るにこの仁の申さるゝには、必定これなる浪人こそ、二百両の盗賊、龜谷忠兵衛に相違あるまい、鎌倉へ引くとの御仰せ。その身に覺えなき事ゆゑ、申し開き致せ。さある時には養父の命乞ひの日限り、イヤサ、鶏の目貫とやらんを以て、好き主取り致したいとある、折角の志しも水の泡。それに依つて御浪人、この龜谷忠兵衛に紛らはしきなどは申されぬがよい。イヤサ、筋違ひな儀は申されぬがよからう。

ト皆々に呑み込ませる思ひ入れ。

五左　丹波氏、合點が参らぬ。おてまへの詞、どうやらこの浪人を庇ひ召さるゝが、すりや、なんでござるか。古朋輩の龜谷忠兵衛ゆゑに、贔屓いたさるゝでござらうな。

八右　ハテサテ、これは淺田氏のお詞とも存せぬ。この浪人が龜谷忠兵衛でござらうならば、貴殿に精腹は採ませませぬ。イヤサ、餘人の手は借りませぬ。古朋輩の事ゆゑ、一旦申し開き立つまでも、拙者めが縄打つてお渡し申す。

五左　そんならなんでこの素浪人を、贔屓召さるのだ。

八右　さればサ、何も贔屓いたすと申すではござらぬが、龜谷忠兵衛でもなき、この仁へ縄かけては、浪人にも致

せ、侍ひは相身互ひ、何とも氣の毒千萬。それは格別、その爲に拙者が添へ役いたし居つて、見す〳〵人違ひござつては、この身ばかりか、貴殿のお役目の越度にもならんかと存じ、斯様に申すが、拙者が誤まりでござるかな。

五左　サ、それは。

八右　但し貴殿、龜谷忠兵衛の面體、御存じでござるかな。

五左　エヽ、存ぜぬに依つて吟味いたすのでござるワ……コリヤ〳〵、すわとやら、身共が申す事をよう聞けよ。この浪人が龜谷忠兵衛、私しが奥小姓の梅川でござんすわいなアと、有體に云ひさへすれば、決してお咎めはない。繩打つて引くなどゝ申したは、ありやほんの云ひ張りと申すものぢや。隠して居ると二人ながら、コリヤ。

ト首を切る眞似をして

これぢやぞ。アヽ、てまへは好い器量だ。アヽ、美しい女だ。サヽ、忠兵衛であらうがな。

トおすわ、八右衛門と顔見合せ、こなしあつて

すわ　アイ……イヽエ〳〵、忠兵衛さんではござんすまい。わたしやなんにも、よう存じませぬわいなア。

五左　コリヤ家主、この浪人の名は何と申す。有體に申せ申せ。

三右　ハイ、忠兵衛と申し奉つて悪くば、忠兵衛とは申し奉りますまい。名は何と申し奉りまするやら、存じ申し奉りませぬ。

五左　ヤイ〳〵、われは家主ではないか。

侍ひ　何を役に致して居るのだ。大たわけめ。

三右　ハイ〳〵〳〵、私しは家主を致し奉りまする。片手間には深川でござりますれば、あさり蛤などを剝き奉りまする。

五左　黙り居らう。大べら坊め、大たわけめが。

三右　ハイ、御意でござりまするが、大馬鹿の剝身なども剝き奉りまする。

五左　エヽ、すツ込んで居らう。

三右　ヘイ。

ト後へ下がる。

五左　コリヤ浪人、名は何と云ふ。姓名は何と申す。

忠兵　拙者は繪を渡世に仕りまして、狩野虎信と申しまする。

五左　丹波氏、眼前三十三間堂の人殺しは、この浪人でござる。彼れでござる、とくと吟味さつしやい。

八右　ナニサマ、吟味いたしてお目にかけませう……御漢人、この懐中物、覚えござるか。

ト前幕、傳海の持つて居たる紙入れを出す。忠兵衛見て

忠兵　如何にも、拙者が懐中物でござりまする。

すわ　ア、モシ、滅多な事を。

五左　ハヽヽ、例へ如何程贔屓があつても、庇ひ負ふせられぬ天の網。自身の白状、遁がれはない。家主、繩ぶて。

忠兵　アイヤ、お待ち下されい。それなる懐中物が拙者が所持の品なれば、人殺しと御意なさるか。

五左　如何にも。コレ見ろ。

ト紙入れの中より書き物を取出し

金子を包みしと覚しき紙、縮の具代金五十兩、虎信どのへ箱根山別當と記しあるぞ……夜前三十三間堂の人殺しその時に落ちしこの紙入れ、さすればその夜の人殺しは、其方であらうがな。

忠兵　これは存じ依らぬお疑ひ。その紙入れは昨年箱根山に於て、盗人に奪はれしを、やう〳〵の事にて中の金子は取返しましたれど、紙入れは其まゝに打捨て置きましたが、さては三間堂にて横死なしたる者が、その盗人と見えまする。

八右　ナニサマ、明白な申し條。あの人殺しは、この仁ではござるまい。

五左　ハテ、ようつべこべと。して、人殺しでないと云ふ證據でもござるかな。

八右　證據と申すは、横死なしたる者の口に、左の小指が殘つてござつたが、あれ御覽じろ。虎信が指は十本ながら、滿足でござるが。

五左　でも、この紙入れ。

八右　ハテ、罪なき者を權威を以て、罪に落さるゝ事は無慈悲とや云はん。貴殿には政道、私しにもお構ひないか。

五左　エヽ、勝手にさつしやれ。

ト流行り唄になり、下座より、治兵衛、小春、勘六、付き出て來り、

小春　勘六さん、お座敷は爰かえ。

治兵　モシ、今晩は私し所のおすわを、有り難う存じます。さて又寒い事で。

小春　ハイ、今晩　どなた様も……オヤ〳〵、淺田さん、この間は。

五左　ヤア、小春坊、ハテ、いつも綺麗だな。お主が顔を見たなら、身内がぞく／＼。こりやモウどうも堪らぬ。

ト立たうとするを

八右　これは淺田氏、如何いたされた。

五左　サ、なんでござる。身共、風邪が致して、ぞく／＼致す……エ、コレ、先達ては、よう身共に肱を喰はせ居つたな。

トこなし。治兵衞、小春の袖を引ッ張り、上の方へ立つて來る。小聲にて

治兵　コレ小春、そんなら、あの五左衞門は、てまへ馴染みの客か。

小春　アイサ、こつちらのお客は知らないがね、あの淺田さんと云ふのは、二三度わたしを、そりやアモウ／＼嫌らしくつて／＼、誠に好かない氣障な山さんだよ。

治兵　さましてあがれ。いつか承知の濱だらう。

小春　おかたじけ。わつちには、あんな山さんが相應さね。

トこの聲を五左衞門聞きつけて

五左　ナニ、身共を山の芋だと申すか。

小春　オヤ、お前さん、今夜はお眞面目でござりますね。

五左　眞面目でも身共、とろゝにはならぬわい。

小春　ホヽヽ。惡いお聞きなされやう……モシ、お杯かえ。

三右　これサ小春、治兵衞どのも、マア、下に居て、手を突くのだ／＼。

治兵　ハヽヽ。とんだお坊さんの御年始だ。

小春　モシ、お銚子はえ。

八右　コリヤ／＼女、酒宴の席ではないぞ。其方達も詮議があつて、これへ呼んだのぢや。

勘六　二人ながら洒落どころではないよ。

五左　ヤア／＼、男と女と共やうに、引ッ付いて小胸の惡い。茲な不屆き者めが。

治兵　小春、惡い勘助だな。

五左　ヤア、お上より御詮議がある。兩方へ分れて下がり居らう。

トこれにて治兵衞は下、小春は上の方下に居る。

勘六、其方が持つて居る笄を、これへ出せ。

勘六　ヘイ／＼、畏まりました。

ト前幕の簪を五左衞門に渡す。

五左　浪人、この簪其方、見覺えがあらうがな。

忠兵　如何にも見覺えがござります。

五左　如何いたして見覺えある。
忠兵　サア、その儀は、
五左　どうだ。
忠兵　申し上げるも面目なうはござれども、以前契約いたした女が、
勘六　申し上げまする。この者の申しまする事は、皆偽はりでござりまする。この笄はこれなる、おすわと申す女、吉原町より深川へ參る途中、簪を拔かれましてござりまするが、その荒稼ぎは慥かに、この浪人者でござりまする。
忠兵　ヤイ〳〵、身に覺えなき無實の難題、今一言云うてお見やれ、免さぬぞ。
勘六　免さぬも押しが強いね。盗人猛々しいとは、こんたの事だワ。
八右　コリヤ〳〵控へぬか。
勘六　ヘイ〳〵。
　ト平伏する。
五左　コリヤ、すわとやら、この笄、其方、盗人に取られたであらうな。
　トおすわ、八右衛門と顏見合せる。八右衛門、こなしあつて
八右　コリヤ〳〵女、滅多な事を申すな、うつかりと物を申すと、科なきこの御浪人が龜谷忠兵衛なりと、金子の盗賊の疑ひがかゝるぞ。
勘六　アイヤ、モシ、その浪人どのは忠兵衛に違ひござりませぬ。ハイ、名は忠兵衛と申しまする。私しがよく存じて居ります。
五左　さてここかゝる證人のある上は、いよ〳〵違はぬ龜谷忠兵衛。
八右　ハテ、又してもしつこい仰せ。龜谷忠兵衛ならば、拙者が容赦いたさぬと申すに。
勘六　イエ〳〵、其やうに仰しやつても、浪人の名は忠兵衛。
八右　默らう、此奴が。コリヤヤイ、よしやこれなる浪人の名が、忠兵衛と申すに致せ、世間に同じ名は何程もあるワ。
三右　左樣でござりまする。申しませうならば鼠も忠兵衛、雀も忠兵衛、鳩はほう〳〵、烏は
五左　ヤイ〳〵、又しても大たわけめ。默り居らう。
八右　コリヤヤイ、勘六とやら、これなる浪人を、忠兵衛

と訴人いたすが、いよ〳〵北條家の浪人、鎗谷忠兵衛なりと、確かた證據を持つて申すか。

勘六　サア、その儀は。

八右　分明ならざる儀を、訴人いたすと赦さぬぞ……ぢやに依つて、すわとやらも、迂濶に物を申すな。

すわ　ハイ、わたしは何にも存じませぬわいなア。

治兵　オヽ、さうだ〳〵。知らぬ事は何處までも知らぬと申せ、兎角お主が身にかゝり合ひにならぬやうにするがよい。

　トおすわを庇ふこなし

五左　コリヤ勘六。この簪の出所は。

勘六　ハイ、あの小春が、さる浪人から預かつたと持つて居りまするを、わたしがかんを付けて、ちよつと借りて持つて參りましたが、いよ〳〵盗人は

五左　オヽ、よい〳〵……。コリヤ〳〵小春坊、お主はこの簪を、どう云ふ譯でこの浪人めから預かつた。譯を聞かぬうちは身共、氣が揉めてならぬ、オヽ、どう云ふ譯ぢや。これサ〳〵小春坊。

　ト八右衛門と顏見合せ

ヤイ、有體に申せ。

　ト眞面目になる。小春、思ひ入れあつて

小春　イエ〳〵、その簪は、浪人さんから預かつたのではござんせん。わたしが拾つたのでござんす。どうしてこのお方は、其やうな悪い事するお人ではござんせぬわいなア。

すわ　さうでござんす。憎いお人ぢやが、なか〳〵其やうな事などするお人ではないさうにござんす。

治兵　ハテ、てまへが構つた事ではない。必らず何にも云ふな。……コレ、小春も、簪をさる浪人から預かつたと云つたではないか。

小春　アモシ……ほんにお前に云つたのは……オヽ、ソレソレ、ありやわたしが拾つたのぢやわいな。モシ淺田さん、大概積りにも知れてある。御浪人さんが男の癖に、なんの簪を差すものかいな。それともお前、その奴頭へ、その簪を差しなさんすかえ。

五左　成る程、お主がさう云やれば、そんなものであらう。こりや小春坊の申すのが、尤もぢや〳〵。オヽ、さうであらう〳〵。

勘六　モシ〳〵あなた、それは少と御油斷でござります。なんでも小春が申しまするには、浪人から預かつた簪

と、私しにしつかりと申しました。その上、只今の詞の端々、どうやらこの浪人どのを、庇ふやうに見えまするが、なんと怪しいではござりませぬか。モシ、小春が身元を御詮議なされまするが、よろしうござりませう。

五左　コリヤ〳〵家主、この小春が身元を知つて居らう。知らぬと申すと、その分には置かぬが、キリ〳〵ほつき出せ。

三右　ヘイ〳〵…………ほつき出し奉りませう……小春が親は、北條家の侍ひ、龜谷忠太夫さまに、奉公を致し居りました者さうにござりまする。

勘六　ソレ御覽じませ。いよ〳〵御浪人どのは、龜谷忠太夫どのゝ伜、忠兵衞に違ひございますまい。古主の事ゆゑ、あの小春が、僞はりを申して庇ふと見えまする。

五左　ウム。これは勘六、好い所へ心が付いた。さすればいよ〳〵この浪人は、龜谷忠兵衞、二百兩の金子の盜賊。繩ぶて。

小春　ア、モシ〳〵、なんのマア、あなたは其やうなお方ではござりますまい。正直さうなお人。又わたしも家來筋とやらではござんせぬ、なんのマア、藝者にお侍ひさんの主人があつてよいものでござんすか。

五左　成る程。こりやア小春のが尤もだわや。オヽ、さうであらう〳〵。

ト治兵衞思ひ入れあつて

治兵　アヽ、それで樣子が知れたわえ。

小春　エ。

治兵　コレ、小春、そんなら、おれがかんぐつて置いた通り、われが色だな。

小春　エヽ、なんのマア。

すわ　大磯で馴染んだ色と云ふのは、もしやあの小春さんではあるまいか。

五左　もしも色なら、身共なんと致さう。アヽ、氣が……コリヤ小春、家來筋であらうな。

小春　イエ〳〵、そんな者ではござんせん。

治兵　そんなら、どうでもてまへが色だな。

小春　なんの其やうな。

五左　さなくばいよ〳〵主人であらうな。

小春　エヽ、こりやモウどうしたら。

八右　コリヤ〳〵女、只今家主が申した詞もあるぞ。其方が親が忠太夫どのに奉公いたしたるなどゝ、うろたへた事を申すな。さある時にはこの浪人は、伜忠兵衞ゆゑに

庇ふと、淺田氏より疑ひがかゝるぞ…コリヤ、成る程浮氣な商賣いたす女。其方が懇ろ致し居つて、庇ふのであらうな、決して家來筋で庇ふのではあるまい／＼。

ト思ひ入れ。

小春　成る程、家來筋ではござりませぬわいなア。

治兵　そんならいよ／＼お主が色だな。

小春　エ、モウ、さうでは。

五左　ないなら主人か。

小春　イヽエ、どうして。

治兵　色でなくば、なぜ其やうに庇ふのだ。

小春　サア、それはな。

五左　いよ／＼主人か。

小春　サア。

治兵　色か。

小春　サア。

三人　サア／＼／＼。

治兵　小春、有りやうに。

八右　コリヤ、白狀いたせ。

ト思ひ入れあつて、キット云ふ。小春、こなしあつて

小春　そんなら色でござりまする。

忠五　エヽ。

忠兵　この身を庇うて覺えなき

小春　アモシ、色ぢやわいなア。

五左　ヤア、そんならアノ、小春とこの浪人めと。エヽ、どうしてくれう。

ト腹を立て、立ち上がるを

八右　これは淺田氏、如何いたしたものでござる。御仁體が損ねまする。

トこれにてムウと顏を膨らして下に居る。

すわすりや、大磯で云ひ交した、わしを捨てゝ此やうに、勤め奉公さするも、みんな二人が

八右　コリヤ／＼女、身に覺えなき事を必らず申すな。

ト思ひ入れ。治兵衞、こなしあつて

治兵　コレ小春、うぬはこれまで男嫌ひぢやの、嫌味なしぢやのと、ようこの治兵衞を擔ぎやアがつたな。そんならさうと打明けて、云つてくれゝば此やうに、滿座の中で恥はかゝない。小ッ恥かしいが、うぬにかゝつて、親の遺言を破つたのみか、これまで知らぬ女の肌、知つたが因果身にかゝる、災難位は甘口な、命と命のこま結び、堅い同士は金輪奈落、深いと人に謳はれた、おれはお先

で薄のろく、外に色があると云はれちやア、生きても死んでも男が立たない。よく恥面をかゝしやアがつたな。

ト思ひ入れ。

小春　サア、腹の立つのは尤もでござんすが、これには段段云ふに云はれぬ

ト立ちかゝるを

治兵　何がどうした。

八右　コリヤ、抑へぬか／＼。

五左　ヤイ／＼、下がり居らう。そんならアノおのれも、あの小春と……エヽ、小胸の悪い。うぬ、どうしてくれう。

ト治兵衛をヂツと見詰める。この時、治兵衛の指へ目を付けて

ア、知れた／＼。コリヤヤイ、三十三間堂の人殺しは、其方であらう。真直に白状いたせ。

ト治兵衛、悄りして

治兵　エヽ……ナニ私しは左様な覚えは。

五左　無いとは云はさぬ。うぬが左の小指はどうしたのだ。

治兵　サ、これは。

八右　コリヤ、うろたへずに、有體に申せ／＼。

治兵　サ、これは、なんでござりまする。

五左　キリ／＼申し上げろ。

治兵　これは切られました。

五左　どうしたとて

治兵　女へ心中に切つたのでござります。

ト思ひ入れ。小春、こなしあつて

小春　モシ、これまで女嫌ひぢやと云うたお前。そんなら疾から。

治兵　知れた事だワ。色があるワ。

勘六　治兵衛どの、貴様も大概な事を云ふがよい。これまで女の肌を知らないこなた、指を切つて遣る女はない筈だ。この勘六も、ちつと嗅ぎつけて置いた事があるワ。サア、その指の譯を有體に云はつしやい。

治兵　喧ましいわえ。女に切つて遣つたに違ひはないワ。

小春　して、その女は誰れでござんす。

三右　サ、早く云はつしやい。早く申し上げて、身抜きをするがよい。

八右　コリヤ／＼、早く申し上げろ。

五左　ヤイ、その女は誰れだ。

治兵　サ、その女は。

ト思ひ入れあつて
ソレ〳〵、爰に居るおすわでござりまする。
すわ　エ。なんのマア、わたしに其やうな事を。わたしや覺えは。
治兵　ハテ、もう斯うなつては遠慮は入らない。一つは彼奴へ面當てだ……疾から色でこの女、内へ抱へて勤めも氣儘。例へ年季を踏まれても、合點づくで虫が好いた。指まで切つたはこのおすわだ。
小春　道理で外ならず情をかけて、遣はしやんすと思うたに、そんなら疾から……エヽ、お前はなア。
五左　ヤア〳〵、小胸の悪い。うぬ、憎い女め。下に居らう。下に居らう。
三右　コレ〳〵小春、爰はうつかり燒餅をやき奉る所ではないぞ。下に居た〳〵。
ト小春を下に置く。此うち、忠兵衞、思ひ入れあつて、我れを忘れて
忠兵　さては大磯にて密夫したのは、これなる男であつたか。
すわ　エヽ、なんでわたしが其やうな。
忠兵　なにを。

ト立ち上がるを
八右　コリヤ〳〵御浪人、そりや何を申さるゝ。扣へ召されい。
五左　ヤイ浪人、うぬ、よう小春と……どう致すか覺えて居らう……八右衞門どの、何か分明ならぬおてまへの詮議。この上は身共が、拔差しならぬ詮議して見せ申さう。コリヤ勘六、あの兩人をこれへ呼び出せ。
勘六　畏まりました……二人ながら御用だ。出さつしやい。
ト流行り唄の合ひ方になり、下座より、虎、喜三郎、兩人出て來る。
喜三　申し上げまする……この金子をお檢め下されませう
ト忠兵衞より取りたる五十兩を出す。五左衞門、檢め見て
五左　こりやコレ、一兩々々三ツ鱗の極印金。コレ、八右衞門どの、よく見さつしやい。して、この金子は、何者の手より出た金子だ。
喜三　それなる浪人忠兵衞どのより、受取りました金子でござりまする。
虎　ヘイ〳〵、申し上げまする。これなる男は北條家の浪人、龜谷忠兵衞。女は奥小姓梅川。お屋敷を逐電の砌り、

御用金貳百兩盗み取り、私し大磯高麗寺の門番を致し居りまする時、夫婦ながら匿まひくれるやうに、達て歎きまするゆゑ、左樣な者とは存じませず、長々夫婦の者をはごくみましたる、大恩をも辨まへず、おのれが悪事を押隠さうと、正直正道な私しを、何か胡散なやうに申し觸らしまするゆゑ、此やうに日蔭者になつたも、みんな忠兵衛めが仕業。これが誠に飼ひ犬に手を喰はれたとやら。口惜しくつて〳〵なりませぬ……コレ、忠兵衛どん、貴樣の身の上には、まだどのやうな舊悪があらうも知れないが、それはおれが構つた事でもないが、二百兩の極印金を盗んだは、私しでござりますると、こなたも侍ひらしく、すつぱりと白狀してしまはつしやい。こなたが死太いばつかりで、これ程も曇りのないおれが體に、ひびが入つて居らア。コレ、ちつとは恩ひらと云ふ事を知るがよい。夫婦の者が路頭に迷ふを、身に引受けて世話をした、云はゞ親分同然なおれに難儀をかけると云ふは……恐れながら、大抵太い奴ではござりませぬ。

五左　もうよいワ〳〵。ソレ、繩ぶて。

八右　アイヤ、そりや何者に。

五左　これはどうしたものでござる。なんぼ贔屓したいと云うて、コレ、よく見さつしやい。この者が持參なしたるこの金子、一兩々々三ツ鱗の極印。まつた開かるゝ通り、明白なるこの者が訴人。拔差しならぬ金子の盗賊、龜谷忠兵衛に繩ぶたうと申すのを

八右　留めましたるは、その金子の盗賊は、外にござる。

五左　ヤ、なんと云はつしやる。

八右　これなる浪人の忠兵衛、金子の盗賊でないと申す慥な證據はこの紙入れ。イヤナニ御浪人、最前の詞に、箱根の温泉にて、一旦金子諸とも、盗人に奪はれたと申されたな。

忠兵　左樣でござりまする。金子ばかりやう〳〵取返し、程經て改め見ますれば、殘らず三ツ鱗の極印金。

八右　それにて思ひ合すれば、浪人の金子を盗み、掏替へたる者が、三間堂にて横死の非人。彼れぞ正しく二百兩の金子を、盗みし者の同類。して見れば、盗人は外にござらう。

虎　お侍ひ樣、その盗人は外にあると仰しやりまするが、あなたも御存じの通り、私しが目貫を賣りました代も寄越さず、云はゞ騙り同然なこの忠兵衛。ちよつとした所が、あの位なもの。なりや、随分盗人をしかねる奴では

ござりませぬ。
八右　成る程、其方が其やうに、この仁を盗賊に致したくば、それにも致せ……コリヤ、少と其方に聞きたい事がある。外でもない。われが左の小指は、如何いたしたのぢや。
虎　エヽ……これは、なんでござります。
ト支へる。八右衛門、懐中より前幕に拾ひし手紙を出し
八右　コリヤ……大磯の虎へ横田善平次。この手紙、覚えがあらうが。
虎　ヤ、どうしてそれを。
八右　文言一々讀み上げるその時は、盗賊は慥かにそれと知れてあるぞ。コリヤヤイ、人もあらうに、この八右衛門が前にて、おのれが強悪を人にかづけ、身を遁がれんとする重罪人。コリヤ、よう承れ。先年お国元にて、某未だ足軽奉公を勤めし砌り、外構へを夜廻りの折柄、盗賊と渡り合ひ、突き入る切尖、胸元へ摺り込んで、心覚えの手應へは、正しく左の指にあつて、残念ながら取逃がせしが、遁がれがたなき天の網。巡り巡つて、その夜の相手は、某と知らず、計らず最前より詞を巧みにおのれが悪事を人に負はする五音の狂ひ。拔差しならぬこの書状、サア、その夜の盗賊は我れなりと、速かに白状いたせ。
虎　これは思ひがけない。そんならどうしても。
八右　默れ。コリヤ、三間堂の人殺しも、其方であらうが。
虎　モシ／＼、そりや何ゆゑ。
八右　左の指は如何いたした。
虎　サ、これは。
八右　金子の盗賊、白状いたすか。
虎　サ、それは。
八右　三間堂の人殺しか。
虎　これは無體な。
八右　左の小指の云ひ譯は。
虎　サア、それは。
両人　サア／＼／＼。
八右　どうぢや。
ト思ひ入れ。
虎　エヽ小面倒な。そんなら、わしがその泥坊にでも人殺しにでもなりやせう。勝手な名をくツつけるがよい。エエ、大きなべら坊ぢやアねえか。

八右　家主、縄打て。
三右　畏まりました。
ト其所にある縄を取り
サア、仕方がない。縄だ。
虎　ハイ〳〵。どうなりと、佛の遺言通りになさいやし。
ト縛られる。
喜三　申し上げまする。先程差上げましたる金子は、これなる浪人の妹、お末と申す女の身の代金。どうぞ通用なりまする金子と、お取替へなされて下さりまするやう、ハイ〳〵、お願ひ申し上げまする。
八右　喜三郎とやら、女は誘拐し者ぢやと申す事ぢやが。
喜三　エヽ、それをどうして。
八右　コリヤヤイ、左様の事を糺しもせず抱へしは、其方が無念。コリヤ、勘六諸ともお咎めがあらう。後日のお指圖を待て。
勘喜　ヘイ〳〵。
ト思ひ入れ。
五左　すりや、どうあつても盗賊は。
八右　この者に相違ござるまい。
五左　でも彼れが身の上も、まだ分明にござらぬ……コリヤ、後日の詮議まで、その者どもは家主へ、しかと預けたぞ。
三右　慥かに預かりましてござりまする。
忠兵　重々厚き
八右　イヤ、淺田氏、最早御歸宅なされませぬか。
五左　勝手に致さう。
トこの時、下座より金之助出て
金之　おすわさんも小春さんも、ちよつと。
兩人　モシ。
ト小春は治兵衛、おすわは忠兵衛へ寄らうとするを
金之　お迎ひがかゝりました。
治忠　うぬ。
ト寄らうとするを
八右　立ちませい。
治忠　覺えて居ろよ。
トこなし。よろしく木の頭。
虎　態を見ろ。
ト八右衛門、思ひ入れ。この見得にてよろしく
拍子幕

大切

洲崎土手の場

淨瑠璃「飛脚文綱船」　富本連中

役名　龜谷忠兵衞。丹波八右衛門。横田義平次。道具屋源六。六條家來、兼助。越屋治兵衞。同抱へおすわ。紀伊國屋小菊。粉屋孫右衛門。二の口村孫右衛門。甚蔵、大磯小僧の虎。

本舞臺、三間の間、向う一面の淺黄幕。玉椿の垣、上手、柳の木戸にて見切り、眞中に置き番屋。戸の明立て。火の用心の行燈を吊しあり、すべて、深川土橋向うの心よろしく、時の鐘、割り竹の音にて幕明く。

ト向うより源六、前幕の形にて、ぶら提灯を提げ出て來り

源六　なんだ。もう五ツか。素敵に短くなつたな。あの勘太郎めは、どこへ行きやアがつたな。

ト云ひながら本舞臺へ來る。ト下座より、義平次、羽織、ぱつちを穿きし侍ひにて出て來り、本舞臺にて行き逢ひ

義平　貴樣は道具屋の源六ぢやアねえか。

源六　お前は義平次さま、いゝ所でお目にかゝりました。

義平　身共も貴公に逢ひたう存じたところだが、今時分この所へ、何しに來たのだ。

源六　わしが爰へ來ましたのは、お前も御存じの鷄の目貫、一つは大磯の虎が持つて、一つはこの源六が持つて居たれど、五十兩に傳海坊に賣つた金で、藝者のお末が身請けをしようと思ふうち、あの船頭の勘太郎に、引ツ攫はれて忌々しさ。いろ〳〵と足をつけたところ、あのお末めが、お前のお屋敷の浪人者、忠兵衞が妹にて、貰ひ引きも小面倒だから、手短かにふんだくる工風をして居たが、代官沙汰のうちは手出しはならず、あんまり忌忌しいから、せめてお末が色の勘太郎、此奴を探してぶん毆らうと思つてサ。

義平　成る程、請け出さうと思つた女が、男と通がれちやア、腹の立つのも尤も。女と金と事は替れど、おれも丁度七年後に、伊豆の屋敷にて、大磯の虎を頼み、二百兩盗ませたはいゝが、その金をおれに見せもせず、直ぐに引ツ攫つて逃げたゆゑ、虎に逢つてこの恨みを、云はう

云はうと思へども、因果と巡り逢はず、貴様の女を攫はれたより、おれが方が餘ッぽどうまくねえぜ。

ト この話しのうち、番屋を明け、兼助、一本差しにて窺つて居る。

源六　モシ、その二百兩と云ふは、あの極印金の事かえ。

義平　さうサ。

源六　なんぼお前が取返しても、使はれにやア瓦も同然でござります。

義平　例へ遣はれねえでも、おれが盗ませた金を手にも取らずに、人に取られると云ふは、あんまり忌々しいではないか。

源六　アヽ、そんなら極印金の盗賊は、忠兵衛だと云ふ噂だが、誠はお前が盗ませたのか。

義平　さうよ。

ト この時、兼助、前へ出て、

兼助　さてこそ、極印金の盗賊。

源義　ヤア。

ト 驚ろく。

兼助　動きやアがるな。

ト 義平次の髻を捉へる。

義平　こりやア、毛二才め、味を吐かすが

源六　さては今の話しを殘らず聞いたな。

兼助　オヽ、しかも二つの耳へ聞き込んだ。斯う云ふ手蔓を聞き走る、うぬらがすつかけが見えたゆゑ、夜番人が時廻りの、其うち入つた番所で、聞くとも知らず、うかうかと、身の上話しに口走つた、悪事の根元、お侍ひ、キリ〳〵腕を廻さつしやい。

義平　ヤア、要らざる小雀のその囀り。

源六　うぬ、素丁稚め。

ト 源六、兼助へ打つてかゝる。ちよつと立廻りになり、源六、前幕に大磯の虎の手より貰ひし、おすわが紋所つきの簪を出す。兼助、手早く取上げ

兼助　ヤヽ、こりやコレ、忠兵衛どのゝ難儀となつたこの簪。源六、おのれが盗んだな。

源六　それを。

ト 手を出すを

兼助　どつこい。

ト 留めて、簪を懐へ入れる。

侍ひ町人引ッくるめ、この兼助が忠義の手土産。二人ともに覺悟をなせ。

ト尻を凛と搦げ、見得。

義平 エヽ、面倒な。疊んでしまへ。

源六 合點だ。

傘助 何を小積な。

ト佃騒ぎになり、三人、華々しきタテあつて、見得になる。時の鐘にて、この道具廻る。

本舞臺、向う一面の黒幕。爰に茶店の床几二三脚重れ、葭簀を巻き、立てかけて、すべて洲崎土手下の模様。夜の景色よろしく、時の鐘にて道具とまる。

ト向うより、大磯の虎、前幕の形にて、縛られた儘走り出て來り、あちこちとまじつき、揚げ幕を見込み、思ひ入れあつて葭簀の蔭へ隠るゝ。ト向うより黒四天の捕り手四人、十手提灯を持ち走り出て來り

捕一 重罪人の大磯の虎、我れ〱が隙を窺ひ

捕二 逃げ失せたは慥かにこの道。ハテ、足の早い奴でござる。

捕三 もしや川向うの細道を、直ぐに土橋か木場の方。

捕四 小橋を越して左右へ別れ、御合點か。

三人 心得申した。ござれ。

ト下座へ入る。大磯の虎、のそり〱と窺ひ出て

虎 大べら坊め、さう云ふうつそりだから、逃げられやアがつた。併し、この形ぢやア始末がいかねえ。どうぞして縄抜けをしてえものだが。

ト思ひ入れある。バタ〱になり、下座より義平次、抜き身にて走り出て來り、大磯の虎に突き當る、はずみに、大磯の虎の縄切れる。チョコンと月出る。

義平 エヽ、何をしやアがる。

虎 御免なされませ。急ぎの者でござります……ヤア、こりやア思はず縄が切れて。忝ない。

トこの聲にて、義平次、大磯の虎を見て

義平 ヤヽ、わりやア大磯の虎。

虎 横田義平次さまか……こいつは堪らぬ。

ト駈け出すを捕へ

義平 おのれ、逃ぐるとて逃がさうか。ヤイ、人外めが。數へて見れば七年以前、身共が入用の事につき、其方を頼んで盗ませた、殿の御用金二百兩。尤も極印金にて通用はならねども、身共へも渡さず、其まゝに持つて立退いた不敵な奴。爰で逢つたのは天の責め。サア、どこへ隠し置いた。但し、使ひ捨てたか。白状なせ。

大磯　これサ〳〵、義平次さん、さう筋を出して仰しやらずとも、ようござります。盗んだ金は七年後、過ぎ去つた事、役には立ちませぬ。その極印金ゆゑこの虎も、世間の狭いお尋ね者。お前に盗めと頼まれざア、かゝる難儀はあるめえと、今ぢやア、わたしが方から恨んで居るに、さう云はれちやア逆捻だ。どうで長く持たねえ首。八丁畷の道連れに、お前も一緒に抱き込まうか。

義平　ア、コリヤ〳〵、只今申したのは、その時の腹立ち、今では、さら〳〵恨みもせぬ。その金ゆゑに難儀するとあれば、頼んだ身共も却つて気の毒。併し、今さら斯うとの相談も、内證一つの手前と身共。斯様いたさう。委細のことは、アレあの小松の袂を左へ曲り、少々行けば身共が近づきの家。そこにて

ト揚げ幕の方を指さし、出鱈目を云ふ。大磯の虎、同じく向うを見て居る隙を窺ひ、義平次、切つてかゝる。大磯の虎、身を交し、その手を捉へて

虎　こりやア、なんとさつしやるのだ。

義平　おのれ、生けて置いては夜が寝られぬ。それぢやに依つて。

ト　おごつくな

虎　オッとどつこい……七年この方二百両、利息も要らずに使つたゆゑ、その恩返しと思ふから、吟味に逢つた度度も、こなたの名前は抜いて置いたぜ。盗人にも義理があれど、其方の心がさうなりやア、なに義理立ても要らねえ事。所も丁度洲崎の濱、殺した後が水葬禮。キリ〳〵覚悟をしやアがれ。

義平　何を小癪な。

トこれより双盤の鳴り物にて立廻り。トヾ、義平次を切り倒し、其まゝ死骸を

虎　よいやサ。

ト前の流れへ打ち込み、刀を持つて立ち上がる。向うバタ〳〵の音するゆゑ、右の刀を立てかけし葭簀を取つて、くる〳〵と巻き、其まゝそこへ抛り出し、床几の蔭へ又小隠れする。と向うより、小春、走り出て来り、こなしあつて

小春　ヤレ〳〵、しんどやなう。モシ、治兵衛さん、お腹が立つたでござんせう。何時ぞや箱根でも話した通り、あの忠兵衛さんは、わたしが父さんのお主筋。忠兵衛さんの御家来と云うては、みんな死絶え、生き残つて居るは小春一人。あの場で主従の名乗りをすれば、忠兵衛さ

まへ紛失の、金の疑ひがかゝるゆゑ、云ひたい事を押隠し、色ぢやと云うたを誠と思ひ、お腹の立つは無理ならず。それを知りつゝも云ひ譯を、云ふに云はれぬ詮議の場所。假にもお前へ腹立たせ、堪忍して下さんせ。わたしはこれから、忠兵衛さんにお目にかゝり、この身の素性打明けて、お話し申したその上では、お前への云ひ譯は、死んでの上で致しまする。何にしても忠兵衛さまに、早うお目にかゝりたいわいなア。

トぢつとこなし。この時、大礒の虎、窺ひ出て、後より抱きつく。小春驚ろき

ヤア、誰れぢやぞいなア。

ト振り切らうとする。

虎　誰れでもない。虎だ。

小春　エヽ。

虎　詮議の場所でおれ一人、突出し者のその揚句、繩にかけられ送られる。道で駈け出し繩抜けの、黥の入つたこの體。行きがけの駄賃に丁度いゝ、てめえを慰みその後は、宿場へ賣つて高ぶけり。その路銀にするが小春坊、治兵衛に心中を立てるより、いつそおれに死ぬまで靡いて見せろえ。どうするのだ。

小春　エヽ、穢らはしい。そこ放さんせ。

ト振り切つて逃げ出すを、追つかける。小春、葭簀を取つてこれを楯に立廻り。大礒の虎、小春を抱へようとするはずみ、葭簀を抱へた儘こける。思はず葭簀の中の刀にて、自分と貫ぬかれる。「アヽ」と苦しみながら

虎　ヤア、小春は人殺し〱。

ト喚く。

小春　ア、コレ、どうしてわたしが。

虎　女め、おれを切りやアがつたな。

ト小春へ武者振りつく、立廻りのうち葭簀を引ッ張り合ふ。白刃落ちる。右の刀を取つて立廻り、小春、危ふくなる立廻り。下座より粉屋孫右衛門、羽織袴、大小、頭巾を着て出て來り、小春を圍ふ。ウヽと來る、大礒の虎を、その刀にて見事に切り倒す。小春驚ろき居る。孫右衛門、死骸を其まゝ片脇へ寄せる。

粉孫　女中、騒ぐまい。

ト小春、孫右衛門の大小を見て

小春　ヤア、あなたはお役人様。

粉孫　イヽヤ、役人ならぬ今宵の客、其方を迎ひに參つた。

サア、船へ来やれ。

小春 でも、この場の。

ト死骸を見て思ひ入れ。

粉孫 ハテ。

ト小春を下へ引離し、手を取る。ちよんと木の頭、孫右衛門、につたり思ひ入れあつて

来やれと云ふに。

ト思ひ入れ。小春、合点のゆかぬ思ひ入れ。よろしく

拍子幕

本舞台、三間の間、向う一面の打抜き、洲崎中の道具。白魚船の飾りよろしく書割り。真中渡手摺り少し高く、この上に屋根船。これに櫻草の團子提灯。舞台前一面の浪板。上の方の屋根船に、丼正と書きし提灯。下の方の屋根船に大和屋と印せし提灯。両方とも簾下ろしあり。尤も東西花道附け際、陸地の心よろしく飾りつけ、時の鐘にて幕明く。

ト直ぐに知らせつき、真中の屋根船、簾上げる。中に富本連中、羽織袴にて居並び、前弾きになる。

〽寒の夜を、夢ばかりとや世の中に、いとも短かき身の上を、悟らで恨む鐘の音は、八ツ時ならで侍ひ冥利、野暮を余所目に真実な、話しに浮かぬ船の内。

ト時の鐘になり、上手の船の簾上がる。内に孫右衛門、頭巾袴、侍ひの形にて煙草のみ、下の方に、小春、以前の形にて、もち〳〵思ひ入れあつて

小春 モシ、お侍ひ様。異な事をお尋ね申しますが、お主へ忠義と、夫へ操とは、マア、どちらが重うござりませうなア。

粉孫 ハテ、変つた事の尋ねやう。女は両夫に見えず、侍ひは二君に仕へずと申せば、両方ともに重いものなれども、夫婦は二世、主従は三世と云へば、先づ差当り主人へ忠義が重い。

小春 サア、そのお主の為ばかりに、わたしは二世と云ひ交せし、夫に疑ひを受けまして、殺されまするがお侍ひ様、お情でどうぞ、お主へ忠義を果してしまうて、私しが殺されませぬやう、御思案なされて下さりませ。

粉孫 そりやハヤ、品に依つては身共が料簡で、助けてやるまいものでもないが、側へ夫に殺されいでも、其方は現在人殺し。どうで浮世は日陰の其方。

小春　サア、それも怪我ゆゑ。

粉孫　して、其方が主人と云ひ、夫の名前は。

小春　サア、それはな。

〽云ふも今さら恥かしい、女子の癖に今までは、男嫌ひの達引ぢやのと、世を我まゝに過ぎし頃、男も同じ一筋に、ほんに男の懐には、鬼が棲むやら、蛇が棲むやら、色氣知らずに嫌味がなうて、ふとした事のはずみやら、わたしが方からこの戀を、仕掛け文庫のそこはかと、云ひ寄る術もしらしらし、春の夜風が中立ちて、つい一つ寢の新枕、恥かしい事嬉しい事、可愛いと云ふ事初めて知つて、それから後はと顔隠し、姿似氣なき取形は、生娘とこそ見えにけり。

トこれにて、小春、顔を隠し、うづくまる。孫右衛門煙草をのみ、よろしく思ひ入れ。下の方の婦の簾上がる。内に二の口村孫右衛門、白髪の百姓にて、傾城の形のおすわと並び居る。

二孫　近頃愚痴な事ながら、養子にやつた忠兵衛、不所存ゆゑに養子親に、難儀をかけるもこなたゆゑと、サア、今さら恨むではなけれども、世の譬へにも云ふ通り。

〽盗みする子は憎からで、縄取る人が恨めしいと、老の涙に梅川は、なんといらへをせん方も、なみなみならぬ身の科は、みんなわしゆゑ、梅川ゆゑと、お腹の立つは無理ならねど、そもお屋敷に居た時も、宿せし嬰兒に何時となう、わたしが姿が目に立てば、五日三日と日を送り、そこを立退きともぐに、苦勞はしても好いた同士、ならぬ世帶が樂しみに、暮らす月日も七年の、辛苦のうちに男の心、大磯とやら云ふ所、傾城づらになれ馴染み、人の世話した金までも、遣ひ果して一分の、立たぬ女の悋氣さへ、云はで捨てられ斯うした憂き身、因果づくぢやと諦めても、いとゞ切なさ遣る瀬なさ、不便と思うて下さんせと、延紙顔に押當てゝ、忍び嘆くぞ道理なる。

粉孫　そればかりでは樣子が知れぬ。

二孫　とつくり胸を打明けて

すわ　お話し申せば長い事。

小春　どうぞ聞かして下さりませ。

粉孫　サア、心措きなう。

兩人　樣子を云やれせ。

〽夜風を凌ぐ青簾、折しもしめる汐風に。
ト雨車の音。これにて兩方の簾下りる。
〽降りかゝりたる落人の、爲には沖の白魚船、篝は消えて暗き夜に、恨みの寢刄一腰を、魂ひぬけてうか〳〵と、迷ひし事の腹立ちに、憎くし辛し女敵と、戀の敵と慕ひ來る、その提灯は桝正か、大和は姿と兩方の、船の水際に佇みて。
トこの淨瑠璃のうち、東の花道より治兵衞、頰かむりにて俵をかむり、本花道より、忠兵衞、大小、蛇の目の傘にて出て來り
治兵　先刻洲崎の土手で聞いた、侍ひは客で船の内、桝正の提灯を、目當に來るこの屋根船。思へば憎し、あの小春。
忠兵　親にも身にも替へたる梅川。慥か密夫と諸ともに、忍び居るのは大和屋のあの提灯。
治兵　女の肌を觸れる時、忽ちこの身に災難が、あると教へし詞を守り、人並な男となつても、女を知らぬこの治兵衞を、落しにうせた畜生め。
忠兵　おのれら二人、今にぞ思ひ
兩人　知らせてくれう。

〽互ひに窺ふ川岸の、船の中にはひそ〳〵と、客は頭巾におとがひの、動くばかりに囁きす。
ト船の内にて
小春　そんならお前は眞實の。
すわ　縁に繋がるこの梅川。
小春　小春も矢ッ張り深い仲。
すわ　ほんに思へば
兩人　恥かしいわいなア。
治兵　さてこそ、おのれら。
〽腹立ち紛れおのれやれ、心も急きに關の孫六、影を目當に簾越し、突ッ込む刀内よりも、捉ゆる手先屋根船の、柱にしつかと括りつけ、身は川添ひの草の露、消ゆる間惜しき風情なり。
ト治兵衞、忠兵衞、刀を拔き、船へ飛び乘り、簾越しに白刄を突ッ込む。下の船の内より手を出し、忠兵衞の胸倉を捉へ、船の内へ引摺り込む。上手の船より手を出し、治兵衞の手を刀を持ちたるまゝ屋根船の柱へ縛りつける。
治兵　こりや、心急くゆゑ仕損じたか。
ト手をあせる思ひ入れ、上手より源六出て來り

源六　うぬは治兵衞だな。見れば縛られて居るな。われには大分意趣があるが、おれより强い野郎ゆゑ、今までは負けて居たが、片手縛られて居れば此方の物だ。日頃の意趣を。

ト治兵衞を捕へる。

治兵　何をしやアがる。

ト治兵衞、左の手にて、源六を突き廻し、川の中へ抛り込む。この時、上下の船の簾一時に上がる。下の方の船には、二の口村孫右衞門、忠兵衞の胸倉を捉へ居る。上の船には粉屋孫右衞門、町人の形になり居る。これを治兵衞見て

忠兵　ヤ、相手は侍ひと思ひの外、お前は兄貴。

絕えて久しき親仁樣。

治兵　そこに居るは小春だな。

ト立ち上がらうとして腕の痛む思ひ入れ。

忠兵　憎くき女房。

トこれも立たうとして思ひ入れ。

兩人　うぬ、マア、よくも。

ト無念のこなし。

粉孫　サア、そのたわけから事が發して

二孫　斯う云ふ身にも

兩孫　なり居るわやい。

トきつと云ふ。合ひ方になり、粉屋孫右衞門立つて、治兵衞の腕をほどき、船の内へ入れる。

治兵　コレ、お前は譯を知るまいが、この畜生めにうまうまと、わしや騙され、男が立ちませぬ。

粉孫　男の立たぬその譯も、小春に逢つてすつぱり聞いた。お主は親の遺言を、背いて女に肌觸れた、その日に人を殺め、又その上にこの小春を、殺さうとまで思ひ詰めたは、これ災難のその印、怖いものだと思ふがよい。

治兵　それも此奴が、わしが身の敵同然。それゆゑに。

粉孫　イヽヤ、肌を觸れた女と云ふは、小春ばかりぢやあるめえ。わりやア抱へたおすわとやら、指まで切つて斯う斯うと、女嫌ひもすさまじい。てめえは云はずと知つても居やう。ほんの親御は北條の御家中、六條京之進さまの御家來なれど、お主が人相、女の肌の觸れる時は、忽ち災難があると云ふゆゑ、もし劍難でもあつてはと、それゆゑ武士の家は繼がれず、そこでおれが弟に貰ひ紙商人にしようと思へば、傳法附合ひ喧嘩好き。ア、これも女嫌ひに育つゆゑ、色氣がないから尤もと、お主

お僊に別になり、おれは今では傳馬町の紙問屋、粉屋の孫右衛門と人にも知られ、段々家も繁昌するにつけ、勘當したと云ふではあるまいし、おれが家へも其方から、出入りせぬやうになり、貰つたお主が實親へ、どうしておれが立つものか。如何に若いと云ひながら、武士の胤に生れた者が、悪所商賣なんの事。聞けば古主の娘御も、色事ゆゑに屋敷を立退き、御流浪なさるゝそれさへも、知らぬ顔では親御へ濟むまい。ほんにお主は何時の間にそんな馬鹿にやアなつてくれたぞいやい。

へ眞實見えし意見の詞、治兵衛も返答差俯向き、道理涙にこなたの船、孫右衛門は日をしばたゝき。

二孫　コリヤヤイ、大恩受けし養子親、今日か明日かと命の瀬戸、みんなおのれが爲す業ぢや。先刻にから船の内で、梅川どのに様子を聞けば、子までである仲を、おのれが悪性から、去り状書いて附きつけて、ようも／＼此やうな、傾城にまで賣り居つたな。義理知らずと云はうか、鬼と云はうか。コリヤ、おのれも武士ぢやないかいやい。浪人の身の活計に迫り、金が要るなら要るやうに、便宜でもしおつたなら、憎いと思へど親子ぢやもの、僅かの田地を賣つてなと、嫁御に勤めはさせぬもの。みんなおのれが心から。

へ血縁近き親にまで、隠れるやうな身を持ちなし。明るい所へ出られぬやうに、この親は生みつけぬぞ。……ア、云うて返らぬ事ながら、養子に行たその先で、立派な侍ひになつて、槍でも突かせて歩いたら、村の者が口々に、孫右衛門はたわけ者、あんな伜を人に遣つた阿房な奴と笑はれたら、どのやうに嬉しからう。

粉孫　人を殺して今にも又、縄目の恥になつた時、あの實の親御は目が高い、よう見限つて養子に遣つたと、褒められた時の親御の心は、嬉しからうか。

二孫　養子親への義理があれば、顔さへ見れば現在の、親が縛め出さねばならぬ。

粉孫　それに女に騙されたと、刃物三昧たわけ者。相手の男が侍ひと聞いたゆゑ、ひよつと先を切る氣で、お主が身に怪我でもあつては堪らぬと、小春を買ひ揚げ、この通り、着附けもせぬ袴大小。

二孫　よい年かゝげてお山買ひも、表向きでは逢はれぬ親子。

粉孫　歌舞伎役者の眞似をして、意見を云ふもどうぞして

二孫　命を助けてやりたいと、拝み願ふは如來様。

粉孫 佛のやうな此おれが、差した刀の捨て所。
二孫 容と見せたるこの親仁、嫁御の手前面目ない。
粉孫 ほんに思へば不孝者。
二孫 親の心を苦しめる
粉孫 憎い奴とは思へども
二孫 切るに切られぬ
兩孫 親子の縁。
ト可愛さ餘る意見の涙、梅川、小春、ともぐ\に、顔も得上げず伏し沈む、理りせめて哀れなり。
トこれにて眞中の太夫、御簾にてチョンと隱す、治兵衞、思ひ入れあつて
治兵 段々の御意見、親の遺言破りました、その罪は忽ち報い、人を殺めしこの治兵衞。所詮助かる所存はござりませぬが、戀と云ふ物初めて知り、隱し男と聞いたゆゑ、一圖の腹立ち。小春も共に殺してその上でと、覺悟極はめしこの始末。また私しが指を切つて遣りましたと、云つた女は卽ち古主の娘御梅川さま。
小春 そんならお前の内に居た、おすわさんと云つたのが梅川さんでござんしたか。わたしもお前に疑ひ請け、隱し男と云つたのは、わたしが親のお主筋、北條家の御家中にて、龜谷忠兵衞さまと云ふお人。それをその場で名乘る時は、お金の盜賊・忠兵衞さまのお身の上、隱せばお前に疑ひ請け、退引きならぬ場所ゆゑに、後で云ひ譯する心。さぞ腹が立つたでござんせう。お前に遺言背かせしも、みんなわたしが徒らから。どうぞ免して下さんせいなア。
治兵 それで樣子がサラリと知れた。すりや、梅川さまの不義の相手と云つたのは、あの浪人の忠兵衞さまであつたよな。
忠兵 養父忠太夫が命の蔓、鷄の目貫詮議せんと、種々樣々の憂き苦勞。それゆゑ現在娘まで。
すわ エヽ、そんなら娘は、お前が手にかけ。
忠兵 殺したこの身に又ぞろや、梅川が簪より、疑ひ請けし盜賊の汚名。又その上に紙入れの名前の證據で人殺し、重なる災難身の因果。元は女房梅川ゆゑ、恨み重なる女敵と、思ひ詰めたるゆゑにこそ、打ち果さんと思ひしに、却つて恨みのその樣子。勤めに賣られしその始末。去り狀なぞとは心得ぬ。
すわ お前の手蹟のこの去り狀。憎いながらも筐ぢやと、今まで持つて居たわいなア。

ト去り狀を出して見せる。
忠兵　如何にも、こりやコレ、身共が手蹟。オヽ、これにて思ひ當りしは、二人が仲を引分けようと、おのれが慾にかゝつたる、大磯の虎が惡企みであつたよな。
すわ　さうとは知らず、わたしはお前を一圖に恨み。
忠兵　身共は其方を不義者と、思ひし事も皆間違ひ。さるにても其方へ、指まで切つて渡せし男
すわ　あれこそわたしが父さんの、昔の家來……さう云ふお前もあの時に、色の戀のと云ふ女は。
忠兵　あれこそ養父の家來の娘。
粉孫　そんならみんな主從が、名乘らぬ上の間違ひから。
二孫　眞心却つて恨みとなるも、明かして見れば貞節忠義。
治兵　なれども人を殺めしこの治兵衞。親の遺言背きし大罪、潔よく名乘つて出て
忠兵　所詮目貫は手に入らず、武運に盡きたるこの忠兵衞養父の命に代るの覺悟。
忠治　これより直ぐに。
ト兩人、身拵らへして船の舳先へ出る。
小す　それは短氣な。マア、待つて。
ト留めながら同じく附いて出る。これにて上下四人顏見合せ
忠兵　ヤア、其方は小春か。
小春　忠兵衞さまか。
治兵　梅川さまも御一緒に。
すわ　治兵衞もそこに居やつたかいなう。
粉孫　ヤレ、待て治兵衞。其方は主持ち、人殺しはこの孫右衞門が引請けた。
小春　イヤ、女子の身ながらも、人を殺めしこの小春。わたしが名乘つて。
ト爭ふ。治兵衞、留めて
治兵　イヤ、人殺しはこの治兵衞。
二孫　老い年寄つた孫右衞門、この世の年の明き所。初孫の顏さへも、見ずに殺した因果な親仁。みんなの科を身に引請け
すわ　親御の難儀も、忠兵衞さんの流浪なさんすも、皆わたしゆゑ、可愛ゆい娘を先立てゝ……いつそわたしが。
忠兵　片しの目貫は手に入つても、兩方揃はぬ上からは、是非とも身共が。
治兵　その目貫こそ計らずも、傳海坊が所持せしを、廻り廻つて、コレ、爰に。

ト懐中より出す。

忠兵　すりや、片しの目貫は。

トこれにて、孫右衛門、棹をさし、下手の船を上の船へ寄せる。

治兵　両方目貫の揃ふ上は、あなたは死ぬには及びませぬ。この品持つてお二人は、お國へ御歸參。

忠兵　目貫二種揃ふ上は、即ち養父が命の蔓。エヽ、忝ない。

トばた〳〵になり、下座より、八右衛門、兼助、出て來り

八右　二人ともに死ぬるに及ばぬ。大磯小僧が舊惡にて、搦め捕りしに又ぞろや、繩拔けしたる科人を、即ち小春が殺生は、お上へ奉公、一つの手柄。まつた治兵衛が殺害せし、傳海坊と申せしも、虎が同類。お金の盜賊。忠兵衛どのゝ五十兩、摺桙へ取りし惡人ゆゑ、殺したりともお構ひなし。

兼助　又その上に道具屋源六、木場の川岸へ流れ附きしを、引ツ捉へて水を吐かせ、白狀させれば虎が惡逆。梅川さまの簪を、盜みし事まで一々白狀。

八右　まつた極印の二百兩は、曾我の家より百兩あがり、五十兩はこれなる兼助。まつたお末を抱へたる、喜三郎より五十兩。都合合せて二百兩。元へ納むる上からは、今の汚名はさらりと晴れ、目貫さへ揃ひなば、忠太夫が身の安堵。

粉孫　すりや、人殺しも何も彼も、惡人ゆゑにお構ひないとな。

二孫　目貫二種揃ひなば、二人は本地へ歸參でございまするか。

ト兩方より、八右衛門へ渡す。

八右　この目貫さへ差上げなば、めでたう本地へ歸參のお二人、梅川どのゝ身賣りの金、虎が摺桙へ持つたるを、某取上げ吉原の、舞鶴屋に渡せし上は、梅川どのは忠兵衛どのと、即ち夫婦。まつた小春は女ながらも、古主へ忠義を感ずる餘り、治兵衛と添ひ遂げ、親の家名受け繼いで、矢張り後までお家の家來。

治兵　すりや、私しまでお取立て。女房喜べ。

小春　エヽ、有り難うござります。

忠兵　めでたう納まる上からは、妹お末は親仁樣。

二孫　おれが引取り船頭の、勘太郎を聟に、この親仁は、大長寺のお弟子となり

粉孫　わしはお出入り粂助どのを、養子に貰ひ家相續。
八右　惡人亡びて積善の、家に餘慶の本領安堵。
粉孫　これ狂言の
治兵　勸善懲惡。
皆々　めでたい〳〵。
治兵　先づ今日はこれぎり。
　　トめでたく　打出し

御慶曾我扇（終り）

解說

渥美清太郎

頽廢期と一口に云はれてはゐるが、何と云つても文化文政時代は、江戸劇壇の最爛熟期である。五瓶と治助は早く世を去つたが、跡には南北を頭として、二世治助あり二世如皐あり久助あり、また大阪から來た篤助ありで、各々手腕を競つた樣は全く華々しい。そしてこれ等の人々は、時代物は先づ二の次として、悉く世話物へ全力を注いだらしい。それは、化政度の看客を刺戟する方法が、世話物により好き便宜を持つたにある事は勿論であらうが、社會劇と云つた方面に、作者も看客も等しく興味を持ち出したのが最も深い原因であらう。また俳優が、世話物に向く人の多かつた事も否めない理由の一つだ。いづれにしても江戸の劇曲界は、化政度に入つて俄然世話狂言が發達し出したものだ。本卷には、それらの中から、面白い、代表的な作ばかりを選んで收錄した。尤も南北だけは、別卷があるから省いて置いた。

河原噂京諺

文化三年正月、市村座の二番目狂言。初世並木五瓶の作で、「並木五瓶世話狂言集」へ收錄した「略三五大切」と一日替りに興行したものである。主人公の半兵衞は寧ろ類型的な役であるが、遊蕩兒ながら殊勝らしい彥三や、その女房や、筒井の母や、小惡黨の坊主小兵衞なぞは、ちよつと面白い性格に書いてある。

黑木屋番頭半兵衞。重三母お高。山伏奇妙院（助高屋高助）黑木屋彥三（澤村源之助）筒井手代金六。松の尾新兵衞（澤村東藏）太鼓持ち勘九郎（嵐新平）牛飼ひ五郎吉（七世市川團十郎）桂佐市（花井才三郎）衞濱右衞門（市川宗三郎）手代惣八（松本武十郎）鴫の長兵衞（市山七藏）表具屋太郎兵衞（市川門三郎）壻田宿宅（嵐冠十郎）筒井重三郎（尾上榮三郎）新兵衞女房おせん。彥三女房おみち（瀨川路之助）井筒屋吉今（瀨川路三郎）黑木屋大隅（尾上松助）半兵衞女房おりく。扇九仲居お富（中山富三郎）坊主小兵衞。小和田屋又助（五世松本幸四郎）

垣衣草手向發心

文化五年五月、市村座興行の二番目狂言で、異本法界坊とも云ふべきである。いや異本とよりも、原作といふ方が當つてゐるかも知れぬ。人も知る法界坊の原作は、安永四年に上演した初世仲藏の大日坊である。これを團藏が法界

坊に改作してから、今にこの方が行はれてゐるが、當時の江戸では、まだ仲藏の脚本が多く行はれてゐたので、二世三津五郎なぞは盛んに大日坊で演つたものだ。本狂言は、初世三津五郎二十七回忌の追善に、三世三津五郎の勤めた藁本であるから、役名は多少變らうとも、大體仲藏の脚本を踏襲したものと思つても間違ひはないと思ふ。法界坊は江戸から始まつて、庇を貸した上方に母屋を取られてしまつた形で、しかも仲藏の原作が殘つてゐない今日、この脚本は相當貴重なものと申してよろしい。この時の作者は勝俵藏、即ち後の南北で、多少は筆が加へられてゐると思ふ。

中田屋太郎兵衛 實ハ 鈴木三郎重家（助高屋四郎五郎）刀屋手代半七 實ハ 冠者太郎義基（澤村源之助）下部隅田平（嵐新平）竹門のお虎婆（市川宗三郎）刀屋石見（桐島儀右衛門）忠基娘野分姫（山下萬作）刀屋娘お花 實ハ 致經息女錦の前（市川團之助）北條五郎時國（七世市川團十郎）夜蕎麥賣り久六 實ハ 井場十藏勝重（屋上榮三郎）中田屋下女お松 實ハ 景清娘人丸。隅田川の渡し守繝裲のおとり（五世岩井半四郎）聖天坊の大日坊（三世阪東三津五郎）本田次郎近經（五世松本幸四郎）

艶色競廓操（はでさくらべさとのみさを）

文化五年三月、中村座上演の二番目狂言。二世瀨川如皐が、五瓶の原作へ手を入れたもので、重なる點は同じであるが、末節の技巧に又原作とは違つた面白味もある。三世歌右衛門が初めて江戸へ下つて、この前にない世話物を巧くやつて、江戸人を驚ろかしたのである。

奥女中幾野。賤の女およし（瀨川仙女）山村屋新兵衛（市川男女藏）越前屋の三婦（尾上雷助）竹垣半次郎（市川傳藏）玉屋新兵衛（三世中村歌右衛門）茨の藤兵衛（嵐龍藏）澤田軍兵衛（嵐音八）醫者安達玄宅（中村東藏）弟新七（二世關三十郎）越前屋小女郎。玉屋嫁おゐん（瀨川路考）佐原多仲（阪東彥三郎）

臺頭霞彩幕（たいかしらかすみのいろまく）

文化九年正月、中村座の二番目狂言。奈河篤助の作で、非常に行はれ、明治の初年まで江戸京阪ともに上演を絕たなかつた三勝半七である。三勝半七を捕へて來たのは、當時馬琴の「三七全傳南柯夢」が評判だつたので、それを眞似たのであらうが、內容は勿論小說から何等の暗示を受けた痕はない。大切の常磐津は、今でも曲が傳存されてゐる。

茜屋半七。厚倉次郎太夫（三世中村歌右衛門）筑波屋

茂右衛門（市川市藏）野花屋女房お縫（藤川友吉）有松源之丞（尾上紋三郎）中間吉平（市川鶴三郎）中間雁助（阪東鶴重郎）番頭長九郎（阪東善次）百姓次郎作（荻野伊三郎）下人彌八（中村七三郎）娘お通（尾上榮三郎）美濃屋小勝（岩井松之助）横井丹藏。女房お今（桐島儀右衛門）茜屋半左衛門（市山七藏）笠松角太郎。今市屋善右衛門（中村東藏）隱居勘齋（大谷門藏）信田與方青柳御前（市川おの江）田宮右內。野花屋勝次郎（二世關三十郎）東金屋茂右衛門（尾上松助）美濃屋三勝。時雨ヶ丘の妙貞尼（五世岩井半四郎）腕の喜三郎。美濃屋半左衛門（助高屋高助）

短夜仇散書

文化十年七月、中村座の二番目は、三日替りの趣向であつた。初日はこの「短夜仇散書」。二日目は次のお妻八郎兵衛、三日目はお千代半兵衛で、いづれも福森久助の作である。中でもこのお園六三が最も評判がよかつた。當時の人氣者松助（後の三世尾上菊五郎）が活躍したからである。いなせな大工姿は非常に歡迎され、六三の役は尾上家の藝とまでなつたのである。もとのお松といふ惡婆は、當時有名だつた遠州屋のお蝶といふ莫連者をモデルにしたのだといふ事である。これと六三を早替りでゆく趣向は、前年當つた累與右衛門（鶴屋南北怪談狂言集參照）を眞似たものである。大切に鯉つかみを添へたのは、夏狂言の吉例と云つてよからう。

船越十右衛門（三世阪東三津五郎）中村少長（中村七三郎）大工平助（阪東大吉）家主茂九郎兵衛（尾上小の藏）大工猪之助（阪東熊平）番頭太郎兵衛（市川の助）梶川長兵衛（市川市藏）髮結ひ源吉（市山七藏）市川露鶴（市川傳藏）若林七郎助（中村東藏）後家お梶（芳澤いろは）大工六三郎。もとおばアお松（尾上松助）賤の女おわた（瀨川多門）福島屋娘お園（二世澤村田之助）福島屋淸兵衛（助高屋高助）

猶、大詰に追善らしい趣向があるのは、前年死んだ四世澤村宗十郎と、四世瀨川路考の事を當込んであるのである。

文月恨鮫鞘

「短夜仇散書」と同じ時に出來た二日目の世話狂言。原作は大阪の「文月恨切子」で、これを福森久助がスツカリ江戶の世界に改めたものである。爾來、江戶でやるお妻八郎兵衛は、この趣向で行く事になつてしまつた。

香具屋彌兵衛（三世阪東三津五郎）柏木助三郎（中村七三郎）梶岡軍藏（澤村金平）丹波屋惣兵衛（阪東大吉）古手屋太平次（阪東熊平）岩田屋勘兵衛（尾上小

の藏）古手屋八郎兵衛（市川市藏）粂本女房お今（山下八尾藏）下女お若（嵐和歌野）矢島勇藏（市川鶴三郎）岩田屋おさい（市川傳藏）利倉屋佐次兵衛（中村東藏）駕籠舁き彌助（尾上松助）丹波屋おつま（二世澤村田之助）

御慶曾我扇

文政七年正月、中村座上演の曾我狂言、その二番目だけを收錄したのである。一番目にも一幕あつたやうであるが、脚本が傳はつてゐない。作者は二世瀨川如皐であるが、筆の堅い如皐にしては少し巧過ぎる。恐らく二枚目の松井幸三が大部分を書いたものであらうか。紙治と梅忠を合せて江戸の世界にしたのも奇抜だが、臺詞に至つては實に奇抜で面白い。全く當時の會話そのまゝのスケッチで、少しも芝居臭くないところが何とも云はれず面白い。無暗矢鱈と洒落のめしてゐる所も、文政頃らしくつて興味がある。小春と治兵衛が、至極平凡な人間を平凡らしく書いてある所も、昔の芝居には珍らしい。筋よりも臺詞を味ふ脚本だ。

靈寫大磯の虎。粉屋孫右衛門（五世松本幸四郎）槌屋抱へおすわ實ハ奥女中梅川（岩井粂三郎）丹波八右衛門（三桝源之助）武藏屋金次郎（市川高麗藏）淺田五左衛門。藪醫道庵（淺尾友藏）女髮結ひおつな（瀨川路考）剃人萬六（阪東善次）親方喜三郎（市川鰕十郎）北條時太郎（松本錦吾）龜谷忠兵衛（二世關三十郎）横田義平次（松本小次郎）家主三右衛門（大谷門藏）船頭勘太郎（尾上蟹十郎）藝者お末（尾上菊次郎）六條家來兼助（尾上松助）箱根の傳海坊。二口村孫右衛門（嵐冠十郎）紀伊國屋小春（五世瀨川菊之丞）槌屋治兵衛（三世尾上菊五郎）道具屋源六（中村傳九郎）

○

例によつて山形の秋葉芳美氏には、役割カタリ押繪等で御高配を願つた。末尾ながらお禮申しあげて置く。

編纂校訂責任
渥美清太郎
鈴木侃

日本戯曲全集・第十八巻

化政度江戸世話狂言集・第貳拾壹回配本

著作權者檢印

昭和四年六月十二日印刷
昭和四年六月十五日發行　（非賣品）

編纂者　渥美清太郎

發行者　和田利彦

印刷者　高見靖雄

製本者　高崎鐵五郎

東京市日本橋區通三丁目八番地

發行所　春陽堂

電話日本橋　五一・六四一
　　　　　　三七八八
振替東京　一六一七

（小石川區諏訪町五十六番地・常磐印刷所）



